EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03008 0857

大正八年七月十二日印刷
大正八年七月十五日發行

早稻田大學出版部
不許複製

編輯兼發行者　早稻田大學出版部

右代表者　種村宗八
東京府豐多摩郡戸塚町大字下戸塚五十八番地

印刷者　渡邊八太郎
東京市牛込區榎町七番地

印刷所　日清印刷株式會社

發行所
東京市牛込區早稻田
振替東京一一二三番
早稻田大學出版部

けり、賈生が屈原を弔する文を見るに及び、又屈原が彼れの如き才能を以て諸侯に游歷せば何れの國も容れぬもの無かるべきに、自ら那の如き最期をなしゝ

ことを不思議に思ひ、服鳥の賦を讀み、死生を一にし去就を輕んずる點に至り、爽然として我れながらあきれたり、

史記國字解第五卷終

て文帝に謁見せしが、此の時文帝はヒモロギを受けて宣室に坐し給ひけるが、鬼神の事に感ぜられたる折柄、賈生に鬼神の本を下問あり、賈生は委細に鬼神の狀を說き夜半に至りけるが、文帝は深く興味を感ぜられて坐席を乘出し給へり、謁見終りし後、文帝の曰く、朕は久しく賈生に逢はず、自分の心にては彼れに過ぎたる積りなりしが、今彼れと逢ひ見れば實際及ばざることを發見せりと、程過ぎて賈生を拜して梁の懷王の太傅となしぬ、梁の懷王は文帝の季の子なるが、文帝に愛せられ、又書物を好みしかば、賈生を附人とせられたるなり、文帝又淮南厲王の子四人を封じて、何れも列侯とせられしかば、賈生は天下の患が此れより起るべしとて諫言を上れり、賈生は屢〻上書して、諸侯の中に數郡を併せて領有する者あるは古への制度に違ふが故に、少しづつ之を削るべき由を建言せしも文帝に採用せられず、斯くて數年を過ぎ、懷王は馬に騎り出行の折柄墜落して死し、繼嗣なかりき、賈生は太傅にてありながら不行屆きのため此の如き珍事の出來たることを傷み、哭泣すること一个年餘に及び、彼れも亦病氣となりて死去せしが、死せし時三十三歲なりき、孝文帝崩じ孝武皇帝立つに及び、賈生の孫二人を擧げ用ひて郡守に至らしむ、其の中にて賈嘉は最も學を好み、家名を繼承し、予と書面の往復をなせり、彼れ孝昭の時に至り九卿に列す、

【字解】孫二人、賈誼の子は璠にて其子の嘉と惲、

太史公曰、余讀離騷天問招魂哀郢、悲其志、適長沙、觀屈原所自沈淵、未嘗不垂涕想見其爲人、及見賈生弔之、又怪屈原以彼其材游諸侯、何國不容、而自令若是、讀服鳥賦、同死生、輕去就、又爽然自失矣、

【講義】太史公曰く、予は屈原の離騷、天問、招魂、哀郢諸篇を讀んで彼れの志を悲み、長沙に赴き屈原が自ら身を投げたる淵を觀て涙を流し、其人を想像し

其死する時は休むが如く、澹泊にして深淵の靜なるが如く、ゆらゆらとして繫がざる舟の如く、生けることを以て自ら寶とせず、空々たる性情を養うて氣隨氣儘になす、斯く有德の人は累ひなく、天命を知りて憂へず、瑣々たる事の胸にこだはるが如きは何ぞ疑ふに足らんと、

【字解】曲、局に同じ、攌、大いなる木柵なり、或或、惑々なり、寥廓忽荒、心の廣く捕捉すべからざる貌、蔕蒯、心に滯ふること、

後歲餘、賈生徵見、孝文帝方受釐、坐宣室、上因感鬼神事、而問鬼神之本、賈生因具道所以然之狀、至夜半、文帝前席、既罷、曰、吾久不見賈生、自以爲過之、今不及也、居頃之、拜賈生爲梁懷王太傅、梁懷王、文帝之少子、愛而好書、故令賈生傅之、文帝復封淮南厲王子四人皆爲列侯、賈生諫以爲患之興自此起矣、賈生數上疏、言諸侯或連數郡、非古之制、可稍削之、文帝不聽、居數年、懷王騎墮馬而死、無後、賈生自傷爲傅無狀、哭泣歲餘、亦死、賈生之死時、年三十三矣、及孝文崩、孝武皇帝立、擧賈生之孫二人至郡守、而賈嘉最好學、[世]世其家、與余通書、至孝昭時、列爲九卿、

【講義】其後一个年餘を過ぎし頃賈生は召し出され

知の小なる者は自ら己れに私し、他を賤み我れを貴び、道理に通ずる人は大々的の觀察をなすゆゑ、物として可ならざるはなし、然るに貪慾の者は身を貨財の犧牲となし、功名心ある者は身を以て名の犧牲とし、驕慢の人は權勢の爲に命を失ひ、一般の人間は生活を貪り、利に誘はれ又は貧窮に迫らるゝ者は東西に奔走して利を求む、

【字解】消息、增減と云ふが如し、異物、死して形化して鬼となるを謂ふ、夸、ホコル、品庶、衆庶なり、怵迫、利に誘はれ貧賤に迫らる、

大人不曲兮、億變齊同、拘士繫俗兮、攌如囚拘、至人遺物兮、獨與道俱、衆人或或兮、好惡積意、眞人淡漠兮、獨與道息、釋知遺形兮、超然自喪、寥廓忽荒兮、與道翺翔、乘流則逝兮、得坻則止、從軀委命兮、不私與己、其生若浮兮、其死若休、澹乎若深淵之靜、氾乎若不繫之舟、不以生故自寶兮、養空而游、德人無累兮、知命不憂、細故慸薊兮、何足以疑、

【講義】大人は事物に限局せず、億萬の變化に遇ふも同一の態度を持し、拘泥の士は世俗の爲に繫縛せられ、檻入りの姿にて囚人の如し、至極の德を有する人は物を超越して唯道とのみ行動す、衆人は惑ひに惑ひて好む所惡む所心中に積み重なる、眞人は淡泊にして其落付く所は唯道あるのみ、知を放ち形を遺れ、超然として自己の身を忘れ、其心中廣大無邊にして道と共に高尙の振舞ひをなし、流れに乘ずれば行き洲を得れば止まると云ふが如く、險を見れば差控へて敢て進まず、肉體を自由にし天命に放任して自我に執着することなく、其生けるときは浮ぶが如く、

憂ふべきこと喜ぶべきことと一の門に集り、吉事と凶事とは其區域を同じくす、彼の呉は强大なりしも、呉王の夫差は遂に敗軍に及び、越は會稽山に立籠りしが、越王句踐は世の霸者となりぬ、李斯の游說は成功して秦の宰相となりしも終に五刑を蒙り、傅說は鎖に繫がれて勞働せしも武丁の宰相となれり、夫れ禍と福とは何をもてあざなへる繩に異らんや、命と云ふものは說明の出來ぬものにて、誰れか其結果を知り得べき、水激するときは早く、矢激するときは遠し、凡そ宇宙の萬物は輪轉接觸して推合ひ活動して轉ずるものなり、雲蒸し雨降り、雜り纏ひて入亂れ、造化の大たゝらを以て物を鑄造し、茫漠として限界なし、天は對象として慮ること出來ず、道は對象として謀ること出來ず、遲きも早きも命あれば何として其時を識るべけんや、

【字解】　斡流、旋流なり、嬗、蟬なり、沕穆、深徼の貌、斯游、李斯の游說、胥靡、懲役を謂ふ、糾、纆を寄り合はすなり、旱、疾なり、回薄、それからそれへと周つて迫る、大專大たゝら、槃、物を鑄造するなり、坱軋、霧の立てこめて暗きなり、

且夫天地爲レ爐兮、造化爲レ工、陰陽爲レ炭兮、萬物爲レ銅、合散消息兮、安有二常則一、千變萬化兮、未二始有一レ極、忽然爲レ人兮、何足二控摶一、化爲二異物一兮、又何足レ患、小知自私兮、賤レ彼貴レ我、通人大觀兮、物無レ不レ可、貪夫徇レ財兮、列士殉レ名、夸者死レ權兮、品庶馮レ生、怵迫之徒兮、或趨二西東一、

【講義】　其上に天地を爐となし、造化を職工となし、陰陽を炭となし、萬物を銅となし、或は合し或は散じ、或は增し或は滅ず、何として一定の規則あらんや、其千變萬化する、未だ嘗て際限あらざるなり、忽然として人間となる、何ぞ生命を愛惜するに足らん、化して靈鬼となりたりとて、又何ぞ患ふるに足らん、

の險を述べあり、曰く、野鳥が入りて室内に入るときは不吉の兆にして、主人は今後其處に住むことを得ずして他に去ることとなると、因つて服鳥に問ふやう、予は去りて何處にゆく次第なりや、吉ならば我れに其吉事を告ぐべく、凶ならば我れに其災ひを語るべし、吉凶とも遲きか早きか予に其時期を知らせよと、服は之を聞いて嘆息しつゝ首を擧げ翼を奮ひ、言はんと欲すれども口言ふ能はざるを以て、彼れの對を推測るに左の如し、曰く、

【字解】單閼、卯の年なり、文帝の六年は丁卯に當る、孟夏、首夏と云ふが如し、施、斜なり、度、占ひに出でたる未來の成行き、淹數、數は速なり、猶遲速と云ふが如し、

萬物變化兮、固無休息、斡流而遷兮、或推而還、形氣轉續兮、化變而嬗、沕穆無窮兮、胡可勝言、禍兮福所倚、福兮禍所伏、憂喜聚門兮、吉凶同域、彼吳彊大兮、夫差以敗、越棲會稽兮、句踐霸世、斯游遂成兮、卒被五刑、傅說胥靡兮、乃相武丁、夫禍之與福兮、何異糾纆、命不可說兮、孰知其極、水激則旱兮、矢激則遠、萬物回薄兮、振蕩相轉、雲蒸雨降兮、錯繆相紛、大專槃物兮、坱軋無垠、天不可與慮兮、道不可與謀、遲數有命兮、惡識其時、

【講義】萬物は常に變化して固より休止することなく、或は流轉して遷り、或は推して本に還り、形と氣とは絶えず交錯して蟬の殼を脱するが如く、其理は深微にして窮まりなく、何とて言葉を以て言ひ切れんや、禍は福の倚る所にして福は禍の伏する所なり、

る魚を容れん、江水や湖水に横はれる鱣鱏も、水なき場所に在らば螻や蟻の爲にも制せらるべしと、

【字解】 堙鬱、氣の塞ぐこと、漂々、輕擧の貌、沕、沒するなり、融爚、明光、蟺、大蟻、螾、ミミズ、般、行きつ戻りつする、汙瀆、小渠、螻、ケラ、鱣鱏、大魚の名、

賈生爲長沙王太傅、三年、有鴞飛入賈生舍、止於坐隅、楚人命鴞曰服、賈生既以適居長沙、長沙卑溼、自以爲壽不得長、傷悼之、乃爲賦以自廣、

【講義】 賈生は已に長沙王の太傅となり、三个年を過ぎたる處、或る時鴞が賈生の住宅に飛入り、室の隅の處に止まれり、此の鳥は楚の方言にて服と云ふものなり、賈生は已に流罪となりて長沙に居ることとなりしが、長沙の地は濕地なるを以て自ら迚も長生出來ざるべしと考へし際なりければ、鴞の來りしより頗る悲觀に及び、其結果賦を作りて自ら慰めり、

【字解】 廣、寬の意に用ふ、

其辭曰、單閼之歲兮、四月孟夏庚子日施兮、服集予舍、止于坐隅、貌甚閒暇、異物來集兮、私怪其故、發書占之兮、策言其度、曰、野鳥入處兮、主人將去、請問于服兮、予去何之、吉乎告我、凶言其菑、淹數之度兮、語予其期、服乃歎息、擧首奮翼、口不能言、請對以臆、

【講義】 其辭に曰く、卯の年の四月初夏庚子の日影傾きし頃、服は予の室に集まり坐隅に止まれり、其樣子は甚だ落附き居れり、此の如き奇異の物の來りしことに就いては、予其仔細を怪み、卜筮の書物を開き之を占ひたる所、文字を書き載せたる竹札に其占ひ

ふ、章甫、殷、冠、訊、告ぐるなり、前の言を繰返し引縮めて宣ぶる意味、亂と同じ、

已矣國其莫我知、獨堙鬱兮、其誰語、鳳漂漂其高逝兮、夫固自縮而遠去、襲九淵之神龍兮、沕深潛以自珍、彌融爚以隱處兮、夫豈從蟻與蛭螾、所貴聖人之神德兮、遠濁世而自藏、使騏驥可得係羈兮、豈云異夫犬羊、般紛紛其離此尤兮、亦夫子之辜也、瞝九州而相君兮、何必懷此都也、鳳皇翔于千仞之上兮、覽德輝焉下之、見細德之險徵兮、搖增翮逝而去之、彼尋常之汙瀆兮、豈能容吞舟之魚、橫江湖之鱣鱏兮、固將制於螻蟻、

【講義】　最早是非なきことかな、國中に於て何人も我れを知る者なく、獨り心結ぼれて誰れに心事を語るべき、鳳皇は漂々として高く飛び退き、身を縮めて遠く去り、九淵の神龍は沕然と深く潛みて自ら己れを大切になし、明光に遠ざかりて隱れ棲む、何とて蟻や蛭や蚯蚓などに從はんや、聖人の神德に貴ぶ所のものは、濁りたる社會より遠ざかりて自ら其才德を藏するに在り、若し騏驥をし、絆をかけて之を繫ぐことを得しむるならば、彼の犬羊と何の異なる所あらんや、般と往きつ戻りつ、進みかねつゝ、紛々たる讒言のために此の難儀に遇ひ給へるは、亦先生の罪なり、九州を歷て孰れの君をも扶くべきに、何ぞ楚の都に限りて之を戀しく思ふことあらんや、鳳皇は千仞の高き處に翔り、下界に聖王ありて德の光輝くを見るときは其處に下り、又德が小にして痛ましきを見るときは、羽翼を搖かして之を去る、彼の一丈や二丈の溝などは、何とて舟を一呑みになす程の大いな

兮、鴟梟翺翔、闒茸尊顯兮、讒諛得志、賢聖逆曳兮、方正倒植、世謂伯夷貪兮、謂盜跖廉、莫邪爲頓兮、鉛刀爲銛、于嗟嚜嚜兮、生之無故、斡棄周鼎兮、而寶康瓠、騰駕罷牛兮、驂蹇驢、驥垂兩耳兮、服鹽車、章甫薦屨兮、漸不可久、嗟苦先生兮、獨離此咎、訊曰、

【講義】恭しく喜ばしき寛典を承け、長沙にて御沙汰を待つことゝなれるが、側に聞く、屈原は自ら汨羅の河中に身を投じて死したりと、我れ今湘流に至り此身を寄する折柄、恭しく先生を弔ふ、先生には世の無道に遇ひ、之が爲に命を棄て給へり、嗚呼哀しいかな、めでたからざる時節に廻り合せ、鸞鳳の如き靈鳥は其姿を隱し影を昧まし、鴟梟の如き惡鳥は誰れ憚らず飛び翔り、不肖の人は貴顯の地位を得、讒言をなし人に媚び諂ふ人物は志を得、賢聖は逆に曳かれて推し除けられ、方正の人は倒まに立てられ、世の人は伯夷を貪慾なりと曰ひ、盜跖を廉潔なりと曰ひ、莫邪の名劍を鈍となし、鉛のなまくら刀を鋭利となす、さても嚜々と意を得ずして先生が故なく罪を得給ひしとよ、國寶とも云ふべき周鼎を打棄てゝ役にも立たざる大瓠箪を寶とし、疲れたる牛に車を牽かせて、足の蹇へたる驢馬を副馬に用ひ、驥は兩耳を垂れて鹽を積みたる車を引かせられ、章甫の冠は履の下敷きとなる、其結果自然永續きは出來ざることゝなる、嗚呼苦まれたるかな先生、獨り此の不幸に遇ひ給ひぬ、重ねて先生に告げ申さく、

【字解】共承、共は恭なり、罔極、無道なり、隕、オトス、鸞鳳、君子に喩ふ、鴟梟、フクロフ、小人に喩ふ、闒茸、不肖の人、逆曳、順當に行動することを得ざるなり、方正倒植、賢不肖、顚倒して位地を易ふるを謂ふ、莫邪、吳の大夫なり、寶劍を作る、因つて其名を以て劍の名となす、銛、利なり、嚜々、意を得ざる貌、斡、轉なり、周鼎、周王傳世の寶、康瓠、康は大なり、空なり、罷、疲に同じ、薦、下敷きになすこと、離、カヽル、又遇

用其議、乃以賈生爲長沙王太傅、賈生既辭往、行聞長沙卑溼、自以壽不得長、又以適去、意不自得、及渡湘水、爲賦以弔屈原、其辭曰、

【講義】 賈生考ふるやう、漢が興りて天下を統一せしより孝文帝に至る迄二十餘年に及び、天下も善く治まり和合したれば、今こそ各王朝の標榜なる曆を改め、衣服の色を易へ、制度を立て、官名を定め、禮樂を興すべしと、因つて其事の形式法則等の草案を作る、色に於ては黃を尊び、數に於ては五を用ひ、官名を造り、一切秦の舊制を變更せしものなり、然るに孝文帝は卽位の初めとて何分大事業なるより、謙讓せられて未だ着手に遑あらず、但し諸の律令の改正と、列侯をして悉く其領地に就かしむる等の説は、皆賈生より發せり、孝文帝は群臣の評議にかけ、賈生は公卿の位に引上ぐべき資格ありとて之を拔擢せんとし給ひし處、絳、灌、東陽侯、馮敬の徒は盡く之を自己に不利益なりと考へしかば、賈生を譏つて曰く、雒陽の人、年は若く、學問の日は尙淺きに、專ら權力を振り廻し諸事を攪亂せんとすと、是に於て天子も其後彼れを遠ざけられ、其意見を用ひ給はず、賈生を以て長沙王の太傅とす、賈生は既に天子に御暇乞ひを申上げ出立に及びけるが、途中に於て長沙は濕地なりと聞き、自ら考ふるに我が壽命は長からずと、其上左遷せられて去ることゆゑ、心にあぢきなく思ひ、湘水を渡るに及び、賦を作りて屈原を弔せり、其辭に曰く、

【字解】 草、創造するなり、色尙黃、孝文帝の時、黃龍見えたるを以て土德を得たるものとし、隨つて黃色を貴びしなり、絳灌、周勃、灌嬰なり、東陽侯、張相如なり、適、謫なり、謫は譴なり、

共承嘉惠兮、俟罪長沙、側聞屈原兮、自沈汨羅、造託湘流兮、敬弔先生、遭世罔極兮、乃隕厥身、嗚呼哀哉、逢時不祥、鸞鳳伏竄

【講義】　賈生、名を誼と曰ひ、雒陽の人なり、十八歳の時能く詩を口ずさみ文を綴りければ、其事郡中の評判となれり、呉廷尉が河南の太守にてありける時、彼れの人並優れたる才氣あることを聞き、之を召び寄せて己が門下に置き、寵愛を加へぬ、孝文皇帝位に卽かれて間もなく、河南の呉公の治績は天下第一にして、斯人は其昔し李斯と同村の出身にて、彼れを師として學問したる由を叡聞あり、徵して廷尉の官に拜し給へり、此の呉廷尉より、賈生が年若なるに頗る諸子百家の書に通ずる由を上聞に達せしかば、文帝は賈生を召して博士と爲されしが、此の時賈生は二十餘歳にして、諸博士中に於て其年齢最も若かりき、詔令に就いて議案の諸問ある每に、先輩の諸博士等が思案に窮して意見を出す能はざるに、賈生は一つも殘らず之が對へを爲す所、人人が斯く言はばやと思ひし通りなりければ、諸博士も賈生には及び難しと考へぬ、されば文帝の御意に叶ひ、一足飛びに升進して僅か一个年の中に太中大夫の位にまで立身せり、

【字解】　呉公、前に見えたる呉廷尉、其名知れざる故に單に姓を稱して呉公と云ふ、治平、政治まりて和平なるなり、

賈生以爲漢興至孝文二十餘年、天下和洽、而固當改正朔、易服色、法制度、定官名、興禮樂、乃悉草具其事儀法、色尙黃、數用五、爲官名、悉更秦之法、孝文帝初卽位、謙讓未遑也、諸律令所更定、及列侯悉就國、其説皆自賈生發之、於是天子議以爲賈生任公卿之位、絳灌東陽侯馮敬之屬盡害之、乃短賈生曰、雒陽之人、年少初學、專欲擅權紛亂諸事、於是天子後亦疏之、不

屈原既死之後、楚有宋玉唐勒景差之徒者、皆好辭而以賦見稱、然皆祖屈原之從容辭令、終莫敢直諫、其後楚日以削、數十年、竟爲秦所滅、自屈原沈汨羅後百有餘年、漢有賈生、爲長沙王太傅、過湘水、投書以弔屈原、

【講義】屈原已に死せし後、楚に宋玉、唐勒、景差の徒あり、何れも文辭を好み、賦を以て世に稱せられたり、然れども皆屈原のゆつたりとしたる辭令を根源とし、終に敢て直諫せしものなし、其後楚は日に土地を削られ、數十年にして竟に秦に滅ぼされたり、屈原が汨羅に身を投ぜしより後百餘年を經て漢に賈生あり、長沙王の太傅となり、湘水を通過せし時書を投じて屈原を弔せり、

○賈生、名誼、雒陽人也、年十八、以能誦詩屬書聞於郡中、吳廷尉爲河南守、聞其秀才、召置門下甚幸愛、孝文皇帝初立、聞河南守吳公、治平爲天下第一、故與李斯同邑而常學事焉、乃徵爲廷尉、廷尉乃言賈生年少、頗通諸子百家之書、文帝召以爲博士、是時賈生年二十餘、最爲少、每詔令議下、諸老先生不能言、賈生盡爲之對、人人各如其意所欲出、諸生於是乃以爲能不及也、孝文帝說之、超遷一歲中至太中大夫、

亂曰、浩浩沅湘兮、分流汩兮、脩路幽拂兮、道遠忽兮、曾唫恆悲兮、永歎慨兮、世既莫吾知兮、人心不可謂兮、懷情抱質兮、獨無匹兮、伯樂既歿兮、驥將焉程兮、人生有命兮、各有所錯兮、定心廣志、余何畏懼兮、曾傷爰哀、永歎喟兮、世溷不吾知、心不可謂兮、知死不可讓兮、願勿愛兮、明以告君子兮、吾將以爲類兮、於是懷石、遂自投汨羅以死、

【講義】賦を概括したる辭に云ふ、浩々として際限の知れぬ沅江と湘江との水は二筋に分れ、早瀨となつて流れ居り、長く連なれる路は何となく物淋しく、旅の道中、何如にも遠きことかな、左遷の身は或は詩を吟じて懷ひを遣り、絕えず悲み通して嗟嘆慷慨する次第なるが、世間に己れを知るものなき以上、今日の人に道理を申し聽かすこともならず、心に眞情を懷き身に實質を抱き居るも、自分唯一人にして仲間なし、馬の鑒定に妙を得たる伯樂は已に歿したれば、驥と云ふ良馬ありとも何如にして之を見分くべけん、人の生涯に天命ありて銘々安んずべき處あり、されば予も心を定め、志を廣く持ち、何の畏懼する所かあらん、されど心に傷み又は哀み、永く嘆息の聲を洩すは、世の中が濁りて我が心を知るものなく、心に思ふことを說き聽かす能はざればなり、抑々死は避くべからざるものなるが故に、命を惜むことなからん、明かに世の君子に告ぐ、自分は今死して忠臣の例を作らんと、是に於て石を抱へ汨羅の川へ身を投げて死せり、

【字解】亂、賦の終りに於て其要點を撮み、全體の意を再說するを亂と曰ふ、浩々、廣大の貌、沅湘、沅江と湘江、汩、急に流るゝなり、脩路、長き路、幽拂、暗く淋しきこと、程、ハカル、評價すること、錯、ヤスンズル、喟、嘆聲、溷、ニゴル、

兮、願志之有象、進路北次兮、日昧昧其將暮、含憂虞哀兮、限之以大故、

【講義】 我が國家の事を擔當せしことを譬ふれば、宛も車馬に積みたる荷物の重大であると同樣、遂に力に餘りて地中に落ち込み、行き果すること出來ざりき、瑾瑜とも云ふべき立派なる才能を持ちながら斯かる逆境に陷り、己れの言ひたきことも十分陳ぶること出來ず、村里の犬が群をなして吠ゆるは、犬の心に怪しと思ふものを吠ゆるのみ、駿や桀を誹り又は疑ふは、固より凡庸の爲す業なり、故に自分は文も質もあり、事物に通ずる所の才德を持つと雖も、世間は自分が人に異りたる光彩あることを知らず、我が文にも富み質にも富むことは宛も木材のやうに積み累ねたる如くなれども、世人は予の所持する才德が此の如くなることを知る者なし、されど余自身は飽くまでも仁義を身に重ね纏ひ、謹愼溫厚を以て吾が德を豐富にしつゝあり、虞舜の如き聖帝に逢ふことが出來ぬ以上、誰れあつて予のゆつたりとして仁義に安んずるとを知るものあらうや、昔しの道は固より今日と相違して居るが、何として其理由を知らんや、湯王や禹王は已に時代が古くして又遠く、遙々として幾千年と隔たることゆゑ、何程慕へばとて無效なり、世俗に違背せしことに懲り、忿怒の心を改め、我れと我が心を抑へて自ら耐忍し、不秩序の時代に逢ふも方針を更へず、志に法る所あらんことを願ひ居るなり、次第に旅路を進み宿を取る頃、日は薄昏くなりて暮れかゝれり、此の時胸中に憂悶の念を含んで哀を催し、其行詰まる所は死亡なり、

【字解】 任、荷物なり、載盛、載は車の積荷、盛は澤山と云ふこと、示、語ぐると云ふこと、桀、傑なり、疎內、疎は疏通、能く事物に達するを謂ふ、材樸、材は木材、樸は木の未だ斧斤を加へざるもの、謂はゆるアラキ、材は文なり、樸は質なり、委積、つみかさぬる、襲、かさねぎすると、重華、舜帝の號、牾、逢ふなり、不竝、懸隔すること、邈、遙かなる形容、彊、ツトムと訓ず、湣、亂なり、象、法なり、次、ヤドル、昧々、日のくらきこと、大故、死を謂ふ、

ることを知るべきや、立派なる光彩あるものも闇中に置くときは、誰れも彩色なきものと思ふべし、離婁も若し目を細くして物を視るときは、瞽者も彼れを見えぬ者とすべし、今の世には白き物をば黑しとし、上を倒にして下となす、之がため靈鳥の鳳凰は籠の中に押込められ、雞や雉の如き凡鳥は反つて高く空中に飛翔することとなり、玉も石も差別せず、ごたまぜに量ると云ふ如く、凡べて顚倒を免れず、彼の小人の奴等は我れを鄙み我れを妬み、之がため無實の罪に陷りたる次第にて、世間の人は我が善き所を知らず、

【字解】陶々、陽氣の盛んなる貌、孟夏、首夏なり、莽莽、繁茂の貌、汩、旅行を急ぐ貌、徂、ユク、南土、江南、眴、眩なり、窈窕、たをやか、孔、甚なり、墨、默なり、紆軫、屈痛なり、離愍、疾に罹る、鞠、窮迫すること、俛詘、俯屈なり、刓、ケヅル、圜、圓に同じ、常度、度は法度、本由、常道、畫、計畫なり、職、掌る、轉じて守るの義となる、大人、盛德の人を謂ふ、斲、ケヅル、揆正、きりもりと云ふが如し、寸法の適宜、玄文、非常に彩色のあるもの、幽處、薄昏き場所、矇瞽、共に盲者、不章、文采なきこと、離婁、古代視力の强きことを以て有名なる人、微睇、目を細くして視る、笯、籠なり、糅、ごたまぜにする、一槩、一樣と云ふが如し、羌、楚人の感嘆詞、

任重載盛兮、陷滯而不濟、懷瑾握瑜兮、窮不得余所示、邑犬羣吠兮、吠所怪也、誹駿疑桀兮、固庸態也、文質疏內兮、衆不知吾之異采、材樸委積兮、莫知余之所有、重仁襲義兮、謹厚以爲豐、重華不可悟兮、孰知余之從容、古固有不竝兮、豈知其故也、湯禹久遠兮、邈不可慕也、懲違改忿兮、抑心而自彊、離湣而不遷

徂南土、眴兮窈窕、孔靜幽墨、寃結紆軫兮、離愍之長鞠、撫情効志兮、俛詘以自抑、刓方以爲圜兮、常度未替、易初本由兮、君子所鄙、章畫職墨兮、前度未改、内直質重兮、大人所盛、巧匠不斲兮、孰察其揆正、玄文幽處兮、矇謂之不章、離婁微睇兮、瞽以爲無明、變白而爲黑兮、倒上以爲下、鳳皇在笯兮、雞雉翔舞、同糅玉石兮、一槩而相量、夫黨人之鄙妬兮、羌不知吾所臧、

【講義】屈原は斯く入水せんと決心したれば、懐沙の賦と云ふ文を作りしが、其文言に曰く、陶々と陽氣の盛んなる此夏の初め頃は、草も木も莽々と茂つて居り、人の氣も自然に引立つべき時候にてありながら、自分は心中に痛ましき事ありて永く世に堪へられぬ理由は他に非ず、今や左遷の身となり、取急ぎて南方へ旅行することとなりし爲めなり、愈〻江南に來り見れば、山青く水緑に景色の麗はしきこと、まばゆきばかり、非常に閒靜にして浮世の聲も聞えず、平生ならんには心も慰めらるゝ筈なれど、何にせよ寃罪に心も結ばれ、屈托悲哀の情態は丁度病氣となりしが如く、いつまでも窮困に堪へ切れず、さりながら我れと我が情を鎭め考へをなほし、姑らく頭を俯し志を屈して自ら抑へ居るなり、世の中の人は四角なる物の角を削り取りて圓形とすれど、自分に於ては一定の法則を變ずることをなさず、抑〻人が時世の何如に因つて最初の行ひを更へ、常の道を離るゝは君子の鄙む所なり、故に宛も大工が設計を明かにし、繩や墨を用ふるに古來の規則を改めざると同樣にせざるべからず、其心底が正直にして人柄に重みあることは、大人の稱賛する所なり、何如に上手なる大工と雖も木を削らざるときは、誰れか其寸法に適ひてあ

岸邊をさまよひながら詩を吟じ居たるが、其顏色は瘦せ衰へ、容貌は枯木の如く、見る影もなき樣子なりき、折柄一人の漁父彼に行逢ひて尋ぬるやう、君は三閭大夫にて在さずや、斯かる貴き家柄の御身にてありながら、何故斯樣なる邊鄙へ來られたるかと、屈原答へて曰く、當今世間推しなべて濁れる中に自分獨りは清潔であり、一般の人は酒に醉ひたるが如くに本心を失ひて居る中に自分獨りは醒めて居り、社會の仲間外れなるが故に流罪の憂目に遇へるなりと、漁父云ふ、夫れは君の心得違ひと申す者なり、一體聖人と云ふものは物事に屈託せずして能く時世と推移り、決して自我を立てぬものなり、君の仰せらるゝが如く世の中が濁つて居るならば、何とて其濁れる流れのまゝに濁れる波を立て給はざるや、一般の人が皆醉つて居るならば、何とて其糟を食ひ其汁を啜つて一所に醉ひ給はざるや、何故に瑾瑜にも比すべき立派なる才能を抱き、それを人目に立つやうにして、流罪などに遇ひ給ふやと、屈原云ふ、吾れ聞き及びたることあり、新に頭を洗ひたる者は冠の塵を彈き落し、新に入浴したる者は必ず衣服を振つて芥を落すと、是れは折角綺麗なる物に汚のつくことを厭ふが故なり、誰れにしても察々然と清淨無垢の身にてありながら、汶々然と垢じみたる物を受附けて辛抱する者あらんや、之を辛抱する位ならば、寧ろ長江に身を投げて魚の腹に葬らるゝ方が優なり、然るに何とて皓皓と純潔の身を以て世のどすぐろき物を蒙ることあらんやと、

【字解】 短、人の疵を擧ぐること、遷之、江南の地へ流しゝを謂ふ、澤畔、澤は沼なり、水地なり、屈原の遷されたるは、今の湖南にして水地なるが故に澤國の名なり、憔悴、瘦せ衰ふるなり、枯槁、草木の枯れ果つること、三閭大夫、三閭の職は王族の三姓を掌る、屈原嘗て此官に任ず、凝滯、執着すること、餔、クラフ、啜、スヽル、醨、酒の濁れるもの、又薄き酒、瑾瑜、共に美玉の名、察々、淨潔なり、汶々、垢汙なり、常流、常は長の音通、皓々、純白の貌、溫蠖、くろずみたる貌、

乃作懷沙之賦、其辭曰、陶陶孟夏兮、草木莽莽、傷懷永哀兮、汩

【字解】 易曰、井の卦、九三の爻の辭なり、井泄不食云々、泄は今の本には渫に作る、さらひて泥などの穢き物を取り除くなり、惻は心痛、井を浚ふは己れの宜しからざる處を去つて潔白にするに譬へたるものにして、食はれずとは用ひられぬこと、飲むと言はずして食の字を用ひたるは、食、惻、福を韻字となしたるに由る、可以汲云々、苟くも賢明なる人ありて之を用ふるときは、君臣共に福を受くべしとの意なり、

令尹子蘭聞之、大怒、卒使上官大夫短屈原於頃襄王、頃襄王怒而遷之、屈原至於江濱、被髮行吟澤畔、顏色憔悴、形容枯槁、漁父見而問之曰、子非三閭大夫歟、何故而至此、屈原曰、擧世混濁而我獨清、衆人皆醉而我獨醒、是以見放、漁父曰、夫聖人者、不凝滯於物、而能與世推移、擧世混濁、何不隨其流而揚其波、衆人皆醉、何不餔其糟而啜其釃、何故懷瑾握瑜、而自令見放爲、屈原曰、吾聞之、新沐者必彈冠、新浴者必振衣、人又誰能以身之察察、受物之汶汶者乎、寧赴常流而葬乎江魚腹中耳、又安能以皓皓之白、而蒙世之溫蠖乎、

【講義】 令尹子蘭は屈原が己れを憎む由を聞いて大に怒り、終に上官大夫をして頃襄王に屈原の事を惡口せしめたる處、頃襄王は怒つて屈原を左遷せり、屈原は已に流されて江水の附近に至り、髮の毛を結ばず、冠も着けず、髮は振り亂れて蔽ひかぶさり、澤の

人君無愚智賢不肖、莫不欲求忠以自爲、擧賢以自佐、然亡國破家相隨屬、而聖君治國、累世而不見者、其所謂忠者不忠、而所謂賢者不賢也、懷王以不知忠臣之分、故內惑於鄭袖、外欺於張儀、疏屈平而信上官大夫令尹子蘭、兵挫地削、亡其六郡、身客死於秦、爲天下笑、此不知人之禍也、

【講義】 凡そ人君に智愚賢不肖の別あれども、總じて忠臣を手に入れて己れの利益となし、賢人を引擧げて己れの輔佐とすることを欲せざるものあらず、然るに國を亡ぼし家を破る者が後から後からと云ふ風に引續き、聖明の君や治平の國は幾代を歷るも見當らぬ所以は、忠臣なりと思ふ所の者が不忠にして、賢人なりと考ふる所の者が不賢者なるため、欲する所と實際とが顚倒するに外ならず、懷王は忠臣の區別を知らざりし爲、內は鄭袖に惑はされ、外は張儀に欺かれ、屈平を遠ざけて上官大夫、令尹子蘭を信ぜしかば、兵は挫け地は削られ六郡の土地を失ひ、他國の秦に死して天下の物笑ひとなりしが、此れは人を知らざりし禍なり、

易曰、井泄不食、爲我心惻、可以汲、王明竝受其福、王之不明、豈足福哉、

【講義】 易に云ふ、井戸清けれども人に飲まれず、我が心の悲哀をなす、何となれば汲んで用ふべき價値あればなり、若し能く目の見ゆる君ありて汲んで之を用ふるならば、上下共に其福を受くるならんと、然るに懷王の如き不明の君は、何如にして福を受くるに足らんや、

て出向かんとせしに、屈原又諫めて曰く、秦は虎狼同然の國にて害心を挾むゆゑ、縱令甘言を以て我れを誘ふとも容易に信じ難ければ、行き給はざるが上策なりと、然るに懷王の幼子にて子蘭と云ふもの、折角秦より好意を以て申込みたるを、何ぞ受けつけずして彼れの機嫌を損すべけんやとて、懷王に行くことを勸めしかば、懷王も愈〻出發に及び、武關に入りたる處、秦は伏兵を以て後の路を絶切り、從者の來られぬ樣に爲し置き、懷王を抑留して土地の割讓を要求せしに、懷王は之を拒絶し、脱走して趙に赴きし處、趙は之を入れざりしかば、已むを得ず復び秦に往き、秦の地にて死去せり、其遺骸は本國に戻り葬式を營みぬ、懷王は秦に於て死去したれば、其子頃襄王立ちて位に卽き、其弟の子蘭を令尹に任ぜり、楚國の人民は、子蘭が父の懷王に勸めて秦に入らせ、其結果異鄉の鬼とならしめたることを咎め居れり、

【字解】令尹、楚にては大夫を令尹と稱す、執政なり、

屈平既嫉之、雖放流、睠顧楚國、繫心懷王、不忘欲反、冀幸君之一悟、俗之一改也、其存君興國而欲反覆之、一篇之中、三致志焉、然終無可奈何、故不可以反、卒以此見懷王之終不悟也、

【講義】屈原は夙に子蘭を憎み、其身放逐せらると雖も、楚國をなつかしく思ひ、楚王の事念頭より去らずして、何卒本心に立返らせたしと忘るゝ暇なし、主君が一たび過を悔い給ひ、楚の風俗も改まれかしと願ひ居り、君主を保全し國家を興して、之を古への有樣に返さんとするに就いては、彼れの作りたる離騷の中に三たびも心を盡し居れり、然れども終に何如んともする能はず、之を古へに返すは不可能となりしが、懷王の悟らざりしことは此れにて知らるゝなり、

【字解】放流、放逐せらるゝこと、睠顧、眷顧なり、振り回つて見ること、心が殘り、棄てがたき思ひあること、冀幸、希望すること、反覆、くりかへす、

に楚に赴けり、斯くて楚の臣下中勢力を振へる靳尙卽ち上官大夫へ鄭重なる進物を贈り、之を味方に引入れ、又懷王の愛妾の鄭袖を欺き、色々張儀の罪を取成さしめたる處、懷王は鄭袖の申すことを聽き入れ、一旦殺さんとせし張儀を解放して秦に歸らしめぬ、

【字解】 絀、退に同じ、幣、進物なり、商於、秦の二縣の名、甘心、思を霽らす、詭辯、胡麻化しの說、

是時屈平既疏、不復在位、使於齊、顧反、諫懷王曰、何不殺張儀、懷王悔、追張儀、不及、其後諸侯共擊楚、大破之、殺其將唐昧、時秦昭王與楚婚、欲與懷王會、懷王欲行、屈平曰、秦虎狼之國、不可信、不如無行、懷王稚子子蘭勸王行、奈何絕秦歡、懷王卒行、入武關、秦伏兵絕其後、因留懷王以求割地、懷王怒、不聽、亡走趙、趙不內、復之秦、竟死於秦而歸葬、長子頃襄王立、以其弟子蘭爲令尹、楚人既咎子蘭以勸懷王入秦而不反也、

【講義】 此の時屈原は已に懷王より疎み遠ざけられ、最早侍從の地位に居らざることとなり、齊の國へ使節を勸め、歸國の後張儀の始末を聞き知りしかば、王を諫めて云ふやう、何故に張儀の如き國害を爲す者を殺さずして無事に歸し給ひしかと、懷王も此に至りて彼れに欺かれたる事に氣附き、急に追手をかけたれども、既に時日も過ぎ手後れとなりて間に合はざりき、其後列國は連合して楚を擊ち、大に之を破り、楚の將軍唐昧を殺せり、時に秦の昭王は政策上楚と緣組みをなし、其れに就き懷王と會見をなしたき由申込みし處、懷王は敵の計略なることを覺らすし

靳尚、而設詭辯於懷王之寵姬鄭袖、懷王竟聽鄭袖、復釋去張儀、

【講義】屈原は已に讒言に因つて君邊を遠ざけられたるため國政に與らざりき、其後秦は齊を侵略せんと欲したるが、何分齊は當時楚の國と反秦同盟の間柄なるゆゑ、齊を伐つときは楚が援兵を出すに相違なき所より、秦の惠王は之を患へ、遂に一策を案出し、表面は腹心の張儀に暇を出し、鄭重なる進物を持たしめて自ら人質となり楚に奉公せしめ、楚王の信用するを見料らひ、言はしめけるは、秦は元來齊を怨むこと深し、然るに之を伐たんとする處、貴國は齊と同盟の關係あるを以て頗る困難なり、若し此際秦に好意を表せられ、齊と絶交あらば、其御禮として秦より商於の地六百里四方を獻上致すべしと、懷王は土地を貪るの心ありしかば張儀の語を信じ、彼れが云ふまゝに早速齊との同盟を破棄し、使者を秦に遣はして約束の土地を受取らしめんとせしに、此の時張儀は已に歸つて秦に居りしが、談判に臨み詐りて言ふやう、拙者が楚王と約束せしは六里四方の土地にして、六百里と申したる覺えなしと、楚の使者も彼れの不誠實を怒り、急ぎて秦を去り、本國に歸りて懷王に報告せしかば、懷王大に怒り、軍勢を興して秦を攻む、秦も亦兵を出して楚を撃ち、丹淅と云ふ地にて散散に之を打破り、首を取ること八萬、楚の將軍屈匄を捕虜とし、遂に楚の領土なる漢中の地を占領す、懷王憤慨に堪へず、全國の兵を盡く徵發して深く秦の國内へ攻入り、藍田に於て接戰に及びけるに、魏王之を聞き、機乘ずべしとて不意に楚を攻め、鄧に至りしを以て、楚の兵は本國を氣遣ひ秦より引返せり、然るに齊は以前に楚が同盟を破りしことを怒り、敢て援兵を出さず、是に於て楚は全く孤立となり、大に困難に陥れり、其翌年、秦は何如なる考にやありけん、一旦楚より取りたる漢中の地を還付に及び、楚と和睦せんことを申出づ、然るに懷王の之に對する挨拶に曰く、土地を得ることは願はしからず、何卒憎むべき張儀を得て存分に致したしと、張儀之を聞いて云ふやう、拙者一人の身體を先方に遣りさへせば漢中の土地を渡さずに濟む次第ならば、何卒楚の國へ參りたしとて遂

ときは、日月と光を爭ふと云ふも差支へなし、

【字解】 慘怛、慘は毒痛なり、怛は悲慘なり、間、離間なり、國風好色而不淫、國風とは、詩經に國風、小雅、大雅、頌の類別あり、國風には列國の詩を載す、其中に男女相慕ふの情を詠じたる作多し、故に色を好むと曰ふ、不淫は耽りて亂りがましくならぬこと、帝嚳、五帝の一なる高辛氏、條貫、聯絡關係、約、簡潔にして要領を得て居ること、微、奧床しく露骨ならざること、稱文、稱はハカル、邇、近なり、疎濯、離脫洗濯すること、淖、濁水のぐぢやつきたる處、蟬蛻、蟬のぬけがら、此には活用す、皭然、白色、滓、ケガル、

屈平既絀、其後秦欲伐齊、齊與楚從親、惠王患之、乃令張儀詳去秦、厚幣委質事楚、曰、秦甚憎齊、齊與楚從親、楚誠能絕齊、秦願獻商於之地六百里、楚懷王貪而信張儀、遂絕齊、使使如秦、受地、張儀詐之曰、儀與王約六里、不聞六百里、楚使怒去、歸告懷王、懷王怒、大興師伐秦、秦發兵擊之、大破楚師於丹淅、斬首八萬、虜楚將屈匄、遂取楚之漢中地、懷王乃悉發國中兵以深入擊秦、戰於藍田、魏聞之、襲楚至鄧、楚兵懼、自秦歸、而齊竟怒、不救楚、楚大困、明年、秦割漢中地與楚以和、楚王曰、不願得地、願得張儀而甘心焉、張儀聞、乃曰、以一儀而當漢中地、臣請往如楚、如楚、又因厚幣用事者臣

稱物芳、其行廉、故死而不容、自疏濯淖汙泥之中、蟬蛻於濁穢、以浮游塵埃之外、不獲世之滋垢、皭然泥而不滓者也、推此志也、雖與日月爭光可也、

【講義】離騷は猶離憂と云ふが如し、夫れ天は人の始めなり、父母は人の本なり、人窮するときは則ち本に反る、されば人が勞苦して疲れ果てたるときは天に向つて助けを求めざるものなく、或は病氣に罹り、或は痛み所あり、酷き思をなしたるときは父母を呼んで訴へざるものあらず、屈原は己れの主義を正しくし行爲を直くし、忠を竭し智を盡して其君主に事へたるに、讒者の爲に離間せられたることゆゑ、窮したりと謂ふべし、彼れ信義を守りながら反つて疑はれ、忠節を盡しながら反つて謗られしことなれば、何とて怨みずに居らるべきや、屈原が離騷を作りたるは、但し怨より動機が生じたるなり、國風の詩は色を好むの情を賦し出でたるものあれど、禮義に止まりて淫するほどに至らず、小雅の詩は人を怨み誹るとあれども、道義を亂る程に至らず、離騷は國風、小雅の色と怨とを云ひて弊のなき所を兼ねたるものと稱して可なり、離騷には上は帝嚳の事を稱し、下は齊の桓公の事を言ひ、中には湯王、武王の事を述べ、それをば標準として當世の事を非難し、道德の廣大にして崇高なる理窟や、治亂の原因結果を明かにして、畢く現出せざる所のものなし、其文體は簡約にして其文句は微妙なり、屈原の志は潔白にして其行爲は清廉なり、彼れの文の限量は小なれども、其趣意は此上もなく大なり、其類例を擧げたる所のものは手近でありながら、之に因つて道理を示すことは深遠なり、彼れの志操が高潔なる所より其物を引くに芳しき種類を擧げ、彼れの行ひが清廉なる所より縱令死すとも世に容れらるゝことを求めず、自ら溝泥の如き社會の中に在つて汙を洗ひ清め、濁りて穢き處をば、蟬が殼より拔け出づるが如くに脫去して、塵芥の外に遊離し、世の中の垢に染まず、皭然たる其色は、泥にまみれても滓るゝことなし、屈原の志を推し究むる

上官大夫は屈原と同役なりしが、寵を爭ひて屈原の才能あるを邪魔に思ひけり、或る時懷王より屈原に沙汰ありて、法令を起草せしむ、屈原草稿を綴り未だ脫稿せざりし中に、上官大夫は一見して己れの功名にせばやとて之を奪はんとせし處、屈原與へざりしかば、其れを種に讒言すらく、大王が屈平をして法令を作らしめ給ふことは、天下知らざるものなし、一法令出づる每に彼れ其功に誇りて申すやう、我れに非ざれば此法令を作ること出來ずと、懷王は上官大夫の讒言に惑ひ、屈原を怒りて之を遠ざけぬ、屈原は王が臣下の申し條を聽き分くる力なく、讒邪諂佞の者が君の目を昏まし、邪曲の說が公道を害し、方正の士が容れられざることを片腹痛く思ひし處より、憂へに悶え思ひに沈んで離騷を作れり、

【字解】左徒、官名なり、後世の左右拾遺の如し、嫺、ナラフと訓ず、憲令、法令なり、離騷、離は遭ふなり、騷は憂なり、

離騷者、猶離憂也、夫天者、人之始也、父母者、人之本也、人窮則反本、故勞苦倦極、未嘗不呼天也、疾痛慘怛、未嘗不呼父母也、屈平正道直行、竭忠盡智、以事其君、讒人閒之、可謂窮矣、信而見疑、忠而被謗、能無怨乎、屈平之作離騷、蓋自怨生也、國風好色而不淫、小雅怨誹而不亂、若離騷者可謂兼之矣、上稱帝嚳、下道齊桓、中述湯武、以刺世事、明道德之廣崇、治亂之條貫、靡不畢見、其文約、其辭微、其志潔、其行廉、其稱文小、而其指極大、舉類邇、而見義遠、其志潔、故其

志次第にて、諸侯に屈せず、其の時代に談論遊說をなして大臣宰相の權を折きしことは予の多とする所なり、鄒陽は其辭不遜なりしとは云へ、其事柄を比較し、種類を列擧したる點は悲むに足る者あり、是れも亦抗直にして撓まずと申すべし、吾れ是を以て之を列傳に附せり、

屈原賈生列傳第二十四

屈原者名平、楚之同姓也、爲楚懷王左徒、博聞彊志、明於治亂、嫻於辭令、入則與王圖議國事、以出號令、出則接遇賓客、應對諸侯、王甚任之、上官大夫與之同列、爭寵而心害其能、懷王使屈原造爲憲令、屈平屬草藁未定、上官大夫見而欲奪之、屈平不與、因讒之曰、王使屈平爲令、衆莫不知、每一令出、平伐其功、曰以爲非我莫能爲也、王怒而疏屈平、屈平疾王聽之不聰也、讒諂之蔽明也、邪曲之害公也、方正之不容也、故憂愁幽思而作離騷、

【講義】屈原は名を平と呼び、楚の同姓なり、楚の懷王の時其左徒となりしが、見聞廣くして記憶强く、治亂の道理に明かにして、應對の語遣ひに熟せり、されば奥向きに入りては王と國家の政治を議して命令を出し、出でては賓客の相手となり又は諸侯に應對し、甚だ役に立ちければ王は頗る之を信任せり、然るに

名勝母、而曾子不入、邑號朝歌、而墨子廻車、今欲使天下寥廓之士、攝於威重之權、主於位勢之貴、故回面汙行、以事諂諛之人、而求親近於左右、則士伏死堀穴巖巖之中耳、安肯有盡忠信而趨闕下者哉、書奏梁孝王、孝王使人出之、卒爲上客、

【講義】臣聞く、立派なる服裝をなして朝廷に入る者は私利の爲に義を汙すことをせず、名譽を磨く者は貪慾の爲に行ひに疵をつけぬものなりと、故に縣が勝母と云ふ名であるがため曾子は其地に入らず、邑が朝歌と云ふ名であるがため墨子は車を跡に引返せり、今天下の意氣宏大の士をして重き威力の爲に誘はれ貴き地位の人に脅かされ、面を向きかへ行を汙して諂諛の人の機嫌を取り左右近侍の者の歡心を求めしめんとするときは、彼等は山澤の中に隱れて死するのみなり、豈に忠信を盡して闕下に出頭する者あらんやと、此の上書梁の孝王に奏進せらるゝや、孝王は人を以て鄒陽を獄中より出さしめ、之を上客とせり、

【字解】砥厲、とぎみがく、名號、名節なり、勝母、不孝を意味す、朝歌、時ならざるを意味す、堀、窟なり、

太史公曰、魯連其指意雖不合大義、然余多其在布衣之位、蕩然肆志、不詘於諸侯、談說於當世、折卿相之權、鄒陽辭雖不遜、然其比物連類、有足悲者、亦可謂抗直不撓矣、吾是以附之列傳焉、

【講義】太史公曰く、魯連は其主意とする所大義に合はざれども、彼れが布衣の位に在つて自由自在其

獨觀於昭曠之道也、今人主沈於諂諛之辭、牽於帷裳之制、使不羈之士、與牛驥同皁、此鮑焦所以忿於世、而不留富貴之樂也、

【講義】之がため聖王が社會を制し一般の人民を御する仕方は、形式の上に超越して人の氣に入るが如き卑しき語に牽かるゝことなく、大勢の讒言の爲に動かさるゝことなし、故に秦の始皇は中庶子蒙嘉の言ふがまゝに荆軻の説を信ぜし處、匕首は暗中より發して殆ど殺されんとせり、周の文王は涇渭と云ふ二つの河の間に遊獵をなして呂尙に遇ひ、之を車に載せて歸り、其結果天下に王業を起せり、秦の方は左右の者の言ふ所を信じて亡びんとし、周は烏の集まりたるが如き出遇ひがしらを以て呂尙を手に入れ王となれり、何となれば彼れは臣下が邪魔をなし、又は誘惑するが如き語の上に立ち、普通の範圍外の意見を發揮し、何の障りもなき光明の道を觀たるが故なり、今人君が諂諛の辭に溺れ、臣下や妾の爲に制せられて不羈磊落の士を牛馬同樣に扱ふことは、鮑焦が時勢を憤つて富貴の樂みを見棄てたる所以なり、

【字解】鈞、陶工の用ふる型の下の轆轤盤、卑辭、諂諛の言、衆多之口、讒言、中庶子、荆軻已に秦に至り、千金を以て秦王の寵臣中庶子蒙嘉に賂ひ、秦王に見ゆるを得たり、燕の督亢の地圖を獻ず、圖窮まつて匕首見はる、秦王驚いて起ち、辛うじて刺さるゝことを免る、涇渭、二水の名、呂尙、太公望、烏集、烏の一寸集まるが如く、不意に出遇ひたるを言ふ、拘攣之語、君主を引入れ又は邪魔をする語、域外之議、普通の範圍外の意見と云ふが如し、帷裳、帷裳に侍する臣妾、鮑焦、周人なり、世の己れを用ひざるを怨み、蔬を道に采る、子貢曰く、其世を非として其蔬を采る、此れ焦の有する所ならんやと、焦其蔬を棄て木を抱いて洛水の上に死す、皁、牛馬の食器、

臣聞盛飾入朝者、不以利汚義、砥厲名號者、不以欲傷行、故縣

思欲開忠信輔人主之治、則人主必有按劍相眄之跡、是使布衣不得爲枯木朽株之資也、

【講義】 臣聞けることあり、明月の珠や夜光の璧は珍寶なれども、暗闇に往來にて人に投げつくるときは、多くの人は劍に手をかけ睨みつけざる者なしと、何となれば少しの因緣もなきに突然前に來るが故なり、蟠れる木の根が曲りて役に立たざるに拘はらず、萬乘の君の器物となるは、左右の者が之を取り繕つて紹介するが爲なり、故に因緣もなきに前に至れば、隋侯の珠や和氏の璧を差出したりとて、怨まれこそすれ、有難しとは思はれず、然るに何人か先きに吹聽し置くときは、枯れたる木、朽ちたる株にても、之れを差出せしことが功となりて忘れらるゝことなし、今天下の布衣を着て困窮する所の士は、其身の貧乏なる處より、堯、舜の術を笠に着て伊尹、管仲の辯を胸に持ち、龍逢、比干の如き忠義の心を抱き居るも、平素斯かる根柢に就て口入れをなしくるゝ者なき以上、精神を竭し當世の君に向ひ忠を逹せんことを思ふも、人君は前の暗夜に珠が飛び來れる場合と同じく、劍に手をかけ睨みつくるならん、是れ布衣の士が枯木朽株ほどの資料にもなれぬ原因なり、

【字解】 明月之珠夜光之璧、前に出づ、眄、にらみつくるなり、輪囷離詭、折曲つて八方に出張る貌、容、雕刻などをして修飾すること、

是以聖王制世御俗、獨化於陶鈞之上、而不牽於卑亂之語、不奪於衆多之口、故秦皇帝任中庶子蒙嘉之言、以信荊軻之說、而匕首竊發、周文王獵涇渭、載呂尙而歸、以王天下、故秦信左右而殺、周用烏集而王、何則以其能越攣拘之語、馳域外之議、

りしが、敢て後悔せざりき、又楚の於陵の子仲は三公の位を辭し、他人の爲に庭園に水を灌ぐことを業とせり、今人君が實際能く傲慢の心を棄てゝ、有功の士に報いんとする心を持ち、腹の底を打出して眞情を見し、肝膽を破り厚き恩德を施し、伸ぶるも縮まるも彼等と最後迄之を共にし、士に對して爵位俸祿を惜むが如き事なければ、桀の狗も堯を吠ゆること出來、盜跖の客も許由を刺し殺すことが出來得べし、況んや萬乘の權力ある上に聖王の資質あるに於てをや、然らば則ち荊軻が七族を亡ぼし要離が妻子を燒きたるも、豈に言ふに足らんや、

【字解】孫叔敖、楚の處士なりしが、虞丘相の薦を以て宰相となる、三たび相となりて喜ばず、其材自ら之を得るを知れば也、三たび相を罷められて悔いず、其己れの罪に非ざるを知れば也、於陵子仲、楚の賢士、楚王聘して相となさんとす、夫妻相共に逃れて人の爲に園に灌ぐ、由、許由、荊軻湛七族、荊軻秦王を刺さんとして成らず、七族之が爲に沈沒す、湛は溺なり、要離、呉王闔閭、王子慶忌を殺さんと欲す、要離曰く、王誠に臣を助けば臣請ふ必ず能くせんと、呉王之を許す、明旦罪を加へ、其妻子を執へ、焚いて其灰を揚ぐ、要離僞り逃れて慶忌の處に往き、遂に之を刺す、

臣聞明月之珠、夜光之璧、以闇投人於道路、人無不按劒相眄者、何則無因而至前也、蟠木根柢、輪囷離詭、而爲萬乘器者、何則以左右先爲之容也、故無因至前、雖出隋侯之珠、夜光之璧、猶結怨而不見德、故有人先談、則以枯木朽株樹功而不忘、今夫天下布衣窮居之士、身在貧賤、雖包堯舜之術、挾伊管之辯、懷龍逢比干之意、欲盡忠當世之君、而素無根柢之容、雖竭精

孕婦の如き不幸にして橫死したる者の墓を修め、其功業は天下を掩ふまでに偉大なり、何となれば人君が善を欲して厭かざればなり、夫れ晉の文公は其仇なる勃鞮を近づけし爲に禍ひを免れ、晉を强國として諸侯の霸たり、齊の桓公は其仇なる管仲を用ひ、一たび天下の亂を正したり、何故となれば慈仁懇切にして誠に中心より彼等の才能を好みし故にて、空言を以て利用すべきものに非ざるなり、彼の秦は商鞅の法を用ひたる結果、東方の諸侯なる韓魏の勢力を弱め、其兵をして天下の强兵たらしめしも、終に之を車裂の刑に處せり、越は大夫種の謀を用ひ、勁敵なる吳王夫差を擒として中國の霸者となりたれども、遂に其身を殺せり、

【字解】子之之心、燕王噲、其相子之を賢として之に燕王の位を禪りしかば、國内大に亂れたり、田常、田常は陳恆なり、齊の簡公之を悅ぶ、田常遂に簡公を弑す、孕婦、殷の紂王、孕婦の腹を割いて其胎を見る、晉文公、初め晉の獻公、宦官の勃鞮をして文公を蒲城に伐たしむ、文公垣を踰えて走る、勃鞮其袪を斬る、文公の晉に入るに及び、勃鞮公に見えんことを求む、公之を許せしに、彼れ呂甥、郤芮の二人が公を殺さんとするの企てあることを告ぐ、用其仇、管仲嘗て桓公を射る、公遂に之を用ひて相となす、大夫種、越王句踐、國を擧げて大夫種に屬す、吳を平ぐるに及び、或人種を讒す、王之に劍を賜ひ自殺せしむ、

是以孫叔敖三去相而不悔、於陵子仲辭三公爲人灌園、今人主誠能去驕慠之心、懷可報之意、披心腹見情素、墮肝膽施德厚、終與之窮達、無愛於士、則桀之狗可使吠堯、而蹠之客可使刺由、況因萬乘之權、假聖王之資乎、然則荊軻之湛七族、要離之燒妻子、豈足道哉、

【講義】之がため楚の孫叔敖は三たび宰相の位を去

の二國の形勢は危險に陥れり、何となれば、多數の口を以て惡言するときは金の如き堅き物を消耗し、讒謗が積り積るときは骨肉も之れが爲に磨滅するを以てなり、之が爲に秦は戎の人由余を用ひて中山の霸者となり、齊は越人蒙を用ひて威王、宣王の二代は强盛なりき、此の二个國は何として俗習に拘はり、世情に牽かされ、黨派的の辭に束縛せられんや、故に雙方の意が合するときは、胡越の人も兄弟となる、由余、越人蒙の如きは卽ち其れなり、意が合はざるときは、骨肉も仇敵となる、朱や象や管叔や蔡叔が卽ち其れなり、今人君が能く由余を用ひ越人蒙を用ひたる齊秦の明察を用ひ、孔子や墨子を逐ひ出したる宋魯の偏聽を無にするときは、五霸も肩を竝ぶるに足らず、三王の業も爲すに難からず、

【字解】　逐孔子、季桓子、齊より贈る所の女樂を受けて孔子を疎んじ、政に怠りしかば、孔子遂に去る、子罕之計、未だ審ならず、衆口云々、前に出づ、威宣、齊の威王、宣王、阿偏、阿諛偏私、胡越、胡は極北に在り、越は極南に在り、朱象管蔡、堯の子丹朱、舜の弟象、周公の弟管叔、蔡叔、

是以聖王覺寤、捐子之之心、而能不說於田常之賢、封比干之後、修孕婦之墓、故功業復就於天下、何則欲善無厭也、夫晉文公親其讎、彊霸諸侯、齊桓公用其仇、而一匡天下、何則慈仁慇勤、誠加於心、不可以虛辭借也、至夫秦用商鞅之法、東弱韓魏、兵彊天下、而卒車裂之、越用大夫種之謀、禽勁吳、霸中國、而卒誅其身、

【講義】　之がため聖君は臣下を用ふる道を悟り、子之を愛する心を棄て、田常の如き表面的の賢者を悦ぶことなく、比干の如き忠臣の子孫を諸侯に取立て、

め申徒狄は諫めて聽かれざるより自ら河中に投じ、徐衍は石を背に負ひ海中に身を投じたり、縱令自分の身が世に容れられずとも、義を守りて苟くも機嫌を取り朝廷の上に仲間を作り君主の心を動かすが如きことを爲さゞりき、故に百里奚は食を路に乞ひしも秦の繆公は之に政事を委ね、甯戚は牛に車下に飯飮せしめしも齊の桓公は授くるに國政を以てせり、此二人は何如にして朝廷の官吏となり聲譽を左右の人に求めて後に繆公桓が重用せしものならんや、君臣、心に感じ行ひに合ひ、親み膠漆よりも堅く兄弟も離す能はざれば、何として衆人の口に惑はんや、

【字解】司馬喜、六國の人、臏脚、足を削る、范雎、本傳に詳なり、申徒狄、殷末の人、徐衍、周末の人、比周、徒黨、百里奚、前に出づ、甯戚、衞の人、昆弟、兄弟

故偏聽生姦、獨任成亂、昔者魯聽季孫之說而逐孔子、宋信子罕之計而囚墨翟、夫以孔墨之辯、不能自免於讒諛、而二國以危、何則衆口鑠金、積毀銷骨也、是以秦用戎人由余而霸中國、齊用越人蒙而彊威宣、此二國豈拘於俗、牽於世、繫阿偏之辭哉、公聽並觀、垂名當世、故意合、則胡越爲昆弟、由余越人蒙是矣、不合、則骨肉出逐不收、朱象管蔡是矣、今人主誠能用齊秦之義、後宋魯之聽、則五伯不足稱、三王易爲也、

【講義】故に一方の說を聽くときは姦計を生じ、一人のみに委任するときは亂起る、昔し魯の君は季孫子の說を聽いて孔子を逐ひ、宋の君は子罕の計を信じて墨翟を囚へたることあり、夫れ孔子、墨翟の辯舌を以てすらも尙讒言を免るゝこと出來ず、其結果、此

珍味を饗して敬意を表せり、白圭は中山を拔取りしため顯榮の身分となりしに、或人之を魏の文侯に讒言せしに、文侯は反つて白圭に夜光の玉を賜はりしことあり、何故となれば、燕魏の兩君主と蘇秦、白圭の二臣とは心を打明けて相信ずる間柄なるより、何として無根の語に動かされんや、

【字解】 駃騠、北狄の駿馬なり、顯於中山、中山を拔いて著名なりしことを謂ふ、剖心拆肝、剖はサク、拆もサクなり、腹の底を立割ると云ふこと、

故女無美惡、入宮見妬、士無賢不肖、入朝見嫉、昔者司馬喜臏腳於宋、卒相中山、范睢摺脅折齒於魏、卒爲應侯、此二人者、皆信必然之畫、捐朋黨之私、挾孤獨之位、故不能自免於嫉妬之人也、是以申徒狄自沈於河、徐衍負石入海、不容於世、義不苟取比周於朝、以移主上之心、故百里奚乞食於路、繆公委之以政、甯戚飯牛車下、而桓公任之以國、此二人者、豈借宦於朝、假譽於左右、然後二主用之哉、感於心、合於行、親於膠漆、昆弟不能離、豈惑於衆口哉、

【講義】 故に女子は美人醜婦の別なく宮中に入れば妬まるゝ者なり、士は賢と不肖との別なく朝廷に入れば憎まるゝ者なり、昔し司馬喜は宋に於て足を削られしが卒に中山の相となり、范睢は魏に於て肋骨を挫かれしが卒に秦の應侯となれり、此二人は何れも自分の計畫の必ず然るべきことを信じ、朋黨の私心を取除き、交際上の孤獨の地位を持ち居りしが故に、自然他人の嫉妬を免るゝこと能はざりしなり、之がた

とが舊いと云ふ次第に非ず、然るに齊や秦を去つて燕の君の爲に魏の君の爲に命を棄てたる所以は、二君の行ひが己れの心に叶ひ、其義を慕ふ心限りなかりし爲に外ならず、此の如き理由を以て、蘇秦は天下に對し不信の人なりしも、燕に對して尾生に比すべき信ありしなり、白圭は戰ひて六箇所の城を敵に取られしも、魏の爲には中山を取れり、是れ何故なりやと云ふに、誠に相知る所ありしを以てなり、

【字解】卞和、楚人卞和と云ふ者璞玉を得て之を武王に獻ず、玉人とて玉細工をなす者之を觀て石なりと曰ふ、因つて卞和の左足を刖る、文王位に卽くに及び、復之を獻ず、玉人又石なりと曰ふ、因て其右足を刖る、成王の時、卞和璞を抱いて哭す、乃ち玉人をして之を治めしめたるに果して寶玉を得たり、極刑、五刑を具ふること、接輿、楚の賢人、比干、紂王を極諫す、紂怒つて曰く、吾れ聞く聖人の胸に七つの穴ありと、遂に剖いて之を觀る、傾蓋、蓋は車の上の傘の如き者、一寸途中にて出遇ひながら車を停めて親しく談話を交換し、兩方の蓋が交叉して少しく横向きになるを謂ふ、樊於期、於期は秦の將なり、讒せられて燕に出奔す、始皇其族を滅し、又賞を懸けて其首を求む、荊軻秦に入らんとするや、秦王に取入る手段として於期の首を携へ往かんことを請ふ、於期自殺して其志を成す、王奢、齊の臣にして魏に出奔す、後に齊より魏を伐つ、奢城に登り齊將に謂つて曰く、今君の來るは奢の故を以てするに過ぎず、我に於て生を偸み以て魏の累をなさずと、遂に自剄す、尾生、古への信を守りて身を忘れし人、白圭、中山の將となり、戰つて六城を失ふ、中山の君之を殺さんとせしかば逃げて魏に入る、文公厚く之を遇す、還つて中山を拔く、

蘇秦相燕、燕人惡之於王、王按劍而怒、食以駃騠、白圭顯於中山、中山人惡之魏文侯、文侯投之以夜光之璧、何則兩主二臣、剖心拆肝相信、豈移於浮辭哉、

【講義】蘇秦は燕の宰相たりし時或人燕王に讒言に及びし處、燕王は劍に手を掛けて怒り、蘇秦に駃騠の

少加憐焉、諺曰、有白頭如新、傾蓋如故、何則知與不知也、故昔樊於期逃秦之燕、藉荊軻首、以奉丹之事、王奢去齊之魏、臨城自剄、以却齊而存魏、夫王奢樊於期、非新於齊秦、而故於燕魏也、所以去二國死兩君者、行合於志、而慕義無窮也、是以蘇秦不信於天下、而爲燕尾生、白圭戰亡六城、爲魏取中山、何則誠有以相知也、

【講義】昔し卞和は寶玉を楚王に獻ぜし處、楚王は其足を切つて處刑せしことあり、李斯は秦に忠を盡せし處、二世皇帝胡亥は之を極刑に付したることあり、此の如き次第を以て殷の箕子は僞つて狂人となり、楚の接輿も世を避けたるが、是れ此の如き禍に逢はんことを恐れたるが故なり、何卒大王に於ては卞和や李斯の如き誠あり忠ある者の心を察し給ひ、楚王や胡亥の如き誤れる解釋を斥け給ひ、臣が箕子や接輿の爲に笑はれぬやう爲し下されたし、臣は比干が胸を切り割られ、子胥が馬の革に包まれて川の中に投げ込まれたることを聞き、初めは信ぜざりしも今に至つて其實なることを知れり、願はくは大王篤と御察しの上少しく憐みを垂れ給へ、古語に白髮になるまで互ひに遇つて居りながら新規の人と同樣なる者あり、又途中に始めて出遇ひし者にも舊なじみと同樣の者ありと云へり、何故に斯く舊交に拘はらず冷淡にして新知の人に拘はらず打解くるかと云ふに、一は心を知り一は心を知らぬ爲なり、故に樊於期は秦を脫走して燕に赴き、荊軻に自分の首を假し與へて太子丹の企てに供し、王奢は齊を立去つて魏に往き、城壁に乘りかゝりて自ら首を刎ね、それがため齊の兵を退けて魏を保全せり、夫れ王奢と樊於期とは齊や秦に居ることが新らしくして燕や魏に居るこ

卒從吏訊、爲世所疑、是使荊軻衞先生復起、而燕秦不悟也、願大王孰察之、

【講義】臣の承はりしには、忠を盡す者は君より報ぜざるなく、信を守る者は人より疑はれずとのことなり、臣は平生其通りなりと考へ居りたる處、實際に由れば此の言たる虛言に過ぎず、昔し荊軻は燕の太子丹が義を好むことを慕ひ、彼れの爲に秦の始皇を刺さんとして出立の際、白き虹が太陽を貫いて成功の前兆を示したれども、太子は尙も失敗せんかと之を畏れぬ、衞先生は秦の爲に長平の戰ひに關する計畫を立て、其れがため太白星が昴星を蝕して吉兆が見えたるにも拘はらず、秦の昭王は尙之を疑へり、夫れ精誠が天地の現象を變ずる程なるも、荊軻、衞先生の信義は燕秦兩君の心に通ぜざりしは何んと哀むべきことに非ずや、今臣は飽くまで忠誠を盡し、有らん限りの意見を吐き、大王の御認識に與りたしと思ひたるに、大王の左右に侍する近臣等の不明なる所より獄吏の糺問を受くる身となり、世の中より疑ひを被りつゝある次第、是れ荊軻、衞先生を再び生き返らすも、燕の太子丹と秦の昭王は悟りかぬると云ふ場合なり、何卒大王に於ては篤と察し給はんことを、

【字解】荊軻、軻、燕の太子丹の爲に往いて秦王を刺さんとす、其至誠天地を感じ、白色の虹太陽の面を貫く、白色の虹は兵の象、日は君の象、太白蝕昴、昴は星の名、天文區畫に於て趙の範圍に屬す、太白星は天の將軍、蝕とは突過すること、畢議願知、其意見を徹底し、王に知られんことを願ふを言ふ、吏訊、獄吏の訊問、

昔卞和獻寶、楚王刖之、李斯竭忠、胡亥極刑、是以箕子佯狂、接輿辟世、恐遭此患也、願大王孰察卞和李斯之意、而後楚王胡亥之聽、無使臣爲箕子接輿所笑、臣聞比干剖心、子胥鴟夷、臣始不信、乃今知之、願大王孰察、

ば、空しく誅せらるゝの恐れあり、又齊に降らんとすれば、是れまでの戰ひに齊の兵を執へ又は殺したること夥しければ、降參するも辱めらるゝの恐れあり、是に於て喟然として嘆ずらく、人に刄を以て殺さるるよりも寧ろ自殺する方が勝れりと、因つて自殺せしかば、聊城は主將を失ひ散々に亂れたり、田單は遂に聊城を屠り、歸國の上、魯連の功を申立てゝ之に爵を授けんとせしに、魯仲連は逃れて海上に隱れて曰く、吾れ富貴にして人に屈せんよりは、寧ろ貧賤にして世を輕んじ志のまゝに振舞はんと、

【字解】 言魯連、田單が魯連の書を燕の將に遺りたることを言ひしなり、

○鄒陽者齊人也、游於梁、與故吳人莊忌夫子、淮陰枚生之徒交、上書、而介於羊勝公孫詭之間、勝等嫉鄒陽、惡之梁孝王、孝王怒下之吏、將欲殺之、鄒陽客游、以讒見禽、恐死而負累、乃從獄中上書曰、

【講義】 鄒陽は齊國の人なり、梁に遊歷し、故の吳人莊忌字は夫子、淮陰の枚生の徒と交際し、上書して羊勝、公孫詭の間に立ちしが、勝等は鄒陽を憎み之を梁の孝王に惡しく言ひなしければ、孝王は怒つて、之を獄吏に付して將に殺さんとせり、鄒陽は他國に來り讒言を以て捕へられ死後まで惡名を負はんことを恐れしかば、乃ち獄中より上書して左の如く言へり、

臣聞忠無不報、信不見疑、臣常以爲然、徒虛語耳、昔者荊軻慕燕丹之義、白虹貫日、太子畏之、衛先生爲秦畫長平之事、太白蝕昴而昭王疑之、夫精變天地而信不喩兩主、豈不哀哉、今臣盡忠竭誠、畢議願知、左右不明、

三王爭流、而名與天壤相弊也、願公擇一而行之、

【講義】 曹子は魯の將となり、三たび戰つて三たび敗走に及び、之が爲に五百里の版圖を失ひしが、先きに曹子をして後々の事を考へず、踵を還して一旦引上ぐることを思はずして自ら頸を刎ねて死せしめしならば、彼れは敗軍して敵に打捕られたる汚名を免れざりしならん、然るに曹子は三度敗北の恥を棄て、退いて魯君と計り、其後桓公が天下の諸侯を參朝會合せしめたる時、曹子は一劍の力を以て壇上に桓公の胸に差宛て、顏色も變ぜず、語息遑ひも違ふことなく、三度の敗北にて失ひし土地をば一朝にして取戻し、天下を震動し諸侯を驚かし、其威は呉越に加はれり、此の二人の如きは、小さなる廉恥を遂げ小さなる節義を行ふ能はざりしには非ず、身を殺し支體を亡し、家系を絕し子孫を滅し、功名の立たざるは智に非ずと思ひたればなり、故に亢奮的の怒を去り終身の名を立て、忌々しく思ふ意氣地を棄て累世の功を定めたり、是を以て業は三王と共に傳はり、名は天地と久しく續くこととなれり、何卒公は之を擇ばれよと、

【字解】 曹子、魯の曹昧、任、猶力と謂ふが如し、枝、擬と同じ、壇坫、壇なり、

燕將見魯連書、泣三日、猶預不能自決、欲歸燕、已有隙、恐誅、欲降齊、所殺虜於齊甚衆、恐已降而後見辱、喟然歎曰、與人刃我、寧自刃、乃自殺、聊城亂、田單遂屠聊城、歸而言魯連、欲爵之、魯連逃隱於海上、曰、吾與富貴而詘於人、寧貧賤而輕世肆志焉、

【講義】 聊城を守れる燕の將軍は魯仲連の矢文を覩て其議論に感激し、泣くこと三日に及びけれども、己れの取るべき態度に就き彼れ此れ惑ひて自ら決斷する能はず、武器兵士を全くして本國の燕に歸らんとすれば、已に讒言の爲に燕王との仲を隔てられたれ

たるは簒奪の所行なり、公子糾を見殺しにして死すること能はざりしは臆病の心なり、捕縛せられて手かせ足かせを掛けられたるは不名譽なり、此の三箇條の行ひの如きは世の人君も臣下とするを好まざる所、鄕里も交際することを厭ふ所なり、先に管子をして幽囚せられたる儘にて出づることなく、其身死して齊に反らざらしむれば、不名譽の人、賤むべき行ひと云はるゝことを免れずして、奴婢と雖も亦彼れと名を齊しうすることを恥づべし、況んや世間普通の人をや、故に管子は其身繩目の恥を受けつゝあるを恥ぢずして天下の治まらざるを恥ぢ、公子糾の爲に死せずして、威の諸侯に伸びざるを恥ぢたり、故に其行ひは三个條の過を兼ねたるに五霸の首となり、名は列國に高く、光りは鄕國を照せり、

【字解】規、ハカルと訓ず、桎梏、手かせ足かせ、遺、スツル、鄕、嚮に同じ、臧獲、荊淮海岱燕齊の間に於ては奴を罵りて臧と曰ひ、婢を罵りて獲と曰ふ、縲紲、仲尼弟子列傳に出づ、燭、テラスと訓ず、

曹子爲魯將、三戰三北而亡地

五百里、鄕使曹子計不反顧、議不還踵、刎頸而死、則亦名不免爲敗軍禽將矣、曹子棄三北之恥、而退與魯君計、桓公朝天下、會諸侯、曹子以一劍之任、枝桓公之心於壇坫之上、顏色不變、辭氣不悖、三戰之所亡、一朝而復之、天下震動、諸侯驚駭、威加吳越、若此二士者、非不能成小廉而行小節也、以爲殺身亡軀、絕世滅後、功名不立、非智也、故去感忿之怨、立終身之名、棄忿悁之節、定累世之功、是以業與

社會に吹聽し、功業を顯はすことを得ん、斯くして上は孤立の君を扶けて群臣を制し、下は百姓を養つて游說の士を補助し、國政を矯正し風俗を改革するときは功名を立て得るなり、若し又功名を立つるの意志なきならば、燕を見離し世の中を棄て東の方齊に游ばれんか、齊にては土地を裂き所領を定め、其富は陶衞に竝び、世々孤と稱し、齊と永久に存在するも亦一計なり、此の二つの計は名を顯はして實を厚うする仕方なれば、何卒公には篤と打算して明白に此の中の一に處せられよ、

【字解】墨翟之守、墨翟は宋の人、宋の爲に城を守り楚軍を拒ぐ、公輸班と云ふ者雲梯を作りて攻めたる處、墨翟能く之を拒げり、孫臏之兵、孫臏よく士卒を撫し、士卒二心を抱く者なし、亡意、亡は無なり、陶衞、陶朱公と衞の公子荊、

且吾聞之、規小節者、不能成榮名、惡小恥者、不能立大功、昔者管夷吾射桓公中其鉤、簒也、遺公子糾不能死、怯也、束縛桎梏、辱也、若此三行者、世主不臣、而鄉里不通、鄉使管子幽囚而不出、身死而不反於齊、則亦名不免爲辱人賤行矣、臧獲且羞與之同名矣、況世俗乎、故管子不恥身在縲紲之中、而恥天下之不治、不恥不死公子糾、而恥威之不信於諸侯、故兼三行之過、而爲五霸首、名高天下、而光燭鄰國、

【講義】且つ吾れ之を聞く、小節を見積る者は榮名を成す能はず、小恥を惡む者は大功を立つる能はずと、昔し管夷吾は齊の桓公を射て其帶の止金に中て

以萬乘之國、被圍於趙、壤削主困、爲天下僇笑、國敝而禍多、民無所歸心、今公又以敝聊之民、距全齊之兵、是墨翟之守也、食人炊骨、士無反外之心、是孫臏之兵也、能見於天下、雖然爲公計者、不如全車甲、以報於燕、車甲全而歸燕、燕王必喜、身全而歸於國、士民如見父母、交游攘臂而議於世、功業可明、上輔孤主以制羣臣、下養百姓以資說士、矯國更俗、功名可立也、亡意亦捐燕弃世、東游於齊乎、裂地定封、富比乎陶衞、世世稱孤、與齊久存、又一計也、此兩計者、顯名厚實也、願公詳計而審處一焉、

【講義】　且つ燕國は大に亂れ、君臣共に其計當を得ず、上下心惑ひて爲す所を知らず、栗腹は十萬の大軍を率ゐて五たびも征伐に失敗し、萬乘の大國を以て趙の圍みを受け、土地は削られ君は困められ、天下の物笑ひとなり、國は敝れ禍ひは多く、民の心を歸する所なし、今公が又疲敝せる聊城の民を以て齊國全體の兵を拒むは、是れ昔しの墨翟の籠城なり、糧食盡きて人の肉を食ひ人の骨を燃料となすに至りても士に離反の心なきは、是れ孫臏の兵なり、其智能は天下に名高し、然りと雖も公の爲に計るときは、車や鎧を全うして無事に引上げ、燕に復命するが上策なり、車や鎧を全うして燕に歸らば、燕王は喜ばるゝに相違なし、身を全うして本國に歸りなば、士民は父母に逢ふが如き思ひをなすべく、交遊の士は腕まくりをして

せられざるは智に非ざるなり、此の三者は、累代の君主も之を臣とせず、説客も之を口に擧げず、故に智者は二度と考ふることなく、勇士は死を畏れず、今死生なり榮辱なり貴賤なり尊卑なりの分るゝ所にして、此の機會は再び至らず、願はくは公に於て篤と思案あつて、俗人と同一なる態度に出で給ふ勿れ、

且楚攻齊之南陽、魏攻平陸、而齊無南面之心、以爲亡南陽之害小、不如得濟北之利大、故定計審處之、今秦人下兵、魏不敢東面、衡秦之勢成、楚國之形危、齊弃南陽、斷右壤、定濟北、計猶且爲之也、且夫齊之必決於聊城、公勿再計、今楚魏交退於齊、而燕救不至、以全齊之兵、無天下之規、與聊城共據期年之敝、則臣見公之不能得也、

【講義】且つ楚は齊の南陽を攻め、魏は平陸を攻むれども、齊に於ては南面して楚魏を攻むるの心なく、南陽を失ふの害は小く濟北を得るの利は大なれば、寧ろ南陽を失ふとも、是非に濟北を得んと欲し、之が爲に計を定めて之に處すべき方法を審かにせり、今秦は兵を下し、魏は敢て東面して攻め來らず、秦と齊との連衡成る時は楚國の形勢危し、齊は南陽を棄て、右壤を斷ち、濟北を定むるの計をなすなり、且つ齊は必ず聊城を恢復せんと欲するなれば、公は再び思案する勿れ、今や楚と魏と交〻齊より退けられて、燕の援兵は至らず、齊全國の兵を以て聊城を攻め、天下の之を差止むるものなく、聊城に一个年も立籠り疲弊するに於ては、公が目的を達する能はざるを知る、

且燕國大亂、君臣失計、上下迷惑、栗腹以十萬之衆、五折於外、

を受くるが如きは商賣人の事にして、拙者は爲すに忍びざるなりと、遂に平原君を辭して去り、終身復たと面會せざりき、

其後二十餘年、燕將攻下聊城、聊城人或讒之燕、燕將懼誅、因保守聊城、不敢歸、齊田單攻聊城歲餘、士卒多死、而聊城不下、魯連乃爲書、約之矢、以射城中、遺燕將、書曰、吾聞之、智者不倍時而弃利、勇士不怯死而滅名、忠臣不先身而後君、今公行一朝之忿、不顧燕王之無臣、非忠也、殺身亡聊城、而威不信於齊、非勇也、功敗名滅、後世無稱焉、非智也、三者世主不臣、說士不載、故智者不再計、勇士不怯死、今死生榮辱、貴賤尊卑、此時不再至、願公詳計而無與俗同、

【講義】其後二十餘年を經て燕より齊を攻め來り、燕の將軍は聊城を下しけるに、聊城の人彼れを本國の燕に讒言しければ、燕の將は誅せられんことを恐れ、其まゝ聊城を守つて敢て本國に歸らず、齊の將田單一个年餘もかゝりて聊城を攻めたれども、士卒多く討死するのみにて聊城を下す能はず、魯仲連乃ち書簡を作り、之を矢に結び附けて城中に射込み、燕の將の手許に屆くやうになしゝが、其書面に云ふ、吾れ之を聞く、智者は時勢に背いて利を失ふことをせず、勇士は死を畏れて名譽を滅ぼすことをせず、忠臣は身を先にして君を後にせずと、今公一朝の忿りに乘じて燕王の臣なきことを顧みざるは忠に非ざるなり、己が身を殺し聊城を亡して、齊に威力の伸びざるは勇に非ざるなり、功は敗れ名は滅び、後世より稱

帝となさんと欲するは、是れ三晉の大臣をして鄒魯の僕妾にも若かざらしむるものなり、其上秦が結局帝とならんには、諸侯の大臣を更迭するに相違なし、愈〻諸侯の大臣を更迭することとならば、彼れは其不肖とする所の者の官職を奪つて之を賢とする所の者に與へ、其憎む所の者の官職を奪つて之を其愛する所の者に與ふべし、彼れは其上其子女婢妾をして諸侯の妃とし梁の宮中に處らしめば、梁王は何とて晏然として心安きことを得んや、將軍も又何を以て以前の如き寵幸を得んやと、是に於て新垣衍は起立して再拜の禮を行ひ謝して云ふやう、拙者は初め先生を以て通常の人と思ひしが、今日始めて先生が天下の士たることを知る、余は此の國を出でて立去るべし、敢て復び秦を帝とすることを申すまじと、秦の將軍は之を聞き、五十里ほど軍を引退きぬ、

適會魏公子無忌奪晉鄙軍以救趙撃秦軍、秦軍遂引而去、於是平原君欲封魯連、魯連辭讓、使者三、終不肯受、平原君乃置酒、酒酣、起前以千金爲魯連壽、魯連笑曰、所貴於天下之士者、爲人排患釋難、解紛亂、而無取也、卽有取者、是商賈之事也、而連不忍爲也、遂辭平原君而去、終身不復見、

【講義】此の折丁度幸にも魏の公子無忌が晉鄙の軍を奪ひ、趙を救ひて秦の軍を撃ちしかば、秦の軍は遂に引去れり、是に於て平原君は魯仲連を封ぜんとせしも、魯仲連は辭讓し、使者三たびも至りけれど遂に受くることを承知せず、平原君は乃ち酒宴を開き、酒酣なるとき起つて魯仲連の前に進み出で、千金を以て彼れの祝儀をなしゝ處、魯仲連笑つて曰く、謂はゆる天下の士に貴ぶ所以は、人の爲に患を除き難を解き紛亂を治めて何等の謝禮を取らざるに在り、謝禮

け、斯くして天子は南面して弔せらるゝ禮なれば、其通りに取料らはられよと、鄒の群臣曰く、是非とも斯くせざるを得ざるとならば、吾れ將に劍に伏して死せんとすと、終に齊の湣王を鄒に入れざりき、鄒魯の臣、君在世の間は事へ養ふと能はず、君卒去せらるるも賻襚を行ふと能はず、臣下の道を知らざれども、齊が己れの君に對して天子の禮を行はせんとするや、何如に鄒魯の臣と雖も齊君を入れ切れざりき、

【字解】十太牢、太牢は牛羊豕の三者を具へたる饗應、諸侯辟舍、辟は避なり、諸侯己が正寢を避けて天子を迎ふるなり、筦籥、鍵なり、攝衽、衣襟を繕ふなり、賻襚、貨財を賻と謂ふ、襚は衣服なり、皆生を助け死を送るの禮、

今秦萬乘之國也、梁亦萬乘之國也、俱據萬乘之國、各有稱王之名、睹其一戰而勝、欲從而帝之、是使三晉之大臣、不如鄒魯之僕妾也、且秦無已而帝、則且變易諸侯之大臣、彼將奪其所不肖、而與其所賢、奪其所憎、而與其所愛、彼又將使其子女讒妾爲諸侯妃姬、處梁之宮、梁王安得晏然而已乎、而將軍又何以得故寵乎、於是新垣衍起再拜謝曰、始以先生爲庸人、吾乃今日知先生爲天下之士也、吾請出、不敢復言帝秦、秦將聞之、爲却軍五十里、

【講義】今秦は萬乘の國なり、梁も亦萬乘の國なり、雙方ともに萬乘の國に據り、各、王と稱するの名あり、然るに其僅かに一度勝ちたるを見て、直ちに秦を

而從、謂魯人曰、子將何以待吾君、魯人曰、吾將以十太牢待子之君、夷維子曰、子安取禮而來吾君、彼吾君者天子也、天子巡狩、諸侯辟舍、納筦籥、攝衽抱机、視膳於堂下、天子已食、乃退而聽朝也、魯人投其籥、不果納、不得入於魯、將之薛、假途於鄒、當是時、鄒君死、湣王欲入弔、夷維子謂鄒之孤曰、天子弔、主人必將倍殯棺、設北面於南方、然後天子南面弔也、鄒之羣臣曰、必若此、吾將伏劍而死、固不敢入於鄒、鄒魯之臣、生則不得事養、死則不得賻襚、然且欲行天子之禮於鄒魯、鄒魯之臣不果納、

【講義】齊の湣王が魯に赴かんとせし時、夷維子と云ふ者鞭を手に持ちて之に從へり、魯國の人に謂ふやう、公等は何を以て吾が君を饗せんとするか、魯人云ふ、吾れは十の太牢を以て御身の君を饗すべしと、夷維子曰く、公等は何處に禮を取つて吾が君を迎ふるか、吾が君は帝と稱して天子なり、天子が巡狩せらるゝときは、諸侯は表座敷を避け、府庫の鍵を納れ、衣服の衽を整へ机を抱き、自ら堂下に在りて天子に上るべき御膳の世話をなし、天子已に食し給へば、退いて朝に臨み政を聽くなりと、魯人は之を聞き、門の鍵を地に投じて齊君を入れざりき、湣王は次に薛に往かんとし道を鄒に假りけるが、此の時鄒君は已に死せし折なりしかば、湣王は入りて弔せんとす、夷維子は鄒の嗣君に告ぐるやう、天子弔し給ふときは、主人たるもの必ず棺側を離れ、北面の位を南方に設

噫、亦太甚矣、先生之言也、先生又惡能使秦王烹醢梁王、

【講義】新垣衍曰く、先生は彼の僕を見給はずや、十人の僕が一人の主人に從ふは、何として力が叶はず智が及ばざる爲ならんや、主人たるに因つて之を畏るゝなりと、魯仲連曰く、さても梁を秦に比すれば僕の如きものかと、新垣衍は然りと答ふ、魯仲連曰く、自分は秦王をして梁王を烹殺さしめんとすと、新垣衍は快然と不快の面持をなして云ふ、先生の言は餘りに極端なり、先生は何とて秦王に我が梁王を烹殺さしむることと出來申すべきと、

魯仲連曰、固也、吾將言之、昔者九侯鄂侯文王紂之三公也、九侯有子而好、獻之於紂、紂以爲惡、醢九侯、鄂侯爭之彊、辯之疾、故脯鄂侯、文王聞之、喟然而歎、故拘之羑里之庫百日、欲令之死、曷爲與人倶稱王、卒就脯醢之地、

【講義】魯仲連曰く、無論なり、吾れ此れより其理由を申すべし、昔し九侯、鄂侯、文王の三人は殷の紂王に事へて三公の位に在り、九侯に一人の娘ありて美貌なりしかば之を紂王に獻ぜし處、紂王は醜しとて九侯を鹽びしほとせり、鄂侯は手強く之を諫め早口を以て辯論せしかば、紂は之を干肉とせり、文王は此事を聞き打ちなげきて嘆息せしかば、羑里の庫中に押込むること百日、之をして死せしめんとせり、曷ぞ人と共に王と稱して鹽びしほとなり干肉となるが如き地位に就くを爲すことあらんや、

【字解】脯醢、人肉を干し固めたるものを脯と曰ひ、鹽びしほを醢と曰ふ、與人倶稱王、秦も王なり、梁も亦王なり、

齊湣王將之魯、夷維子爲執策

笑、故生則朝周、死則叱之、誠不忍其求也、彼天子固然、其無足怪、

【講義】 新垣衍問うて云ふ、先生は趙を助くと申さるゝが、何如にして助くる思召しなるかと、魯仲連云ふ、自分は梁及び燕をして趙を助けしむる心算なるが、其上齊楚は無論之を助くるなるべしと、新垣衍云ふ、燕は拙者も御同意なれど、梁の方は、拙者こそ梁人なれば、梁が趙を助くるか助けざるか、先生よりも善く承知せり、先生には何とて梁をして趙を助けしめ給ふことが出來申すべきと、魯仲連云ふ、梁は未だ秦が帝と稱するの害を見ざるが故に趙を助けんとなさゞるなり、梁をして秦が帝と稱するの害を見しめば趙を助くるに相違なしと、新垣衍云ふ、秦が帝と稱するの害は何如と、魯仲連曰く、昔し齊の威王は曾て仁義を行ひ、天下の諸侯を率ゐて周に朝せり、此の時周は貧しく且つ微弱なりしかば諸侯朝するものなきに、齊のみ之に朝せしなり、其れより一个年餘を過ぎて周の烈王崩御あり、齊は往いて弔すること遲かりしかば、周は怒つて齊に申し遣しけるは、天崩れ地坼け、天子が席を下つて喪に籠らるゝに、東方の臣たる因齊が後れて至るは不埒なり、之を斬らんと、威王は勃然として怒つて曰く、こりや、汝の母は婢なりと、終に天下の笑草となれり、故に烈王が生きて居る間は參朝し、死すれば之を叱せしは誠に周王の求めに忍びざりしなり、彼の天子すら此の如し、秦が若し帝とならば、其求めの飽くなきことは固より怪しむに足るなしと、

【字解】 因齊、威王の名、

新垣衍曰、先生獨不見夫僕乎、十人而從一人者、寧力不勝、而智不若邪、畏之也、魯仲連曰、嗚呼、梁之比於秦若僕邪、新垣衍曰、然、魯仲連曰、吾將使秦王烹醢梁王、新垣衍怏然不悦曰、噫

圍まれて城中に在る人々を見るに、何れも何か平原君に求むる所ある者なり、然るに今吾れ先生の樣子を見る處、平原君に求むる所ある者とも見えず、何故に此の城中に滯留あつて久しく去り給はざるにやと、魯仲連曰く、世人は鮑焦をば周章して死せしと云ふも誤れり、衆人は彼れを知らずして自己一身の爲に死したりと思へり、彼の秦と云ふ國は禮義を棄て敵の首を取ることを尊ぶ國なり、其士は詐を以て之を使ひ、其民は捕虜として之を使ふ、斯く鄙むべく惡むべき國なるに、其志を逞しうして帝となり、政を天下に爲さば、吾れは東海を踏んで死する外なし、秦の民たるに忍びざるなり、吾が將軍に拜顔したる理由は趙を助けんと欲するが爲なりと、

【字解】 鮑焦、周の時の隱者なり、從頌、從容なり、衆人不知、彼れは高尚にも當時の世道人心を矯正せんとしたりしを、衆人知らず、所爲、所以と同じ、

新垣衍曰、先生助之將奈何、魯連曰、吾將使梁及燕助之、齊楚則固助之矣、新垣衍曰、燕則吾請以從矣、若乃梁者、則吾乃梁人也、先生惡能使梁助之、魯連曰、梁未睹秦稱帝之害故耳、使梁睹秦稱帝之害、則必助趙矣、新垣衍曰、秦稱帝之害何如、魯連曰、昔者齊威王嘗爲仁義矣、率天下諸侯而朝周、周貧且微、諸侯莫朝、而齊獨朝之、居歲餘、周烈王崩、齊後往、周怒赴於齊曰、天崩地坼、天子下席、東藩之臣因齊後至、則斮、齊威王勃然怒曰、叱嗟而母婢也、卒爲天下

魯仲連先生者、今其人在此、勝請爲紹介、交之於將軍、新垣衍曰、吾聞魯仲連先生齊國之高士也、衍人臣也、使事有職、吾不願見魯仲連先生、平原君曰、勝既已泄之矣、新垣衍許諾、魯連見新垣衍而無言、新垣衍曰、吾視居此圍城之中者、皆有求於平原君者也、今吾觀先生之玉貌、非有求於平原君者也、曷爲久居此圍城之中而不去、魯仲連曰、世以鮑焦爲無從頌而死者皆非也、衆人不知、則爲一身、彼秦者、弃禮義而上首功之國也、權使其士、虜使其民、彼卽肆然而爲帝、過而爲政於天下、則連有蹈東海而死耳、吾不忍爲之民也、所爲見將軍者、欲以助趙也、

【講義】　平原君は其の結果新垣衍に面會して云ふやう、東國に魯仲連先生と申す人あり、今其人は此地に在り、拙者は媒介者となりて彼れを將軍に引合せ申したしと、新垣衍は之を辭して曰く、吾れ聞く魯仲連先生は齊の高士なる由、拙者は人に仕ふる身分にて、使節の役目あれば、魯仲連先生に面會することは願はしからずと、平原君は、拙者已に彼れに向つて君の使命と紹介すべき事とを泄したれば、是非とも面會ありたしと、新垣衍も最早辭するに由なくして許諾せり、斯くて魯仲連は新垣衍と面會せしも無言にてありき、新垣衍先づ口を開いて云ひけるは、吾れ此の

に仕へて將軍となる、

此時魯仲連適游趙、會秦圍趙、聞魏將欲令趙尊秦爲帝、乃見平原君曰、事將奈何、平原君曰、勝也何敢言事、前亡四十萬之衆於外、今又內圍邯鄲而不能去、魏王使客將軍新垣衍令趙帝秦、今其人在是、勝也何敢言事、魯仲連曰、吾始以君爲天下之賢公子也、吾乃今然後知君非天下之賢公子也、梁客新垣衍安在、吾請爲君責而歸之、平原君曰、勝請爲紹介而見之於先生、

【講義】此の時魯仲連は丁度趙に游び、秦が趙を圍む折に出遇ひしが、魏より趙に使を送り、趙をして秦を尊んで帝となさしめんとする由を聞き、平原君に面會して尋ねけるは、今度の儀は何如にせらるゝ思召しなりやと、平原君曰く、拙者此の事に就き何をか申さん、前には四十萬の大軍を戰場に失ひ、今又敵軍國內に攻入り邯鄲を圍まれども之を擊ち退くること能はず、魏王より客將新垣衍を以て趙に秦を帝となさんことを勸む、今其人此に在り、拙者は此の事に就き何をか申さんやと、魯仲連曰く、自分は是れまで君をば天下の賢公子なりと考へ居りしが、今日に及んで君が天下の賢公子に非ざることを知れり、梁の使者新垣衍は何れの處に罷在り候や、自分は君の爲に彼れを責めて追ひ返したく存ずると、平原君曰く、拙者紹介して先生に御引合せ申すべしと、

【字解】勝、平原君の名なり、梁、魏を謂ふ、

平原君遂見新垣衍曰、東國有

四十餘萬、秦兵遂東圍邯鄲、趙王恐、諸侯之救兵莫敢擊秦軍、魏安釐王使將軍晉鄙救趙、畏秦止於蕩陰不進、魏王使客將軍新垣衍間入邯鄲、因平原君謂趙王曰、秦所爲急圍趙者、前與齊湣王爭彊爲帝、已而復歸帝、今齊湣王已益弱、方今唯秦雄天下、此非必貪邯鄲、其意欲復求爲帝、趙誠發使尊秦昭王爲帝、秦必喜罷兵去、平原君猶預、未有所決、

【講義】 魯仲連は齊國の人なり、常に變り立ち優れたる計畫を好み、仕宦して官職に就くことを嫌ひ、好んで高尚の節義を守りけるが、其の趙に游歷したるは趙の孝成王の時にして、適秦王は白起をして趙の長平の軍を破らしめ、前後、四十餘萬人を討取り、秦の兵は其機に乘じて趙の都邯鄲を圍む、趙王は恐れて救ひを列國に求めたれども、列國も後の祟りを畏れしかば、援兵を送りて秦の軍を擊つものなし、魏の安釐王は將軍晉鄙に命じて趙を救はしめたる處、秦を畏れて蕩陰の地に滯陣して進まず、魏王は客將軍新垣衍をして忍びて邯鄲に入り、平原君の手引きを以て趙王に謁見の上言はしめけるは、秦が急に邯鄲を圍む仔細は他に非ず、以前秦は齊の湣王と強さを爭ひ帝と稱せしが、暫くして復帝號を去れり、今齊の湣王は其國已に益弱くなり、目下は秦のみ天下に勢ひを振ひ居る所を以て觀れば、今度の戰ひは是非とも邯鄲を取るが爲に非ず、復び帝たることを希望するに外ならず、されば趙より使を發し秦の昭王を尊んで帝となすときは、秦は必ず軍を止めて退去すべしと、平原君は猶豫して未だ孰れとも決定せざりき、

【字解】 俶儻、卓異なり、客將軍、他國の人にして魏

國既破亡、吾不能存、今又劫之以兵、爲君將、是助桀爲暴也、與其生而無義、固不如烹、遂經其頸於樹枝、自奮絶脰而死、齊亡大夫聞之曰、王蠋布衣也、義不北面於燕、況在位食祿者乎、乃相聚如莒、求諸子、立爲襄王、

【講義】燕が初め齊に入りたるとき、畫邑に住へる王蠋の賢人なることを聞き、軍中に令して曰く、畫邑の周圍三十里内に入る勿れと、是れ王蠋の爲に遠慮せしなり、暫くして燕の軍より人を以て申入れけるは、齊人は皆君の義の高きを感じ人望あることゆゑ、吾れ君を將軍とし一萬戶の都會に封ぜんと、王蠋固く辭しければ燕人曰く、君若し聽き入れざるときは吾れ三軍を引ゐて畫邑を屠るべしと、王蠋曰く、忠臣は二君に事へず、貞女は二人の夫を更めず、齊王吾が諫めを聽かざりしゆゑ退いて野に耕し、國既に滅亡に及びしも、吾れ之を存する能はず、今又劫かされたりとて君の將となるは、是れ桀を助けて暴を爲すと云ふものなり、其生きて義なからんよりは烹らるゝ方が增なりとて、遂に頭を繩にて樹の枝に懸け、自ら飛び上りて咽を絶ちて死せり、齊の亡命なる大夫等之を聞いて曰く、王蠋は無位の人なれども尚義を守りて燕に仕へざるに、況して位に在り祿を食む者に於てをやと、乃ち相聚りて莒に赴き、齊王の諸子を求めて襄王となせり、

魯仲連鄒陽列傳第二十三

魯仲連者、齊人也、好奇偉俶儻之畫策、而不肯仕官任職、好持高節、游於趙、趙孝成王時、而秦王使白起破趙長平之軍、前後

戰に及び、奇兵を側面より放ちて勝つものなり、戰ひの上手なる者は奇を出すこと窮りなく、或は奇を用ふるかと思へば正、正を用ふるかと思へば奇、其循環して生ずるは、丁度環の端なきが如し、夫れ始めは軟弱なる樣子にて處女の如く、敵が油斷をして戶を開くときは、網を脫れたる兎が勢ひ烈しく飛び出すが如く、敵は拒ぐ間合もなし、それは田單の謂なるか、

【字解】適、敵に同じ。

初淖齒之殺湣王也、莒人求湣王子法章、得之太史嬓之家、爲人灌園、嬓女憐而善遇之、後法章私以情告女、女遂與通、及莒人共立法章爲齊王、以莒距燕、而太史氏女遂爲后、所謂君王后也、

【講義】初め淖齒が湣王を殺したる折、莒の人は湣王の子法章の所在を搜索したる處、太史嬓の家にて見當れり、法章は人に傭はれて庭の盆栽などに水を注ぎ世を忍びて居りたるが、太史嬓の女は彼れを憐み、善く之を過しけり、法章は己れの素生を打明けて女に告げ、女は終に法章と情好を通ぜり、莒の人民が共に法章を立てゝ齊王となし、莒の城に據つて燕を防ぐに及びて太史氏の女は遂に皇后となる、後に謂はゆる君王后とは此の女のことなり、

燕之初入齊、聞畫邑人王蠋賢、令軍中曰、環畫邑三十里無入、以王蠋之故、已而使人謂蠋曰、齊人多高子之義、吾以子爲將、封子萬家、蠋固謝、燕人曰、子不聽、吾引三軍而屠畫邑、王蠋曰、忠臣不事二君、貞女不更二夫、齊王不聽吾諫、故退而耕於野、

餘城皆復爲齊、乃迎襄王於莒、入臨菑而聽政、襄王封田單、號曰安平君、

【講義】田單は聽て城中の牛を取り集め千餘匹を得たれば、薄赤の衣を牛に着せ、之に五色の龍の模樣を畫き、又刄を牛の角に縛りつけ、脂を灌ぎかけたる葦を牛の尾に捲きつけ、其端に火を著けて燒き立て、城壁に幾十と云ふ穴を鑿ちて、夜其穴より牛を逐ひ出し、壯士五千人其後に附いて突擊す、牛の尾は尾に束ねたる葦の燒くるに隨ひて次第に熱くなりしかば、牛は大に怒り燕の軍中に驅け入り縱橫に暴れ廻りしかば、夜のこととて燕軍は何物とも見分けかね大に驚きし處へ、牛の尾に附けたる炬火はまばゆき程に光り輝き、燕軍は之を視るに皆龍の模樣なりしかば益々驚き畏れ、互ひに突き倒し踏み倒して盡く死傷す、壯士五千人は枚を口に銜んで突貫に及び、城中よりは喊の聲を擧げて其勢ひを助け、老若は銅器を打鳴らし、其聲天地を動かすばかりなりければ、燕軍は大に駭いて敗走しけり、齊兵は此の勢ひに乘じて敵將騎劫を殺し、燕軍は隊伍も散々になりて奔走するを、齊兵息をもつかせず追擊し、過ぐる所の城邑皆燕に叛いて田單に歸し、馳せ加はる所の兵士日に多く、勝に乘じて攻め立てたれば、燕の兵は日に敗れて逃亡し、終に進んで河上に至り、齊の七十餘城は皆復び齊の物となれり、乃ち襄王を莒より迎へ、臨菑に入れて政を聽かしむ、襄王は田單を封じ、號して安平君と曰へり、

【字解】河上、齊の北界、安平君、田單は初め安平に起りしが故に、此れを以て其號となす、

太史公曰、兵以正合、以奇勝、善之者出奇無窮、奇正還相生、如環之無端、夫始如處女、適人開戶、後如脫兎、適不及距、其田單之謂邪、

【講義】太史公曰く、兵は本軍を以て正しく敵と合

燕軍由此益懈、

【講義】田單は士氣の揚りたるを見て最早戰はしむるも差支へなしと思ひしかば、自身版插を扱ひ、士卒と仕事を分擔し、其妻妾は隊伍の中へ組み入れ、有る限りの飮食を士卒全體に振舞ひ、兵士をして皆伏して影を匿させ、何如にも臆病なるが如くに見せかけ、老弱をして城壁の上に乘らしめ、使を敵陣に遣して降參を申納れしめしかば、燕軍にては萬歲を呼んで喜べり、田單は又民家の金を取り集めて千鎰を得たれば、卽墨の富家に命じ、其名義にて此の金を燕の將軍に送らしむ、其口狀に、卽墨今にも降參すべければ、何卒吾が一族妻妾を捕へ又は掠奪をなすことなく安堵せしめ給へと、燕の將軍は大に喜び、其の請求を聽き入れたるが、燕の軍は此れに由つて益〻油斷せり、

【字解】版插、板と鍬なり、田單自身鍬を取つて壘壁の工事をなす、行伍、軍中の隊伍なり、千溢、溢は鎰に同じ、

田單乃收城中得千餘牛、爲絳繒衣、畫以五彩龍文、束兵刃於其角、而灌脂束葦於尾燒其端、鑿城數十穴、夜縱牛、壯士五千人隨其後、牛尾熱怒而奔燕軍、燕軍夜大驚、牛尾炬火光明炫燿、燕軍視之皆龍文、所觸盡死傷、五千人因銜枚擊之、而城中鼓譟從之、老弱皆擊銅器爲聲、聲動天地、燕軍大駭敗走、齊人遂夷殺其將騎劫、燕軍擾亂奔走、齊人追亡逐北、所過城邑皆畔燕而歸田單、兵日益多、乘勝、燕日敗亡、卒至河上、而齊七十

【講義】 田單は城中の人に命令し、食事の度每に先祖を庭に祭らしめたり、然るに飛鳥、城の空より翔(カケ)り舞ひて地に下り祭の供物を食ひしかば、城中の者之を不思議に思へり、田單因つて宣言して曰く、神が降臨ましまして我れに謀を授け給ふと、城中に令して云ふ、神の化身(ケシン)あつて我が師となるべしと、然る處一人の兵卒進み出でて云ふやう、臣は師となり申さんかと言ひもあへず踵を反して走り去らんとするを、田單身を起して之を引戾し、東向きに坐して彼れを師とし崇めけるに、卒の云ふやう、臣は君を欺きたるにて實際何等の能なしと、田單曰く、足下は敢て何事をも言ふ勿れと、其儘彼れを師とし、號令を出す每に必ず神師の敎へなりと稱す、是に於て宣言すらく、吾が恐るゝ所は唯燕軍が捕虜(イケドリ)にしたる齊の卒を鼻切(ハナキリ)の刑に處し、之を陣頭に置いて我れと戰ひ、吾が軍の勢を挫きて卽墨の陷るべきことなりと、燕の方にては之を聞き、其言の如く捕虜の鼻を切りしかば、城中の人は齊より敵に降參せし者が盡く鼻を切られたるを見て、皆怒りて堅固に城を守り、唯敵の手に執(トラ)へられんことを恐れぬ、田單は又反間を放ちて云ふ、吾れは燕軍が我が城外に在る冢墓を掘り、先祖の尸(シカバネ)を辱めて齊人の心を寒からしめんことを恐ると、燕の軍は又盡く齊の人民の墓を掘りて死人を燒きければ、卽墨の人は城上より之を望見して皆落淚して出で戰はんと欲し、怒氣平日に十倍せり、

【字解】 劓、鼻を切るの刑、前行、前列なり、壟、小高き墓なり、

田單知士卒之可用、乃身操版挿、與士卒分功、妻妾編於行伍之間、盡散飮食饗士、令甲卒皆伏、使老弱女子乘城、遣使約降於燕、燕軍皆呼萬歲、田單又收民金、得千溢、令卽墨富豪遺燕將曰、卽墨卽降、願無虜掠吾族家妻妾、令安堵、燕將大喜、許之、

【講義】暫く過ぎて燕の昭王卒し、其子の惠王立ちて君となりしが、樂毅と仲善からず、田單は之を聞きしかば、反間を燕に放ち宣言せしめけるは、齊王は已に人手に殺され、城の陷らぬ所は唯二つに過ぎず、樂毅は誅を畏れて敢て國に歸らず、齊を伐つと云ふことを名目とし、兵を連ね南面して齊に王たらんと欲す、然るに齊の人民未だ己れに附かざるが故に、姑く卽墨の攻撃を手緩くして其事を待つ、齊人の懼る所は、他の將軍が來りて卽墨の殘はるゝことなりと、燕王は之を事實なりと思ひ、騎劫をして樂毅に代らしむ、樂毅は因つて趙に歸し、燕の士卒は忿然として怒れり、

而田單乃令城中人食必祭其先祖於庭、飛鳥悉翔舞城中下食、燕人怪之、田單因宣言曰、神來下敎我、乃令城中人曰、當有神人爲我師、有一卒曰、臣可以爲師乎、因反走、田單乃起、引還東鄕坐、師事之、卒曰、臣欺君、誠無能也、田單曰、子勿言也、因師之、每出約束、必稱神師、乃宣言曰、吾唯懼燕軍之劓所得齊卒、置之前行、與我戰、卽墨敗矣、燕人聞之、如其言、城中人見齊諸降者盡劓、皆怒堅守、唯恐見得、單又縱反間曰、吾懼燕人掘吾城外冢墓、僇先人、可爲寒心、燕軍盡掘壟墓、燒死人、卽墨人從城上望見、皆涕泣、其欲出戰、怒自十倍、

燕既盡降齊城、唯獨莒卽墨不下、燕軍聞齊王在莒、并兵攻之、淖齒既殺湣王於莒、因堅守距燕軍、數年不下、燕引兵東圍卽墨、卽墨大夫出與戰、敗死、城中相與推田單曰、安平之戰、田單宗人、以鐵籠得全、習兵、立以爲將軍、以卽墨距燕、

【講義】 燕は已に盡く齊の城を降參せしめ、唯莒と卽墨とのみ下らざりき、燕の軍は湣王が莒に在る由を聞き、兵を并せて之を攻めたり、楚の淖齒は已に湣王を莒に殺し、因つて堅く城を守りて燕軍を防ぎ、數年間下らざりければ、燕は兵を引ゐて卽墨を攻む、卽墨の大夫は城を出でて敵と戰ひ、敗軍して討死す、城中の者共田單を推して曰く、安平の戰ひに田單の一族は鐵軸の計にて免るゝことを得たれば、兵法を習へるに相違なしと、立てゝ將軍となし、卽墨の兵を以て燕を防げり、

【字解】 淖齒既殺湣王於莒、齊の救ひの爲に來りし楚の淖齒と云ふ者、燕と齊の地を分たんと欲するより、齊の湣王を殺したるなり、

頃之燕昭王卒、惠王立、與樂毅有隙、田單聞之、乃縱反間於燕、宣言曰、齊王已死、城之不拔者二耳、樂毅畏誅而不敢歸、以伐齊爲名、實欲連兵南面而王齊、齊人未附、故且緩攻卽墨以待其事、齊人所懼、唯恐他將之來、卽墨殘矣、燕王以爲然、使騎劫代樂毅、樂毅因歸趙、燕人士卒忿、

たび其氣を奮ひ、威は敵國に伸びながら、退いて廉頗に讓り、彼れの名は太山より重し、其智勇に處せしことは、兩つながら之を兼ねたりと謂ふべし、

田單列傳第二十二

田單者、齊諸田疏屬也、湣王時、單爲臨菑市掾、不見知、及燕使樂毅伐破齊、齊湣王出奔、已而保莒城、燕師長驅、平齊、而田單走安平、令其宗人盡斷其車軸末而傅鐵籠、已而燕軍攻安平、城壞、齊人走爭塗、以轊折車敗、爲燕所虜、唯田單宗人以鐵籠故得脫、東保卽墨、

【講義】田單は齊の田氏の遠緣の一族也、湣王の時單は臨菑の市掾と云ふ役を勤め居たるが、世の中に知られざりき、燕が樂毅をして齊を伐たしめ、樂毅が大に齊軍を破るに及んで齊の湣王は出奔し、其後莒の城を防守せし處、燕の軍は長途を攻寄せ來り、片端より齊の地を平げしかば田單は安平に走り、其一門の者をして車軸の頭を斷ち落して其處を鐵にて卷かしめたるが、是れは車と車とが擦れ合はずして逃走に便なる仕組なり、已にして燕の軍は安平を攻め城破壞しければ、齊人は我れ先きにと途を爭ひて逃げ走りし處、車の軸の頭折れて車破れたる爲に燕の虜となりたるに、唯田單の一族のみは鐵軸の爲に危難を脫することを得て卽墨に身を寄せたり、

【字解】齊諸田疏屬、陳の厲公の子に名は完、字は敬仲と謂ふものありしが、其國亂を避けて齊に走り桓公に仕へ、姓を改めて田氏と稱したり、其子孫齊に繁殖して田嬰、田文、田巴等と謂ふ、田單も亦其中の一人なり、市掾、市官の屬僚、傅鐵籠、講義にて分明なり、

及其將顏聚、遂滅趙、

【講義】趙の悼襄王元年、廉頗は已に逃亡して魏に入り、其替りとなる者は無論李牧なりしかば、趙は李牧をして燕を攻めしめ、武遂、方城を拔く、二年を經て龐煖は燕の軍を破り、劇辛を殺せり、其れより七年の後、秦は趙を破り、其將扈輒を武遂城に討取り、首を斬ること十萬に及びしかば、趙は李牧を以て大將軍となし、秦の軍を宜安に擊ち、大に秦軍を破り、秦の將桓齮を走らせり、趙は李牧の軍功を賞して武安君となす、三年を過ぎて秦より番吾の地を攻め來りし處、李牧は之を打破り、南方に於ては韓魏の兵を防げり、趙王遷の七年、秦は王翦をして趙を攻めしめたれば、趙は李牧、司馬尚の二人に命じて之を防がしむ、然るに秦は趙王の寵臣郭開に多く金を與へて反間を爲さしめ、言ひ觸らすやう、李牧、司馬尚の二人は謀叛をなさんとすと、趙王は之を信じ、趙蔥及び齊の將顏聚をして李牧に代らしめたる處、李牧は命を奉ぜざりしかば、趙王は人を以て竊かに李牧を捕へて之を斬らしめ、司馬尚を廢して平民とせり、三个月の後秦の將王翦は急に趙を擊ちて大に之を敗り、趙蔥を殺し、趙王遷及び其將顏聚を捕虜となし、遂に趙を滅ぼしぬ、

【字解】劇辛、本と趙人にして燕に事へし人、

太史公曰、知死必勇、非死者難也、處死者難、方藺相如引璧睨柱、及叱秦王左右、勢不過誅、然士或怯懦而不敢發、相如一奮其氣、威信敵國、退而讓頗、名重太山、其處智勇、可謂兼之矣、

【講義】太史公曰く、死を知る者は必ず勇あり、但し死することの難きに非ず、死する場合を見料らふことの難きなり、藺相如が璧を引寄せ柱を睨み、又秦王の左右に竝居る臣下を叱するに及び、彼れは其結果を誅を受くるに過ぎずと覺悟せしのみ、然るに士の中には臆病にて敢て勇氣を發せぬ者あり、相如は一

を用意し、千三百乘を得、擇り拔きの騎士は一萬三千四、百金の賞を得べき士卒五萬人、射手十萬人を得たり、一々手配を定めて戰爭の演習を行ひ、大に牧畜を放ち、人民野に滿ちければ、匈奴は一寸攻來れり、李牧の兵は僞つて逃げ、數千人を置去りにせしかば、單于は之を聞き、大に數多の軍勢を引率して國疆に侵入す、李牧は多く奇陣を設け、左右翼を張つて之を擊ち、大に匈奴を破りて十餘萬騎を討取り、襜襤を滅ぼし東胡を破り林胡を降し、單于は狼狽して奔走せり、其後十餘年の間、匈奴は敢て趙の國はづれの城邑に近づかざりき、

【字解】選車、堅固の車なり、彀者、善く弓を射る者、百金の士、能く敵を破り其將を討取る者は、賞するに百金を以てす、襜襤、東胡、林胡、皆匈奴の部落の名なり、

趙悼襄王元年、廉頗既亡入魏、趙使李牧攻燕、拔武遂方城、居二年、龐煖破燕軍、殺劇辛、後七年、秦破趙、殺將扈輒於武遂城、斬首十萬、趙乃以李牧爲大將軍、擊秦軍於宜安、大破秦軍、走秦將桓齮、封李牧爲武安君、居三年、秦攻番吾、李牧擊破秦軍、南距韓魏、趙王遷七年、秦使王翦攻趙、趙使李牧司馬尙禦之、秦多與趙王寵臣郭開金、爲反間、言李牧司馬尙欲反、趙王乃使趙蔥及齊將顏聚代李牧、李牧不受命、趙使人微捕得李牧、斬之、廢司馬尙、後三月、王翦因急擊趙、大破、殺趙蔥、虜趙王遷

【講義】然れども匈奴は李牧を以て臆病となし、趙の國疆の守備隊と雖も亦己れの大將を臆病なりと思へり、趙王は李牧が匈奴を畏れて戰はざるを不都合として之を譴責したれども、李牧は之が爲に舊來の方針を改めず、以前の通りになし居ければ、趙王は怒りて之を召び戻し、他人を以て之に代らしめ國疆の大將となしたる處、一个年餘りの內、匈奴が來る每に出でて戰ひしが屢、敗北に及び、損害頗る多く、國疆に於ては殆んど耕作牧畜も出來ざる始末なり、是に於て趙王は復び李牧に往かんことを請ひたれども、李牧は門を閉ぢて出でず、飽くまでも病氣と稱して命に應ぜず、趙王は無理に李牧を引出して將とならしめんとせし時、李牧の曰く、大王是非とも臣を用ひ給ふならば臣にも條件あり、臣が從前の如くに爲すことを許し給はゞ、思召しに從ひ奉らんと、趙王之を許しゝかば、李牧は復び鴈門に至り、規約を立つること從前の如し、匈奴は何年過ぐるも得る所なかりしが、終に李牧をば全く臆病と視做せり、

【字解】不得田畜、田は農業、畜は牧畜、匈奴の爲に荒されて民が其業を營む能はざるを謂ふ、

邊士日得賞賜而不用、皆願一戰、於是乃具選車、得千三百乘、選騎得萬三千匹、百金之士五萬人、彀者十萬人、悉勒習戰、大縱畜牧、人民滿野、匈奴小入、佯北不勝、以數千人委之、單于聞之、大率衆來入、李牧多爲奇陳、張左右翼擊之、大破殺匈奴十餘萬騎、滅襜襤、破東胡、降林胡、單于奔走、其後十餘歲、匈奴不敢近趙邊城、

【講義】守備兵等は日に饗應などを受けながら働くことなく、退屈なりしかば、何れも一度戰つて勇氣を洩さんことを願へり、李牧は是に於て擇り拔きの戰車

○李牧者趙之北邊良將也、常居代鴈門、備匈奴、以便宜置吏、市租皆輸入莫府、爲士卒費、日擊數牛饗士、習射騎、謹烽火、多間諜、厚遇戰士、爲約曰、匈奴卽入盜、急入收保、有敢捕虜者斬、匈奴每入、烽火謹、輒入收保、不敢戰、如是數歲、亦不亡失、

【講義】李牧は趙の北の國疆の良將にて、前方代の鴈門縣に居り、匈奴の押へを勤め居りたるが、都合の何如により專斷にて吏を置き、市租は皆幕府に入れて士卒の費用に供し、日に數頭の牛を殺して士卒を馳走し、射術と馬術とを習はせ、烽火に注意し、多く間諜を放ち、厚く戰士を遇し、規約を立てゝ曰く、匈奴若し國內に入り來りて物を盜むことあらば、急に寨の中に入りて守るべし、敢て匈奴を捕ふる者あらば之を斬罪に處すべしと、匈奴の入り來る每に烽火を注意し、寨の內に立籠り敢て戰はず、此の如くして數年を過ぎたるが、別段損害を受くることなかりき、

【字解】常、嘗なり、莫府、幕府なり、烽火、ノロシ、

然匈奴以李牧爲怯、雖趙邊兵、亦以爲吾將怯、趙王讓李牧、李牧如故、趙王怒召之、使他人代將、歲餘、匈奴每來出戰、出戰數不利、失亡多、邊不得田畜、復請李牧、牧杜門不出、固稱疾、趙王乃復彊起使將兵、牧曰、王必用臣、臣如前、乃敢奉令、王許之、李牧至、如故約、匈奴數歲無所得、終以爲怯、

大梁に赴く、其明年趙に於ては李牧を將として燕を攻め、武遂、方城を拔けり、

廉頗居梁久之、魏不能信用、趙以數困於秦兵、趙王思復得廉頗、廉頗亦思復用於趙、趙王使使者視廉頗尚可用否、廉頗之仇郭開多與使者金、令毀之、趙使者既見廉頗、廉頗爲之一飯斗米、肉十斤、被甲上馬、以示尚可用、趙使還報王曰、廉將軍雖老尚善飯、然與臣坐頃之、三遺矢矣、趙王以爲老、遂不召、楚聞廉頗在魏、陰使人迎之、廉頗一爲楚將、無功、曰、我思用趙人、廉頗卒死于壽春、

【講義】 廉頗は梁に居ること久しかりしが、魏は彼れを信じて用ふることをなさゞりき、然るに趙は屢々秦の兵に困められしかば、復び廉頗を用ひんとする心あり、廉頗も亦趙に用ひられたく思ひ居れり、趙王は人を遣して彼れが尚役に立つや否やを視察せしむ、廉頗の仇に郭開と云ふものあり、廉頗の再用を妨げんとて多く使者に金を與へ、不利益の報告をなさしむ、趙の使者は已に廉頗に面會せし處、廉頗は一度の飯に一斗の米と十斤の肉とを食ひ、鎧を着て馬に跨り、尚役に立つことを示せり、趙の使者は歸國の上趙王に報告すらく、廉將軍は尚能く飯を食ふと雖も、臣と對坐中、僅かの時間なるに三度も大便を洩し候と、趙王は之を聞いて廉頗を老耄したりと思ひしかば、遂に召び戻さず、楚にては廉頗が魏に在る由を聞きしかば、人を以て之を迎へしめぬ、廉頗は一たび楚の將となりしも功なく、彼れは我れ用ひ慣れたる趙人を用ひたしと言へり、廉頗は終に壽春に卒せり、

【字解】 矢、大便なり、

至、廉頗曰、客退矣、客曰、吁、君何見之晩也、夫天下以市道交、君有勢、我則從君、君無勢則去、此固其理也、有何怨乎、

【講義】邯鄲の圍み解けてより五箇年の後、燕の栗腹は謀を獻じて云ふ、趙民の血氣盛んなる者は長平の戰に盡く死亡し、其子供等は未だ壯年に及ばざれば、此際趙を攻むる時は、我が鋒先に當る者あるべからずと、燕王は彼れの謀を用ひ兵を擧げて趙を撃つ、趙は廉頗を將として之に當らしめ、廉頗は燕軍を擊ち、大に之を鄗の地に破りて敵將栗腹を殺し、遂に進んで燕の都を圍む、燕は防禦の力なく五城を割いて和睦を請ひしかば、之を許容せり、趙は其功を賞し、廉頗を尉文に封じて信平君と爲し、假りの相國に任ぜり、廉頗が長平より召還せられ、勢力を失ひたる時に於て、舊來の食客は盡く立去りけるが、復び任用せられて將となるや、又盡く手賴り來りしかば、廉頗は其薄情を惡み、退けと言ひたる處、客の云ふやう、さても君には何とて氣の附くことの晩かりしや、夫れ天下の人、商賣の道を以て交はらざるはなし、君に勢ひあれば我れ君に從ひ、君に勢ひなければ去る、此れは固より當然の事なり、何の怨むことあらんやと、

【字解】以市道交、市場の道を以て交る、利に就くことを謂ふ、

居六年、趙使廉頗伐魏之繁陽、拔之、趙孝成王卒、子悼襄王立、使樂乘代廉頗、廉頗怒攻樂乘、樂乘走、廉頗遂奔魏之大梁、其明年、趙乃以李牧爲將、而攻燕拔武遂方城、

【講義】其後六箇年計りを經て趙は廉頗をして魏を伐たしめ、魏の繁陽を拔けり、已にして趙の孝成王卒し、其の子悼襄王立ちて君となる、悼襄王は樂乘を以て廉頗に代らしめければ、廉頗は怒りて樂乘を攻む、樂乘敵すること能はずして敗走す、廉頗は趙を見限り

二、士卒離心、四十餘日、軍餓、趙括出銳卒自搏戰、秦軍射殺趙括、括軍敗、數十萬之衆遂降秦、秦悉阬之、趙前後所亡凡四十五萬、明年、秦兵遂圍邯鄲、歲餘幾不得脫、賴楚魏諸侯來救、乃得解邯鄲之圍、趙王亦以括母先言、竟不誅也、

【講義】趙括は已に廉頗に代り將軍となるや、悉く號令を改め軍吏を更迭せり、白起は之れを聞き、奇兵を放ち、僞りて敗走して趙括の糧食運輸の路を斷ち切り、彼れの軍を中斷して二つとなしゝかば、趙括の士卒は一同に戰ふ心なく、四十餘日を過ぐる內に軍は飢餓に陷れり、趙括は精銳の兵を出し、自ら打物を取りて戰ひし處、秦軍は矢を放ちて趙括を射殺しゝかば、大將を打たれて士卒散々に敗走し、數十萬の大軍は遂に秦に降參せしが、秦は悉く之を穴埋にし、趙は前後に於て失ひし所の兵數は四十五萬と稱す、翌年秦は遂に邯鄲を圍み、邯鄲は一年餘も籠城の姿にて殆んど陷落を免れざりし處、楚魏其他の列國の援兵來りたるため、邯鄲の圍みも辛うじて解けぬ、趙王も趙括の母が先きに申したる語あるを以て之を誅せざりき、

自邯鄲圍解五年、而燕用栗腹之謀、曰、趙壯者盡於長平、其孤未壯、擧兵擊趙、趙使廉頗將、擊大破燕軍於鄗、殺栗腹、遂圍燕、燕割五城請和、乃聽之、趙以尉文封廉頗、爲信平君、爲假相國、廉頗之免長平歸也、失勢之時、故客盡去、及復用爲將、客又復

家事、今括一旦爲將、東向而朝、軍吏無敢仰視之者、王所賜金帛、歸藏於家、而日視便利田宅可買者買之、王以爲何如其父、父子異心、願王勿遣、王曰、母置之、吾已決矣、括母因曰、王終遣之、卽有如不稱、妾得無隨坐乎、王許諾、

【講義】趙括愈〻出發せんとするに臨み、彼れの母は趙王に上書して奏聞するやう、括は將軍たらしむべからずと、趙王は何故に斯く云ふやと諮問ありしかば、母は對へて曰く、始め妾の彼れの父に嫁入り致せし時、父の奢は將軍にて之れありしが、手づから飲食を捧げて給仕致せし所の士卒は十を以て數ふる程にて、友として同格の取扱ひを致せしものは百を以て數ふる程に之れあり、大王及び王族の方々より賜はりし品は一つ殘らず軍吏士大夫に與へ、出征の命を受けたる日には家事を問ひ申さず、然るに今括は一旦將軍となり、東を向いて參朝すれば軍吏は誰れも仰ぎ視る者なく、大王より下賜せられたる金帛は持ち歸りて家に藏し、日に便利の田宅の買ふべきものある時は之を買ふ、大王は其父と比較して何如に思召され候や、此の如く父子の心は異り父の類に之れなければ、何卒彼れを御遣しなさらぬやう願ひたしと、趙王は、母よ、姑らく其儘に致し置け、吾れは已に彼れを出陣せしむることに決したればと、母は念のため王に言上すらく、大王は何如にしても彼れを御遣しになるならば、萬一王の御目鏡に違ひ候とも彼れの罪の連坐とならずして濟ませ下さるべきかと、趙王は之を許諾せり、

【字解】無敢仰視之者、倨れるを謂ふ、

趙括既代廉頗、悉更約束、易置軍吏、秦將白起聞之、縱奇兵、佯敗走、而絕其糧道、分斷其軍爲

誠に趙括を畏るゝことと思ひしかば、趙括を將軍として廉頗と更代せしむ、藺相如は此れを失計となし、病中ながら趙王を諫めて云ふ、大王は評判を以て趙括を用ひ給へども、是れは琴柱に膠をつけて彈くやうなるものにて無效なり、括は能く父の書きたる兵法の書を讀むのみにて、變に應ずることを知らざれば不可なりと、趙王は相如の諫めを聽き入れずして終に括を將とせり、

【字解】膠柱而鼓瑟、琴の柱は之を動かして調子を合はすものなるに、之を一つ處に膠附けにするときは、緩急の調を成さず、

趙括自少時學兵法、言兵事、以天下莫能當、嘗與其父奢言兵事、奢不能難、然不謂善、括母問奢其故、奢曰、兵死地也、而括易言之、使趙不將括即已、若必將之、破趙軍者必括也、

【講義】趙括は少年の時より兵法を學び、軍事を議論し、自ら天下己れに當る者なしと考へ頗る慢心せしが、其父の趙奢も議論に於ては非點を打つこと出來ざりしが、それにも拘はらず趙奢は彼れを善しとは曰はざりき、括の母は不審に思ひ、其理由を尋ねたる處、奢の云ふやう、兵と云ふものは命懸けの場合なり、然るを括は輕々しく之を言ふゆゑ善しと思はざるなり、吾國が括を將軍とせざれば其れまでなれども、若し之を將軍となしたる場合には、趙軍の敗北を來すものは、他人に非ずして必ず括ならんと、

及括將行、其母上書言於王曰、括不可使將、王曰、何以、對曰、始妾事其父、時爲將、身所奉飯飲而進食者以十數、所友者以百數、大王及宗室所賞賜者、盡以予軍吏士大夫、受命之日、不問

北山に赴きたり、秦の兵は後れて至り、趙の兵が山に據るを見て之を奪はんとせしも、擊退せられて上ることを得ず、趙奢は兵を放ちて之を擊ち、大に秦軍を破り、秦軍は散々になりて敗走す、趙奢已に閼與の圍みを解いて凱旋に及びしかば、趙の惠文王は奢に馬服君の號を賜ひ、許歷をば國尉の官に任ぜり、是に於て趙奢は廉頗、藺相如と位を同じうせり、

【字解】邯鄲、衍文なり、一說に上句に接し後令邯鄲と讀むべしと云ふ、其意は許歷の諫が敢諫者死と云ふ邯鄲の令の後に在るを以て此令を以て斬るべからずと云ふに在り、北山、閼與山なり、

後四年趙惠文王卒、子孝成王立、七年秦與趙兵相距長平、時趙奢已死、而藺相如病篤、趙使廉頗將攻秦、秦數敗趙軍、趙軍固壁不戰、秦數挑戰、廉頗不肯、趙王信秦之間、秦之間言曰、秦之所惡、獨畏馬服君趙奢之子趙括爲將耳、趙王因以括爲將、代廉頗、藺相如曰、王以名使括、若膠柱而鼓瑟耳、括徒能讀其父書傳、不知合變也、趙王不聽、遂將之、

【講義】其れより四年の後趙の惠文王卒し、其の子の孝成王立ちて君となる、七年、秦と長平に於て交戰す、此の時趙奢は已に死し、又藺相如は重病なりしかば、趙にては廉頗を將として秦を攻めしめぬ、秦は每度趙の軍を破りければ、趙軍は防禦的態度を取り、壘壁を堅固にして之に立籠り、出でて戰はず、秦の方より屢〻戰ひを挑みたれども、廉頗は其手に乘らず籠城を專一とせり、然るに趙王は秦の反間を信じて廉頗の作戰計畫を疑へり、秦の間諜は言ひ觸らして曰く、秦の不氣味に思ふことは他なし、唯馬服君趙奢の子趙括が趙の將とならんことを恐るゝのみと、趙王は秦が

後令、

【講義】其れより壘壁を堅く守り、留まること二十八日に及びたれども進軍せず、益〻壘壁を増しぬ、秦の間者入込みければ、强奢は彼れに馳走をなして歸しけるが、此の者趙軍の有様を秦の將に報告せしかば、秦の將は大に喜んで曰く、夫れ國都を去ること三十里の地に留まりて其儘進むことなく壘を增すが如き臆病にては、閼與は最早趙の地に非ずと、趙奢は固より敵に油斷せしめたることなれば、秦の間諜を返せし後、鎧を卷いて目的地に進み、二日と一夜にして達し、弓の上手なる者に申附け、閼與より五十里離れたる所に陣取らしめ、軍壘を築き上げたるに、秦の軍は之を知り、有る限りの兵を以て攻め來る、趙奢の軍中に許歷と云ふものあり、軍事に就いて諫めたしと申出でけるに、趙奢之を許せしかば許歷曰く、秦の兵は趙の軍が來るべしと思はざる故、其來る折は意氣盛んなるべし、將軍には手厚く其陣を取纏めて之を待たれよ、然らずば敗軍に及ばんと、趙奢云ふ、君の指圖を受け申さんと、許歷曰く、拙者軍令を犯して諫めたれば斧質の誅を加へ給はれと、趙奢は後令を待つべしとて其罪を問はず、

【字解】國、國都なり、胥、マツと訓ず、

〔邯鄲〕許歷復請諫、曰、先據北山上者勝、後至者敗、趙奢許諾、卽發萬人趨之、秦兵後至、爭山不得上、趙奢縱兵擊之、大破秦軍、秦軍解而走、遂解閼與之圍而歸、趙惠文王賜奢號爲馬服君、以許歷爲國尉、趙奢於是與廉頗藺相如同位、

【講義】許歷は復許しを受けて諫めて云ふ、此の戰爭には先づ北山を占領する者は勝つべく、後れて至る者は敗るべければ、一刻も早く北山を取り給へと、趙奢は彼れの獻策を容れ、卽刻一萬人の兵を發して

頗を召して韓を救ひ得るや否やを問ふ、廉頗對へて曰く、韓は此れより道程遠く險阻狹隘の地勢なれば救ひ難しと、趙王は又樂乘を召して意見を尋ねたるに、彼れの答へも廉頗の通りなりき、今度は趙奢を召して問ひたる處、趙奢答ふるやう、其道遠くして險狹なれば、譬ふるに二疋の鼠が穴の中にて鬭ふやうなるものなり、將軍の勇なる方が勝を得べしと、趙王は之を聞き、趙奢を將軍して之を救はしむ、其れより趙の都邯鄲を去ること三十里の地點に至りし頃、趙奢は軍中に令を下して曰く、軍事に就いて彼れ此れ諫むる者あらば殺すべしと、秦の軍は武安の西に陣取り、鼓を打し喊の聲を擧げて手分けをなすとき、其音響に因つて武安の屋根の瓦盡く震動する程なり、軍中に在りける一人の斥候、趙奢に向ひ、急に武安を救ひ給へと言ひければ、趙奢は立ちどころに之を斬りて軍令を正しぬ、

【字解】軍於閼與、閼與は本と趙の地なり、然るに韓を伐ちて此に軍するものは道を假りしなり、武安、邯鄲の西に在り、候、斥候なり、

堅壁留二十八日不行、復益增壘、秦間來入、趙奢善食而遣之、間以報秦將、秦將大喜曰、夫去國三十里而軍不行、乃增壘、閼與非趙地也、趙奢既已遣秦間、乃卷甲而趨之、二日一夜至、令善射者去閼與五十里而軍、軍壘成、秦人聞之、悉甲而至、軍士許歷請以軍事諫、趙奢曰、內之、許歷曰、秦人不意趙師至此、其來氣盛、將軍必厚集其陣以待之、不然必敗、趙奢曰、請受令、許歷曰、請就鈇質之誅、趙奢曰、胥

【講義】趙奢は趙の田租を掌る所の役人なり、彼れが租税を徵收せし時、平原君の家は納税を肯んぜざりしかば、趙奢は法律を以て罪を糾し、平原君の執事九人を殺せり、平原君大に怒り、奢を殺して怨みを霽らさんとせし處、奢は平原君に說いて云ふ、君は趙に於て貴公子に在らせらる、さればとて今君の家だけを大目に見て公けに對する勤めを缺くときは、是れ法律が侵害せらるゝなり、法律が侵害せらるゝときは國弱くなるべく、國弱くなるときは列國攻め寄すべく、列國攻め寄するときは是れ趙は存在を失ふべし、趙が存在を失ふ以上、君は何として此の富を有つことを得給はんや、君の如き貴き位にある身を以て公けの勤めを盡すこと法律のごとくならば、上下均しくして不公平なし、不公平なければ國强く、國强ければ趙の國家は堅固なり、而して君は趙の貴き王族なれば、何とて天下より輕んぜらるゝことあるべきと、平原君は彼れを以て賢なりとし、趙王に言上せし結果、趙王は之を用ひ、國家の租税を掌らしめたる處、其の平均を得たるがため人民は富み、府庫は充實せり、

【字解】田部吏、田の收税吏、府庫、府は金錢を藏する所、庫は武器を藏する處、

秦伐韓、軍於閼與、王召廉頗而問曰、可救不、對曰、道遠險狹難救、又召樂乘而問焉、樂乘對如廉頗言、又召問趙奢、奢對曰、其道遠險狹、譬之猶兩鼠鬪於穴中、將勇者勝、王乃令趙奢將救之、兵去邯鄲三十里、而令軍中曰、有以軍事諫者死、秦軍軍武安西、秦軍鼓譟勒兵、武安屋瓦盡振、軍中候有一人言急救武安、趙奢立斬之、

【講義】秦より兵を發して韓を伐ちしに、趙王は廉

てすら、吾は朝廷の場所に於て之を叱し、其群臣に恥辱を與へたり、吾れ駑なれども何にとて廉將軍を畏れんや、併し吾れ之を念ふに、彼の强國の秦が敢て兵を趙に加へ戰ひを仕掛けて來ぬ所以は、唯吾れ吾れ兩人がある爲なり、今兩虎共に鬪ふ時は、其勢ひどちらか斃る、吾れと廉將軍とは兩虎の如し、されば吾が廉將軍を避けて逃げ匿るゝ次第は、國家の急難を先きにして私しの讎を後にするが故なりと、廉頗は之を聞き、己れの思慮淺くして相如を妬みたることを悔い、肉を露はし荊を負ひ、藺相如の食客に手引きを頼み、其門に至り罪を謝して曰く、僕は鄙賤の人間にて將軍が斯くまで寛大の取扱ひをし給ふことを知らずと、終に互ひに懇意となり、刎頸の交りを結びけり、此の歳廉頗は齊を攻めて其一軍を破り、二年を經て、廉頗は復齊の幾と云ふ城を伐ちて之を拔く、三个年の後又魏の防陵、安陽を攻めて之を拔き、其後四年目には、藺相如、將軍となりて齊を攻め、平邑に至りて歸る、其明年趙奢は秦軍を閼與の下に破る、

【字解】 駑、鈍才を謂ふ、刎頸之交、生死を同じうし、頸を刎ねて悔いざるを謂ふ、

○趙奢者趙之田部吏也、收租稅、而平原君家不肯出、趙奢以法治之、殺平原君用事者九人、平原君怒、將殺奢、奢因說曰、君於趙爲貴公子、今縱君家而不奉公、則法削、法削則國弱、國弱則諸侯加兵、諸侯加兵、是無趙也、君安得有此富乎、以君之貴、奉公如法、則上下平、上下平則國彊、國彊則趙固、而君爲貴戚、豈輕於天下邪、平原君以爲賢、言之於王、王用之治國賦、國賦太平、民富而府庫實、

車を廻らし横道に外れて見附からぬやうにせり、是に於て相如の家來皆諫めて曰く、臣が親戚を離れ故郷を去りて君に事ふる所以は君の高義を慕へばなり、今君は廉頗と同格なれば何も遠慮せらるゝ筈なきに、廉君が惡言を放つや、君は畏れて避け匿れ給ふ、恐懼も一通りの事にあらず、普通の人すらも尚羞づる所なるに、況して宰相將軍と云ふが如き尊き地位に在るものをや、臣等不肖にして最早御奉公出來ざれば今より御暇を戴きたしと、

【講義】以口舌爲勞、議論を以て秦王を屈せしことを謂ふ、

藺相如固止之曰、公之視廉將軍孰與秦王、曰、不若也、相如曰、夫以秦王之威、而相如廷叱之、辱其羣臣、相如雖駑、獨畏廉將軍哉、顧吾念之、彊秦之所以不敢加兵於趙者、徒以吾兩人在也、今兩虎共鬭、其勢不俱生、吾所以爲此者、以先國家之急而後私讎也、廉頗聞之、肉袒負荊、因賓客至藺相如門謝罪、曰、鄙賤之人、不知將軍寬之至此也、卒相與驩、爲刎頸之交、是歲廉頗東攻齊、破其一軍、居二年、廉頗復伐齊幾、拔之、後三年、廉頗攻魏之防陵安陽拔之、後四年、藺相如將而攻齊、至平邑而罷、其明年、趙奢破秦軍閼與下、

【講義】藺相如は固く彼等を引き留めて曰く、貴公等より廉將軍を視れば秦王と孰れか畏ろしきと、彼等云ふ、若かずと、相如云ふ、夫れ秦王の威力に對し

【字解】 盆缻、缻は瓦器にて酒を盛る所のもの、秦人は之を擊ちて歌の調子を合はすなり、以頸血濺大王、秦王を刺殺し、己れも亦殺されて其血の秦王に濺ぐことを謂ふ、

既罷歸國、以相如功大、拜爲上卿、位在廉頗之右、廉頗曰、我爲趙將、有攻城野戰之大功、而藺相如徒以口舌爲勞、而位居我上、且相如素賤人、吾羞不忍爲之下、宣言曰、我見相如、必辱之、相如聞、不肯與會、相如每朝時、常稱病、不欲與廉頗爭列、已而相如出望見廉頗、相如引車避匿、於是舍人相與諫曰、臣所以去親戚而事君者、徒慕君之高義也、今君與廉頗同列、廉君宣惡言、而君畏匿之、恐懼殊甚、且庸人尚羞之、況於將相乎、臣等不肖、請辭去、

【講義】 軈て趙王は秦王との會見も畢りて本國に歸りしが、相如の功頗る大なるを以て上卿の位に拜し、其位廉頗の上に出でたり、廉頗は不平勃々として曰く、我れ趙の將軍となり、或は城攻めに或は野戰に大功あり、然るに藺相如は只口先きばかりの働きを以て位の吾が上に在るは不都合千萬なり、且つ相如の素性は賤しき者なれば、吾れ彼れが下たるに忍びずと、諸方に言ひ觸らすやう、我れ相如に逢はゞ必ず之を辱むべしと、相如は之を聞いて彼れと面を合すことを欲せず、參朝の期日每に病氣を申立てゝ引籠り、廉頗と列を爭ふ機會を避けぬ、其外若し外出の砌向うより廉頗の來るを望見するときは、相如の方より

矣、左右欲刃相如、相如張目叱之、左右皆靡、於是秦王不懌、爲一擊缻、相如顧召趙御史書曰、某年月日、秦王爲趙王擊缻、秦之羣臣曰、請以趙十五城爲秦王壽、藺相如亦曰、請以秦之咸陽爲趙王壽、秦王竟酒、終不能加勝於趙、趙亦盛設兵以待秦、秦不敢動、

【講義】此の會見に於て秦王は酒宴酣なる頃趙王に向ひ懇望するやう、此の方竊かに聞及ぶに、趙王は音樂を好まれ堪能なる由、願はくは瑟を彈き給はれと、趙王は唯々として秦王の所望に任せ瑟を彈きければ、秦の御史進み出で、此の顛末を記錄に書き留めて曰く、何年何月何日、秦王、趙王と會飮し、趙王に瑟を鼓せしむと、此の時藺相如進み出でて曰く、主人趙王には秦王が善く秦の歌曲を爲し給ふ由、竊かに聞及べり、何卒盆缻を秦王に呈し、一曲を伺ひ、自他面白く娛樂致したしと、秦王は已れを侮辱するを怒り聽入れざりし處、相如は進んで缻を秦王の前に差出し、跪きて秦王に之を擊ちて樂を奏せんことを請ひたるも、秦王は尙承知せず、相如曰く、只今大王と臣との距離は僅か五步に過ぎず、拙者は頸の血を以て大王に濺ぎ奉らんと、秦王の左右に附添ひたる人々、主君の一大事と見て取り、刄を以て相如を殺さんとす、相如は彼等を睨みつけて叱りしかば、一同其勢ひに恐れて靡けり、是に於て秦王は不機嫌ながら已むを得ず一たび缻を擊ちしかば、相如は顧みて趙の御史を召び、記錄に書かせけるは、何年何月何日、秦王、趙王の爲に缻を擊つと、秦の群臣曰く、趙は十五个城を秦に獻じて秦王の壽を祝すべしと、藺相如も亦曰く、請ふ秦の都咸陽を趙王に獻じて其の壽を祝すべしと、斯くて秦王は宴會を終ふるまで趙を屈すること能はず、趙に於ても盛んに兵備を設けて秦に對したれば、秦も敢て手を出さゞりき、

如計曰、王不行、示趙弱且怯也、趙王遂行、相如從、廉頗送至境、與王訣曰、王行、度道里、會遇之禮畢、還不過三十日、三十日不還、則請立太子爲王以絕秦望、王許之、遂與秦王會澠池、

【講義】其後秦は趙を伐ちて石城を陷れ、明年復趙を攻めて二萬人を殺せり、秦王は此勢ひに乘じ使者を趙王の所に差遣し告げしむるやう、王と懇親を結ぶが爲に西河の外の澠池に於て會見致したしと、趙王は秦を畏れ、行くまじと思ひしが、廉頗、藺相如の二人相談して云ふ、王行かざる時は趙の弱と臆病とを示すこととなれば、枉げて秦の申込みを承諾するに若かずと、趙王は愈〻出發の運びに至り、相如隨行す、廉頗は趙王を送りて國境に至り、王と訣別して曰く、大王の行かるゝに就いて道程を數へ見る處、秦王と會見の禮を終へて歸國し給ふまで三十日に過ぎず、若し此の三十日を過ぎて歸り給はざるときは太子を立てゝ王となし、秦が大王を質として趙より利を得んとするの望みを絕ち申すべし、何卒此段許容あらせられたしと、趙王は之を許し、遂に秦王と澠池に會見せり、

【字解】西河外、西河の南を指す、

秦王飲酒酣、曰寡人竊聞趙王好音、請奏瑟、趙王鼓瑟、秦御史前書曰、某年月日、秦王與趙王會飲、令趙王鼓瑟、藺相如前曰、趙王竊聞秦王善爲秦聲、請奉盆缻秦王、以相娛樂、秦王怒不許、於是相如前進缻、因跪請秦王、秦王不肯擊缻、相如曰、五步之内、相如請得以頸血濺大王

國の方に留めて大王より問罪の兵を差向けらるゝが如きことをなさんや、臣は大王を欺き奉りし罪は誅に當ることを知れり、何卒湯鑊の刑を受け申さん、大王は群臣と能く御評議相成るべしと、

【字解】 褐、毛布、賤者の服、徑道、近路なり、湯鑊、釜うでの刑、

秦王與羣臣相視而嘻、左右或欲引相如去、秦王因曰、今殺相如、終不能得璧也、而絕秦趙之驩、不如因而厚遇之、使歸趙、趙王豈以一璧之故欺秦邪、卒廷見相如、畢禮而歸之、相如既歸、趙王以爲賢大夫、使不辱於諸侯、拜相如爲上大夫、秦亦不以城予趙、趙亦終不予秦璧、

【講義】 秦王は相如が璧をば趙に送り返せしと云ふを聞き、群臣と顏を見合せて驚き且つ怒れり、秦王の左右にありし人々は相如を表に引出して之を殺さんとせしに、秦王の曰く、今相如を殺したりとて璧を得るわけにゆかず、其上秦趙兩國の交際を絕つ次第なれば、それよりも此のまゝ厚く彼れを待遇して趙に歸らしむるが得策なり、趙王は何如にして一個の璧の爲に秦を欺かんやと、終に改めて相如を朝廷に召して謁見あり、禮を畢へて之を歸せり、相如已に國に歸りければ、趙王は彼れが使節となりて外國に辱められざりしは眞に賢大夫なりとて、之を上大夫に任ぜり、さて秦は城を趙に與へざりしかば、趙の方にても亦璧を秦に與へざりき、

【字解】 嘻、驚き怒る貌、

其後秦伐趙、拔石城、明年、復攻趙殺二萬人、秦王使使者告趙王、欲與王爲好、會於西河外澠池、趙王畏秦、欲毋行、廉頗藺相

も璧を上るべしと、秦王は考へ見る所、到底無理に璧を奪ひかねしかば遂に五日間物忌みすることを承諾に及び、其間相如を廣成の傳舍に逗留せしめぬ、

【字解】九賓、天下九大區畫の賓客を謂ふ、是れは元來王室の式なれども秦は僭して之に效ひしなり、

相如度秦王雖齋、決負約不償城、乃使其從者衣褐、懷其璧從徑道亡、歸璧于趙、秦王齋五日後、乃設九賓禮於廷、引趙使者藺相如、相如至、謂秦王曰、秦自繆公以來二十餘君、未嘗有堅明約束者也、臣誠恐見欺於王而負趙、故令人持璧歸、閒至趙矣、且秦彊而趙弱、大王遣一介之使至趙、趙立奉璧來、今以秦之彊而先割十五都予趙、趙豈敢留璧而得罪於大王乎、臣知欺大王之罪當誅、臣請就湯鑊、唯大王與羣臣熟計議之、

【講義】相如は縱令秦王が物忌みすとも、是れは形式に過ぎずして必ず約束に負き城を趙に與ふまじと豫想せしかば、己れの從者に毛布の衣を着せ璧を懷に入れ、間道より趙に逃げ歸らしめたり、秦王は斯かるべしとは知らずして、物忌み五日の後、九賓の大禮を堂下に設け相如を引見す、相如は出頭して秦王に申すやう、秦は繆公より以來二十餘君を經たれども、何れも堅く約束を守りたる君あらず、臣は實際大王の爲に欺かれて趙に申譯立たざることを恐れ、人に璧を持たして間道より趙に歸らしめたれば、此に璧をば所持致さず、其上、秦は強くして趙は弱ければ、大王が一人の使を趙に派遣し給はゞ、趙は立どころに璧を送り奉らん、今秦は强國なるに、秦の方より先づ十五城を割いて趙に與へなば、趙は何とて璧を自

に御廻しなされて、御心安だての臣と慰みになし給ふ、臣は大王が璧と交換の約束ある城を渡し給ふ思召しなきことを觀たるゆゑ、復び璧をば臣の手に取返せり、大王若し臣に迫りて此璧を取らんとし給ふならば、臣の頭は只今璧と諸共に柱に打ちつけ碎き申すべしと、斯く言ひながら相如は其璧を持ち柱をにらまへ、今にも柱に打ちつけんとせり、

【字解】 章臺、秦の王城中に在る臺の名、奏、進む、美人、宮女なり、前、進み出づる、驩、歡に同じ、齋戒、物忌みをなして身を清淨にすること、列觀、群臣と同じく之を觀て客視せざることを謂ふ、急、迫害するを謂ふ、

秦王恐其破璧、乃辭謝固請、召有司案圖、指從此以往十五都予趙、相如度秦王特以詐佯爲予趙城、實不可得、乃謂秦王曰、和氏璧、天下所共傳寶也、趙王恐不敢不獻、趙王送璧時、齋戒五日、今大王亦宜齋戒五日、設九賓於廷、臣乃敢上璧、秦王度之、終不可彊奪、遂許齋五日、舍相如廣成傳舍、

【講義】 秦王は相如が璧を碎かんことを恐れ、失禮の段を陳謝せし上、固く璧の受渡しを請ひ、其筋の役人を召し出し、地圖を披きて、此の處より向う十五个城を趙に與へんとて、其場所を指し示し丶も、相如は秦王が趙に城を與ふると云ふは殊更に虛僞を構ふるものにして、實際城を得ることは出來ざるべしと推測せしかば、秦王に言上するやう、抑、和氏の璧は天下何れの國に於ても傳へて寶とする所なり、趙王は大王を恐れて之を獻ぜざる次第にはあらざれども、趙王が璧を貴國に送るに就いては五日間物忌み致したれば、之に對して大王も五日間物忌みなし給ひ、九賓の禮を堂下に設け給ふべき道理なり、さすれば臣

可、於是趙王乃齋戒五日、使臣奉璧拜送書於庭、何者、嚴大國之威、以修敬也、今臣至、大王見臣列觀、禮節甚倨、得璧、傳之美人、以戲弄臣、臣觀大王無意償趙王城邑、故臣復取璧、大王必欲急臣、臣頭今與璧俱碎於柱矣、相如持其璧睨柱、欲以擊柱、

【講義】相如秦に來りければ、秦王は章臺の上に坐して謁見あり、相如は璧を持ちて秦王に捧呈せしかば、秦王は多年の望み叶ひたることとて大に喜び、段段と手渡しをなして傍らに侍したる美人及び左右近臣等に示したる處、彼等皆萬歲を呼びて秦王に慶を陳べぬ、相如は秦王が璧の代償たる城を趙に與ふる意志なきことを視て取りしかば、進み出でて言上しけるは、其璧に瑕あり、其箇所を大王に指示し奉らんと、秦王は欺かるとは氣附かずして璧を相如に渡ししかば、相如は其のまゝ璧を手に握り持ち、後に退りて柱をこだてに突立ちけるが、怒れる髮の毛は逆立ちて冠を衝き、秦王を睨んで云ひけるは、大王は此の璧を手に入れんと欲し給ひ、人を以て趙王に御書を送られしかば、趙王は悉く群臣を召して評議せしめたるに、群臣一同申すやう、秦は慾深く、國の强きを負み、實行の意志なき空言を以て璧を求む、彼れは城と交換すべしと云ふも、恐らくは之を與ふまじと、衆議は秦に璧を與へぬことに傾きたり、然るに臣は獨り以爲へらく、平民の交りに於てすら尙互ひに欺かざるに、まして大國が他を欺くことやあるべき、其上只一個の璧の爲に强國の機嫌を損ずることは宜しからずと、趙王は臣の意見に從ひ秦の請求を容るゝことに決せしかば、五日の間精進潔齋に及び、臣を使節として璧を持たせ、恭しく貴國の朝廷に書簡を差出すに至れり、何故となれば、大國の威を畏れて敬禮を整へたるなり、然るに今臣趙より來りて參朝すれば、大王には衆くの見物人の前に於て謁見あり、其禮節は甚だ尊大なるが上、璧を受取らるゝと、之を美人等

【講義】繆賢の推薦に因り趙王は相如を召出して謁見を賜ひ、問うて曰く、秦王は十五箇城を以て寡人の璧と交換せんことを請求し來りたるが、璧を與ふべきか何如にと、相如答へて云ふ、秦は強くして趙は弱きことなれば、許諾せざる譯にまゐらざるべしと、趙王又問うて云ふ、秦が吾が璧を取りたるまゝにて約束の城を吾國に引渡さゞるときは何如にすべきと、相如曰く、秦は城と璧との交換を申來れるを趙にて承諾せざれば、不條理は趙の方に在り、又趙が璧を秦に與へて秦が城を趙に與へざれば、不條理は秦の方に在り、此の二策を竝べて之を講究する所、寧ろ先方の請求を許容して不條理の罪を秦に負はす方宜しかるべしと、秦王曰く、誰れに此の使を命ずべきかと、相如云ふ、若し大王に於て適當の人物を御見當り之れなくば、臣は大切に璧を守りて秦に往き、秦より城を受取りて璧を秦に渡し申すべし、若し城が趙の物にならずば、臣は璧を滿足に持歸るべしと、趙王は是に於て相如を使者として璧を持たしめて秦に差遣しぬ、

【字解】必無人、何如にしても其人を得ざればと云ふ意、

秦王坐章臺、見相如、相如奉璧奏秦王、秦王大喜、傳以示美人及左右、左右皆呼萬歲、相如視秦王無意償趙城、乃前曰、璧有瑕、請指示王、王授璧、相如因持璧却立倚柱、怒髮上衝冠、謂秦王曰、大王欲得璧、使人發書至趙王、趙王悉召群臣議、皆曰、秦貪負其强、以空言求璧、償城恐不可得、議不欲予秦璧、臣以爲布衣之交尚不相欺、況大國乎、且以一璧之故、逆彊秦之驩不

らんと思召す處を以て見れば燕王と御近附きの儀と存ずるが、何如にして燕王を御承知なされたりやと、臣は彼れに語りて申候やう、余は嘗て大王が燕王と國境に會合ありし時隨行せし折柄、燕王は人なき所にて我が手を握り、汝と交りを結んで朋友とならんと申されたることあり、右の譯にて燕王と近附きになりたれば、參りて庇護を受けんとする也と、相如は臣の物語を承り臣に申すには、夫れ趙は强くして燕は弱し、而して君には趙王の寵幸を受け居らるゝが故に、燕王は君と關係を附けんとするのみ、今君が趙を逃げて燕に走らるゝ時は、燕は固より趙を畏るゝと故、其勢ひ必ず押切つて君を留置かず、君をば捕縛して趙に送返さん、其れよりも寧ろ肌を露はし斧質の下に身を伏せて刑罰を請はるゝが上策なり、斯くせらるゝならば、幸ひに免るゝを得るやも知れずと、臣は自分の考への淺墓なるを悟り、彼れの計に從ひたる處、大王に於かせられても幸ひに臣の罪を赦し給ひ、寵遇を蒙りて今日に及びし次第なり、臣は此時相如と申す男は勇士にて而も智謀ある者と存じたり、されば此度彼れを使節に用ひ給うて然るべしと、

【字解】肉袒、衣を脱し肉を露はし刑を受くること、斧質、質は鑕に同じ、

於是王召見問藺相如曰、秦王以十五城請易寡人之璧、可予不、相如曰、秦彊而趙弱、不可不許、王曰、取吾璧不予我城、奈何、相如曰、秦以城求璧而趙不許、曲在趙、趙予璧而秦不予趙城、曲在秦、均之二策、寧許以負秦曲、王曰、誰可使者、相如曰、王必無人、臣願奉璧往、使城入趙而璧留秦、城不入、臣請完璧歸趙、趙王於是遂遣相如奉璧西入秦、

贈り、何卒秦の十五箇城を以て此の和氏の璧と交換致したき由を陳べぬ、趙王は此の事に就き大將軍廉頗竝に諸大臣と評議に及びけるが、之を秦に與へんとすれば、秦より約束の十五城を得ること出來ずして、むざむざ欺かるゝの恐れあり、さりとて之を與ふまじとすれば、秦より軍隊を差向けて攻め伐たるゝの難儀あり、故に孰れとも決しかねたるが、兎も角秦に對して何等かの返答を爲さゞるべからず、因つて使命を奉ずべき人物を求めたれども、未だ適任者を得ず、然る處宦者の令繆賢の曰く、臣の家來藺相如こそ使命を果し申すべけれと、

【字解】　宦者令、宦官の取締りの如き者、舍人、家來なり、楚和氏璧、楚の卞和と云ふ者の發見せし名玉、

王問何以知之、對曰、臣嘗有罪、竊計欲亡走燕、臣舍人相如止臣曰、君何以知燕王、臣語曰、臣嘗從大王與燕王會境上、燕王私握臣手曰、願結友、以此知之、故欲往、相如謂臣曰、夫趙彊而燕弱、而君幸於趙王、故燕王欲結於君、今君乃亡趙走燕、燕畏趙、其勢必不敢留君、而束君歸趙矣、君不如肉袒伏斧質請罪、則幸得脫矣、臣從其計、大王亦幸赦臣、臣竊以爲其人勇士、有智謀、宜可使、

【講義】　趙王は繆賢に向ひ、汝は何如なる次第にて藺相如が此度の如き大役を勤むる器量あることを知りたるかと、繆賢答へて云ふやう、臣は嘗て罪を犯したる事之あり、大王の御咎めを恐れ、內々燕に逃亡致さんとて計畫致し居りし處、只今御薦め申上げたる臣の舍人相如は臣を差止めて申候には、君が燕に手賴

書を下に置き落涙せりと云ふ、樂臣公は黃帝、老子の道を學びしが、其本師を河上丈人と曰ふ、何處出の人なるか知る者なし、河上丈人は安期生に敎へ、安期生は毛翕公に敎へ、毛翕公は樂瑕公に敎へ、樂瑕公は樂臣公に敎へ、樂臣公は蓋公に敎へ、蓋公は齊の高密、膠西に於て敎へ、曹相國の師となれり、

【字解】 曹相國、宰相曹參なり、

廉頗藺相如列傳第二十一

廉頗者趙之良將也、趙惠文王十六年、廉頗爲趙將、伐齊大破之、取晉陽、拜爲上卿、以勇氣聞於諸侯、

【講義】 廉頗は趙の良將なり、趙の惠文王十六年に廉頗は趙の將軍となり、齊を伐ちて大に之を破り、晉陽の地を略取せり、其功により上卿に拜せられ、勇氣ありとの評判、列國に傳はれり、

【字解】 晉陽、初め衞の地なりしが、後、趙に屬す、

藺相如者趙人也、爲趙宦者令繆賢舍人、趙惠文王時、得楚和氏璧、秦昭王聞之、使人遺趙王書、願以十五城請易璧、趙王與大將軍廉頗諸大臣謀、欲予秦、秦城恐不可得、徒見欺、欲勿予、卽患秦兵之來、計未定、求人可使報秦者、未得、宦者令繆賢曰、臣舍人藺相如可使、

【講義】 藺相如は趙の人にて、同國の宦者の令繆賢の家來なりき、趙の惠文王の時、楚の和氏の璧を手に入れたる所、秦の昭王は之を傳へ聞き、何とかして我が物となさんと思ひければ、使を以て趙王に書簡を

曰華成君、華成君、樂毅之孫也、而樂氏之族、有樂瑕公、樂臣公、趙且爲秦所滅、亡之齊高密、樂臣公善修黃帝老子之言、顯聞於齊、稱賢師、

【講義】 樂閒、樂乘の二人は燕王が己れの計を用ひざりしことを怨みに思ひしかば、終に趙に留まりぬ、趙は樂乘を封じて武襄君となし、其翌年樂乘は廉頗と趙の爲に燕を圍みしが、燕の方より禮を厚くして和睦に及びしかば、圍みを解いて歸れり、此れより五个年の後趙の孝成王卒し、襄王の世となる、襄王は樂乘をして廉頗に代らしめければ、廉頗怒つて樂乘を攻め、樂乘之に敵せずして敗走せしが、廉頗も亦逃げて魏に入る、其後十六年にして秦は趙を滅ぼし、其後二十餘年、漢の高祖趙を通過し、樂毅の子孫殘り居るかと尋ねたるに、樂叔ある由を告ぐる者ありしかば、樂叔を樂鄉に封じ、號して華成君と曰へり、華成君は樂毅の孫なり、尚樂氏の一族に於ては樂瑕公、樂臣公あり、此等は趙が今にも秦に亡ぼされんとせし時、逃げて齊の高密に往けり、樂臣公は善く黃帝、老子の說を脩めて齊國の評判となり、賢師と稱せられき、

太史公曰、始齊之蒯通及主父偃、讀樂毅之報燕王書、未嘗不廢書而泣也、樂臣公學黃帝老子、其本師號曰河上丈人、不知其所出、河上丈人教安期生、安期生教毛翕公、毛翕公教樂瑕公、樂瑕公教樂臣公、樂臣公教蓋公、蓋公教於齊高密膠西、爲曹相國師、

【講義】 太史公曰く、始め齊の蒯通及び主父偃の二人は、樂毅の燕王に答へたる書狀を讀む度に必ず其

不相盡以告鄰里、二者寡人不爲君取也、

【講義】燕王は樂閒の計を用ひざりしことを殘念に思ひ後悔せしが、樂閒は其の時已に趙の國に在りければ、之に書狀を送りて曰く、昔し殷の紂王の時、箕子は用ひられざりしも、尙君の顏を犯して弛み怠ることなく、何とかして諫言の聽かれんことを冀へり、商容は其志達せずして徒らに己れの力を辱められながら、君主が改心せんことを希望せり、民心が離叛し、牢獄の囚人が自ら脫出するが如き無政府狀態となるに及び、箕子、商容の二人は退隱せり、故に紂王は暴惡の罪を負ひ、二人は忠聖の名を失はず、何となれば其憂患の極端に在りし者なり、今此方愚なりとは云へ、殷の紂王の暴逆ほどにはあらず、燕の人民は亂れたりとは云へ、殷民の甚しき程にはあらず、諺に云ふ、家內に口舌ありとても一々隣りへ言ひ告げぬものなりと、足下が此方を諫めざりしことと、趙に訴へたることとは足下の爲に取らざる所なりと、

【字解】商容不達、商容は紂を諫めたれども其志達せず、民志不入、人民の心、外に向ふを謂ふ、獄囚自出、罪人の取締りもつかず、亂れたるの甚しきことを謂ふ、室有語不相盡以告鄰里、一家の內にて言ひ合ふことありとも、此れは內々のことなれば其事柄を一一他人に吹聽することなし、二者、樂閒の諫めざりしことと、趙に奔りしこととを指す、

樂閒樂乘怨燕不聽其計、二人卒留趙、趙封樂乘爲武襄君、其明年、樂乘廉頗爲趙圍燕、燕重禮以和、乃解、後五歲、趙孝成王卒、襄王使樂乘代廉頗、廉頗攻樂乘、樂乘走、廉頗亡入魏、其後十六年、而秦滅趙、其後二十餘年、高帝過趙、問樂毅有後世乎、對曰、有樂叔、高帝封之樂鄉、號

國君樂閒、樂閒曰、趙四戰之國也、其民習兵、伐之不可、燕王不聽、遂伐趙、趙使廉頗擊之、大破栗腹之軍於鄗、禽栗腹樂乘、樂乘者、樂閒之宗也、於是樂閒奔趙、趙遂圍燕、燕重割地以與趙和、趙乃解而去、

【講義】 樂閒は燕に居ること三十餘年に及びけるが、燕王喜は其宰相栗腹の計を用ひて趙を攻めんと欲し、昌國君樂閒の意見を問ひける時、樂閒は答へて曰く、趙は四方の敵を相手に戰爭をなしつゝある國にて、其人民は何れも兵事に熟習するが故に、之を伐つは不可なりと、然るに燕王喜は樂閒の說を聞かずして遂に趙を伐ちたる處、趙は廉頗をして之を擊たしめ大に栗腹の軍を破り、栗腹と樂乘とを擒にせり、此の樂乘は樂閒の宗族なり、是に於て樂閒は趙に出奔しけるが、趙は遂に燕を圍み、燕は重ねて土地を割譲して趙と和議を結びしかば、趙の兵は圍みを解いて去りぬ、

【字解】 四戰之國、趙は數〻四方の敵を拒ぐが故に云ふ、但し趙は東は燕齊に隣り、西は秦、樓煩に接し、南は韓魏に界し、北は匈奴に迫る、

燕王恨不用樂閒、樂閒既在趙、乃遺樂閒書曰、紂之時、箕子不用、犯諫不怠、以冀其聽、商容不達、身祇辱焉、以冀其變、及民志不入、獄囚自出、然後二子退隱、故紂負桀暴之累、二子不失忠聖之名、何者、其憂患之盡矣、今寡人雖愚、不若紂之暴也、燕民雖亂、不若殷民之甚也、室有語、

ずして先王の迹を明かにするは、自分の身に取りて一番よき計なり、惡名を被らす所の誹に罹り、先王が賢を好み給ひし名譽を墜すことは臣の大に恐るゝ所なり、如何なる罪に遇ふやも知れざる場合、趙に用ひられたるを幸ひとして其手引きをなし燕を伐ちて利を謀るが如きは、義に於て決して爲すまじき所なり、

【字解】鴟夷、馬の革にて作りたる袋、之に子胥の死骸を容れて江に投じたるなり、不化、波濤の神となりしを謂ふ、離、カ、ルと訓ず、不測之罪、如何なる重き程度なりや、測り難き刑罰、

臣聞、古之君子、交絶不出惡聲、忠臣去國、不潔其名、臣雖不佞、數奉教於君子矣、恐侍御者之親左右之說、不察疏遠之行、故敢獻書以聞、唯君王之留意焉、

於是燕王復以樂毅子樂閒爲昌國君、而樂毅往來復通燕、燕趙以爲客卿、樂毅卒於趙、

【講義】臣聞く、古への君子は、縱令其友との交絶ゆるも其の人を惡しく云ふことなく、忠臣は本國を去ると雖も己れの潔白を表明して咎を君に歸することなしと、臣は不才なれども屢、君子より敎へを受けたるが故に、此の點は固より承知せり、大王に御附きの者が近臣の說に親しみ疎遠の行を察せざることを恐る、故に敢て書狀を上りて奏聞に及ぶ、唯大王之に心を留め給はんことをと、此の書狀を觀て燕の惠王も樂毅の他意なきことを知りしかば、樂毅の子樂閒を以て昌國君となし、斯くて樂毅も燕趙の間を往復して燕と關係を復するに至り、燕趙とも彼れを客卿とせしが、其後樂毅は趙に於て卒去せり、

【字解】侍御者、暗に燕王を指す、

樂閒居燕三十餘年、燕王喜用其相栗腹之計、欲攻趙、而問昌

始者、不必善終、昔伍子胥、說聽於闔閭、而吳王遠迹至郢、夫差弗是也、賜之鴟夷而浮之江、吳王不寤先論之可以立功、故沈子胥而不悔、子胥不蚤見主之不同量、是以至於入江而不化、夫免身立功、以明先王之迹、臣之上計也、離毀辱之誹謗、墮先王之名、臣之所大恐也、臨不測之罪、以幸爲利、義之所不敢出也、

【講義】 臣聞く、賢聖の君は、功業一たび立ちし後は決して弛み攙むことなし、それゆゑ其名は春秋に著はれ、先き見えする士は、美名一たび成りし後は之を毀ることをせず、それゆゑ後世に稱せらると、先王が齊の怨みを報じ、燕の恥を雪ぎ、萬乘の强國たる齊を打平らげ、太公望より湣王に至るまで、凡そ八百餘年間に積み蓄へたる財寶を取收め、群臣を置き棄てゝ崩御せられし日迄も、御遺しありし敎令も行き屆き、政治を執り國務に任ずる群臣等、法令を修め、庶孽を愼み、敢て粗略にすることなく、其政道が下等の民まで延き及ぶが若き、何れも後世の敎訓となるに足れり、臣之を聞く、善く事を起す者は善く成就するとは限らず、善く事を始むる者は善く終りを全うするとは限らずと、昔し伍子胥は闔閭に其說を聽き用ひられ、其結果吳王は遠く楚の都の郢にまで攻入ることを得たり、然るに闔閭の子夫差に及んでは子胥の言を善しとせず、自殺せしめし上、之に馬の革の嚢を賜ひて死骸を江水に投込みたり、吳王は子胥が前に論じたる計略が功を立つべきを知らず、故に子胥を江水に沈めて後悔せず、子胥も亦早く己が君主たる闔閭と夫差との器量の異なることを知らず、之がため江中に沈められて靈魂が怨みを含んで消せざるに至る、夫れ誅戮を避けて身を免れ、從來の勳功に傷を附け

於元英、故鼎反乎磨室、薊丘之植植於汶篁、自五伯已來、功未有及先王者也、先王以爲慊於志、故裂地而封之、使得比小國諸侯、臣竊不自知、自以爲奉命承教、可幸無罪、是以受命不辭、

【講義】　天の道理と先王の威靈とにより、河北の地より先王に隨行して濟上に進み、濟上の軍は命を受けて齊を擊ち、大に齊の軍隊を打破り、身輕く出立ちたる精銳の兵は勇み進み、長追して齊の國都に押寄せしかば、齊は逃げて莒の城に走り、僅かに身一つにて落ち延びたり、此時齊の財寶や車や甲冑や珍奇なる物は盡く分捕りして燕に持ち來り、齊の器物は寧臺に竝べ、大呂は元英殿に陳し、以前燕の所有なりし鼎は磨室に戻り、薊丘の植物には齊の汶水附近なる竹田を移す等、五霸より以來、先王の大功に及ぶ者なき程なり、先王は十分滿足に思召されければ、土地を裂いて臣を呂國に封じ、小諸侯と同格の地位を得しめ給へり、臣は竊かに自ら之を受くべき功ありや否やを知らざれども、考へ見るに、辭令に從ひ御沙汰を承くれば御咎めを受けざるべしと、之がため命を受けて辭退致さゞりしなり、

【字解】　寧臺、燕の臺なり、大呂、齊の寶物なる鐘の名、元英、燕の宮殿の名、磨室、燕の宮名、薊丘、燕の都、慊、滿足なり、

臣聞賢聖之君、功立而不廢、故著於春秋、蚤知之士、名成而不毀、故稱於後世、若先王之報怨雪恥、夷萬乘之彊國、收八百歲之蓄積、及至弃羣臣之日、餘敎未衰、執政任事之臣、修法令、愼庶孼、施及乎萌隸、皆可以敎後世、臣聞之善作者、不必善成、善

遺事也、練於兵甲、習於戰攻、王若欲伐之、必與天下圖之、與天下圖之、莫若結於趙、且又淮北宋地、楚魏之所欲也、趙若許而約四國攻之、齊可大破也、先王以爲然、具符節南使臣於趙、顧反命起兵擊齊、

【講義】先王は臣に命ぜらるゝやう、我れは齊に對して怨み重なり怒り深し、故に吾が國力の微弱なるを顧みず偏へに齊を伐ちて怨みを霽らさんとすと、臣は言上すらく、夫れ齊は桓公が霸を立てたる事業殘り居ると共に、最も優れたる遺風もあり、武器は錬れ、戰爭には熟せり、中々單獨にて敵待することは思寄らざれば、大王若し之を伐たんとの思召しならんには、天下の列國と共同して之を圖り給へ、而して天下の列國と之を圖るには、先づ趙と結託するが第一なり、且つ目下齊の領土内にある淮北と宋との地は楚と魏との欲する所なれば、趙が若し吾が提議を承諾せば、楚魏とも約束を定め、此の燕と共に四箇國同盟して之を攻むるときは、齊は大に破ることを得べしと、先王は其通りなりと思召され、使臣の持つべき割符、小旗等を取り揃へ、使節として臣を趙に遣はされしが、反りて報告を申上げ、兵を起して齊を擊てり、

【字解】齊霸之餘業、桓公天下に霸たりしより其國强大にして、田氏其餘業を承く、

以天之道、先王之靈、河北之地、隨先王而擧之濟上、濟上之軍、受命擊齊、大敗齊人、輕卒銳兵、長驅至國、齊王遁而走莒、僅以身免、珠玉財寶、車甲珍器、盡收入於燕、齊器設於寧臺、大呂陳

察能而授官者、成功之君也、論行而結交者、立名之士也、臣竊觀先王之擧也、見有高世主之心、故假節於魏、以身得察於燕、先王過擧厠之賓客之中、立之羣臣之上、不謀父兄、以爲亞卿、臣竊不自知、自以爲奉令承敎、可幸無罪、故受令而不辭、

【講義】樂毅の燕の惠王に返答せし書狀に曰く、臣は不才にして王命を遵奉して左右近親の心に順ふこと能はず、先王の御目鑑に傷をつけ足下の義を害せんことを恐れたるに因り、燕を脫走して趙に歸せり、然る處今足下は人をして臣の罪を擧げて之を責めしめ給ふ、臣は御側に侍する所の者共が先王の臣を寵用し給ひたる理由を知らず、又臣が先王に事へ奉りたる心底を明かに知らざることを恐るゝが故に、敢て書面を以て御答へを致す次第なり、臣聞く、賢聖なる君主は何如に親身の者と雖も私に國家の祿を授くることなく、功の多き者は之を賞し、其能く任に當る者は適處に置く、故に能力を察して官を授くる者は功を成すの君なり、行狀を論じて交を結ぶ者は名譽を立つるの士なり、臣竊かに先王の擧動を觀奉るに、同時の君主の上に出でんとするの御志しあり、故に假りに魏の使節となりて燕に來り、先王より御見出しを蒙るを得たり、先王は過ちて臣を賓客の中に入れられ、群臣の上に立たしめ、上は父兄にも謀らずして亞卿となし給ひぬ、臣は自ら其の資格ありや否やを知らざれども、辭令を戴き御沙汰に從はゞ御咎めを蒙むることも有るまじと存じたれば、辭令を承けて辭退仕らざりしなり、

【字解】厠、マジフなり、

先王命之曰、我有積怨深怒於齊、不量輕弱、而欲以齊爲事、臣曰、夫齊霸國之餘業、而最勝之

遂に卽墨の下に於て騎劫を破り、各處に轉戰して燕軍を追擊して河上に至り、盡く齊の城を回復し、襄王を莒より迎へて臨菑に入れぬ、燕の惠王は後日に至り、騎劫をして樂毅に代らしめたる爲に味方の敗北を來し、將軍は討死に及び、折角手に入れたる齊を失ひしことを悔ゆると共に、樂毅が趙に降りしを怨み、且つ又趙が樂毅を用ひ燕の疲弊に乘じて攻め來らんことを恐れければ、人を以て樂毅を詰問し、併せて陳謝せしめたるが、其口上に云ふ、先王は我が燕全體を擧げて將軍に委ね、將軍は燕の爲に齊を破り先王の讎を報い、其壯烈なる、天地も震動せざるなし、此方何として一日たりとも將軍の功を忘れ得んや、會、先王、羣臣を棄てゝ此の世を去られ、此方新たに位に卽きたるが、左右の臣下此方を誤り、爲に將軍の感情を害せり、抑、此方が騎劫をして將軍に代らしめたるは、他意あるに非ず、將軍が久しく野外に辛苦を嘗むるが故に將軍を召び還し、姑らく休養をなさしめつつ軍の事を相談せんとしたるのみ、然るに將軍には此方の旨意を聞き違へられ、此方と折合ひ宜しからざる爲なりと考へられ、遂に燕を捐てゝ趙に身を寄せられたるが、將軍が自身の爲に計るは宜しけれども、其れにては何を以て先王が將軍を待遇ありし本意に報いらるゝやと、

【字解】棄群臣、君上の卒去すること、左右誤寡人、樂毅を讒せる人々を謂ふ、暴露、野ざらしとなること、

樂毅報遺燕惠王書曰、臣不佞、不能奉承王命、以順左右之心、恐傷先王之明、有害足下之義、故遁逃走趙、今足下使人數之罪、臣恐侍御者不察先王之所以畜幸臣之理、又不白臣之所以事先王之心、故敢以書對、臣聞賢聖之君、不以祿私親、其功多者賞之、其能當者處之、故

樂毅知燕惠王之不善代之、畏誅、遂西降趙、趙封樂毅於觀津、號曰望諸君、尊寵樂毅以警動於燕齊、齊田單後與騎劫戰、果設詐誑燕軍、遂破騎劫於卽墨下、而轉戰逐燕、北至河上、盡復得齊城、而迎襄王於莒、入于臨菑、燕惠王後悔使騎劫代樂毅、以故破軍亡將失齊、又怨樂毅之降趙、恐趙用樂毅而乘燕之弊以伐燕、燕惠王乃使人讓樂毅、且謝之曰、先王擧國而委將軍、將軍爲燕破齊、報先王之讎、天下莫不震動、寡人豈敢一日而忘將軍之功哉、會先王棄羣臣、寡人新卽位、左右誤寡人、寡人之使騎劫代將軍、爲將軍久暴露於外、故召將軍且休計事、將軍過聽、以與寡人有隙、遂捐燕歸趙、將軍自爲計則可矣、而亦何以報先王之所以遇將軍之意乎、

【講義】 樂毅は燕の惠王が己れに惡意を抱いて更代せしめたることを知りしかば、誅を畏れて西の趙へ降り、趙は樂毅を封じて望諸君とし、之を尊敬し寵愛して燕、齊を警動せり、樂毅が已に趙に奔りし後、齊の將軍田單は樂毅の後任として燕軍を率ゐたる騎劫と戰ひしが、豫定の如く詐の謀を設けて燕軍を欺き、

國君となす、

於是燕昭王收齊鹵獲以歸、而使樂毅復以兵平齊城之不下者、樂毅留徇齊五歲、下齊七十餘城、皆爲郡縣以屬燕、唯獨莒卽墨未服、會燕昭王死、子立爲燕惠王、惠王自爲太子時、嘗不快於樂毅、及卽位、齊之田單聞之、乃縱反閒於燕曰、齊城不下者兩城耳、然所以不早拔者、聞樂毅與燕新王有隙、欲連兵且留齊、南面而王齊、齊之所患、唯恐他將之來、於是燕惠王固已疑樂毅、得齊反閒、乃使騎劫代將、而召樂毅、

【講義】燕の昭王は齊の戰利品を取り纏めて歸り、樂毅をして復び兵を以て齊の城の中にて未だ降らざるものを平げしむ、樂毅は齊に留まりて土地を略すること五歲、其間に齊の七十餘城を下し、皆郡縣として之を燕の版圖に組入れしが、唯莒と卽墨とのみは未だ降らず、其中燕の昭王は死去に及び、太子立ちて位に卽く、是れを燕の惠王となす、惠王は太子にて在りし時より樂毅を面白からず思ひ居れり、齊の田單は之を聞き、反閒を燕に放ちて曰く、齊の城にて燕に下らざる者は只兩城のみ、然るに早く之を陷さゞる所以は何如にと云ふに、聞く所によれば樂毅は燕の新君と仲惡しきを以て戰爭を長引かせ、齊に居据り南面して齊に王たらんと欲するが爲なり、されば齊の患ふる所は他の將軍の來ることにて、其れのみを恐ると、是に於て燕の惠王は夙に樂毅を疑ひ居りし所へ齊の反間を受けたることとて、騎劫と云ふ者を將軍として樂毅と更代せしめ、樂毅を召還せり、

の昭王は此の有樣を見て樂毅に齊を伐つべき計を問ふ、樂毅答へて云ふ、齊は霸業を成したる國の後にて、地は廣く人は衆き故、燕の獨力にては容易に攻め難し、大王是非とも齊を伐たんと思召し給ふならば、趙及び楚魏と同盟するに若くはなしと、是に於て燕の昭王は樂毅を趙に遣はし、惠文王と條約を取り結ばしめ、別に使を以て楚魏との連合を謀らしめ、趙より齊を伐つの利益を餌として秦を引込むやうに仕向けたるが、諸侯は齊の湣王の驕慢暴虐を害とせしかば、何れも爭ひて合從をなし、燕と與に齊を伐つことを諾せしかば、樂毅は歸國して其旨を報告せり、

燕昭王悉起兵、使樂毅爲上將軍、趙惠文王以相國印授樂毅、樂毅於是幷護趙楚韓魏燕之兵以伐齊、破之濟西、諸侯兵罷歸、而燕軍樂毅獨追至于臨菑、齊湣王之敗濟西、亡走保於莒、樂毅獨留徇齊、齊皆城守、樂毅攻入臨菑、盡取齊寶財物祭器、輸之燕、燕昭王大說、親至濟上勞軍、行賞饗士、封樂毅於昌國、號爲昌國君、

【講義】燕の昭王は全國の兵員全體を徵發し、樂毅をして上將軍たらしめたる處、趙の惠文王も宰相の印を以て樂毅に授けたり、樂毅は是に於て趙楚韓魏燕五箇國の兵を連合して齊を伐ち、之を濟河の西に打破り、列國の兵は何れも退去せしも、燕軍のみは樂毅統帥の下に追擊して臨菑に至れり、齊の湣王は濟河の西にて敗軍するや逃走して莒の城を保ち、樂毅は獨り留まりて齊の地を略せり、齊の城は皆籠城に及びけるが、樂毅は臨菑に攻め入り、盡く齊の寶物貨財並に祭器を取り、之を燕に輸送せしかば、燕の昭王は大に悅び、自身濟上に至りて軍隊を慰勞し賞を行ひ士を振舞へり、昭王は樂毅を昌國に封じ、號して昌

も其實は賓なり、危國の臣は、其名臣なれども其實は虜なり、今王將に自ら東面し目指氣使して以て臣を求めんとす、則ち厠役の才至らん、南面朝に聽き揖讓の理を失はず以て臣を求めば、則ち人臣の才至らん、北面禮を等しうし之に乘ずるに勢を以てせず以て臣を求めば、則ち朋友の才至らん、西面逡巡以て臣を求めば、則ち師傅の才至らん、誠に王霸と道を同じうせんと欲せば、隗請ふ天下の士の爲に路を開かんと、是に於て常に隗を置いて上卿となす、

當是時、齊湣王彊、南敗楚相唐昧於重丘、西摧三晉於觀津、遂與三晉擊秦、助趙滅中山、破宋、廣地千餘里、與秦昭王爭重爲帝、已而復歸之、諸侯皆欲背秦而服於齊、湣王自矜、百姓弗堪、於是燕昭王問伐齊之事、樂毅對曰、齊霸國之餘業也、地大人衆、未易獨攻也、王必欲伐之、莫如與趙及楚魏、於是使樂毅約趙惠文王、別使連楚魏、令趙嚪秦以伐齊之利、諸侯害齊湣王之驕暴、皆爭合從與燕伐齊、樂毅還報、

【講義】此の時に當り、齊の湣王は兵力强くして、南は楚の宰相唐昧を重丘に破り、西は三晉を觀津に摧き、遂に三晉を味方に附けて之と同盟軍を作り、共に秦を擊ち、又趙を助けて中山を滅ぼし、宋を打破り、版圖を擴げたること千餘里に及び、秦の昭王と優勢を爭ふ、一たび帝號を唱へしが、程經て之を歸せり、齊は此の如き勢ひなりしかば、諸侯は何れも秦に背いて齊に服せんとせり、されば湣王は自ら誇り、大望際限なかりしかば、人民は殆んど之に堪へざりき、燕

趙適魏、聞燕昭王以子之之亂、而齊大敗燕、燕昭王怨齊、未嘗一日而忘報齊也、燕國小辟遠、力不能制、於是屈身下士、先禮郭隗、以招賢者、樂毅於是爲魏昭王使於燕、燕王以客禮待之、樂毅辭讓、遂委質爲臣、燕昭王以爲亞卿、久之、

【講義】樂毅は其先祖を樂羊と曰ふ、樂羊は魏の文侯の將軍となり、中山を伐ちて之を取る、魏の文侯は彼れの功を賞し、之を靈壽の地に封ず、樂羊死して其所領の靈壽に葬り、其子孫は其まゝ靈壽に作居せり、後年に至り中山は復活して一國となりしが、趙の武靈王の時に至り、復び中山を滅ぼす、而して樂羊の子孫に樂毅と云ふ者あり、樂毅は賢智ありて兵を好みしが、趙人は彼れを擧げ用ひぬ、武靈王が沙丘の亂あるに及び、趙を去りて魏に赴けり、時に燕の昭王は子之の亂に乘じて齊が大に燕を破りたるを怨み、一日として齊に復讐の事を忘れず、然れども燕は小國なる上僻遠の國にして、齊を制する力なかりしかば、身を屈し士に下り、先づ郭隗を禮遇し、其れに因つて賢者を招く、樂毅は此の事を聞きしかば、魏の昭王の爲に使節となりて燕に赴きし處、燕王は客分の禮を以て之を待遇せしが、樂毅は之を辭讓し、遂に贄を差出して燕の臣下となる、燕の昭王は樂毅を亞卿とて大臣の次位に置き、暫く年月を經過せり、

【字解】靈壽、中山に屬す、復滅中山、中山は魏に滅ぼされたりと雖も、尚祀を絶たず、故に復興するを得たりし處、趙の武靈王に至りて復之を亡ぼせしなり、沙丘之亂、趙世家に出づ、沙丘は趙の地なり、先禮郭隗、說苑に云ふ、燕の昭王、隗に問うて曰く、寡人地狹く民寡し、齊人は薊の八城を取り、匈奴、樓煩の下に驅馳す、孤の不肖を以て宗廟を承くるを得、社稷の危亡を恐る、之を存する道ありやと、隗曰く、帝者の臣は、其名臣なれども其實は師なり、王者の臣は、其名臣なれども其實は友なり、霸者の臣は、其名臣なれど

所爲說力少也、及二人羇旅入秦、繼踵取卿相、垂功於天下者、固彊弱之勢異也、然士亦有偶合、賢者多如此二子、不得盡意、豈可勝道哉、然二子不困戹、惡能激乎、

【講義】太史公曰く、韓子に、長き袖の者は兎角に舞ひをなし、錢を多く所持する者は兎角に品物を買ひ求むと言へり、此の語は實に尤もなる言草なり、范睢と蔡澤との二人は世間にて云ふ一切の辯士なり、然れども其初め天下の諸侯を游說したれども、年寄りて頭髮の白くなるまでも己れの說を用ふべき人君に出遇はざりしは、彼等の計策が拙なるが爲に非ずして、其相手として說きし所の者の力少ければなり、二人が旅客となりて秦に入るに及びて、足跡を連ねて大臣宰相の位を取り、功を天下に垂れたる者は、他の諸侯と秦との强弱の勢ひが異なればなり、然れども士に廻り合せと云ふことあり、世には此の二人の如き賢智ありながら、志を遂ぐるを得ざる者多きことなるが、豈に言ふに堪へんや、然れども此の二人と雖も若し困窮して行き詰らざりせば、何とて激昂奮勵して此に至ることあらんや、

【字解】韓子、韓非子なり、

樂毅列傳第二十

樂毅者、其先祖曰樂羊、樂羊爲魏文侯將、伐取中山、魏文侯封樂羊以靈壽、樂羊死、葬於靈壽、其後子孫因家焉、中山復國、至趙武靈王時、復滅中山、而樂氏後有樂毅、樂毅賢好兵、趙人擧之、及武靈王有沙丘之亂、乃去

之、拜爲客卿、應侯因謝病、請歸相印、昭王彊起應侯、應侯遂稱病篤、范雎免相、昭王新說蔡澤計畫、遂拜爲秦相、東收周室、蔡澤相秦數月、人或惡之、懼誅、乃謝病、歸相印、號爲綱成君、居秦十餘年、事昭王孝文王莊襄王、卒事始皇帝、爲秦使於燕、三年而燕使太子丹入質於秦、

【講義】 其後五六日を經て范雎は參內をなし、秦の昭王に言上すらく、客にて新たに山東より參りたる者あり、其名を蔡澤と申候が、其人は辯舌の士にて、三王の事や五霸の業や世俗の變に精通致し居り、此の秦國の政治を託するに足るべき人物に之れあり、臣が是れまで遇ひたる人は甚だ多數なれども彼れに及ぶ者なく、臣も彼れに若かず、敢て此の儀を奏聞致すと、秦の昭王は蔡澤を召して謁見を賜ひ、其說を聞いて大に滿足し、拜して客卿とす、范雎は因つて病氣を申立て宰相を辭したれども、昭王は無理に范雎を引出して留任せしめんとしたれども、范雎は究竟病重しと稱し、其職を免ぜられぬ、昭王は今度蔡澤の計畫を悅び、彼れを秦の宰相に任じ、東、周室を取込みしが、蔡澤宰相となると數月にして或る人讒言をなしゝかば誅戮を恐れ、病氣を申立てて宰相の印を歸し、號して綱成君となす、秦に居ること十餘年、昭王、孝文王、莊襄王に事へ、卒に始皇帝に事へ、秦の使となりて燕に赴き、三年にして燕は太子の丹をして秦に人質として差出すこととなりぬ、

太史公曰、韓子稱長袖善舞、多錢善賈、信哉是言也、范雎蔡澤、世所謂一切辯士、然游說諸侯、至白首無所遇者、非計策之拙、

之、應侯曰、善、吾聞欲而不知止、失其所以欲、有而不知足、失其所以有、先生幸教雎、敬受命、於是乃延入坐、爲上客、

【講義】吾れ聞く、水を鏡として之に寫し見るときは面の容を見、人を鑑として之に寫し見るときは吉と凶とを知ると、書經に成功の下には久しく處る可からずとあり、彼の四人の禍は何の點に之れありや、成功の下に長く處りたるが爲のみ、されば貴下には何故今の間に宰相の印を歸し、賢者を後任に推薦して此の任を授け、退いて巖穴に住ひ水の流れを眺めて暮し給はゞ、必ず伯夷の廉ありて長く應侯となり、世々孤と稱して王公の資格を失はず、斯くて許由や延陵の季氏の位を讓りたる美德と、王子喬、赤松子の如き壽とあるべし、禍を受けて終ると、孰れか願はしきぞ、貴下は孰れを取られんとするか、若し忍んで自ら位を離るゝことと出來ず、疑つて自ら處決することと出來ざるときは、必ず彼の四人の禍あらん、易に亢龍は悔ありと曰へり、是れ上つて下る能はず、伸びて屈む能はず、往きて返る能はざる者を巾すとなり、何卒貴下には篤と御勘考ありたしと、范雎曰く、善し、吾れ聞く、欲して止まるを知らざれば其欲する所を失ひ、有して足るを知らざれば其有する所を失ふと、先生仕合せに御教示下されたれば敬んで仰せに從はんと、是に於て蔡澤を案内して奥座敷に坐せしめ、之を上客とせり、

【字解】亢龍有悔、易の乾卦上九の爻の辭、亢龍は登りつめたる龍なり、

後數日、入朝、言於秦昭王曰、客新有從山東來者、曰蔡澤、其人辯士、明於三王之事、五伯之業、世俗之變、足以寄秦國之政、臣之見人甚衆、莫及、臣不如也、臣敢以聞、秦昭王召見與語、大說

斬范中行之塗、六國不得合從、棧道千里、通於蜀漢、使天下皆畏秦、秦之欲得矣、君之功極矣、此亦秦之分功之時也、如是而不退、則商君白公、吳起大夫種是也、

【講義】 今貴下は秦の宰相となられ、己れの席を下ることなく、廊廟の中を出でずして計謀を運らされ、坐して諸侯を制し、利は三川にまで發展して宜陽を充實せしめ、羊腸の險を破り太行の道を塞ぎ、又范氏、中行氏の塗を絕ち切り、六國は合從することを得ず、棧道は千里も遠く蜀漢に通じ、天下をして皆秦を畏れしむ、秦の目的は達し、貴下の功業は極まれり、此れ亦秦が功を分つの時なり、若し此の如くなるに尙退かざるときは、彼の商君や白公や吳起や大夫種に異らじ、

【字解】 此亦秦之分功之時也、范雎獨り功を專らにすべからざるを謂ふ、白公、白起なり、

吾聞之、鑒於水者、見面之容、鑒於人者、知吉與凶、書曰、成功之下、不可久處、四子之禍、君何居焉、君何不以此時歸相印、讓賢者而授之、退而巖居川觀、必有伯夷之廉、長爲應侯、世世稱孤、而有許由延陵季子之讓、喬松之壽、孰與以禍終哉、卽君何居焉、忍不能自離、疑不能自決、必有四子之禍矣、易曰、亢龍有悔、此言上而不能下、信而不能詘、往而不能自返者也、願君孰計

稽之危、以亡爲存、因辱爲榮、墾草入邑、辟地殖穀、率四方之士、專上下之力、輔句踐之賢、報夫差之讎、卒擒勁呉、令越成霸、功已彰而信矣、句踐終負而殺之、此四子者、功成不去、禍至於此、此所謂信而不能詘、往而不能返者也、范蠡知之、超然辟世、長爲陶朱公、君獨不觀夫博者乎、或欲大投、或欲分功、此皆君之所明知也、

【講義】大夫種は越王の爲に深遠の計略を運らし、越王をして會稽山の厄難を免れしめ、亡ぶべきをば維持して、不名譽をば榮譽に仕向け、草原を開墾して離散せし人民を充滿する程に居住せしめ、土地を開き穀を殖ゑ、四方の士を率ゐ、上下の力を專にし、句踐の賢を輔けて夫差の讎を報い、終に勁き呉の君を虜にし、越をして霸業を成さしめたるが、其功已に彰はれて人も之を信ぜり、然るに句踐は其恩に背いて之を殺せり、此の四人は功成りし後去ることを知らずして其地位に戀々とせしため、禍ひ此に至れり、此れ世に申す、伸びたぎりにて屈むこと出來ず、往いたぎりにて返る能はざるものなり、范蠡は之を知れり、故に超然として世を避け長く陶朱公となれり、貴下に於ては彼の双六をなす者を見給はずや、或は大勝負をなし、或は少しづつ勝を收めんとするは、此れ貴下の明かに知らるゝ所なり、

【字解】入邑、入は猶充の如し、信而不能詘、信は伸なり、詘は屈なり、

今君相秦、計不下席、謀不出廊廟、坐制諸侯、利施三川、以實宜陽、決羊腸之險、塞太行之道、又

【講義】楚の地は方數千里の大國にして、戟を持する所の戰士は百萬人もあり、然るに白起は僅かに數萬人の兵を率ゐて楚と戰ひしが、一たび戰つて鄢郢を擧げて夷陵を焚き、二たび戰つて南の方蜀漢を幷せ、又韓魏の地を通り越して强國の趙を攻め、北方の戰ひに於ては馬服君を坑埋にし、四十餘萬の大兵を屠りて之を長平の下に鏖とし、流るゝ血は川の如く、わめく聲は雷の如くなりき、遂に入つて邯鄲を圍み、秦をして帝王の業を有せしめぬ、元來楚趙は天下の强國にして秦の仇敵なり、然るに是れより以後、楚趙は皆畏れ服して敢て秦を攻めざるもの、是れ白起の勢なり、彼れが服せし所の城は七十餘に及び、功已に成れり、然るに劍を賜はりて杜郵に死せり、

【字解】靁、雷に同じ、

吳起爲楚悼王立法、卑減大臣之威重、罷無能、廢無用、損不急之官、塞私門之請、一楚國之俗、禁游客之民、精耕戰之士、南收楊越、北幷陳蔡、破橫散從、使馳說之士、無所開其口、禁朋黨以勵百姓、定楚國之政、兵震天下、威服諸侯、功已成矣、而卒枝解、

【講義】吳起は楚の悼王の爲に法を立て、大臣の威力重きに過ぐとて之をへつり、無能を罷め、無用を廢し、不急の官を減じて私門の請を塞ぎ、楚國の俗を一樣にして游民を禁じ、耕し且つ戰ふ所の士を精銳にせしが、斯くて南は楊越を取り込み、北は陳蔡を幷せ、連衡を破り合從を散じ、游說家をして其口を開くことなからしめ、朋黨を禁じて百姓を勵まし、楚國の政を定め、兵は天下に震ひ、威は諸侯を服せり、功已に成りたる處、終に枝解の刑に遇へり、

【字解】卑減、引下げへらす、破橫散從、秦と五國との間に獨立すること、馳說、游說なり、枝解、身首手足斬られて別々になること、

大夫種爲越王深謀遠計、免會

生民之業、而一其俗、勸民耕農利土、一室無二事、力田稸積、習戰陳之事、是以兵動而地廣、兵休而國富、故秦無敵於天下、立威諸侯、成秦國之業、功已成矣、而遂以車裂、

【講義】彼の商君は秦の孝公の爲に法令を明にし、姦惡の根本を禁じ、功ある者は尊き爵位を與へて之を賞し、罪ある者は其れ〴〵之を罰し、權衡を平にし度量を正し、輕重を調へ、阡陌を決裂し、それに因つて人民の業を靜にして其俗を一にし、民に耕農を勸めて土地の利を擧げ、一室に二事なく、田畝に力を入れて蓄積をなし、戰爭の事を習はす、之が爲に兵を動かす時は版圖廣がり、兵を休ふ時は國家富む、故に秦は天下に敵なく、威力を諸侯に建て、秦國の業を成せり、斯く功已に成りて商君は遂に車裂の刑に遇ひぬ、

【字解】調輕重、權衡の事を重複して言ひたる也、阡陌、阡は南北、陌は東西、田を分界する所の縱橫の路、

楚地方數千里、持戟百萬、白起率數萬之師、以與楚戰、一戰擧鄢郢、以燒夷陵、再戰南幷蜀漢、又越韓魏而攻彊趙、北坑馬服、誅屠四十餘萬之衆、盡之於長平之下、流血成川、沸聲若雷、遂入圍邯鄲、使秦有帝業、楚趙天下之彊國、而秦之仇敵也、自是之後、楚趙皆懾伏不敢攻秦者、白起之勢也、身所服者七十餘城、功已成矣、而遂賜劍死於杜郵、

志不溢、行不驕、常與道俱而不失、故天下承而不絕、昔者齊桓公九合諸侯、一匡天下、至於葵丘之會、有驕矜之志、畔者九國、吳王夫差、兵無敵於天下、勇彊以輕諸侯、陵齊晉、故遂以殺身亡國、夏育太史噭叱呼駭三軍、然而身死於庸夫、此皆乘至盛而不返道理、不居卑退處儉約之患也、

【講義】且つ夫れ翠や鵠や犀や象や、此等の禽獸の處る所の場所は人に取られて命を失ふやうなる場所より遠き處に居らぬにはあらず、然るに死する所以のものは餌に惑へばなり、蘇秦や智伯の智は辱を避け死に遠かるに足らざるには非ず、而るに其死せし所以は飽くことを知らざる貪慾に惑ひたればなり、之が爲に聖人は禮を制し欲を節して、租稅を人民より取上ぐるに一定の限度あり、人民を使用するには彼れの生活の妨害とならざる時期を以てし、人民を用ふるにも止まるところあり、故に志は溢れず、行は驕らず、常に道と竝行して離るゝことなく、天下之を戴いて長く絕えず、昔し齊の桓公は九たび諸侯を會合し一たび天下を廓淸せしが、葵丘の會に至りて驕慢の心ありしがため離畔するもの九箇國あり、吳王夫差は天下に敵なく、勇强にして諸侯を輕んじ齊晉を陵げり、其結果、遂に身を殺し國を亡ぼせり、夏育、太史噭は大に叱咤して三軍を駭かせり、然るに此の如き勇士なるにも拘はらず凡庸の人に殺されたり、此等の人々は何れも極盛の勢ひに乘じて道理に返らず、卑退儉約に身を置かざりし爲なり、

夫商君爲秦孝公明法令、禁姦本、尊爵必賞、有罪必罰、平權衡、正度量、調輕重、決裂阡陌、以靜

之、語曰、日中則移、月滿則虧、物盛則衰、天地之常數也、進退盈縮、與時變化、聖人之常道也、故國有道則仕、國無道則隱、聖人曰、飛龍在天、利見大人、不義而富且貴、於我如浮雲、今君之怨已讎、而德已報、意欲至矣、而無變計、竊爲君不取也、

【講義】蔡澤曰く、今貴下の主君が忠臣を親み、舊縁の者を忘れざることは孝公や悼王や句踐に及ばざるに、貴下の功績、主君の貴君に對する愛情信用寵幸の程度は又商君、吳起、大夫種に及ばず、主君の性質と貴下の立場此の如くなるに、貴下の俸祿爵位は尊貴榮華にして、私家の富は商君、吳起、大夫種の三人に過ぎたり、然るを若し身を引かざるときは、其の禍は此の三人よりも甚しからんことを恐る、竊かに貴下の爲に危く思ふ次第なり、古語にも太陽が中天に昇るときは其れより影が傾き始め、月も滿つれば則ち缺くと云ふ、物盛んなれば必ず衰ふるは天地の常數なり、進退屈伸を時に隨つて變化せしむるは聖人の常道なり、されば其國道あるときは出でて仕へ、國道なきときは退いて隱る、聖人の語に、飛龍天に在るときは大人を見るに利しとあり、不義にして富み且つ貴きは、我れに於て浮雲の如しとあり、今貴下の人に對する怨みは已に報い、人より受けたる恩義も亦之を返し、思ふ所は十分之を果せり、斯くして變に應ずる計なきは貴下の爲に不利益なりと存ず、

且夫翠鵠犀象、其處勢非不遠死也、而所以死者、惑於餌也、蘇秦智伯之智、非不足以辟辱遠死也、而所以死者、惑於貪利不止也、是以聖人制禮節欲、取於民有度、使之以時、用之有止、故

殖レ穀、富レ國足レ家、彊レ主、尊二社稷一、顯二宗廟一、天下莫三敢欺二犯其主一、主之威蓋二震海內一、功彰二萬里之外一、聲名光輝、傳二於千世一、君孰二與商君吳起大夫種一、應侯曰、不レ若、

【講義】蔡澤は少しく乘ずべき隙を得て曰く、彼の商君や吳起や大夫種や、其人臣として忠を盡し功を立てたることは願ふべし、然れども閎夭が文王に事へ、周公が成王を輔けたるに至りては、何んと聖人に非ずや、君臣の關係を以て之を論ずるときは、商君や吳起や大夫種と、閎夭、周公とは孰れが願はしき立場なるかと、范睢答へて云ふ、其點に就いては商君、吳越、大夫種杯は、閎夭、周公に及ばずと、蔡澤曰く、然らば則ち貴下の主君昭王に於ては、慈仁にして忠臣を信任し、舊關係の者に手厚く、其賢智なる、有道の士と膠漆の如き交りをなし、其義なる、功臣に對して不情の事をなさゞるは、秦の孝公、楚の悼王、越王と孰れなるかと、范睢曰く、それは何とも定め難しと、蔡澤曰く、今君主の忠臣を親むことは秦の孝公、楚の悼王、越王に過ぎざるに、貴下が智能を施し、君主の爲に危きを安くし政を修め、亂を治め兵を強くし、害を卻け難を折き、地を廣め穀を殖ゑ、國を富まし家を足し、君主を強くし、社稷を尊び、宗廟を顯はし、天下何人も其君主を欺き又は犯す者なく、君主の威は海內を震ひ動かし、其功萬里の外まで彰はれ、聲名光輝千代に傳はることは、貴下は商君や吳起や大夫種と孰れか勝るかと、范睢云ふ、及ばずと、

蔡澤曰、今主之親二忠臣一、不レ忘二舊故一、不レ若二孝公悼王句踐一、而君之功績愛信親幸、又不レ若二商君吳起大夫種一、然而君之祿位貴盛、私家之富過二於三子一、而身不レ退者、恐二患之甚一於三子一、竊爲二君危一

忠臣孝子ありながら國家の亂れたる事實なるが、何に由つて然るかと云はゞ、明君賢父の其言を聽く者なき故なり、故に天下其君父を以て不名譽となし、而して其臣子たる者を憐む、今商君や呉起や大夫種は人臣として是なれども、其君は非なり、故に世々此の三人が功を立てながら忝なしと思はれざりしことを稱す、豈に世に遇はずして死することを慕はんや、夫れ死を待ちて始めて功を立て名を成すべきならば、微子も死せざりしかば、仁となすに足らず、孔子も死せざりしかば、聖とするに足らず、管仲も死せざりしかば大となすに足らず、夫れ人の功を立つるは、豈に萬事盡く揃ひて成就することを期せざらんや、されど全く意の如くならずして、身と名と倶に全き者は上なり、名は模範となるべきも身は死する者其次なり、名は辱を被りて身の全き者は下なりと、是に於て范雎も善しと稱せり、

【字解】名可法而身死者、比干、呉起、大夫種の類、名在僇辱而身全者、箕子の如き類、

蔡澤少得閒、因曰、夫商君呉起大夫種、其爲人臣盡忠致功、則可願矣、閎夭事文王、周公輔成王也、豈不亦聖乎、以君臣論之、商君呉起大夫種、其可願孰與閎夭周公哉、應侯曰、商君呉起大夫種弗若也、蔡澤曰、然則君之主、慈仁任忠、惇厚舊故、其賢智與有道之士爲膠漆、義不倍功臣、孰與秦孝公楚悼王越王乎、應侯曰、未知何如也、蔡澤曰、今主親忠臣、不過秦孝公楚悼王越王、君之設智能、爲主安危修政、治亂彊兵、批患折難、廣地

るよりは死して榮譽ある方が優なり、士は固より己が身を殺して名譽を成すものあり、只義の在る所、死すと雖も恨むる所なし、何を以て不可となさんやと、

【字解】 設刀鋸、刀鋸は刑具、刀鋸にて殺す刑を設けたるを謂ふ、情素、素は誠なり、解、懈に同じ、

蔡澤曰、主聖臣賢、天下之盛福也、君明臣直、國之福也、父慈子孝、夫信妻貞、家之福也、故比干忠而不能存殷、子胥智而不能完吳、申生孝而晉國亂、是皆有忠臣孝子、而國家滅亂者、何也、無明君賢父以聽之、故天下以其君父爲僇辱、而憐其臣子、今商君吳起大夫種之爲人臣是也、其君非也、故世稱三子致功而不見德、豈慕不遇世死乎、夫待死而後可以立忠成名、是微子不足仁、孔子不足聖、管仲不足大也、夫人之立功、豈不期於成全邪、身與名俱全者、上也、名可法而身死者、其次也、名在僇辱而身全者、下也、於是應侯稱善、

【講義】 蔡澤曰く、君主が聖人にして臣下が賢人なるは、是れ天下の盛福なり、君が明かにして臣下が直なるは國の福なり、父が慈に子が孝に夫が信に妻が貞なるは家の福なり、故に比干は忠なれども殷の社稷を存すること能はず、子胥は智なれども吳を保全する能はず、申生は孝なれども晉國は亂れたり、此れ皆

得害公、讒不得蔽忠、言不取苟合、行不取苟容、不爲危易行、行義不辟難、然爲霸主强國、不辭禍凶、大夫種之事越王也、主雖困辱、悉忠而不解、主雖絕亡、盡能而弗離、成功而弗矜、貴富而不驕怠、若此三子者、固義之至也、忠之節也、是故君子以義死難、視死如歸、生而辱、不如死而榮、士固有殺身以成名、唯義之所在、雖死無所恨、何爲不可哉、

【講義】范雎は蔡澤が己れを困めて說をなさんと欲することを知りしかば、自分の方に於ても亦心にもなき答へをなして云ふ、夫れは何ぞ不可となさんや、

夫れ公孫鞅が秦の孝公に事ふるや、身を差出して二心なく、公を盡して私を顧みず、刀鋸を設けて奸邪を禁じ、賞罰を信にして太平を致し、腹心を披き、實情を示し、人より怨みを受くるをも厭はずして舊友を欺き、魏の公子卬を奪ひ取りて虜にし、秦の社稷を安んじ人民に利益を與へ、卒に秦の爲に敵の將軍を擒にし、土地を開くこと千里に及べり、吳起の悼王に事ふるや、私をして公を害することを得ざらしめ、讒言をして忠臣を蔽ふことを得ざらしめ、言は一時的に合ふものを取らず、行は間に合せに容れらるゝものを取らず、危きが爲に行を易へず、義を行ひて難儀を避けず、さりながら己れの君主をして霸者たらしめ、國家を强くする爲には禍災不祥の事をも辭せざりき、大夫種の越王に事ふるや、其の君が困難恥辱の境遇に居る時と雖も忠を盡して懈ることなく、其君が滅亡に及ぶと雖も能力を盡して離るゝことなく、功業を成就するも之を誇らず、富貴の身分となれども驕り怠らず、此の三人の如き者は固より義の至極なり、忠の標準なり、されば君子は義の爲には厄難に身を殺し、死を視ること歸するが如く、生きて辱めらる

地終始、豈道德之符、而聖人所謂吉祥善事者與、應侯曰、然、蔡澤曰、若夫秦之商君、楚之吳起、越之大夫種、其卒然亦可願與、

【講義】范雎曰く、其仔細を御話し下されたしと、蔡澤云ふ、さて〳〵君には何とて御氣附きなさるゝことの晩きや、夫れ春夏秋冬四時の次第を觀れば、功を成しゝものは去つて次の者と更代するなり、夫れ人生れて身體のあらゆる部分堅强にして、手足は善く利き、耳目は聰明にして、心が聖智なることは、何んと士の願ふ所に之れなきかと、范雎は然りと答ふ、蔡澤曰く、仁を本質として義を取り守り、道を行ひ德を施し、志を天下に得て、天下の人が懷き喜び、敬愛して尊び慕ひ、君王となさんことを願ふは、豈に辯口あり才智ある者の期する所に之れなきかと、范雎又然りと答ふ、蔡澤復言ふやう、富貴にして名譽榮華の地位に居り、萬物を處理して各〻其所を得しめ、生命は長壽にして、其天然を終へ、若死することなく、天下其統を繼いで其業を守り、之を無窮に傳へて名も實も純粹にして雜り氣なく、其恩澤は千里の遠きに流れ、世々之を稱して絕ゆることなく、天地と始終を同じうするは、豈に道德の符にして聖人の謂はゆる吉祥善事なるものかと、范雎答へて然りと曰ふ、蔡澤曰く、然らば彼の秦の商君、楚の吳起、越の大夫種の如く、卒然と俄かに罪を受けて禍福地を易ふるやうなる事も、亦願ふべきかと、

應侯知蔡澤之欲困己以說、復謬曰、何爲不可、夫公孫鞅之事孝公也、極身無貳慮、盡公而不顧私、設刀鋸以禁姦邪、信賞罰以致治、披腹心示情素、蒙怨咎、欺舊友、奪魏公子卬、安秦社稷、利百姓、卒爲秦禽將破敵、攘地千里、吳起之事悼王也、使私不

【講義】蔡澤は秦に於て范雎が鄭安平、王稽の二人を任用せし處、何れも秦に對して重罪を犯し、范雎も心に内々愧ぢ居る由を聞きしかば吾が立身の機會到れりとて、西の方、秦に入り、將に昭王に謁見せんとす、彼れは方便として、范雎を怒らしめんが爲に人を使ひ宣言せしむるやう、燕より秦に入込みたる蔡澤と云ふ者は恐らく天下に竝びなき傑物にして辯口ある智者なり、彼れ一度にても秦王に謁見しなば、秦王は必ず范君を困しめて其位地を奪はしむべしと、范雎之を聞きて言ひけるは、五帝三代の事、諸學派の説は吾れ既に之を知れり、幾多の人の辯舌も吾れは皆之を言ひ破りぬ、彼れ蔡澤とか云ふ人物は何とて我れを困らせて我が地位を奪ふこと出來べきやと、人を以て蔡澤を召ばしめぬ、蔡澤は坐敷に通りて范雎に揖禮を施したる處、范雎は初めより氣に喰はぬ人物と思ひしかば、愈、對面するに及びても尊大に構へぬ、斯くて范雎は蔡澤を詰問して曰ふ、足下は常に拙者に代り秦の宰相たらんと欲する由なるが、果して然樣なりやと、蔡澤は答へて然りと言へり、

應侯曰、請聞其說、蔡澤曰、吁君何見之晩也、夫四時之序、成功者去、夫人生百體堅彊、手足便利、耳目聰明、而心聖智、豈非士之願與、應侯曰、然、蔡澤曰、質仁秉義、行道施德、得志於天下、天下懷樂敬愛而尊慕之、皆願以爲君王、豈不辯智之期與、應侯曰、然、蔡澤復曰、富貴顯榮、成理萬物、使各得其所、性命壽長、終其天年、而不夭傷、天下繼其統、守其業、傳之無窮、名實純粹、澤流千里、世世稱之而無絶、與天

り、膝曲れり、吾れ聞く、聖人は其人相を見せしめぬものなりと、是れは先生の如きものを謂ふならんと、蔡澤は彼れが自分を馬鹿にするを知りて云ふやう、富貴は吾が有する所なれば、此の點に就いては御說を承る必要なし、自分に知れぬことは壽命なり、何卒それを承りたしと、唐擧曰く、先生の壽は今より先き四十三歲なりと、蔡澤之を聞き笑つて禮を陳べ、其所を立去りぬ、途中御者に物語るやう、吾れ上等米を食し善き肉を齧ひ、馬を躍らせて飛ぶやうに馳せ廻り、黃金の印を懷中して紫の紐を腰に結びつけ、國君の前に會釋し、肉を食ひ富貴を極むれば、四十三年にして十分なりと、去つて趙に赴きし處放逐せられ、今度は韓、魏に入りたる處、途中にて携帶せる釜や鼎を賊に奪はれぬ、

【字解】 小大、小諸侯、大諸侯、曷鼻、上向きになりたる鼻、魋顏、魋は赤熊、蹙齃、鼻莖の皺寄りたるなり、膝攣、兩膝の曲りしなり、粱、粱に同じ、良き米なり、刺齒、齧の字の誤、紫綬、大夫以上の佩物、釜鬲、鬲は四脚の鼎、

聞應侯任鄭安平王稽、皆負重罪於秦、應侯內慙、蔡澤乃西入秦、將見昭王、使人宣言以感怒應侯曰、燕客蔡澤、天下雄俊弘辯智士也、彼一見秦王、秦王必困君而奪君之位、應侯聞曰、五帝三代之事、百家之說、吾既知之、衆口之辯、吾皆摧之、是惡能困我而奪我位乎、使人召蔡澤、蔡澤入、則揖應侯、應侯固不快、及見之、又倨、應侯因讓之曰、子常宣言欲代我相秦、寧有之乎、對曰、然、

秦に叛く、內に良將なくして外に敵國多し、吾れ之が爲に心配に堪へずとて范雎を勵まさんとせり、范雎は恐懼して爲す所を知らず、蔡澤之を聞いて秦に入れり、

○蔡澤者、燕人也、游學干諸侯、小大甚衆不遇、而從唐擧相、曰、吾聞先生相李兌曰、百日之內、持國秉政、有之乎、曰、有之、曰、若臣者何如、唐擧孰視而笑曰、先生曷鼻巨肩、魋顏蹙齃膝攣、吾聞聖人不相、殆先生乎、蔡澤知唐擧戲之、乃曰、富貴吾所自有、吾所不知者壽也、願聞之、唐擧曰、先生之壽、從今以往者四十三歲、蔡澤笑、謝而去、謂其御者曰、吾持粱(刺齒)肥、躍馬疾驅、懷黃金之印、結紫綬於要、揖讓人主之前、食肉富貴、四十三年足矣、去之趙見逐、入韓魏、遇奪釜鬲於塗、

【講義】蔡澤は燕の人なり、游學してぶしつけに仕宦を求め、其說き廻りし國は大なるもあり、小なるもあり、甚だ衆かりしも、己れを用ふる君に出遇はざりしかば、梁に唐擧と云ふ人相見あることを聞き、之を尋ねて己れの相を見て貰ひしが、其時蔡澤は先づ問うて云ふ、吾れ聞けるに、先生は曾て李兌の人相を觀て、百日の內に國を持し政柄を握ると申されし由なるが、然樣の儀之れありしやと、唐擧云ふ、斯かる事ありきと、蔡澤乃ち問ひけるは、僕などは何如んと、唐擧は彼れの人相を篤と眺めて云ふ、先生は獅子鼻にして肩幅大きく、顏はしやぐまの如く、鼻筋蹙ま

罪を受くべきものなれば、范雎も亦三族を收めらるる罪に該當す、然る處秦の昭王に於ては范雎に惡感情を持たせんことを氣遣ひ、國中に令を下し、鄭安平の事を風評する者は彼れと同罪に處すべしと、而して范雎には食物などを賜はること日を重ぬるほど益〻手厚く、彼れの機嫌を損ぜざらんとせり、此れより二年の後、王稽は河東の太守となりし處、外國に內通して國法に觸れて誅せられぬ、范雎は前に鄭安平の事あり、今度は又王稽の事あり、何れも己が推擧を以て大官に任じたる人々なれば、責任上日々面白からず思ひぬ、

昭王臨朝歎息、應侯進曰、臣聞主憂臣辱、主辱臣死、今大王中朝而憂、臣敢請其罪、昭王曰、吾聞楚之鐵劍利、而倡優拙、夫鐵劍利則士勇、倡優拙則思慮遠、夫以遠思慮而御勇士、吾恐楚之圖秦也、夫物不素具、不可以應卒、今武安君既死、而鄭安平等畔、內無良將、而外多敵國、吾是以憂、欲以激勵應侯、應侯懼不知所出、蔡澤聞之、往入秦也、

【講義】秦の昭王は或る時朝廷に出御の折嘆息に及びければ、范雎は進みて曰く、臣承はるに、君主憂ふるときは臣下辱められ、君主辱めらるゝときは臣下死すと、今大王朝廷に臨まれて御心配あらせらるゝは臣の不行屆きの致す所なり、何卒其の罪を仰せ聞かされたしと、昭王曰く、吾れ聞く、楚の鐵にて鍛へたる刀劍は銳利にして俳優の伎は拙なりと、夫れ鐵劍銳利なれば士卒勇なり、俳優拙なれば思慮遠し、遠き思慮を以て勇士を御するに於ては、吾れ楚が秦を圖らんことを恐る、夫れ物は平素より用意せざるときは急場に應じ難し、故に平生より良將なきときは安心ならざるに、今武安君白起は已に死して鄭安平等

之、因城河上廣武、後五年、昭王用應侯謀、縱反間賣趙、趙以其故令馬服子代廉頗將、秦大破趙於長平、遂圍邯鄲、已而與武安君白起有隙、言而殺之、任鄭安平使將擊趙、鄭安平爲趙所困急、以兵二萬人降趙、應侯席藁請罪、秦之法、任人而所任不善者、各以其罪罪之、於是應侯罪當收三族、秦昭王恐傷應侯之意、乃下令國中、有敢言鄭安平事者、以其罪罪之、而加賜相國應侯食物日益厚、以順適其意、後二歲、王稽爲河東守、與諸侯通、坐法誅、而應侯日益以不懌、

【講義】 秦の昭王の四十三年に秦は韓の汾陘を攻めて之を拔き、因つて河上の廣武に城を築く、後五年目に、昭王は范雎の謀を用ひ、反間を放ちて趙を欺きたるが、趙は其結果馬服君の子をして廉頗に代りて將軍たらしめ、斯くて大に趙を長平に破り、遂に進んで其都なる邯鄲を圍む、暫くして范雎は白起と仲惡しくなり、昭王に讒言して之を殺し、鄭安平を白起の後任となし、兵を率ゐて趙を撃たしめたる處、鄭安平は趙の爲に困められ、二萬の兵を以て趙に降れり、是に於て范雎は藁を布き其上に坐して處分を願へり、これは元來秦の法律にて、人を任用して其任用を受けたる者善からざる時は、任用者と任用せられたる者と雙方とも其罪を以て罰せらるゝこととなり居れり、鄭安平は范雎が推擧して任用せし者なれば、此の度彼れが敵に降參せしに就いては三族を平げらるゝ

當此之時、天下爭知之、夫魏齊窮困過虞卿、虞卿不敢重爵祿之尊、解相印、捐萬戸侯而間行、急士之窮而歸公子、公子曰、何如人、人固不易知、知人亦未易也、信陵君大慙、駕如野迎之、魏齊聞信陵君之初難見之、怒而自剄、趙王聞之、卒取其頭予秦、秦昭王乃出平原君歸趙、

【講義】信陵君は虞卿と魏齊とが自分に身を寄せ、共れより楚に走らんとする由を聞き、如し彼等を世話するときは秦の怒りに觸れんことを畏れ、猶豫して彼等と面會することを拒み、近侍の者に一體虞卿とは何如なる人ぞと問ひけるとき、侯嬴は旁に在りしが、信陵君に申すやう、他人より我れを知ることも固より容易ならざれども、我れより人を知ることも亦容易とは申し難し、夫れ虞卿は草履をはき竹の笠を被る如き身分を以て一たび趙王に見ゆるや、趙王の氣に叶ひ、白璧一雙と黃金百鎰とを賜はり、二度の謁見には拜せられて上卿となり、三度目の謁見には宰相の印を授けられ萬戸侯に封ぜられぬ、此時に方り天下先きを爭ひて彼れの近附きになることを榮譽とせし位なり、彼の魏齊は切迫して虞卿にたよりしかば、虞卿は敢て尊き爵祿をも大切と思はず、宰相の印を解き萬戸侯の身分を棄てゝ忍び來り、人の危急を救はんがため公子に縋がる處、公子は彼れを何如なる人と仰せらる、彼等より言へば公子を見損ひたるなり、公子より言へば彼等を知り給はぬなり、さても人は知り易からず、人を知るも亦易からずと、信陵君は大に慚ぢ、馬車に打乘り郊外に出迎へしが、魏齊は信陵君が最初面會を厭ひしと聞き、怒つて自ら首を刎ねたり、趙王は之を聞き、其首級を取りて秦に送りしかば、秦の昭王は平原君を出して趙に歸したり、

昭王四十三年、秦攻韓汾陘、拔

昭王乃遺趙王書曰、王之弟在秦、范君之仇魏齊在平原君之家、王使人疾持其頭來、不然、吾擧兵而伐趙、又不出王之弟於關、趙孝成王乃發卒圍平原君家、急、魏齊夜亡、出見趙相虞卿、虞卿度趙王終不可說、乃解其相印、與魏齊亡、閒行、念諸侯莫可以急抵者、乃復走大梁、欲因信陵君以走楚、

【講義】　昭王は平原君と談判するも埒明かずと考へ、趙王に書面を送りしが、其文言に云ふ、王の弟は今我國に在り、而して我が信任せる宰相范君の仇は平原君の家に在り、王は人をして速かに彼れの首級を秦に持參せしめられよ、然らざるときは吾れ兵を擧げて趙を伐つべく、又王の弟を函谷關より出すまじと、趙の孝成王は秦の要求に從ひ、士卒を發して趙平原君の宅を圍ませたる所、魏齊は夜亡げ出して趙の宰相虞卿に遇ひ、救ひを求めたり、虞卿は趙王は何如に說いても聞かざるべきことを知りたれば、己れの宰相の印を解いて職を抛ち、魏齊と逃亡して忍び忍びに旅行せしが、何れの諸侯に身を寄せんかと彼れ此れ考へしも、さて急に往くべき宛もなかりしかば、復び魏齊の本國なる魏都大梁に走り、信陵君の手引きにて楚に逃れんと欲しぬ、

信陵君聞之、畏秦、猶豫未肯見、曰、虞卿何如人也、時侯嬴在旁、曰、人固未易知、知人亦未易也、夫虞卿躡屩擔簦、一見趙王、賜白璧一雙、黃金百鎰、再見、拜爲上卿、三見、卒受相印、封萬戶侯、

謂平原君曰、昔周文王得呂尙、以爲太公、齊桓公得管夷吾、以爲仲父、今范君亦寡人之叔父也、范君之仇在君之家、願使人歸取其頭來、不然、吾不出君於關、平原君曰、貴而爲友者、爲賤也、富而爲交者、爲貧也、夫魏齊者勝之友也、在固不出也、今又不在臣所、

【講義】范雎が秦の宰相となりしより二年目、秦の昭王の四十二年に於て、東の方韓の少曲、高平の二縣を攻めて之を拔く、秦の昭王は魏齊が平原君の所に匿れ居ることを聞き込みしが、范雎の爲に是非ともかたきを取り遣はさんと思ひければ、僞りて好情的の書簡を作り、平原君に遣して曰ふやう、此方は君の高義を聞き慕はしく存ずるに因り、君と布衣の交を結びたし、何卒訪問下さるべく、さすれば十日間引續きて宴會を催し樂みを盡し申さんと、平原君は秦を畏れ、且つは此の文言を信實と心得しかば、秦に至りて昭王と會見す、昭王は平原君と酒宴をなすこと數日に及びける頃、平原君に向つて申出すやう、昔し周の文王は呂尙を得、之を尊んで太公となし、齊の桓公は管夷吾を得、之を尊んで仲父と稱せり、今范君も亦此方の叔父並みに取扱ふ所の人なり、然るに范君の仇なる魏齊は君の家に在る由なれば、何卒君には人を本國に遣はし、彼れの首級を取り來らしめ給へ、若しさなき時は君を函谷關より外に出すまじきぞと、平原君答へて云ふ、貴くして友となる者は賤しき時の助けにせんが爲なり、富みて友となる者は貧しき時の助けにせんが爲なり、彼の魏齊は拙者の友なり、今日見放す程ならば初めより友とはならじ、已に友たる以上は、縱令拙者の家に居ればとて大王の仰せに從ひ差出すわけに參らざるに、まして今彼れは拙者の家に居り申さずと、

至於相、爵在列侯、王稽之官尙止於謁者、非其內臣之意也、昭王召王稽、拜爲河東守、三歲不上計、又任鄭安平、昭王以爲將軍、范雎於是散家財物、盡以報所嘗困戹者、一飯之德必償、睚眦之怨必報、

【講義】 王稽の言を聞きて范雎は心面白からず、終に擧內して秦王に奏聞して曰く、王稽が忠義にして秦の利益を思ふ者にて無ければ、臣を函谷關の內へ入れて秦へ伴ふことはあるべからず、大王の賢聖なるに非ざれば、能く臣を用ひて貴き位地を與ふることあるべからず、今臣の官は宰相に至り、爵は列侯に在る處、王稽の官は尙謁者に止まる、此の如きは彼れが臣を入れたる本意に非ずと、昭王は范雎の言に因りて王稽の功を想ひ出し、拜して河東の太守となしゝが、三年を經るも縣治の報告を差出さず、又鄭安平を任用し、之を將軍とせり、范雎は是に於て家の財物を散じ嘗て困苦せし時の恩人に報ぜしが、彼れは一飯を惠まれたる恩にも報ずると共に、目に角を立てたる程の怨みにも亦返報に及べり、

【字解】 睚眦、目を怒らすこと、

范雎相秦二年、秦昭王之四十二年、東伐韓少曲高平、拔之、秦昭王聞魏齊在平原君所、欲爲范雎必報其仇、乃詳爲好書遺平原君曰、寡人聞君之高義、願與君爲布衣之友、君幸過寡人、寡人願與君爲十日之飲、平原君畏秦、且以爲然、而入秦見昭王、昭王與平原君飮數日、昭王

ぬ、

【字解】 莖豆、芻と豆とを雜へたる馬のかひば、兩黥徒、入墨の刑に處せられたる犯罪者兩人、

范雎既相、王稽謂范雎曰、事有不可知者三、有不可奈何者亦三、宮車一日晏駕、是事之不可知者一也、君卒然捐館舍、是事之不可知者二也、使臣卒然塡溝壑、是事之不可知者三也、宮車一日晏駕、君雖恨於臣、無可奈何、君卒然捐館舍、君雖恨於臣、亦無可奈何、使臣卒然塡溝壑、君雖恨於臣、亦無可奈何、

【講義】 范雎が宰相となりし後、彼れを魏より秦に伴ひ今日の地位を得しめたる王稽は范雎に申すやう、未來何如になるか、知ることの出來ざる者三箇條あり、又奈何んともすることの出來ぬもの三箇條あり、秦王が一朝崩御あるやうなることは、是れ知るべからざる箇條の一なり、君は突然此の世を去り給ふやうなることは、是れ知るべからざる箇條の二なり、僕が俄かに死亡するやうなることは、是れ知るべからざる箇條の三なり、秦王一朝崩御の場合、君は僕を恨み給ふとも致し方なかるべし、君が卒然此の世を去らるゝ場合、君は僕を恨み給ふとも致し方なかるべし、僕が俄かに死亡する場合、君は僕を恨み給ふとも致し方なかるべしと、

【字解】 晏駕、天子の崩御を謂ふ、捐館舍、死すること、塡溝壑、正當の葬を得ずして溝や谷に尸を棄てらるゝこと、微賤の者の死を謂ふ、

范雎不懌、乃入言於王曰、非王稽之忠、莫能內臣於函谷關、非大王之賢聖、莫能貴臣、今臣官

楚王其功を賞し、荊の五千戸を以て包胥を封ぜり、然るに包胥の辭して受けざりし理由は、其先祖の墳墓が荊に在りし爲なり、今拙者の先代の墳墓も亦魏に在り、汝は前に拙者が齊に内通の心ありとて、拙者のことを魏齊に惡しく申立てたるは汝の罪科の第一なり、魏齊が吾れを便所の中に置きて恥辱を被らせたるとき、汝の之を止めざりしは罪科の第二なり、客分の者が交る〴〵醉に乘じて吾れに溺をあびせたるとき、汝が何とも思はざりしは第三の罪科なり、されば當然汝を殺すべきなれども、汝の死せざるを得る所以は、先程綿入れを贈りくれたることの戀々として古なじみの心あるを以てなり、是の故に汝を赦し遣はすぞと、范睢は恩を謝して退出せり、

【字解】湯鑊之罪、鑊は釜なり、釜にて烹殺さるゝだけの罪、君死生之、殺すとも生かすとも意のまゝなり、睢之先人丘墓亦在魏、魏を責るが如き心は毛頭も之れなしとの意なり、

入言之昭王、罷歸須賈、須賈辭於范睢、范睢大供具、盡請諸侯使、與坐堂上、食飲甚設、而坐須賈於堂下、置莝豆其前、令兩黥徒夾而馬食之、數曰、爲我告魏王、急持魏齊頭來、不然者、我且屠大梁、須賈歸以告魏齊、魏齊恐亡走趙、匿平原君所、

【講義】范睢は參内して昭王に意見を奏聞の上、須賈に暇を遣して本國に歸らしむることとせり、須賈は暇乞ひのため范睢の役所に伺候せし處、范睢は大に獻立をなして盡く列國の使者を招待し、諸共に堂上に坐して盛んなる宴會を催し、須賈を堂の下に坐せしめて、芻と豆とを其前に置き、二人の罪人を兩脇に相伴せさせて、馬を飼ふと一般の扱ひをなし、且つ之を責めて曰く、吾が爲に魏王に告げ、早速魏齊の頭を持來れ、然らずば吾れは今にも大梁を屠るべしと、須賈は命から〴〵に歸り、事の顛末を魏齊に告げしかば、魏齊は恐れて趙に出奔し、平原君の所に匿れ

君能自致於青雲之上、賈不敢復讀天下之書、不敢復與天下之事、賈有湯鑊之罪、請自屛於胡貉之地、唯君死生之、范雎曰、汝罪有幾、曰、擢賈之髮、以續賈之罪、尚未足、范雎曰、汝罪有三耳、昔者楚昭王時而申包胥爲楚卻吳軍、楚王封之以荊五千戶、包胥辭不受、爲丘墓之寄於荊也、今雎之先人丘墓亦在魏、公前以雎爲有外心於齊、而惡雎於魏齊、公之罪一也、當魏齊辱我於廁中、公不止、罪二也、更醉而溺我、公其何忍乎、罪三矣、然公之所以得無死者、以綈袍戀戀、有故人之意、故釋公、乃謝罷、

【講義】 是に於て范雎は盛んに戸張、幔幕などを引き廻らし、大勢の屬官家來等を側に侍らせ、斯くして須賈を呼び込み面會に及ぶ、須賈は頓首して自ら己れの罪の死に當ることを述べて曰く、拙者は君が斯くの如く立身出世し給ふとは想ひも寄らざりし所にて、已に君を見損ひし以上は、敢て復び天下の書を讀むまじく、敢て復び天下の事に關係致すまじ、拙者には釜うでにも成るべき罪あり、自ら夷狄の地に退き申さん、生くるも死ぬるも只君の御心通りにせらるべしと、范雎曰く、汝は自ら幾何の罪ありと思へるかと、范雎答へて云ふ、我が髮の毛を一本一本拔き取りて我が罪を數ふるとも足らざる程なりと、范雎曰く、汝の罪は三箇條あるのみ、昔し楚の昭王の時に方り、申包胥は楚のために敵國なる吳の兵を卻けたれば、

者與我載而入者、門下曰、乃吾相張君也、須賈大驚、自知見賣、乃肉袒膝行、因門下人謝罪、

【講義】須賈は話の次に問うて云ふ、秦は張君を宰相に任じたりとの事なるが、貴公は之を存じ居るか、吾が聞く所によれば、彼れは王の寵幸を被り、天下の事は皆相君の意見にて決定する由、今吾が使命の遂ぐると遂げざるとに因りて去るとも留まるとも張君次第なり、貴君何んと知人にて相公に近附の者ありやと、范雎曰く、拙者の主人は相公の近附なり、拙者も其緣故にて拜謁することを得たり、拙者は君の爲に張君に御面會の手引きを仕らんと、須賈曰く、此の國に來る途中にて吾が馬は病氣となり、車の軸は折れたれば、何處かにて車馬を調達せんと思へども、吾が身分として普通の物にては間に合はず、四頭挽の大いなる車に非ざれば外出し難し、何如にかせんと言ひければ、范雎曰く、然れば君の爲に四頭挽の馬車を主人の處より借來るべしとて立去りしが、暫くして四頭挽の馬車を取り來り、須賈を載せて、己れは御者となり、秦の宰相の役所に赴き門に入らんとす、役所に居る人々は之を望見して、范雎を見識れる者は何れも避けて姿を匿したりしかば、須賈は不審の思ひをなせり、范雎は役所の門に至りしとき須賈に謂ふやう、姑らく僕の出でくるを待ち給へ、僕は此れより君の爲に先づ中に入りて相公に君の來訪ありしことを申上げんと、須賈は門前に待ちて長い間馬車を止めてありしが、范雎一向出で來らざりしかば門番に尋ぬるやう、今中へ這入りたる范叔出で來らざるは何如に爲したるならんと、門番曰く、范叔と云ふ人は更に無し、僕は之を知らずと、須賈云ふ、それは先刻吾れと共に車に乘つて來り、獨り門內に入りし人のことなりと、門番曰く、あの人こそ吾が秦國の宰相張君なれと、須賈は大に驚き、自ら范雎に欺かれたることを知りしかば、肌を脫ぎ這ふやうにして恐縮の意を表し、門番に賴み罪を謝せり、

於是范雎盛帷帳、侍者甚衆、見之、須賈頓首言死罪曰、賈不意

人の外出する風をなし、敝れ着物を身に纏ひ從者をもつれず忍びて彼れの旅館に往き、須賈を訪問す、須賈は死せしと思へる范雎が來りしかば、之を見て大に驚いて云ふやう、范叔は幸ひに命を全うして恙なかりしやと、范雎然樣と答へしかば、須賈笑つて、汝秦に游說をなしたるかと問ひければ、范叔は答ふるやう、否、吾れ前の日罪を魏の宰相魏齊に得たれば逃亡して此の地へ來りしまでにて、何として秦に游說などをなさんやと、須賈云ふ、然らば叔には今何事をなしつゝありやと、范雎云ふ、僕は人に傭はれ、賃稼を致し居れりと、須賈は之を憐み、引留めて諸共に飮食せしが、須賈は彼れの衣服の古びたるを見て云ふやう、范叔よ、足下は此の如く寒さうなる風體をなし居るのかとて、一枚の綿入れの衣を取りて之れに與へぬ、

【字解】綈袍、綈は厚き綿、袍は外衣、

須賈因問曰、秦相張君、公知之乎、吾聞幸於王、天下之事、皆決於相君、今吾事之去留在張君、孺子豈有客習於相君者哉、范雎曰、主人翁習知之、唯雎亦得謁、雎請爲君見於張君、須賈曰、吾馬病、車軸折、非大車駟馬、吾不出、范雎曰、願爲君借大車駟馬於主人翁、范雎歸、取大車駟馬、爲須賈御之、入秦相府、府中望見、有識者皆避匿、須賈怪之、至相舍門、謂須賈曰、待我、我爲君先入通於相君、須賈待門下、持車良久、問門下曰、范叔不出、何也、門下曰、無范叔、須賈曰、鄉

非ざるものなし、臣は大王が朝廷の上に孤立し給ふを見て、萬世の後此の秦の國の所有者は大王の子孫に非ざることをば竊かに大王の爲に恐るゝなりと、昭王之を聞いて大に危險を感じて卿の說く所は善しと曰ひ、大に決心する所ありて太后を廢し、穰侯及び高陵君、華陽君、涇陽君を關門の外へ放逐に及べり、是に於て昭王は范雎を拜して宰相となし、穰侯の印を取上げて其官職を奪ひ、彼れの所領なる陶に歸らしめたるが、それに就き縣の役人をして車と牛とを宛てがひ引移らしめぬ、其荷車の數千乘餘に及びけるが、關門に至りし時、關門の役人其寶物を檢査せし處、寶物及び珍奇の品は王室の所藏よりも多かりき、秦は應の土地を以て范雎を封じて領主となし、應侯と號せり、時に秦の昭王の四十一年なり、

【字解】弋、紐を附けたる矢にて鳥を射ること、

范雎既相秦、秦號曰張祿、而魏不知、以爲范雎已死久矣、魏聞秦且東伐韓魏、魏使須賈於秦、范雎聞之、爲微行、敝衣間步、之邸見須賈、須賈見之而驚曰、范叔固無恙乎、范雎曰、然、須賈笑曰、范叔有說於秦耶、曰、不也、雎前日得過於魏相、故亡逃至此、安敢說乎、須賈曰、今叔何事、范叔曰、臣爲人庸賃、須賈意哀之、留與坐飲食、曰、范叔一寒如此哉、乃取其一綈袍以賜之、

【講義】范雎は既に秦の宰相となりけるが、秦にては彼れを張祿と號し范雎と謂はざりしかば、魏の方にては之を知らず、范雎は夙に死したるものと思へり、魏にては秦が今にも韓魏を伐たんとする由を聞き、須賈を使者として秦に遣はし、平和に局を結ばんとす、范雎は須賈が魏の使として來ると聞き、微賤の

過ぎて餓死せり、今臣の承はるには、秦の太后、穰侯政事を自由にし、高陵君、華陽君、涇陽君之を佐け、終に秦王を無視するは、此れ亦淖齒や李兌の類なり、

【字解】政適、征敵の音通、弊御、弊は斷なり、御は制なり、拔、スカスなり、管、ツカサドル、主父、趙の武靈王、

且夫三代所以亡國者、君專授政、縱酒馳騁弋獵、不聽政事、其所授者、妬賢嫉能、御下蔽上、以成其私、不爲主計、而主不覺悟、故失其國、今自有秩以上至諸大吏、下及王左右、無非相國之人者、見王獨立於朝、臣竊爲王恐萬世之後有秦國者非王子孫也、昭王聞之大懼曰、善、於是廢太后、逐穰侯高陵華陽涇陽君於關外、秦王乃拜范雎爲相、收穰侯之印、使歸陶、因使縣官給車牛以徙、千乘有餘、到關、關閲其寶器、寶器珍怪多於王室、秦封范雎以應、號爲應侯、當是時、秦昭王四十一年也、

【講義】且つ夫れ夏殷周三代の亡びたる所以のものは、其君が專ら政事を臣下に委ね、君主自身は飲酒に耽り馬を驅け走らして游獵を事とし、政治の奏聞を聽かず、其政權を委ねられたる臣下は、賢者を妬み、才能ある者を惡み、下を壓制して上を昏まし、以て己れの私を成し、君主の爲を計らざるに、君主は之に氣が附かず、之が爲に國を失ひしなり、今や爵位ある者より上は諸の大官に至る迄、又下は王の左右に侍する近臣に至る迄、何れも相國穰侯の一味徒黨に

の危からざる道理あらず、此の四人の高貴の下に居らるゝ以上は、是れ王なしと申す者なり、然らば則ち權力は何として傾かざるを得んや、命令は何として王より出づることを得んや、

【字解】擊斷、審ならず、諱、畏るゝなり、

臣聞、善治國者、乃內固其威、而外重其權、穰侯使者操王之重、決制於諸侯、剖符於天下、政適伐國、莫敢不聽、戰勝攻取、則利歸於陶國、弊御於諸侯、戰敗則結怨於百姓、而禍歸於社稷、詩曰、木實繁者披其枝、披其枝者傷其心、大其都者危其國、尊其臣者卑其主、崔杼淖齒管齊、射王股、擢王筋、縣之於廟梁、宿昔而死、李兌管趙、囚主父於沙丘、百日而餓死、今臣聞秦太后穰侯用事、高陵華陽涇陽佐之、卒無秦王、此亦淖齒李兌之類也、

【講義】臣の承はるに、善く國を治むる者は、內に於ては其威を固くし、外に於ては其權を重くすと、然るに穰侯は王の使者として大王の握り給ふ重き權力を握り、諸侯を支配し、天下に剖いて人に領地を與へ、敵國を征伐する等、敢て裁斷せざるものなく、戰つて敵に勝ち攻めて地を取る時は、利は彼れの所領なる陶國に歸し、諸侯を制御し、若し又戰破るゝ時は怨みを百姓に結んで禍は國家に歸す、詩經に曰く、木の實の繁れる者は其枝をすかし、其枝をすかす者は其心を傷ふ、此の譬への如く其都を大にする者は其國を危くし、其臣を尊くする者は其君を卑しくすと、崔杼、淖齒は齊國の政權を掌握し、王の股を射、王の筋を拔きて之を宗廟の梁の上に懸け、夕の間に死せり、李兌は趙の政權を掌握し、主父を沙丘に囚へ、百日を

を絶ち切るときは上黨の兵は太行を下りて救ふことを得ず、大王一たび兵を興して滎陽を攻め給ふならば、韓の國は斷ち切られて三つに分れん、夫れ韓も必ず亡ぶることを知りなば何とて承知せざることを得んや、若し韓が承知せば、霸業を立つることは計畫するを得べしと、昭王は范雎の説を善しと云ひ、將に使を韓に發せんとす、

范雎日益親、復説用數年矣、因請間説曰、臣居山東時、聞齊之有田文、不聞其有王也、聞秦之有太后穰侯華陽高陵涇陽、不聞其有王也、夫擅國之謂王、能利害之謂王、制殺生之威之謂王、今太后擅行不顧、穰侯出使不報、華陽涇陽等擊斷無諱、高陵進退不請、四貴備而國不危者未之有也、爲此四貴者下、乃所謂無王也、然則權安得不傾、令安得從王出乎、

【講義】范雎は日に昭王との關係親密となり、隨つて其説も採用せらるゝこと、玆に五六年に及びたるが、最早十分心事を打明くるも差支へなしと考へしかば、都合よき折を見料らひ昭王に説いて曰く、臣は山東に居りし時、齊の田文あることを聞いて王あることを聞かず、又秦に太后、穰侯、華陽君、高陵君、涇陽君あることを聞いて、王あることを聞かざりき、夫れ國を擧げて自分の勝手に處置する者之を王と謂ふ、人に利を與へ害を加ふることの權能ある者之を王と謂ふ、人を生かし人を殺すの威を制する者之を王と謂ふ、然るに今太后は政治を專斷して顧みず、穰侯は他國へ使節の役を勤めながら報告をなさず、華陽君、涇陽君等は擊斷して畏れず、高陵君は進退とも君の命令を仰がず、此の四人の高貴打揃ひ居りて、國

派にして之に事へ、其れにても目的を達し難きときは、土地を割いて之に賄ひ、其れにても目的を達し難きときは、兵を擧げて之を伐ち給へと、秦王は謹んで先生の敎へに從はんと曰ひ、范雎をば客卿となし、軍國の事を相談に及び、終に彼れの謀略を用ひ、五大夫の綰をして魏を伐たしめ、秦軍は此の戰ひに懷を拔き取り、後二年目に又邢丘の地を拔き取れり、

客卿范雎復說昭王曰、秦韓之地形、相錯如繡、秦之有韓也、譬如木之有蠹也、人之有心腹之病也、天下無變則已、天下有變、其爲秦患者、孰大於韓乎、王不如收韓、昭王曰、吾固欲收韓、韓不聽、爲之奈何、對曰、韓安得無聽乎、王下兵而攻滎陽、則鞏成皐之道不通、北斷太行之道、則上黨之師不下、王一興兵而攻滎陽、則其國斷而爲三、夫韓見必亡、安得不聽乎、若韓聽而霸事因可慮矣、王曰、善、且欲發使於韓、

【講義】 外國出身の大臣范雎は復び秦の昭王に說いて云ふ、秦と韓との地形は入り雜ること繡の如く、秦に韓あるは譬ふるに木に蟲あるが如く、人に腹や胸の病あるが如く、天下に變動なければ其れまでなれども、一朝變動あるときは、秦の害をなす者は何れの國か韓より大なるべき、大王に於ては韓を取込み給ふが上策なりと、昭王曰く、自分は固より韓を取込まんと欲すれども、韓にて之を承知せざるときは何如にせんと、范雎對へて云ふ、韓は何とて承知せざることが出來得ようや、其故は、大王が兵を下して滎陽を攻め給ふときは鞏、成皐の道通ぜず、北の方太行の道

則附趙、趙彊則附楚、楚趙皆附、齊必懼矣、齊懼、必卑辭重幣以事秦、齊附而韓魏因可虜也、

【講義】故に大王は韓魏を越えて遠き齊を攻め給ふが如き政略を止め、遠方の國と交りて近き處の國を攻め給ふが上策なり、此の政策によるときは、一寸の土地を得れば是れ大王の一寸なり、一尺の土地を得れば是れ亦大王の一尺なり、然るに此の確實なる政策をすてゝ齊の如き遠國を攻めんとし給ふは何と間違ひにあらずや、且つ昔し中山の國は其地の大きさ方五百里あり、それをば趙は獨り併合に及び、功成り譽れを得て利益も之に附帶せり、而も天下列國之を害するものなかりき、今夫れ韓魏は中國の地位に在つて天下の樞に當る處なり、大王霸たらんと思召さば、是非とも中國と親み、之と共に天下の樞となり、其れに因つて楚と趙とを脅かし給へ、楚が强きときは趙を味方にせん、趙强きときは楚を味方にせん、楚と趙と竝に味方とならば齊は懼るゝに相違なし、齊果して懼るゝときは、口上を卑下し禮物を手厚くして秦に事へん、齊が秦の味方とならば、韓魏の王は虜にすることを得べしと、

昭王曰、吾欲親魏久矣、而魏多變之國也、寡人不能親、請問親魏奈何、對曰、王卑詞重幣以事之、不可、則割地而賂之、不可因擧兵而伐之、王曰、寡人敬聞命矣、乃拜范雎爲客卿、謀兵事、卒聽范雎謀、使五大夫綰伐魏、拔懷、後二歲、拔邢丘、

【講義】昭王曰く、吾れ夙くより魏と親まんと欲すれども、魏は變多くして信ずべからざる國なれば、此の方親むことを得ず、魏と親むには何如にせば宜しからんと、范雎答へて曰く、大王辭を卑下し禮物を立

王より口火を開きしことなれば直ちに心中を打明けんとしたるが、善く氣を附けて見れば左右に立聽きをする者多かりしかば、范雎は謀の洩れんことを恐れ、肝腎なる內事は姑らく差置きて先づ外事を述べ、秦王の樣子を察せり、因つて進み出でて言ふやう、彼の穰侯が韓魏の地を通り越して遠く齊の綱壽を攻むるは得策にあらず、兵を少しく出すときは齊に損害を加ふる能はず、さりとて多く出すときは秦に害あり、臣の考ふる所に據れば、王の計は少しく兵を出して韓魏の兵を殘らず出さしめんと欲し給へども是れは不義なり、今同盟國すら親まざるに、人の國を踰えて攻めんとし給ふは、其の計の立て方甚だ疎なり、其上昔し齊の湣王は南の方楚を攻擊し、軍を破り將を殺し、再び版圖を擴張すること千里に及ばんとしたれども、持ちこたへずして楚に於ける一尺一寸の土地も得ること能はざりし理由は、何も土地を得ることを望まざりし故ならんや、形勢の上に於て有する能はざりしなり、列國は齊が疲弊して君臣の間一致せざるを見て、兵を興し齊を伐ちて大に之を破り、士は辱められ兵は挫けぬ、齊の群臣何れも王を咎めて何人が此の如き計をなしたるぞやと問ひけるに、齊王は文子が之を爲せりと云ふ、之が爲に大臣は叛亂を起し文子は出奔に及ぶ、故に齊の大に破れたる所以は、楚を伐ちたる結果韓魏を肥したるを以てなり、此れは俗に申す、賊に武器を貸し、盜に糧食を與ふると云ふものなり、

【字解】 文子、田文、卽ち孟嘗君を謂ふ、

王不如遠交而近攻、得寸則王之寸也、得尺亦王之尺也、今釋此而遠攻、不亦繆乎、且昔者中山之國、地方五百里、趙獨吞之、功成名立、而利附焉、天下莫之能害也、今夫韓魏中國之處、而天下之樞也、王其欲霸、必親中國以爲天下樞、以威楚趙、楚彊

かるべく、霸王の業を成就することを得べし、然るに貴國の群臣中其立場に當る者なく、今日に至るまで函谷關を閉づること十五年に及び、敢て兵を出して山東の隙を窺はざるは、是れ穰侯が秦の爲に謀ること忠實ならず、而して大王の方針も誤る所あればなり、

【字解】 谷口、地名、

秦王跽曰、寡人願聞失計、然左右多竊聽者、范睢恐未敢言內、先言外事、以觀秦王之俯仰、因進曰、夫穰侯越韓魏而攻齊綱壽、非計也、少出師、則不足以傷齊、多出師、則害於秦、臣意王之計、欲少出師而悉韓魏之兵也則不義矣、今見與國之不親也、越人之國而攻、可乎、其於計疏矣、且昔齊湣王南攻楚、破軍殺將、再辟地千里、而齊尺寸之地無得焉者、豈不欲得地哉、形勢不能有也、諸侯見齊之罷弊、君臣之不和也、興兵而伐齊、大破之、士辱兵頓、皆咎其王曰、誰爲此計者乎、王曰、文子爲之、大臣作亂、文子出走、故齊所以大破者、以其伐楚而肥韓魏也、此所謂借賊兵齎盜糧者也、

【講義】 秦王は跪いて云ふ、此の方は何卒今先生の申されたる方針を誤りたる箇條を承りたしと、范睢は元來太后と穰侯との事を言はんとしたる所、今秦

とを得たるは、是れ天が先生に幸福を與へ此の方を棄てざるなり、先生何故に刑を受くる抔と申さるゝや、何卒先生には事の大小に拘はらず、上は太后の事に及び下は大臣の事に至るまで、逐一此の方に指圖を賜はりたし、此の方を疑ひ給ふ勿れと、范雎は秦王の腹藏なく意中を告げて信任せんとする誠意に對し拜禮を行ひけるに、秦王も亦答拜せり、

【字解】 慁、亂るなり、

范雎曰、大王之國、四塞以爲固、北有甘泉谷口、南帶涇渭、右隴蜀、左關阪、奮擊百萬、戰車千乘、利則出攻、不利則入守、此王者之地也、民怯於私鬬、而勇於公戰、此王者之民也、王并此二者而有之、夫以秦卒之勇、車騎之衆、以治諸侯、譬若馳韓盧而搏蹇兎也、霸王之業可致也、而羣臣莫當其位、至今閉關十五年、不敢窺兵於山東者、是穰侯爲秦謀不忠、而大王之計有所失也、

【講義】 范雎曰く、大王の國は四方に險要ありて固めとなれり、北には甘泉、谷口あり、南には涇、渭の川を帶び、右に隴、蜀あり、左に關阪あり、勢ひ鋭く敵を攻擊すべき兵員一百萬、戰車一千乘の軍備を有するが故に、利ならば打つて出でて他國を攻め、不利ならば入りて己れの版圖を守るべし、此れ王者に適する地なり、其人民は又私的爭鬬には臆病にして公的戰爭には勇敢なるが、此れは王者に適する民なり、大王は此の王者の地と王者の民とを併せて之を所有し給ふ、夫れ秦の兵卒の勇なると秦の戰車騎士の多數なるとを以て諸侯を平ぐるは、譬へば韓盧と云ふ良犬を馳せて足なへの兎を搏つが如く、手に立つもの無

【字解】 橐、底のなき嚢なり、蒲伏、匍匐に同じ、稽首、頭を地につくる、肉袒、肌を脱ぐ、箎、横笛の一種、

足下上畏太后之嚴、下惑於姦臣之態、居深宮之中、不離阿保之手、終身迷惑、無與昭姦、大者宗廟滅覆、小者身以孤危、此臣之所恐耳、若夫窮辱之事、死亡之患、臣不敢畏也、臣死而秦治、是臣死賢於生、秦王跽曰、先生是何言也、夫秦國辟遠、寡人愚不肖、先生乃幸辱至於此、是天以寡人慁先生而存先王之宗廟也、寡人得受命於先生、是天所以幸先王而不弃其孤也、先生奈何而言若是、事無小大、上及太后、下至大臣、願先生悉以教寡人、無疑寡人也、范睢拜、秦王亦拜、

【講義】 足下に於ては上は太后の嚴しきことを畏れ、下は姦臣の仕業に惑ひ、宮殿奥深き處に在して附人守役の手を離れず、一生迷ひ惑ひて姦人を看破ることなし、其結果、大にしては宗廟滅亡に及び、小にしては御身孤立して危險ならん、此れ臣の專ら恐るる所なり、彼の困窮不名譽の事や死亡の禍などは、臣敢て畏れ申さず、臣が死して秦國が治まることとならば、是れ臣が死するは生きて居るより價直ありと、秦王は范睢の說に動かされ跪いて云ふやう、先生の今の御語は何たる御申し分ぞや、夫れ秦國は僻土遠隔の土地にして此の方は不肖なれば取るにも足らざるに、先生は仕合せにも此の國へ來臨下されたるは、是れ天が此の方を以て先生に迷惑をかけしめ、先生の宗廟を全うするなり、此の方が先生の敎へを伺ふこ

伏、至於陵水、無以餬其口、膝行蒲伏、稽首肉袒、鼓腹吹篪、乞食於吳市、卒興吳國、闔閭爲伯、使臣得盡謀如伍子胥、加之以幽囚、終身不復見、是臣之說行也、臣又何憂、箕子接輿、漆身爲厲、被髮爲狂、無益於主、假使臣得同行於箕子、可以有補所賢之主、是臣之大榮也、臣有何恥、臣之所恐者、獨恐臣死之後、天下見臣之盡忠而身死、因以是杜口裹足、莫肯鄉秦耳、

【講義】昔し伍子胥は嚢の内に身を潛め、車に載せられて昭關を拔け出で、人目を忍ぶため、夜は行き晝は潛み、陵水に至りし頃は最早食物に差支へければ、吳の町中に於て或は膝にてあゆみ或は腹這ひとなり、或は人に頭を下げ肌脫ぎとなり、或は腹鼓を打ち篪と云ふ笛を吹きなどして乞食をなして露命を繫ぎしが、卒に吳の國を興し、其君闔閭をして霸者とならしめぬ、若し臣に十分謀を盡さしめ闔閭が伍子胥を用ひたる如くならば、臣に刑罰を加へて之を牢舍に押込め終身出づること叶はずとも、是れ臣の說が行はるゝなれば、臣又何をか心配致し申さんや、殷の箕子や楚の接輿は身に漆を塗りて癩病的となり、又は髮を振りさばきて狂人の風をなしゝも、何等其君に益する所なかりき、縱令臣をして箕子同樣の恥づべき風體を爲さしむとも、己が賢明と思ふ所の君に補ひあるならば、是れ臣の大なる榮譽なり、臣に何の恥か之れあるべき、臣の恐るゝ所は、只臣が誅せられて死したる後に於て、天下の人が臣の忠を盡して反つて殺されたるを見ば、之に懲りて口を閉ぢて秦の利益になるべきことを言はず、足を包みて秦に向ひ秦の爲に働く者なきに在り、

【字解】呂尙、太公望の姓名、

臣非有畏而不敢言也、臣知今日言之於前、而明日伏誅於後、然臣不敢避也、大王信行臣之言、死不足以爲臣患、亡不足以爲臣憂、漆身爲厲、被髮爲狂、不足以爲臣恥、且以五帝之聖焉而死、三王之仁焉而死、五伯之賢焉而死、烏獲任鄙之力焉而死、成荆孟賁王慶忌夏育之勇焉而死、死者人之所必不免也、處必然之勢、可以少有補於秦、此臣之所大願也、臣又何患哉、

【講義】臣は何も畏ろしく思ふ廉あるが爲に申し切らざるに非ず、臣は今日言上せば明日誅に伏することは萬々承知仕れども、決して之を避け申さず、大王が信に臣の說を行ひ給ふときは、死しても臣は苦痛とする所にてはなく、亡びても心配とする所にてはなく、身に漆を塗りて癩病患者の如くなるとも、髮を振りさばきて狂人となるとも、臣は恥ぢとする所にてはなし、甘んじて之を受け申すべし、且つ五帝は聖人なるに、それにても死し、三王は仁人なるに、それにても死し、五伯は賢人なるに、それにても死し、烏獲、任鄙の如き力ある者にても死し、成荆、孟賁、王慶忌、夏育の如き勇ある者にても死せり、死は人類の免れざる所なり、必ず然樣あるべき勢ひに處し、少しにても秦に補ひあることは此れ臣の大に願ふ所なり、死の如きは覺悟する所なれば臣は又何をか苦痛と致し申さんや、

【字解】厲、癩に同じ、成荆、古勇士の名、孟賁、衞人、王慶忌、吳王僚の子なる慶忌、夏育、衞人、

伍子胥橐載而出昭關、夜行晝

師、載與俱歸者、其言深也、故文王遂收功於呂尙、而卒王天下、鄉使文王疏呂尙而不與深言、是周無天子之德、而文武無與成其王業也、今臣羈旅之臣也、交疏於王而所願陳者、皆匡君之事、處人骨肉之間、願效愚忠而未知王之心也、此所以王三問而不敢對者也、

【講義】秦の昭王は左右に居る臣下の者を退かしめ、宮中は空明となりて人氣なき有樣なり、秦王は最早話の外へ洩るゝ氣遣なしと見しかば、地に跪き丁寧に尋ねて云ふ、先生には何如なる事をば此の方に敎へ給ふかと、范睢は只唯々とのみ答へて何事をも言はず、斯の如く昭王が熱心に尋ね問へども、范睢は唯唯とのみ答へて何事をも言はざること三度に及ぶ、秦王又跪いて云ふ、先生は結局此の方に敎示を垂れ給はざる心底なるかと、范睢曰く、仲々以て然樣なる次第に非ず、臣の承はるに、昔し呂尙が周の文王に遇ひし折は其身漁父となりて渭水の濱邊に釣を垂れ居たり、此れは文王との關係疏くして直接謁見すべき機會なかりし故なり、文王が彼れの說を聞きし後大に悅んで、之を太師と云ふ重き身分となし、己れの車に載せ同道して歸りたるは、呂尙の言ふ所深かりしため信用せしが故なり、されば文王は呂尙の力にて功を收め天下に王業をなせり、若し初めに文王が呂尙を疏んじて奧底の物語を爲さゞりしならば、是れ周に天子の德がなく、文王、武王はどちらも王業を成す能はざりしならん、今臣は他國より寄留する所の臣なり、故に王との關係は疏なるに反して、陳述致したしと存ずる所は皆君を匡正する事柄にして人の肉親の間に處する儀なれば、うかとは申難く、愚忠を盡して意見を吐かんと願へども、大王の御心を測りかね候ゆゑ、三たび御尋ねを蒙りながら押して御答へを致さゞる次第なり、

禮、范雎辭讓、是日觀范雎之見者、羣臣莫不洒然變色易容者、

【講義】此の上書を觀て秦王は大に悦び、王稽に挨拶ありて迎への車を發し范雎を召さる、是に於て范雎は離宮に於て秦王に謁見することを得たり、范雎は態と知らざる風をなして永巷の中に入らんとしけるとき、秦王出御せられ、宦者は范雎が其邊を徘徊するを見て立腹に及び、秦王の御通りなりと言ひけるに范雎は心得ぬ風にて、秦に何とて王などあるべきや、只太后と穰侯とあることを知るのみと、斯く昭王に聞えよがしに叫びて昭王を激し、其怒りを挑發せんとせり、昭王は聽て其場に至り、范雎が宦者と言ひ爭ふことを聞き、遂に迎へ請じて謝して云ふやう、此の方は夙くより自身出向きて敎へを乞ふべき處、丁度義渠の問題差迫りしため、朝夕太后に指圖を仰ぎ多忙なりしため禮を缺きたり、然るに今義渠の事件も落着したれば、此の方先生の敎へを乞ふと出來得るやうに相成りたり、何卒此の方閔然と智慮昏く不行屆きなるが、敬んで主客の禮を以て先生に對すべければ腹藏なく申聞けありたしと、范雎は畏れ多しと辭退の挨拶に及びぬ、此の日范雎が秦王に謁見するとき、之れを觀たる多くの臣下は洒然として顏色を變じ、容貌を易へざるものあらざりき、

【字解】説、悦に同じ、永巷、宮中の獄なり、義渠、西戎の國名、閔然、昏昧の貌、洒然、敬肅の貌、

秦王屛左右、宮中虛無人、秦王跽而請曰、先生何以幸敎寡人、范雎曰、唯唯、有間、秦王復跽而請曰、先生何以幸敎寡人、范雎曰、唯唯、若是者三、秦王跽曰、先生卒不幸敎寡人邪、范雎曰、非敢然也、臣聞昔者呂尙之遇文王也、身爲漁父、而釣於渭濱耳、若是者交疎也、已說而立爲太

之、疑則少嘗之、雖舜禹復生弗能改已、語之至者、臣不敢載之於書、其淺者、又不足聽也、意者臣愚而不概於王心邪、亡其言臣者賤而不可用乎、自非然者、臣願得少賜游觀之間、望見顏色、一語無效、請伏斧質、

【講義】良醫は病人の死生を知る、それと同じく聖君は成敗の事に明かにして、利なれば之を行ひ、害なれば之を見合せ、疑しきは少しく之を試む、舜帝や禹王が復生ずるとも改むること能はず、語の至れるものは、臣之を書に載せず、又其淺近なるものは、書き載せたりとて聽くべき價直なし、臣が愚なるため王の心に通ぜざるか、臣を推擧せし者が賤しきために用ふべからざるか、若し然樣なる次第に之れなきときは、何卒大王が物見游山をなし給ふ御暇に拜顏を得たく存じ奉る、一語にても效驗なきならば斧質の誅を蒙り申さんと、

於是秦昭王大說、乃謝王稽、使以傳車召范雎、於是范雎乃得見於離宮、詳爲不知永巷、而入其中、王來、而宦者怒逐之曰、王至、范雎繆爲曰、秦安得王、秦獨有太后穰侯耳、欲以感怒昭王、昭王至、聞其與宦者爭言、遂延迎謝曰、寡人宜以身受命久矣、會義渠之事急、寡人旦暮自請太后、今義渠之事已、寡人乃得受命、竊閔然不敏、敬執賓主之

る君主はさにあらず、賞は何處までも功のある者に與へ、刑は必ず罪ある者に加ふと、今臣の胷も腰も斧鉞を受けて腰斬の刑を受くべき資格なき下劣の身なればとて、何とて疑はしきことを試驗的に言上するものならんや、大王は縱令臣を以て賤しき人物となして輕蔑し給ふとも、臣を保證して推擧したる者が王に背かざることを信じ給はざるか、

【字解】 椹質、腰斬せらるゝ者を謂ふ、斧鉞、腰斬に用ふる刑具なり、「臣之胸」と「而要」との句は、一つ意味を二つに分ちて述べたるなり、要は腰なり、

且臣聞周有砥砨、宋有結綠、梁有縣藜、楚有和朴、此四寶者、土之所生、良工之所失也、而爲天下名器、然則聖王之所弃者、獨不足以厚國家乎、臣聞善厚家者、取之於國、善厚國者、取之於諸侯、天下有明主、則諸侯不得擅厚者、何也、爲其割榮也、

【講義】 且つ臣聞く、周に砥砨あり、宋に結綠あり、梁に縣藜あり、楚に和朴あり、此の四種の寶玉は其國に出來たる者にして、上手なる玉細工人が其寶玉たることを見損じたるものなれども、其れが却つて天下有名の寶器となれり、然らば則ち大王の如き聖君が役に立たぬとして棄て給ふ所の人物も國家を利益するに足らぬと云ふ道理あるべきや、臣聞く、善く家を發達せしむる者は國中の人材を取り、善く國を發達せしむる者は列國の人材を取ると、故に明君あるときは諸侯が自分の國のみ發達せしむるを獨占することの出來ざるは何故なりや、其榮譽を割き取らるるが爲なり、

【字解】 砥砨、結綠、縣藜、和朴、寶玉の名、取之於國、之は人材を指す、

良醫知病人之死生、而聖主明於成敗之事、利則行之、害則舍

后の弟にて、涇陽君と高陵君とは何れも昭王の同母弟なり、穰侯は宰相となり、華陽君、涇陽君、高陵君の三人は代る代るに將軍となり領土を有せり、彼等は太后の關係により、其家の富は王室に勝れり、穰侯が將軍となるに及び、韓魏の地を踰えて齊の綱壽を伐ち、己れの領土なる陶を擴張せんと欲せり、

范雎乃上書曰、臣聞明主立政、有功者不得不賞、有能者不得不官、勞大者其祿厚、功多者其爵尊、能治衆者其官大、故無能者不敢當職焉、有能者亦不得蔽隱、使以臣之言爲可、願行而益利其道、以臣之言爲不可、久留臣無爲也、語曰、庸主賞所愛、而罰所惡、明主則不然、賞必加於有功、而刑必斷於有罪、今臣之胷不足以當椹質、而要不足以待斧鉞、豈敢以疑事嘗試於王哉、雖以臣爲賤人而輕辱、獨不重任臣者之無反復於王邪、

【講義】范雎は此等の事情を見て上書しけるは、臣の聞く所に據れば、明君が政治を立つる仕方は、功ある者は賞せざるを得ず、能ある者は官を授けざるを得ず、勞の大なる者は其俸祿を厚くし、功の多き者は其爵位を高くし、能く多數の人を支配する者は其官を重くす、故に能力なき者は差扣へて敢て職を引受くることなく、能力ある者は其れと同時に隱蔽する能はずと、臣の申す所を宜しとせらるゝならば、何卒之を實行し給うて益ゝ其道を利せられよ、又臣の申す言を不都合となし給はゞ、久しく臣を留め置き給ふも無用なり、古語に凡庸なる君主は自己の愛する所の人物を賞して惡む所の人物を罰するも、賢明な

【字解】索、搜るなり、累卵、説苑に云ふ、晉の靈公、九層の臺を造る、費用千金、左右に謂つて曰く、敢て諫むる者は斬らんと、荀息之を聞き、上書見えんことを求む、靈公弩を張り矢を持し之を見る、曰く、臣敢て諫めざるなり、臣能く十二博棊（双六の駒）を累ね、九雞子（卵）を其上に加へんと、公曰く、子、寡人の爲に之を作せと、荀息顔色を正しくし志意を定め、棊子を以て下に置き、九雞子を其上に加ふ、左右懼れて慴息す（いきばむ）、靈公氣息續かず、公曰く、危いかな危いかなと、荀息曰く、此れ殆んど危からざるなり、復此れより危きものありと、公曰く、願はくは之を見んと、荀息曰く、九層の臺、三年成らず、男耕さず女織らず、國用空虚、隣國の謀議將に與らんとす、社稷亡滅、君何をか望まんと欲すると、靈公曰く、寡人の過なりと、乃ち此に至り卽ち九層の臺を壞つ、草具、粗食草菜、

當是時、昭王已立三十六年、南拔楚之鄢郢、楚懷王幽死於秦、秦東破齊湣王、常稱帝、後去之、數困三晉、猒天下辯士、無所信、穰侯、華陽君、昭王母宣太后之弟也、而涇陽君、高陵君、皆昭王同母弟也、穰侯相、三人者更將有封邑、以太后故、私家富重於王室、及穰侯爲秦將、且欲越韓魏而伐齊綱壽、欲以廣其陶封、

【講義】此の時に當り、秦に於ては昭王已に位に卽きしより三十六年目なりしが、南方を伐ちては楚の鄢郢を拔き、楚の懷王は秦に囚はれ、牢舍中に死せり、秦は又東方を伐ちて齊の湣王を破り、帝號を稱せしとありしが、後に自ら此の號を取り去れり、此れは固より勢ひの少しく振はざりしためなるが、數三晉に困しめられ、天下辯舌の士を厭ひて何人をも信ぜざりき、穰侯と華陽君とは秦の昭王の母に當る宣太

子俱來乎、無益、徒亂人國耳、王稽曰、不敢、卽別去、范雎曰、吾聞穰侯智士也、其見事遲、鄉者疑車中有人、忘索之、於是范雎下車走曰、此必悔之、行十餘里、果使騎還索車中、無客、乃已、王稽遂與范雎入咸陽、已報使、因言曰、魏有張祿先生、天下辯士也、曰、秦王之國危於累卵、得臣則安、然不可以書傳也、臣故載來、秦王弗信、使舍食草具、待命歲餘、

【講義】暫くして穰侯は果して王稽の居る所まで來り着き、王稽が長途の使者を勤むる勞苦をねぎらひ、車を止めて語を交へけるが、穰侯は關東に何か事變ありやと問ふ、王稽何もなしと答ふ、穰侯又王稽に謂ふやう、謁君に於て他國の說客と同道して參られはせぬか、彼等は何の益もなく、人の國を亂すに過ぎずと、王稽云ふ、決して同道は致さずと、其儘左右に別れ去りぬ、范雎は王稽に謂ふ、吾れ聞く、穰侯は智士なりと、されど事を見ること遲し、先刻車の中に人あることを疑ひながら、之を探すことを忘れぬと、斯くて范雎は車を下りて走り、彼れ必ず後悔して復び來るならんと言ひしが、十餘里計り行きけるに、果して穰侯は騎士を引返させて車の中を探らしめたれども何者も居らざりければ、手を空しくして立去りぬ、王稽は遂に范雎と咸陽の都に入り、秦王に復命せし後、言上しけるは、魏に張祿先生と云ふ者あり、天下竝びなき辯士なり、彼れの申すに、秦王の國は累卵より危し、臣を用ひなば安かるべし、然れども書面にては意中を傳へかぬるとの事ゆゑ、臣は車に同乘して伴ひ參れりと言上せしも、秦王は之を信ぜず、旅館を宛てがひ極めて粗末の食物を給せり、范雎は其れより沙汰を待つこと一年餘に及ぶ、

見車騎從西來、范雎曰、彼來者爲誰、王稽曰、秦相穰侯東行縣邑、范雎曰、吾聞穰侯專秦權、惡內諸侯客、此恐辱我、我寧且匿車中、

【講義】此時に當り秦の昭王は謁者の役を勤むる王稽を使者として魏に遣はせり、王稽魏に至りし時、鄭安平は僞つて卒となり王稽の側に附き從ひしが、王稽は彼れに問うて云ふ、若し魏に賢人あらば本國に伴ひ行きて役に立てんと思ふが、予と同行すべき賢人ありや否やと、鄭安平答へて云ふ、臣の里中に張祿先生と申す者あり、君に御逢ひ致して天下の事を論じたしと希望致し居れり、但し此人は仇あるがゆゑに晝はよう御逢ひ申さずと、王稽云ふ、然らば夜、汝同道して來るべしと、鄭安平は約束の如く夜中張祿を伴ひ諸共に王稽と會見せし處、語未だ終らざるに王稽は范雎の賢なることを知りて曰く、是非本國に御案內致すべければ、先生には三亭の南にて御待ちあれ、魏を引擧ぐるとき其處より同道仕るべしと、斯く內々約束を結んで立去れり、王稽愈、使命を終り魏に暇乞ひして退京せしが、約束の三亭に立寄り、范雎を己が車に載せて湖關に至る、丁度西の方より車や騎馬の一群が此の方へ來りつゝありしが、范雎は望見して其秦より來りし者なることを知るがゆゑに、彼の來る者は何人なりやと問ひければ王稽は答へて、彼れは秦の宰相穰侯なるが、多分今東方の縣邑を巡回するにやあらんと、范雎云ふ、吾れ聞く、穰侯は秦の權力を獨占し、他國より說客を入るゝことを惡む由、此にて出遇はゞ我れを辱むるやも知れず、我れは辱めを受くるよりも寧ろ窮屈ながら車の中に匿れて居らんと、

【字解】三亭、地名、內、イル、と訓ず、

有頃、穰侯果至、勞王稽、因立車而語曰、關東有何變、曰、無有、又謂王稽曰、謁君得無與諸侯客

范雎亡伏匿、更名姓、曰張祿、

【講義】 魏の宰相は魏の公子の一人にして、名を魏齊と呼べり、魏齊は須賈の話を聞いて大に范雎を怒り、舍人に申附け竹の鞭を以て范雎を撃たしめ、肋を折り齒を挫きしかば、范雎は苦痛に堪へかね、死したる眞似をなしゝに、舍人は眞に死したることと考へ、簀にて彼れの身體をぐるぐる卷きにし、便所の中に入れ置き、須賈の家に居る食客の醉ひたる者に代る代る小便をかけさせ、殊更之を辱かしめて後來之に懲りて妄りに國の密事を洩す者なからしめんとの趣向なり、范雎は簀の中より番人を呼んで云ふ、貴公我れを出しくれなば、我れ莫大の報酬をなすべしと、番人は之を承諾し、魏齊に簀卷きに爲し置きたる死人を外へ棄てゝも宜しきやと指令を仰ぎたる處、魏齊は此時酒に醉ひ居たるが差支へなしとて許しけるゆゑ、范雎は番人の料らひにて出づることを得たり、後魏齊は范雎の存生なることを知りて尸骸を運び出さしめたることを悔い、復び之を手に入れんとて探索に及びけり、魏の鄭安平と云ふ者之を聞き、范雎の危難を救はんがため、彼れを引連れて逃亡し、潛伏して在りけるが、此の折に姓名を更めて張祿と云へり、

【字解】 笞、シモト、摺、挫くなり、簀、スノコ、僇、ハヅカシム、

當此時、秦昭王使謁者王稽於魏、鄭安平詐爲卒、侍王稽、王稽問魏有賢人可與倶西游者乎、鄭安平曰、臣里中有張祿先生、欲見君言天下事、其人有仇、不敢晝見、王稽曰、夜與倶來、鄭安平夜與張祿見王稽、語未究、王稽知范雎賢、謂曰、先生待我於三亭之南、與私約而去、王稽辭魏去、過載范雎入秦、至湖關、望

國陰事告齊、故得此饋、令雎受其牛酒、還其金、既歸、心怒雎、以告魏相

【講義】范雎は魏の國の人なり、字を叔と云ふ、當時の辯士と同じく列國に游説せしが、彼れの目的は魏王に事ふるに在り、然るに此の目的を達するには種種の手數を歴ざるべからず、隨つて運動費を要する處、其家貧しくして自ら其財源を有せざりしかば、魏王に事ふることは姑らく見合せ、其階段として魏の中大夫を勤むる須賈に事へたり、須賈は或る時魏の昭王の命を受けて使節となりて齊國に赴き、范雎は之に隨行せり、須賈主從は齊國に四五个月も滯在に及びたれども、齊王よりの返事なく、使者の用向き濟まざりしかば閒散に日を送りしが、齊の襄王は范雎の辯舌を聞かれ、使を以て金十斤と牛肉と酒とを賜ひけれども范雎は辭退して受けざりき、須賈は之を聞き知りて大に怒り、考ふるやう、是れ范雎が畢竟魏の國の密事を齊に知らせたるため、齊王より入懇に思はれ、此の如き進物を得たるならんと、范雎に命じて其牛肉と酒とを受納して金を返さしめたるが、軈て用事を終り本國に歸りし後も心の中に范雎の不埒を怒り、魏の宰相に事の次第を報告せり、

【字解】范雎、雎は睢に作るを是とすの說あれども姑く舊に仍る、昭王、名は遬、襄王の子、饋、贈物、

魏相魏之諸公子、曰魏齊、魏齊大怒、使舍人笞擊雎、折脅摺齒、雎佯死、即卷以簀置廁中、賓客飲者、醉更溺雎、故僇辱以懲後、令無妄言者、雎從簀中謂守者曰、公能出我、我必厚謝公、守者乃請出弃簀中死人、魏齊醉曰、可矣、范雎得出、後魏齊悔、復召求之、魏人鄭安平聞之、乃遂操

斬りて棘門の外に投出せり、是に於て遂に吏をして盡く春申君の家を亡ぼさしめたり、而して李園の妹、初め春申君の情を受けて懷胎し、後楚王の宮中に入りて生みたる子が遂に立ちて君となれり、是れを楚の幽王となす、此の歲は秦の始皇が立ちて九年目なり、嫪毒と云ふもの亦秦に於て謀叛せし處、發覺して三族を滅ぼされ、呂不韋も廢せられたり、

太史公曰、吾適楚、觀春申君故城宮室、盛矣哉、初春申君之說秦昭王、及出身遣太子歸、何其智之明也、後制於李園、旄矣、語曰、當斷不斷、反受其亂、春申君失朱英之謂邪、

【講義】太史公曰く、吾れ楚の國に往きて春申君の昔しの城跡や宮殿を見物したるが、何と申す立派なることかな、初め春申君が秦の昭王に說いて楚と同盟せしたること、並に己が身を投げ出して太子を本國に歸ることを得しめたる事柄などは、何如に智の明かなることぞ、然るに其後李園の爲に制せられたる如きは、殆んど老耄せるなり、古語に斷ずべきに斷ぜざれば反つて害を受くとあり、春申君が朱英の言を用ひ損ねたることを謂ひしならん、

范雎蔡澤列傳第十九

范雎者魏人也、字叔、游說諸侯、欲事魏王、家貧、無以自資、乃先事魏中大夫須賈、須賈爲魏昭王使於齊、范雎從、留數月、未得報、齊襄王聞雎辯口、乃使人賜雎金十斤及牛酒、雎辭謝、不敢受、須賈知之、大怒、以爲雎持魏

手に握りて君を殺し、密事の洩るゝ元を絶すべし、是れ謂はゆる望まずして來る所の禍なりと、春申君又問うて曰く、吉凶を忽ち變ずる人とは何を指すやと、朱英答へて曰く、君は臣をば郎中の官に置き給へ、楚王卒去あらば李園必ず一番先きに宮中に入るべし、其時臣は君の爲に彼れを殺すべし、是れ謂はゆる吉凶を忽ち變ずる人なりと、

春申君曰、足下置之、李園弱人也、僕又善之、且又何至此、朱英知言不用、恐禍及身、乃亡去、後十七日、楚考烈王卒、李園果先入、伏死士於棘門之內、春申君入棘門、園死士俠刺春申君、斬其頭、投之棘門外、於是遂使吏盡滅春申君之家、而李園女弟初幸春申君有身、而入之王所生子者遂立、是爲楚幽王、是歲也、秦始皇帝立九年矣、嫪毐亦爲亂於秦、覺夷其三族、而呂不韋廢、

【講義】春申君は李園を信ずること深かりければ朱英の忠言に耳を傾けずして曰く、足下先づ其儘に致し置かれよ、李園は弱き人物なる上、自分は彼れを善く扱ひ置くゆゑ、足下の心配は無用なり、且つ彼れ何として然樣なる大膽の事を仕出すべきと、朱英は春申君が己れの說を用ひざることを知りしかば、春申君が李園の計に落ちて殺され、其結果自己の身に禍の及ばんことを恐れて亡げ去りぬ、此れより十七日の後楚の考烈王卒せし處、李園は果して先づ宮中に入り、棘門の內に豫ねて己れの養ひ置きたる死士を伏せ置きしが、春申君は斯くとも知らず棘門に入りし處を、李園の死士は跳り出で挾みて刺し殺し、其首を

まずして忽ち來る禍あり、今君は生死の常なき世に處りて喜怒の常なき君に事へ給ふ、何として吉凶を忽ち變ずる所の人なくてこれあるべきと、

春申君曰、何謂毋望之福、曰、君相楚二十餘年矣、雖名相國、實楚王也、今楚王病、旦暮且卒、而君相少主、因而代立當國、如伊尹周公、王長而反政、不卽遂南面稱孤而有楚國、此所謂毋望之福也、春申君曰、何謂毋望之禍、曰、李園不治國、而君之仇也、不爲兵、而養死士之日久矣、楚王卒、李園必先入據權、而殺君以滅口、此所謂毋望之禍也、春申君曰、何謂毋望之人、對曰、君置臣郎中、楚王卒、李園必先入、臣爲君殺李園、此所謂毋望之人也、

【講義】春申君は朱英に問うて云ふ、望まずして忽ち來る福とは何を指すにやと、朱英答へて曰く、君は楚の宰相を勤めらるゝこと二十餘年になりぬ、其名は相國なれども實は楚王なり、今楚王大病に罹られ、朝夕の間に卒去せられんとす、君には幼少の君主を輔佐するに就き、代つて國君の地位に立ち國家を治むると、伊尹、周公の如くになし、幼君成長の後政權を返すか、さもなくば遂に南面して國王となり、孤と稱して楚の國を自己の物とする、此れ謂はゆる望まずして忽ち來るの福なりと、春申君曰く、望まずして忽ち來る所の禍とは何を指すやと、朱英答へて曰く、李園は國を治むることをなさずして君を仇とし、戰爭の爲に非ずして死士を養ひ置くこと久し、楚王卒去あらば、李園は必ず一番先きに宮中に入り、權力を

により て男子を擧げなば、是れ君の子が楚國の王となる次第にて、楚國は盡く手に入るべし、測り知られざる禍を被ると何れが宜しく候はんと、

春申君大然之、乃出李園女弟謹舍、而言之楚王、楚王召入幸之、遂生子男、立爲太子、以李園女弟爲王后、楚王貴李園、園用事、李園既入其女弟、立爲王后、子爲太子、恐春申君語泄而益驕、陰養死士、欲殺春申君以滅口、而國人頗有知之者、春申君相二十五年、楚考烈王病、朱英謂春申君曰、世有毋望之福、又有毋望之禍、今君處毋望之世、事毋望之主、安可以無毋望之人乎、

【講義】春申君は彼の女の言ふ所を大に尤もなりと考へしかば、一旦李園の妹を邸より出して他所へ深くかくまひ置き、斯くして春申君より楚王に、李園と申す者の妹は絕世の佳人なれば御召抱へあつて然るべしと申立てければ、楚王は召して後宮に入れ之を寵愛せしが、遂に男子を生めり、楚王は之を立てゝ太子となし、其母なる李園の妹を王后となし、重く李園を用ひ、彼れ政事を切り廻しぬ、斯くて李園は已に其妹を後宮に入れて王后に立てられ、子は太子となり、妹と打合せたる隱謀全く成就したれども、只心に懸るは春申君の語より密事の洩るゝことゝ、春申君が益々勢を得て驕ることなり、是に於て彼れは內々命知らずの人を養ひ、春申君を殺して密事の洩るゝ元を絕さんと欲したるが、國人の中には頗る之を知る者ありき、春申君が宰相となりしより二十五年目に楚の考烈王は大患に罹れり、春申君の食客朱英、春申君に申すやう、世には望まずして忽ち來る福あり、又望

園女弟承閒、以說春申君曰、楚王之貴幸君、雖兄弟不如也、今君相楚二十餘年、而王無子、卽百歲後、將更立兄弟、則楚更立君後亦各貴其故所親、君又安得長有寵乎、非徒然也、君貴用事久、多失禮於王兄弟、兄弟誠立、禍且及身、何以保相印江東之封乎、今妾自知有身矣、而人莫知、妾幸君未久、誠以君之重、而進妾於楚王、王必幸妾、妾賴天有子男、則是君之子爲王也、楚國盡可得、孰與身臨不測之罪乎、

【講義】李園の妹は兄と相談の結果、善き折を見料らひて春申君に說いて曰く、楚王が君を寵遇し給ふことは王の兄弟と雖も及ばぬ程なり、然るに今君は楚の宰相を勤めらるゝこと二十餘年なるが、楚王に御子なければ其百歲の後卽ち崩御の曉に至らば、王の兄弟が代りて立つことゝなるべし、楚にて愈〻新君を立つることに相成らば、誰れが君となるにしても、各〻己が從來親しかりし人を用ひて之を貴き位地に置くならん、然るときは君は何とて長く恩寵を有つことを得んや、只夫れのみならず、君には貴き地位に居られて政權を執り給ふこと久しく、楚王の兄弟に對して禮を失ひ給ひしこと少からざれば、王の兄弟が實際立ちて楚王とならんには、御身に禍ひ及ぶべく、何とて宰相の印や江東の領地を保ち給ふことを得べき、それに就いては善き計あり、今妾は確かに懷妊せしと覺ゆ、されど何人も未だ氣附き申さゞることそ幸なれ、君の重き御身分にて妾を楚王に差上げられなば、楚王は妾を寵愛あるに相違なし、妾が天の佑

り呉の領地に住して宰相の事務を行へり、

楚考烈王無子、春申君患之、求婦人宜子者進之甚衆、卒無子、趙人李園持其女弟、欲進之楚王、聞其不宜子、恐久毋寵、李園求事春申君爲舍人、已而謁歸、故失期還謁、春申君問之狀、對曰、齊王使使求臣之女弟、與其使者飲、故失期、春申君曰、娉入乎、對曰、未也、春申君曰、可得見乎、曰、可、於是李園乃進其女弟、即幸於春申君、知其有身、李園乃與其女弟謀、

【講義】　楚の考烈王には子なかりしかば春申君は之を憂へ、子供の出來さうなる婦人を探し求めて考烈王に差上げたることは屢〻にて其人數多かりしも、卒に子なかりき、趙の人にて李園と云ふ者あり、己れの妹を楚王の妾に差出したしと思ひけれども、妹は懷胎のことむづかしき由を聞いて、長き月日の間には寵愛を失はんことを恐れぬ、李園は心に一物ありて春申君の家に奉公を求め舍人となりしが、暫くして暇を乞ひ國に返り、態と期限を後らして楚に戻り春申君に謁せしかば、春申君は遲延の事情を尋ねし處、李園答へて云ふ、齊王より使を以て臣の妹を奥殿へ差出すべしとの所望あり、臣は其使者と右の儀に就き酒を飲みつゝ談話致し居りたるため期限に違ひたりと、春申君問うて云ふ、汝の妹は已に結納を濟ましたるかと、李園、結納は未だ相濟まずと答へければ、春申君曰く、汝の妹を一見致すこと叶ふべしやと、李園は差支へ之れなしと言ひ、遂に其妹を春申君に差出して寵愛を被り、其内妊娠せしこと分りしかば、李園は大に喜び、妹と相談して惡計を運らせり、

は秦が列國を攻め伐つて已む時なきを憂へ、禍ひの根を絶たんとて相共に合從同盟し、連合軍を組織して西方に向ひ秦を伐ちしが、楚王は合從の盟主となり、春申君が萬事を執行せり、然るに連合軍は函谷關に至りし處、秦より兵を出して逆に列國の軍を攻め、皆敗走に及べり、考烈王は春申君の責任として之を咎め、此れより春申君は益〻疎んぜられぬ、

客有觀津人朱英、謂春申君曰、人皆以楚爲彊、而君用之弱、其於英不然、先君時善秦二十年、而不攻楚何也、秦踰黽隘之塞而攻楚不便、假道於兩周、背韓魏而攻楚不可、今則不然、魏旦暮亡、不能愛許鄢陵、其許魏割以與秦、秦兵去陳百六十里、臣之所觀者、見秦楚之日鬭也、楚於是去陳徙壽春、而秦徙衞野王、作置東郡、春申君由此就封於吳、行相事、

【講義】春申君の食客に觀津の人にて朱英と云ふ者あり、春申君に申すやう、人は皆楚國は强かりしに、君が其政權を握られたる結果弱くなれりと思へるも、拙者の考へはさにあらず、先君の時代は秦と睦しく、二十年も長き間に楚を攻めざりしは何故なりや、秦は黽隘の難所を踰えて楚を攻むるは不便にして、道を東西の兩周に假り韓魏を背にして楚を攻むるは不可能なりしゆゑなり、然るに今は之と同じからず、魏は朝夕の間に亡びんとして許、鄢陵を維持すること能はず、許は魏より秦に割き與ふるなるべし、秦の兵は昔しと違ひ楚の都なる陳を去ること僅かに百六十里なり、臣の觀る所にては、秦楚は日々に相鬭ふあるのみと、是に於て楚は陳を去り壽春に移る、而して秦は衞を野王に移し、東郡を設置せり、春申君は此れよ

より四年目に、秦は長平に屯したる趙の軍四十餘萬を破り、五年目に趙の都なる邯鄲を圍む、邯鄲より危急の趣を楚に告げて援兵を求めしかば、楚よりは春申君をして兵を率ゐて趙に赴いて之を救はしめたるに、秦の兵丁度圍みを解いて去りぬ、因つて春申君も亦歸國せり、春申君楚の宰相となりしより八年目に、楚の爲に北方を伐ちて魯を亡ぼし、又荀卿を以て蘭陵の令とせり、

當是時、楚復彊、趙平原君使人於春申君、春申君舍之於上舍、趙使欲夸楚、爲瑇瑁簪、刀劍室以珠玉飾之、請命春申君客、春申君客三千餘人、其上客皆躡珠履以見趙使、趙使大慙、春申君相十四年、秦莊襄王立、以呂不韋爲相、封爲文信侯、取東周、

春申君相二十二年、諸侯患秦攻伐無已時、乃相與合從、西伐秦、而楚王爲從長、春申君用事、至函谷關、秦出兵攻諸侯兵、皆敗走、楚考烈王以咎春申君、春申君以此益疎、

【講義】此時代に於て楚は復び强國となれり、趙の平原君より春申君の所へ使者を送り越しければ、春申君は此使者を上等の旅館に宿せしめぬ、趙の使者は楚に對して趙人の贅澤なることを誇り示さんとて、瑇瑁の簪を拵へ、刀劍の鞘は珠玉を以て裝飾とし、春申君に謁見して平原君への挨拶を申受けたるに、春申君の食客三千餘人ありしが、其中上等の客は何れも珠にて飾りたる履をはく、趙の使者は大に慙ぢて赤面に及ぶ、春申君宰相となりしより十四年目に秦の莊襄王立ち、呂不韋を宰相とし文信侯に封じ、東周を取る、春申君宰相となりしより二十二年目に、列國

の顛末を自白して曰く、楚の太子は已に歸國に及び、秦の地を離るゝこと遠し、太子は臣が脫走せしめたるにて、臣の罪は死に當る、何卒臣を殺し給へと、昭王は大に怒り、其自殺を許さんとせしに、應侯諫めて云ふ、歇は人の臣下として己れの一身を投出して主君の犧牲となす、太子立たば、今度の恩義もあることゆゑ必ず歇を用ひん、故に寧ろ彼れを罪することなく、之を歸國せしめて楚と親むが得策なりと、秦王も尤もと思ひければ黃歇を楚に歸せり、彼れは楚に到着して三个月の後に頃襄王卒し、太子完立つて楚王となる、是れを考烈王と稱す、考烈王の元年、黃歇を宰相に任じ、領地を與へて春申君と號し、淮水北岸の地十二縣を賜へり、後十五年を經て黃歇は楚王に言上するやう、淮水北岸の土地は齊に接觸し、政務急場を要する處なるを以て、之を郡となす方便利なることを申立て、淮北の十二縣を政府に獻じ、其代地として江東に領地を賜はりたしと請願せし所、考烈王之を許したりしかば、春申君は昔しの呉の城跡に城を築き、此れを以て己が都とせり、

春申君既相楚、是時齊有孟嘗君、趙有平原君、魏有信陵君、方爭下士、招致賓客、以相傾奪、輔國持權、春申君爲楚相四年、秦破趙之長平軍四十餘萬、五年圍邯鄲、邯鄲告急於楚、楚使春申君將兵往救之、秦兵亦去、春申君歸、春申君相楚八年、爲楚北伐滅魯、以荀卿爲蘭陵令、

【講義】春申君既に楚の宰相となりしが、此の時代に列國の公子にて賢者と稱せらるゝ者、齊には孟嘗君あり、趙には平原君あり、魏には信陵君あり、方に我れ勝ちに士を尊んで之に卑下し、他國より賓客を引寄せ、互ひに奪ひ合ふの形にして、此等賓客の力によりて國を輔け權を持せり、春申君が宰相となりし

と能はず、拙者は心配に堪へ難し、然るに本國を顧みれば陽文君の子二人楚の宮中に在り、若し楚王が卒去せられ太子が國に在らざるときは、陽文君の子が位に卽いて相續するに相違なく、太子は楚王となりて宗廟に事ふること能はざるべし、されば太子には此の際秦を逃げ去り、今度の使者と俱に立出で給ふが上策なり、臣は後に止まり、一命を以て引受け申さんと、

【字解】在中、中は宮中なり、

楚太子因變衣服、爲楚使者御以出關、而黃歇守舍、常爲謝病、度太子已遠秦不能追、歇乃自言秦昭王曰、楚太子已歸出遠矣、歇當死、願賜死、昭王大怒、欲聽其自殺也、應侯曰、歇爲人臣、出身以徇其主、太子立、必用歇、故不如無罪而歸之、以親楚、秦因遣黃歇、歇至楚三月、楚頃襄王卒、太子完立、是爲考烈王、考烈王元年、以黃歇爲相、封爲春申君、賜淮北地十二縣、後十五歲、黃歇言之楚王曰、淮北地邊齊、其事急、請以爲郡便、因幷獻淮北十二縣、請封於江東、考烈王許之、春申君因城故吳墟、以自爲都邑、

【講義】楚の太子は黃歇の忠告に從ひ、衣服を變じ楚の使節の御者となりて函谷關を拔け出でぬ、而して黃歇は殘りて客舍に止り、常に病氣と稱して外出せず、太子が最早遠く落ち延び秦より追手をかけても追附く能はざる頃を測り、秦の昭王に謁見し、事

黃歇をして太子の完と共に秦に入つて人質とならしむ、秦は數年の間此の二人を留め置きしが、楚の頃襄王大病に罹り、太子は之を聞き知ると雖も人質なれば歸國することを得ず、然るに楚の太子は秦の宰相應侯と仲善かりければ、黃歇は太子の爲に應侯に說くやう、宰相に於ては實際楚の太子と懇親におはすにやと、應侯は然りと答ふ、黃歇曰く、今楚王は大病にて恐らく回復すまじ、秦は此際太子を本國に歸すが得策なり、太子が立ちて楚王となることを得ば、其秦に事ふることは必ず重く、宰相の恩義を感ずること必ず窮まりなからん、是れ與國と親むと共に萬乘の太子を立て遣すなり、若し太子を歸し給はずば、太子は咸陽の一布衣に過ぎず、楚は別に太子を立つべく、別に太子を立つるときは、其太子は秦に何等の關係なきを以て必ず秦に事ふまじ、夫れ同盟國を失つて萬乘の大國の和親を絕つことは計の得たる者に非ざれば、何卒相公には篤と勘考せられたしと、

應侯以聞秦王、秦王曰、令楚太子之傅先往問楚王之疾、返而後圖之、黃歇爲楚太子計曰、秦之留太子也、欲以求利也、今太子力未能有以利秦也、歇憂之甚、而陽文君子二人在中、王若卒大命、太子不在、陽文君子必立爲後、太子不得奉宗廟矣、不如亡秦、與使者俱出、臣請止、以死當之、

【講義】應侯は黃歇の意見を秦王に言上せし處、秦王は應侯に命じて曰く、兎も角楚の太子の守役を本國に歸して楚王の病氣を見舞はせ、彼れが戻りて後其模樣によりて方針を定むるが宜しからんと、黃歇は一日も早く太子を歸さんと思ひ、太子の爲に考案を立てゝ云ふやう、秦が太子を留むる仔細は、太子を己が手に押へ置きて楚に難題を持込み利を求めんとするなり、今太子の力にては秦に利益を得しむるこ

手出しならざることとなるべし、大王の國は東山の險を引き廻し、曲河の利便を帶び、韓は併合せられて關內侯とならん、斯くして大王には十萬の軍を以て鄭に屯せば、梁は膽を冷すべく、許、鄢陵の二个所籠城に及ぶときは、蔡と召陵とは路絕えて梁と往來出來ず、此の如きときは魏も亦關內侯となる外はあらじ、大王一たび楚と親まるゝ結果、二つの萬乘の君主を關內侯とし、齊の地を絕切らば、齊の右部は手をこまぬきて取ることを得べし、大王の版圖は東西の兩海を一貫し、天下の腰に當る處を締め括る次第なり、さすれば燕趙には齊楚の援なく、齊楚には燕趙の援なく、全く孤立に陷るが故に、其曉に及び燕趙を威しつけ直ちに齊楚を搖かさば、此の四國は兵力を以て苦痛を感ぜしむることを待たずして服すべしと、

昭王曰、善、於是乃止白起而謝韓魏、發使賂楚、約爲與國、黃歇受約歸楚、楚使歇與太子完入質於秦、秦留之數年、楚頃襄王病、太子不得歸、而楚太子與秦相應侯善、於是黃歇乃說應侯曰、相國誠善楚太子乎、應侯曰、然、歇曰、今楚王恐不起疾、秦不如歸其太子、太子得立、其事秦必重、而德相國無窮、是親與國而得儲萬乘也、若不歸、則咸陽一布衣耳、楚更立太子、必不事秦、夫失與國而絕萬乘之和、非計也、願相國孰慮之、

【講義】秦の昭王は黃歇の說を聞き善しと曰つて同意を表せり、是に於て白起の出征を止め韓魏に斷りを言ひ使者を楚に遣して賄を贈り、同盟國の約束を結べり、黃歇は條約を締結して楚に歸りし處、楚王は

やらざる內に、魏は出でて留、方與、銍、湖陵、碭、蕭、相を攻むべく、故の宋の地は盡く魏の手に入らん、齊は南面して楚を攻め、泗上は必ず拔取らるべし、此れは何れも平原にして四方に交通の路開け肥沃の土地なるに、齊魏をして獨り攻取りて利を得しむる次第なれば、大王が楚を破り給ふことは中國に於て韓魏を肥して齊を強くするの結果を來さん、さなきだに韓魏の強さとは秦を相手とするに足り、又齊は南の方は泗水を以て境となし、東の方は海を負ひ、北の方は黃河に倚りて背面に何等の患ふべきものなし、天下の國、齊魏より強きものあらず、齊と魏とは土地を手に入れ利益を包含しながら表向き秦の下役人に事ふれども、縱令一年の後自ら帝と爲ることは出來ずとするも、大王が帝と爲ることを禁ずるに至りては其力餘りあり、夫れ大王の版圖は廣く、人口は多く、武力は強く、大に爲すに足るの國柄にてありながら、一たび事を擧げて楚に怨恨を種ゑ附け、韓魏をして齊を重んじ帝號を歸せしむるは、是れ大王の失策なり、

臣爲レ王慮、莫レ若レ善レ楚、秦楚合而爲レ一、以臨レ韓、韓必歛レ手、王施以二東山之險一、帶以二曲河之利一、韓必爲二關內之侯一、若レ是而王以二十萬一戍レ鄭、梁氏寒心、許鄢陵嬰城、而上蔡召陵不二往來一也、如レ此而魏亦關內侯矣、王壹善レ楚而關二內兩萬乘之主一、注二地於齊一、齊右壤可レ拱レ手而取一也、王之地、一經二兩海一、要二約天下一、是燕趙無二齊楚一、齊楚無二燕趙一也、然後危二動燕趙一、直搖二齊楚一、此四國者不レ待レ痛而服矣、

【講義】　臣は大王の爲に慮るに、楚と親善し給ふが上策なり、秦楚が一國となりて韓に臨むときは、韓も

地之實也、

【講義】其上大王は楚を攻め給ふに兵を何處より出さんとし給ふや、大王は仇敵の韓魏に通路を假り、其國内を通過せしめんとし給ふならば、出陣の日に於て已に其軍隊が復び戻り來らざる憂へあり、何故となれば、右は兵を以て仇敵の韓魏の資本となすわけなればなり、大王若し又路を仇敵なる韓魏に借りて、秦の軍隊をして其領土を通り拔けしめざるときは、必ず隨水の右岸の土地を攻むるならんが、隨水の右岸の土地は何れも廣き川や大なる流れ、又は山林あり溪谷ありて不生產の場所なれば、大王に於て之を所有せられたりとて土地を得たりとは申し難し、さすれば大王は楚を破壞するの名はあれども、土地を得るの實益あらじ、

且王攻楚之日、四國必悉起兵以應王、秦楚之兵構而不離、魏氏將出而攻留、方與、銍、湖陵、碭、蕭、相、故宋必盡、齊人南面攻楚、泗上必舉、此皆平原四達膏腴之地、而使獨攻、王破楚、以肥韓魏於中國、而勁齊、韓魏之彊、足以校於秦、齊南以泗水爲境、東負海、北倚河、而無後患、天下之國、莫彊於齊魏、齊魏得地葆利、而詳事下吏、一年之後爲帝未能、其於禁王之爲帝有餘矣、夫以王壤土之博、人徒之衆、兵革之彊、壹舉事而樹怨於楚、遲令韓魏歸帝重於齊、是王失計也、

【講義】且つ大王が楚を攻め給ふ折は、四个國悉く兵を起して大王に應ずべし、秦楚の兵交戰して解け

る時は、楚は秦の味方にして隣國の韓魏は敵なり、又詩經に申してあり、趯々とあちらこちらを往來する身輕の兎は獵犬の爲に獲らると、又他人に何か思ふことあれば吾れは能く之を測り知ると、今王は古き關係もなく、途中より親しくなられし韓魏が大王に忠實なることを信じ給ふは、丁度呉が越を信じたると同樣なり、臣の承はりたるに、敵は見逃すべからず、時は失ふべからずと、臣は韓魏が口上を慇懃にし、秦の害なる楚を除くと稱して、其實は大國の秦を欺かんと欲することを恐る、何となれば大王は韓魏に對して何代と云ふ間の恩義なく、反つて世々の怨みあり、夫れ韓魏の人民の父子兄弟が踵を接して秦の兵に殺されたることは殆んど十代にも相成り、本國は殘はれ宗廟は破壞せられ、腹を割き腸を絶切り、頸を挫き頤を打折り、首と胴と二つになり、尸骸を草叢や澤邊に晒し、頭は地に倒れ伏す者國疆に望み合ひ、或は父子老若脰を繫がれ手を縛られ、大勢捕虜となる者道路に連續すと云ふ有樣にして、鬼神は親身を離れて孤獨を悲み、祭を受くること出來ず、人民は殆んど生きがひなく、親族は離散し流浪し、他人の僕妾となる者國内に充滿す、彼等何如にして秦を怨まざるべき、故に韓魏の亡びずして存在することは、秦に取り社稷の憂へなり、然るに今大王は之に資力を供給して共に楚を攻めんとせらるゝは何んと過ちにあらずや、

【字解】　大武、大軍を謂ふ、趯々、往來の貌、毚兎、はしこき兎なり、忖度、推測するなり、大國、秦を指す、脰、首なり、

且王攻楚、將惡出兵、王將借路於仇讎之韓魏乎、兵出之日而王憂其不返也、是王以兵資於仇讎之韓魏也、王若不借路於仇讎之韓魏、必攻隨水右壤、隨水右壤、此皆廣川大水、山林谿谷、不食之地也、王雖有之、不爲得地、是王有毀楚之名、而無得

ちたるが、艾陵に於て齊に勝ちたる後には反つて三渚の浦に於て越王の爲に虜にせられぬ、智氏は韓魏二氏を信じたる所より之を從へて趙を伐ち、其晉陽城を攻め、最早打勝つには幾日もあらぬに、韓魏は智氏に背いて鑿臺の下に智伯瑤を殺せり、今大王は楚を妬んで其亡びざることを齒痒く思ひ給へども、楚を亡ぼせば韓魏が強くなることを忘れ給ふなり、臣は大王の爲に慮り見る所、決して御爲に相成らぬなり、

詩曰、大武遠宅而不涉、從此觀之、楚國援也、鄰國敵也、詩云、趯趯毚兎、遇犬獲之、他人有心、余忖度之、今王中道而信韓魏之善王也、此正吳之信越也、臣聞之、敵不可假、時不可失、臣恐韓魏卑辭除患、而實欲欺大國也、何則王無重世之德於韓魏、而有累世之怨焉、夫韓魏父子兄弟接踵而死於秦者、將十世矣、本國殘、社稷壞、宗廟毀、刳腹絕腸、折頸摺頤、首身分離、暴骸骨於草澤、頭顱僵仆、相望於境、父子老弱係脰束手、爲群虜者、相及於路、鬼神孤傷、無所血食、人民不聊生、族類離散流亡、爲僕妾者、盈滿海內矣、故韓魏之不亡、秦社稷之憂也、今王資之、與攻楚不亦過乎、

【講義】詩經に申してあり、大軍は遠方を放任し置き、山川を跋涉して之を伐たずと、此の詩に由つて觀

而不知干隧之敗、此二國者、非無大功也、沒利於前、而易患於後也、

【講義】大王に於て若し能く是れまで立てられたる功勳を維持し、是れまで振はれたる威力を守り、此の上他國を攻め取らんとする心を追ひ退け、仁義の土地を肥して從來の愚なからしめ給はゞ、三王も四とするに足らず、五伯も六とするに足らず、卽ち三王五伯と肩を竝べ給ふに十分なり、然るに大王若し人口の多數なることを恃み、武力の强きことを盾に取り、魏を破壞したる勢ひに乘り、力づくにて天下列國の君を盡く臣下となさんことを思ひ立ち給はゞ、臣は大王に後患あらんことを恐る、詩經に何事も始めの有らざる者はなけれども、能く終りある者は少しと申してあり、易には、狐が水を涉り其尾を濡すと申してあり、此れは何れも始めは易くして終りは難きことを申したるものなり、何故に其道理が分るやと申せば、昔し智氏は趙を伐つの利益を見て楡次の禍を知らず、吳は齊を伐つの便利を見て干隧の敗北を知らざりしが、此の二个國は大功なかりしには非ず、前に利の中に溺れて其れがため後の患を招きたるなり、前の利と後の禍と交換したるものなり、

【字解】狐涉水、狐が水を涉らんとして誤つて尾を濡すが如く、容易に事を始めて中途困難に遇ひ、仕遂げられぬ意味に譬ふ、楡次之禍、楡次は智伯の殺されし處、干隧之敗、干隧は吳王の敗死せし處、

吳之信越也、從而伐齊、既勝齊人於艾陵、還爲越王禽三渚之浦、智氏之信韓魏也、從而伐趙、攻晉陽城、勝有日矣、韓魏叛之、殺智伯瑤於鑿臺之下、今王妬楚之不毀也、而忘毀楚之彊韓魏也、臣爲王慮而不取也、

【講義】吳は越を信じたる所より之を從へて齊を伐

る者にて、冬夏は即ちそれである、寒極まれば暑となり、暑極まれば寒となる、又積むこと極まれば必ず危し、碁石を累ぬるがそれである、累ねに累ぬれば崩れ落つることを免れず、今秦は此譬へと同然にて、大國の版圖は天下に徧く、其東西の兩極端を有つが如き、此れ人類ありてより未だ嘗て類例なき所なり、先帝、文王、莊王と、此三代心に留めて忘るることなく、次第に齊の土地に接近して合從諸國の腰部に當る處を絕ち切り給ひたるが、今大王には盛橋をして韓に入込みて其宰相となり政權を執らしめ給ひたる處、盛橋は目的通り其地を以て秦の版圖に歸せしめたり、是れ大王は兵士を用ひず威力をも展べずして坐ながら百里の地を得給ひたるにて、大王は眞に御伎倆ある方と申上ぐべし、大王は又兵を擧げて魏を攻め、大梁の門口を塞ぎ、魏の領土なる河內を擧げ、燕、酸、棗、虛、桃を拔いて邢に入るに、魏の兵は雲の粉を散らすが如くに逃げ惑ひて敢て救はず、大王の武功も仲々多きこと也、大王は兵を止め衆を息め、二年過ぎて復び之を用ひ、蒲、衍、首、垣を併せ、仁と平丘との二縣に攻掛り、之が爲に黃、濟陽は籠城せざるを得ず、斯くして魏は服從せり、大王は又濮磨の北を割き、齊秦の腰に當る所を水攻めにして、楚趙の脊骨に當る所を絕ち切られ、天下は五たびも六たびも集合したれども敢て救はざりき、大王の威力も此に至つて極まれり、

【字解】　致至、致は至極なり、單、殫に同じ、ツクル、

王若能持功守威、絀攻取之心、而肥仁義之地、使無後患、三王不足四、五伯不足六也、王若負人徒之衆、仗兵革之彊、乘毀魏之威、而欲以力臣天下之主、臣恐其有後患也、詩曰、靡不有初、鮮克有終、易曰、狐涉水、濡其尾、此言始之易、終之難也、何以知其然也、昔智氏見伐趙之利、而不知楡次之禍、吳見伐齊之便、

猶兩虎相與鬭、兩虎相與鬭、而駑犬受其弊、不如善楚、臣請言其說、臣聞物至則反、冬夏是也、致至則危、累碁是也、今大國之地、徧天下、有其二垂、此從生民已來、萬乘之地、未嘗有也、先帝文王莊王之身、三世不忘、接地於齊、以絕從親之要、今王使盛橋守事於韓、盛橋以其地入秦、是王不用甲、不信威、而得百里之地、王可謂能矣、王又舉甲而攻魏、杜大梁之門、舉河內、拔燕酸棗虛桃、入邢、魏之兵、雲翔而不敢捄、王之功亦多矣、王休甲息衆、二年而後復之、又幷蒲衍首垣、以臨仁平丘、黃濟陽嬰城、而魏氏服、王又割濮磨之北、注齊秦之要、絕楚趙之脊、天下五合六聚而不敢救、王之威亦單矣、

【講義】黃歇は此の如き憂慮を抱きしかば秦の昭王に說いて云ひけるは、凡そ今天下列國の中に於て秦楚より强き者なし、今承はれば大王には楚を伐たんとせらるゝ由、此れは丁度二疋の虎が互ひに爭ふ樣なる者にて、二疋の虎が爭ふ時は、弱き犬より其疲勞に乘ぜらる、秦楚は二疋の虎の如し、此の二國戰ひを交ふる時は韓魏に利を占めらるべし、故に大王に於ては楚と親密になし給ふが上策なり、臣は其理由を申上げん、臣承はるに、物は極端に至れば又初めに戾

起攻韓魏、敗之於華陽、禽魏將芒卯、韓魏服而事秦、秦昭王方令白起與韓魏共伐楚、未行、而楚使黃歇適至於秦、聞秦之計、當是之時、秦已前使白起攻楚、取巫黔中之郡、拔鄢郢、東至竟陵、楚頃襄王東徙、治於陳縣、黃歇見楚懷王之爲秦所誘而入朝、遂見欺、留死於秦、頃襄王其子也、秦輕之、恐壹擧兵而滅楚、

【講義】春申君は楚の國の人なり、名を歇と曰ひ姓は黃氏と稱す、他國へ游學し聞見博く、楚の頃襄王に事へぬ、頃襄王は歇の辯才あることを認め、他國と折衝するに適任なりとて、彼れを使者として秦に遣はせり、此の時分秦楚の關係は何如なりしかと云ふに、嚮きに秦の昭王は將軍白起に韓魏を攻めさせ、秦の兵は韓魏の兵を華陽の地に破り、魏の將軍芒卯を捕虜とせり、韓魏は此の敗戰の結果屈服して秦に事へたり、秦は此の二國の味方となりしを幸ひとして白起に命じ、二國の連合軍と共に楚を伐たしめたるが、未だ出發の運びに至らず、然る處丁度其際に於て黃歇は頃襄王の使命を奉じて秦に到着し、秦が楚を征伐せんとするの計畫を聞込めり、此の時より以前に秦は白起をして楚を攻めさせ、巫、黔中の郡を取り、鄢郢を拔き、東の方竟陵に至りしかば、楚の頃襄王次第に壓迫せられ、都を東方に遷して陳縣に政府を建てぬ、黃歇は曾て楚の懷王が秦に誘はれて入朝し、其詐略にかゝりて秦の抑留を受け、本國に歸ること出來ずして秦に死したることを見たり、而して頃襄王は懷王の子なれば秦は之を輕んずるが故に、一たび兵を擧げて楚を亡ぼさんことを恐れぬ、

歇乃上書說秦昭王曰、天下莫彊於秦楚、今聞大王欲伐楚、此

卽天子位、每過大梁常祠公子、高祖十二年從擊黥布還、爲公子置守家五家、世世歲以四時奉祠公子、

【講義】 漢の高祖は其始め微賤の折數、公子無忌の賢明にてありしことを聞き及ばれたるが、天子の位に卽くに至り、大梁の地を通過する度每に公子無忌の祭を行はれ、高祖の十二年に黥布を討伐せし歸途に於て、公子無忌の爲に墓守五軒を置き、代代年ごとに四季を以て公子無忌の祭事を執行せしめたり、

太史公曰、吾過大梁之墟、求問其所謂夷門、夷門者城之東門也、天下諸公子亦有喜士者矣、然信陵君之接巖穴隱者、不恥下交、有以也、名冠諸侯不虛耳、高祖每過之、而令民奉祠不絕也、

【講義】 太史公曰く、吾れ大梁の城跡を通過して謂はゆる夷門を探索して尋ね見たる處、是れは城の東門なり、天下の諸公子の中にも客を好みし者あり、されど信陵君が巖穴に住める隱者に接し、身分の卑しき者に交ることを恥ぢざりしは他の公子の及ばざる所なるが、右は自ら仔細あることにて好奇心にはあらず、其名の諸侯中第一に在りしは虛しからず、さればこそ高祖は大梁を過ぐる每に民をして永遠に奉祠せしめたるなれ、

春申君列傳第十八

春申君者楚人也、名歇、姓黃氏、游學博聞、事楚頃襄王、頃襄王以歇爲辯、使於秦、秦昭王使白

て外國に滯在すること十年に及び、今や魏の將となり、列國同盟軍の將校は皆其手に附き、列國は魏の公子あるを聞けども魏王あるを聞かず、公子も亦己れの勢力を自認する所より、此の時を機會に南面の位を定めて魏國の王とならんと欲し、列國も公子の威を畏れて、共に之を魏王の位に卽けんと致し居ると云ふことなりと、秦は此の如き讒言を行はしむると同時に屢〻間者を以て公子無忌に喜びを陳べしめ、公子は未だ魏王の位に卽き給はざるかと希望の意を洩らしめなどして、魏王の嫉妬心と恐怖心とを挑發するに力めぬ、

魏王日聞其毀、不能不信、後果使人代公子將、公子自知再以毀廢、乃謝病不朝、與賓客爲長夜飮、飮醇酒、多近婦女、日夜爲樂飮者四歲、竟病酒而卒、其歲、魏安釐王亦薨、秦聞公子死、使蒙驁攻魏、拔二十城、初置東郡、其後秦稍蠶食魏、十八歲而虜魏王、屠大梁、

【講義】魏王は日々同じやうなる讒言を聞くが故に自然信ぜざるを得ず、後果して公子無忌の將軍職を罷め、別人をして之に代らせぬ、公子無忌は再び讒言の爲に退けられたることを知りしかば、何事も諦め、此れより病氣を申立てゝ參內せず、食客と長夜の飮とて晝も夜も打續きて酒宴を催し、美酒を飮むと共に多く婦女子を側に侍らせ、日夜に娛樂を極めて飮み續くること四年に亙り、竟に酒毒の爲に病を得て卒去せり、其歲魏の安釐王も亦薨ず、秦は公子無忌の卒去を聞き、蒙驁をして魏を攻めしめ二十城を拔き、始めて其地に東郡を設けたり、其後秦は次第次第に魏の土地を蠶食し、十八年にして魏王を虜にして大梁を屠れり、

高祖始微少時、數聞公子賢、及

將兵救魏、公子率五國之兵、破秦軍於河外、走蒙驁、遂乘勝逐秦軍、至函谷關、抑秦兵、秦兵不敢出、當是時、公子威振天下、諸侯之客進兵法、公子皆名之、故世俗稱魏公子兵法、秦王患之、乃行金萬斤於魏、求晉鄙客、令毀公子於魏王、曰、公子亡在外十年矣、今爲魏將、諸侯將皆屬、諸侯徒聞魏公子、不聞魏王、公子亦欲因此時定南面而王、諸侯畏公子之威、方欲共立之、秦數使反間僞賀、公子得立爲魏王未也、

【講義】 魏の安釐王の三十年に公子無忌は使を列國に發して、此の度自分が魏の大將となりしことを洩れなく通知に及びし處、列國は公子無忌が魏の大將となりしことを聞き、助くるかひありと思ひ各、將軍を派遣し、兵を率ゐて魏を救はしめたり、公子無忌は五个國の連合軍を引率して秦の兵を河外に破り、敵の將軍蒙驁を追ひ走らせ、遂に勝戰の勢ひに乘じ秦の軍を追擊して函谷關に至り、秦の兵を壓迫しければ、秦の兵は敢て關を出でざりき、此の時に當り公子無忌の威勢は天下に振ひ、列國の賓客等各、自分の編みたる兵法の書を公子無忌に贈り、公子無忌は一一之に名を附けたるが、世俗は之を魏の公子の兵法と呼べり、秦王は公子無忌が魏に用ひられて列國に勢力あることを苦痛に思ひければ、何とかして公子無忌を退けんものをと、萬斤の金を魏に散らして運動費となし、前に公子無忌の爲に殺されたる將軍晉鄙の食客を探し出し、彼等をして公子無忌の事を魏王に讒言せしめたるが、其口上は、公子は魏より逃亡し

夷先王之宗廟、公子當何面目立天下乎、語未及卒、公子立變色、告車趣駕、歸救魏、魏王見公子相與泣、而以上將軍印授公子、公子遂將、

【講義】公子無忌は趙に滯留すること十个年になりたれども、尚本國に歸らず、秦は公子無忌が趙に在る由を聞き、是れまでは公子を憚りて魏に手を出さゞりしも、公子居らざれば最早憚る所なしと、日夜となく兵を出し東に向つて魏を伐ちしかば、魏王は苦慮に堪へず、秦を防ぐには公子無忌を呼戻す外途なしと、使を趙に遣し、公子無忌に何卒歸國致しくるゝやうにと申入れしめたるに、公子無忌は魏王が尙昔し晉鄙の軍を奪ひしことを怒り居り、呼戻したる上罪科に處する爲にあらずやと心に危みたれば、固より歸るべき念もなく、又數、魏王の使に面會するは面倒なりしかば、門下の者に訓令を下し、若し魏王より差遣したる使者の爲に取次ぐ者あらば殺すべしと申聞かせたり、時に魏の賓客は何れも魏に背き趙に往き公子の門下に屬したれども、誰れとて公子無忌に歸國を勸むる者なかりき、然る處彼の博徒や味噌屋にて公子無忌と仲の宜かりし毛公、薛公の兩人は、公子の處に來り面會して云ふやう、公子が此の趙の國に於て尊重せられ、其名譽の列國に聞ゆるわけは、只本國なる魏と云ふ背景あるが爲なり、今秦が其魏を攻め、魏は危急に迫りつゝあるに公子は少しも同情し給はず、若し秦が大梁の都を打破りて先王の宗廟を破壞することとならば、公子は何の面目ありて天下に立たんとし給ふや、此の場合是非歸國せらるゝが至當なりとて諫めし處、其語の未だ終らぬ内に、公子無忌は忽ち顏色を變へ、卽刻車馬の準備を命じ、歸國に及びて魏の危急を救ふ、魏王は公子と面會し、共に感慨に堪へずして落涙せり、斯くて上將軍の印を以て公子に授け、公子は遂に魏の將となれり、

魏安釐王三十年、公子使使遍告諸侯、諸侯聞公子將、各遣將

【講義】平原君は公子無忌が毛公、薛公と交り居ることを聞き、其夫人に向ひて話すやう、從前吾れは夫人の弟、公子無忌は天下に竝びなき賢公子なりと聞き居たるが、今聞く所に據れば妄りに博徒や味噌屋などに交際する由、公子は無分別の人にてありきと、夫人は其弟なる公子無忌に夫の云々非難せし言葉を告げけるに、公子無忌は姉に暇乞ひをなして立去らんとして曰く、吾れ初め平原君の賢者なることを聞けり、故に魏王に申譯なき非常手段を取つてまでも趙を救ひて平原君の志を遂ぐるやうになせり、然るに今見る所にては平原君の游びは見え張り勿體振りたる仕方のみ、只表面立派なる人物と交際するにて賢士を求むるにはあらず、拙者は大梁に居りし時より常に此の兩人の賢者なることを聞き傳へ居たるを以て、趙に來りし以來も只逢はれまじきかと其れのみ心配せし程なり、拙者の方より先方を主として交際するも尚此の方を厭ひはせぬかと懸念に堪へず、然るに平原君は彼等と交ることを以て羞となす、此の如き人物なる以上、從游するに足らずとて、旅仕度を調へ立去らんとす、夫人は弟の話せし語と立去らんとする由とをば委細夫に語りしに、平原君は冠を脱ぎて己れの不明を謝し、固く公子を引留めぬ、平原君の門下の者は此の話を聞き、半分は平原君の許を去つて公子無忌に歸せしが、それのみならず、天下の士も亦公子無忌にたよりて食客となり、公子無忌は平原君の客を傾くる程の勢ひなりき、

公子留趙十年不歸、秦聞公子在趙、日夜出兵東伐魏、魏王患之、使使往請公子、公子恐其怒之、乃誡門下、有敢爲魏王使通者死、賓客皆背魏之趙、莫敢勸公子歸、毛公薛公兩人、往見公子曰、公子所以重於趙、名聞諸侯者、徒以有魏也、今秦攻魏、魏急而公子不恤、使秦破大梁、而

公子留趙、公子聞趙有處士、毛公藏於博徒、薛公藏於賣漿家、公子欲見兩人、兩人自匿、不肯見公子、公子聞所在、乃間歩往、從此兩人游、甚歡、

【講義】公子無忌は趙に留まり居りしが、趙に二人の處士ありて、其一人の毛公は博徒の中に身を藏し、其他の一人薛公は味噌屋に身を藏し居ると聞き、此の二人に逢はんと欲せしも、二人は那方這方に影を匿して公子無忌に逢ふことを避く、公子無忌は或る時彼等の所在を探り知りければ、供をも連れず忍びて尋ね往き、二人を相手にして游び、甚だ面白く交際せり、

平原君聞之、謂其夫人曰、始吾聞夫人弟公子天下無雙、今吾聞之、乃妄從博徒賣漿者游、公子妄人耳、夫人以告公子、公子乃謝夫人去、曰、始吾聞平原君賢、故負魏王而救趙、以稱平原君、平原君之游、徒豪擧耳、不求士也、無忌自在大梁時、常聞此兩人賢、至趙恐不得見、以無忌從之游、尚恐其不我欲也、今平原君乃以爲羞、其不足從游、乃裝爲去、夫人具以語平原君、平原君乃免冠謝、固留公子、平原君門下聞之、半去平原君歸公子、天下士復往歸公子、公子傾平原君客、

【講義】趙の孝成王は公子無忌が國王の命令を僞り晉鄙の兵を奪つて趙を保全せし恩義を忝く思ひしかば、平原君と相談して五个城を以て公子無忌を封じ、其所領に充つることを取極めたり、公子無忌は之を聞き心中に驕慢の念を生じ、自ら趙を救ひたる功勞を鼻に掛くる態度あり、客分の一人公子無忌に說いて云ふ、凡そ物事に忘れては濟まぬものあり、忘れねばならぬものあり、公子が他人より受けたる恩義は、公子に於て忘れては濟まぬ事なり、公子が他人に掛けたる恩義は、公子に於て忘却ありたし、且つ魏王の命を僞り晉鄙の軍を奪つて趙を救はれたる事は、趙にこそ功あれ、魏に對しては忠臣とは申されず、然るに公子が自ら驕りて功に誇らるゝことは、憚りながら公子の御不利益と存ずと、

於是公子立自責、似若無所容者、趙王埽除自迎、執主人之禮、引公子就西階、公子側行辭讓、從東階上、自言辠過、以負於魏、無功於趙、趙王侍酒至暮、口不忍獻五城、以公子退讓也、公子竟留趙、趙王以鄗爲公子湯沐邑、魏亦復以信陵奉公子、

【講義】公子は客の諫言を聞いて心得違ひを悟りしかば、立ちどころに自分にて自分の罪を責め、殆んど身の置き所なき樣子あり、趙王は公子無忌を宮中に招待せんとて、隈なく掃除を行ひ、自ら出迎へて主人の禮を執り、公子を案內して客の登るべき西側の階段へ誘ひし處、公子無忌は身を側め辭讓して主人の登るべき東側の階段より登り、自ら己れの罪過を言ひ、本國の魏には背き、さればとて趙に對してさまでの功なき由を語りければ、趙王は酒宴の相手をなして夕方になるまでも、餘りに公子無忌が謙遜の態度を執りしため五个城を贈ることを言ひ出しかねたり、公子無忌は竟に趙に留まりしが、趙王は鄗の土地を以て公子の湯あみの代とし、魏も亦信陵の土地を公子に充てがひぬ、

に此の軍隊に在る者は、子のみ留まりて父は歸るべし、兄と弟と倶に此の軍隊に在る者は、弟のみ留まりて兄は歸るべし、獨身にて兄弟なく父母を扶養する義務ある者は、歸つて兩親を養ふべしと、斯くて選り拔きの兵八萬人を得たり、此の兵を率ゐて秦の軍を進撃せし處、秦の軍も其鋭鋒に當りかね、邯鄲の圍みを解いて退却せり、公子無忌は邯鄲を救ひ趙の國運を取り止めたれば、趙の喜びは言ふまでもなく、趙王及び平原君は自身態々國界まで出張して公子無忌を迎へ、平原君は箙を脊に負ひ先導に立ち、趙王は再拜して曰く、古へより賢人多しと雖も、未だ公子の如き者あらずと、深く其俠勇を賞賛して努力を謝しぬ、此の時に方り平原君は敢て自ら人竝みの地位に居らずして公子無忌の顔を立てたり、さて公子無忌が侯生と別れを告げて軍に至りし後、侯生は約束の通り北方を向き自ら首を刎ねて死せり、又魏王は公子無忌が兵の割符を盜み出し、己れの命と僞りて晉鄙を殺せるを怒りしが、公子無忌も亦自分の取りたる非常手段は罪を本國に得べきことを知るが故に、已に秦の兵を追ひ拂ひ趙を安全ならしめたる後、一將軍に其軍を引率して魏に歸らしめ、自身は本國より伴ひ來りし食客と共に趙に留まれり、

【字解】　韊、矢を盛る器、

趙孝成王德公子之矯奪晉鄙兵而存趙、乃與平原君計、以五城封公子、公子聞之、意驕矜而有自功之色、客有說公子曰、物有不可忘、或有不可不忘、夫人有德於公子、公子不可忘也、公子有德於人、願公子忘之也、且矯魏王令、奪晉鄙兵以救趙、於趙則有功矣、於魏則未為忠臣也、公子乃自驕而功之、竊為公子不取也、

ることとなりぬ、公子無忌は侯生の家に立寄りて禮を述べたる處、侯生曰く、臣は御供を申上ぐべき筈なれども年老いたれば出來申さず、せめてもの事に、公子の行く先の日取りを數へ、丁度晉鄙の軍に到着せらるゝ日に、公子の居らるゝ北の方角を向き、自ら首を刎ねて公子を送り申さんと、公子無忌は遂に出立に及び、晉鄙の陣取れる鄴の地に至り、魏王の命令なりと僞り、割符を示して晉鄙に代り、彼れの率ゐる軍隊の統率たらんとす、然るに晉鄙は割符を合せて見しが之を疑ひ、手を振擧げ公子無忌の樣子を窺ひながら云ふ樣、今吾れ十萬の大軍を擁して疆上に屯し、國家の重き委託を負へり、輕々しく進退すべきに非ず、今公子には唯一輛の車に乘つて來られながら、之に代らんとせらるゝは何故なる次第なるか、受取り難き咄なりとて拒絶する樣子なりしかば、朱亥は斯かる時の爲とて豫ねて袖の下に重さ四十斤の鐵椎を隱し居たるが、それを取出して晉鄙を打殺せり、

公子遂將晉鄙軍、勒兵、下令軍中曰、父子俱在軍中、父歸、兄弟俱在軍中、兄歸、獨子無兄弟、歸養、得選兵八萬人、進兵擊秦軍、秦軍解去、遂救邯鄲存趙、趙王及平原君自迎公子於界、平原君負韊矢、爲公子先引、趙王再拜曰、自古賢人未有及公子者也、當此之時、平原君不敢自比於人、公子與侯生決至軍、侯生果北鄉自剄、魏王怒公子之盜其兵符、矯殺晉鄙、公子亦自知也、已却秦存趙、使將將其軍歸魏、而公子獨與客留趙、

【講義】　公子無忌は遂に晉鄙に代りて其軍を領し、直ちに兵を纏め軍中に令を下して曰く、父と子と俱

の用心をなすに若くはなし、それには臣の友なる朱亥を伴ひ給ふが宜し、此人は力士なれば、若し晉鄙が公子の言に從つて兵士を引渡さば大に結構なれども、萬一聽かざる場合には朱亥をして之を擊ち殺さしむべしと、公子無忌は侯生の話を聞いて泣きければ侯生の云ふやう、公子には死を畏れ給ふか、何故に泣かるゝぞと、公子無忌曰く、晉鄙は元氣よき老將軍なり、吾れ往いて兵符を示したりとて恐らくは聽かざらん、聽かざるときは彼れを殺さゞるを得ざる故、之が爲に泣くのみ、何しに死を畏れようやと、

【字解】 嚄唶、大聲疾呼すること、勇猛の氣を謂ふ、

於是公子請朱亥、朱亥笑曰、臣乃市井鼓刀屠者、而公子親數存之、所以不報謝者、以爲小禮無所用、今公子有急、此乃臣效命之秋也、遂與公子俱、公子過謝侯生、侯生曰、臣宜從、老不能、請數公子行日、以至晉鄙軍之日、北鄉自剄以送公子、公子遂行、至鄴矯魏王令代晉鄙、晉鄙合符、疑之、擧手視公子曰、今吾擁十萬之衆、屯於境上、國之重任、今單車來代之、何如哉、欲無聽、朱亥袖四十斤鐵椎、椎殺晉鄙、

【講義】 斯くて公子無忌は侯生の注意に因り朱亥に同行を求めたる處、朱亥は笑つて云ふ、臣は市町に於て刀を響かせて家畜を屠る賤しき身分なるに、公子は御自身屢〻安否を尋ね下されたり、然るに何の御禮をも申上げざりし所以は、瑣細なる禮儀など何の役に立たずと思ふ故なり、然るに今公子に差迫りたる危難あり、是れ臣が公子の爲に生命を差出して御恩返しを致すべき時節なりと、遂に公子無忌と同行す

渡せしかば、如姫は公子の恩を有難く思ひ、公子の爲には命も惜まぬ心底なるが、未だそれを實現すべき逕路なきゆゑ今日に至れり、されば公子が一たび口を聞いて如姫に御賴みあらば、如姫は承諾致すに相違なし、彼れさへ承諾せば其働きに因つて虎の模樣ある兵符手に入るべく、其兵符を以て將軍晉鄙の軍を奪ひ、公子が之を引率して北方に向ひ、趙の危急を救ふと共に秦の兵を打退けんには、此れ五霸の征伐に比すべき偉業なりと、

【字解】　資之三年、資は畜なり、タクハフ、

公子從其計、請如姫、如姫果盜晉鄙兵符與公子、公子行、侯生曰、將在外、主令有所不受、以便國家、公子卽合符、而晉鄙不授公子兵、而復請之、事必危矣、臣客屠者朱亥可與俱、此人力士、晉鄙聽、大善、不聽、可使擊之、於是公子泣、侯生曰、公子畏死耶、何泣也、公子曰、晉鄙嚄唶宿將、往恐不聽、必當殺之、是以泣耳、豈畏死哉、

【講義】　公子無忌は侯生の敎へたる計に從ひ、如姫に賴みたる處、如姫は侯生の豫言せし通り、果して晉鄙に渡したる兵符の片割を盜み出して公子無忌に渡したりしかば、公子無忌は之を持參して出立に及ぶ、其砌侯生は注意を與へて云ふ、將軍が出征中に在るときは君主の命令なりとも受けざることあり、以て國家に有利なる行動をなすの法則なれば、公子が先方に參られ、晉鄙の持てる符の片割と合はせて此の通り善く合ふことゆゑ、國王の命令に相違なければ汝の率ゐる軍隊を引渡すべしと申されたりとて、彼れは公子に兵士を引渡さず、更に國王に使者を差出して命令を乞ふが如きことありては危險なれば、萬一

るべき、若し斯かる折智慧を搾つて公子の役に立てぬ程ならば、何とて平生客などを養ふ必要あるべき、然れども公子は臣を手厚く待遇し給ふは、只今の如き場合に力と恃み給はんが爲なり、然るに公子が出立せらるゝに拙者が御爲になるべき意見を吐いて御送り申上げざりしと故、公子は無論腑に落ち給はざるべければ、拙者は公子が之を殘念に思召して立戻り給ふべきことを存じ居れりと、

公子再拜因問、侯生乃屏人閒語曰、嬴聞晉鄙之兵符、常在王臥內、而如姬最幸、出入王臥內、力能竊之、嬴聞如姬父爲人所殺、如姬資之三年、自王以下、欲求報其父仇、莫能得、如姬爲公子泣、公子使客斬其仇頭、敬進如姬、如姬之欲爲公子死無所辭、顧未有路耳、公子誠一開口、請如姬、如姬必許諾、則得虎符、奪晉鄙軍、北救趙而西卻秦、此五霸之伐也、

【講義】公子は侯生に深き考へあるならんと思ひしかば再拜の禮を施し、此の際取るべき方針を尋ねければ、侯生は其座に居りし人々を退坐せしめ、聲を潛めて言ひ出づるやう、拙者承はるに、將軍晉鄙の持てる兵符とて、國王と半分づつ持居る割符は、其一片王の寢室に在る由、王の妃の中に於て如姬が最も寵愛を受け、自由に王の寢室に出入することゆゑ、彼れは其割符を盜むことの出來得る資格あり、拙者又承はるに、此の如姬の父は人に殺され、如姬は不倶戴天の恨みを霽さんと復讎の志を畜ふること已に三年に及ぶ、王を首として百官其他彼れの爲に其仇を報い遣さんと思へども捜し當てざりしかば、如姬は之がため泣いて公子に御依賴せしことあり、公子は食客に申付けて其仇の首を斬らせ、大切に持行きて如姬に

告げ知らせ、暇乞ひして立去らんとす、但し公子無忌の心中にては、侯生が此の際何か名案を出して自分の立場を救ひくるゝならんと豫期したるなり、然る處侯生は何事をも云はず、唯公子には努力せられよ、老人は迚も御供出來ざれば此れにて御別れ致さんと述べぬ、

公子行數里、心不快、曰、吾所以待侯生者備矣、天下莫不聞、今吾且死、而侯生曾無一言半辭送我、我豈有所失哉、復引車還問侯生、侯生笑曰、臣固知公子之還也、曰、公子喜士、名聞天下、今有難、無他端、而欲赴秦軍、譬若以肉投餒虎、何功之有哉、尚安事客、然公子遇臣厚、公子往而臣不送、以是知公子恨之復返也、

【講義】公子無忌は侯生の冷淡なるを見て本意なき事と思ひしが、是非なく別れを告げて立去り、五六里も行きけるとき、心中不快に堪へずして云ふやう、吾れ今まで侯生に對する待遇振りは何等の手落ちなく十分行屆きたることは、天下の人誰れも聞き知らぬ者なき程なり、然るに今や吾れ大敵の中に飛込みて死せんとする場合なるに、侯生は一言半句も考へを述べて我れを送らざるは合點のゆかざる次第なり、吾れ何か手落ちありしも測られずと、復び車を引返して侯生を尋ねたる處、侯生笑つて云ふ、臣は固より公子が立戻られて拙者の意見を御尋ねあるべきことを承知致し居れりと、更に語を改めて語り出づるには、公子が士を好み給ひ多く食客を養ひ給ふ評判は天下に聞えたり、今危難に際し他の工夫もなく、只管秦の軍に馳せ向はんとし給ふは、譬へて見るに肉を餓ゑたる虎に投ずるやうなるものにて、何の效果かこれあ

を見物しぬ、平原君より援兵催促の使者は、一番二番と間合ひもなく引續きて派遣せられ、後の使者より前の使者の冠蓋が目に見え、又其後の使者より其前の使者の冠蓋が目に見ゆと云ふ次第にて、使者の旨意は平原君より公子無忌を責むるなり、其口上に曰ふ、拙者が公子と關係を結び緣者となりし所以は、公子は義に強くして人の困難を救はるゝが爲なり、然るに今吾が國の都邯鄲は秦より手厳しく攻撃せられ、朝夕の中に降らんとす、それに魏より援兵來らず、斯くては公子が人の困苦を救はるゝ點は何處に之れありや、且つ縱令ひ公子は拙者を見棄て給ひ、拙者が秦に降るは是非なしとすとも、公子御自身の姊君を不便とは思ひ給はずやと、

公子患之、數請魏王、及賓客辯士說王萬端、魏王畏秦、終不聽、公子自度終不能得之於王、計不獨生而令趙亡、乃請賓客、約車騎百餘乘、欲以客往赴侯軍、與趙俱死、行過夷門、見侯生、具告所以欲死秦軍狀、辭決而行、侯生曰、公子勉之矣、老臣不能從、

【講義】公子は平原君の請求を受けて頗る苦痛を感じ、幾度となく魏王に援兵の派遣を懇願せしのみならず、客分の者又は辯舌家を賴み、有らゆる手段を以て魏王に說かしめたれども、魏王は秦を畏れしかば、到底公子無忌の願ひを聽き屆けざりき、公子無忌は結局王の許しを得る能はざることを觀念せしが、考ふれば、見す見す趙が滅亡するに自分のみ生きながらふる事は出來難ければ、此の身を犧牲にするより外はなしと、食客に同行を賴み車馬百餘乘を調へ、食客と共に秦の軍勢に差向ひ趙と存亡を俱にせんと欲し出立の折、夷門に立寄り侯生に逢ひ、是れより秦の軍勢に馳せ向ひて討死せんと思ふ次第を委細殘らず

姊爲趙惠文王弟平原君夫人、數遺魏王及公子書、請救於魏、魏王使將軍晉鄙將十萬衆救趙、秦王使使者告魏王曰、吾攻趙旦暮且下、而諸侯敢救者、已拔趙、必移兵先擊之、魏王恐、使人止晉鄙、留軍壁鄴、名爲救趙、實持兩端以觀望、平原君使者冠蓋相屬於魏、讓魏公子曰、勝所以自附爲婚姻者、以公子之高義、爲能急人之困、今邯鄲旦暮降秦、而魏救不至、安在公子能急人之困也、且公子縱輕勝棄之降秦、獨不憐公子姊邪、

【講義】 魏の安釐王即位の二十年に於て秦の昭王は已に趙の長平の軍を打破り、又兵を進めて邯鄲を圍む、公子無忌の姊は趙の惠文王の弟平原君の夫人なりしゆゑ、平原君は其緣故を以て幾度となく魏王及び公子無忌に手紙を送り、魏より援兵を派遣せんことを請ふ、魏王は將軍晉鄙に十萬人の兵を授け、趙を救はしむることとし、已に出陣に及びし處、秦王は魏より趙に加勢せば邯鄲を陷るゝこと困難なるを以て、是非とも之を妨げんとて使者を魏に遣し、魏王を脅して言はしめけるは、吾れ今趙を攻め、邯鄲の都は朝夕の間に降參すべき場合に迫れり、然るに列國の內無法にも趙を救ひ、折角此れ迄の運びに至りたる吾が成功の邪魔をなす者あらば、邯鄲を拔きたる後、屹度其軍隊を振向けて一番先きに之を擊つべしと、魏王は此の脅迫に恐怖し、早速使者を遣し、晉鄙に命じて進軍を差止めければ、晉鄙は軍を留め、鄴と云ふ處に壘壁を築きて此に立籠り、趙を救ふと稱しながら實の處秦趙の孰れにも味方をせず、どちらが勝つか

屠者朱亥、此子賢者、世莫能知、故隱屠閒耳、公子往數請之、朱亥故不復謝、公子怪之、

【講義】是の時に當り公子の邸の方にては魏の將軍、宰相等の文武大官、又は魏王の一門、其他來賓は堂に溢るゝばかりにて、公子無忌の歸るを待ちて酒宴を開かんとす、又出先きの方に於ては市中の者共は公子無忌が侯生の御者となつて手綱を執り居るを見て奇異の感を催し、公子無忌の供をせる騎士は何れも內々に侯生の不謹愼不作法を罵りつゝあり、侯生は公子無忌の顏色が最後までも變らず慇懃の樣子を見究めければ、立談の相手に暇を告げて、車に乘りて公子無忌の家に至る、公子無忌は侯生を案內して上席に就かしめ、偏ねく來賓に紹介せしかば、來賓は一同喫驚せり、酒宴酣なる頃、公子無忌は起ち上りて侯生の前に至りて祝儀を述べぬ、侯生は其折公子無忌に告ぐるやう、今日拙者が公子の爲に致したることは、那れだけにても十分なりき、拙者は夷門の門番を勤むる賤しき身分の者なるに、公子は御自身に車馬を枉げて拙者を衆人廣坐の中に迎へ給ふ以上は、寄道などすべきに非ず、それをば拙者の賴みとあれば公子には態々寄道をなし給ひぬ、然るに拙者は又公子の名譽を揚げんと欲し、態々公子の車や馬を市中に立たせ、友人を訪問して公子の御樣子を市中の者に觀しめたる處、流石に公子の態度は愈、慇懃なりしかば、市人は拙者をば貴人に無禮なる小人となし、公子をば溫厚家にて能く人に卑下せらると思ふに相違なし、是れは拙者が公子に盡したる寸志なりと、扨酒宴も終りけるが、侯生は遂に公子無忌の上客となれり、侯生は公子無忌に申すやう、先刻臣の訪問したる人物は屠者の朱亥と申す者なるが、此の男は賢者なれども世に之を知る者なき故、屠業者の間に隱るるのみと、公子無忌は屢、出向きて門下に來らんことを請ひたるに、彼れは故意に答禮を爲さゞりしかば、公子無忌も賢者に似合はざることゝて之を怪めり、

魏安釐王二十年、秦昭王已破趙長平軍、又進兵圍邯鄲、公子

公子無忌の迎へを受くるや、ぼろぼろしたる衣服冠等を裝ひ、直ちに車に上り、公子無忌の明け置きたる左の席即ち上座に位地を占めて辭退もせず、態と傲慢の態度になして公子無忌の樣子を觀る存念なりしが、公子無忌は彼れの爲に手綱を手に持ち、愈々丁寧に扱へり、侯生は又公子に云ふやう、臣の一人の相手、市中の屠業者の中に罷在り、何卒此行列を迂路させて彼れを訪問致したしと、公子無忌は彼れの賴みを聞き、車を引廻して屠市の中に入る、侯生は其處にて車を下り、其友の朱亥に逢ひ、外目にて公子無忌の方を見つゝ、故意に朱亥と長時間立話しに及び、陰かに公子無忌の顏色を窺ふ處、公子無忌は彼れの人もなげなる仕方を厭ふ風もなく愈々柔和に見えたり、

【字解】虛左、左を貴ぶが故に上席のこととなる、俾倪、正視せざるなり、

當是時、魏將相宗室賓客滿堂、待公子舉酒、市人皆觀公子執轡、從騎皆竊罵侯生、侯生視公子色終不變、乃謝客就車至家、公子引侯生坐上坐、徧贊賓客、賓客皆驚、酒酣、公子起爲壽侯生前、侯生因謂公子曰、今日嬴之爲公子亦足矣、嬴乃夷門抱關者也、而公子親枉車騎、自迎嬴於衆人廣坐之中、不宜有所過、今公子故過之、然嬴欲就公子之名、故久立公子車騎市中、過客以觀公子、公子愈恭、市人皆以嬴爲小人、而以公子爲長者能下士也、於是罷酒、侯生遂爲上客、侯生謂公子曰、臣所過

【字解】博、双六、烽、寇あるとき合圖の爲に擧ぐる所の烟を云ふ、

魏有隱士曰侯嬴、年七十、家貧爲大梁夷門監者、公子聞之、往請欲厚遺之、不肯受、曰、臣修身絜行數十年、終不以監門困故、而受公子財、

【講義】魏に侯嬴と云ふ隱士あり、年は七十歳なりしが、家貧しく生計に差支ふる所より、此の老年に及びて大梁の夷門の門衛を勤め居れり、公子無忌は之を聞き、自ら往いて吾が門下に招き、手厚き贈物をなさんとせしに、彼れ之を受納することを拒みて申しけるは、臣は是れまで我が身を修め行ひを潔くして不義の事をなさず、不義の財を受けざりしこと數十年に及べり、今日門番となりて困窮するが爲に公子より貨財を受け申さずと、

【字解】夷門、魏の都城の東門なり、

公子於是乃置酒大會賓客、坐定、公子從車騎虛左、自迎夷門侯生、侯生攝弊衣冠、直上載公子上坐不讓、欲以觀公子、公子執轡愈恭、侯生又謂公子曰、臣有客在市屠中、願枉車騎過之、公子引車入市、侯生下見其客朱亥、俾倪、故久立與其客語、微察公子、公子顏色愈和、

【講義】侯嬴は公子無忌の贈物を受けざりしかば、公子無忌は別の方法を以て彼れを優待せんと欲し、玆に酒宴を設けて大に賓客を集め、銘々の座席も已に定まりし頃、公子無忌は馬車に乘り、後に車や騎士を從へ、己れの乘れる車中の左の席を明け置き、斯くて自身夷門の門番なる侯生を迎へに往けり、侯生は

驕ることなかりしかば、之がため方數千里の土地より士たる者我れ先きにと來つて信陵君に歸し、食客三千人を集めたり、

當是時、諸侯以公子賢多客、不敢加兵謀魏十餘年、公子與魏王博、而北境傳擧烽、言趙寇至、且入界、魏王釋博、欲召大臣謀、公子止王曰、趙王田獵耳、非爲寇也、復博如故、王恐、心不在博、居頃、復從北方來傳言曰、趙王獵耳、非爲寇也、魏王大驚曰、公子何以知之、公子曰、臣之客、有能探得趙王陰事者、趙王所爲、客輒以報臣、臣以此知之、是後魏王畏公子之賢能、不敢任公子以國政、

【講義】此の時に當り列國は公子無忌の賢にして門下に客多き爲、憚りて魏に戰爭を仕掛くる者なく、平和を保ちしと十餘年に及べり、或る時公子無忌は魏王と双六をなしつゝありしに、北方の國疆にて烽火を次第に打擧げて、敵が攻寄せ來りて界に入らんとすとの報知あり、魏王は大に驚き双六を中止し、大臣を召して防禦の策を商議せんとせし處、公子無忌は之を止めて曰く、此れは趙王が狩をなすにて、敵對するに非ずと、以前の如く双六をなしゝも、魏王は恐怖のため心は双六に留まらず、暫くして復び北方より報告を傳へて云ふ、趙王が狩をなすにて敵對するに非ずと、魏王は大に驚いて曰く、公子は何如にして之を知りたると、公子曰く、臣の食客の中に能く趙王の密事を探り得る者之れあり、趙王の爲す所は其者が逐一臣に報告致すが故に臣は之を知るなりと、此の後魏王は公子無忌の賢能を畏れ、油斷ならずと思ひ、從來の如くに國政を委任せざりき、

ますと云ふことあり、平原君は馮亭の邪說に慾心を起し、趙の兵四十餘萬を坑埋の災に遇はしめ、邯鄲は殆んど亡びんとせり、虞卿は善く事情を測量し趙の爲に畫策せし所は何と云ふ手際なるや、魏齊の不幸を傍觀するに忍びずして大梁に困難せしが如き、普通人すらも尙其不可なるを知るに、況んや賢人をや、然れども虞卿が困窮憂愁せざりしならば、著述を以て己が身を後世に見はすこと出來ざりしならん、

信陵君列傳第十七

魏公子無忌者、魏昭王少子、而魏安釐王異母弟也、昭王薨、安釐王卽位、封公子爲信陵君、是時范雎亡魏相秦、以怨魏齊故、秦兵圍大梁、破魏華陽下軍、走芒卯、魏王及公子患之、公子爲人仁而下士、士無賢不肖皆謙而禮交之、不敢以其富貴驕士、士以此方數千里爭往歸之、致食客三千人、

【講義】魏の公子無忌は魏の昭王の季の子にて、魏の安釐王の腹違ひの弟に當れり、昭王薨去に及び、安釐王後を繼いで魏王の位に卽き、公子無忌を信陵と云ふ土地に取り立て領主となして信陵君と呼べり、此の時范雎は魏より逃亡して秦の宰相となりけるが、魏の宰相魏齊が無根の說を信じて己れを殺さんとせしことを怨み、其怨みを晴らさんとて秦の兵を發して大梁を圍み、華陽の下に陣取りたる魏の軍を打破りて將軍の芒卯を走らせぬ、魏王と公子無忌とは之を患へたり、公子の人となりは仁にして、士に對して己れを卑下し、士の賢者、不肖者に拘はらず謙遜して禮義ある交をなし、己れの富貴を盾として人に

虞卿既以魏齊之故、不重萬戸侯卿相之印、與魏齊閒行、卒去趙、困於梁、魏齊已死、不得意、乃著書、上採春秋、下觀近世、曰節義、稱號、揣摩、政謀、凡八篇、以刺譏國家得失、世傳之曰虞氏春秋、

【講義】虞卿は魏齊との關係より萬戸侯の爵封も大臣宰相の印をも重んぜず、之を打棄てゝ魏齊と共に忍びの旅行をなし、卒に趙を去つて梁に困難しけるが、魏齊死せし後も虞卿は志を得ず、乃ち著述を以て業とせしが、其書は古き處にては春秋を採り、新らしきは近世を觀察し、節義、稱號、揣摩、政謀等の八篇あり、國家の得失を非難せり、世に此の書を傳へて虞氏春秋と曰ふ、

【字解】魏齊、魏齊は魏の宰相たりしが、秦の宰相范雎と仇敵の間柄にて、秦より魏齊を求むること急なりしかば、魏齊は亡げて身を虞卿に託す、虞卿は諸共に梁に逃れ、友義を立てたり、

太史公曰、平原君翩翩濁世之佳公子也、然未睹大體、鄙語曰、利令智昏、平原君貪馮亭邪說、使趙陷長平兵四十餘萬衆、邯鄲幾亡、虞卿料事揣情、爲趙畫策、何其工也、及不忍魏齊、卒困於大梁、庸夫且知其不可、況賢人乎、然虞卿非窮愁、亦不能著書以自見於後世云、

【講義】太史公云ふ、平原君は翩々として定まりなき濁世に於ける佳公子なり、然れども事體の大處は目に入らざりし人なり、鄙しき諺に、利は人の智を昏

與大國從事也、有利、則大國受其福、有敗、則小國受其禍、今魏曰小國請其禍、而王以大國辭其福、臣故曰、王過、魏亦過、竊曰爲從便、王曰、善、乃合魏爲從、

【講義】趙王は虞卿の說に感じて尤もなりと曰ひ、虞卿を東なる齊國に派遣し、齊王に謁見して共に秦を伐つべき相談を爲さしめたり、然るに虞卿が未だ齊より返らぬ內、虞卿の豫言せしが如く、秦の媾和使は已に趙へ乘込めり、樓緩之を聞き、己れの策が破れたる結果禍の及ばんを恐れ、趙をば逃げ去れり、趙は虞卿の爲に空しく六城を失ふを免れしかば、彼れの功を賞して一城に封じたり、此れより多少の時日を經たる頃、魏より趙に對して合從したしとて申込を爲しゝかば、趙の孝成王は其諾否に就き虞卿を召して相談に及ばんとす、虞卿は朝廷に出仕の途中平原君の家に立寄りし處、平原君は虞卿に向ひ、貴下には何卒趙王に魏と合從の得策なることを說き聽かされたしと、虞卿は其れより平原君の家を立出で宮中に伺候し趙王に謁見す、王の曰く、此の度魏より合從の申込を受けたるが、諾すべきか拒むべきか、卿の考へは何如んと問はれたるに、虞卿は對へて云ふ、魏は過てりと、王の曰く、此の方も何如あらんと思ふゆゑ未だ承諾を與へずと、虞卿曰く、王過てりと、趙王は虞卿の眞意を解しかね尋ぬるやう、魏が合從を申込めりと曰へば、卿は魏過てりと言ひ、此の方未だ承諾を與へずと曰へば、又此の方過てりと言ふ、然らば合從は究竟不都合なるかと、虞卿答へて云ふ、臣の承はるに、小國が大國と共に何事をか着手するときは、利益あれば大國が其福を受け、失敗あれば小國が其禍を受くと、今魏は小國にて大國の趙と合從を望むは是れ禍を乞ふと云ふものなり、又大王が彼れと合從せらるゝは福を受け給ふ次第なるに、趙の大國を以て小國の合從を許し給はざるは福を辭すると申すものなり、故に臣は王も過てり魏も亦過てりと申したるなり、竊かに考ふるに、合從は利便なりと、趙王は善しと曰ひ、終に魏と合從に及べり、

土地を與へ給ふなと申したるものは、單に與ふる勿れと云ふ意味にはあらず、秦の方にては六城を大王に要求するに、大王の方にては此の六城を以て齊に賂ひ給へと申すなり、齊は秦の深き讎なれば、此の六城を手に入るゝ時は、さなきだに秦を攻めんとする處へ、大王に對する義理も加はることゆゑ、趙と力を併せ、兵を西に進めて秦を伐つべし、斯かる條件を以て齊王に談判するときは、齊王は此方の辭の畢るをも待たずして大王の申込みを承知するならん、則ち王は六城を齊に與へて土地を失ふと雖も、其代りに秦より土地を取ることとなれば、差引きに於て損失なく、而して齊趙二國の秦に對する深き讎は、是れにて返報することを得べし、又天下に向ひて趙の能く爲すあることを示すにも當る、故に大王が此の方針を以て天下に宣言するときは、臣は、齊趙の連合軍が未だ敵の境を窺はざる内に、秦は手厚き賂ひを趙に送り、反つて秦の方よりして大王に媾和を申込むべきことを豫想せり、秦の方より媾和の申込みをなす場合、韓魏が之を聞かば何れも大王を重んずるに相違なく、大王を重んぜば、先方より貴重なる寶物を出して和親を求むるならん、是れ大王には一擧して三國の和親を結び、初め秦に賄ひを取らるべきが、其反對に他國より賄ひを得ることとなるなりと、

趙王曰、善、則使虞卿東見齊王、與之謀秦、虞卿未返、秦使者已在趙矣、樓緩聞之、亡去、趙於是封虞卿以一城、居頃之、而魏請爲從、趙孝成王召虞卿謀、過平原君、平原君曰、願卿之論從也、虞卿入見王、王曰、魏請爲從、對曰、魏過、王曰、寡人固未之許、對曰、王過、王曰、魏請從、卿曰、魏過、寡人未之許、又曰、寡人過、然則從終不可乎、對曰、臣聞小國之

乘じて之を分割せんとす、されば趙は今にも亡ぶべし、秦を圖るどころにてはなし、故に虞卿は其一を得て其二を得ずと申す次第なり、何卒大王には此道理に因りて土地割譲の政略を決定し給へ、此上復考慮をなし給ふなと、

【字解】 [illegible]、愼むなり、

虞卿聞之、往見王曰、危哉樓子之所以爲秦者、是愈疑天下、而何慰秦之心哉、獨不言其示天下弱乎、且臣言勿予者、非固勿予而已也、秦索六城於王、而王以六城賂齊、齊秦之深讎也、得王之六城、幷力西擊秦、齊之聽王、不待辭之畢也、則是王失之於齊、而取償於秦也、而齊趙之深讎、可以報矣、而示天下有能爲也、王以此發聲、兵未窺於境、臣見秦之重賂至趙而反媾於王也、從秦爲媾、韓魏聞之、必盡重王、重王、必出重寶以先於王、則是王一擧而結三國之親、而與秦易道也、

【講義】 虞卿は樓緩の趙王に說きたる議論を傳へ聞き、趙王が之が爲に迷はされんことを恐れ、早速出仕して王に謁見を請ひ、言上するやう、さても危き次第なるかな、樓緩の說は全く秦の爲にするものにて、彼れの言ふが如くに土地を秦に割譲するときは、天下は愈、趙に對して疑念を深くするのみ、又斯くしたりとて秦は趙を見縊りこそすれ、何如にして其心を慰むることあらんや、彼れの言ふ所は趙の弱きことを天下に示すわけに之れあるまじくや、且つ臣が秦に

虞卿聞之、入見之曰、此飾說也、王眘勿予、樓緩聞之、往見王、王又以虞卿之言告樓緩、樓緩對曰、不然、虞卿得其一、不得其二、夫構趙構難而天下皆說何也、曰、吾且因彊而乘弱矣、今趙兵困於秦、天下之賀戰勝者、則必盡在於秦矣、故不如亟割地爲和、以疑天下而慰秦之心、不然、天下將因秦之彊怒、乘趙之弊、瓜分之、趙且亡、何秦之圖乎、故曰、虞卿得其一、不得其二、願王以此決之、勿復計也、

【講義】 虞卿は樓緩が趙王に土地の割讓を勸めたりと聞き、宮中に入り王に謁見して曰く、樓緩の議論は道理を飾りたる說にて、若し之を聽くときは趙の禍なれば大王には愼んで之を取舍し、決して土地を秦に與へ給ふ勿れと、樓緩は又虞卿が己れの說を妨害せりと聞き、油斷ならずと思ひければ出頭して王に謁見せし處、王は虞卿が斯く斯く申したりとて其旨趣を樓緩に話され、彼れに意見を述べしめしかば、樓緩の曰く、虞卿は土地を與ふる勿れと申上ぐるも、道理上さにあらず、虞卿は其一を得て其二を得ず、目の先きの議論に之れあり、夫れ秦と趙と開戰に及びて、天下の諸侯が皆手を打つて悅ぶわけは何如なる次第なるか、彼等は心に思ふやう、秦趙孰れが勝つにせよ負くるにせよ、吾れは强き方に力を添へて弱き方に乘しかゝり、其間に自國の利を得んと、今趙の兵は秦の爲に攻められて困む最中なるが、列國より戰勝を賀する爲に派遣せる使節は皆秦に在るは必定なり、故に速かに土地を割いて和を結び、天下を疑はせて秦の心を慰むるが上策なり、若しさなき時は、天下の諸侯は將に秦が甚しく怒れるを利用し、趙の疲弊に

妻言之、是必不免爲妬妻、故其言一也、言者異、則人心變矣、今臣新從秦來、而言勿予、則非計也、言予之、恐王以臣爲爲秦也、故不敢對、使臣得爲大王計、不如予之、王曰、諾、

【講義】趙王は二人の說を聞いて孰れとも決定しかねて當惑の砌、樓緩と云ふ者秦より來りければ、趙王は彼れに相談して云ふやう、秦に土地を割き與ふるは何如のものにや、割き與ふると割き與へざると孰れか吉なると、樓緩は一應辭退して曰く、此の儀は臣に分りかぬるなりと、趙王曰く、然樣言はるれども試みに足下の一存を述べよと、樓緩答へて曰く、王に於ても彼の公甫文伯の母の事を御聞及び相成りしや、公甫文伯は魯に仕へ居りしが、病死せし折、彼れの妾二人は閨中に於て自殺を遂げぬ、公甫文伯の母之を聞いて哭せざりしかば、保姆怪みて問ひけるは、凡そ世の中に其子の死したるに哭せざる者あるべきや、然るに母公の哭し給はぬは甚だ人情に違へりと、其母の云ふ、孔子は賢人なりしが、不幸にして魯の國は之を用ひずして逐ひ出せり、此時公甫文伯は孔子に隨行せざりき、然るに今婦人が彼れを愛慕して自殺する者二人あり、此の如きは是れ賢德の長者に對しては薄情にして婦人に對しては多情なり、吾が子ながら其心根感心し難ければ哭せざるなりと、されば此の批判は、母より之を言ふときは賢母と言はるゝも、若し妻の口より出でたらんには、嫉妬深き妻たることを免れじ、故に其言ふ所の事は同一なるも、之を言ふ所の人が異なるときは聞き手の心理狀態は變ずるものなり、今臣は新たに秦より來りしに、秦に土地を與へ給ふなと云ふは得策に非ず、さればとて之を與へ給へと云ふときは、大王が臣を以て秦の爲に言ふ者と視做し給ふ恐れあり、故に敢て御答へ致さゞれども、若し臣をして大王の爲に計ることを得しむるならば、之を與ふるが上策なりと、趙王は承知せりと挨拶に及ぶ、

【字解】相室、傅姆の類、

る爲なれば、趙は必ず孤立すべしとの事なるが、彼れは又大王の秦に對する事へ方が韓魏に及ばざるが故なりと云ふ、是れ大王をして年々六城づつを割いて秦に事へしむるなり、斯くする時に於ては趙は居ながらにして城邑は皆無となるべし、來年秦が復土地の割讓を要求せば大王は之を與へ給ふか、若し與へざる時は、是ゝまでに割讓したる效果を棄てゝ秦の禍を挑發することとなり、若し又之を與ふるときは、終に與ふべき土地もなくなるべし、古語に强き者は善く攻め、弱き者は守る能はずと言へり、今手を束ねて秦の要求に服從するときは、秦の兵は戰爭の損害もなくして多く土地を手に入るゝわけにて、是れ秦を强くして趙を弱くするなり、强きが上に强くなれる秦を以て弱きが上に弱くなれる趙の城地を割取ると云ふ仕方にて、秦の計は仲々止まざらん、且つ大王の土地は元より限りあるゆゑ、盡き果つることあれども、秦の要求は已むことなし、盡き果つることある土地を以て已むことなき要求に應ずるときは、其勢ひ趙國は消滅すべしと、

趙王計未定、樓緩從秦來、趙王與樓緩計之曰、予秦地何如、毋予孰吉、緩辭讓曰、此非臣之所能知也、王曰、雖然試言公之私、樓緩對曰、王亦聞夫公甫文伯母乎、公甫文伯仕於魯、病死、女子爲自殺於房中者二人、其母聞之弗哭也、其相室曰、焉有子死而弗哭者乎、其母曰、孔子賢人也、逐於魯而是人不隨也、今死而婦人爲之自殺者二人、若是者必其於長者薄、而於婦人厚也、故從母言之、是爲賢母、從

く、王は國内の土地を割いて和睦せねば濟まざるべしとのことなれども、それならば今媾和致すとしても郝は秦が復び攻め來らぬことを保證しかぬる次第なれば、今六城を割きたりとて何の益かあるべき、來年復び攻め來りし時彼れの力にては取ること出來ぬ土地を我が方より割き與へて和睦を結ぶは、是れ自滅の手段なり、故に和睦をせぬが上策なり、秦が何如に善く攻むるとて六城を取ることは不可能にて、趙が防ぎ切れずと申しても六縣を失ふまでには至らず、其内秦が戰ひに倦みて退陣するときは、其兵必ず疲れなん、我れ六城を天下の諸侯に與へ、之と力を合せて疲れたる秦の軍を攻むるならば、是れ列國に與へたるため六城を失ひたれども、秦より其償になるべき土地を得らるゝこととなり、吾が國は尚利あり、何事をも爲さずして土地を割き、自ら弱くして秦を强くするには優ならん、

今郝曰、秦善攻韓魏而攻趙者、必以爲韓魏不救趙也、而王之軍必孤、有以王之事秦、不如韓魏也、是使王歲以六城事秦也、卽坐而城盡、來年秦復求割地、王將與之乎、弗與、是棄前功而挑秦禍也、與之、則無地而給之、語曰、彊者善攻、弱者不能守、今坐而聽秦、秦兵不弊而多得地、是彊秦而弱趙也、以益彊之秦而割愈弱之趙、其計故不止矣、且王之地有盡、而秦之求無已、以有盡之地、而給無已之求、其勢必無趙矣、

【講義】今郝の申すには、秦が韓魏と親しく交りながら趙のみを攻むるは韓魏をして趙を救はざらしむ

に秦の力が此の上進むこと出來ぬことが分れば、彈丸の如き小さき土地と雖も與ふるに及ばず、若し秦が來年復び王を攻めば、王は國內の土地を割いて秦に與へずして濟み申すべきかと、王曰く、然らば汝の說を聽いて土地を秦に割くべし、但し汝は來年秦が復と攻め來らぬことを受合ふかと、趙郝答へて曰く、是れは臣が御受合ひ申し難きことなり、其昔し韓趙魏の三晉は秦と交際して何れも親善なりき、然るに今秦は韓魏と親善をなしながら却つて大王を攻むるは、是れ大王の秦に對する事へ方が韓魏に及ばざるに相違なし、今臣は大王の爲に和親違背を理由とする秦の攻擊を止めさせ、關門を開き幣物を贈りて韓魏と同樣秦に交際することに致しても、來年に至り大王のみ秦より攻められ給ふこととなるは、是れ王の秦に事へ給ふ仕方が韓魏以下なる爲なれば、秦が復び趙を攻めぬやうにすることは御受合ひ申しかぬると、王は又趙郝の申したる言を虞卿に告げたり、

【字解】　解負親之攻、和親に負きしにより攻擊せらるゝことを解き、前の如く和すること、

虞卿對曰、郝言不媾來年秦復攻王、王得無割其內而媾乎、今媾郝又以不能必秦之不復攻也、今雖割六城何益、來年復攻、又割其力之所不能取而媾、此自盡之術也、不如無媾、秦雖善攻、不能取六縣、趙雖不能守、終不失六城、秦倦而歸兵必罷、我以六城收天下、以攻罷秦、是我失之於天下而取償於秦也、吾國尙利、孰與坐而割地、自弱以彊秦哉、

【講義】　虞卿は對へて曰く、郝の申すには、今土地を割いて媾和せざるときは來年秦は復び王を攻むべ

【講義】秦は已に邯鄲の圍みを解きし後、趙王は秦に入朝し、趙郝をして秦と條約を結ばしめ、六縣を割讓して和睦すべき訓令なりき、此の時虞卿は趙王に謂ひて曰く、秦が王を攻めて退陣したるは、倦みたるが爲に歸りたるか、それとも其力は尙進むこと出來得るも王を愛するが爲に攻めざるか、王は何如に思召さるゝやと、王曰く、秦が我れを攻むるに餘力を遺さゞる點より言ふときは倦んで歸りしなりと、虞卿曰く、秦は其力を以て取る能はざる所を攻め倦んで歸りしに、王は又其力の取る能はざる所を以て之を送るは、是れ態々秦を助けて自ら攻むると云ふものなり、來年秦が復王を攻めば、王は救ひ道なきに至らん、

【字解】送之、六縣を割いて贈ることを謂ふ、

王以虞卿之言告趙郝、趙郝曰、虞卿誠能盡秦力之所至乎、誠知秦力之所不能進、此彈丸之地弗予、令秦來年復攻王、王得無割其內而媾乎、王曰、請聽子割矣、子能必使來年秦之不復攻我乎、趙郝對曰、此非臣之所敢任也、他日三晉之交於秦相善也、今秦善韓魏而攻王、王之所以事秦、必不如韓魏也、今臣爲足下解負親之攻、開關通幣、齊交韓魏、至來年而王獨取攻於秦、此王之所以事秦、必在韓魏之後也、此非臣之所敢任也、王以告虞卿、

【講義】王は虞卿の述べたる意見を趙郝に告げて批判を求めし處、趙郝曰く、虞卿は誠に能く秦の力がどの位まで及ぶかと云ふことを十分に看拔けりや、誠

天下、楚魏以趙爲媾、必不救王、秦知天下不救王、則媾不可得成也、應侯果顯鄭朱以示天下賀戰勝者、終不肯媾、長平大敗、遂圍邯鄲、爲天下笑、

【講義】 趙王は虞卿の建言を聽かずして平陽君と和睦を結び、鄭朱を使者として秦に往かしめたる處、秦は之を受入れぬ、趙王は虞卿を召して曰く、此の方は平陽君の手引きにて秦と和睦を結ぶこととし、鄭朱を遣しゝに、秦は之を受入れたり、卿は何如に考ふるかと、虞卿對へて曰く、大王は和睦し給ふこと出來まじ、軍は必ず敗北すべし、天下の諸侯より戰勝を賀する使は皆秦に罷在り、鄭朱は貴人なるが故に彼れ秦に入らば、秦王は應侯と相談の上必ず彼れを手厚く取扱ひて天下に趙の媾和使なることを示すべし、楚魏は趙が秦と和睦を爲さんとするを見ば、必ず王を救はざるべく、又秦は天下が趙を救はざることを知らば、別に遠慮すべき處なければ、媾和成立することを得じと、案の如く應侯は鄭朱を鄭重にして列國より戰勝を賀する爲に來り居る使者に示し、終に和睦を承諾せず、斯くて長平の一戰に趙は大敗に及び、剩へ其都の邯鄲を圍まれ、天下中の物笑ひとなりぬ、

秦既解邯鄲圍、而趙王入朝、使趙郝約事於秦、割六縣而媾、虞卿謂趙王曰、秦之攻王也、倦而歸乎、王以其力尚能進、愛王而弗攻乎、王曰、秦之攻我也、不遺餘力矣、必以倦而歸也、虞卿曰、秦以其力攻其所不能取、倦而歸、王又以其力之所不能取以送之、是助秦自攻也、來年秦復攻王、王無救矣、

趙使入楚魏、秦必疑天下之合從、且必恐、如此則媾乃可爲也、

【講義】 虞卿は辯舌を以て游說を爲す所の人なり、嘗て草履をはき笠を戴きて趙の孝成王に說きたるに深く其の心に叶ひ、初對面の時には黃金百鎰と白き璧一對とを賜はり、二度目の謁見の時には趙の上卿を授けられぬ、故に虞卿と號す、虞は領地の名、卿は上卿の卿なり、秦と趙と長平に戰ひし折、趙は敗北に及びて一人の都尉を亡へり、趙王は樓昌と虞卿とを召して意見を問ひけるは、此の度の戰ひ吾が軍利あらずして都尉も亦戰死す、此の方甲を束ねて秦軍を追討たんと思ふが何如あるべきと、樓昌云ふ、そは無益なり、寧ろ重き使者を發して和睦をなすが增しなりと、虞卿曰く、樓昌が和睦を唱ふるは、和睦せざれば軍が必ず敗北すべしと思ふが故なり、然るに和睦を爲すと爲さゞるとは秦に在り、且つ大王の御觀察にては、秦は趙軍を打破る所存なるべきか、それとも然らざるかと、趙王曰く、秦は餘力を遺さず必ず趙軍を破らんと欲すと、虞卿曰く、大王には臣の計を御採用に相成り、貴國より使者を派遣し、立派なる寶物を土產として楚魏を味方に附くる策を取らるべし、楚魏は大王より差遣さるゝ立派なる寶物を得んと欲する所より、必ず吾が使者を受入れん、趙の使が楚魏に入るときは、秦は天下の諸侯が合從するものと疑ひ、且つは恐るゝに相違なし、斯くの如く秦の方に弱味出來るときは、始めて和睦を爲すべきなりと、

【字解】 躡蹻擔簦、躡蹻は前に出づ、簦は柄のある笠なり、

趙王不聽、與平陽君爲媾、發鄭朱入秦、秦內之、趙王召虞卿曰、寡人使平陽君爲媾於秦、秦已內鄭朱矣、卿以爲奚如、虞卿對曰、王不得媾、軍必破矣、天下賀戰勝者皆在秦矣、鄭朱貴人也、入秦、秦王與應侯必顯重以示

兩天秤に懸けたるにて、事成るときは證據物を握つて報酬を責め、事成らざるときは虚名を以て君に恩を着する考へなれば、君には飽くまでも聽き給ふなと、平原君は遂に虞卿の言を用ひざりき、

【字解】　右劵、證據物件、

平原君以趙孝成王十五年卒、子孫代、後竟與趙俱亡、平原君厚待公孫龍、公孫龍善爲堅白之辯、及鄒衍過趙、言至道、乃絀公孫龍、

【講義】　平原君は趙の孝成王の十五年を以て卒し、子孫代り立ちたるが、後竟に趙と倶に亡びぬ、平原君は手厚く公孫龍を待遇せしが、公孫龍は善く堅白同異の辯を爲したり、然るに鄒衍が趙に立寄り至極の道理を說くに及んで、公孫龍を退けたり、

○虞卿者、游說之士也、躡蹻擔簦、說趙孝成王、一見賜黃金百鎰、白璧一雙、再見爲趙上卿、故號爲虞卿、秦趙戰於長平、趙不勝、亡一都尉、趙王召樓昌與虞卿曰、軍戰不勝、尉復死、寡人使束甲而趨之、何如、樓昌曰、無益也、不如發重使爲媾、虞卿曰、昌言媾者、以爲不媾軍必破也、而制媾者在秦、且王之論秦也、欲破趙之軍乎、不邪、王曰、秦不遺餘力矣、必且欲破趙軍、虞卿曰、王聽臣、發使出重寶、以附楚魏、楚魏欲得王之重寶、必內吾使、

平原君請封、公孫龍聞之、夜駕見平原君曰、龍聞虞卿欲以信陵君之存邯鄲爲君請封、有之乎、平原君曰、然、龍曰、此甚不可、且王擧君而相趙者、非以君之智能爲趙國無有也、割東武城而封君者、非以君爲有功也、而以國人無勳、乃以君爲親戚故也、君受相印、不辭無能、割地不言無功者、亦自以爲親戚故也、今信陵君存邯鄲而請封、是親戚受城、而國人計功也、此甚不可、且虞卿操其兩權、事成、操右券以責、事不成、以虛名德君、君必勿聽也、平原君遂不聽虞卿、

【講義】虞卿は信陵君が邯鄲の危急を救ひ保存を得しめたる所より平原君のため趙王に領地の加增を請はんとせり、公孫龍之を聞き、夜中車に乘り平原君に面會して問ふやう、虞卿は信陵君が邯鄲を取り止めたるを以て、本と君との關係より此に至りたる故、右の爲に領地の加增を請はんとする由なるが、果して事實之れあるにやと、平原君は然樣なりと答へければ、公孫龍曰く、此れは甚だ宜しからず、且つ趙王が君を擧げて趙の宰相に任ぜられしは、君の智能を趙國無雙となすが爲に非ず、趙王が東武城を割いて君を封ぜられしも、君を有功と爲すが爲に非ず、國中に功勳者なきと君が趙王の親戚なるとを以てなり、君が宰相の印を受けて無能なるが爲に辭せず、土地を割き與へられて無功なるが爲に辭し給はざりしも、亦親戚なるが故なり、今信陵君が邯鄲を保全したる廉を以て領地を乞ふことは、是れ親戚が城を受けて國民が功を計る次第なれば宜しからず、且つ虞卿は

従之、得敢死之士三千人、李同遂與三千人赴秦軍、秦軍爲之却三十里、亦會楚魏救至、秦兵遂罷、邯鄲復存、李同戰死、封其父爲李侯、

【講義】此の時邯鄲の宿場の役人の子の李同と云ふ者、平原君に説いて云ふ、君には趙の滅亡を心配し給はざるかと、平原君曰く、趙亡ぶるときは拙者は敵の虜となるべし、いかで心配せざるべきと、李同曰く、目下邯鄲の民は四方を敵に取巻かれ、糧食も全く盡き果てたる所より、骨を炊ぎ又は我が子と人の子と交換して其肉を食ひ飢を凌ぐと云ふ有様にて、切迫の場合と申すべし、然るに君の奥向きに居る宮女等は何百と云ふ多數にて、妾や召使は綾羅の衣裳を着、美肉を餘す程なるに、人民は毛布すらも滿足ならず、糟糠だにも厭かず、民は困み武器は盡き、或は木を削りて其儘戈となし矢となすに至る、然るに君の器物は、鐘や磬の如き樂器類も元の通りなり、秦が若し趙を破らんには此等の物は分捕となるべく、君は何如にして所有し給ふことを得んや、又趙が無事ならんには無きを憂ふるに及ばず、されば君には今思切りて夫人以下を士卒の中に組み込み、一仕事を分つて働かしめ、貴家に在る所の品は、何物によらず一切士卒に振撒いて饗應せられよ、兵士は危難勞苦の際には恩に感ぜしめ易しと、是に於て平原君は之に從ひ、決死隊三千人を得たり、李同は遂に此の三千人と秦軍を突擊に及びし處、秦軍も其勢ひに當りかね、三十里ばかり退却せり、其れと同時に楚魏兩國の援兵到着せしかば、秦の兵は圍みを解いて去り、邯鄲城は元の如く保全せられたり、さて平原君に建言して大功を立てたる李同は戰死したるを以て、其父を封じて李侯とせり、

【字解】炊骨、兵糧を炊ぐに薪なければ人骨を燒くなり、易子而食、兵糧盡きて吾が子を食ふに忍びず、人の子と取り易へて食ふ、

虞卿欲以信陵君之存邯鄲爲

に因つて同じからず、天子は牛及び馬を用ひ、諸侯は犬及び豭を用ひ、大夫以下は雞を用ふ、今此にては只血の入用を言ひたるが故に總てを擧げたるなり、錄々、碌々に同じ、石のごろごろしたる貌、或は隨從の貌とす、九鼎大呂、九鼎は大禹が九牧の金を取つて鑄たる鼎、大呂は周廟の大鐘、共に國寶なれば天子の重んずる所なり、

平原君既返趙、楚使春申君將兵赴救趙、魏信陵君亦矯奪晉鄙軍往救趙、皆未至、秦急圍邯鄲、邯鄲急、且降、平原君甚患之、

【講義】平原君は已に趙に返りしが、楚よりは約束により春申君をして兵を率ゐて趙を救はしめ、魏の信陵君も亦君命を僞りて將軍晉鄙の率ゐたる軍隊を奪ひ、是れも趙を救はんとして發向せしが、何れも未だ到着せざる中に秦の兵は急に趙の都なる邯鄲を圍み、邯鄲は危急に迫り、今にも降らんとする形勢なりしかば、平原君は甚だ之を患へたり、

邯鄲傳舍吏子李同、說平原君曰、君不憂趙亡邪、平原君曰、趙亡、則勝爲虜、何爲不憂乎、李同曰、邯鄲之民、炊骨易子而食、可謂急矣、而君之後宮以百數、婢妾被綺縠、餘粱肉、而民褐衣不完、糟糠不厭、民困兵盡、或剡木爲矛矢、而君器物鍾磬自若、使秦破趙、君安得有此、使趙得全、君何患無有、今君誠能令夫人以下、編於士卒之間、分功而作、家之所有盡散以饗士、士方其危苦之時、易德耳、於是平原君

吾君、次者遂、遂定從於殿上、毛遂左手持盤血、而右手招十九人曰、公相與歃此血於堂下、公等錄錄所謂因人成事者也、平原君已定從而歸、歸至於趙曰、勝不敢復相士、勝相士、多者千人、寡者百數、自以爲不失天下之士、今乃於毛先生而失之也、毛先生一至楚、而使趙重於九鼎大呂、毛先生以三寸之舌、彊於百萬之師、勝不敢復相士、遂以爲上客、

【講義】毛遂は楚王に向ひ、同盟の相談は已に決定致せしやと、楚王は決定せりと答へしかば、毛遂は楚王の近侍に雞か狗か馬の血を取り來れよと申附け軈て持ち來りしかば、毛遂は銅製の盤を捧げ、跪きて之を楚王に差出して曰く、大王は先づ此の血を啜りて同盟の誓ひを立て給ふべし、次は吾が主人、次は拙者と、遂に順次に血を啜り殿上に於て條約を結びしが、右終りて毛遂は左の手に血を盛りたる盤を捧げ、右の手に同行の十九人を招きて曰く、公等は堂下に於て此の血を啜るべし、公等はごろごろと石の如く何の役にも立たず、他人の力に因りて事を成す者なりと、平原君は已に合從の條約を結びて楚より歸り趙に到着しけるが、人に話して云ふ、拙者は二度と士の目利をせざるべし、拙者此れまで人の目利せしこと多くして千人、少くして百人、自ら天下の士を見損ぜしことあらずと思へり、然るに今毛先生を見損じて普通の人となしゝ處、此の度毛先生は一たび楚に至り我が趙をして九鼎大呂よりも重からしめたり、毛先生三寸の舌を以て百萬の軍隊よりも强味を增しぬ、拙者は不明を自覺したれば最早士の目利をなすまじと、遂に毛遂を上客とせり、

【字解】雞狗馬之血、盟ひに用ふる所の家畜は貴賤

る平原君の門下十九人の者は毛遂に言ふやう、先生堂に上つて會議を纏め給へと、毛遂は今こそ我が本領を示す時なれと、刀の柄に手を掛け、階段を段飛びに踏み上り、平原君に申すやう、合從の利害は諾とか否とか兩言にして決すべき問題なり、然るに朝日の昇る頃より會議を始め正午迄も決せざるは何如なる、次第ぞやと、楚王は平原君に問ふやう、此見知らぬ人物は何者ぞと、平原君云ふ、此の男は拙者の舍人に之れありと、楚王叱して云ふ、何ぞ早く堂を下らざる、吾れは汝の主人と談判するに、汝何者なれば推參にも妨害をなすやと、毛遂は刀の柄に手を掛けながら楚王の前へ進み近づきて曰く、大王が遂を叱し給ふは楚國の兵數の多きを恃み遂を輕んじ給ふなるべきも、今臣と王との距離は十歩に過ぎず、楚國の軍隊何如に多數なりとも、一刹那の間には間に合はざれば恃み給ふこと出來ず、大王の生命は遂の手中に在り、吾が主人前に在るに、其れを無視して叱し給ふは何ぞや、且つ遂が聞けるに、昔し殷の湯王は七十里の地を以て天下の王となり、周の文王は百里の地を以て諸侯を臣とせり、是れは何にとて其士卒の衆多なる爲ならんや、誠に能く其勢ひに據つて其威を振ひたればこそ、此の如き成功を得たるなれ、今楚の地は方五千里、戟を持つ兵數は一百萬あり、此れは霸王の業を成す所の資本なり、楚の强國なることは天下も之に當る能はず、然る處白起は小豎子に過ぎざるに、數萬の兵を率ゐ軍隊を發して楚と戰ひ、一たび戰つて鄢、郢を擧げ、再び戰つて夷陵を焚き、三たび戰つて大王の先代を辱めたり、此れは楚に取りて百代までの怨みにして、趙は楚の爲に羞づる所なるに、大王には秦を惡み給はざるは何事ぞや、今度趙より合從を申込みたるも、右は楚の爲にして趙の爲に非ず、吾が主人前に在るに、拙者を叱するは何たる無禮ぞやと、楚王曰く、然樣なり、誠に先生の言の如し、謹んで社稷を捧げて先生の說に從ひ申さんと、

毛遂曰、從定乎、楚王曰、定矣、毛遂謂楚王之左右曰、取雞狗馬之血來、毛遂奉銅盤而跪進之楚王曰、王當歃血而定從、次者

毛遂曰、先生上、毛遂按劍歷階而上、謂平原君曰、從之利害、兩言而決耳、今日出而言從、日中不決、何也、楚王謂平原君曰、客何爲者也、平原君曰、是勝之舍人也、楚王叱曰、胡不下、吾乃與而君言、汝何爲者也、毛遂按劍而前曰、王之所以叱遂者、以楚國之衆也、今十步之內、王不得恃楚國之衆也、王之命懸於遂手、吾君在前、叱者何也、且遂聞湯以七十里之地王天下、文王以百里之壤而臣諸侯、豈其士卒衆多哉、誠能據其勢而奮其威、今楚地方五千里、持戟百萬、此霸王之資也、以楚之彊、天下弗能當、白起小豎子耳、率數萬之衆、興師以與楚戰、一戰而擧鄢郢、再戰而燒夷陵、三戰而辱王之先人、此百世之怨、而趙之所羞、而王弗知惡焉、合從者爲楚、非爲趙也、吾君在前、叱者何也、楚王曰、唯唯、誠若先生之言、謹奉社稷而以從、

【講義】平原君は已に楚に到着し、楚王と合從の問題を談判し、其利害を議するに、朝日の昇る頃より會議を開き、正午に至りても未だ決せず、堂下に控へた

右未有所稱誦、勝未有所聞、是先生無所有也、先生不能、先生留、毛遂曰、臣乃今日請處囊中耳、使遂蚤得處囊中、乃穎脱而出、非特其末見而已、平原君竟與毛遂偕、十九人相與目笑之、而未發也、毛遂比至楚、與十九人論議、十九人皆服、

【講義】平原君は是れまで毛遂の人物を認識せしことなかりければ、無論其願ひを聞居くべくもあらず、毛遂に問うて曰く、先生は拙者の門下に居らるゝこと今日まで幾年に相成るかと、毛遂、今日まで三年に相成ると答ふ、平原君曰く、夫れ賢智の人が世の中に居る工合は、之を譬へて見るに丁度錐が嚢の中に在ると同様にて、錐が嚢の中に在れば其切先が立どころに見はるゝが如く、賢士の才能も發見せざれば已まぬものなり、然るに先生は拙者の門下に處ること已に三个年にも相成るに、吾が近侍の者共、先生に就いて何等稱譽せし所なく、拙者に於ても未だ何等先生の優れたることを聞かず、是れ先生には何等の技能をも持たれざるなり、先生には此の度の役目は勤めかぬれば、同行を斷念して留守せらるべしと、毛遂曰く、拙者は今日こそ嚢中に置いて御試を願ひたし、若し拙者が早く嚢中に居ることを得たらんには柄諸共に脱出せしなるべく、切先が飛び出す位に止まらずと、平原君も彼れが斯程に言ふなれば何か役に立つこともあらんかと、半信半疑にて竟に毛遂を同伴することゝなしぬ、十九人の者は毛遂を輕蔑し、互ひに目と目と見合せて彼れを笑ひたれども、流石に表向き彼れの隨行を彼れ此れ非難せざりき、其れより毛遂は楚に至るまでに此の十九人と議論を戰はせし處、彼等は毛遂に言ひ伏せられて屈服せり、

【字解】穎、恐らくは穎の誤ならん、穎は錐の柄、

平原君與楚合從、言其利害、日出而言之、日中不決、十九人謂

足矣、得十九人、餘無可取者、無以滿二十人、門下有毛遂者、前自贊於平原君曰、遂聞君將合從於楚、約與食客門下二十人偕、不外索、今少一人、願君卽以遂備員而行矣、

【講義】此の時代に於て、齊には孟嘗君あり、魏には信陵君あり、楚には春申君あり、互ひに競爭して多く賓客を招き之を待遇せり、秦が趙の邯鄲を圍みし折、趙より平原君を楚に遣はし、之と排秦同盟を結び、其援兵を請ひ受けんとす、趙王は平原君が食客竝びに門下の勇力あり文武兼備の士二十人と同行すべき手筈を定めたるが、平原君の曰く、此の度楚王との會見に文事の上にて勝を取ること出來得れば其れほど善きことはなし、若し文にて勝を取ること出來ざるときは、武力を以て立派なる宮殿の下に血をすゝりて盟ひを結び、是非とも同盟を結びて還るべし、隨從の士は外に求むるに及ばず、食客、門下生の中より取らば十分なりと、是に於て食客又は門下の中より役に立つべき人物を撰びたる處、十九人を得たれども、其外には取るべき人物なく、僅か一人のことにて二十人の定員に滿たず、殆んど當惑せし際、毛遂と云ふ者あり、進み出でて自ら平原君の助けになるべき由を述べて曰く、拙者承はるに、君には楚と合從のため談判に赴かるゝ都合にて、食客門下二十人を同伴あるべき約定にて、外よりは採用致されず、已に十九人は御人選相成りたれども尙一人足らざる趣、何卒君には拙者をば其數の內に入れて出發し給はんことをと、

【字解】歃血於華屋之下、武力を示して劫すを謂ふ、

平原君曰、先生處勝之門下幾年於此矣、毛遂曰、三年於此矣、平原君曰、夫賢士之處世也、譬若錐之處囊中、其末立見、今先生處勝之門下、三年於此矣、左

の美人を指す、

居歲餘、賓客門下舍人稍稍引去者過半、平原君怪之曰、勝所以待諸君者、未嘗敢失禮、而去者何多也、門下一人前對曰、以君之不殺笑躄者、以君爲愛色而賤士、士卽去耳、於是平原君乃斬笑躄者美人頭、自造門進躄者、因謝焉、其後門下乃復稍稍來、

【講義】此の事ありしより一个年餘過ぎける頃、平原君の食客竝びに門下の舍人等段々立去り、殆んど半數以上も減少せしかば平原君は不思議に考へ、諸人に向つて問ふやう、拙者が諸君を待遇する仕方に就いては是れまで禮を失ひたることも有らざるに、斯く立去る者の多きは何故ならんと、門下の一人進み出でて曰く、君が跛に約束を致されながら、彼れを笑ひたる美人を殺し給はざるが故に、何れも君は美人を愛して士をば大切にせられぬことと思ひて立去るのみと、是に於て平原君は跛を笑ひたる美人の首を斬り、自ら門に至り之を跛に差出して謝罪に及べり、此の後門下の食客復び追々と集まり來れり、

【字解】前、進むなり、造、イタルと訓ず、

是時齊有孟嘗、魏有信陵、楚有春申、故爭相傾以待士、秦之圍邯鄲、趙使平原君求救、合從於楚、約與食客門下有勇力文武備具者二十人偕、平原君曰、使文能取勝則善矣、文不能取勝、則歃血於華屋之下、必得定從而還、士不外索、取於食客門下

しが、其間に三度辭職して三度復職し、東武城に土地を賜はり其領主となりぬ、

【字解】 平原君、趙の惠文王の弟なり、

平原君家樓臨民家、民家有躄者、槃散行汲、平原君美人居樓上、臨見大笑之、明日躄者至平原君門請曰、臣聞君之喜士、士不遠千里而至者、以君能貴士而賤妾也、臣不幸有罷癃之病、而君之後宮臨而笑臣、臣願得笑臣者頭、平原君笑應曰、諾、躄者去、平原君笑曰、觀此豎子、乃欲以一笑之故殺吾美人、不亦甚乎、終不殺、

【講義】 平原君の邸に二階ありて民家を見おろせしが、或る日民家に住ひたる一人の跛、びつこを引きつつ井戸に汲みに出でたるに、平原君の妾なる一人の美女の二階に在りけるが、上より跛の歩く有樣を見て可笑さに堪へかね大に之を笑ひぬ、翌日跛は平原君の門をおとづれ、請求するやう、臣は是れまで君が士を好み給ふことを承はる、士の千里の路を遠しともせず態々君の處に來るものは、君が能く士を貴んで妾を賤み給ふ故なり、今臣は不幸にして脊蟲の病あり、士を愛する者より言へば、寧ろ憫むべきなり、然るに君の奥向きの方は二階より見おろして臣を笑へり、臣は何卒臣を笑ひたるもの丶首を賜はりたしと、平原君は事もなげに笑ひながら承知せりと返答に及びしかば、跛は滿足して立去れり、平原君は笑つて曰く、此の下郎を觀よ、何如に腹が立てばとて一寸笑つた爲に吾が寵愛する美人を殺さんと欲するは餘りに無法ならずやとて、美人を殺さず其儘に打過ぎけり、

【字解】 躄、跛なり、槃散、ひよろひよろ歩く貌、罷癃、腰曲りて脊の高まりたる病、セムシなり、後宮、前

惡むには非ず、朝は儲け口あれども、夕方になれば市が散じて心に期する所なきが故なり、今君が位地を失はれて食客が皆去りたりとて、固より當然の事なれば、彼等を恨むるに足らず、之を恨むるときは徒に賓客の再び來らぬやうにする仕方なり、何卒君には以前の如くに客を遇し給へと、孟嘗君再拜して曰く、謹んで尊命に從ふべし、先生の言を承はり、何如にして御指敎を遵奉せざらんやと、

【字解】 物忘其中、忘は亡に同じ、

太史公曰、吾嘗過薛、其俗閭里率多暴桀子弟、與鄒魯殊、問其故、曰、孟嘗君招致天下任俠姦人入薛中蓋六萬餘家矣、世之傳孟嘗君好客自喜、名不虛矣、

【講義】 太史公曰く、自分は昔し孟嘗君の領分なりし薛を過ぎたることありしが、其風俗を觀る處、村里に暴惡の若者多く、鄒や魯とは其趣を異にせり、其仔細を尋ねたるに、土地の者の言に、孟嘗君が天下の俠客や無頼漢を招きて薛の中に入れたる者六萬餘戶に及びたるが、其結果ならんと、孟嘗君が客を好み自ら樂みとしたりとの傳說は、虛名にあらずして事實なり、

平原君虞卿列傳第十六

平原君趙勝者、趙之諸公子也、諸子中勝最賢、喜賓客、賓客蓋至者數千人、平原君相趙惠文王、及孝成王、三去相、三復位、封於東武城、

【講義】 平原君趙勝は趙の公子の一人なり、諸公子の中に於て平原君最も賢明にして食客を好み、食客の來りて平原君をたよる者數千人あり、平原君は趙の惠文王と孝成王との二代に仕へて宰相の職に在り

是非とも彼等の面に唾を吐きかけて大に之を辱むべしと、

馮驩結轡下拜、孟嘗君下車接之曰、先生爲客謝乎、馮驩曰、非爲客謝也、爲君之言失、夫物有必至、事有固然、君知之乎、孟嘗君曰、愚不知所謂也、曰、生者必有死、物之必至也、富貴多士、貧賤寡友、事之固然也、君獨不見夫朝趨市者乎、明旦側肩爭門而入、日暮之後過市朝者掉臂而不顧、非好朝而惡暮、所期物忘其中、今君失位、賓客皆去、不足以怨士、而徒絕賓客之路、願君遇客如故、孟嘗君再拜曰、敬從命矣、聞先生之言、敢不奉教焉、

【講義】　馮驩は孟嘗君の客を罵るを聞くと均しく馬の手綱を結び、下りて孟嘗君を拜せしかば、孟嘗君も車より下りて答禮を行ひながら、先生に於て斯く恭しく禮をなし給ふは客の爲に謝せらるゝにやと問ひければ、馮驩曰く、否客の爲に謝するには非ずして君の言葉が間違へる爲なり、一體物には必然なる結著あり、事には當然然樣あるべき理あり、君は之を知り給ふかと、孟嘗君曰く、拙者愚にして先生の語の意味を知らずと、馮驩曰く、生ける者に定まりて死することあるは是れ物の必然なる結著なり、富貴なれば附く人多く、貧賤なれば少きは、是れ事の當然然樣あるべき理なり、君には彼の朝方に市に趨く者を見給はずや、夜明には肩を側て我れ先きにと門を爭うて入れども、日暮の後に市場を過ぐる者は、臂を掉つて一散に歩いて振向きもせず、是れは朝を好んで夕刻を

其故邑之地、又益以千戶、秦之使者聞孟嘗君復相齊、還車而去矣、

【講義】齊王は馮驩の說を聞き、尤もの意見なりとて人を國境に派出して秦の使者の樣子を探らせしに、秦の使の乘れる車は齊の國疆內に入りしかば、齊王の派遣せし官吏は早速馬を飛ばせて都に還り、其事を報告に及びたり、齊王は馮驩の申しゝ言の僞りならざることを確め、孟嘗君を召して其宰相の職を復して故の領地を與へしのみならず、更に一千戶を加增に及ぶ、秦の使者は孟嘗君が復び齊の宰相となりし由を聞き、空しく車を引返せり、

自齊王毀廢孟嘗君、諸客皆去、後召而復之、馮驩迎之、未到、孟嘗君太息歎曰、文常好客、遇客無所敢失、食客三千有餘人、先生所知也、客見文一日廢、皆背文而去、莫顧文者、今賴先生得復其位、客亦有何面目復見文乎、如復見文者、必唾其面而大辱之、

【講義】齊王が讒言を信じて孟嘗君を廢せしより、是れまで孟嘗君の世話になり居たる食客は皆立去りけるが、孟嘗君が元の身分となるや、彼等を召び戻さんとて馮驩をして之れを迎へしめたるも未だ到らず、孟嘗君太き息をつき嘆息して云ふやう、拙者常に客を好み、客を取扱ふに是れまで別に手落ちありたりとも覺えず、食客が三千餘人ありしとは先生も知らるゝところなり、然るに彼等は拙者が一旦廢せられて勢ひを失ふや、何れも拙者に背いて去り、一人も拙者を見向く者なし、今拙者は先生の御蔭を以て昔しの地位に立戻ることを得たるも、客は何の面目ありて復び拙者に逢はるべきや、若し復逢ひしときは、

聞秦遣使車十乘載黄金百鎰、以迎孟嘗君、孟嘗君不西則已、西入相秦、則天下歸之、秦爲雄而齊爲雌、雌則臨淄卽墨危矣、王何不先秦使之未到、復孟嘗君而益與之邑以謝之、孟嘗君必喜而受之、秦雖彊國、豈可以請人相而迎之哉、折秦之謀、而絶其霸彊之略、

【講義】 馮驩は秦より孟嘗君を迎ふる使者の出發に先きだちて秦王に暇を告げて齊國に至り、齊王に説いて曰く、天下游説の士が車の横木に倚り馬の胸革を結び、東に向ひて齊に入る者は、齊を強くして秦を弱くせんと思はぬ者なく、車の横木に倚り馬の胸革を結び、西に向ひて秦に入る者は、秦を強くして齊を弱くせんと思はぬ者なし、夫れ秦と齊とは一方が雄となれば一方が雌となり、一方が雄となれば一方が雌となる國にして、秦强き時は齊は弱し、此勢ひは並び立たず、今臣の内々承はる所に據れば、秦は今度使者を發し、車十乘に黄金百鎰を載せて孟嘗君を迎ふる由なり、孟嘗君が西の方秦に入らざれば其れ迄の事なれども、若し秦に入りて其宰相とならば天下之に歸すべし、其結果秦は雄となりて齊は雌とならん、齊が雌となる時は臨淄、卽墨は危かるべし、王は何とて秦の使者の到着せぬ中に孟嘗君を以前の地位に戻し之に領地を增し與へて、無實の疑ひを掛けたる罪を詫び給はざる、孟嘗君は喜んで之を受くるに相違なし、秦は何如に强國なればとて、他國の宰相を貰ひ受けて之を迎ふることあるべきや、斯くして秦の謀を挫いて、其霸を唱へ强を致すの術を壞し申さんと、

齊王曰、善、乃使人至境候秦使、秦使車適入齊境、使還馳告之、王召孟嘗君而復其相位、而與

申さん、御許しあるべきや何如にと、孟嘗君は已に彼れを信ずることとて、其言ふがまゝに車と進物とを支度して出立せしめたり。馮驩は西を指して秦に赴き、秦王に說きけるは、天下游說の士が車の横木に倚り馬の胸革を結び、西方に向ひて秦に入る者は、何れも秦を強くして齊を弱くせんことを計らざるはなし、又車の横木に倚り馬の胸革を結び、東方に向ひて齊に入る者は、何れも齊を強くして秦を弱めんことを計らざるはなし、此れ秦と齊とは孰れか雌となり孰れか雄となるべき形勢の國にして、其勢ひ兩方とも雄となる能はず、孰れにもせよ、雄となるもの天下を得べしと、秦王跪きて馮驩に問ふやう、何如にせば秦を雌とならざらしむることを得るかと、馮驩曰く、齊が孟嘗君を廢したることは誰れも知る所なるが、大王も亦之を知り給ふかと、秦王は其噂を聞き及べりと言ひしかば、馮驩の曰く、齊が天下より重んぜらるゝやうになしゝは孟嘗君なり、然るに今齊王は讒言を以て孟嘗君を廢せしかば、孟嘗君は其心に之を怨むるが故に、齊に背かんは必定なり、若し齊に背いて秦に入るときは、齊國の事情、又は人事の眞相等悉皆之を秦に打明くべきが故に、齊の地は秦の手に入り申すべく、何ぞ僅かに雄となるのみに之れあらんや、されば大王には急に使者に進物を持たせて內々孟嘗君を迎へ取り給へ、此機會を失ふべからず、若し齊に於て氣が附き、復び孟嘗君を用ふることあらば、雌雄の在る所は未だ孰れの國なるかを知るべからずと、秦王は大に馮驩の說を悅び、車十乘と黃金百鎰とを以て孟嘗君を迎へたり、

【字解】 靷、皮を用ひ馬の胸に結び附けて車の軸を引くもの、

馮驩辭以先行、至齊說齊王曰、天下之游士、憑軾結靷、東入齊者、無不欲彊齊而弱秦者、憑軾結靷、西入秦者、無不欲彊秦而弱齊者、夫秦齊雄雌之國、秦彊則齊弱矣、此勢不兩雄、今臣竊

秦者、必令君重於國、而奉邑益廣、可乎、孟嘗君乃約車幣而遣之、馮驩乃西說秦王曰、天下之游士、憑軾結靷、西入秦者、無不欲彊秦而弱齊、憑軾結靷、東入齊者、無不欲彊齊而弱秦、此雄雌之國也、勢不兩立爲雄、雄者得天下矣、秦王跽而問之曰、何以使秦無爲雌而可、馮驩曰、王亦知齊之廢孟嘗君乎、秦王曰、聞之、馮驩曰、使齊重於天下者、孟嘗君也、今齊王以毀廢之、其心怨必背齊、背齊入秦、則齊國之情人事之誠、盡委之秦、齊地可得也、豈直爲雄也、君急使使載幣、陰迎孟嘗君、不可失時也、如有齊覺悟、復用孟嘗君、則雌雄之所在、未可知也、秦王大悅、乃遣車十乘黃金百鎰、以迎孟嘗君、

【講義】 齊王は秦楚の兩國より孟嘗君を失脚せしめんとて種々無根の罪惡を言ひ觸らせしを眞に受け、孟嘗君の名は齊の君主よりも高く、齊國の權を自儘になさんとする者なりと速斷せしかば、孟嘗君の官職を取上げたり、孟嘗君の世話を受け居る食客等は孟嘗君が廢せられて無勢力となるを見るや、皆見限りて立去れり、其時馮驩は孟嘗君に申出づるやう、臣に車一乘を貸し給へ、さすれば秦に入り、君をして齊國に重んぜられ、領分の益〻手廣く相成るやう取料ひ

之善聲也、君有何疑焉、孟嘗君乃拊手而謝之、

【講義】　孟嘗君は貸金催促の爲に馮驩を領地に遣せし後、彼れが證文を燒き棄てたる由を傳へ聞きて其無法を怒り、使を差立てゝ馮驩を召び戻し、馮驩歸着するや、孟嘗君は彼れを責めて曰く、拙者の食客三千人の多數にて、之を養ふべき財源なければこそ、薛に錢を貸出せるなれ、拙者領分の收入少き故、已むを得ず利息を取ることなるに、薛の民は期限に至りても利息を拂はず、此分にては食客の賄ひ足らざる恐れあり、故に先生に督促方を御依賴せし處、聞けば先生には債務者より錢を得るや直ちに牛や酒を買つて彼等に振舞ひ、其上證文迄も燒棄てられたる由なるが、何故に斯かる亂暴なる處置をせられたるか、返答を承りたしと、馮驩云ふ、成程仰せの通りの事實なり、多く牛や酒を調へて馳走せざるときは、彼等全體を呼び寄することを叶はず、債務者揃はざるときは、餘裕ありて利息を拂ひ得る者と、利息を拂ふだけの力なき者との區別知り難し、餘裕ある者には期限を定め置きたれども、力の足らざる者は、十年掛りて居催促をなすとも、利息を拂ふ所が、利息の滯り益〻多からん、若し又急に責め立てなば逃亡して借倒しとなすべく、急に責め立てゝ效果あれば別段、結局辨償の出來ざる曉には、上たる君に於ては利を好みて士民を愛せざることとなり、下たる士民に於ては上に離れ損を掛くるの惡名を得べし、是れは士民を勵まし君の名譽を彰はすべき方法には非ず、無用にして反故となりたる證文を焚き、迚も手に入らぬ空算用を棄てて薛の士民に君を親ましむると共に君の名譽を彰はさしめんとて、此の度の處置を取りたるなり、君に於ては何も疑ひ給ふ筋に非ずと、孟嘗君は彼れが遠大の考へに感じ入り、手を拊つて禮を述べたり、

齊王惑於秦楚之毀、以爲孟嘗君名高其主而擅齊國之權、遂廢孟嘗君、諸客見孟嘗君廢、皆去、馮驩曰、借臣車一乘、可以入

て利息十萬錢だけ手に入りければ、今度は多く酒を釀し肥えたる牛を買ひ、馳走の用意をなして債務者を招き、利息を拂ふとの出來る者も出來ざる者も共に來らしめ、彼等の持參せる借用證書の半片と債權者の手に在る半片とを合せて之を纏め、更に期日を定め、牛を殺し酒を設けて彼等を饗し、酒酣なる頃又前の如く證書を合せて之を確め、利息を拂ふ見込みのある者に對しては期限を約し、利息を拂ふ力のなき者に對しては其證書を火中に投じ燒き棄てゝ曰く、孟嘗君が錢を貸出されたる主意は人民の資力なき者の爲に本業をあてがふ爲にして、利息を求むる譯は別に食客の手當てに供する財源なきが故なり、今富裕なる者には期限を定めて返濟を要求するも、貧窮なる者には證文を焚き棄てゝ貸し下さるゝなり、諸君は十分に飲食せられよ、此の如き慈悲ある君なれば、諸君は何とて其恩に背くべけんやと、坐せる者此の挨拶に對し何れも起立して再拜せり、

孟嘗君聞馮驩燒券書、怒而使使召驩、驩至、孟嘗君曰、文食客三千人、故貸錢於薛、文奉邑少、而民尙多不以時與其息、客食恐不足、故請先生收責之、聞先生得錢、卽以多具牛酒而燒券書、何、馮驩曰、然、不多具牛酒、卽不能畢會、無以知其有餘不足、有餘者爲要期、不足者雖守而責之十年、息愈多、急卽以逃亡、自捐之、若急終無以償、上則爲君好利不愛士民、下則有離上抵負之名、非所以厲士民彰君聲也、焚無用虛債之券、捐不可得之虛計、令薛民親君而彰君

の多數は利息を拂ふこと出來ざりき、斯かる有樣にて食客の賄ひに差支へを生ぜんとせしかば、孟嘗君は心配に及び、近侍の者に、貸金の催促を爲さしむるには何人が宜しかるべきかと尋ねたる處、舍監の曰く、代舍に居る馮公は容貌立派にして辯口もあり、一體溫厚の長者なれども外に技能もなければ、斯かる折に使ふより外はなし、宜しく彼れに貸金を督促せしむべしと、是に於て孟嘗君は馮驩を呼び寄せて依賴するやう、客人方は拙者の不肖なるを知らず仕合せにも拙者の處に參られて寄寓せらるゝ者三千餘人に及ぶ處、拙者の領地の收入は客人の賄ひに足らざれば利子附の金を薛に貸出しゝに、一年を過ぎたるも返金せざる上、利息を出さゞる者頗る多く、此の分にては客人の賄ひも續かざるべきが故に、之を督促せんと思ふ處なるが、何卒先生、拙者の爲に薛に出張あり、債務者に談判下されたしと、馮驩は承知致せりと曰うて引受けぬ、

【字解】　息、利子なり、

辭行、至薛召取孟嘗君錢者皆會、得息錢十萬、乃多釀酒買肥牛、召諸取錢者、能與息者皆來、不能與息者亦來、皆持取錢之券書合之、齊爲會日、殺牛置酒、酒酣、乃持券如前合之、能與息者與爲期、貧不能與息者取其券而燒之曰、孟嘗君所以貸錢者、爲民之無者以爲本業也、所以求息者、爲無以奉客也、今富給者以要期、貧窮者燔券書以捐之、諸君彊飲食、有君如此、豈可負哉、坐者皆起再拜、

【講義】　馮驩は孟嘗君に暇乞ひして薛に至り、孟嘗君の債務者を召集せし處、皆參會に及べり、其の場に

り、五日過ぎて孟嘗君は又舍監に向ひて馮驩の樣子を問ふに、答へて云ふ、彼の客人は復も劍を叩いて歌ひて曰く、長鋏よ、汝と共に歸らんか、外出するに車なし、此に居りてもつまらなければと、孟嘗君之を聞いて今度は代舍とて第一等の宿舍に遷しゝが、此にては出入するに車あり、五日過ぎて孟嘗君復舍監に馮驩の樣子を問ふに、舍監答ふるやう、先生には又劍を叩いて歌ひて曰く、長鋏よ、歸らんか、妻子をもつて生計を營むこと出來ず、つまらなければと、孟嘗君彼れが餘りの我儘に呆れて機嫌を損ぜしが、此れより一年ばかりの間、馮驩は何事をも言はざりき、

【字解】蹻屩、蹻はフムと訓ず、屩は草履の類、蒯緱、蒯は茅の類にして繩の材料、緱は刀の柄なり、

孟嘗君時相齊、封萬戶於薛、其食客三千人、邑入不足以奉客、使人出錢於薛、歲餘不入、貸錢者多不能與其息、客奉將不給、

孟嘗君憂之、問左右、何人可使收債於薛者、傳舍長曰、代舍客馮公形容狀貌甚辯、長者無他伎能、宜可令收債、孟嘗君乃進馮驩而請之曰、賓客不知文不肖、幸臨文者三千餘人、邑入不足以奉賓客、故出息錢於薛、薛歲不入、民頗不與其息、今客食恐不給、願先生責之、馮驩曰、諾、

【講義】其時孟嘗君は齊の宰相を勤め、薛に於て一萬戶の領主に取立てられしが、何分食客が三千人も居ることゆゑ、費用多端にして領地の收入にては迚も食客を養ふに不十分なりしかば、人を以て薛の人民に金を貸附けさせ、是れに由つて收入を增さんとせしに、一年餘を經たるも本金入らざるのみか、借主

見之、孟嘗君曰、先生遠辱、何以教文也、馮驩曰、聞君好士、以貧身歸於君、孟嘗君置傳舍十日、孟嘗君問傳舍長曰、客何所爲、答曰、馮先生甚貧、猶有一劍耳、又蒯緱、彈其劍而謌曰、長鋏歸來乎、食無魚、孟嘗君遷之幸舍、食有魚矣、五日、又問傳舍長、答曰、客復彈劍而歌曰、長鋏歸來乎、出無輿、孟嘗君遷之代舍、出入乘輿車矣、五日、孟嘗君復問傳舍長、舍長答曰、先生又嘗彈劍而歌曰、長鋏歸來乎、無以爲家、孟嘗君不悅、居朞年馮驩無所言、

【講義】此れは以前の話なるが、馮驩と云ふ者、孟嘗君が食客を好むことを聞き、貧書生の事とて車にも乘れぬ身分なれば草履をはきて訪問に及び、孟嘗君に面會せし處、孟嘗君曰く、先生は態々遠方より御尋ね下されたるが、何如なる事を以て文に教へ給ふ御所存なるかと、馮驩云ふ、別段何等の抱負ある次第に非ず、君が士を好み給ふと承り、貧乏なる此身を御庇護願はんが爲に來りたるなりと、孟嘗君は彼れを傳舍とて第三等の寄宿所に住はせ、已に十日に及びける頃孟嘗君は傳舍の舍監に問ふやう、客は每日何事を爲しつゝありやと、舍監答へて云ふ、馮先生は非常に貧乏にて唯一振りの劍を所持するのみ、而も其劍は何の裝飾もなく、繩を卷きつけたる計りなるが、先生此劍を叩き、歌ひて曰く、長鋏よ、汝と共に歸らんか、食事に魚なし、此に居りてもつまらなければと、孟嘗君は之を聞いて聊か氣の毒に思ひ、幸舍とて第二等の宿舍に遷しけるが、此にては食事に魚の采あ

せし土地をば足下の所領となす樣に取料らひ申さん、齊が敗北する時は、秦は最早齊を畏れずして晉の强きを畏れ、必ず足下に重きを置き、足下の力に因つて晉を自國に結附けんとするならん、晉は齊を伐つが爲に疲弊せる際なれば秦を畏るゝは明白にして、必ず足下の力に縋り秦に取入るべし、乃ち足下は一面に齊を破り功を立て一面に晉を盾にして重きをなすの仕方なり、是れ足下は齊を破りて己の領地を定め、秦晉兩國より重んぜられん、若し齊が破られずして呂禮が復び用ひらるゝ時は、足下は非常なる窮地に陷るに相違あるまじと、是に於て穰侯は秦の昭王に言上して齊を伐ちたる處、呂禮は果して逃亡せり、

後齊湣王滅宋益驕、欲去孟嘗君、孟嘗君恐、乃如魏、魏昭王以爲相、西合於秦趙、與燕共伐破齊、齊湣王亡在莒、遂死焉、齊襄王立、而孟嘗君中立爲諸侯、無所屬、齊襄王新立、畏孟嘗君、與連和復親薛公、文卒、謚爲孟嘗君、諸子爭立、而齊魏共滅薛、孟嘗絕嗣無後也、

【講義】　其後齊の湣王は宋を滅ぼして益〻心驕り、孟嘗君を殺さんとせしかば、孟嘗君は恐れて魏に逃れし處、魏の昭王は孟嘗君を宰相に任じ、西は秦趙と奔連合し、燕と共に齊を伐ちて之を攻め破り、湣王は出して莒の城に入込みしが、其處にて死去せり、齊に於ては襄王位に卽きたるが、此時孟嘗君は何れの國にも附かず中立して諸侯となれり、齊の襄王は位に卽いて日淺く孟嘗君を畏れければ、互ひに和睦を結び、復び孟嘗君と親密の交をなせり、文卒去して孟嘗君と謚す、孟嘗君の諸子繼嗣を爭ひ一致せざりしかば、齊魏相共に薛を滅ぼし、孟嘗君は後を嗣ぐ者なくして家絕えたり、

初馮驩聞孟嘗君好客、躡蹻而

を輕んずべきを言ふ、

而呂禮嫉害於孟嘗君、孟嘗君懼、乃遺秦相穰侯魏冉書曰、吾聞秦欲以呂禮收齊、齊天下之彊國也、子必輕矣、齊秦相取以臨三晉、呂禮必幷相矣、是子通齊以重呂禮也、若齊免於天下之兵、其讎子必深矣、子不如勸秦王伐齊、齊破、吾請以所得封子、齊破、秦畏晉之彊、秦必重子以取晉、晉國弊於齊而畏秦、晉必重子以取秦、是子破齊以爲功、挾晉以爲重、是子破齊定封、秦晉交重子、若齊不破、呂禮復用、子必大窮、於是穰侯言於秦昭王伐齊、而呂禮亡、

【講義】然るに呂禮は又孟嘗君を忌みて邪魔物としければ、孟嘗君は禍の及ばんことを懼れ、秦の宰相たる穰侯魏冉に書簡を贈りて曰く、拙者承るに、秦は呂禮を齊の宰相とし、其關係に因つて齊を秦に結び附けんとせらるゝ由、齊は天下の强國なれば、其强國を秦の味方にすることは大功なり、されば呂禮の重んぜらるゝは必定にて、足下は輕んぜらるべし、齊秦互ひに組合ひて三晉に臨まば、三晉も敵對出來ずして齊秦の命に從ふこととなり、呂禮は三晉の宰相をも兼ぬるに至らん、是れ足下が齊國に手を入れられたるが爲に自然呂禮を重からしむる次第となりたるなり、若し齊が天下の兵を受くることなく安泰ならんには、呂禮は益〻得意の地位に立ち、足下を讎とすること深からん、故に足下の上策としては、秦王に勸めて齊を伐つより外はあらじ、齊が破れしならば、秦が略取

驚き種々調査せし處、孟嘗君は果して謀反の企てなきこと明白なりしを以て、復孟嘗君を召しけるが、孟嘗君は病氣を申立て、薛に歸つて隱居せんことを乞ひ、湣王は之を許せり、

其後秦亡將呂禮相齊、欲困蘇代、代乃謂孟嘗君曰、周最於齊至厚也、而齊王逐之而聽親弗、相呂禮者欲取秦也、齊秦合、則親弗與呂禮重矣、有用齊、秦必輕君、君不如急北兵趨趙以和秦魏、收周最以厚行、且反齊王之信、又禁天下之變、齊無秦、則天下集齊、親弗必走、則齊王孰與爲其國也、於是孟嘗君從其計、

【講義】 其後秦より亡命せる呂禮と云ふ將軍來りて齊の宰相となり、蘇代を困めんとせしかば、蘇代は孟嘗君に謂ふ樣、周の公子なる周最は齊と至極懇親の人なるに、齊王は之を放逐して親弗の言を聽き入れ呂禮を宰相となしたるは、彼れが本と秦の將軍なりし緣故を以て秦を味方に取入れんとする爲なり、齊と秦との結合成るときは親弗と呂禮とは自然重んぜらるゝ譯にて、若し此の二人が齊にて重く用ひらるゝこととならば、秦は君をば無勢力として輕んずべし、故に君は急に北に兵を發し、趙を促がして秦魏の和睦を整へ、周最を呼戻して丁寧なる取扱ひをなし、且つ齊王の信義を復活して天下の變を禁じ給ふことを上策とす、齊が秦に依賴することなければ、天下は皆齊を中心とすべく、其結果親弗は必ず逃亡すべし、然るときは齊王は何人と共に其國を治むべきか、君と周最との外はあるまじと、孟嘗君は此の計に從へり、

【字解】 天下之變、齊秦合體するときは親弗、呂禮用ひられ、此の二人用ひらるゝときは齊も秦も孟嘗君

君相齊、其舍人魏子爲孟嘗君收邑入、三反而不致一入、孟嘗君問之、對曰、有賢者竊假與之、以故不致入、孟嘗君怒而退魏子、居數年人或毀孟嘗君於齊湣王曰、孟嘗君將爲亂、及田甲劫湣王、湣王意疑孟嘗君、孟嘗君乃奔、魏子所與粟賢者聞之、乃上書言孟嘗君不作亂、請以身爲盟、遂自剄宮門以明孟嘗君、湣王乃驚而蹤跡驗問、孟嘗君果無反謀、乃復召孟嘗君、孟嘗君因謝病、歸老於薛、湣王許之、

【講義】 此の時楚の懷王は秦に來て居りしを秦にて抑留せしが故に、蘇代の策にて之を脱出せしめんとしたるなれど、秦は遂に懷王を出さざりき、孟嘗君は齊の宰相の職に在りしが、近臣に魏子と云ふ者あり、孟嘗君の爲に其領分の租税を取立てに出張せしが、三度往復せしに拘はらず一回も年貢を持參せざりしかば、孟嘗君其仔細を尋ねし處、魏子答へて云ふ、己れの知れる人の中に賢者あり、其困窮を救ふがため私に貸し與へしかば、それゆゑ年貢を持參らざりきと、孟嘗君は立腹して魏子に暇を遣せり、それより五六年を經て、孟嘗君の事を齊の湣王に讒言する者ありて、孟嘗君に反逆の企てありと言へり、故に田甲が湣王を劫すに及び湣王は孟嘗君を疑ひしかば、孟嘗君は誅を恐れて脱走す、時に魏子が以前賢者なりとて孟嘗君に納むべき年貢の米を貸し與へたる人物は此の事を聞き、孟嘗君は決して亂をなさず、命を差出して盟ひを立つる由を上書し、宮門の前にて自ら首を刎ね孟嘗君の寃罪を明かにせしかば、湣王は大に

弱、而處三晉之西、三晉必重齊、薛公曰善、因令韓魏賀秦、使三國無攻、而不借兵食於西周矣、

【講義】孟嘗君は秦が己れを殺さんとせしことを怨みに思ひ、復讐の手段として、韓魏が楚の敵なるにより齊は韓魏の爲に楚を攻め、今度は韓魏の助けを以て秦を攻め、兵士竝に糧食を西周より借らんとせり、此時蘇代は西周の難儀を救はんが爲に孟嘗君に語るやう、君は嘗て齊より韓魏に加勢を出して楚を攻め、九个年の間に宛、葉以北を取り、韓魏の勢力を加へたるに、今又秦を攻めて韓魏の勢力を加ふるときは、韓魏は南に於て楚の憂へなく、西に於て秦の憂へなきこととなるべし、さすれば齊は必ず危からん、韓魏は齊を輕んじ秦を畏るゝに相違なし、臣は君の爲に甚だ之を危む、其れよりも寧ろ弊邑西周をして深く秦と親善せしめ、君には秦を攻むることを止め、又兵食を借らざるを得策とす、君は函谷關まで差掛るも秦に攻入らずして、弊邑より君の意中を秦に通ぜしめて曰はんに、薛公(孟嘗君)は必ず秦を破つて韓魏を强くするが如き事を爲さず、今秦を攻むる所以は、王が楚王を餘儀なくして東國を齊に割讓せしめ、此の條件の下に秦は自國に抑留せる楚の懷王を出して和議を講ずることを欲するのみと、君に於て斯の如く弊邑をして秦に恩惠を與へしめ給ふときは、秦は齊より破らるゝことなく、東國を楚に割かしめて禍を免るゝ次第なれば、之を欲するは必定なり、楚王は又秦の抑留を脱出する次第なれば、齊を有難く思ふべく、齊はまた東國を得て益〻强盛となり、君の領土なる薛も隨つて代々心配なかるべし、秦が非常に弱くなるには至らずして三晉の西に處るときは、三晉は齊を重んずるに相違なからんと、孟嘗君は尤もの議論なりとて蘇代の說を聽き入れ、韓魏をして秦に賀せしめ、三國の秦を攻むることを中止すると共に、兵士糧食を西周より借用するに至らざりき、

是時楚懷王入秦、秦留之、故欲必出之、秦不果出楚懷王、孟嘗

【講義】孟嘗君は秦を逃れて本國に歸る途中趙を過ぎたるに、平原君は之を迎へて客とせり、趙の人民は豫てより孟嘗君の賢者なることを聞き知りしかば、何如なる風采の人ならんと、往來に出でて彼れの通行するを觀たるが、皆笑つて云ふやう、是れまで薛公をば堂々たる男振りなるべしと思ひたるに、今善く視れば取るに足らぬ小男なりと、孟嘗君は之を聞きて大に怒り、同行せし客共車より下り、劒を拔いて數百人を殺し、遂に一つの縣を滅ぼして立去れり、齊の湣王は孟嘗君を秦に遣り災に遇はしめたる事を以て己れの不德の致す所と思ひ、孟嘗君が歸るや否や齊の宰相として國政を一任せり、

【字解】薛公、孟嘗君を謂ふ、魁然、偉大の貌、眇、微小の貌、

孟嘗君怨秦、將以齊爲韓魏攻楚、因與韓魏攻秦、而借兵食於西周、蘇代爲西周謂曰、君以齊爲韓魏攻楚、九年取宛葉以北、以彊韓魏、今復攻秦以益之、韓魏南無楚憂、西無秦患、則齊危矣、韓魏必輕齊畏秦、臣爲君危之、君不如令弊邑深合於秦、而君無攻、又無借兵食、君臨函谷、而無攻、令弊邑以君之情謂秦昭王曰、薛公必不破秦以彊韓魏、其攻秦也、欲王之令楚王割東國以與齊、而秦出楚懷王以爲和、君令弊邑以此惠秦、秦得無破、而以東國自免也、秦必欲之、楚王得出、必德齊、齊得東國、益彊、而薛世世無患矣、秦不大

賓客盡羞之、及孟嘗君有秦難、卒此二人拔之、自是之後客皆服、

【講義】孟嘗君は秦の都を出づることを得たれば、取る物も取りあへず馬を飛ばして逃げ去り、手形を書替へ姓名を變じて關所を出で、夜半に函谷關に至れり、此の時秦の昭王の方にては、一旦孟嘗君を出し遣りたれども程經て之を悔い探さしめたる處、已に都を立ち去りし後なりければ、人をして早繼ぎの傳馬を以て追はしめぬ、孟嘗君の方にては辛うじて函谷關に至りし處、關所の規則は雞が鳴くを合圖として門を開き旅人を通すこととなるが、今は夜半の事なれば孟嘗君は曉方を待つ間に追手の來らんことを恐れ、何如にすべきかと案じ累ふ處、末坐に居る客にて雞の鳴き聲を爲す者あり、其聲につれて多くの雞一齊に鳴きければ、關所の番人は夜が明けたりと思ひ、遂に門を開き手形を持つ者を出したるが、食時の間ほど過ぎたる頃秦の追手は果して函谷關に到着したれども、孟嘗君の已に出でたる後にて間に合はざりしかば空しく引返せり、今度の事より以前、孟嘗君が此の狗盗、雞鳴の二人を客分の中に入れたる處、他の賓客は彼等を下等視しけるゆゑ之を羞ぢたり、然るに孟嘗君が秦にて災難に遇ひたる場合に至り、此の二人の者の働きにて救ひ出しゝかば、是れより以後賓客も皆服せり、

【字解】封傳、關門通過の手形、

孟嘗君過趙、趙平原君客之、趙人聞孟嘗君賢、出觀之、皆笑曰、始以薛公爲魁然也、今視之乃眇小丈夫耳、孟嘗君聞之怒、客與俱者、下斫擊殺數百人、遂滅一縣以去、齊湣王不自得、以其遣孟嘗君、孟嘗君至、則以爲齊相任政、

て宰相となさんとせしが、或人秦の昭王に說いて云ふやう、孟嘗君は賢者にして又齊王の一族なれば、今秦の宰相となりても齊の利益を先きにして秦を後廻しにすべきが故に、秦に取りて危險千萬なりと、是に於て昭王は孟嘗君を宰相となすことを見合せしのみならず、孟嘗君を押込めて之を殺さんとせり、孟嘗君は人を賴み昭王の氣に入りの妃に泣付き、放免の取料らひを懇請せしめけるに、妃の云ふやう、それに付ては望みあり、何卒孟嘗君の所持せらるゝ狐の白き毛の皮衣を贈られたしと、此時孟嘗君は實際狐の白き毛の皮衣を持ち居たるに相違なく、是れは千金の價ありて天下に並びなき品なり、因りて命には替へ難ければ之を妃に贈りたくも、何如せん、秦に來りし時已に昭王に獻納し、別に掛替とては無かりければ、孟嘗君は甚だ煩悶して隨行の食客に工夫を尋ねたれども、誰れも名案を出す者もなかりき、然るに一番末席に狗の眞似を爲すことの上手なる者あり、申出でけるは、臣は其皮衣を手に入れて御目に掛け申さんと、其夜狗となりて秦の宮殿の庫の內に入り、以前秦の昭王に獻じたる皮衣を盜出して歸りければ、孟嘗君は仕合せよしと、之をば知らぬ振りをして秦王の氣に入りの妃に獻じたり、妃は前に約束もあることとて、孟嘗君の爲に昭王に取成しゝかば、昭王も其愛に引かされて孟嘗君を釋放せり、

【字解】狐白裘、狐の腋の下の白き毛にて作りたる皮衣なり、

孟嘗君得出、卽馳去、更封傳、變名姓、以出關、夜半至函谷關、秦昭王後悔出孟嘗君、求之已去、卽使人馳傳逐之、孟嘗君至關、關法、雞鳴而出客、孟嘗君恐追至、客之居下坐者、有能爲雞鳴、而雞盡鳴、遂發傳出、出如食頃、秦追果至關、已後孟嘗君出、乃還、始孟嘗君列此二人於賓客、

然る後面會の事を申込めり、孟嘗君は其招きに應じて秦に赴かんとせしに、食客は何れも之を危險なりとして孟嘗君の往くことを善しとする者なく、交る交る諫めたれども聽入れられず、蘇代進み出でて云ふやう、今朝拙者は他處より此へ來る途中、木の人形と土の人形との問答を聞きたり、木の人形の曰く、貴公は泥の事ゆゑ、雨が降らんには崩るゝならんと、土の人形曰く、僕は土より生れたる者なれば崩るれば土に歸するのみなるが、貴公は其れと違ひ、若し雨降りて流れ出されんには何處迄行くか、止まる所を知らずと、今秦は虎狼の如き暴慾の國なり、然るに君は危險を冒して往き給はんとす、若し還ること出來ぬこととならば、土人形に笑はれはすまじきかと、孟嘗君は彼れの説に因つて秦に往くことの不利なる所以を悟りしかば、終に中止せり、

齊湣王二十五年、復卒使孟嘗君入秦、昭王即以孟嘗君爲秦相、人或説秦昭王曰、孟嘗君賢、而又齊族也、今相秦、必先齊而後秦、秦其危矣、於是秦昭王乃止、囚孟嘗君謀欲殺之、孟嘗君使人抵昭王幸姬求解、幸姬曰、妾願得君狐白裘、此時孟嘗君有一狐白裘、直千金、天下無雙、入秦獻之昭王、更無他裘、孟嘗君患之、徧問客、莫能對、最下坐有能爲狗盜者、曰、臣能得狐白裘、乃夜爲狗以入秦宮藏中、取所獻狐白裘至、以獻秦王幸姬、幸姬爲言昭王、昭王釋孟嘗君、

【講義】齊の湣王の二十五年に至り、秦より復も孟嘗君を招き、竟に秦に赴けり、秦の昭王は孟嘗君を以

に集まれり、孟嘗君は己れの產業をも放擲して手厚く之を待遇せり、之が爲に天下の國士と云ふ國士は殆んど集め盡し、食客の數は數千人に及びしが、其取扱ひは貴賤の差別なく皆孟嘗君自身と同格にせり、孟嘗君が食客と對坐して談話する時、屏風の後の方には常に書記が控へ居り、孟嘗君が食客に對し色々なる話をなすと共に其親戚の居處を尋ねたる場合に之を筆記し、食客が歸りたる後、孟嘗君は使を以て其親戚を見舞はせ、物品等を贈らしめたり、孟嘗君或時客を呼びて共に夜食を喫せしに、一人燈の火を蔽ふ者ありて暗くなりしかば、客は是れ畢竟食物に差別あるが爲ならんと立腹して食事を止めて立去らんとす、孟嘗君は席を起ち、自ら己れの飯を持ちて客の飯と竝べて之を示しゝに、固より同一なりしかば客は大に愧ぢ入り、自ら首を刎ねて死せり、此事評判となり、孟嘗君に歸する者多かりき、孟嘗君に於ては客の中に就いて差別を立てず一樣に之を愛せしかば、人人皆自分のみを大切にすることと思ひ、益、心を傾けたり、

秦昭王聞其賢、乃先使涇陽君爲質於齊、以求見孟嘗君、孟嘗君將入秦、賓客莫欲其行、諫不聽、蘇代謂曰、今旦代從外來、見木偶人與土偶人相與語、木偶人曰、天雨、子將敗矣、土偶人曰、我生於土、敗則歸土、今天雨、流子而行、未知所止息也、今秦虎狼之國也、而君欲往、如有不得還、君得無爲土偶人所笑乎、孟嘗君乃止、

【講義】秦の昭王は孟嘗君の賢者なることを聞き、自國に招き寄せて面會せんと思ひしが、疑心なからしむるため、先づ涇陽君を齊の國に人質として差出し、

飽くほど食するに、士は糟糠だも十分に食する能はず、今父君には此上尚有り餘るほど貯蓄せられたる所で、死後知ることの出來ぬ何人に遺はさるゝ思召しなるか、斯かる無意味の事に力を用ひて國家の事の日に損ずることを忘れ給ふは、文の慮外ながら不思議に存ずる所なりと、田嬰は文が他の子と違ひ器量拔群なることを認めしかば、吾が子ながらも大切に扱ひ、家事を主宰せしむると同時に賓客を接待せしめし處、賓客は日に增し、其名は列國に聞えたり、列國は何れも使者を田嬰の所に派遣して、文をば太子に立てよと勸めければ、田嬰も之を承諾せり、田嬰卒去し、謚して靖郭君と曰へり、文は豫定の通り立つて薛の領主となる、是れぞ孟嘗君なる、

【字解】 褐、毛布なり、賤者の服、所不知何人、前の「不能知也」の語を承けて云ふ、

孟嘗君在薛、招致諸侯賓客及亡人有罪者、皆歸孟嘗君、孟嘗君舍業厚遇之、以故傾天下之士、食客數千人、無貴賤一與文等、孟嘗君待客坐語、而屛風後常有侍史、主記君所與客語、問親戚居處、客去、孟嘗君已使使存問獻遺其親戚、孟嘗君曾待客夜食、有一人蔽火光、客怒以飯不等、輟食辭去、孟嘗君起自持其飯比之、客慙自剄、士以此多歸孟嘗君、孟嘗君客無所擇、皆善遇之、人人各自以爲孟嘗君親己、

【講義】 孟嘗君は己が領地なる薛に住居し、列國の客分となり居れる者を招き寄せ、之と共に本國にて罪を犯し亡命せる者共も皆孟嘗君をたよりて其門下

に受くと定まつて居れば、人力にて何如ともすべからざるが故に、父君には何も心配し給ふことなかるべし、若し又命を戸に受くるならば、丈が高くなればなる程戸の方を高くするのみにて、段々高くせば何人も追附くものあらざるべしと、田嬰も言ひ伏せられて返す辭もなかりしかば、汝其の話は止めにせよとぞ申しける、それより餘程過ぎて文は父の暇を見料らひて問ひけるは、子の子は何と申すと、田嬰曰く、それは孫と曰ふと、文問ふ、孫の孫は何と申すと、田嬰曰く、それは玄孫と曰ふと、文問ふ、玄孫の子は何と申すと、田嬰曰く、吾れも能く知らぬなりと、

文曰、君用事相齊、至今三王矣、齊不加廣、而君私家富累萬金、門下不見一賢者、文聞將門必有將、相門必有相、今君後宮蹈綺縠、而士不得短褐、僕妾餘粱肉、而士不厭糟糠、今君又尚厚積餘藏、欲以遺所不知何人、而忘公家之事日損、文竊怪之、於是嬰乃禮文、使主家待賓客、賓客日進、名聲聞於諸侯、諸侯皆使人請薛公田嬰以文爲太子、嬰許之、嬰卒、謚爲靖郭君、而文果代立於薛、是爲孟嘗君、

【講義】文の曰く、父君には齊に於て政事を執り宰相の職に居らるゝこと、今に至るまで國王三代の御宇を經たり、其間齊國は父君の力にて廣くもならず、然るに父君の家は富裕にして萬金を積めり、斯く財產はあれども門下に一人の賢者あるを見ず、文の承るに將軍の門よりは必ず將軍を出し、宰相の門よりは必ず宰相を出すと、然る處今父君の奥殿に居る婦人等は綾模樣の衣服を地に曳きて歩めども、士は短き毛布をも纏ふことならず、僕妾の徒は上等米や肉を

告其母曰、勿舉也、其母竊舉生之、及長、其母因兄弟而見其子文於田嬰、田嬰怒其母曰、吾令若去此子、而敢生之、何也、文頓首因曰、君所以不舉五月子者何故、嬰曰、五月子者長與戸齊、將不利其父母、文曰、人生受命於天乎、將受命於戸邪、嬰默然、文曰、必受命於天、君何憂焉、必受命於戸、則高其戸耳、誰能至者、嬰曰、子休矣、久之文承閒問其父嬰曰、子之子爲何、曰、爲孫、孫之孫爲何、曰、爲玄孫、玄孫之孫爲何、曰、不能知也、

【講義】元來田嬰には四十餘人の子ありけるが、彼れの賤しき妾の生みし子を文と名づけたり、文は五月五日に生れけれぱ、父の田嬰は五月五日に生れたる子は不吉なりとの迷信より、無慈悲にも生の母なる妾に向つて養育しては相成らぬと申聞かせけり、生の母なる妾は田嬰に匿して內々に之を育てあげ、生長の後、文の兄弟に縋り其手引きにて文をば田嬰に逢はせし處、田嬰は妾が己れの命に背いて養育せしことを怒つて云ふやう、予は汝に此子を殺せと申附けたるに、生かし置きて育てあげたるは何故ぞと、文は低頭平身して田嬰に向ひ、一體父君が五月五日に生れし子を育て給はざるは何如なる仔細なるか、承りたしと問ひければ、田嬰の曰く、五月五日に生れたる子は、生長して丈が戸の高さになるときは父母に害を爲すと云ふことなれば育てぬなりと、文は押返して問ふ、人は天より命を受けて生るゝものにや、それとも戸より命を受けて生るゝものにやと、田嬰は其返答に窮し默然たりしが、文は進んで云ふ、命を天

行はんと欲す、可ならんかと、卜者の出づるや、人をして之を執へしむ、田忌辨明する能はず、

宣王七年、田嬰使於韓魏、韓魏服於齊、嬰與韓昭侯魏惠王會齊宣王東阿南、盟而去、明年、復與梁惠王會甄、是歲梁惠王卒、宣王九年、田嬰相齊、齊宣王與魏襄王會徐州而相王也、楚威王聞之、怒田嬰、明年、楚伐敗齊師於徐州、而使人逐田嬰、田嬰使張丑說楚威王、威王乃止、田嬰相齊十一年、宣王卒、湣王卽位、卽位三年而封田嬰於薛、

【講義】 宣王の七年、田嬰は齊の使節となりて韓魏に赴き談判の結果、此の二國は齊に服從することとなり、田嬰は韓の昭侯、魏の惠王を案內して東阿の南方に於て齊の宣王と會合せしめ、和親の盟ひを結びて歸る、翌年復梁の惠王と甄に會せしが、此の歲、梁の惠王は卒去せり、宣王の九年に田嬰は齊の宰相となる、扨齊の宣王は魏の襄王と徐州に會合して、互ひに王號を稱すべきことを約定せし處、楚の威王は之を聞いて二國の態度を不都合なりと思ひ、是れ皆田嬰の方寸より出でたる事と田嬰を怒ること甚しく、翌年楚より兵を發して齊を伐ち、其軍隊を徐州に破り、齊に使者を送り、田嬰を放逐すべきことを要求せり、然るに田嬰は張丑と云ふ者をして楚の威王に說かしめ、楚王は其の說に動かされて田嬰を逐ふことは沙汰止みとなりぬ、田嬰は齊國の宰相たること十一年にして、宣王卒し湣王位に卽けり、湣王卽位の三年に、田嬰の功勞を賞するため之を薛の地に封じて領主とせり、

初田嬰有子四十餘人、其賤妾有子名文、文以五月五日生、嬰

と云ふ、盡地力、富國の術なり、尸子、晉人、名は佼、

孟嘗君列傳第十五

孟嘗君名文、姓田氏、文之父曰靖郭君田嬰、田嬰者、齊威王少子、而齊宣王庶弟也、田嬰自威王時、任職用事、與成侯鄒忌及田忌將而救韓伐魏、成侯與田忌爭寵、成侯賣田忌、田忌懼、襲齊之邊邑、不勝亡走、會威王卒、宣王立、知成侯賣田忌、乃復召田忌以爲將、宣王二年、田忌與孫臏田嬰俱伐魏、敗之馬陵、虜魏太子申、而殺魏將龐涓、

【講義】孟嘗君は名を文と曰ひ、其姓は田氏なり、文の父を靖郭君田嬰と曰ひしが、此田嬰と云ふ人は齊の威王の季子にて、齊の宣王の脇腹の弟なり、田嬰は父なる威王の時代より官職を授かり政事を執り居けるが、成侯鄒忌並に田忌と共に兵を引率して韓を救ひ魏を伐てり、其の後成侯は田忌と君寵を爭ひしが、成侯は田忌を欺き陥れしところ、田忌は彼れの言を信じ、己れの立場に就いて恐怖心を生じ、齊の國界の都會に不意打を掛けしが、勝たずして逃亡せり、然るに丁度威王卒去し宣王位に卽くこととなり、田忌は今外國に亡命するも、是れは成侯が彼れを欺きたる結果にして、本より何等の罪なければとて復び田忌を召び戻して將軍とせり、宣王の二年に田忌は孫臏、田嬰と倶に魏を伐ちて之を馬陵に破り、魏の太子申を虜にし魏の將龐涓を打取りぬ、

【字解】靖郭君、田嬰の封號なり、成侯賣田忌、成侯人をして十金を操り市に卜せしめて云く、我れは田忌の人なり、我れ將となり三戰三勝したれば大事を

萬言而卒、因葬蘭陵、

【講義】齊國の人にて荀卿を讒言せし者ありしかば、齊に留ることならずして楚の國に赴きし處、春申君は之を蘭陵の知事に任ぜり、然るに春申君の死去と共に荀卿は其職を免ぜられたれども、前の緣故にて蘭陵に住居せり、李斯は嘗て荀卿の門に入りて弟子となりしことあり、後に秦の宰相となる、當時は腐敗せる世の中の政治にして、亡國やら亂君やら引續き、聖人の大道を遂げずして巫などの行爲を營み、瑞相を信じ、鄙むべき儒者は些細の事に拘泥すると共に、莊周等の如きは滑稽を以て風俗を亂る、荀卿は之を憤慨し、儒者、墨者道德の行ひに關する興廢を推して之を書き列ね、數萬字の書物を著して死せり、因つて之を蘭陵に葬る、

而趙亦有公孫龍、爲堅白同異之辯、劇子之言、魏有李悝、盡地力之敎、楚有尸子長盧、阿之吁子焉、自如孟子至于吁子、世多有其書、故不論其傳云、蓋墨翟宋之大夫、善守禦爲節用、或曰竝孔子時、或曰在其後、

【講義】而して趙には公孫龍と云ふ人あり、堅白同異と云ふ一種の詭辯をなし、又劇子の言論あり、魏には李悝の地力を極度まで利用するの敎へあり、楚には尸子、長盧あり、阿と云ふ土地の人なる吁子あり、孟子より吁子に至るまでは多く其著述ありて人も知る所なれば、其傳を彼れ此れ吟味することなく大體に止めぬ、蓋し墨翟は宋國の大夫にして、其才は防戰守城の術に長じ、又國家の用度を節減するに妙を得たり、或人は墨子は孔子と時代を同じうせりと曰ひ、或人は孔子より後れたる人なりと云ふ、

【字解】堅白同異、堅白とは堅と白とを分別するを謂ふ、同異とは同者をして異ならしめ、異者をして同ならしむるを謂ふ、卽ち鷺を烏とし、烏を鷺とし、強辯人を屈する術なり、劇子、劇孟、劇辛のことなるべし

也、文具難施、淳于髡久與處、時有得善言、故齊人頌曰、談天衍、雕龍奭、炙轂過髡、田駢之屬、皆已死、齊襄王時而荀卿最爲老師、齊尙脩列大夫之缺、而荀卿三爲祭酒焉、

【講義】荀卿は趙國の人にして、年五十歳の時始めて學問を以て齊に游べり、齊の諸學士の中に於て騶衍の術は迂遠疎大にして其辯は頗る幅廣く、騶奭は文飾具はれども實用に適せず、淳于髡は、此の人と永い間一緒に居るときは、時に善言を得ることあり、故に齊國の人は以上の三人を頌贊して曰く、天を話す者は騶衍、龍の彫物の如きは奭、車の轂の壺を炙るが如きは髡なりと、然るに此の人々を始めとして田駢の徒が皆死に果てゝ、齊の襄王の時に至りては荀卿が最も老先生なりき、齊に於ては荀卿を引上げて大夫の缺員を補ひ、それより荀卿は三たび祭酒の官となれり、

【字解】荀卿、名は況、卿と云ふは時人推尊して斯く號したる也、談天、騶衍の言ふ所は五德の終始或は天地の廣大なることなれば談天と云ふ、雕龍、騶奭は衍の文采を習ひ之を飾りたれば、龍の模樣を彫刻するが如しと謂ふなり、炙轂過、轂は車のこしき、過は膏の壺なり、髡の智盡きざること宛も轂輠を炙れば膏盡きずして流るゝが如しと謂ふなり、過は輠と通ず、

齊人或讒荀卿、荀卿乃適楚、而春申君以爲蘭陵令、春申君死而荀卿廢、因家蘭陵、李斯嘗爲弟子、已而相秦、荀卿嫉濁世之政、亡國亂君相屬、不遂大道、而營於巫祝、信禨祥、鄙儒小拘、如莊周等、又猾稽亂俗、於是推儒墨道德之行事興壞、序列著數

三夜も續きて倦まざりき、惠王は大臣宰相の位を以て淳于髡を待遇せんと欲したれども、彼は辭退して梁を去ることとなりしかば、安樂に乘らる丶四頭引の馬車、絹の卷物に璧を添へたると百鎰の黄金とを餞別に賜はれり、淳于髡は其後生涯仕宦せざりきとぞ、

○愼到趙人、田駢接子齊人、環淵楚人、皆學黃老道德之術、因發明序其指意、故愼到著十二論、環淵著上下篇、而田駢接子皆有所論焉、

【講義】愼到は趙國の人にして、田駢、接子は齊國の人、環淵は楚國の人なり、何れも黃帝、老子の道德術を學び、其學理を發明して、旨意をば書き列べぬ、されば愼到は十二論を著し、環淵は上下篇を著し、田駢、接子も皆論を著す所ありき、

○騶奭者齊諸騶子、亦頗采騶衍之術以紀文、於是齊王嘉之、自如淳于髡以下、皆命曰列大夫、爲開第康莊之衢、高門大屋尊寵之、覽天下諸侯賓客、言齊能致天下賢士也、

【講義】騶奭は齊の騶子の中の一人なるが、此の人も亦多く騶衍の術を采り用ひて文を書けり、齊王は之を稱美し、淳于髡より以下皆名づけて列大夫と曰ひ、彼等の爲に邸宅を大通りに造り、門大に屋根高き、堂々たる住居を與へて之を厚遇せり、天下諸侯の賓客を見て批評する者は、皆齊が能く天下の賢士を集めたることを言ふ、

【講義】康莊之衢、四達を衢と曰ひ、五達を康と曰ひ、六達を莊と曰ふ、

○荀卿趙人、年五十始來游學於齊、騶衍之術迂大而閎辯、奭

試、亦會先生來、寡人雖屏人、然私心在彼、有之、後淳于髡見、壹語連三日三夜無倦、惠王欲以卿相位待之、髡因謝去、於是送以安車駕駟、束帛加璧、黄金百鎰、終身不仕、

【講義】 淳于髡は齊國の人なり、知見博くして記憶力強く、學問は是れぞと主としたる者なく、其君主を諫むる說き方に就いては晏嬰の人となりを慕ひ、斯くて相手たる君主の意志に順應し、其顏色を察することを務めとせり、梁の客分の中に淳于髡を惠王に取持ちて謁見せしめたる者あり、惠王は近侍を遠ざけ人拂ひをなして己れ一人となり、二度迄も謁見に及びたれども、淳于髡は終に一言も陳べずして退出に及びしかば惠王は不思議に思ひ、彼を紹介せし者を責めて云ふ樣、卿は淳于髡を稱して古への賢宰相管仲、晏子も尙及ばずと申しゝが、此方に謁見するに及び、彼れ一言も陳べざるが故に此方何の得る所もなかりき、何と此方を以て意見を聞かすに足らざる人物となすことなるか、何如なる譯ならんと、紹介せし者此事を淳于髡に傳へて仔細を問ひけるに、淳于髡曰く、そは勿論なり、拙者最初王に謁見せし時、王は心中に馬に乘つて馳せ廻ることを考へ居給へり、二度目に謁見せし時、王は一心中に音曲の事を考へ居給へり、斯かる折に何を言上するも御耳に入るまじと思ひたれば、それゆゑ沈默せし次第なりと、紹介せし者淳于髡の申したる事を委細王に報告せしかば王は大に駭いて曰く、淳于先生は誠に聖人にて、恐るべき眼力なり、最初淳于先生の來りし時、善き馬を獻上せし者あり、此方未だ之を視るに及ばざる中に先生來り、心殘りしたれば謁見の際も其方に氣を取られたり、二度目に先生の來りしときは歌を謠ふ者を獻上せし人あり、未だ其の伎倆を試みざる中先生來り、心殘りしたれば謁見の際も其方に氣を取られぬ、此方人を屏けて面會する程にしたれども、心が馬と音樂者とに在りしことは事實なりと、其後淳于髡が謁見せし時は惠王も餘念なく傾聽せしかば、一件の話三日

が趙を伐たんとするに反對せし意見なり、方枘、四角の栓、圜鑿、圓き孔、負鼎、伊尹料理人となつて湯に取入りたること、飦、飼ふなり、儻、モシクハと訓ず、

自騶衍與齊之稷下先生、如淳于髡、愼到、環淵、接子、田駢、騶奭之徒、各著書言治亂之事以干世主、豈可勝道哉、

【講義】騶衍より、齊の稷門の下に集まれる學者の淳于髡、愼到、環淵、接子、田駢、騶奭の徒の如き者に至るまで、各〻書物を著はし治亂の事を論じ、當時の君に仕官を求む、然るに大賢孟子の如きを用ひざりしは、何んと言ふに忍ぶべけんや、

【字解】稷下、稷は齊の城門、齊の學士多く稷門の下に集まる、

○淳于髡齊人也、博聞彊記、學無所主、其諫說慕晏嬰之爲人也、然而承意觀色爲務、客有見髡於梁惠王、惠王屛左右、獨坐而再見之、終無言也、惠王怪之、以讓客曰、子之稱淳于先生、管嬰不及、及見寡人、寡人未有得也、豈寡人不足爲言邪、何故哉、客以謂髡、髡曰、固也、吾前見王、王志在驅逐、後復見王、王志在音聲、吾是以默然、客具以報王、王大駭曰、嗟乎、淳于先生誠聖人也、前淳于先生之來、人有獻善馬者、寡人未及視、會先生至、後先生之來、人有獻謳者、未及

牛鼎之意乎、

【講義】 騶子が諸侯の國々を訪問して尊敬せられたるとは此の如し、何どして仲尼が陳蔡の間に於て飢ゑたる色あり、孟軻が齊梁にて困苦せしと同じからんや、是れ奇怪の説を以て諸侯に取入りたるが爲に外ならず、故に武王は仁義を以て殷の紂王を討つて天下の王となり、伯夷は其事を不義として餓死するまでも周の扶持米を受けず、衞の靈公は孔子に戰陣の方を尋ねられしも、孔子は答へず、又梁の惠王が謀を運らして趙を征伐せんとせし時、孟軻は昔し周の太王が邠を去りたることを引いて之を喩したり、此の伯夷と云ひ、孔子と云ひ、孟子と云ひ豈に世俗に阿り道理を捨て置いて專ら先方の氣に入らんとする心あらんや、四角の栓を手に持ちて之を圓形の穴に入れんと欲するも何として入るべきや、或人の云ふやう、昔し伊尹は鼎を背に負ふが如き賤しき身分を以て殷の湯王を勵まして王業を成さしめ、百里奚は車の下にて牛を飼ひ居たる者なるに、繆公は之を用ひて霸業を成せり、されば此等は先づ相手に叶ふやうなる手段を取り、然る後大道に引き入れたる者にして、伊尹の鼎を負ひ百里奚の牛を飼ひたるは手始めの行爲なりと、されば騶衍は、其言ふ所は正道を外れ居れども、或は亦伊尹の鼎、百里奚の牛同樣に之を手段となすの意にてありしならんか、

【字解】 菜色、菜の如く蒼ざめたる顏色、同乎哉、此れは嘆息の語なり、其游諸侯より以下の意味を敷衍すれば左の如し、曰く、仲尼や孟子は先生の道に法り仁義の化を行ひたるに、尚且つ菜色あり困窮するを免れざりしに、騶衍は詭怪の辯を以て諸侯を惑はすに拘はらず、其禮遇せらるゝと此の如きは嘆息の至りなるかなと、太王去邠、太王が邠を去りし故事は孟子が滕の文公に對して引ける故事なるに、此には梁の惠王趙を攻めんを謀るとあり、孟子と合はず、但し本文に由つて意味を求むれば左の如し、太王は狄の爲に攻められたる時、狄の欲する所は土地なれば此れを狄に與ふれば、戰爭のため住民を苦ましむるとなくして濟むべしと、數代住み慣れたる邠を退去せり、己れの土地すら人民を思ひて他に與ふる者あるに他國を取らんとするは宜しからずとて、梁の惠王

ども本と空漠なる議論なるが故に、後に至れば之を行ふこと能はず、尊信者も少くなれり、

【字解】裨海、小海なり、濫、水の汎濫するが如く引締りなきを謂ふ、

是以騶子重於齊、適梁、惠王郊迎執賓主之禮、適趙、平原君側行襒席、如燕、昭王擁彗先驅、請列弟子之座而受業、築碣石宮、身親往師之、作主運、

【講義】されど兎に角一時は騶子の評判高く、齊の國に於て尊重せられ、其れより梁に赴きし處、梁の惠王は態々郊外まで出迎へて主客對等の禮を執り、尋いで趙に赴きし處、彼の名聲赫々たる平原君は騶子に接するに身を側てゝ歩を運び、衣の裾にて席の塵を拂ふ程に敬虔の態度を取り、燕に往けば、燕の昭王帚を擁して前導をなし、門人の席に列し教へを受けんことを乞ひ、彼れの旅館として碣石宮を築き、自分の方より此の處へ出張して騶子を師とせしが、騶子は此の際に主運と云ふ書物を作れり、

【字解】襒席、襒は拂ふなり、彗、箒なり、主運、篇名、

其游諸侯、見尊禮如此、豈與仲尼菜色陳蔡、孟軻困於齊梁同乎哉、故武王以仁義伐紂而王、伯夷餓不食周粟、衞靈公問陳而孔子不答、梁惠王謀欲攻趙、孟軻稱太王去邠、此豈有意阿世俗苟合而已哉、持方枘欲内圜鑿、其能入乎、或曰、伊尹負鼎而勉湯以王、百里奚飯牛車下而繆公用霸、作先合、然後引之大道、騶衍其言雖不軌、儻亦有

國の政治宜しきを得、瑞相が之に應ずることを立證す、彼れの説にては、儒者の謂はゆる中國は天下を八十一に割りたる其一分に過ぎず、

【字解】大雅、雅は德の正しきなり、君子を謂ふ、黎庶、天下萬民を謂ふ、陰陽消息、陰陽二氣の消長變化すること、禨祥、吉凶の前兆、窈冥、奥深くして暗きこと、天地剖判、天と地と二つに分るゝこと、五德、木火土金水の五行の德を謂ふ、

中國名曰赤縣神州、赤縣神州內、自有九州、禹之序九州是也、不得爲州數、中國外如赤縣神州者九、乃所謂九州也、於是有裨海環之、人民禽獸莫能相通者、如一區中者、乃爲一州、如此者九、乃有大瀛海環其外、天地之際焉、其術皆此類也、然要其歸、必止乎仁義節儉君臣上下六親之施、始也濫耳、王公大人、初見其術、懼然顧化、其後不能行之、

【講義】中國は名づけて赤縣神州と曰ふ、此赤縣神州の內に自ら九州あり、禹が九州を整頓したりと云ふは卽ち神州の中の九州のことにて、是れは州の數には入らざるなり、中國の外に赤縣神州と同樣なる國が九つあり、是れこそ謂はゆる九州なれ、此の九州に於ては小海あつて其界を環り、人民も禽獸も他の州と往來する者なし、凡そ一區中の如き者が卽ち一州を爲す、此の如き者九あり、此九州に於ては大海が外部を環り天地の界をなすと、騶衍の術は皆此の類なり、然れども彼れの説の歸着する所を槩括すれば、必ず仁義節儉君臣上下六親に施す道なれども、君主に說く所の發端は不節制なり、王公大人初めて彼れの術に出遇ひしときは懼然として驚き、終に面白味を感じて其說に引入れられて同化するに至る、然れ

者所共術、大並世盛衰、因載其禨祥度制、推而遠之、至天地未生、窈冥、不可考而原也、先列中國名山大川通谷禽獸、水土所殖、物類所珍、因而推之、及海外人之所不能睹、稱引天地剖判以來五德轉移、治各有宜、而符應若茲、以爲儒者所謂中國者、於天下乃八十一分居其一分耳、

【講義】　孟子より後に騶子の一派あり、齊に三名の騶子あり、一番始めの騶子は騶忌と曰ひ、是れは琴を彈くことが上手なる所より威王に仕を求めて用ひられ、此の關係より政事にも預る身分となり、諸侯に取り立てられて成侯と曰へり、而して齊國宰相の印を受けたるが、此れは孟子より以前の人なりき、第二番目の騶子は騶衍にして、此れは孟子より後の人なり、騶衍は當時一國の君主たる者が益々淫逸奢侈に耽り、君子が先づ德を以て己が身を整へ、其れより推して一般の人民に及ぼすが如くに德を尊ぶ能はざることを目擊し、眞面目の議論は勢力を得難しと思ひ、新說奇說を以て人の耳目を聳動せんとて、深く陰陽二氣の消長變化を觀察して怪迂之變、終始大聖之篇等の十餘萬字もある書物を著せしが、其語は弘大不常識にして、必ず最初小なる物に就いて實驗を試み、其れより推して之を擴大し、際限なき事にまで說き至る、卽ち先づ現代より上は黃帝時代に溯りて敘述し、大體世の盛衰に隨つて學者の共に術とする所のものを說き、因つて其の吉凶の兆たる制度を載せ、推して之を遠隔の世に及ぼし、天地も未だ生ぜず、幽暗にして考究することの出來ざる時代に至る、先づ中國の名山大川又は廣き谷、又は禽獸、水陸に生殖する所の珍奇とすべき物質を載せ、其れより推して人の未だ目に觸れざる海外の物品に及び、天地の開闢以來、水火木金土の五行の德が次第に轉換推移するに隨つて、

萬章之徒、序詩書、述仲尼之意、作孟子七篇、

【講義】　孟軻は鄒の人にして學業を子思の門人に受けたるが、其學びたる所の道已に理會體得して差支へなきまでに至りしかば、齊に游歴して宣王に事へたり、然れども宣王は孟子の主義として說きし所の王道を用ふる能はざりしかば、此の處を見限りて梁に赴けり、然るに梁の惠王も孟子の言ふ所を行ひ切れず、彼れの議論をば迂遠にして現代の事情と隔たり、役に立たぬものと考へたり、此の時に當り秦は商君を用ひて國を富まし兵を强くし、楚魏は吳起を用ひて戰に勝ち敵を弱め、齊の威王其子の宣王は孫子、田忌の徒を用ひて國勢を張りしかば、諸侯は東方を向いて齊に參朝すると云ふ有樣にして、天下何れの國も合從連衡に力を用ひ、敵の城を攻め敵の國を伐つことを上策と心得る時代なるに、孟軻は反つて軍國主義と反對なる唐虞三代の德を述べたるが故に誰れも相手にする者なく、何處に往きても氣に入られず、主義の行はるゝ見込みなし、已むを得ず活社會を退いて、其門人なる萬章の徒と詩經、書經の次第を調べ、仲尼の意を傳へて孟子と云ふ書物七篇を作れり、

【字解】　鄒、魯の地名、又邾と云ふ、孟軻、軻は名、字は子輿、

其後有騶子之屬、齊有三騶子、其前騶忌、以鼓琴干威王、因及國政、封爲成侯而受相印、先孟子、其次騶衍、後孟子、騶衍睹有國者益淫侈、不能尚德若大雅整之於身、施及黎庶矣、乃深觀陰陽消息、而作怪迂之變、終始大聖之篇、十餘萬言、其語閎大不經、必先驗小物、推而大之、至於無垠、先序今以上至黃帝、學

孟子荀卿列傳第十四

太史公曰、余讀孟子書、至梁惠王問何以利吾國、未嘗不廢書而歎也、曰、嗟乎、利誠亂之始也、夫子罕言利者、常防其原也、故曰、放於利而行、多怨、自天子至於庶人、好利之弊、何以異哉、

【講義】太史公云ふ、予は孟子の著はしたる所の書を讀み、梁の惠王は孟子に向ひ、如何なる奇策妙計を以て吾が國を利せんとするかと問ひたる處に至り、書物を下に置きて嘆息せざることを得ざりき、予は嘆息して自ら語るやう、扨も扨も利と云ふものは誠に世の亂れの根源なり、孔夫子が利のことをば罕に仰せられしは亂の原因を防がれたるなり、故に孔夫子は利を本位として萬事之に依り傍ひて行ふときは、人の利を害する結果、人より多く怨まるゝものなりと仰せられぬ、上は天子の尊きより下は庶人の卑きまで利を好むの弊は同一にして、何を以て異る所あらんや、

【字解】放、ヨルと訓ず、

孟軻鄒人也、受業子思之門人、道既通、游事齊宣王、宣王不能用、適梁、梁惠王不果所言、則見以爲迂遠而闊於事情、當是之時、秦用商君、富國彊兵、楚魏用吳起、戰勝弱敵、齊威王宣王用孫子田忌之徒、而諸侯東面朝齊、天下方務於合從連衡、以攻伐爲賢、而孟軻乃述唐虞三代之德、是以所如者不合、退而與

ぼせり、陳勝が秦に叛いて亂をなすに方り、秦は王翦の孫の王離をして趙を打たしめ、王離は趙王及び張耳を鉅鹿の城に圍む、此時或人は樂觀說を立てゝ云ふ、王離は秦の名將なり、今强き秦の軍隊に將として急拵への趙を攻むるが故、之を擧ぐるは必定なりと、客の曰く、さに非ず、夫れ將となつて三代に至る者は必ず敗る、必ず敗るゝ所以は何ぞや、其殺伐する所多きを以て、其子孫が其不吉の結果を受くるなり、今王離は已に三代目の將なれば敗北すべしと、然るに幾もなく項羽は趙を救ひて秦軍を擊ち、果して王離を俘虜とせり、而して王離の率ゐたる軍隊は遂に諸侯に降れり、

太史公曰、鄙語云、尺有所短、寸有所長、白起料敵合變、出奇無窮、聲震天下、然不能救患於應侯、王翦爲秦將、夷六國、當是時、翦爲宿將、始皇師之、然不能輔秦建德、固其根本、偷合取容、以至圽身、及孫王離、爲項羽所虜、不亦宜乎、彼各有所短也、

【講義】 太史公曰く、鄙俗の語に、一尺も短き所あり、一寸も長き所ありと云ふ、白起は敵を見積り事變に應じ、奇計を出すこと窮りなく、其名は天下を震動せり、然れども應侯より受くべき禍を防ぐこと能はざりき、王翦は秦の將となり六國を平げたるが、此の時に當り、翦は秦の故參の將軍にて始皇は之を師とせり、然るに秦を輔けて德を建て其根本を固くする能はず、不合理的に調子を合せて君主の機嫌を取り、以て其身を終れり、孫の王離に及び、項羽に虜にせられたるは亦當然ならずや、彼れ何れも短き所あるなり、

【字解】 圽、歿なり、

破定燕齊地、秦始皇二十六年、盡幷天下、王氏蒙氏功爲多、名施於後世、

【講義】此の如く十分士卒に手當てをなし、餘程日數も過ぎたる後、王翦は人を軍中に遣はし兵卒等に尋ねさせけるは、何か樂み事を爲し居るかと、答へて云ふ、何れも無事に苦み、早く一戰爭あれかしと、投石、超距を爲しつゝありと、王翦は此の報告を聞いて曰く、士卒の意氣此の如くなれば最早戰爭に差支へなしと、扨荊よりは屢〻戰ひを仕向けたれども、秦兵は壘壁に立籠り出でゝ戰はざりければ、荊は兵を率ゐて東に歸らんとす、王翦は敵の厭倦を待居たる所なりし故、直ちに兵を擧げて之を追ひ、壯士をして攻擊せしめ、大に荊の軍を破りて蘄の南に至り、其將項燕を殺せり、荊の兵は之が爲に敗走せしかば、秦は勝に乘じて荊の地の城邑を征服し、一年餘を過ぎて荊王負芻を虜にし、竟に荊の地を平げて郡縣となせり、

【字解】投石、機械を以て重さ十二斤の石を飛ばし三百步の距離に至る、超距、躍り上るなり、

秦二世之時、王翦及其子賁皆已死、而又滅蒙氏、陳勝之反秦、秦使王翦之孫王離擊趙、圍趙王及張耳鉅鹿城、或曰、王離秦之名將也、今將彊秦之兵、攻新造之趙、擧之必矣、客曰、不然、夫爲將三世者必敗、必敗者何也、以其所殺伐多矣、其後受其不祥、今王離已三世將矣、居無何、項羽救趙擊秦軍、果虜王離、王離軍遂降諸侯、

【講義】秦の二世の時に王翦及び其子の賁は何れも已に死去し、良將の無くなりし上に秦は又蒙氏を亡

を信ぜず、今秦全國の兵士を引拔きて專ら我れに委ぬることとなれば、疑心を抱くやも測り難し、我れ多く田宅を請ひ、子孫の產業を心に掛くるやうに見せ掛くるときは、別に大志なき者として心を許すべきも、若しも斯くして自ら堅固に爲し置かずば、秦王をして我れを疑はしむるに至らんと、

【字解】 怚、粗なり、

王翦果代李信擊荊、荊聞王翦益軍而來、乃悉國中兵以拒秦、王翦至、堅壁而守之、不肯戰、荊兵數出挑戰、終不出、王翦日休士、洗沐而善飮食撫循之、親與士卒同食、

【講義】 王翦は豫定の如く李信に代り兵に將として荊を擊つ、荊にては王翦が李信の時より兵數を益し、大擧して來ると聞きければ、國中の兵を殘らず徵發して秦を拒ぐ、然るに王翦は敵を攻めに行きながら壘壁を堅固にして之を守り、戰ふことを肯んぜず、荊の方より何度となく戰ひを仕掛け來れども、終に出でて應戰せず、王翦は每日兵士に休息を命じ、髮を洗ひ入浴させ、飮食を豐富に與へ、懇ろに之を勞り、自分は士卒と同じ食物を用ひ勞苦を共にせり、

久之、王翦使人問軍中、戲乎、對曰、方投石超距、於是王翦曰、士卒可用矣、荊數挑戰、而秦不出、乃引而東、翦因擧兵追之、令壯士擊、大破荊軍、至蘄南、殺其將軍項燕、荊兵遂敗走、秦因乘勝略定荊地城邑、歲餘、虜荊王負芻、竟平荊地、爲郡縣、因南征百越之君、而王翦子王賁、與李信

謝して云ふ、無用無用、將軍復び然樣なる言を申されずに我が賴みを受入れられよと、王翦曰く、大王に於て是非とも臣を用ひ給ふ以上は、六十萬人に非ざれば不都合なりと、始皇曰く、唯將軍の計に從ふ外あらじと、是に於て王翦は兵六十萬人を引率する事となれり、

【字解】頓舍、宿泊の義、

始皇自送至王上、王翦行請美田宅園池甚衆、始皇曰、將軍行矣、何憂貧乎、王翦曰、爲大王將、有功終不得封侯、故及大王之嚮臣、臣亦及時以請園池、爲子孫業耳、始皇大笑、王翦既至關、使使還請善田者五輩、或曰、將軍之乞貸、亦已甚矣、王翦曰、不然、夫秦王怚而不信人、今空秦國甲士、而專委於我、我不多請田宅爲子孫業、以自堅、顧令秦王坐而疑我邪、

【講義】王翦が出陣せんとするとき、始皇は自身送りて灞上に至れり、然るに王翦は途中に於て始皇に向ひて、上等の田畝宅地庭園などを請求せしこと甚だ多かりしかば、始皇餘りに其慾の深きに驚き、王翦に謂ふやう、將軍行けよ、何ぞ貧を憂ふることあらんと、王翦曰く、大王の將となり、戰功ありたればとて諸侯に封ぜらるゝ見込みなければ、大王が臣に心を寄せらるゝ此場合に於て園池を請ひ、子孫の業を爲さんと欲するのみと、始皇は其現金なる話に興を催して大に笑へり、王翦は始皇に別れ既に函谷關に至りしが、使を都に立還らしめて善き田地を請はせけること五回に及びければ、或人の云ふやう、將軍の君主に物を押請ひせらるゝことは隨分手ひどき事なりと、王翦曰く、さにあらず、夫れ秦王は氣暴くして人

李信攻平與、蒙恬攻寢、大破荊軍、信又攻鄢郢破之、於是引兵而西、與蒙恬會城父、荊人因隨之、三日三夜不頓舍、大破李信軍、入兩壁殺七都尉、秦軍走、始皇聞之大怒、自馳如頻陽、見謝王翦曰、寡人以不用將軍計、李信果辱秦軍、今聞荊兵日進而西、將軍雖病、獨忍弃寡人乎、王翦謝曰、老臣罷病悖亂、唯大王更擇賢將、始皇謝曰、已矣、將軍勿復言、王翦曰、大王必不得已用臣、非六十萬人不可、始皇曰、爲聽將軍計耳、於是王翦將兵六十萬人、

【講義】李信は平與を攻め、蒙恬は寢を攻め、大に荊の軍を破る、李信は又鄢、郢を攻めて之を破り、兵を引連れて西方に赴き、蒙恬と城父に會見せしが、是れ多分今後の作戰に就いて評議を凝らす爲なるべし、然る處荊の兵は李信の迹を追ひ來り、三日三夜も營舍することなく一揉に攻寄せて大に李信の軍を破り、二个所の壘壁に入り七都尉を殺せしかば、秦軍は一溜もなく敗走せり、始皇は之を聞いて大に李將軍の腑甲斐なきを怒り、自ら馬を馳せて頻陽に赴き、王翦の佗住ひを尋ね、彼れに逢ひて謝するやう、此の方は將軍の計を用ひざりしため、李信は果して秦をして敗軍の恥辱を受けしめたり、今聞く所によれば、荊の兵は日に進んで西に向ふと、此の際將軍の力に賴るに非ざれば勝利を得べからず、將軍病氣なりと雖も、よもや此の方を見棄てはせじと、王翦謝して曰く、老臣は病み疲れて思慮も錯亂致し居れば、迚も御役に立つべくもあらず、大王更に賢將を擇び給へと、始皇

撃ち、魏王降る、遂に魏の地を平定せり、

秦始皇既滅三晉、走燕王、而數破荊師、秦將李信者、年少、壯勇、嘗以兵數千逐燕太子丹、至於衍水中、卒破得丹、始皇以爲賢勇、於是始皇問李信、吾欲攻取荊、於將軍度用幾何人而足、李信曰、不過用二十萬人、始皇問王翦、王翦曰、非六十萬人不可、始皇曰、王將軍老矣、何怯也、李將軍果勢壯勇、其言是也、遂使李信及蒙恬將二十萬、南伐荊、王翦言不用、因謝病歸老於頻陽、

【講義】 秦の始皇は巳に韓趙魏の三晉を滅ぼし、燕王を走らせ、屢、荊の兵を打破れり、秦の將に李信と云ふ者あり、年少くして强壯勇武の聞えあり、嘗て數千の兵を以て燕の太子丹を逐ひ衍水の中に至り、竟に太子丹の軍を破りて太子を手に入れければ、始皇は彼れを以て賢勇とせり、今荊を撃つ場合に至り、始皇は李信に問ひけるは、吾れ荊を攻め取らんと欲するが、將軍の見込みにては何程の兵數を用ふれば十分なりやと、李信答へて云ふ、二十萬人にて事足ると、始皇は王翦の意見を尋ねし處、王翦は六十萬人を用ふるに非ざれば不可能なりと答へければ始皇曰く、王將軍は年寄りぬ、荊を攻むるに六十萬の兵を要すとは何と申す臆病なることや、李將軍は吾れ平生より勢ひ壯勇なる者と思ひしが、吾が目鏡に違はず彼れの申す所は是なりとて、遂に李信及び蒙恬をして二十萬の兵に將として、南下して荊を伐たしめたり、王翦は己れの建言用ひられざりければ、病氣を申立て故郷の頻陽に歸りて隱居せり、

應侯並に群臣と議して云ふやう、白起が左遷の命を蒙るや其意は怏々として服せず、種々怨みがましき言葉を出せりと、秦王は一層彼れを憎み、使者を以て彼れに劍を賜ひ、自殺せしむ、武安君白起は手に其劍を引き寄せ、自ら首刎ねんとせしとき言ひけるは、我れ天に對し何如なる罪を犯して此の如き場合に至りしやと、稍々久しくして又曰く、我れは固より死すべき筈なり、曩に長平の戰ひに於て趙の士卒降參せし者四十萬人ありしが、我れは詐りの計を設け、盡く之を穴埋にしたることあり、此の罪障は十分死するに足るとて遂に自殺せり、武安君白起の死したるは秦の昭王五十年の十一月なり、彼れは死せりと雖も其罪に非ざりければ、秦の人民は皆之を憐み、地方の村里に於てそれぞれ白起を祭祀せり、

【字解】杜郵、杜と謂へる驛舍なり、

○王翦者、頻陽東鄉人也、少而好兵、事秦始皇、始皇十一年、翦將攻趙閼與、破之、拔九城、十八年、翦將攻趙歲餘、遂拔趙、趙王降、盡定趙地爲郡、明年、燕使荊軻爲賊於秦、秦王使王翦攻燕、燕王喜走遼東、翦遂定燕薊而還、秦使翦子王賁擊荊、荊兵敗、還擊魏、魏王降、遂定魏地、

【講義】王翦は頻陽の東鄉の人なり、少年の時より戰爭を好み、秦の始皇に事へたり、始皇即位の十一年に翦は將軍となり趙の閼與を攻めて之を破り、九城を拔けり、十八年に翦は又將軍となつて趙を攻め、一年餘にて趙を拔き趙王は降參に及ぶ、遂に盡く趙の地を平定して秦の郡とせり、翌年燕より荊軻を遣はし、始皇を殺害せしめんとせしとあり、秦王は其罪を正さんがため王翦をして燕を攻めしめたる處、燕王喜は防戰叶はずして遼東に逃れぬ、是に於て翦は遂に燕の薊を平定して還る、秦は王翦の子の賁をして荊を擊たしめしに、荊の兵敗走せしかば還つて魏を

れの武略を恃み自ら出陣すべき由を命じたれども受けず、應侯をして賴ましめたれども終に辭して行かず、其儘病氣を申立て引籠り居たり、秦王は武安君白起が出征を辭したるに由り、王齕をして王陵に代らしめ、之をば邯鄲征伐の大將とせり、八九个月の間邯鄲を圍みたれども拔く能はず、其内楚よりは春申君をして魏の公子と數十萬の兵を率ゐて秦の軍を攻めさせ、之がため秦の軍は多數の死傷を出し兵員を失へり、武安君白起は曾て敗軍を豫言せし處、果して適中せしかば人に語つて云ふやう、秦は臣の計を聽かずして無理なる戰爭をなしたるが、今何如にぞやと、秦王は彼れが敗軍を氣味善く思ふと聞き大に怒り、强ひて武安君白起を引出して出征せしめんとせし處、武安君白起は遂に病氣重しと稱して之を辭す、應侯より請求に及びしも起たず、是に於て武安君の爵を取上げて士となし、之を陰密に遷せり、然るに武安君は病氣の爲に未だ其の地に向ひて出立するに至らず、其れより三个月を經て列國の同盟軍は秦を攻むること急にして、秦軍は每度退却に及び、援兵を催促の使者日に至る、秦王人をして白起を逐ひ拂はせ、咸陽中に留まることを得ざらしめたり、

武安君既行、出咸陽西門十里、至杜郵、秦昭王與應侯群臣議曰、白起之遷、其意尚怏怏不服、有餘言、秦王乃使使者賜之劍自裁、武安君引劍將自剄曰、我何罪于天、而至此哉、良久曰、我固當死、長平之戰、趙卒降者數十萬人、我詐而盡阬之、是足以死、遂自殺、武安君之死也、以秦昭王五十年十一月、死而非其罪、秦人憐之、鄕邑皆祭祀焉、

【講義】武安君白起は已に出立に及び、咸陽城の西門を出づること十里にして杜郵に至る、秦の昭王は

を發し、五大夫の王陵をして趙の邯鄲を攻めしめたり、此の時武安君白起は會、病氣にて、出陣すること叶はずして都に留まりぬ、四十九年の正月、王陵は邯鄲を攻めし處、勝利思ふが如くならず、秦よりは益、兵を發して王陵に加勢せり、然れども王陵の軍は難戰にして五人の將校を失へり、折柄武安君白起の病氣全快に及びしかば、秦王は彼れをして王陵に代り邯鄲攻めの總大將たらしめんとせしに、武安君は意見を吐いて云ふやう、邯鄲は實に未だ攻め易からず、其內列國の援兵が來らんとする恐れあり、彼れ列國は秦を恨むこと一朝一夕に非ず、折あらば秦に打撃を與へんとす、然るに今秦は趙の長平の軍を破りたりと雖も、此の戰ひに秦の士卒の死亡せし者も亦半に過ぎ、國內の兵員甚だ缺乏して空虛なり、斯かる次第なるに遠く山や河を横斷して他國の都を取らんとするは無謀なり、若し趙が內より列國の援兵に應じ、列國の援兵は外に在つて秦兵を攻むるならば、秦兵の破るゝは必定なれば宜しからずと、

秦王自命不行、乃使應侯請之、武安君終辭、不肯行、遂稱病、秦王使王齕代陵將、八九月、圍邯鄲、不能拔、楚使春申君及魏公子將兵數十萬攻秦軍、秦軍多失亡、武安君言曰、秦不聽臣計、今如何矣、秦王聞之怒、彊起武安君、武安君遂稱病篤、應侯請之不起、於是免武安君爲士伍、遷之陰密、武安君病、未能行、居三月、諸侯攻秦軍急、秦軍數却、使者日至、秦王乃使人遣白起、不得留咸陽中、

【講義】武安君白起は邯鄲を攻むることを不利とせしかば無論出征の任に當らざりしが、秦王は偏へに彼

を圍み、上黨を惱ましたり、上黨の民は反つて趙の爲に力を出し、秦の民となるを好まざること久し、今秦が趙を亡ぼすときは、北部は燕に入り、東地は齊に入り、南方は韓魏に入るべし、さすれば君の得らるゝ所の民は幾何もあらじ、故に地を割かしめて和議を行ひ、武安君白起に趙を亡ぼすの功を立てさせぬが一策なりと、

【字解】周邵、周公旦と召公奭となり、

於是應侯言於秦王曰、秦兵勞、請許韓趙之割地以和、且休士卒、王聽之、割韓垣雍趙六城以和、正月、皆罷兵、武安君聞之、由是與應侯有隙、其九月、秦復發兵、使五大夫王陵攻趙邯鄲、是時武安君病、不任行、四十九年正月、陵攻邯鄲少利、秦益發兵佐陵、陵兵亡五校、武安君病愈、秦王欲使武安君代陵將、武安君言曰、邯鄲實未易攻也、且諸侯救日至、彼諸侯怨秦之日久矣、今秦雖破長平軍、而秦卒死者過半、國內空、遠絕河山而爭人國都、趙應其內、諸侯攻其外、破秦兵必矣、不可、

【講義】蘇代右の如く說きければ、應侯は秦王に言上するやう、秦の兵も大分疲勞に及びたれば韓趙より土地を割き和睦を乞ふを許し、暫時士卒を休ませ申さんと、秦王其の言に從ひ、韓の垣雍と趙の六城を割かしめて和睦に及び、正月何れも兵を引上げたり、武安君白起は應侯の勸めにより和議の成りたる由を聞き、己れの武功を妨害せられたることを恨み、此れより應侯と仲惡しくなりぬ、其九月に秦は復兵

めたるなり、

韓趙恐、使蘇代厚幣說秦相應侯曰、武安君擒馬服子乎、曰然、又曰、卽圍邯鄲乎、曰然、趙亡則秦王王矣、武安君爲三公、武安君所爲秦戰勝攻取者七十餘城、南定鄢郢漢中、北擒趙括之軍、雖周邵呂望之功、不益於此矣、今趙亡、秦王王、則武安君必爲三公、君能爲之下乎、雖無欲爲之下、固不得已矣、秦嘗攻韓、圍邢丘、困上黨、上黨之民、皆反爲趙、天下不樂爲秦民之日久矣、今亡趙、北地入燕、東地入齊、南地入韓魏、則君之所得民亡幾何人、故不如因而割之、無以爲武安君功也、

【講義】韓趙は此勢ひを見て恐れをなし、蘇代に手厚き贈物を持たせ秦の宰相應侯に說かしむるやう、武安君白起は趙の馬服の子を擒にせしかと、應侯然りと答へしかば、又曰く、秦は直に趙の都なる邯鄲を圍む手順なるかと、應侯然りと答ふ、蘇代云ふ、趙愈、亡びなば、秦王天下に王たるべし、秦王天下に王たる時は武安君白起は三公とならん、武安君白起が秦のため戰ひに勝ち攻め取りたる城數は七十餘、南の方は鄢、郢、漢中を定め、北の方は趙括の軍を擒にせり、昔の周、召、呂望の功と雖も此れに踰したることなし、今趙亡び、秦王天下に王たらば、武安君白起は三公たるに相違なし、君に於ては彼れの下風に立つことが出來申さるゝや、下風に立つまじと思はれても、固より是非なき次第なり、秦は嘗て韓を攻めて邢丘

安君、武安君計曰、前秦已拔上黨、上黨民不樂爲秦而歸趙、趙卒反覆、非盡殺之、恐爲亂、乃挾詐而盡坑殺之、遺其小者二百四十人歸趙、前後斬首虜四十五萬人、趙人大震、

【講義】秦王は戰報に目を注ぎ居たるが、趙軍の糧道斷絕に及びしと聞き、此上は一押しに攻破るべしとて、自ら河內迄出陣して人民に爵各〻一級を賜ひ、年十五以上の男子は悉く之を徵發して長平に至らしめ、趙より援兵の來るべき道と糧食輸送の路とを遮斷せしかば、九月に至る迄趙の兵卒は食事をせざること四十六日に及び、飢に堪へざりし所より、內々にて互に殺し合ひ其肉を食へり、斯くて趙軍は何とかして圍みを出でんと欲し、來りて秦の壘を攻め、四隊に分れて突擊し、四五度も繰返したれども終に出づるを得ず、趙の將軍趙括は精銳の兵を出して自ら奮戰せし處、秦軍より烈しく矢を射出して趙括を射殺せり、是に於て趙括の率ゐたる四十萬人の兵卒は悉く武安君白起に降參す、武安君白起は降卒の取扱ひに就き計りて曰く、以前秦が上黨を拔きたる折、上黨の民は秦に歸することを好まずして趙に歸せり、趙の卒は反覆にして信ずべからざるが故に、盡く殺すに非ずば亂をなす恐れありと、因つて詐を設けて盡く之を穴埋にし、其年若き者二百四十人を趙に歸らしめぬ、此戰ひに秦の兵が前後首を斬り又は虜にしたる者四十五萬人、趙にては此大敗を聞いて震ひ恐れぬ、

四十八年十月、秦復定上黨郡、秦分軍爲二、王齕攻皮牢拔之、司馬梗定太原、

【講義】四十八年十月に至り、秦は復上黨郡を平定し、其れより軍を分ちて二となし、王齕の一軍は皮牢を攻めて之を拔き、司馬梗の一軍は太原を平定す、

【字解】定上黨郡、是より先、秦已に上黨を破りたれども、尙趙に屬する城ありしかば、此に至りて之を定

亡死亡の者多く、又屢、敗軍に及び、其上、敗軍の恥辱を雪がんともせず、反つて壁を高くして敢て戰はざるを怒りし折柄、秦の放てる反間の言を聞きしかば、一途に廉頗を無能とのみ思ひ、趙括に命じ、廉頗に代り、將軍として秦を撃たしむることとせり、秦は馬服の子なる趙括が趙の將軍となりしを聞き、先づ計の中れるを喜び、彼れならば容易く欺いて打破ることを得べしとて、内密に武安君白起を上將軍とならしめ、齕を尉裨將たらしめ、飽くまで趙括に油斷せしむるため、軍中に令を下して觸れ示すやう、今度武安君白起が我が軍の將となりしことを泄らす者は斬罪に處すべしと、趙括は戰場に到着しけるが、何の思慮もなく無二無三に兵を出して秦軍を攻め撃ちし處、秦軍は固より待構へ居りたる所なれば、佯りて敗走に及び、二手の奇兵を張つて趙軍を劫かすべき結構なり、趙の軍は敵の敗走を謀とは心附かず、勝に乘じて亡ぐるものを追掛け、秦の壘壁まで殺到せしが、壘壁を守れる秦兵堅く防戰せしがゆゑに、趙兵も流石に攻入ることは叶はず、斯かる折、秦の奇兵の一手なる二萬五千人は、趙軍の背後に廻りて歸路を絶ち切り、又一手なる五千騎は、趙の壘壁と趙括の率ゐる軍隊との間を絶ち切りしかば、趙軍は分れて二つとなり、糧食運搬の路も絶え果てたる處へ、秦よりは輕兵を出して之を撃ち、趙軍は接戰せしと雖も利あらざりしかば、壁を築き堅く守りて、本國より援兵の來ることを待ち居たり、

【字解】詳敗、詳は佯に同じ、

秦王聞趙食道絶、王自之河内、賜民爵各一級、發年十五以上、悉詣長平、遮絶趙救及糧食、至九月、趙卒不得食四十六日、皆内陰相殺食、來攻秦壘、欲出、爲四隊四五復之、不能出、其將軍趙括出鋭卒自搏戰、秦軍射殺趙括、括軍敗、卒四十萬人、降武

廉頗堅壁以待秦、秦數挑戰、趙兵不出、趙王數以爲讓、而秦相應侯、又使人行千金於趙、爲反間曰、秦之所惡、獨畏馬服子趙括將耳、廉頗易與、且降矣、趙王既怒廉頗軍多失亡、軍數敗、又反堅壁不敢戰、而又聞秦反間之言、因使趙括代廉頗將以擊秦、秦聞馬服子將、乃陰使武安君白起爲上將軍、而王齕爲尉裨將、令軍中有敢泄武安君將者斬、趙括至、則出兵擊秦軍、秦軍詳敗而走、張二奇兵以劫之、趙軍逐勝、追造秦壁、壁堅拒、不得入、而秦奇兵二萬五千人絕趙軍後、又一軍五千騎絕趙壁間、趙軍分而爲二、糧道絕、而秦出輕兵擊之、趙戰不利、因築壁堅守、以待救至、

【講義】廉頗は壘壁を丈夫に手入れして秦の兵を待受けたり、秦よりは幾度となく戰を挑みたれども、趙の兵は大切に壘を守つて出でて戰はず、趙王は勝敗の成算もなきに只管秦の軍を撃退することのみを考へ、廉頗が出でて戰はざることを詰責せり、趙王が斯く廉頗に不平なる處へ秦の宰相應侯は人を以て千金を趙に撒き散らして反間を行はしめけるが、其流言に曰く、秦の惡む所は唯馬服の子なる趙括が趙の將軍となることのみ、此の人が將軍とならば畏るべきなれども、廉頗は相手に足らぬ敵にして今にも降參すべしと、趙王は只さへも廉頗の率ゐる軍隊中に逃

を容れて上黨を受くるときは、自分の獲物を橫合より攫はれたる儀ゆゑ、怒つて趙を攻むるは必定なり、趙が秦より攻撃を被むる時は、助けを得んがため韓に親むに相違なし、韓と趙とが合體するときは秦に敵對すること出來るならんと、因つて人を趙に遣はし、上黨を以て趙に屬せしめたき由を申込みし處、趙の孝成王は平陽君、平原君と、其諾否に就き相談を試みたるが、平陽君の曰く、之を受けざる方が宜し、若し之を受けなば、其禍は得る所の利益より大なるべしと、平原君の曰く、何等の手數もなく偶然一郡を得らるゝことゆゑ、之を受くる方便なりと、孝成王は平原君の意見に從ひ、趙は遂に上黨を受け、因つて馮亭を封じて華陽君とせり、

四十六年、秦攻韓緱氏藺、拔之、

四十七年、秦使左庶長王齕攻韓、取上黨、上黨民走趙、趙軍長平、以按據上黨民、四月、齕因攻趙、趙使廉頗將、趙軍士卒犯秦斥兵、秦斥兵斬趙裨將茄、六月、陷趙軍、取二鄣四尉、七月、趙軍築壘壁而守之、秦又攻其壘、取二尉、敗其陣、奪西壘壁、

【講義】秦の昭王の四十六年に秦は韓の緱氏、藺を攻めて之を拔き、四十七年には左庶長王齕に命じて韓を攻めしめ、上黨を取りしかば、上黨の人民は趙に走れり、趙は長平に陣取りて上黨の民を救護す、四月に及び、齕は趙が上黨の民を庇ふに因つて趙を攻めたる處、趙は廉頗を將軍に任じて秦を防がしむ、趙軍の士卒が秦の斥候兵に戰ひを仕掛けたるに、秦の斥候は之と兵を交へ、趙の副將茄を殺す、六月、趙の軍を陷れ、二个所の壘壁を取り四人の尉官を虜にせり、七月、趙の軍は壘壁を築いて之を守りけるに、秦は又其壘を攻め、二人の尉官を討取り其陣を破り、遂に西に在る壘壁を奪へり、

の五城を拔き、其翌年又楚を攻め、郢を拔きて夷陵を焚き、其勢ひを以て東に進み、竟陵に至れり、楚王は郢の陷落せし爲、此を立退き東を指して逃走し、都を陳に徙せり、秦は郢を自國の版圖に組み入れて南郡とせり、白起は升進して武安君の爵號を授けらる、武安君は此戰爭の結果楚を取り、巫と黔中郡とを平定せり、昭王の三十四年に白起は魏を攻め華陽を拔き、敵將芒卯を走らせ、三晉の將を虜にし、首級十三萬を斬り、又趙の將賈偃と戰ひ、其兵二萬人を河に追ひ詰めて水中に沈めぬ、昭王四十三年に白起は韓の陘城を攻め、五城を拔き、首を斬ること五萬、四十四年に白起は南陽の太行道を攻めて通路を塞ぎたり、

【字解】光狼城、趙に屬す、

四十五年、伐韓之野王、野王降秦、上黨道絕、其守馮亭與民謀曰、鄭道已絕、韓必不可得爲民、秦兵日進、韓不能應、不如以上黨歸趙、趙若受我、秦怒必攻趙、趙被兵、必親韓、韓趙爲一、則可以當秦、因使人報趙、趙孝成王與平陽君平原君計之、平陽君曰、不如勿受、受之禍大於所得、平原君曰、無故得一郡、受之便、趙受之、因封馮亭爲華陽君、

【講義】四十五年に白起は韓の野王を伐ちたる處、野王は防ぐこと能はずして秦に降れり、是に於て上黨より韓の國都へ通ずる道絕ち切られたれば、上黨の守將馮亭は己が管下の人民と相談するやう、國都なる新鄭との通路絕えたる以上、本國政府は此地の住民を韓の民として保護を加へ救助をなすことを得ず、秦の兵は日に進み來るも味方は迚も應戰すると出來ざれば、見す見す秦に攻取らるゝよりは、寧ろ此の上黨を趙に屬するが增しなり、趙若し我等の請ひ

【講義】白起は郿の人なり、戰爭の術に長じ、秦の昭王に事へたり、昭王の十三年に至り白起は左庶長の職に任ぜられ、一軍の將となりて韓の新城を攻擊せり、此の歲に穰侯は秦の宰相となり、任鄙と云ふ者を引擧げて漢中の守となす、其翌年に白起は左更の官となり、韓魏兩國の兵を伊闕山に攻め、戰勝の結果敵の首を斬ること二十四萬に及び、又敵將公孫喜を虜とし、五城を拔く、白起は軍功により升進して國尉となり、更に兵を進めて黃河を涉り、韓の安邑より東の方乾河に到るまでの土地を取る、翌年白起は大良造と爲り、魏を攻めて拔取りたる城の數は大小合せて六十一あり、翌年白起は客卿の錯と云ふものと垣城を攻めて之を拔取れり、

【字解】左庶長、官名なり、新城、河南に在り、左更、官名なり、國尉、官名なり、安邑、是れは魏が秦に割讓したる處なれども、安邑以東乾河に至るまでは故と韓の地なりしゆゑに韓の安邑と曰ふ、大良造、官名なり、

後五年、白起攻趙、拔光狼城、後七年、白起攻楚、拔鄢鄧五城、其明年、攻楚、拔郢、燒夷陵、遂東至竟陵、楚王亡去郢、東走徙陳、秦以郢爲南郡、白起遷爲武安君、武安君因取楚、定巫黔中郡、昭王三十四年、白起攻魏、拔華陽、走芒卯、而虜三晉將、斬首十三萬、與趙將賈偃戰、沈其卒二萬人於河中、昭王四十三年、白起攻韓陘城、拔五城、斬首五萬、四十四年、白起攻南陽太行道、絕之、

【講義】垣城の攻擊より五年の後、白起は趙を攻めて光狼城を拔取り、其後七年に白起は楚を攻め、鄢鄧

後秦は其領地の陶を取上げて郡とせり、

【字解】 奸、干に同じ、求むるなり、

太史公曰、穰侯昭王親舅也、而秦所以東益地、弱諸侯、嘗稱帝於天下、天下皆西鄕稽首者、穰侯之功也、及其貴極富溢、一夫開說、身折勢奪、而以憂死、況於羇旅之臣乎、

【講義】 太史公曰く、穰侯は秦の昭王の叔父に當り、王族なり、而して秦が東に於て領地を增し、列國を弱め、嘗て帝號を天下に唱へ、天下の諸侯皆秦の方角を向き稽首して尊敬せしものは穰侯の功なり、然るに其貴きこと極まり、富むこと十二分となるや、僅かに一人の者の說により身は折け勢ひは奪はれ、憂愁を抱いて死せり、況んや外國の浪人にて臣下となれる者に於てをや、

白起王翦列傳第十三

白起者郿人也、善用兵、事秦昭王、昭王十三年、而白起爲左庶長、將而擊韓之新城、是歲、穰侯相秦、擧任鄙以爲漢中守、其明年、白起爲左更、攻韓魏於伊闕、斬首二十四萬、又虜其將公孫喜、拔五城、起遷爲國尉、涉河、取韓安邑以東到乾河、明年、白起爲大良造、攻魏拔之、取城小大六十一、明年、起與客卿錯攻垣城拔之、

がら兵を出すとは孰れが利なるか、前者の利なることは言ふまでもなきことなり、臣は右の理由により、秦王は賢明にして計略に錬れ、穰侯は智略に富んで軍事に熟達するが故に、趙に四萬の加勢を遣はして齊を伐つことは決して爲さずと請合ひたる次第なりと、穰侯は此の書簡を見て齊を伐つは不利益なりと思ひしかば、齊に發向せずして兵を引率して秦に歸れり、

昭王三十六年、相國穰侯言客卿竈、欲伐齊取剛壽、以廣其陶邑、於是魏人范睢自謂張祿先生、譏穰侯之伐齊、乃越三晉、以攻齊也、以此時奸說秦昭王、昭王於是用范睢、范睢言宣太后專制、穰侯擅權於諸侯、涇陽君、高陵君之屬、太侈、富於王室、於是秦王悟、乃免相國、令涇陽之屬、皆出關就封邑、穰侯出關、輜車千乘有餘、穰侯卒於陶而因葬焉、秦復收陶爲郡、

【講義】昭王の三十六年に相國なる穰侯は客卿の竈と商議して齊を伐ち剛壽の二縣を取り、己れの領土なる陶邑を擴張せんと欲せり、折柄魏國の人范睢と云ふもの自ら張祿先生と稱せしが、穰侯が齊を伐つに、三晉の地を越えて齊を攻むるの無謀なることを譏り、此の時を機會として、無遠慮に秦の昭王に說く所あり、昭王は其說を喜び范睢を登庸せし處、范睢は昭王に向ひ、宣太后が專ら政治を行ひ、穰侯が諸侯に對して勝手に自分の權力を振ひ、涇陽君、高陵君の徒は非常に奢侈を極め、王室より富めることを言上せしかば、秦王も成程と悟り、穰侯の相國を免じ、涇陽君の徒をして、何れも函谷關を出でて領地住ひを爲さしめたり、穰侯の關を出でしときは輜車千乘餘ありき、穰侯は陶に於て卒去し、其地に葬れり、彼れの死

が趙に加勢すまじと云ふ理由の二なり、

秦少出兵、則晉楚不信也、多出兵、則晉楚爲制於秦、齊恐不走秦、必走晉楚、此三也、秦割齊以啖晉楚、晉楚案之以兵、秦反受敵、此四也、是晉楚以秦謀齊、以齊謀秦也、何晉楚之智、而秦齊之愚、此五也、故得安邑以善事之、亦必無患矣、秦有安邑、韓氏必無上黨矣、取天下之腸胃、與出兵而懼其不反也、孰利、臣故曰、秦王明而熟於計、穰侯智而習於事、必不益趙甲四萬以伐齊矣、於是穰侯不行、引兵而歸、

【講義】秦が趙へ加勢するに就いても、若し少しく兵を出すときは、晉楚は秦に誠意なしとて之を信ぜざるならん、又若し多く兵を出すときは、晉楚は秦に制せられ、秦が專ら齊を伐つ形となるべし、さすれば齊は秦を恐るゝが故に秦に從はずして晉楚に附くならん、此れ秦が趙に加勢すまじと云ふ理由の三なり、秦が齊の土地を割いて晉楚に旨き汁を吸はしむるときは、晉楚は其土地に押への兵を置くべければ、秦は反つて敵を受くることとなる、此れ秦が趙に加勢すまじと云ふ理由の四なり、是れ晉楚は秦を利用して齊の地を切り取ることを企み、齊を利用して秦の地を切り取ることを企むなり、何とて晉楚は智にして秦齊は愚なるぞ、此れ秦が趙に加勢すまじと云ふ理由の五なり、故に列國の方にて安邑を持ちこたへて善く秦に事ふるならんには患なきも、安邑が秦の所有に歸するときは韓の上黨は保ち難し、安邑は天下の腸胃とも云ふべき大切の土地なるが、此土地を取ると、萬一敗軍に及んで無事に歸る者なき恐れありな

弊邑之王曰、秦王明而熟於計、穰侯智而習於事、必不益趙甲四萬以伐齊、是何也、夫三晉之相與也、秦之深讎也、百相背也、百相欺也、不爲不信、不爲無行、今破齊以肥趙、趙秦之深讎、不利於秦、此一也、秦之謀者、必曰、破齊弊晉楚、而後制晉楚之勝、夫齊罷國也、以天下攻齊、如以千鈞之弩決潰癰也、必死、安能弊晉楚、此二也、

【講義】齊の襄王は秦と趙と連合して攻來る由を聞いて懼れをなし、蘇代に賴みて齊國の利益の爲に書簡を穰侯に送らせけるが、其文言に曰く、臣は道路を行き通ふ者の話を承はるに、秦は趙の軍隊へ自國の兵四萬人を加勢として附け加へ齊國を征伐に及ぶべしと申合へり、臣は此れを信ぜず、弊邑の王に請合ひて申しゝは、秦王は賢明にして計略に錬れ、又穰侯は智略に富みて軍事に熟達するが故に、趙に四萬人の加勢を附けて齊を伐つが如きことは必ず爲さゞるべしと、何を以て斯く云ふとならば、一體三晉の連合は秦に取りて深き讎なり、彼れは百たびも秦に背けり、百たびも秦を欺けり、此の如く秦に背き秦を欺きながら、普通の事と心得、不信とも思はざれば不義とも思はず、然るに今齊を破りて趙を肥す時は、趙は元來三晉の一にて秦の深き讎なれば、秦に取りて不利益なり、此れ秦が趙に加勢すまじと云ふ理由の一なり、秦の參謀連中は必ず曰はん、今晉楚が齊を伐つ時は、一方には齊を破ると共に、一方には晉楚も之が爲に疲弊すべし、斯くて後、晉楚に對して勝を制することを得べしと、夫れ齊は疲れ果てたる國なれば、天下の大軍を以て之を攻むるは宛も千鈞の石弓を以て潰れかゝりたる腫物を突き破るが如く、必ず死すべし、何とて之が爲に晉楚を弱らすこと出來得んや、此れ秦

事ふることとならん、合從は此れに因つて解散すべく、斯くて後君には其爲すべき所を擇び給へ、且つ君が土地を得らるゝは、豈に兵力を用ふるに限るべけんや、若し晉國を割くときは、秦の兵縱令攻めざるも、魏は必ず絳と安邑とを差出すべし、又陶の爲に兩道を開くときは、故の宋の地を盡く手に入るゝに近し、衞は必ず單父を差出すべし、秦の兵は手附かずのまま君は之を制することを得るなり、何を求めて得ざることあらん、何を爲して成らざることあらん、願はくは君熟考あれ、危險の事を行ひ給ふこと勿れと、穰侯は善しと曰ひ、梁の圍を解きたり、

【字解】爲陶開兩道、穰侯は陶に封ぜらる、魏が絳と安邑とを致すときは河東の地を得るわけなるが、秦より陶に至るに河西河東の兩道を開くを謂ふ、但し宋及び單父は陶の南道にして、魏の安邑及び絳は陶の北道なり、行危、梁を圍むことを謂ふ、

明年、魏背レ秦、與レ齊從親、秦使ニ穰侯伐レ魏、斬レ首四萬、走ニ魏將暴鳶一、得ニ魏三縣一、穰侯益封、明年、穰侯與ニ白起客卿胡陽一復攻ニ趙韓魏一、破ニ芒卯於華陽下一、斬レ首十萬、取ニ魏之卷、蔡陽、長社、趙氏觀津一、且與ニ趙觀津一、益ニ趙以レ兵、伐レ齊、

【講義】其翌年に魏は秦に背いて齊と排秦同盟を結びければ、秦は穰侯をして魏を伐たしめ、敵の首を斬ること四萬、魏の將暴鳶を走らせ、魏の三縣を得、穰侯は此の軍功に因りて領地の加增あり、翌年穰侯は白起竝に客卿胡陽と復び趙韓魏を攻め、華陽の下にて芒卯を打破り、十萬人の首を斬り、魏の卷、蔡陽、長社と趙の觀津とを取り、又其觀津を趙に還付して齊を伐たしめ、秦より之に加勢せり、

齊襄王懼、使ニ蘇代爲レ齊陰遺ニ穰侯書一曰、臣聞、往來者言曰、秦將下益ニ趙甲四萬一以伐レ齊、臣竊必ニ之

せしむることとなるが、臣の見積りにては三十萬を下らず、三十萬の大兵を以て壘壁の高さ七仞もある堅城を守る次第なれば、臣の考へによれば、殷の湯王や周の武王が復び世に出でたりとて、攻むることは容易ならず、夫れ輕々しく楚趙の兵を背後に殘し置きて七仞の城に攻登り、三十萬の兵と戰ひて是非とも之を陷れんとするも、臣思ふに、此の如きは天地開闢より今日に至るまで未だ曾て有らざる所なり、攻めて城を拔く能はざるときは秦の兵は必ず疲るべく、陶の邑は魏に伐たれて亡ぶべし、さすれば以前の功勳は皆水泡に歸せん、

【字解】 七仞、四尺を仞と曰ひ、仞の倍を尋と云ふ、

今魏氏方疑、可以少割收也、願君逮楚趙之兵未至於梁、亟以少割收魏、魏方疑而得以少割爲利、必欲之、則君得所欲矣、楚趙怒於魏之先已也、必爭事秦、從以此散、而君後擇焉、且君之得地、豈必以兵哉、割晉國、秦兵不攻、而魏必效絳安邑、又爲陶開兩道、幾盡故宋、衞必效單父、秦兵可全而君制之、何索而不得、何爲而不成、願君熟慮之而無行危、穰侯曰、善、乃罷梁圍、

【講義】 今魏にては秦を疑つて講和に反對する際なれば、少しばかり土地を割かしめて魏を纏むべし、何卒君には楚趙の援兵が未だ魏に至らざる内に、少しにても割かしむることを得るだけの土地を收めて魏と講和せられよ、魏に於ては秦を疑ひ講和に反對すれども、若し少しの土地を割いて講和が出來得んには彼れも必ず望む所なるべく、君に於ても欲する所を得らるゝ道理なり、魏が已に秦と講和するときは、楚趙は魏が自分を出拔きたることを怒り、爭ひて秦に

少しく土地を割き、一方に於て秦より人質を取り給へ、若しさなきときは秦に欺かるゝは必定なりと、此意見は臣須賈が魏に於て聞きたる確なる話なれば、秦の君王には是れを問題として事を考慮あらんことこそ望ましけれ、

【字解】三梁、南梁なり、故國、楚丘の地を謂ふ、故地、同上、盡晉國、河東、河西、河內は竝に魏の地、卽ち故の晉國、暴子、韓の將暴鳶、

周書曰、惟命不于常、此言幸之不可數也、夫戰勝暴子、割八縣、此非兵力之精也、又非計之工也、天幸爲多矣、今又走芒卯、入北宅、以攻大梁、是以天幸自爲常也、智者不然、臣聞魏氏悉其百縣勝甲以上戍大梁、臣以爲不下三十萬、以三十萬之衆守梁七仞之城、臣以爲湯武復生、不易攻也、夫輕背楚趙之兵、陵七仞之城、戰三十萬之衆、而志必擧之、臣以爲自天地始分、以至于今、未嘗有者也、攻而不拔、秦兵必罷、陶邑必亡、則前功必弃矣、

【講義】周書に曰く、惟れ天命は一定せずと、此は幸福は每も〳〵得らるべきものに非ずとの意味なり、夫れ秦は暴子と戰つて八縣を割讓せしめたれども、右は兵力の精鋭なりし爲にも非ず、又計略の工なりし爲にも非ず、天幸の力が多きことと思はる、然るに前の勝に狃れ、今又芒卯を走らせ北宅に入り、進んで大梁を攻むるは、天幸は常に有るものと考ふるなり、智者は此の如くに天幸を恃とせず、臣の聞く所によれば、魏は其百縣の選拔隊以上の兵を以て大梁を守備

今王背楚趙而講秦、楚趙怒而去王、與王爭事秦、秦必受之、秦挾楚趙之兵、以復攻梁、則國求無亡不可得也、願王之必無講也、王若欲講少割而有質、不然必見欺、此臣之所聞於魏也、願君王之以是慮事也、

【講義】梁の大夫須賈は何とかして秦の兵を退け國都の危急を救はんと欲し、穰侯に説いて云ふ、臣の聞く所に據れば、魏の長吏は魏王に建言して左の如き意見を陳べたり、昔し梁の惠王は趙を伐ち、三梁の一戰に打勝ちて趙の都なる邯鄲を拔き取れり、此の時趙は邯鄲を秦に割讓せざりしため、邯鄲は復び趙の手に歸せり、齊は衞を攻め、其發源地を拔き取り子良を殺したれども、衞人は此の發源地を割讓せざりしため、發源地は復び衞の手に歸せり、衞趙の二國が國全く兵勁くして諸侯に其土地を併せられざるものは、何れも能く困難を忍んで土地を他國に割くことを重大視したる故なり、宋、中山は數〻伐たれて地を割きたる結果、其國は間もなく滅亡せり、臣の考へにては衞趙の仕方は手本となすべく、宋、中山の仕方は鑑戒となすべし、秦は貪慾暴戾の國にして親み難し、已に魏の國を蠶食したる上に又以前の晉國の土地をも盡く奪取つて版圖に入れ、韓の將暴子に打勝ち、八縣を割讓せしめ、未だ其土地悉皆の引渡しを受け了らざる中に又兵を出して之を攻む、秦は何如に土地を取るとも、何の厭くとか之れあらん、今芒卯を走らせ、北宅に入りたるは是れ敢て梁を攻むるには非ず、大王を劫かして多く土地を割讓せしめんとするなり、大王には決して之を聽入れ給ふこと勿れ、今大王は同盟の楚趙に背いて秦と講和せらるゝときは、楚趙は其不義を怒つて大王を見限り、大王と競爭して秦に事ふべく、秦は必ず喜んで之を受入れん、秦が楚趙の兵を挾み、復び梁を攻むるときは、國の亡びざることを求むるも得べからず、何卒大王には講和に耳を傾け給ふこと勿れ、大王若し講和を欲し給はば、成るべく

年、穰侯爲相國、將兵攻魏走芒卯、入北宅、遂圍大梁、

【講義】穰侯は封土を受け諸侯となりしより四年を經て秦の將となり魏を攻めし處、魏は河東に在る方四百里の地を獻ぜり、其れより又魏の河內を拔き、城を取ること大小六十餘、昭王の十九年、秦は西帝と稱し、齊は東帝と稱す、一个月餘りを過ぎ呂禮來り、齊と秦と談合の結果、各〻帝號を歸し、王となれり、魏冉復秦の宰相となり、六年を經て免され、二年を經て復宰相に任ぜらる、四年を經て白起に楚の郢を攻めさせ、秦は南郡を置き、白起の功を賞し、之を封じて武安君とせり、白起は穰侯の登庸せし人なるを以て、互ひに親密なりき、是に於て穰侯は王室よりも富むに至り、昭王の三十二年に穰侯は相國となり、兵に將として魏を攻め、芒卯を走らせ、北宅に入り、遂に大梁を圍む、

梁大夫須賈說穰侯曰、臣聞魏之長吏謂魏王曰、昔梁惠王伐趙、戰勝三梁、拔邯鄲、趙氏不割、而邯鄲復歸、齊人攻衛、拔故國、殺子良、衛人不割、而故地復反、衛趙之所以國全兵勁、而地不幷於諸侯者、以其能忍難而重出地也、宋中山數伐割地、而國隨以亡、臣以爲衛趙可法、而宋中山可爲戒也、秦貪戾之國也、而毋親、蠶食魏氏、又盡晉國、戰勝暴子、割八縣、地未畢入、兵復出矣、夫秦何厭之有哉、今又走芒卯、入北宅、此非敢攻梁也、且劫王以求多割地、王必勿聽也、

冉必ず公の恩に感ずべしと、是に於て仇液は客の言ふが如くに取料らひし處、秦は果して樓緩の職を免じ、魏冉宰相となれり、魏冉は已に宰相となり、呂禮を誅せんと欲せし處、呂禮は恐れて齊に出奔せり、

【字解】季君之亂、季君は公子壯なり、僭立して季君と曰ふ、

昭王十四年、魏冉擧白起、使代向壽將、而攻韓魏、敗之伊闕、斬首二十四萬、虜魏將公孫喜、明年又取楚之宛葉、魏冉謝病免相、以客卿壽燭爲相、其明年燭免、復相冉、乃封魏冉於穰、復益封陶、號曰穰侯、

【講義】昭王の十四年に魏冉は白起を登庸し、向壽に代つて將軍たらしめ、韓魏を攻めて之を伊闕に破り、敵の首を斬ること二十四萬級に及び、魏の將軍公孫喜を虜にす、其翌年に又楚の宛、葉を取る、魏冉は病氣を申立てゝ宰相を辭し、客卿壽燭宰相となりしが、其翌年職を免ぜられ魏冉復び宰相となれり、此の折魏冉を穰の地に封じて領主となし、更に陶の地を所領に加へ、穰侯と號せり、

穰侯封四歲、爲秦將攻魏、魏獻河東方四百里、拔魏之河內、取城大小六十餘、昭王十九年、秦稱西帝、齊稱東帝、月餘、呂禮來、而秦齊各復歸帝爲王、魏冉復相秦、六歲而免、免二歲、復相秦、四歲、而使白起拔楚之郢、秦置南郡、乃封白起爲武安君、白起者穰侯之所任擧也、相善、於是穰侯之富、富於王室、昭王三十二

液之秦、請以魏冉爲秦相、仇液將行、其客宋公謂液曰、秦不聽公、樓緩必怨公、公不若謂樓緩曰請爲公毋急秦、秦王見趙請相魏冉之不急、且不聽公、公言而事不成、以德樓子、事成、魏冉故德公矣、於是仇液從之、而秦果免樓緩、而魏冉相秦、欲誅呂禮、禮出奔齊、

【講義】　秦の惠王、武王の時代より穰侯魏冉は重職に任用せられ、政治を專斷せしが、武王卒して子なかりければ武王の弟等各〻王位に即かんとて爭ひしが、魏冉は獨り彼等を排して昭王を立てたり、昭王は已に位に卽きし後、魏冉を以て將軍となし、咸陽の地を守護せしめ、季君が亂を爲しゝときは魏冉之を誅戮し、武后も謀叛に關係せし廉を以て、之を放逐して魏に往かしめ、昭王の兄弟にて不善なる者は皆之を滅ぼし、彼れの威勢は秦國を震駭せり、昭王は位に卽きたりと雖も尙幼少なりしを以て、宣太后自ら朝廷に臨み、魏冉に國政を委任せり、昭王の七年に樗里子死し、國策一變の結果、涇陽君を齊に人質として差出し、趙人樓緩來つて秦の宰相となりぬ、趙にては樓緩が秦の宰相となりしことを自國の不利益と考へしかば、仇液をして秦に往かしめ、魏冉を以て宰相となさんことを乞へり、仇液が秦に出立せんとせし際、彼れの客分なる宋公と云ふ者、液に云ふやう、秦が君の說を容れて樓緩を免職する時は、彼れが君を怨むるは固より當然なるが、秦が君の說を容れずとも、一旦彼れを罷むることを申出したる以上、樓緩は必ず君を怨むるに相違なし、されば君には先づ樓緩に申さるべし、魏冉を秦の宰相とすることを秦に申込むことは公の爲に取急ぐまじと、秦王は趙が魏冉を宰相とせんとする請求が速急ならざることを見ば、當分君の說に從はざるべし、君が秦に申込んで事成らざるときは樓緩に恩を掛くる次第なり、又事成るときは魏

故號爲芊八子、及昭王卽位、芊八子號爲宣太后、宣太后非武王母、武王母號曰惠文后、先武王死、宣太后二弟、其異父長弟曰穰侯、姓魏氏、名冉、同父弟曰芊戎、爲華陽君、而昭王同母弟曰高陵君、涇陽君、而魏冉最賢、

【講義】穰侯魏冉は秦の昭王の母なる宣太后の弟なり、其先祖は楚國の人にて、姓は芊氏なり、秦の武王卒去して子なかりければ其弟を立てゝ君となしたるが、是れが昭王なり、昭王の母は以前芊八子と呼ばれぬ、昭王位に卽くに及び、芊八子は宣太后と云ふ尊號を受けぬ、此宣太后は前の君なる武王の母には非ず、武王の母は惠文后と號せり、此の婦人は武王より先に死せり、宣太后に二人の弟あり、種違ひの總領の弟を穰侯と曰ふ、姓は魏氏にして、名を冉と曰ふ、同父の弟を芊戎と曰ひ、華陽君となす、而して昭王の同母弟を高陵君、涇陽君と曰ふ、而して此の中魏冉は最も賢れたり、

【字解】宣太后弟、異父長弟なり、華陽、本と韓の地なりしが、後に至り秦に歸す、高陵君、名は顯、涇陽君、名は悝、最賢、華陽君、涇陽君に對して云ふ、

自惠王武王時、任職用事、武王卒、諸弟爭立、唯魏冉力爲能立昭王、昭王卽位、以冉爲將軍、衞咸陽、誅季君之亂、而逐武王后、出之魏、昭王諸兄弟不善者、皆滅之、威振秦國、昭王少、宣太后自治、任魏冉爲政、昭王七年、樗里子死、而使涇陽君質於齊、趙人樓緩來相秦、趙不利、乃使仇

り燕の太子丹を歸して兩國の關係を絶ちしかば、趙は燕を攻め、上谷の三十城を得、其中十一城を秦の所有に歸せり、甘羅は秦に歸つて此等の始末を報告せし處、秦は其功を賞し、甘羅を封じて上卿となし、以前の甘茂の田地住宅を賜へり、

太史公曰、樗里子以骨肉重、固其理、而秦人稱其智、故頗采焉、甘茂起下蔡閭閻、顯名諸侯、重彊齊楚、甘羅年少、然出一奇計、聲稱後世、雖非篤行之君子、然亦戰國之策士也、方秦之彊時、天下尤趨謀詐哉、

【講義】太史公云ふ、樗里子は秦王と骨肉關係あれば、其國人に重んぜられたるは固より然るべき理なれども、實際器量ありたればこそ秦人が彼れの智を稱したるなれ、故に頗る多く其事實を採りて之を記載せり、甘茂は下蔡の村里より其身を起して、其聲名を列國に顯はし、實力あるが爲に齊楚の二國に重んぜられぬ、甘羅は少年なるに拘はらず一の奇計を出して、其評判は後世に稱せらる、篤行の君子には非ざれども、然れども彼れも亦戰國時代の策士なり、秦が列國の中に於て尤も强かりし時に方り、天下の人は前代に比較して何れも詐の謀に傾向を有したり、

【字解】骨肉、天倫の關係卽ち父母兄弟姉妹等の間柄を云ふ、樗里子は秦の惠王の弟なるを以て骨肉と稱す、采、採と同じ、一奇計、張唐を說き、竝に趙に使して五城を秦の版圖に入れたるを謂ふ、篤行、道德を重んじ、其履行する所正義を外れざるを謂ふ、

穰侯列傳第十二

穰侯魏冉者、秦昭王母、宣太后弟也、其先楚人、姓芈氏、秦武王卒、無子、立其弟爲昭王、昭王母、

郊外まで出迎へをなせり、

甘羅說趙王曰、王聞燕太子丹入質秦歟、曰、聞之、曰、聞張唐相燕歟、曰、聞之、燕太子丹入秦者、燕不欺秦也、張唐相燕者、秦不欺燕也、燕秦不相欺者伐趙、危矣、燕秦不相欺、無異故、欲攻趙而廣河間、王不如齎臣五城以廣河間、請歸燕太子、與彊趙攻弱燕、趙王立自割五城以廣河間、秦歸燕太子、趙攻燕得上谷三十城、令秦有十一、甘羅還報、秦乃封甘羅以爲上卿、復以始甘茂田宅賜之、

【講義】 甘羅は趙王に說いて云ふ、大王には燕の太子丹が秦に入つて人質となりたることを聞き給ふかと、趙王曰く、之を聞き居れりと、甘羅曰く、張唐が燕の宰相となることを聞き給ふかと、趙王曰く、之を聞き居れりと、甘羅曰く、されば、燕の太子丹が秦に人質となりしことは、燕が秦を欺かざる表示なり、張唐の燕の宰相たることは、秦が燕を欺かざる表示なり、燕秦相欺かずして信賴提携するときは趙を伐つべきが故に、趙は甚だ危し、但し燕と秦とが信を以て交るに至れるは他の理由あるに非ず、趙を攻めて河間の土地を取り、版圖を廣めんと欲するなり、されば大王の爲に計り見れば、燕秦の爲に河間を取らるるよりは、寧ろ臣に五城を與へて、河間の地を貴國の版圖に取止むるを上策とす、大王若し臣の說を聽容れ給はゞ、秦にては燕の太子丹を歸し、燕と絕交の上、强國の趙と連合して弱國の燕を攻め申さんと、趙王は此れを良策と考へしかば、卽座に自ら五城を割いて河間の地を廣めたり、秦は甘羅の約束せし通

攻むれば取り、敵の城を破り敵の都邑を陷るゝこと、其數を知らず、拙者の功は迚も武安君には及ばずと、甘羅又問ふ、應侯が秦に用ひられて權力を握りしことは、文信侯と孰れか專なりやと、張卿云ふ、應侯は文信侯の專權に及ばずと、甘羅曰く、貴君は明白に文信侯に及ばざることを知るかと、張卿云ふ、然りと、甘羅曰く、それならば御話し申すべきが、以前應侯が趙を攻めんと欲せしとき、武安君は攻め難しとて之を爭ひしが、應侯の意見に忤ひたるため自殺を命ぜられ、立ちどころに杜郵に死せり、今其應侯より權力ある文信侯が自ら貴君に燕の宰相たらんことを請へるに、貴下は之を承知し給はず、臣は貴下が何れの處にて死に給ふかを知らずと、張唐は甘羅に說かれて其身の危險なることを感ぜしかば、善く諒解せり、何卒足下に附いて燕に往き申さんと、旅行の支度をなし、出發の日も定まれり、

【字解】　武安君、白起なり、應侯、范雎なり、

甘羅謂文信侯曰、借臣車五乘、請爲張唐先報趙、文信侯乃入言之於始皇曰、昔甘茂之孫甘羅年少耳、然名家之子孫、諸侯皆聞之、今者張唐欲稱疾不肯行、甘羅說而行之、今願先報趙、請許遣之、始皇召見、使甘羅於趙、趙襄王郊迎甘羅、

【講義】　甘羅は文信侯呂不韋に說いて云ふ、臣に車五乘を貸し給へ、張唐の爲に先づ趙に赴いて通告致したしと、文信侯呂不韋は始皇帝に言上すらく、昔しの甘茂の孫にて甘羅と申す者は、少年に過ぎざれども、名家の子とて列國も其名を聞知れり、近頃張唐は陛下の命を以て燕に赴くべき處、病氣を申立てゝ行くことを承知致さず、然るに甘羅は彼れを說伏せて出立せしむることとなり、今甘羅自身先づ趙に通告なしたき由を願出でたるが、何卒御許容ありて御遣しに相成りたしと、始皇は甘羅を召して謁見の上趙に使節を命じたり、甘羅已に趙に至れば、趙の襄王は

問うて云ふ、君侯には何故非常に機嫌を損じて在らるゝかと、文信侯呂不韋曰く、吾れ剛成君蔡澤をして燕に事へしむること三年に及び、其結果として燕の太子丹は來つて人質となれり、今吾れ自身張卿に賴み、燕の宰相となさんとするに、彼れ行くことを承知せず、之が爲に面白からず思ひ居る所なりと、甘羅は、臣は彼れを行かして見せ申すべし、何卒先方へ遣はし給へと申しければ、文信侯呂不韋は叱つて曰く、汝立去るべし、我れ自身に請ひてすら肯んぜざるに、汝の如き童子が何如に說けばとて彼れを行かしむること出來やうやと、甘羅の曰く、夫れ項橐は生れて七歲の時、孔子の師となれり、今臣は已に十二歲なれば、君侯兎も角も試み給へ、何もあわたゞしく叱り給ふに及ばんやと、

【字解】 張卿、卿は唐の字、

於是甘羅見張卿曰、卿之功孰與武安君、卿曰、武安君南挫彊楚、北威燕趙、戰勝攻取、破城墮邑、不知其數、臣之功不如也、甘羅曰、應侯之用於秦也、孰與文信侯專、卿曰、應侯不如文信侯專、甘羅曰、卿明知其不如文信侯專與、曰知之、甘羅曰、應侯欲攻趙、武安君難之、去咸陽七里、而立死於杜郵、今文信侯自請卿相燕、而不肯行、臣不知卿所死處矣、張唐曰、請因孺子行、令裝治行、行有日、

【講義】 文信侯呂不韋は甘羅の言ふ所に一理ありと思ひ、彼れの爲す所に任せしかば、甘羅は張卿に面會を求めて先づ問ひけるは、貴君の功は、武安君と孰れか大なりと思召すやと、張卿曰く、武安君は南の方は强國の楚を挫き、北の方は燕趙を威壓し、戰へば勝ち

與燕共伐趙、以廣河間之地、張唐謂文信侯曰、臣嘗爲秦昭王伐趙、趙怨臣曰、得唐者與百里之地、今之燕、必經趙、臣不可以行、文信侯不快、未有以彊也、

【講義】甘羅は甘茂の孫なり、甘茂が己に死去せし後、甘羅は齡ひ尚十二歲なりしが、秦の文信侯呂不韋に事へたり、秦の始皇帝は剛成君蔡澤を燕に使せしめ、彼れは三个年駐在する間に能く使命を全うし、燕王喜は太子の丹を秦に人質として差出すこととなりぬ、秦よりは張唐を燕の宰相たらしめ、燕と共に趙を伐つて河間の地を廣めんとせしが、張唐は頗る此役目を迷惑に思ひ、文信侯呂不韋に謂ふやう、臣は嘗て秦の昭王の爲に趙を伐ちたることあり、之がため趙は臣を怨み四方に告示して、苟くも臣を捕ふる者には百里の土地を與へんと言ふ、今臣が燕に往くには必ず趙を通過せざるを得ず、趙を通過するときは捕はれて殺さるゝの恐れあれば行くこと叶はずと、文信侯呂不韋は彼れが君命を辭退することを不快に思ひしも、さりとて强ふるわけにもゆかず、其儘に成り居れり、

甘羅曰、君侯何不快之甚也、文信侯曰、吾令剛成君蔡澤事燕三年、燕太子丹已入質矣、吾自請張卿相燕、而不肯行、甘羅曰、臣請行之、文信侯叱曰、去、我身自請之而不肯、汝焉能行之、甘羅曰、夫項槖生七歲爲孔子師、今臣生十二歲於茲矣、君其試臣、何遽叱乎、

【講義】甘羅は文信侯呂不韋の手許に使はれて常に側に在りしかば、此頃主人の兎角不機嫌なるを怪み、

甘茂竟不得復入秦、卒於魏、

【講義】范蜎は對へて云ふ、甘茂を秦の宰相となし給ふことは宜しからず、夫れ甘茂の師たる史擧は下蔡の門衞にて、大にしては君に事ふることを爲さず、小にしては一家を治めず、身分賤しきも恥ぢずして廉直ならずとの世評あり、然るに甘茂は之に事ふること柔順なりき、故に惠王の賢明なる、武王の明察なる、張儀の能辯なる、甘茂は之に事へ、十たび轉任したれども罪を受けたることなし、此の如く甘茂は誠に賢者なり、然れども秦に宰相とするは差支へあり、夫れ秦に賢相あるは楚の利益に非ず、且つ大王には前に召滑を越に用ひ給ひし事あり、內行章義の難に越國亂れたるが故に、楚は南の方厲門を塞ぎて江東を郡とせしゝ、王が此の如き功を立てたる所以を計るに、越が亂れて楚が其れを利用して內を治めたる故なり、今甘茂の如き賢者を秦の宰相と爲し給はんとするは、大王が越に用ふるを知つて秦に用ふるを知り給はざるなり、然らば則ち王が若し宰相を秦に置かんとし給ふならば、向壽に及ぶ者なし、夫れ向壽の秦王に於ける關係は極めて親しく、少き時は之と衣を同じうし、成長の後は之と車を同じうして彼れの言ふことを聽くが故に、大王若し向壽を秦の宰相と爲し給はゞ楚國の利益なりと、是に於て使を以て秦王に向壽を宰相とする事を乞ひ、秦は竟に向壽を相とせり、斯くして甘茂は結局復び秦に入ることを得ずして魏に卒せり、

【字解】內行章義之難、內心詐僞にして表面恩義を示し楚に向ひて釁端を聞きしことを謂ふ、

甘茂有孫曰甘羅、

【講義】甘茂には甘羅と曰ふ孫あり、

○甘羅者甘茂孫也、茂既死後、甘羅年十二、事秦相文信侯呂不韋、秦始皇帝使剛成君蔡澤於燕、三年而燕王喜使太子丹入質於秦、秦使張唐往相燕、欲

と存ずと、齊王は善き意見なりとて之に上卿の位を與へて、自國に留めたり、秦に於ては之を聞き、甘茂の家財を沒收したるを元の通りにして齊に賣れり、其後齊より甘茂を使者として楚に遣しけるが、此の時楚の懷王は新たに秦と緣組みをなして、親善の砌なりき、秦は甘茂が楚の國に在りと聞き、人を以て楚王に謂はしむるやう、何卒甘茂を秦に送られよと、楚王は范蜎に問うて曰く、此方一人の宰相を秦に置きたく思ふ、何人が宜しかるべきかと、范蜎は答へて、臣は其人物を見分くる力之れなしと、楚王云ふ、此方は彼の甘茂を以て秦の宰相たらしめんと欲すれども、何如のものにやと、

對曰、不可、夫史舉下蔡之監門也、大不爲事君、小不爲家室、以苟賤不廉聞於世、甘茂事之順焉、故惠王之明、武王之察、張儀之辯、而甘茂事之、取十官而無罪、茂誠賢者也、然不可相於秦、夫秦之有賢相、非楚國之利也、且王前嘗用召滑於越、而內行章義之難、越國亂、故楚南塞厲門、而郡江東、計王之功所以能如此者、越國亂而楚治也、今王知用諸越、而忘用諸秦、臣以王爲鉅過矣、然則王若欲置相於秦、則莫若向壽者、可、夫向壽之於秦王親也、少與之同衣、長與之同車、以聽事、王必相向壽於秦、則楚國之利也、於是使使請秦相向壽於秦、秦卒相向壽、而

ざるに、君は秦に往く使節となりて得意の境遇に在り、茂の妻子は秦に殘し置き、甚だ心許なきことなれば、貴君が秦に至られなば餘光を以て彼等を救ひ給はれよと、蘇代は之を承諾し、遂に秦に赴きて使命を果しゝが、其折秦王に說いて申すやう、甘茂は非常の士なり、彼れは秦に居つて代々秦に重んぜられ、殽の塞より鬼谷に至るまで、其地形の險阻、平坦等皆之を知るが故に、若し齊を以て韓魏と同盟せしめ、反つて秦を圖るならば、甚だ不利益なるべしと、秦王の云ふ、先生の言はるゝ如くならば何如にすべきかと、蘇代曰く、王は聘物を重くし祿を厚くして彼れを迎へ給ふが上策なり、彼れ來りなば之を鬼谷に置いて、終身他へ出でさせぬ樣にせらるべしと、秦王は善き意見なりとて直ちに上卿の位を與へ、宰相の印を以て招きたれども、甘茂は秦に往かざりき、

蘇代謂齊湣王曰、夫甘茂賢人也、今秦賜之上卿、以相印迎之、甘茂德王之賜、好爲王臣、故辭而不往、今王何以禮之、齊王曰、善、卽位之上卿而處之、秦因復甘茂之家以市於齊、齊使甘茂於楚、楚懷王新與秦合婚而驩、而秦聞甘茂在楚、使人謂楚王曰、願送甘茂於秦、楚王問於范蜎曰、寡人欲置相於秦、孰可、對曰、臣不足以識之、楚王曰、寡人欲相甘茂、可乎、

【講義】 蘇代は齊の王湣に謂ふやう、彼の甘茂と申す者は誠に賢人なり、今秦より上卿の爵を授け宰相の印を以て迎ふれども、甘茂は大王の賜をば有難く思ひて大王の臣下たるを欲するが故に、秦の招きを辭退して赴き申さず、今王は何如なる禮遇を以て彼れの志に酬い給ふや、自分は相當の禮遇あるべき事

て戰を止めぬ、

甘茂之亡秦奔齊、逢蘇代、代爲齊使於秦、甘茂曰、臣得罪於秦、懼而遯逃、無所容跡、臣聞貧人女與富人女會績、貧人女曰、我無以買燭、而子之燭光幸有餘、子可分我餘光、無損子明、而得一斯便焉、今臣困、而君方使秦而當路矣、茂之妻子在焉、願君以餘光振之、蘇代許諾、遂致使於秦、已因說秦王曰、甘茂非常士也、其居於秦累世重矣、自殺塞及至鬼谷、其地形險易、皆明知之、彼以齊約韓魏、反以圖秦、非秦之利也、秦王曰、然則奈何、蘇代曰、王不若重其贄、厚其祿、以迎之、使彼來則置之鬼谷、終身勿出、秦王曰、善、卽賜之上卿、以相印迎之於齊、甘茂不往、

【講義】甘茂は秦を逃亡して齊に赴きけるとき蘇代に逢ひぬ、此の時蘇代は齊の使となり秦に往く處なりき、甘茂は蘇代に語るやう、僕は秦に罪を得たるにより誅を恐れて逃亡したるが、殆んど身を寄すべき所なし、僕の聞きし話に、貧人の女と富人の女と一緒に紡績したるが、貧人の女は富人の女に向つて云ふ、妾は貧しきが故に燭を買ふ錢なく、夜業をなすに難澁なり、然るに貴女の燭の光は餘りあれば、貴女は妾に其燭の餘光を分け給へ、さりとて貴女の得らるゝ光線は減ずることなく、妾には此の上もなき便利を受くる次第なりと、今僕は困難して身の置き所あら

【講義】蘇代は向壽に對へて云ふ、甘茂は韓に武遂の地を與ふべきことを公仲に約し、宜陽の民を戻す、今公が徒に之を收めんとするは非常に困難なりと、向壽云ふ、さらば何如にすべき、武遂は終に得ることかなはずと、對へて云ふ、公は何ぞ秦より韓の爲に潁川の地を楚に求め給はざる、此の處は楚の侵略されたる土地なれば、公が之を韓に要求して得らるゝこととならば、是れ秦の威令が楚に行はるゝ次第にて、それと共に其地を韓に與ふる爲に韓に恩を懸けて有難く思はしむる仕方なり、然るに若し公が之を要求して得ざるときは、韓楚の怨み解けずして交ゝ秦に向ふべし、秦と楚と土地を爭ふに及び、公は徐々と楚の過失を責めて韓を取入るゝときは、此れ秦に利益なりと、

【字解】過、トガムと訓ず、

向壽曰、奈何、對曰、此善事也、甘茂欲以魏取齊、公孫奭欲以韓取齊、今公取宜陽以爲功、收楚韓以安之、而誅齊魏之罪、是以公孫奭甘茂無事也、甘茂竟言秦昭王、以武遂復歸之韓、向壽公孫奭爭之、不能得、向壽公孫奭由此怨讒甘茂、茂懼、輟伐魏蒲阪亡去、樗里子與魏講、罷兵、

【講義】向壽は其れには何如すれば宜しからんと問へるに、蘇代對へて、此れは善き事あり、甘茂は魏を使つて齊を取らんと欲し、公孫奭は韓を使つて齊を取らんと欲す、今公は宜陽を取りて功を立て、楚韓を手に附けて之を安んじ、齊魏の罪を責め給ふべし、さすれば公孫奭、甘茂の二人は手の出しやうあらざるべしと、然るに甘茂は秦の昭王に建議し、武遂の地をば韓に還付せり、向壽と公孫奭とは之を諫爭せしも用ひられざりしかば、二人は此れがため甘茂を怨み、昭王に讒言せしを以て、甘茂は禍を恐れ、魏の蒲阪を伐つことを中止して逃亡せり、樗里子、魏と和議を整へ

辟讎也、向壽曰、然、吾甚欲韓合、

【講義】蘇代は向壽に對へて云ふ、拙者に於ても公に申上げたきとあり、世間の人の申すに、其貴ぶ所以を貴ぶものは貴しと、然るに秦王が公を親愛し給ふとは公孫奭に及ばず、又公を智能と爲し給ふことは甘茂に及ばず、されば此の二人こそ重く用ひらるべきに、直接秦の國政を執ること能はずして、公が獨り秦王と專ら國務を裁斷せらるゝ所以は、彼れに之を取失ふべき事由ありたるを以てなり、卽ち公孫奭は韓に味方し、甘茂は魏に味方せし故、王が之を信ぜざりしに由る、今秦楚が彊を爭ふに當り、公は楚の味方をなし給ふ、是れ公孫奭、甘茂と同一の遣口にて、何の相違かあるべき、世の人は何れも楚が兎角約束を變更することを言ふ、若し果して然るときは、公は之が爲に亡ぶべし、是れ自ら責むると云ふものなり、公は楚の味方を休め、王と楚の違約に應ずる謀を運らすが上策なり、韓と親みて楚に備へ給へ、此の如くならば禍なかるべし、韓は必ず先づ國を以て公孫奭に從ひ、然る後甘茂に委ぬべし、今公が韓に親み楚に備ふべしと申さるゝは、是れ公事にて人を推擧するに仇讎をも除外せずと申す語の通り、公平の仕方なりと、向壽は、誠に貴說の如し、予は甚だ韓との合體を望むと云ふ、

【字解】外擧、外は內卽ち私に對したる語にして、國家の爲に人を薦むるを謂ふ、

對曰、甘茂許公仲以武遂、反宜陽之民、今公徒收之、甚難、向壽曰、然則奈何、武遂終不可得也、對曰、公奚不以秦爲韓求潁川於楚、此韓之寄地也、公求而得之、是令行於楚、而以其地德韓也、公求而不得、是韓楚之怨不解、而交走秦也、秦楚爭彊、而公徐過楚以收韓、此利於秦、

知れるが故に、手厚く向壽を扱ひぬ、向壽は秦の爲に宜陽を守り、此を本據として韓を伐たんとせしかば、公仲は蘇代を以て向壽に言はしむるやう、獸にても人より追詰められて死地に陷るときは、荒れ出して車をも倒すものなり、公には韓を破り公仲を辱めたれば、公仲は韓國を一纒めにして秦に事へ、自分にては必ず秦より一個の領主に取立てらるべしと思ひ居たるに、今公は楚に解口の地を與へ、楚の小令尹を杜陽に封ず、是れ秦楚の合體にして、二國が連合して韓を攻むる時は、韓の亡ぶるは必定なり、韓愈〻亡びなば、公仲は自身にて己れの部下を率ゐ、秦を宜陽に防ぐべし、何卒公は篤と勘考ありたしと、向壽曰く、予が秦楚を結合せしは韓に當る爲にはあらず、足下は予の爲に公仲に告げらるべし、秦韓の交際は和合の見込みありと、

【字解】 閼、防ぐなり、

蘇代對曰、願有謁於公、人曰、貴其所以貴者貴、王之愛習公也、不如公孫奭、其智能公也、不如甘茂、今二人者、皆不得親於秦事、而公獨與王主斷於國者何、彼有以失之也、公孫奭黨於韓、而甘茂黨於魏、故王不信也、今秦楚爭彊、而公黨於楚、是與公孫奭甘茂同道也、公何以異之、人皆言楚之善變也、而公必亡之、是自爲責也、公不如與王謀其變也、善韓以備楚、如此則無患矣、韓氏必先以國從公孫奭、而後委國於甘茂、韓公之讎也、今公言善韓以備楚、是外擧不

に韓と秦との和睦を取結びたれば、韓が他國と戰ふ場合には必ず秦より救ひを得らるゝことと思ひ、此の恃みあるが故に敢て楚を防ぎて戰へるなり、然るに今雍氏が圍まれ居るを、秦が兵を殽に下して之を救はざるときは、公仲は絶望して秦に朝せざるに至らん、其上公叔が自國をば楚に合體せしめんとす、楚韓の二國が一致するときは、魏も同盟を拒むことなかるべし、さすれば三國連合して秦を伐つの形成るべし、坐して他國より伐たるゝを待つと、此方より進んで他國を伐つと、孰れか利なるやと、秦王は善しと曰ひ、兵を殽に下して韓を救ひ、楚の兵は退去せり、

秦使向壽平宜陽、而使樗里子甘茂伐魏皮氏、向壽者宣太后外族也、而與昭王少相長、故任用、向壽如楚、楚聞秦之貴向壽、而厚事向壽、向壽爲秦守宜陽、將以伐韓、韓公仲使蘇代謂向壽曰、禽困覆車、公破韓辱公仲、公仲收國復事秦、自以爲必可以封、今公與楚解口地、封小令尹以杜陽、秦楚合復攻韓、韓必亡、韓亡、公仲且躬率其私徒以閼於秦、願公孰慮之也、向壽曰、吾合秦楚、非以當韓也、子爲壽謁之公仲曰、秦韓之交可合也、

【講義】秦は向壽をして宜陽を平げしめ、又樗里子、甘茂をして魏の皮氏を伐たしむ、此の向壽と云ふ者は秦の宣太后の縁續きにして、昭王とは幼少の頃より互ひに親みて成長せり、故に今度此の如き任命を蒙りたるなり、向壽は宜陽を平ぐるに就いて先づ楚の國に赴きける處、楚にては秦が向壽を貴ぶことを

彼處に在り、君には已に當時の誓ひを忘れ給ひしかと申しければ、武王も忽ち記憶を喚起し、成程以前其處にて誓ひしことありきと、因つて大に兵を起して甘茂をして韓を伐たしめ、敵の首を斬ること六萬に及び、遂に宜陽を拔きたり、

韓襄王使公仲侈入謝、與秦平、武王竟至周而卒於周、其弟立、爲昭王、王母宣太后楚女也、楚懷王怨前秦敗楚於丹陽而韓不救、乃以兵圍韓雍氏、韓使公仲侈告急於秦、秦昭王新立、太后楚人、不肯救、公仲因甘茂、茂爲韓言於秦昭王曰、公仲方有得秦救、故敢扞楚也、今雍氏圍、秦師不下殽、公仲且仰首而不朝、公叔且以國南合於楚、楚韓爲一、魏氏不敢不聽、然則伐秦之形成矣、不識坐而待伐、孰與伐人之利、秦王曰善、乃下師於殽以救韓、楚兵去、

【講義】韓の襄王は戰敗の結果、公仲侈を講和使として秦に入り謝罪せしめ、秦と和睦に及べり、秦の武王は周に赴き、其地にて卒去し、其弟立つて昭王となる、昭王の母なる宣太后は楚の女なり、楚の懷王は、以前秦が丹陽の地に於て楚を破りたる時韓が之を救はざりしことを怨みに思ひ、兵を發して韓の雍氏を圍めり、是に於て韓は公仲侈をして危急の趣を秦に告げて援兵を求めしむ、此時秦の昭王は位に即いて間もなきことゆゑ、未だ國務に習はず、太后は楚の婦人なるゆゑ、韓を救ふことを承知せず、公仲は途方に暮れ、甘茂に縋つて目的を達せんとせり、甘茂は其依賴により韓の爲に昭王に言上するやう、公仲は曩

母の杼を投じたるが如く臣を疑ひ給はんことを恐る、昔し張儀は西の方、巴蜀の地を開き、北は西河の外を開いて秦の版圖に入し、南方於ては上庸を取れり、然るに天下の人は張儀を偉しとせずして、彼れを信任したる先王の賢明を稱せり、又魏の文侯は樂羊を一軍の將として中山を攻めしめたる處、三年を經て之を陷れぬ、樂羊が凱旋に及び、其功を定むる時、文侯は彼れに一篋に一ぱいの讒謗書を取り出して示されければ、樂羊は再拜稽首して云ふやう、此の度の戰勝は臣の功に非ず、主君が讒言を斥けて臣を信用し給ひたる結果なりと、今臣は外國より來りて仕官する臣下なり、樗里子、公孫奭の二人が韓を保護せんが爲に臣の事を彼れ此れ申すならば、大王は必ず之を信じ給ふべし、さすれば王には魏王を欺かるゝことなり、臣は公仲侈の怨みを受くる次第なりと、

【字解】數險、函谷、三崤、五谷を謂ふ、杼、和名ヒ、機の横絲を持する器、羇旅之臣、羇は寄、旅は客、甘茂は下蔡の人にして秦に仕ふるを以て云ふ、食客の意、樗里子公孫奭、樗里子の母は韓の女、公孫奭は本と韓の公子、

王曰、寡人不聽也、請與子盟、卒使丞相甘茂將兵伐宜陽、五月而不拔、樗里子公孫奭果爭之、武王召甘茂、欲罷兵、甘茂曰、息壤在彼、王曰、有之、因大悉起兵、使甘茂擊之、斬首六萬、遂拔宜陽、

【講義】武王は甘茂に向ひ、此の方は樗里子、公孫奭の二人が卿を何如に誘るとも聞き入れざるべし、念のため卿と盟ひをなすべしと、盟ひて後丞相の甘茂を一軍の將として宜陽を伐たしめたる處、五个月を經るも拔けざりしかば、樗里子、公孫奭の二人は果して之を非難に及ぶ、武王は彼等の讒言に惑はされて甘茂を疑ひしかば、彼れを都に召喚せし上、征伐を止めさせんとせし處、甘茂は豫め斯かる事あるべきを知り、武王に盟ひを立てさせたることなれば、息壤は

侯令樂羊將而攻中山、三年而拔之、樂羊返而論功、文侯示之謗書一篋、樂羊再拜稽首曰、此非臣之功也、主君之力也、今臣羈旅之臣也、樗里子公孫奭二人者、挾韓而議之、王必聽之、是王欺魏王、而臣受公仲侈之怨也、

【講義】甘茂は息壤に到着しければ、王は何故に韓を伐つ勿れと申したるかと其理由を問はれしかば、甘茂は之に答ふるやう、韓の宜陽は大いなる縣なり、上黨、南陽に於ては凶年又は軍用の爲に金錢兵糧を貯蓄すること久しく、名は縣なれども、實際は郡と同じ、隨つて兵數も多く防備も嚴なるべきに、今や數个所の險阻を乘り踰え、千里の遠路を行軍して之を攻むることは困難なり、されば臣が之を攻めたりとて容易には拔難かるべし、長く時日を要するときは、其間に讒言の行はるゝ恐れあり、昔し孔子の門人にて孝行を以て名高かりし曾參が費と云ふ土地に住ひたる折、魯國の人に此の曾參と同姓同名にて、やはり曾參と呼ぶ者ありしが、或る時人殺しをせり、此の事評判になりければ、一人走り往きて曾參の母に告ぐるやう、御子息の曾參が人を殺したりと、其母は吾が子の人となりを善く知るが故に、そは人違ひなるべしと、以前の通り機を織りて平生の如く顏色をも變へざりき、然るに暫時經て又一人來り、曾參が人殺しをせりと知らせけれども、其母は尙機を織りて平氣なりしが、又一人來りて曾參が人を殺せりと告げたれば、流石の母も、偖は事實なりしか、それならば此儘にしては居られずと、手に持てる杼を投げ棄てゝ機を下り、墻を踰えて駈出せし由、夫れ曾參の賢なると、其母の之を信ずるとを以てすら、三人にて疑はす時は、曾參に及ばず、大王が臣を信じ給ふとは曾參の母が曾參を信ずる程には至らず、大王をして臣を疑はしむる者は三人のみに止まらず、臣は大王が曾參の

う、寡人は車を容れ得るだけの廣さに三川の路を通じ、周の王室を窺ひ、折善くば之を倒したしと思ふ、若し此の目的を達することを得ば、此の方死すとも生けるが如く、何の滿足か之に若かんやと、甘茂曰く、其れには、是れより魏に赴き、同盟を結びて韓を伐つことを許し給へと、王之を許し、尙向壽を副使として行かしむ、甘茂は武王の許可を得て魏に至り使命を果しゝが、副使の向壽に告げて云ふやう、足下は歸國の上、魏は甘茂の申條を聽き入れはしたれども、何卒大王は韓を伐ち給ふなと王に上申致しくれらるべし、愈〻其通りに運ばんには、足下の功となすべしと、向壽は之を領承し、歸つて甘茂の意見を王に告げぬ、王は何如にも甘茂の心底が解りかねたれば之を召喚に及び、息壤と云ふ處に彼れを迎へたり、

甘茂至、王問其故、對曰、宜陽大縣也、上黨南陽積之久矣、名曰縣、其實郡也、今王倍數險、行千里攻之難、昔曾參之處費、魯人有與曾參同姓名者、殺人、人告其母曰、曾參殺人、其母織自若也、頃之、一人又告之曰、曾參殺人、其母尙織自若也、頃又一人告之曰、曾參殺人、其母投杼下機、踰墻而走、夫以曾參之賢、與其母信之也、三人疑之、其母懼焉、今臣之賢、不若曾參、王之信臣、又不如曾參之母信曾參也、疑臣者非特三人、臣恐大王之投杼也、始張儀西幷巴蜀之地、北開西河之外、南取上庸、天下不以多張子、而以賢先王、魏文

のなく、智に於ては樗里に及ぶものなしと云へり、

【字解】直、當るなり、

○甘茂者下蔡人也、事下蔡史擧先生、學百家之說、因張儀樗里子而求見秦惠王、王見而說之、使將而佐魏章略定漢中地、惠王卒、武王立、張儀魏章去、東之魏、蜀侯輝相壯反、秦使甘茂定蜀、還而以甘茂爲左丞相、以樗里子爲右丞相、

【講義】甘茂は下蔡の人なり、下蔡の史擧先生を師として之に事へ、諸學派の說を學び、已に自信も出來しかば、張儀と樗里子との手引きにて秦の惠王に謁見を求めし處、惠王は彼れに遇ひ、其說を聞いて心に叶ひしかば、一軍の將帥として、魏章を佐けて漢中の地を征服せしめたり、惠王卒去し、武王立ちて君となられるゝに及び、張儀と魏章とは秦を立退きて魏に赴きけるが、會、蜀侯輝の宰相なる壯と云ふ者謀叛す、秦の朝廷は甘茂をして蜀の亂を鎮定せしめ、彼れが任務を終へて還るや、彼れを左丞相となし、樗里子を右丞相とせり、

【字解】輝、秦の公子にして蜀に封ぜられたる者、

秦武王三年、謂甘茂曰、寡人欲容車通三川、以窺周室、而寡人死不朽矣、甘茂曰、請之魏、約以伐韓、而使向壽輔行、甘茂至、謂向壽曰、子歸言之於王、曰魏聽臣矣、然願王勿伐、事成、盡以爲子功、向壽歸以告王、王迎甘茂於息壤、

【講義】秦の武王の三年に武王は甘茂に仰するや

於衛、於是遂解蒲而去、還擊皮氏、皮氏未降、又去、

【講義】胡衍は蒲の城中に入り守將に語るやう、秦の大將樗里子は蒲の甚だしき苦境に在ることを知り、是非に蒲を拔取ると申し居れり、然るに拙者は彼れに說き、蒲を差許して攻めざる樣に致すことを得るが、孰れとも貴意次第なりと、蒲の守將は樗里子の意氣込みを聞いて恐れ、胡衍の扱ひを賴もしく思ひしかば、再拜して周旋を賴み、因つて金三百斤を出して云ふやう、貴君の盡力により秦の兵が誠に退きたらば、必ず貴君の功を衞の君に言上し、貴下を南面の地位に推擧致し申さんと、胡衍は蒲にて金を儲けたる上、衞にて貴き位を得たり、胡衍游說の結果樗里子は蒲の圍みを解いて還り、今度は皮氏を擊ちしが、皮氏は防ぎ戰ひて容易に降參せず、因つて此をも退陣せり、

昭王七年、樗里子卒、葬于渭南章臺之東、曰、後百歲、是當有天子之宮、夾我墓、樗里子疾室在於昭王廟西渭南陰鄕、樗里、故俗謂之樗里子、至漢興、長樂宮在其東、未央宮在其西、武庫正直其墓、秦人諺曰、力則任鄙、智則樗里、

【講義】昭王の七年に樗里子は死去し、渭南章臺の東に葬れり、樗里子は生前に豫言すらく、吾が死後百年に及ばゞ、天子の宮殿が予の墓を挾むことあるべしと、樗里子疾の住宅は昭王の廟の西なる渭南陰鄕の樗里にありしかば、世間にては彼れを樗里子と呼べり、漢が興りて高祖が天子となるに至り、宮殿を造營しけるが、長樂宮は樗里子の墓の東に在り、未央宮は其西に在り、武庫は丁度其墓の處に當り、彼れの豫言此に適中せり、秦人の諺に、力に於ては任鄙に及ぶも

弱也、今幷衛於魏、魏必彊、魏彊之日、西河之外必危矣、且秦王將觀公之事、害秦而利魏、王必罪公、樗里子曰、奈何、胡衍曰、公釋蒲勿攻、臣試爲公入言之、以德衛君、樗里子曰、善、

【講義】秦の武王卒去に及び、昭王位を繼いで君となりしが、樗里子は以前にも增して尊重せられたり、昭王の元年樗里子は將帥となつて蒲を伐ちし處、蒲を守れる敵將は大に恐れ、胡衍と云ふ者に游說を依賴せしかば、胡衍は蒲の爲に樗里子に面會を求めたる上、說いて云ふやう、公が蒲を攻めらるゝ目的は秦の爲なるか、それとも魏の爲なるか、魏の爲なれば結構なれども、秦の爲なれば、そは利益とならず、一體衛の衛たることを得るは蒲の地あればなり、されば今公が蒲を伐たば、蒲は禍を免れんがため魏に屬すべく、國の眼目とも云ふべき蒲が魏に屬する以上、衛も亦挫けて魏に屬するに至らん、抑も魏が西河の外を秦に取られて恢復することの出來ざるは、兵弱きが故なり、然るに今衛を魏に併合せしむるときは、魏は必ず强くなるべく、魏が强くなるときは、西河の外は必ず危からん、且つ公の仕業が秦に害あつて魏に利なることを秦王が觀給ふときは、公を罪し給ふに定まれりと、樗里子は、然らば何如にすべきかと問ふ、胡衍云ふやう、公には蒲を差置きて攻め給ふ勿れ、僕は公の爲に入つて一理窟を陳べ、衛君に恩を着せんと、樗里子は善しとて彼れの爲す所に任せたり、

【字解】賴、利なり、

胡衍入蒲、謂其守曰、樗里子知蒲之病矣、其言曰、必拔蒲、衍能令釋蒲勿攻、蒲守恐、因再拜曰、願以請、因效金三百斤曰、秦兵苟退、請必言子於衛君、使子爲南面、故胡衍受金於蒲、以自貴

王は周が斯く秦を大切に扱ふことを怒り、其不都合を責めければ周は大に迷惑せし折、客の游騰と云ふ者、周の爲に申開きをなさんとて楚王に說いて云ふ、昔し智伯が仇猶國を伐ちし時、先方に廣車を贈り、其後へ軍隊を附けて攻込ましめたれば仇猶は遂に亡びぬ、なぜならば、是れは何の備へもなき所へ不意を打たれたればなり、又齊の桓公が蔡を伐ちし時は、表向き蔡を伐つと言はずして楚の罪を責むると言ひ觸らし、其實は蔡を襲へり、虎狼の如き貪慾非道の秦が樗里子をして百乘の車を以て周に入らしめたるを、周は仇猶若しくは蔡として之を觀るが故に、今度樗里子を迎ふるに就いても、行列の前には長戟を備へ、行列の後には强き石弓を備へ、名は樗里疾の護衞の爲なりと云ふも、實は之を囚人として扱へるなり、且つ周は何として自分の國家を憂ふることなからんや、一旦滅亡に及ばゞ大王にまで心配を掛くる次第ゆゑ、秦に心を許して彼れを尊ぶにはあらずと、楚王之を聞いて滿足せり、

【字解】 仇猶、夷狄の名、遺之廣車、智伯が仇猶を伐たんとせしとき、道路險惡にして行軍に不便なりしかば、大鐘を鑄て仇猶の國に贈る、固より巨大にして普通の車に乘らざる故、廣車とて戰爭に敵の側面を突くに用ふる車に載せて運送せり、仇猶には大鐘を受取らんがため、廣車の通行出來得るやう道路を開修し、最早行軍に差支へなき程に至りければ、智伯は車の後より兵を送りて仇猶の國に攻入らせ、竟に之を滅ぼせり、

秦武王卒、昭王立、樗里子又益尊重、昭王元年、樗里子將伐蒲、蒲守恐、請胡衍、胡衍爲蒲謂樗里子曰、公之攻蒲、爲秦乎、爲魏乎、爲魏則善矣、爲秦則不爲賴矣、夫衞之所以爲衞者、以蒲也、今伐蒲入於魏、衞必折而從之、魏亡西河之外、而無以取者兵

版圖に入れたり、秦の惠王の二十五年、樗里子を將帥として趙を伐たしめたる處、其戰ひに打勝ち、趙の將軍莊豹を捕虜となし、藺と云へる縣を拔き、翌年には魏章を助けて楚を攻め、楚の將屈丐を敗り、漢中の地を取れり、其功により秦王は樗里子を或る地の領主に取立て、嚴君と云ふ稱號を與へたり、

【字解】樗里、姓に非ずして地名なり、其居る所の里に樗ありしかば樗里と呼びたるなり、滑稽、酒を注ぐ器にて、其口より混々として酒を吐き出して已まざる所より、智慧の湧くが如く事に應じてすらすら出づるを謂ふ、右更、秦の第十四等の爵なり、

秦惠王卒、太子武王立、逐張儀魏章、而以樗里子甘茂為左右丞相、秦使甘茂攻韓、拔宜陽、使樗里子以車百乘入周、周以卒迎之、意甚敬、楚王怒、讓周以其重秦客、游騰為周說楚王曰、智伯之伐仇猶、遺之廣車、因隨之以兵、仇猶遂亡、何則無備故也、齊桓公伐蔡、號曰誅楚、其實襲蔡、今秦虎狼之國、使樗里子以車百乘入周、周以仇猶蔡觀焉、故使長戟居前、彊弩在後、名曰衞疾、而實囚之、且夫周豈能無憂其社稷哉、恐一旦亡國以憂大王、楚王乃悅、

【講義】秦の惠王卒去に及び、太子の武王立つて君となる、武王は張儀、魏章を逐ひ出し、樗里子、甘茂を以て左右の丞相とせしが、間もなく甘茂に韓を攻めさせ、宜陽を拔き取れり、又樗里子に命じ、車一百乘を從へて周に至らしめたる處、周の王室には兵卒を出して樗里子を迎へ、其待遇甚だ鄭重なりしかば、楚

人也、夫張儀之行事、甚於蘇秦、然世惡蘇秦者、以其先死、而儀振暴其短、以扶其說、成其衡道、要之此兩人眞傾危之士哉、

【講義】太史公曰く、韓魏趙三晉の國には權略奇變の士多く、彼の合從連衡の論をなして秦を强くせし者は大抵皆三晉の人なり、張儀の行事は蘇秦に比して一層權變を極めたれども、世の中には張儀の方を置いて專ら蘇秦を惡む所以は、蘇秦は先きに死したるため、張儀が後より彼れの疵を表白して自說に力を添へ、其尊秦同盟の主義を成したるを以てなり、之を要するに、此の二人は眞に危險の人物なるかな、

樗里子甘茂列傳第十一

樗里子者、名疾、秦惠王之弟也、與惠王異母、母韓女也、樗里子滑稽多智、秦人號曰智囊、秦惠王八年、爵樗里子右更、使將而伐曲沃、盡出其人、取其城地入秦、秦惠王二十五年、使樗里子爲將伐趙、虜趙將軍莊豹、拔藺、明年助魏章攻楚、敗楚將屈丐、取漢中地、秦封樗里子號爲嚴君、

【講義】樗里子は名を疾と曰ひ、秦の惠王の弟なり、但し惠王とは腹違ひにて、樗里子の母は韓國の女なり、此の人生來圓轉滑脫にして智慧多く、世の人之を智囊と呼び倣せり、秦の惠王の八年に樗里子を右更の爵に叙し、一軍に將として晉の曲沃を攻めしむ、樗里子は曲沃の人民を殘らず逐ひ出して其城地を秦の

其後五國伐秦、會陳軫謂秦王曰、義渠君者、蠻夷之賢君也、不如賂之以撫其志、秦王曰善、乃以文繡千純、婦女百人、遺義渠君、義渠君致群臣而謀曰、此公孫衍所謂邪、乃起兵襲秦、大敗秦人李伯之下、張儀已卒之後、犀首入相秦、嘗佩五國之相印、爲約長、

【講義】 義渠國の君來つて魏に入朝せしが、犀首は張儀が復び秦の宰相になりしことを聞き、列國の害となるべしと思ひ、出來得る限り秦の勢力を妨げんものをと、義渠の君に告ぐるやう、貴國は道途遠きゆゑ、二度と立寄られて御目に懸る機會なかるべし、因つて秦の事情を御咄致したく存ずるが、中國の同盟諸國が秦を攻めざりし時は、彼れ君の國に放火掠奪の無道を行ひながら、一旦列國が秦を攻むるときには、彼れ數〻使者を送り幣物を手厚くして貴國の機嫌を取らんとすべし、能く能く心に留め置かれたしと、其後楚魏齊韓趙の五个國共に秦を伐ちし時、陳軫、秦王に獻策するやう、義渠君は蠻夷の賢君なれば味方につくる必要あり、之に厚く贈物をなして其志を緩和するに若かずと、秦王は成程とて綾模樣のある切れ地一千反、婦女五百人を以て義渠君に贈る、義渠君は群臣を召集して相談に及び、言ひけるは、此れぞ以前魏に往きしとき公孫衍の申したる事が思ひ合さるると、兵を起し秦を襲うて大に之を李伯の下に破れり、張儀已に死去せし後犀首は秦に入つて其宰相となり、嘗て五个國の相印を佩びて連合の長たりき、

【字解】 燒掇焚杅、掇は侵略杅は牽掣なり、純、一反、李伯、都會の名、

太史公曰、三晉多權變之士、夫言從衡彊秦者、大抵皆三晉之

三川、魏王所以貴張儀者、欲得韓地也、且韓之南陽已擧矣、子何不少委焉、以爲衍功、則秦魏之交可錯矣、然則魏必圖秦而弃儀、收韓而相衍、公叔以爲便、因委之犀首以爲功、果相魏、張儀去、

【講義】　犀首は魏の陰晉の人なり、名は衍、姓は公孫氏、張儀と仲惡しかりしが、張儀が秦の爲に魏に來りし時、魏王は彼れを用ひて宰相となせしかば、犀首は此れを以て己れに不利益なりとし、何卒彼れを逐ひ除けんものをと一計を運らし、人を以て韓の公叔に言はしむるやう、今張儀は已に秦と魏との關係を附けて之を連合し、其言ふ所に據れば、魏は南陽を攻め、秦は三川を攻むべしと、魏王の張儀を貴ぶ所以は、彼れの計に由りて韓の領地を切取らんが爲なり、且つ韓の南陽は已に攻め取られんとする場合なり、貴下に於て少しく貴國の事を拙者に委せ給うては如何、若し斯くして此の衍に功を立てさせ給はゞ、秦と魏との交際を止めさせて御覽に入れん、然樣相成る時は、魏は必ず秦を覘ふこととなり、其結果自然と張儀を棄てゝ用ひまじ、それと同時に韓を味方につくる事となる故、此衍を張儀の後釜に据ゑて宰相とするに相違なからんと、公叔は此の計畫を都合よき事と思ひしかば、韓魏の關係を犀首に打任せ、功を立てしめければ、果して魏の相となり、張儀は失敗に及び、魏を去つて復び秦の相となれり、

【字解】　錯、停止なり、

義渠君朝於魏、犀首聞張儀復相秦、害之、犀首乃謂義渠君曰、道遠不得復過、請謁事情、曰中國無事、秦得燒掇焚杅君之國、有事、秦將輕使重幣事君之國、

善、卒弗救、大國果傷、小國亡、秦興兵而伐大剋之、此陳軫之計也、

【講義】惠王は陳軫の說を聞きて云ふやう、尤もなり、さて今韓魏互ひに攻め合ひ、一个年を經るも尙戰ひを止めず、或者は此方に救ふ方便利なりと曰ひ、或者は救はざるが便なりと云ひ、此方は何れとも決しかぬる次第なるが、汝は汝の君なる楚王の爲に計る餘りを以て此方の爲に計りくれよと、陳軫は對へて云ふ、彼の卞莊子が虎を刺したる話をば大王に言上せし者之れありや、卞莊子は或る時虎を刺さんとせし處、其家の小者之を止めて云へるは、兩虎が牛を食はんとするとき、食つて甘くば己れ獨り其味を占めんとて必ず爭ひ、爭はゞ必ず鬪はん、鬪ふときは大なる方は傷を受け小なる方は喰ひ殺されん、其殘りし大なる虎の手負ひたるに附込んで之を刺すときは、一働きにて二匹の虎を殺すの名譽あらんと、卞莊子は尤もと思ひしかば、立つて待ちつゝありしに、二疋の虎果して鬪ひ、大なる方は傷を受け小なる方は死したり、卞莊子は其傷を受けたるに附込んで、之を刺せし處、一働きにて果して二疋の虎を得たりと申すことなるが、今韓魏が互ひに攻合ひ、一个年も兵を罷めずと致せば、是れは大國が傷を受けて小國が亡ぶるに相違なし、其傷を受けたるに附込んで之を討つときは、一働きにて二つの獲物あるは必定なり、此れは丁度卞莊子が虎を刺したる類なり、臣が主君なる楚王に於ても此點には王と異る所なしと、惠王は成程と言ひ、結局韓を救はざりしかば、大國は果して傷き小國は果して亡びたり、秦兵を興して之を伐つて大に克つ、此れ陳軫の計なり、

○犀首者魏之陰晉人也、名衍、姓公孫氏、與張儀不善、張儀爲秦之魏、魏王相張儀、犀首弗利、故令人謂韓公叔曰、張儀已合秦魏矣、其言曰、魏攻南陽、秦攻

へば、陳軫の云ふ樣、大王には彼の莊舃の事を聞き給ひしかと、惠王は否聞きしことなしと言はる、陳軫は乃ち之を說明して曰く、越人の莊舃と申す者楚の國に仕官して、爵位ある身分となりし處、暫くして病氣となれり、楚王の曰く、舃は以前越の鄙賤の人也、然るに今楚に仕へて爵位を受け富貴の身分となりぬ、されど尚生國の越を戀しく思ふや否やと、中謝の職を勤むる近臣對へて云ふ、人が故鄕を思ふは病氣の時に在り、彼れ生國なる越の事を思ひ居らば越の聲を出すならん、又越の事を思ひ居らざるならば楚の聲を發するならん、それにて分り申すべしと、王は人を遣はして其聲を聞かしめたるに越の聲なりしとぞ、今軫は貴國に棄てられ逐出されて楚に參りたれど、何如にして秦の聲を發せずに居られ申すべきやと、

【字解】執珪、前に出づ、中謝、侍從なり、

惠王曰、善、今韓魏相攻、朞年不解、或謂寡人救之便、或曰、勿救便、寡人不能決、願子爲子主計

之餘、爲寡人計之、陳軫對曰、亦嘗有以夫卞莊子刺虎聞於王者乎、莊子欲刺虎、館豎子止之曰、兩虎方且食牛、食甘必爭、爭則必鬭、鬭則大者傷、小者死、從傷而刺之、一擧必有雙虎之名、卞莊子以爲然、立須之、有頃兩虎果鬭、大者傷、小者死、莊子從傷者而刺之、一擧果有雙虎之功、今韓魏相攻、朞年不解、是必大國傷、小國亡、從傷而伐之、一擧必有兩實、此猶莊子刺虎之類也、臣主與王何異也、惠王曰

三國相事、皆斷於犀首、

【講義】 梁に在留せる燕趙の人々は、車を馳せて犀首の來るべき由を各、本國の王に報告し、人を差出して犀首を迎へしめたり、楚王は此の事を聞いて大に怒つて曰く、田需は此方と約束をなして置きながら、今度犀首が燕趙に往きたるは、是れ此方を欺きたるなりと、怒つて合從の事を承知せざりき、齊は犀首が北の方燕趙に往くことを聞き、人を以て國事を委任せり、犀首は遂に燕趙齊三个國の宰相の事を行ひ、何によらず犀首の決斷を待つこととなりぬ、

軫遂至秦、韓魏相攻朞年、不解、秦惠王欲救之問於左右、左右或曰救之便、或曰勿救便、惠王未能爲之決、陳軫適至秦、惠王曰、子去寡人之楚、亦思寡人不、軫對曰、王聞夫越人莊舃乎、王曰不聞、曰越人莊舃仕楚執珪、有頃而病、楚王曰、舃故越之鄙細人也、今仕楚執珪、貴富矣、亦思越不、中謝對曰、凡人之思故在其病也、彼思越則越聲、不思越則楚聲、使人往聽之猶尚越聲也、今臣雖弃逐之楚、豈能無秦聲哉、

【講義】 陳軫は遂に使命の目的地たる秦に至りしが、此頃韓魏の二國互ひに攻め合ひ、一个年に及ぶも尚戰ひを止むるに至らず、秦の惠王は韓を救はんと欲し、左右の者に意見を問ひし處、或は救ふ方秦の便利なりと曰ひ、或は救はざる方便利なりと曰ひ、議論二派に分れしかば秦王も決しかねたる折柄、陳軫は秦に來れり、秦の惠王は陳軫に向ひ、汝は此方を見棄てゝ楚に往きたるが、斯くても亦此方を思ふかと問

王疑之未信也、公謂於王曰、臣與燕趙之王有故、數使人來曰、無事何不相見、願謁行於王、王雖許公、公請毋多車、以車三十乘可陳之於庭、明言之燕趙、

【講義】陳軫其れより一个年留まりて秦に在りし處、秦の惠王が終に己れの競爭者なる張儀を宰相とせしかば、陳軫は愈、秦を見限りて楚に出奔せし處、楚にては未だ彼をば重く視ざりき、其内に彼れは使して秦に赴くべき命を受け、途中梁に立寄り、犀首に面會を求めたるに、犀首は斷つて逢はざりければ、陳軫は取次ぎを經て、吾れは貴公に忠言することあつてわざ〳〵參りしに、貴公面會せずとならば、是れより此國を出立すべし、他日再び參ることは叶はずと、犀首は彼れが忠告する事ある由を聞き、面會に及びし處、陳軫は問うて云ふ、貴公には何故酒を飲むことを好まるゝかと、犀首は、無事なるゆゑ酒を飲むことを好むなりと答ふ、陳軫曰く、吾れは貴公をして厭きるほど多忙ならしめんと存ずるが、宜しかるべきかと、犀首問ふ、何如すれば多忙となるにやと、陳軫云ふ、貴國の宰相田需は諸侯と合從の條約を結ばんとするに、楚王は之を疑つて信ぜず、されば貴公は左の如く梁王に言上あるべし、臣は燕趙の王と昔しなじみある所より、二國の王より度々人を差越し、無事ならば逢ひに參るべしと申來りたれば、大王に旅行の御許しを願ふと、王が其事を許可あるとも、貴公には決して多く車を從へず、三十乘の車を庭に列ぶべし、燕趙に赴くと云ふことをよく〳〵人に知れるやう沙汰せられよ、是れ用事を多くする手段なりと、

燕趙客聞之、馳車告其王、使人迎犀首、楚王聞之大怒曰、田需與寡人約、而犀首之燕趙、是欺我也、怒而不聽其事、齊聞犀首之北、使人以事委焉、犀首遂行、

售者、良僕妾也、出婦嫁於鄉曲者、良婦也、今軫不忠其君、楚亦何以軫爲忠乎、忠且見弃、軫不之楚何歸乎、王以其言爲然、遂善待之、

【講義】王は陳軫の答へを聞きて云はるゝに、張儀は汝が秦を去つて楚に赴かんとする由を申したるが、やはり信の話なりきと、陳軫曰く、臣が楚に往かんとする事は、獨り張儀が存じ居るのみに非ず、往來を通る人迄も皆之を知る事なり、昔し吳子胥は其君に忠なりしかば、天下の君は我れも我れもと彼を己が臣下とせんと爭ひ、曾參は其親に孝なりしかば、天下中の父は何れも彼れを子とせんと願へり、故に男女を奴隸に賣る者が、其村里の內にて買手のある者は良き僕なり妾なり、離緣になりたる女、其土地の內にて片附く口を得る者は良き嫁なり、是れ皆以前居りたる家にて良僕良妾良妻なりし故、他家へ往きても亦良僕良妾良妻なればなり、今軫が現に君として事ふる大王に忠ならざりせば、楚は何を以てか軫を自國未來の忠臣として歡迎致すべきや、軫は大王に忠なるに拘はらず、讒言の爲に棄てられんとするゆゑ、楚に往かずして何れの國にか往き申さんと、秦王は彼れの言を尤もとせしかば、遂に善く之を待遇せり、

居秦期年、秦惠王終相張儀、而陳軫奔楚、楚未重之也、而使陳軫使於秦、過梁、欲見犀首、犀首謝弗見、軫曰、吾爲事來、公不見軫、軫將行、不得待異日、犀首見之、陳軫曰、公何好飲也、犀首曰、無事也、曰、吾請令公厭事可乎、曰、奈何、曰、田需約諸侯從親、楚

斯くて張儀は魏の宰相となること一年にして魏に卒す、

【字解】 與國、梁は以前齊と合從同盟を約せしが故に云ふ、

○陳軫者游說之士、與張儀俱事秦惠王、皆貴重爭寵、張儀惡陳軫於王曰、軫重幣輕使秦楚之間、將爲國交也、今楚不加善於秦、而善軫者、軫自爲厚、而爲王薄也、且軫欲去秦而之楚、王胡不聽也、王謂陳軫曰、吾聞子欲去秦之楚、有之乎、軫曰然、

【講義】 陳軫は游說を業とする人にて、張儀と一緒に秦の惠王に事へ、何れも位地高く重く用ひられしが、二人は君寵を競爭し、張儀は陳軫を逐ひ除けんと欲し、秦王に言上するやう、軫が鄭重なる幣物を以て頻繁に秦と楚との間を往復するは、本兩國の交際を厚くせんが爲なり、然るに楚は一向秦に對しては懇意を增さずして軫と親密にするは、是れ軫が自分の爲を謀ること厚く、大王の爲を謀ること薄き證據なり、其上軫は秦を見棄てゝ楚に赴き仕官せんとす、此の如き不忠實の者は去らしむる方利益なれば、大王には彼れが楚に往くことを御聽屆けあらば宜しからんと、其後王は陳軫の謁見せしとき彼れに申されけるは、此方は汝が秦を去り楚に赴かんと欲する由を聞込みたるが、果して然る事ありやと、陳軫は仰せの通りなりと答へぬ、

王曰、儀之言果信矣、軫曰、非獨儀知之也、行道之士盡知之矣、昔子胥忠於其君、而天下爭以爲臣、曾參孝於其親、而天下願以爲子、故賣僕妾、不出閭巷而

必興師伐之、故儀願乞其不肖之身之梁、齊必興師伐之、齊梁之兵連於城下、而不能相去、王以其閒伐韓、入三川、出兵函谷、而無伐以臨周、祭器必出、挾天子、案圖籍、此王業也、秦王以爲然、故具革車三十乘而入之梁、也、今儀入梁、王果伐之、是王內罷國、而外伐與國、廣鄰敵以內自臨、而信儀於秦王也、此臣之所謂託儀也、齊王曰、善、乃使解兵、張儀相魏一歲卒於魏也、

【講義】馮喜は齊王に對ふるやう、大王が張儀の居る所は何處の國にても構はず伐ち給ふことが卽ち秦に彼れを保險し給ふ仕方なり、一體張儀が秦を出づる時秦王と約束したる口上は、王の爲に計るときは、東方に大變があり、然る後秦に於ては諸侯より多くの土地を割き取ることを得べし、今齊王は臣を憎むこと甚だしければ、臣の在る所は、必ず兵を出して之を伐たん、故に臣に於ては、秦に捧げたる此不肖の身を申受けて梁に參らん、臣が梁に在らば、齊は兵を興して之を伐つに相違なし、齊梁の兵城下に切り結んで、互ひに引去ること出來ざるべければ、王には其間を以て韓を伐ち三川に入り、兵を函谷關に出して伐つことはせず、單に其兵威を以て周に臨み給はゞ、祭器は必ず周を出でて吾が手に入るならん、天子を挾み圖籍を按ずることは、是れ王業なりと、秦王は此の說を尤もなりとなし、革車三十乘を用意して之れを梁に送り込みたるなり、今張儀梁に入りし處、大王には、張儀の豫言に違はず之れを伐ち給ふ、是れ內は自國を疲敝せしめ、外は同盟國を伐ち、隣國の敵を增して自國へ臨ましむるものにて、張儀の功となる次第なれば、張儀を秦王に信ぜしむる仕方なりと、齊王此說を聞いて、名論なりと云ひ、出征の兵を解けり、

たんとすべし、故に儀に於ては何卒此の不肖の身を申受け、梁に參りたく思ふなり、若し儀が梁へ參りなば、齊は兵を興して梁を伐つに相違なし、齊梁二國の兵がいつ迄も城下に戰つて、孰れも引去ること出來ざる折柄、大王には其間を以て韓を伐つて三川に入り、兵を函谷に出して伐つことなく、其儘周に臨むときは、周の祭器は必ず出でて秦の手に入らん、天子を挾み、天下を治むる材料たる地圖文書等を調査して海內の事情を審かにするは、此れ王者たるの業なりと、秦王は張儀の說を尤もなりとし、革車三十乘を用意して張儀を梁に送り込めり、

【字解】革車、兵車なり、

齊果興師伐之、梁哀王恐、張儀曰、王勿患也、請令罷齊兵、乃使其舍人馮喜之楚、借使之齊、謂齊王曰、王甚憎張儀、雖然亦厚矣、王之託儀於秦也、齊王曰、寡人憎儀、儀之所在、必興師伐之、何以託儀、

【講義】張儀は斯くて梁に居りしかば、齊は案の如く兵を興して梁を伐つ、梁王は深く恐れし處、張儀云ふ、大王患ひ給ふこと勿れ、臣は齊の兵を退かしめ申さんと、乃ち己が家來の馮喜と云ふ者を楚に遣はし、楚の使者たる名義を借りて齊に往かしめ、齊王に向つて言はしむるやう、大王には甚だ張儀を憎み給ふ、然れども大王が彼れを秦に保險せらるゝことは隨分御手厚き至りなりと、齊王の曰く、此方は張儀を憎く思ふ故に、苟くも張儀の居る所は何處の國たるに拘はらず、兵を興して之を伐つ次第なるに、何を以て彼れを秦に保險するが如きことあらんやと、

對曰、是乃王之託儀也、夫儀之出也、固與秦王約曰、爲王計者、東方有大變、然後王可以多割得地、今齊王甚憎儀、儀之所在、

憎く思ひ居りたることゆゑ、愈、秦王の位に卽くに及び、群臣は多く張儀の事を讒言して云ふ、張儀は其言ふ所信なく、あちらに國を賣り、こちらに國を賣り、以て旨く氣に入らんことを求むるものなれば、吾邦に於て大王が先君の用ひ給ひし如く彼れを用ひ給はば、天下の物笑ひとなるべしと、諸侯は張儀が新君と折合ひ宜しからざる由を聞き、何れも尊秦同盟に背いて復び合從せり、

秦武王元年、羣臣日夜惡張儀未已、而齊讓又至、張儀懼誅、乃因謂秦武王曰、儀有愚計、願効之、王曰奈何、對曰、爲秦社稷計者、東方有大變、然後王可以多割得地也、今聞齊王甚憎儀、儀之所在、必興師伐之、故儀願乞其不肖之身之梁、齊必興師而伐梁、梁齊之兵連於城下、而不能相去、王以其間伐韓、入三川、出兵函谷、而毋伐以臨周、祭器必出、挾天子、按圖籍、此王業也、秦王以爲然、乃具革車三十乘、入儀之梁、

【講義】秦の武王の卽位元年に、群臣等日夜の別なく張儀の事を惡しざまに言ひなして少しも絶間なく、其上齊よりも張儀の虛言を責めければ、張儀は誅戮に遇はんことを恐れ、遂に一計を案出し、秦王に言上するやう、臣に愚計あり願はくは之を御披露致し申さんと、武王は何如なる計なるかと問ふ、對へて曰く、臣が秦の國家の爲に計るに、山東に大變亂あるときは、其れを切掛に多く土地を割讓せしめて、領土を得らるべきが故に、山東に事變を起すべき方法を取るを得策とす、今聞く所に據れば、齊王は甚だ儀を憎むと、儀が在る所の國へは、必ず兵を興して之を伐

足以采正計、今上客幸敎之、請西面而事秦、獻恒山之尾五城、

【講義】 且つ大王には趙王をば親むべき者と思ひ給ふか、是れ大なる間違ひなり、其證據は、以前趙は兵を興して燕を攻め、二度も燕の都を圍んで大王を劫かし、大王は之が爲に十个城を割讓して罪を謝せられたることあり、今趙王は已に秦に入つて澠池に參朝し、河間を差出して秦に事へたり、大王に於て若し秦に事へ給はずんば、秦は兵を雲中、九原に下し、趙を追立てて燕を攻むべし、則ち易水、長城は大王の所有に非ざるなり、且現時に於て趙の秦に於けるは、最早對等の國に非ずして秦の郡縣と同樣なれば、秦の許可なければ自分勝手に兵を擧げて燕を擊つこと出來ず、されば今大王に於て秦に事へ給はゞ、秦王は必ず喜ぶべし、而して趙は又自分勝手に兵を擧ぐる能はず、是れ燕の國に於ては西に彊秦の援ありて南に齊趙の患なしといふものなり、此故に大王願はくは篤と勘考あらんことを、燕王曰く、此方は蠻夷の僻地に居ること故智識を得るの道なく、身は大男兒なれども、やつと嬰兒の如く、人の議論を聞くも是非利害を分別して正當の計策を取ること能はず、然るに今幸ひにも貴客の敎へを蒙りて方向を知るを得たれば、西面して秦に事ふることに致さんと、恆山の末なる五城を割いて秦に與へぬ、

燕王聽儀、儀歸報、未至咸陽、而秦惠王卒、武王立、武王自爲太子時、不說張儀、及卽位、羣臣多讒張儀曰、無信、左右賣國以取容、秦必復用之、恐爲天下笑、諸侯聞張儀有郤武王、皆畔衡復合從、

【講義】 燕の昭王は已に張儀の說に從ひしかば、張儀は歸つて秦王に報告せんと旅行の途に上りしが、未だ咸陽に達せざる內に秦の惠王は死去して武王の世となれり、武王は太子にてありし時より張儀を心

【講義】張儀は已に趙王を說き伏せければ、趙を去つて燕に往き、燕の昭王に說いて云ふ、大王の親しくせらるゝものは趙が隨一なり、然るに趙は決して信ずべからず、昔し趙王の先祖趙襄子は嘗て己れの姊を代國の王に嫁して其后となしゝが、是れは代を併合せんとの政策より出でたるなり、先づ其實行手段として婿の代王と句注山の要塞に於て會見せんことを約し置き、職工に申附けて金の杓を作らせけるが、殊に其柄を長からしめ、人を擊ち殺すことの出來得る仕組みなり、さて代王と酒宴の折柄、內々料理人に申含むるやう、酒盛最中打興ずる際に熱き吸物を持出し、杓を逆に持ち代王を擊つべしと、斯く手順も定まりければ、酒盛最中打興ずる折柄熱き吸物を差出し、料理人は之を代王の前に配りながら杓を逆にして代王を擊ちて之を殺し、王の腦は微塵となり、腦味噌地に塗れたり、代王の皇后なる趙王の姊は之を聞いて痛ましさに堪へず、己れの頭にさせる笄を磨ぎ、それを以て自殺せり、故に今日までも摩笄と云ふ山ありて遺跡に留む、代王の亡びたる顚末に就いては、天下中聞き知らざる者なし、夫れ趙王が狼の如く凶暴にして親しむべからざることは、大王の明かに見給ふ所なり、

且以趙王爲可親乎、趙興兵攻燕、再圍燕都而劫大王、大王割十城以謝、今趙王已入朝澠池、效河間以事秦、今大王不事秦、秦下甲雲中九原、驅趙而攻燕、則易水長城、非大王之有也、且今時趙之於秦、猶郡縣也、不敢妄擧師以攻伐、今王事秦、秦王必喜、趙不敢妄動、是西有彊秦之援、而南無齊趙之患、是故願大王孰計之、燕王曰、寡人蠻夷僻處、雖大男子、裁如嬰兒、言不

趨行、適聞使者之明詔、趙王許張儀、

【講義】趙王は張儀に脅かされて秦より攻められんことを恐れしかば、張儀に向ひて云ふやう、先王の時には奉陽君が權威を專らにし勢力を擅にせしとゆゑ、先王を欺いて其聰明を蔽ひ、獨り勝手に政事を總べ、此方は尙師傅の監督を受くる身分にて國政に與らざりしかば、何事も承知せざりき、其後先王が群臣を殘して崩御に及ばれたるが、此方は年尙幼弱にして國君となり、祭祀を奉行するの日も淺く、何如にせば宜しからんと心竊かに疑へり、自分の考へにては、諸侯と一致合從して秦に事へざることは國家永遠の利益に非ざるべしと、是に於て希望すらく、從來の精神思慮を入れ易へ、政策を一變したる上、土地を割き從前の過ちを謝して秦に事へんと、因つて車に馬を着けさせ、一日も早く秦に參朝せんとする折柄使者の御說を承りたることとなれば、何とて御意見に違背致すべきと、趙王は張儀の申込みを承諾せり、

【字解】奉陽君、前に出づ、

張儀乃去、北之燕、說燕昭王曰、大王之所親莫如趙、昔趙襄子嘗以其姊爲代王妻、欲幷代、約與代王遇於句注之塞、乃令工人作爲金斗、長其尾、令可以擊人、與代王飮、陰告厨人曰、卽酒酣樂進熱啜、反斗以擊之、於是酒酣樂進熱啜、厨人進斟、因反斗以擊代王殺之、王腦塗地、其姊聞之、因摩笄以自刺、故至今有摩笄之山、代王之亡、天下莫不聞、夫趙王之狼戾無親、大王之所明見、

なきことを望みたりとて何んと得らるべきや、

今秦發三將軍、其一軍塞午道、告齊、使興師渡清河、軍於邯鄲之東、一軍軍成皐、驅韓梁、軍於河外、一軍軍於澠池、約四國爲一、以攻趙、趙服必四分其地、此故不敢匿意隱情、先以聞於左右、臣竊爲大王計、莫如與秦王遇於澠池、面相見而口相結、請案兵無攻、願大王之定計、

【講義】今秦は三將軍を派遣して出征せしめ、其一軍は趙の東にして齊の西なる午道を塞ぎ、齊に告げて秦の爲に兵を興し、清河を渡り邯鄲の東に陣を取らしめ、一軍は成皐に陣取り、韓梁の二个國を驅りて河外に陣を張らしめ、殘りの一軍は澠池に陣取り、四國を連合して同盟を作り、一國となりて趙を攻め、趙が征服せらるゝときは、四國にて趙の地を分割すべし、此故に敢て實情を隱すことなく、先づ大王の左右に侍する近臣まで申上ぐるなり、臣慮外ながら大王の爲に計るに、大王には秦王と澠池に會合あり、親しくは對面の上口づから懇親を結ばるゝが上策なり、兎も角も秦の方にては兵を押へ攻めずして大王に御勘考の猶豫を與ふべければ、何卒御所存を定められんことを願ふと、

趙王曰、先王之時、奉陽君專權擅勢、蔽欺先王、獨擅綰事、寡人居屬師傅、不與國謀計、先王弃羣臣、寡人年幼、奉祀之日新、心固竊疑焉、以爲一從不事秦、非國之長利也、乃且願變心易慮、割地謝前過、以事秦、方將約車

日を送り、畏縮して敢て動搖せず、是れ大王が秦を手痛く責め給ふ思召しあるが故なり、今大王の力を以て巴蜀を拔き取り、漢中を併呑し、東周、西周を包合し、周の九鼎を遷し、白馬の津を守らんとす、秦は僻遠の地なれども、心に憤りて怨みを含むことは久しき以前よりの事なり、今秦は甲冑も古び兵士も衰へて役に立たずとは申せ、澠池に陣取れり、兵卒河を渡り漳を越え、番吾に據り、貴國の國都なる邯鄲の城下にて見參致さん、何卒甲子の月を以て合戰に及び、殷の射王の故事を實行致したき所より、使を以て先づ左右の近臣まで申上ぐる次第なり、

【字解】甲子、周の武王が殷の紂王を伐ちし日なり、正殷紂之事、秦を周に比し、趙を殷に比す、

凡大王之所信爲從者恃蘇秦、蘇秦熒惑諸侯、以是爲非、以非爲是、欲反齊國、而自令車裂於市、夫天下之不可一亦明矣、今楚與秦爲昆弟之國、而韓梁稱爲東藩之臣、齊獻魚鹽之地、此斷趙之右臂也、夫斷右臂而與人鬪、失其黨而孤居、求欲毋危、豈可得乎、

【講義】凡そ大王が合從の有利なることを信じ給ふ所以は、蘇秦の說を恃まるゝが故なるべし、然るに蘇秦は合從の說を以て諸侯を惑はし、是をば非となし、非をば是となし、本信ずべきものにあらず、彼れは齊國に於て謀叛をなし、其發覺するや自ら車裂にせられんことを求めたる人物なり、斯かる人物にて天下を合同一致せしむることの出來ざるは亦明かなり、今や楚は秦と兄弟の國となり、韓と梁とは東藩の臣と稱して秦の屬國となり、齊は魚や鹽を產する土地を秦に獻じたるが、此れは趙の右の臂を斷ちたるなり、夫れ大切なる右の臂を切られたる身を以て他人と鬪ひ、己れの仲間を失ひて孤立の境遇に居る以上、危險

齊王曰、齊僻陋、隱居東海之上、未嘗聞社稷之長利也、乃許張儀、張儀去、西說趙王曰、敝邑秦王使使臣效愚計於大王、大王收率天下以賓秦、秦兵不敢出函谷關十五年、大王之威、行於山東、敝邑恐懼懾伏、繕甲厲兵、飾車騎、習馳射、力田積粟、守四封之內、愁居懾處、不敢動搖、唯大王有意督過之也、今以大王之力、擧巴蜀、幷漢中、包兩周、遷九鼎、守白馬之津、秦雖僻遠、然而心忿含怒之日久矣、今秦有敝甲凋兵、軍於澠池、願渡河踰漳、據番吾、會邯鄲之下、願以甲子合戰、以正殷紂之事、敬使使臣先聞左右、

【講義】齊王は深く張儀の說に感服して云ふやう、我が齊は都より懸け離れ未開の國にして、此方は東海の上に引込み見聞廣からざるゆゑ、是れまで國家の遠大の善き計を聞かざりし處、今貴說に因りて悟る所ありとて張儀の言を聽入れ、秦に事ふべき由を諾せしかば、張儀は齊を去つて西に赴き、趙王に謁見して說くやう、敝邑の秦王は使者を以て大王に愚計を言上致す次第なるが、大王には合從の首唱者として、天下の諸侯を取纏め、引率して秦を排斥し給ふが故に、秦の兵は函谷を出でざること茲に十五年、大王の威力は山東に行はる、敝邑の秦に恐懼して頭をも擧げず、萬一の爲に甲冑に手入れをなし、兵士を勵まし、車や軍馬を整へ、騎射を練習し、一面には耕作に力を用ひて糧食を積み蓄へ、四方の界を守り、憂愁に

下、再戰又勝秦、四戰之後、趙之亡卒數十萬、邯鄲僅存、雖有戰勝之名、而國已破矣、是何也、秦彊而趙弱、今秦楚嫁女娶婦、爲昆弟之國、韓獻宜陽、梁效河外、趙入朝澠池、割河間以事秦、大王不事秦、秦驅韓梁攻齊之南地、悉趙兵渡清河、指博關、臨菑卽墨非王之有也、國一日見攻、雖欲事秦、不可得也、是故願大王孰計之也、

【講義】臣の承はるに、以前齊は魯と三度戰つて魯は三度とも勝ちたり、然るに其結果として魯の國は危亡の情態に陷れりと、斯く戰爭に打勝ちたる名はあれど亡國の實ある者は何故ぞや、齊は大國にして魯は小國なればなり、今秦の齊との比較は猶齊の魯に於けると同樣なり、以前秦と趙とが河漳の附近にて戰ひ、二度の戰ひに、趙は二度とも秦に勝てり、其の後二國また番吾の下に戰ひしが、二度の戰ひに又も秦に勝ちぬ、此の四回の戰爭の後趙の兵卒死亡せしもの數十萬人に及び、其都なる邯鄲が僅かに存するのみ、戰勝の名あれども國家は已に破れたり、是れ何故ぞ、秦が強くして趙が弱ければなり、今秦楚の二國は好みを結び、彼れよりは女を嫁入らせ、此れよりは婦を娶り、兄弟の國となれり、其他韓は秦に宜陽の地を差出し、梁は河外の地を差出し、趙は自ら秦に出向いて澠池に參朝し、河間を割讓して秦に事へたり、此の如く山東の諸國皆秦に屈從するに、大王のみ秦に事へ給はざるときは、秦は韓梁二个國を驅りて齊の南部を攻擊し、趙の兵を全部繰出して清河を渡り博關を指して攻寄するときは、臨菑、卽墨は大王の所有に非ざるなり、此國が秦に攻入らるゝ日になりて秦に事へんと欲するも、最早叶ふまじ、此の故に大王は篤と勘考あらんことを願ふと、

東說齊湣王曰、天下彊國、無過齊者、大臣父兄、殷衆富樂、然而爲大王計者、皆爲一時之說、不顧百世之利、從人說大王者必曰、齊西有彊趙、南有韓與梁、齊負海之國也、地廣民衆、兵彊士勇、雖有百秦、將無奈齊何、大王賢其說而不計其實、夫從人朋黨比周、莫不以從爲可、

【講義】韓王は張儀の計を聽き、秦に加擔することを承諾に及びしかば、張儀は秦に歸りて成功の趣を報告に及べり、秦の惠王は張儀の今度の働きを賞して五个所の都會を所領に與へ、武信君と云ふ號を賜はり、又張儀を東の方齊國に游說せしめたり、張儀は齊の湣王に說いて云ふ、天下列國の中に齊より强きものなく、大臣並に王族の方々多數にして、富裕安樂を極めらる、然るに國家を大切に思ふ者なく、大王の爲に計を立つる者、何れも一時目前の議論をなして百世永遠の利益を顧みず、合從論者の大王に說く者は必ず言ふ、齊は西に强國の趙あり、南に韓と梁との二个國あり、齊は海を負ひたる國なり、土地は廣くして人民は衆く、兵は强く士は勇あり、形勢國狀此の如くなる以上、百个國の秦ありと雖も齊を何如んともすることと出來ずと、大王には其說をば賢明なりとして、其實際を計り給はず、一體合從論者と云ふ者は、互に徒黨を組み合從を以て可とせざるものなし、

臣聞之、齊與魯三戰而魯三勝、國以危亡隨其後、雖有戰勝之名、而有亡國之實、是何也、齊大而魯小也、今秦之與齊也、猶齊之與魯也、秦趙戰於河漳之上、再戰而趙再勝秦、戰於番吾之

故爲大王計、莫如爲秦、秦之所欲、莫如弱楚、而能弱楚者、莫如韓、非以韓能彊於楚也、其地勢然也、今王西面而事秦以攻楚、秦王必喜、夫攻楚以利其地、轉禍而說秦、計無便於此者、

【講義】夫れ貴國の群臣なり諸侯なり、己が土地の寡少なることを積りもせずして合從論者の甘味ある面白き語を聽き、「ぐる」になつて利益あるやうに繕ひ、何れも氣燄を吐いて云ふやう、吾が說に從ふときは、强國となつて天下の盟主たることが出來得ると、夫れ國家の大切なる利益を顧みることなくして目前少しばかりの得のつく說を信用するは、列國の君主を誤らすること之に過ぎたるものはあらず、大王若し此輩の言ふ所に惑ひて秦に事へ給はざるときは、秦は兵を下して宜陽に據り、韓の上地を絕ち切り、東部に於て成皐、滎陽を取るならんには、鴻臺の離宮や桑林の苑囿は大王の所有に非ざることとならん、夫れ秦の兵が成皐の路を塞ぎ上地の交通を絕たば、大王の國は離れ離れとなるべし、故に他の諸侯より先きに早く秦に事ふるは國家安泰なるも、秦に事へざれば危險なり、夫れ自ら禍を得べき種をまいて置きながら幸福の結果を求むるは實に淺慮にして、秦の怨みを受くるや深し、秦に抵抗して楚に順ふことは是れ禍の種をまくにて、亡びたくなしと思ふとも得べからじ、故に大王の爲に策を立つれば秦の爲にするが最上なり、秦の欲する所は楚を弱むるより切なるはなき處、能く楚を弱むる者は韓に優したるものなし、但し是れは韓が楚より强き爲には非ずして、其地勢の關係が自然に此の如きのみ、今大王が西方を向いて秦に事へ給ふ時は、秦王は喜ばるゝに相違なし、夫れ楚を攻めて其土地を所得とし、我が秦より受くべき禍を他國に轉じて我れは秦の歡心を得る次第なれば、此れほど便利なる計はあらざるなりと、

韓王聽儀計、張儀歸報、秦惠王封儀五邑、號曰武信君、使張儀

乘、軍馬一萬匹、虎賁の勇士、は勢よく躍り上り、頭に兜をも着けず、敵の矢に頭を射貫かれても臆することなく、戈を奮つて敵陣に突入する者數を知らず、秦に產する馬は逸物なるが上に騎兵は夥しく、其馬の馳するや、前足は抱へ込む形にて地を探るが如く、後足は地を蹶つて掘るが如く、一飛すれば三尋も踰ゆるやうなる駿足にして、躍り揚りて走る者數ふること出來ざる程なり、山東の兵士は兜を被り鎧を着て戰爭すれども、秦の兵は鎧を棄て素肌にて敵に向ひ、左の手に斬取りたる首を提げ、右の手に捕虜をわきばさむ、夫れ秦の士卒と山東の士卒との比較は、宛も孟賁と臆病者との比較の如し、秦の兵が重き力を以て山東の兵を壓することは、又烏獲が嬰兒を押へつくると同然なり、夫れ孟賁や烏獲の如き士卒を以て服從せざる弱國を攻むるは、鳥の卵の上に千鈞の重さある者を載せかくると異なる所なければ、其幸福に非ざることは必定なり、

【字解】 踸踔、跳躍すること、科頭、兜を被らず、素頭なるを謂ふ、貫頤、敵の矢にて頤を射貫かれながら尚ほ戰ふ勇者、徒裼、素足、はだぬぎ、孟賁、勇士の名、烏獲、大力者の名、

夫羣臣諸侯、不料地之寡、而聽從人之甘言好辭、比周以相飾也、皆奮曰、聽吾計、可以彊霸天下、夫不顧社稷之長利、而聽須臾之說、詿誤人主、無過此者、大王不事秦、秦下甲據宜陽、斷韓之上地、東取成皐滎陽、則鴻臺之宮桑林之苑、非王之有也、夫塞成皐、絕上地、則王之國分矣、先事秦則安、不事秦則危、夫造禍而求其福報、計淺而怨深、逆秦而順楚、雖欲毋亡、不可得也、

て云ふ、以前大王には張儀に欺かれ給ひ、非常に彼れを憎み居らるゝ際ゆゑ、張儀の來りたるは復讎をなすに此上もなき好機なれば、臣に於ては大王が彼れを烹殺し給ふことと存じたるに、之を赦し給ふは何事ぞ、今縱令彼れを殺すに忍びずとするも、其邪說を採用し給ふは不都合千萬なりと、懷王曰く、張儀を許して黔中の地を秦に與へずして事濟まば、是れ立派なる利益なり、又一旦許したることを後に至りて違約するは不便なりと、張儀を許して益〻秦と親密にせり、張儀は楚を立退き、途のついでに韓に赴き、韓王に說いて云ふ、韓の地は險惡にして人民は多く山に住ひ、五穀の生ずるものとては、菽に非ざれば麥にて、稻粱の如き上等の穀物なく、人民の食物はと問へば、大抵豆の汁物位に過ぎず、一年の收穫なきときは、糟糠だにも十分に食ふこと能はず、國に二个年を支ふる食糧なし、大王の兵卒を計算するに、引きくるめて三十萬に過ぎずして、小者や人夫など其中に在り、壘壁の守備卒を除き去るときは、現在の兵卒は二十萬を出でず、

【字解】菽、豆なり、厮徒、雜役に服する者、負養、物を擔ふ所の賤夫、

秦帶甲百餘萬、車千乘、騎萬匹、虎賁之士、跿跔科頭、貫頤奮戟者至不可勝數、秦馬之良、戎兵之衆、探前趹後、蹄間三尋騰者、不可勝數、山東之士、被甲蒙冑以會戰、秦人捐甲徒裼以趨敵、左挈人頭、右挾生虜、夫秦卒與山東之卒、猶孟賁之與怯夫、以重力相壓、猶烏獲之與嬰兒、夫戰孟賁烏獲之士、以攻不服之弱國、無異垂千鈞之重於鳥卵之上、必無幸矣、

【講義】秦の方は甲冑せる武士百餘萬人、戰車一千

なり、今秦と楚とは互ひに土地疆界を接することゆゑ、地形上に於て親密の國なり、大王誠に臣の意見を聽き給はゞ、臣は秦の太子を楚に人質として來らしむると共に、楚の太子をも人質として秦に入らしめ、秦の女を大王の側女となし、戸數一萬の都會を化粧料として差出すやうに取料らひ申さん、斯くて永久に兄弟の國となりて、互ひに攻め伐つが如きこと勿らしめんと存ず、臣の考へにては此れより便利なる計は恐らく之れなからんと、

【字解】關天下之匈、匈は胸なり、常山を以て天下の脊となすときは、衞及び陽晉は天下の胸に當る、蓋し此の地は秦晉齊楚の接觸點なり、關は締め括るなり、湯沐、前に出づ、

於是楚王已得張儀、而重出黔中地與秦、欲許之、屈原曰、前大王見欺於張儀、張儀至、臣以爲大王烹之、今縱弗忍殺之、又聽其邪說、不可、懷王曰、許儀而得黔中美利也、後而倍之不可、故卒許張儀與秦親、張儀去楚、因遂之韓說韓王曰、韓地險惡山居、五穀所生、非菽而麥、民之食、大抵飯菽藿羹、一歲不收、民不饜糟糠、地不過九百里、無二歲之食、料大王之卒、悉之不過三十萬、而廝徒負養在其中矣、除守徼亭鄣塞、見卒不過二十萬而已矣、

【講義】折柄楚の懷王は已に張儀を得たることゆゑ、約定に從つて黔中の地を秦に與ふべき處俄かに惜しくなりしかば、張儀の說に從はんとす、屈原諫め

泗上十二諸侯盡王之有也、凡天下而以信約從親相堅者、蘇秦、封武安君相燕、卽陰與燕王謀伐破齊而分其地、乃詳有罪、出走入齊、齊王因受而相之、居二年而覺、齊王大怒、車裂蘇秦於市、夫以一詐僞之蘇秦、而欲經營天下、混一諸侯、其不可成、亦明矣、今秦與楚接境壤界、固形親之國也、大王誠能聽臣、臣請使秦太子入質於楚、楚太子入質於秦、請以秦女爲大王箕箒之妾、効萬室之都、以爲湯沐之邑、長爲昆弟之國、終身無相攻伐、臣以爲計無便於此者、

【講義】大王篤と御勘考ありて秦と爭ふことを止め給はゞ、秦は兵を下して衞、陽晉を攻め、必ず大に天下の胷を閉ぢて働くことを得ざらしむべし、大王には又兵を起して宋を攻め給へ、五六个月も過たぬ間に宋を攻取ること出來申さん、已に宋を攻取りたる勢ひを以て東方を指して攻寄せ給ひなば、泗水附近の十二列國は盡く王の所有に歸すべし、凡そ同盟合從を以て天下列國の交を堅くせし者は蘇秦なるが、彼れは武安君に封ぜられて燕の宰相となり、間もなく祕密に燕王と相談の結果、齊を打敗りて其土地を分割せんと欲し、燕にて罪を犯したる振りをして齊に入りたるに、齊は敵の間者とも知らずして之を宰相に任じたり、然るに二个年を過ぎて彼れが燕王と申合せて齊に入込みしことが發覺するや、齊王は大に怒り、彼れを市に於て車裂の刑に處せり、夫れ一個の詐僞師なる蘇秦を以て天下を切り盛りして列國を合同せんとするも、其成功せざることは固より明白

ゐ、其勢ひ決して間に合ふべからず、列國の救ひを宛にして强秦の禍を忘るゝは是れ臣が大王の爲に患ふる所なり、大王嘗て吳人と戰ひ五戰に三勝して陣卒全滅し一の新城を守る爲に民の苦痛を殘されたり、臣聞く功の大なる者は危險に傾き易く民疲るゝ者は上を怨むと、危險に傾き易き功を維持する爲に强秦の意に逆ふは危險千萬なるべし、

且夫秦之所以不出兵函谷十五年以攻齊趙者、陰謀有合天下之心、楚嘗與秦構難戰於漢中、楚人不勝、列侯執珪死者七十餘人、遂亡漢中、楚王大怒、興兵襲秦、戰於藍田、此所謂兩虎相搏者也、夫秦楚相敝而韓魏以全制其後、計無危於此者矣、願大王執計之、

【講義】　且夫れ秦が過去十五年の間、兵を函谷關に出して齊趙を攻めざりし所以は、內々天下を併合せんとする陰謀あるが爲め列國に油斷せさせたるに過ぎず、秦が決して臆病に非ざる證據は、楚が嘗て秦と爭端を開いて漢中に合戰せし處、楚國は打負け、諸侯の身分の者竝に爵位ある者七十餘人戰死に及び、遂に漢中の地を失ひたりき、楚王は此の敗軍を怒り、兵を興して秦に不意打を掛け、藍田にて戰ひたるが、此れは兩虎相搏つものなり、夫れ秦楚は之が爲に雙方とも疲敝する處へ、韓魏の二國が全力を以て其後を制せんには迚も防ぐこと叶はず、楚の計は此れより危險なるはなし、何卒大王には篤と御思慮ありたし、

【字解】　執珪、爵位あるもの、

秦下甲攻衛陽晉、必大關天下之匈、大王悉起兵以攻宋、不至數月而宋可舉、舉宋而東指、則

山、浮江以下、至楚三千餘里、舫船載卒、一舫載五十人與三月之食、下水而浮、一日行三百餘里、里數雖多、然而不費牛馬之力、不至十日而拒扞關、扞關驚則從境以東盡城守矣、黔中巫郡、非王之有、秦擧甲出武關、南面而伐、則北地絶、秦兵之攻楚也、危難在三月之內、而楚待諸侯之救、在半歳之外、此其勢不相及也、夫待弱國之救、忘彊秦之禍、此臣所以爲大王患也、大王嘗與吳人戰、五戰而三勝、陣卒盡矣、偏守新城、存民苦矣、臣聞功大者易危、而民敝者怨上、夫守易危之功、而逆彊秦之心、臣竊爲大王危之、

【講義】秦は西に巴蜀の土地を有するが故に、大船に兵糧米を積み、汶山を起點として江水に浮べて南下し、楚に至るに三千餘里あり、軍隊の輸送には船を二艘づつ竝べ、其れに兵卒を載することとなるが、竝行せる二艘の船毎に五十人と三个月分の食糧とを載せ、江水を下流へ下るに、一日に三百餘里の速力なり、秦楚の間の里數は多しと雖も、牛馬の力を費すことなく、十日も過たぬ内に扞關に到達すべし、扞關騷動に及ばゞ、楚の國疆以東は盡く恐れて籠城すべし、斯くて黔中、巫郡は最早秦に歸して王の領地に非ず、秦は兵を擧げて武關に出で南伐せば、楚の北部は交通絶ゆべし、秦が楚を攻むる時は其進軍迅速にして、楚の危難は三个月の中に在るべし、然るに楚は列國の救ひを待つとも援兵の到着は半年以上を要するゆ

地不通、下河東、取成皐、韓必入臣、梁則從風而動、秦攻楚之西、韓梁攻其北、社稷安得毋危、且夫從者聚羣弱而攻至彊、不料敵而輕戰、國貧而數擧兵、危亡之術也、臣聞之、兵不如者、勿與挑戰、粟不如者、勿與持久、夫從人飾辯虛辭、高主之節、言其利、不言其害、卒有秦禍、無及爲已、是故願大王之孰計之、

【講義】凡そ天下中に於て强國となすべきもの、秦に非ざれば楚なり、楚に非ざれば秦なり、此の兩國が互に相爭ふときは其勢ひは兩立せず、必ず其一つは亡ぶべし、大王若し秦の味方を爲し給はずして敵對せらるゝときは、秦は甲兵を以て南下し、先づ宜陽に據りて足溜となさん、然るときは韓の上地は通路を絕ち塞がるゝこととなり、又秦の兵が河東を下り成皐を取るときは、韓は必ず秦に降參して臣となり、梁は其勢に吹き靡かされて秦に從ふならん、秦自身に楚の西面を攻め、韓と梁と楚の北部を攻むるならば、楚の國家は何とて危險なきことを得べき、且つ合從同盟は群弱國を團結して此の上もなき强國を攻むる次第にて、敵の强みを料らずして輕々しく戰爭に及び、國の貧にも拘はらず屢〻兵を擧ぐることは、危險を招き滅亡を致すべき仕方なり、臣の承はるには、彼我の兵數を比較して我れ彼れに及ばざれば戰ひを挑むべからず、彼我の兵糧を比較して我れ彼れに及ばざれば長く對陣すべからずと、夫れ合從論者は辯舌を飾り僞りの文句を竝べ、君主をして秦に從はざらしめて意氣地ありとし、合從の利を言つて其害を言はず、結局秦より攻められて禍を受け、彼等の計畫は間に合はずして終る、此の故に大王の篤と勘考あらんことを願ふ、

秦西有巴蜀、大船積粟、起於汶

甲席卷常山之險、必折天下之脊、天下有後服者先亡、且夫爲從者、無以異於驅羣羊而攻猛虎、虎之與羊不格、明矣、今王不與猛虎而與羣羊、臣竊以爲大王之計過也、

【講義】 張儀は已に牢獄を出でたれども、未だ楚の國を立去らずしてありけるが、蘇秦の死したる由を聞き、彼れには恩を受けたることあり、彼れの世に在る間は邪魔になるが如き行動をなさゞる事を誓ひたれば、秦の利益を謀るに就いて多少控目になしたれども、今は誰れにも遠慮なければ思ふ存分に働かんと思ひ、楚王に說いて曰く、秦の地は天下の半分を占め、其兵數の多きことは四箇國の軍隊に匹敵すべく、險阻を四方に繞らして黃河を帶の如くに纒ひ、四方は通路を斷切る所の山々を以て固めとなし、虎の如き猛き武士は百餘萬、戰車は一千乘、軍馬一萬匹あり、兵糧は積み蓄ふること山の如く、軍法軍令は既に明かにして、士卒は難儀に安んじて物の數とも思はず、君主は賢明にして嚴格に將校は智慮ありて武勇なり、縱令甲兵を出さずとも、常山の險阻を乘り踰ゆること席を卷くが如く、天下の脊骨を折くは必然なり、勢ひ此の如くなれば、天下列國の內、早く服從せざる者は一番先きに亡ぶべし、且つ合從同盟を爲す者は之を譬へて見るに、群がれる羊を驅りて猛虎を攻むるに異ならず、虎と羊とは打合ひにならざること明かなり、然るに今大王には此の勝つべき猛虎に味方せずして、負くべき群羊の味方となり給ふことは、臣に於て憚りながら大王の計をば誤れりと存ず、

【字解】 虎賁之士、猛士を謂ふ、折天下之脊、常山は天下に於て北に在り、人の脊骨あると同じきが故に云ふ、不格、敵せざるなり、

凡天下彊國、非秦而楚、非楚而秦、兩國交爭、其勢不兩立、大王不與秦、秦下甲據宜陽、韓之上

【講義】楚の懷王は、張儀が秦より到着するや否や之を牢の中へ押込めて殺さんとせし所、靳尙は張儀を救はんがため一策を設け、寵妃の鄭袖を煽動して云ふやう、夫人には王の寵愛衰へて賤めらるゝことを知り給ふやと、鄭袖は何故ぞと問ひけるに、靳尙の云ふやう、秦王は甚だ張儀を愛するが故に、是非とも幽囚の中より取り出さんと欲し、之が爲に今や上庸の地六縣を以て楚に賂ひ、美人を楚に贈り、秦の宮女の中にて歌曲の上手なる者を之が附添ひとならしめ、楚王の機嫌を取りて張儀を免さしめんとの計畫あり、楚王は土地が欲しさに秦を尊んで其言ふ所に從ふべし、さすれば秦の女は必ず、楚王に寵せられて貴き身分となり、夫人は必ず疎み斥けられ給はん、故に張儀の爲に楚王に取りなして之を救ひ出し給ふが上策なりと、鄭袖は吾が身の一大事と思ひしかば、日となく夜となく懷王に言上するやう、人の臣下たる者は銘々自分の君の爲に盡すは當然の事にて、張儀が秦の爲に大王を欺きたりとてさまで惡むべきにもあらず、初め黔中の地と張儀とを交換の約束の處、今其土地は未だ秦に差出す運びに至らざるに、秦の方よりは張儀を來らしめたるは、是れ此上もなく大王を重んじたる次第なり、然るに大王は秦に對して答禮を爲し給はず、反つて張儀を殺し給はゞ、秦は必ず大に怒り、楚に攻寄せ申すべし、妾に於ては母子諸共に御暇を戴きて江南に還り、秦の爲に切り殺されぬ用心を致したく存ずと、懷王は鄭袖に口說き立てられて張儀を囚へたることを後悔し、其死を赦して牢獄より出せし上、以前と同樣に厚く禮遇せり、

【字解】不欲出之、不の字は必の誤、所魚肉、魚や肉のやうに切りさいなまるること、

張儀既出未去、聞蘇秦死、乃說楚王曰、秦地半天下、兵敵四國、被險帶河、四塞以爲固、虎賁之士百餘萬、車千乘、騎萬匹、積粟如丘山、法令既明、士卒安難樂死、主明以嚴、將智以武、雖無出

【講義】秦は楚を强制して黔中の土地を得んと欲し、武關の外を以て之と交換すべき條件なりし處、楚王は秦に告げて云ふ、土地の交換は願はしからず、張儀を御渡しあらば黔中の地は無條件にて獻上致さんと、秦王は張儀を楚に引渡して黔中の地を手に入れたく思ひしも、流石に口に出すに忍びざりき、然るに張儀は自ら進んで楚に行くことを願出でしかば、秦王の曰く、楚王は汝が商於の地を與ふべき約束に違ひしことを怒り、汝を受けて腹愈やしをなさんとするなれば、懸念に堪へずと、張儀の曰く、秦は强く楚は弱ければ第一心丈夫なり、臣は楚の臣下にて靳尙と云ふ者と懇意なるが、彼れは楚の夫人の鄭袖に取入り居る者なるが此の鄭袖の言ふ所は楚王何事も聽き容るゝが故に、臣は身を逃るゝ便宜あり、其上臣は王の節を奉じ使者となりて參る事なれば、楚は何とて妄りに誅を加へ申すべき、萬一臣が誅せられたりとて、其れが爲に秦が黔中の地を得ることとならば、臣の願望此上やあるべきと、遂に秦に使せり、

楚懷王至則囚張儀將殺之、靳尙謂鄭袖曰、子亦知子之賤於王乎、鄭袖曰、何也、靳尙曰、秦王甚愛張儀、而不欲出之、今將以上庸之地六縣賂楚、以美人聘楚、以宮中善歌謳者爲媵、楚王重地尊秦、秦女必貴而夫人斥矣、不若爲言而出之、於是鄭袖日夜言懷王曰、人臣各爲其主用、今地未入秦、秦使張儀來、至重王、王未有禮而殺張儀、秦必大怒攻楚、妾請子母俱遷江南、毋爲秦所魚肉也、懷王後悔赦張儀、厚禮之如故、

之地、楚又復益發兵而襲秦、至藍田大戰、楚大敗、於是楚割兩城以與秦平、

【講義】楚王も使者の報告に因り始めて秦の爲に欺かれたることを知りて大に怒り、兵を發して秦を攻めんとせしに、陳軫の曰く、先日は大王臣に向つて口を閉づべき由を仰せられたるが、今や口を開いて愚存を申上ぐるも差支へなきかと存ず、大王は秦の詐僞を憤りて之を攻めんと欲し給へども、之を攻むるよりは寧ろ土地を割讓する方が得策なり、何の爲めに怨みのある秦に土地を割讓するかと云へば、是れは秦に賂ふわけにて、秦と兵を一緒にして齊を攻むるときは、卽ち我國は土地を秦に差出す替りに齊より其償を取ることとなる、斯くすれば大王の國は尙存在を得べしと、楚王聽入れずして竟に兵を發し、將軍屈匄に命じて秦を撃たしめたる所、秦と齊と共に楚を攻め、楚軍の首を斬ること八萬に及び、將軍屈匄をも討取り、遂に丹陽、漢中の地を奪へり、楚は敗軍を恢復せんと益、兵を發して秦を襲ひ、藍田まで進軍し、玆にて大戰爭ありしが、楚は大に敗走せり、是に於て兩城を割いて秦と和睦に及べり、

秦要楚欲得黔中地、欲以武關外易之、楚王曰、不願易地、願得張儀而獻黔中地、秦王欲遣之、口弗忍言、張儀乃請行、惠王曰、彼楚王怒子之負以商於之地、是且甘心於子、張儀曰、秦彊楚弱、臣善靳尙、尙得事楚夫人鄭袖、袖所言皆從、且臣奉王之節使楚、楚何敢加誅、假令誅臣而爲秦得黔中之地、臣之上願、遂使楚、

楚使者曰、臣受令於王、以商於之地六百里、不聞六里、還報楚王、

【講義】楚王は飽くまでも張儀を信用せしかば、陳軫の言を斥けて云ひけるは、陳子よ、口を閉ぢて何事も言ふ勿れ、此方が秦より土地を手に入るゝを待つべしと、斯くて宰相の印を張儀に授け、厚く手宛てに及び、張儀の方は其れにて最早手順もつきたれば、遂に關門を閉ぢて齊と同盟の約束を絶切り、是れにて秦に對する條件を果しゝわけゆゑ、一人の將軍を張儀に隨はしめて秦に派遣し、契約の土地を受取らしめんとせし處、張儀は秦に歸るや否や、態と手綱を取りはづして車より落ち、負傷の體にて三箇月も參内に及ばず、之がため土地の授受も後れたり、楚王は之を聞きて云ふやう、張儀は此方が齊に愛想づかしを爲す事が未だ足らざる所より放任するならんと、因りて勇士を宋に派遣し、宋の割符を以て齊に入り、齊王を罵らしめければ、齊王は大に怒り、我を折つて秦に頭を下げ、齊と秦との國交は合體せり、此の如く齊は已に楚を離れて秦の味方となりしかば、張儀は最早時分は宜しと參內の上楚の使者に向つて謂ふやう、臣に奉邑六里あり、今度貴國が齊と絶交せられたる報酬として大王の左右の人まで獻上致さんと、使者云く、臣は楚王より受取るべき命を受けたるは商於の地六百里にして、六里と云ふ事は承らずと、本國に立還りて此趣を楚王に報告せり、

【字解】綏、車に上るとき手掛とする綱のこと、

楚王大怒、發兵而攻秦、陳軫曰、軫可發口言乎、攻之不如割地、反以賂秦、與之并兵而攻齊、是我出地於秦、取償於齊也、王國尚可存、楚王不聽、卒發兵而使將軍屈匄擊秦、秦齊共攻楚、斬首八萬、殺屈匄、遂取丹陽漢中

【講義】・楚にては坐ながら六百里の土地を得ることゆゑ、群臣皆懐王に向つて慶賀せし處、陳軫と云ふ者のみ之を弔せしかば楚王は立腹に及び、詰りて云ふやう、此方軍隊を興さず兵士を出さずして六百里の土地を得る次第なれば群臣は皆賀するに、汝のみ之を弔するは何如なる仔細なるぞと、陳軫對へて曰く、大王はめでたき事のやうに仰せあれども決して然らず、臣の觀察する所に據れば、商於の地は得ることならずして齊と秦とは結合せん、齊秦結合するときは禍の來ること必定なりと、楚王曰く、其れには論據ありやと、陳軫對へて曰く、夫れ秦が楚を重んずる所以は楚に齊の國が附き居るが爲なり、然るに今關門を締切りて其大切なる齊との同盟の約束を斷絶するときは、楚は孤立とならん、秦が何とて此の孤立の國を味方にせんが爲に商於の地六百里を與ふる理由あらんや、張儀は斯かる約束をなすと雖も秦に歸着せしならば、必ず大王に對して違約に及ぶべし、是れ北に於ては齊との親善を失ひ、西に於ては患を秦に生ずる次第なり、而して兩國の兵は倶に攻め來るに相違なし、善く王の爲に計れば、内密には齊と結託し置き表面齊と絶交し、張儀に人を附けて差遣すに若くはなし、苟くも秦が約束通り吾國に商於の土地を與ふるを待ちて齊と絶交するも晩きことはあらず、若し土地を與へぬときは、已に内密に齊と結託して居るゆゑ不都合なし、是れ謀計なりと、

楚王曰、願陳子閉口毋復言、以待寡人得地、乃以相印授張儀、厚賂之、於是遂閉關絶約於齊、使一將軍隨張儀、張儀至秦、詳失綏墮車、不朝三月、楚王聞之曰、儀以寡人絶齊未甚耶、乃使勇士至宋、借宋之符、北罵齊王、齊王大怒、折節而下秦、秦齊之交合、張儀乃朝、謂楚使者曰、臣有奉邑六里、願以獻大王左右、

【講義】秦は齊を伐たんとせしに、齊は楚と同盟し、力を併せて秦を防ぎしかば、秦は楚を齊より離れしむる目的を以て張儀は往いて楚の相となれり、楚の懷王が張儀の來る由を聞き、上等の客舍を明けて其住所と定め、自ら其所に出向きて云はるゝやう、此の國は邊鄙の見苦しき國なるが、先生には如何なる事を敎へ給はんとするかと、張儀乃ち楚王に說いて曰く、大王誠に能く臣の說を聞入れ給ひ、關を閉ぢて齊との約束を打切り絶交せられなば、臣は商於の土地六百里を大王に獻上し、秦王の女を大王の御召使と致し申さん、秦楚の兩國互に嫁に遣り嫁に取り、永久に兄弟の國とならば、此の上は齊を弱め西は秦に利益ある仕方にて、此れほど便利なる計は之れなしと、楚王は大に滿足して之を許せり、

【字解】箕箒之妾、はき掃除の役をする女と云ふこと、謙辭なり、

羣臣皆賀、陳軫獨弔之、楚王怒曰、寡人不興師發兵、得六百里地、羣臣皆賀、子獨弔何也、陳軫對曰、不然、以臣觀之、商於之地不可得、而齊秦合、齊秦合則患必至矣、楚王曰、有說乎、陳軫對曰、夫秦之所以重楚者、以其有齊也、今閉關絶約於齊、則楚孤、秦奚貪夫孤國、而與之商於之地六百里、張儀至秦、必負王、是北絶齊交、西生患於秦也、而兩國之兵必俱至、善爲王計者、不若陰合而陽絶於齊、使人隨張儀、苟與吾地、絶齊未晚也、不與吾地、陰合謀計也、

に說いて採用せらるゝ時は、之が爲に己が身も諸侯に取立てらるゝことゆゑ、游說の人共は日夜となく腕を握り目に角を立て齒を喰ひしばりなどして合從の便利を申立て、人君に說かぬものなし、列國の君主は其辯を賢として其說に牽き附けられ、自然に惑はさるゝこととなる、臣の承はるに、羽も澤山積れば舟を沈め、輕き者も多くなれば車の軸を折り、大勢の口は金をも鑠し、非難重なれば骨までも銷す由、縱令信ずるに足らざる合從の說と雖も、度々大王の御耳に入るときは、此の譬への如く尤もと思はるゝに至るやも知れず、故に大王には十分能く取調べの上計策を定められんこそ願はしけれ、臣は兎も角御暇を戴き、此魏を立退き申すべしと、哀王は張儀に說附けられたるため、合從の契約を破り、張儀の手を經て秦に和睦を申込めり、是に於て張儀が魏に仕へたる目的も達しければ、秦に歸りて其宰相となれり、其後三年を過ぎて魏は復び秦に背きて合從同盟に入りしかば、秦は魏を攻めて曲沃を取りぬ、明年魏は復び秦に事ふることとなりぬ、

【字解】積羽云々、羽は薄き物なれども、之を積み重ぬるときは舟を沈め、何如に輕き物質なりとも、聚めて車に載するときは軸を折り、又衆人の口に掛るときは、彼の堅き金も鑠され、人の非毀を受くること屢々なれば、骨までも銷滅す、

秦欲伐齊、齊楚從親、於是張儀往相楚、楚懷王聞張儀來、虛上舍而自館之曰、此僻陋之國、子何以敎之、儀說楚王曰、大王誠能聽臣、閉關絕約於齊、臣請獻商於之地六百里、使秦女得爲大王箕箒之妾、秦楚娶婦嫁女、長爲兄弟之國、此北弱齊而西益秦也、計無便此者、楚王大說而許之、

【講義】今大王の爲に利害を打算するに、秦に事ふるが得策なり、若し秦に事ふるときは、楚も韓も必ず手出しをなすまじ、此の二个國が魏を侵す患なき以上、大王には枕を高くして安眠なさることと出來、梁國に於て心配すべきこと無くなるや必定なり、且つ秦が列國の中に於て尤も弱めんと欲する所の國は楚が一番なる處、又其楚を弱むることの出來得る國は梁が一番なり、抑も楚は富國大國と云ふ名はあれども、其實際は空虛なり、又其士卒は多數とは云へ、步き方輕くして逃げ易く、踐みこたへて戰ふこと能はず、されば梁の兵を擧りて南方に向ひ楚を伐つときは、勝利を得るに定まれり、楚の土地を切取りて梁の版圖に附け加へ、楚の土地を削り缺きて秦に持行くは、是れ梁に來べき禍ひを楚に片附けて、自國を安泰にする仕方にして、此れは善事なり、大王若し臣の說に從ひ給はずんば、秦は其儘には致すまじく、必ず鎧ひたる兵士を下して東方に向ひ、梁を征伐すべし、此の場合に至り、秦に事へたしと思ふとも最早得らるべきに非ず、

且夫從人多奮辭而少可信、說一諸侯而成封侯、是故天下之游談士、莫不日夜搤腕瞋目切齒、以言從之便、以說人主、人主賢其辯而牽其說、豈得無眩哉、臣聞之、積羽沈舟、羣輕折軸、衆口鑠金、積毀銷骨、故願大王審定計議、且賜骸骨辟魏、哀王於是乃倍從約而因儀請成於秦、張儀歸復相秦、三歲而魏復背秦爲從、秦攻魏取曲沃、明年魏復事秦、

【講義】且つ合從論者は多く辯口を奮ひ巧みに說を立つれども信用すべきものは少し、彼等は一の諸侯

亡、可立而須也、此臣之所爲大王患也、

【講義】 且つ列國が合從とて排秦同盟をなす理由は、此れに由りて國家を安泰になし君主の位置を尊嚴にし兵を強くして名譽を顯はさんとするに在り、今合從論者は天下の諸侯を一纏めにし、彼等をして兄弟の義を結ばしめ、白馬を斬り其血を飲んで洹水の附近に盟をなして關係を固めたるが、元來肉親の兄弟、同じ父母の子ながら尚金錢を爭ふ事あつて信用出來ざるに、況して詐僞反覆を手段とする蘇秦の餘謀を恃みたりとて、其成功せざることは亦明かなり、大王若し合從の如き愚策を取りて秦に事へざるときは、秦は兵を下して河外の地を攻め、卷、衍、酸棗に據り、衞を劫して陽晉を取らん、然るときは趙は南の方梁と通ぜず、かくありて梁は北の方趙と通せず、かくありて合從の道は斷絕すべし、合從の道斷絕するときは、大王の國は危險の事なからんと欲するも得べからず、秦は韓を己れの手に歸せしめて共に梁を攻むべきが、韓は秦を恐ろしく思ふがゆゑに、秦の自由となりて一致の行動に出でなば、梁の滅亡は立ちどころに待つべきなり、此れ臣が大王の爲に患ふる所なり、

爲大王計、莫如事秦、事秦則楚韓必不敢動、無楚韓之患、則大王高枕而臥、國必無憂矣、且夫秦之所欲弱者、莫如楚、而能弱楚者、莫如梁、楚雖有富大之名、而實空虛、其卒雖多、然而輕走易北、不能堅戰、悉梁之兵、南面而伐楚、勝之必矣、割楚而益梁、虧楚而適秦、嫁禍安國、此善事也、大王不聽臣、秦下甲士而東伐、雖欲事秦、不可得矣、

不與趙、則趙攻其北、不合於韓、則韓攻其西、不親於楚、則楚攻其南、此所謂四分五裂之道也、

【講義】張儀は斯く秦の勢ひの盛んなるに乘じて魏王に說いて云ふ、魏の地は四方千里に過ぎず、士卒は三十萬に過ぎず、其地勢は四方平坦にして、列國との通路東西南北に在り、隨つて人民輻湊す、別に名山大川等の限界なければ、鄭より梁に至るまでの二百餘里の間は車は馳せ人は走り、何の力をも勞せずして至り得べし、梁は南に於て楚と界を接し、西に於て韓と界を接し、北に於て趙と界を接し、東に於て齊と界を接するが故に、此等の隣國に備ふるため守備隊を四方に置き、見附見附を守るもの十萬に下らず、梁の地勢は元來が戰場なり、今となれば梁が南の方楚に味方して齊に味方せざるときは、齊は其東を攻むべく、又東の方齊に味方して趙に味方せざるときは、趙は其北を攻むべく、韓と合體せざるときは、韓より其西を攻むべく、楚と親密にせざるときは、楚より其南を攻むべし、是れ謂はゆる四分五裂の道なり、

【字解】亭障、壘壁を謂ふ、

且夫諸侯之爲從者、將以安社稷尊主彊兵顯名也、今從者一天下、約爲昆弟、刑白馬以盟洹水之上、以相堅也、而親昆弟同父母、尙有爭錢財、而欲恃詐僞反覆蘇秦之餘謀、其不可成亦明矣、大王不事秦、秦下兵攻河外、據卷衍酸棗、劫衞取陽晉、則趙不南、趙不南、而梁不北、梁不北、則從道絕、從道絕、則大王之國欲毋危不可得也、秦折韓而攻梁、韓怯於秦、秦韓爲一、梁之

秦戰敗、明年、齊又來敗魏於觀津、秦復欲攻魏、先敗韓申差軍、斬首八萬、諸侯震恐、

【講義】張儀は秦の宰相となり、四年目に是れ迄諸侯の格なりし惠王を立てゝ王となし、一歲を過ぎて張儀は秦の將となりて魏を伐ち陝を取り、上郡の要塞を築きぬ、其後二年、秦の使となり、齊楚兩國の宰相と齧桑の東に公見し、此の會合より還りて後、宰相の職を免ぜられたるが、魏の宰相となりて秦の利益を謀れり、其第一着として、魏を諸國に先立ちて秦に事へさせ、列國をして之に倣はしめんとせし處、魏王は張儀の說を用ひざりければ、秦王怒りて魏の曲沃と平陽との土地を攻め取り、張儀の此度の働きは失敗せしにも拘はらず內々前にも增して厚く之を遇せり、張儀は己れの行屆かざりしことを羞ぢ、歸國して報告すべき程の土產もなかりければ其儘魏に留りしが、四年を經て魏の襄王卒し、哀王位に卽く、張儀又もや哀王に說き秦に事へしめんとせしも、哀王從はざりしゆゑ、張儀は內々秦に手筈を打合せて魏を伐たしめぬ、魏は秦と戰つて敗北せし上、明年齊より又攻め來りて、觀津にて魏の軍を破る、然る處秦は復魏を攻めんと欲し、先づ韓の將軍申差の軍を敗り、首を斬ること八萬級に及びしかば、列國之を聞いて震ひ恐れぬ、

而張儀復說魏王曰、魏地方不至千里、卒不過三十萬、地四平、諸侯四通輻湊、無名山大川之限、從鄭至梁二百餘里、車馳人走、不待力而至、梁南與楚境、西與韓境、北與趙境、東與齊境、卒戍四方、守亭鄣者不下十萬、梁之地勢固戰場也、梁南與楚而不與齊、則齊攻其東、東與齊而

使公子繇質於魏、儀因說魏王曰、秦王之遇魏甚厚、魏不可以無禮、魏因入上郡少梁謝秦惠王、惠王乃以張儀爲相、更名少梁曰夏陽、

【講義】　惠王は司馬錯の說を聞いて曰く、善し、此方は汝の說に從ふべしと、竟に兵を起して蜀を伐ち、十月に之を攻め取り遂に其地を鎭定し、蜀王の位を降して侯となし、陳莊をして蜀の宰相たらしめたり、蜀が秦に屬せしより、秦は之が爲に益強國となり、富力加はりければ、諸侯を輕蔑して驕傲の態度多かりき、秦の惠王の十年に公子華をして張儀と魏の蒲陽を圍ませ、之を降參せしめけるが、張儀は惠王に言上し、此の蒲陽の地をば復び魏に與へしむると共に公子繇を人質として魏に遣し置き、張儀は魏王に說いて云ふ、秦王の魏に對する甚だ手厚く、已に取りたる土地をも返し與ふる程なれば、魏の方に於ても相應の挨拶なくてはならぬ譯なりと、魏は之がため上郡、小梁の土地を秦に差入れて、秦の惠王の好意に酬いけり、惠王は張儀を宰相に任じ、少梁の土地の名を變更して夏陽と曰へり、

【字解】　蒲陽、魏の都會の名、

儀相秦四歲、立惠王爲王、居一歲、爲秦將、取陝、築上郡塞、其後二年、使與齊楚之相會齧桑、東還而免相、相魏以爲秦、欲令魏先事秦而諸侯効之、魏王不肯聽儀、秦王怒、伐取魏之曲沃平周、復陰厚張儀益甚、張儀慙、無以歸報、留魏四歲、而魏襄王卒、哀王立、張儀復說哀王、哀王不聽、於是張儀陰令秦伐魏、魏與

亂を止むるの名譽あり、

【字解】繕、膳に同じ、具食なり、

今攻韓劫天子、惡名也、而未必利也、又有不義之名、而攻天下所不欲危矣、臣請論其故、周天下之宗室也、齊韓之與國也、周自知失九鼎、韓自知失三川、將二國幷力合謀、以因乎齊趙、而求解乎楚魏、以鼎與楚、以地與魏、王弗能止也、此臣之所謂危也、不如伐蜀完、

【講義】然るに張儀の申すが如く韓を攻め天子を劫すは、名譽より言へば惡名なる上に、利益の方より言ふも必定利ありとは保證し難し、又不義の名ありて天下が攻むる意思なき所を攻むることは危險なり、臣が試みに其理由を述ぶることを許し給へ、周は天下の宗家として尊ぶ所なり、齊は韓の同盟國なり、周が自ら秦の爲に九鼎を失ふことを知り、韓が自ら秦の爲に三川を失ふことを知らば、利害共通の點よりして此の二國は力を幷せ謀を合せ、齊趙の手を經て楚魏に向ひ此の難儀を救ふことを賴むに至るべく、其結果或は鼎を楚に與へ地を魏に與ふるも、大王には之を止むること能はず、此れ臣が危しと申す次第なれば、韓を伐つより寧ろ蜀を伐ち給ふが完全の計なりと、

【字解】解、安全なり、

惠王曰善、寡人請聽子、卒起兵伐蜀、十月取之、遂定蜀、貶蜀王更號爲侯、而使陳莊相蜀、蜀既屬秦、秦以益彊富厚輕諸侯、秦惠王十年、使公子華與張儀圍蒲陽、降之、儀因言秦、復與魏、而

給ふごとは、王業とは餘程懸け離れたる仕方なりと、

司馬錯曰、不然、臣聞之、欲富國者務廣其地、欲彊兵者務富其民、欲王者務博其德、三資者備而王隨之矣、今王地小民貧、故臣願先從事於易、夫蜀西僻之國也、而戎翟之長也、有桀紂之亂、以秦攻之、譬如使豺狼逐羣羊、得其地足以廣國、取其財足以富民、繕兵不傷衆、而彼已服焉、拔一國、而天下不以爲暴、利盡西海、而天下不以爲貪、是我一擧而名實附也、而又有禁業止亂之名、

【講義】司馬錯は張儀が韓を攻むべしと云ふ議論に反對して曰く、さにあらず、臣の聞きたる言に、國を富まさんと欲する者は其土地を擴張することに努力し、兵力を強くせんと欲する者は其民を富ますことに努力し、天下の王たらんと欲する者は其德の普及に努力すと、此の三箇條の資格備はれば、王業は其結果として成立す、今大王の領土は小にして人民は貧しければ、臣は先づ易き方を仕事となさんことを願はしく存ずるなり、夫れ蜀は西方の片田舍の國にして戎狄の長なるが、現に彼の國に於ては桀紂の如き動亂あり、秦が之を攻むるは、譬ふるに豺狼が群れる羊を逐ふが如く、迚も敵對し難かるべし、斯くて其地を得れば國土を擴張するに足り、其貨財を取れば人民を富ますに足る、只兵糧の備へをなす迄にて、大勢の負傷することなくして彼れ已に服すべく、一國を拔取りたりとて天下の人之を暴となさず、利益は西海を盡したりとて天下の人貪慾となさず、是れ我れ一擧して名も實も俱に附屬せん、其上に又暴を押へ

楚、下兵三川、塞斜谷之口、當屯留之道、魏絶南陽、楚臨南鄭、秦攻新城宜陽、以臨二周之郊、誅周王之罪、侵楚魏之地、周自知不能救、九鼎寶器必出、據九鼎、案圖籍、挾天子以令於天下、天下莫敢不聽、此王業也、今夫蜀西僻之國、而戎翟之倫也、敝兵勞衆、不足以成名、得其地、不足以爲利、臣聞爭名者於朝、爭利者於市、今三川周室天下之朝市也、而王不爭焉、顧爭於戎翟、去王業遠矣、

【講義】司馬錯は蜀を伐つべしとの議論なりしが、張儀は韓を伐つ方が得策なりと言ひければ、惠王は其理由を聞かんことを望まれたり、張儀云ふやう、魏と親を結び楚と仲を善くし、兵を三川に下し、斜谷の口を塞ぎ、屯留の道に當り、魏は南陽の路を絶ち切り、楚は南鄭に臨み、秦は新城、宜陽を攻めて東西二周の城外に臨み、周王の罪を正して楚魏の地を侵しなば、周は到底自身に助かる道なきを知り、九鼎寶器を差出して降を乞はん、其九鼎の立證する尊き位に據り、天下の記錄を取調べ、天子を引抱へて天下に號令を施す時は天下中誰れも從はざる者なからん、是れ王業なり、然るに今彼の蜀の國の如きは西の方の片隅に在る土地にて野蠻人の同類なれば、これを征伐したりとて兵士を疲敝せしめ人民を勞苦せしむるのみにて名譽を得るにも足らず、又其土地を手に入れたればとて別段利益とするに足らず、臣の承はるに、名譽を爭ふ者は朝廷に於て爲し、利益を爭ふ者は市場に於て爲すと、今三川と云ひ周室と云ひ、天下の朝市と云ふべき處にして、王は名をも利をも得給ふべきに、此等を爭はずして反つて夷狄の土地を爭ひ

張儀既相秦、爲文檄告楚相曰、始吾從若飲、我不盜而璧、若笞我、若善守汝國、我顧且盜而城、苴蜀相攻擊、各來告急於秦、秦惠王欲發兵以伐蜀、以爲道險狹難至、而韓又來侵秦、秦惠王欲先伐韓後伐蜀、恐不利、欲先伐蜀恐韓襲秦之敝、猶豫未能決、司馬錯與張儀爭論於惠王之前、

【講義】 張儀は已に秦の宰相となり、强國の威勢を利用して何事も出來得べき身分となりしかば、茲に書簡を作り、曾て己れに盜賊の疑ひを掛け辛き目に遇はせしことある楚の宰相に申遣りけるは、昔し吾れ汝の家に召ばれて汝の宴に列せし時、吾れ汝の璧を盜みもせぬに汝は我れを盜として笞ちたることあり、今度は吾れ汝の城を盜むべきが故に、汝は用心して汝の國を守るべしと、之とは話變りて苴の國と蜀の國と互に攻合ひを始め、雙方とも使を秦に遣はし急の由を述べて救を求めたり、秦の惠王は苴の味方をなし軍隊を繰出して蜀を伐たんと欲せしが、思案するに、蜀の道路は險阻にして幅狹く、中々目的地へ達することならず、其上韓が秦を侵すの恐れあり、秦の惠王は先づ韓を征伐して後に蜀を伐たんかと考へ見たれども、其れにては勝算覺束なく、それかと云つて先づ蜀を伐たんとすれば、韓が秦の疲弊せる處へ攻寄する恐れあり、前後の問題に就いて彼れ此れと心惑ひ決定すること能はず、此れに關し司馬錯と張儀と惠王の前に於て爭論せり、

【字解】 文檄、文書と云ふに同じ、若、汝と訓ず、而、亦汝と訓ず、

司馬錯欲伐蜀、張儀曰、不如伐韓、王曰、請聞其說、儀曰、親魏善

惠王は彼れを以て客分の大臣となし、列國征伐の事を相談に及びたり、張儀已に秦王に用ひられ、蘇秦の思ひ通りになりしかば、是れまで其目的の爲に張儀に隨ひ居ける蘇秦の家來は別れ去るべき由を申出でけるに、張儀の云ふやう、君の御蔭にて立派なる身分となりしことゆゑ、此れより御恩返しを致さんと思ふ折に、何とて去り給ふかと、家來乃ち語り出づるやう、是れまで及ばずながら君の御世話を致したるは、是れ拙者が君の人物を知つて爲したる事に非ず、君の人物を知る者は卽ち拙者の主人なる蘇君なり、蘇君が表面君を怒らせ裏面より世話をなして秦に入らしめたる精神は他に非ず、蘇君は列國の排秦同盟を成立せしめたる處、秦が趙を伐つて折角出來たる同盟の破れんことを恐れ、秦の政柄を得て自分の助けとなるべき人を得たしと色々思案せられしが、是れは君に非ざれば不可能なるより、態と君に恥辱を與へて立腹させ、拙者に申含めて內密に君の入用の品品を供給せしめたる次第にて、是れ盡く蘇君の計略なり、然るに今君に於ては已に秦に用ひられ蘇君の希望も達したれば、是れより歸りて蘇君に成功の趣を報告せざるべからざるが故に御別れ致すなりと、

【字解】奉、奉給なり、

張儀曰、嗟乎此吾在術中而不悟、吾不及蘇君明矣、吾又新用、安能謀趙乎、爲吾謝蘇君、蘇君之時、儀何敢言、且蘇君在、儀寧渠能乎、

【講義】張儀は蘇秦の家來の話を聞きて嘆息して云ふやう、我が今までの逕路は皆蘇君の手に乘せられたるわけにて、蘇君の手だての中に在りながら心附かざりし程なれば、吾が蘇君に及ばざることは明白なり、其上今新たに用ひられたる儀ゆゑ、何とて趙を伐つべき謀などを運らし申さんや、足下歸られなば此方の爲に宜しく蘇君に傳言をなし給はるべし、蘇君が獨天下の場合に、儀は何とて自己の說を申出さんや、且つ蘇君が在らるゝに張儀に何事が出來申すべき、安心あるべしと、

然貧、無因以進、吾恐其樂小利、而不遂、故召辱之、以激其意、子爲我陰奉之、乃言趙王、發金幣車馬、使人微隨張儀、與同宿舍、稍稍近就之、奉以車馬金錢、所欲用、爲取給而弗告、張儀遂得以見秦惠王、惠王以爲客卿、與謀伐諸侯、蘇秦之舍人乃辭去、張儀曰、賴子得顯、方且報德、何故去也、舍人曰、臣非知君、知君乃蘇君、蘇君憂秦伐趙敗從約、以爲非君莫能得秦柄、故感怒君、使臣陰奉給君資、盡蘇君之計謀、今君已用、請歸報、

【講義】蘇秦は張儀を辱かしめて遂ひ返せし後、己れの家來に向つて話すやう、張儀と云ふ男は天下中に並びなき賢者にして、自分も殆んど彼れには及ばざるなり、今自分は幸ひに先づ用ひられて立身に及びたるが、秦に勢力を得て自分の爲になるべき人を必要とする處、此れは張儀に限りて出來得べし、然れども貧なるが故に秦に取入るべき資力なし、彼の如き人物が些細の利益を好き事として十分才力を遂げざらんことを恐るゝが故に、召び寄せて之に恥辱を與へ彼れの心を激せしめたり、されば彼れは我が思ふ坪にはまりて秦に赴くこととならん、汝は我が爲に內々張儀に手宛てを致しくれよと、因つて趙王に言上し、金銀反物車馬等を政府の庫より取出し、人をして見え隱れに張儀の跡に附き、其上同じ宿屋に泊らせて次第に懇意を結ばしめ、車馬金錢をば差出し、張儀の必要あり次第勝手に之を使用して一一斷るに及ばざることとせり、張儀は之が爲に運動費に不自由なかりしかば、遂に秦の惠王に謁見することを得たり、

自以爲故人、求レ益反見レ辱、怒、念諸侯莫レ可レ事、獨秦能苦レ趙、乃遂入レ秦、

【講義】　蘇秦は此の時已に趙王に說いて列國同盟の約束を成立せしむることを得たれども、秦が同盟列國の或る物を攻めて約束を破らせ、己れと結託せしめながら、後に至り其國との密約を反古にせんことを恐れ、誰れか自分の爲に秦に入つて働くべき者なきかと思案せし處、張儀の外心當りなかりしかば、或人に意中を申含め遠廻しに張儀の心を動かしめけるが、其口上に云ふ、足下には其昔し蘇秦とは同窓の好みにて親しかりしに、今蘇秦は志を得て要路に當れり、足下は何故趙に赴き蘇秦の手に縋りて其願望を達せざるかと、張儀は之を聞いて得策なりと思ひしかば、早速趙に出向き、名刺を通じて蘇秦に面會を求む、蘇秦は態と門下の人に申附けて取次ぎを爲さゞらしむると共に、張儀の立去ることも出來ぬ樣に爲さしめ、四五日程斯く爲し置き、其後やつと面會せしが、其時も張儀を堂の下に坐らし、婢僕に與ふるが如き粗末なる食物を饗し、聽て色々に張儀を責めて云ふ、足下材能あらば、斯くまで落ちぶれ恥辱を受くまじきものを、吾れ足下の事を申立てゝ富貴の身分にすること叶はざるに非ざれども、足下は取立て申す資格なしとて逐ひ返しぬ、張儀が趙に來りて蘇秦に逢ひたるは、彼れは古るなじみの友なれば手寄ることも出來べしと思ひ、己れの利益を得んとせしかひもなく、反つて散々に侮辱せられければ大に怒り、何處か仕官して復讐を遂ぐべき國はなきかと考へたる處、諸侯の中に是れぞと云ふ心當りもなかりしが、獨り秦のみは趙を苦しむる勢力を持つことゆゑ、遂に秦を指して赴きぬ、

【字解】　秦已當路、蘇秦が從約の長となりしことを謂ふ、讓、責むるなり、

蘇秦已而告ニ其舍人一曰、張儀天下賢士、吾殆弗レ如也、今吾幸先用、而能用ニ秦柄一者、獨張儀可耳、

ばざることを認識し居れり、さて張儀は學問も一通り習ひ覺えければ、此れを以て身を立てんと列國を說き廻り楚の國に至りし折、楚の宰相の酒宴に連なりしが、散會の後に至り宰相の寶物なる璧の紛失せしこと發覺せり、宰相の家に出入する者、張儀に疑ひを掛けて云ふやう、張儀は貧しきが上に品行も善からざれば、相公の璧は彼れが盜みたるに相違なしと、一同張儀を取り抑へ、幾百ともなく笞つて拷問しけれど、張儀は飽くまで璧を盜みたる覺えなしとて其罪に服せざりしかば、彼等も爲ん方なく之を解放せり、張儀辛うじて無實の難を逃れ歸宅せし處、其妻は嘆じて云ふやう、さても腹立たしきことかな、あなたがなまじひに書物などを讀み游說を爲さゞりせば、此の樣な恥辱を受けざりしものをと、張儀は妻の愚痴を聞いて別に言ひ譯もせず、話して云へるに、吾が舌を視てくれよ、まだ有るか、どうかと、妻は笑つて云ふ、舌は尙在りと、張儀は之を聞いて、舌さへあれば十分なり、遊說に差支へなくば何も心配するに及ばずと言へり、

【字解】 鬼谷先生、王詡と云ふ者、老子の道を學び淸溪の鬼谷に隱れて鬼谷先生と號す、〇醳、釋に同じ、

蘇秦已說趙王而得相約從親、然恐秦之攻諸侯敗約後負、念莫可使用於秦者、乃使人微感張儀曰、子始與蘇秦善、今秦已當路、子何不往游以求通子之願、張儀於是之趙、上謁求見蘇秦、蘇秦乃誡門下人不爲通、又使不得去者數日、已而見之、坐之堂下、賜僕妾之食、因而數讓之曰、以子之材能、乃自令困辱至此、吾寧不能言而富貴子、子不足收也、謝去之、張儀之來也、

次其時序、毋令獨蒙惡聲焉、

【講義】 太史公云ふ、蘇秦、蘇代、蘇厲の兄弟三人は何れも諸侯の國々を說き廻りて名を列國に顯はしたるが、彼等の術は權謀と變詐とが得意の伎倆なりき、然るに蘇秦は却つて仇敵より反間の計に掛けられて殺され、天下中の物笑ひとなり、此れより人々は彼れの術を學ぶことを忌むに至れり、世間蘇秦の事を言ふ者は區々にて、異りたる說多し、但し蘇秦の時代に非ざる事柄も、蘇秦の權變的行爲に似寄るものあるときは皆之を蘇秦に取合せたるため、斯く異說あるなるべし、夫れ蘇秦は村里より身を起し六國を連合して同盟せしめたるに由れば、衆人に立愈りたる智力ある者なり、故に其行跡を陳べ、其年月の順序を追ふことゝして、彼れに限り惡名を蒙むること無きやうにせり、

【字解】 被反間以死、蘇秦が齊の大夫の爲に殺されたるを云ふ、閭閻、里中の門なり、民間の意に用ふ、

張儀列傳第十

張儀者魏人也、始嘗與蘇秦俱事鬼谷先生、學術、蘇秦自以不及張儀、張儀已學而游說諸侯、嘗從楚相飲、已而楚相亡璧、門下意張儀、曰、儀貧無行、必此盜相君之璧、共執張儀、掠笞數百、不服、醳之、其妻曰、嘻子毋讀書游說、安得此辱乎、張儀謂其妻曰、視吾舌尚在不、其妻笑曰、舌在也、儀曰、足矣、

【講義】 張儀は魏の國の人なり、最初蘇秦と諸共に鬼谷先生を師として其術を學びたることあり、蘇秦とは同窓の友なるが、蘇秦は自ら其智術の張儀に及

に於て、趙莊の戰ひに於て、秦が殺せし所の三晉の民は數百萬人の多きに及び、今日生き殘れる者は皆秦の爲に殺されたる者の孤なり、西河の外、上雒の地、三川等、晉國が秦の爲に侵略せられて禍ひを被りたる土地は三晉の半に及ぶ、秦の禍は此如くに大なり、然るに燕趙の士の秦に心を傾くる者は、何れも我れ勝ちに秦に事へざるべからざる事を以て自國の君に說くは不埒千萬にて、此れ臣が大に患ふる所なりと、

【字解】穰侯、魏冉のこと、嬴、勝つなり、舅、母の弟を舅と謂ふ、蠆、毒蟲の名、龍賈之戰、龍賈は魏の將、魏の襄王の五年に秦と戰ひて敗らる、岸門之戰、岸門は韓の地名、此戰ひは韓の宣惠王十九年に在り、封陵之戰、封陵は魏の地名、魏の哀王十六年の戰ひ、高商之戰、審ならず、趙莊之戰、趙莊は趙の將なり、趙の肅侯二十二年に秦と戰ひて敗死す、

燕昭王不行、蘇代復重於燕、燕使約諸侯從親、如蘇秦時、或從或不、而天下由此宗蘇氏之從約、代厲皆以壽死、名顯諸侯、

【講義】燕の昭王は嚮に秦王に招かれて往かんと欲せしも、今蘇代の說を聞くに及び中止せり、蘇代は復び燕に重んぜられ、燕は彼れをして列國同盟の條約を締結せしめ、丁度蘇秦を用ひし時と同樣なりき、但し列國の中或は同盟する者あり、或は同盟せざる者ありしと雖も、天下此れに由りて蘇氏の合從論を崇拜せり、蘇代も蘇厲も倶に長命を保ち、其名は列國に顯はれたり、

太史公曰、蘇秦兄弟三人皆游說諸侯、以顯名、其術長於權變、而蘇秦被反閒以死、天下共笑之、諱學其術、然世言蘇秦多異、異時事有類之者、皆附之蘇秦、夫蘇秦起閭閻、連六國從親、此其智有過人者、吾故列其行事、

ひに譙石に打擊を受け陽馬に敗軍するや、魏が敵に加勢せんことを恐れ、葉、蔡を魏に任せ、已に趙と和睦するや、却つて魏を刧し、葉蔡の地を割讓せざりき、

【字解】 垂、ハヾカルと訓ず已於得講趙、戰國策に已得講に作る、

困則使太后弟穰侯爲和、嬴則兼欺舅與母、適燕者曰以膠東、適趙者曰以濟西、適魏者曰以葉蔡、適楚者曰以塞鄳阸、適齊者曰以宋、此必令言如循環、用兵如刺蜚、母不能制、舅不能約、龍賈之戰、岸門之戰、封陵之戰、高商之戰、趙莊之戰、秦之所殺三晉之民數百萬、今其生者、皆死秦之孤也、西河之外、上雒之地、三川晉國之禍、三晉之半、秦禍如此其大也、而燕趙之秦者、皆以爭事秦說其主、此臣之所大患也、

【講義】 戰爭に利を失ひて窮境に陷るときは、太后の弟の魏冉をして和議を整へしめ、戰爭勝利を得るときは、伯父と母とを欺けり、燕を責むるに膠東を取りたることを口實とし、趙を責むるには濟西を取りたることを以て口實とし、趙を責むるには葉蔡を取りたることを以て口實とし、楚を責むるには鄳の險阻を塞ぎたることを以て口實とし、齊を責むるには宋を攻むることを口實とす、此れ秦王は列國に非難を加ふる言ひ方は丸き環の如く滑脫を極め、兵を用ふることは毒蟲の針の如く、其母も制することは能はず、其伯父も約を踐ましむること能はず、龍賈の戰ひに於て岸門の戰ひに於て封陵の戰ひに於て高商の戰ひ

を攻めんと欲すれども、天下の列國が之を救はんことを恐れければ、齊を餌として列國に任せて云ふやう、齊王は四たび此方と約束しながら四たび違約に及び、天下の諸侯を率ゐて此方を攻めたること三回あり、齊があらば秦は亡ぼさるべく、秦があらば齊は亡ぼさるべし、願はくは列國に於ては必ず齊を伐ち必ず齊を亡ぼし給はるべしと、然るに已に韓の宜陽少曲を手に入れ、藺石を取込み、目的を達するや、今度は齊を破りたることを以て列國の罪とせり、

【字解】寡、カタドルと訓ず、

秦欲攻魏、重楚、則以南陽委於楚曰、寡人固與韓且絶矣、殘均陵塞鄳阨、苟利於楚、寡人如自有之、魏弃與國而合於秦、因以塞鄳阨爲楚罪、兵困於林中、重燕趙、以膠東委於燕、以濟西委於趙、趙得講於魏、至公子延、因犀首屬行而攻趙、兵傷於譙石、遇敗於陽馬、而重魏、則以葉蔡委於魏、已得講於趙、則劫魏不爲割、

【講義】秦は魏を攻めんと欲すれども楚が之を救はんことを恐るゝ所より、南陽を楚に任せて云ふやう、此方は固より韓と國交を絶たんとする際なれば、苟も貴國の利益なる以上、均陵を屠り鄳縣の要害を塞がるれば、此方自ら之を所有すると同樣滿足の至りなりと、然るに魏は同盟國を棄て、秦と合體するや、秦は鄳の險阻を塞ぎたることを以て楚の罪とせり、又秦が魏を攻めし時、林中の地にて難戰に及びしが、燕趙が敵に加はらんことを懼りければ、膠東を燕に任せ濟西を趙に任せて之を牽制し置き、其間に魏と講和すること出來たれば、魏の公子延を人質に取り、犀首をば己が軍中に加はらせて趙を攻めぬ、此の戰

亡ぶべし、白馬河の口を切落さば、魏の外黃、濟陽は水攻めの爲に亡ぶべし、宿胥の渡場の口を切落さば、魏の虛、頓丘は水攻めの爲に亡ぶべし、陸路より攻入らば河内を擊ち破らん、水路より攻入らば大梁を亡ぼさんと、魏は秦の云ふ所を尤もとせしが故に秦に事へたり、

【字解】大行、山の名、韓の上黨へ通ずる路なり、平陽、韓の大都なり、繇、搖動すること、舉、拔くこと、卷、斷絶するを云ふ、銛、利なり、

秦欲攻安邑、恐齊救之、則以宋委於齊曰、宋王無道、爲木人以寫寡人、射其面、寡人地絶兵遠、不能攻也、王苟能破宋有之、寡人如自得之、已得安邑、塞女戟、因以破宋爲齊罪、秦欲攻韓、恐天下救之、則以齊委於天下曰、齊王四與寡人約、四欺寡人、必率天下以攻寡人者三、有齊無秦、有秦無齊、必伐之、必亡之、已得宜陽少曲、致藺石、因以破齊爲天下罪、

【講義】秦は魏の安邑を攻めんと欲すれども、齊が援兵を出さんことを恐るゝが故に、之を妨ぐる策として宋を餌となし齊に任せて云ふやう、宋王は無道にて、木像を造りて此方の形となし、弓にて其面を射て愉快となす、此方は憤慨に堪へず、何如にもして怨みを霽らさんと思へども、土地は隔り兵を出すには遠きに過ぐるゆゑ攻むること叶はず、齊王苟くも宋を打破りて其國を所有致されなば、此方自身にて所有すると同じく滿足の至りなりと、斯く齊をして宋を攻めさせ、魏を救ふ暇なき間に、秦は魏の安邑を得て女戟を塞ぎ止め、己れの目的已に達せしかば、今度は宋を攻めたることを以て齊の罪とせり、秦は又韓

士を宛の地に召集して東方に向ひ隨に下らん、此の如きは智者も計略を運らして之を防ぐ暇なく、勇士も怒りを發して戰ふ暇なく、此方が楚を破ることは隼を射ると一般、極めて迅速に且つ容易なるべし、楚王に於て列國の兵が秦の函谷關に攻入るを待たるるも、何んと前途遠きことに非ずやと、楚王は此の威喝に恐れて十七年の久しき間、秦に事へたり、

【字解】 正告、公然と宣明すること、五渚、洞庭湖に在り、隼、鷹の一種、

秦正告韓曰、我起乎少曲、一日而斷大行、我起乎宜陽而觸平陽、二日而莫不盡繇、我離兩周而觸鄭、五日而國擧、韓氏以爲然、故事秦、秦正告魏曰、我擧安邑、塞女戟、韓氏太原卷、我下軹道南陽封冀、包兩周、乘夏水浮輕舟、彊弩在前、錟戈在後、決滎口、魏無大梁、決白馬之口、魏無外黃濟陽、決宿胥之口、魏無虛頓丘、陸攻則擊河內、水攻則滅大梁、魏氏以爲然、故事秦、

【講義】 秦は又公然韓に告げて曰く、我れ韓の宜陽に近き少曲より兵を出して進軍するときは、僅か一日にて大行山を絶ち塞ぐべし、我れ宜陽より兵を出して平陽を突くときは、二日にして韓の全國動搖せざることなし、我れ東西の兩周を通過して鄭を突くときは、五日にて韓の國は引拔かるべしと、韓は秦の云ふ所を尤もとせしが故に秦に事へたり、秦は又公然魏に告ぐるやう、我れ安邑を拔取り女戟の路を塞がば、韓の太原は通路絕えん、我れ軹道、南陽、封、冀を下り、兩周を包み、夏の滿水に乘じて輕舟を浮べ、强き石弓を舟の前頭に据ゑ、銳利なる戈を舟の後邊に備へ、滎澤の口を切落さば、魏の大梁は水攻めにて

王欲往、蘇代約燕王曰、楚得枳而國亡、齊得宋而國亡、齊楚不得以有枳宋而事秦者、何也、則有功者秦之深讎也、秦取天下、非行義也、暴也、秦之行暴、正告天下、告楚曰、蜀地之甲、乘船浮於汶、乘夏水而下江、五日而至郢、漢中之甲、乘船出於巴、乘夏水而下漢、四日而至五渚、寡人積甲宛、東下隨、智者不及謀、勇士不及怒、寡人如射隼矣、王乃欲待天下之攻函谷、不亦遠乎、楚王爲是故十七年事秦、

【講義】燕の昭王は蘇代の上書を讀み其議論を尤もなりとして曰く、吾が先代は嘗て蘇氏に恩義を掛けしとあり、然るに先頃の子之の騷動の時、蘇氏は燕を立退きたるが、燕が齊に復讎するには蘇氏の力を借るに非ざれば不可能なりと、因つて蘇代を招き寄せ、以前の通り厚く之を待遇に及び、齊を伐つべき謀略を相談し、其結果齊の兵を打破り、齊の湣王は都を出でて脫走せり、其れより久しく程過ぎて、秦より燕の昭王を招きければ昭王は往かんとせしに、蘇代は昭王を止めて申しけるは、昔し楚は枳を切り取つて國亡び、齊は宋を切り取つて國亡びぬ、齊と楚が枳や宋を有ちて秦に事ふる事の出來ざりしは何故なるかと云ふに、凡そ功業ある者は秦より言ふときは仇讎なり、秦が天下を取るは義を行ふ爲にあらずして暴行なり、秦が暴を行ふ證據は明白に天下に宣言せしことあり、其れは楚に告げて曰く、蜀地の兵は船に乘り汶水に浮び、夏季の雨に因りて河水の暴漲せるに乘じて江に下り、五日間にして郢に至らん、又漢中の兵は船に乘り巴水に出で、是れも夏の滿水に乘じて漢水に下り、四日間にして五渚に至らん、此方自身は兵

今不收燕趙、齊霸必成、諸侯贊齊而王不從、是國伐也、諸侯贊齊而王從之、是名卑也、今收燕趙、國安而名尊、不收燕趙國危而名卑、夫去尊安而取危卑、智者不爲也、秦王聞若說、必若刺心、然則王何不使辯士以此苦言說秦、秦必取、齊必伐矣、夫取秦、厚交也、伐齊正利也、尊厚交務正利、聖王之事也、

【講義】今燕趙を味方に取入れざるときは齊の霸業必ず成就せん、列國が齊を佐けて秦王のみ之に從はざるときは、彼等連合して秦を伐たん、又列國が齊を佐けて秦王も亦彼等と同じく之に從ふときは、是れ名譽卑しきなり、今燕趙を味方に取入るゝときは國家は安泰にして名譽尊く、燕趙を味方に取入れざるときは國家危くして名譽卑し、夫れ尊く安きことを棄てゝ危く卑しきことを取るが如きは智者の爲さゞる所なりと、秦王此の說を聞かば、必ず刄を以て胸を刺さるゝが如き痛苦を感ずるならん、されば大王に於ては何とて辯士をして此の如く秦に苦痛を感ぜしむる議論を以て秦王に說かしめ給はざる、若し此れを以て秦王に說かしめば、秦は必ず燕に引入るゝと出來、齊は必ず伐つこと出來申さん、夫れ秦を取入ることは厚き交際なり、齊を伐つことは正しき利益なり、厚き交際を尊び正しき利益を務むるは聖人の事なりと、

燕昭王善其書曰、先人嘗有德蘇氏、子之之亂而蘇氏去燕、燕欲報仇於齊、非蘇氏莫可、乃召蘇代、復善待之、與謀伐齊、竟破齊、湣王出走、久之、秦召燕王、燕

秦爲西帝、燕爲北帝、趙爲中帝、立三帝以令於天下、韓魏不聽、則秦伐之、齊不聽、則燕趙伐之、天下孰敢不聽、天下服聽、因驅韓魏以伐齊曰、必反宋地、歸楚淮北、反宋地、歸楚淮北、燕趙之所利也、竝立三帝、燕趙之所願也、夫實得所利、尊得所願、燕趙弃齊如脫躧矣、

【講義】此の如くなる以上、大王には、辯舌優れたる者を遣して左の說を秦王に說かしめ給ふが宜しからずや、其說に云ふ、燕趙は宋を打破り齊を肥して之を尊敬し、自國は齊の下風に立つことは、燕趙が之を利益とするが爲にあらず、燕趙は之を利益とせざるに、勢ひ已むを得ず此に出でたる所以は、秦王を信ぜざるに因る、然らば秦王には何とて信ずべき者を使ひて燕趙を味方に取入れ給はざる、而してそれには先づ涇陽君と高陵君とを燕趙に差遣り置き、秦に何等か異變あるときは其儘之を人質とせば、燕趙は秦を信ずべし、三國已に一致せば、秦は西帝となり、燕は北帝となり、趙は中帝となり、三帝を立てゝ天下に號令することゝならん、若し韓魏從はざるときは秦之を伐つことゝし、齊從はざるときは燕趙之れを伐つこととせば、天下の列國孰れとて服從せざる者あるべき、天下を擧げて服從せば、韓魏を驅りて齊を伐ちて曰ふには、是非とも宋の地を返せ、楚の淮北を返せと、宋の地を返し楚の淮北を返すことは燕趙の利益とする所なり、三帝を竝び立つることは燕趙の希望する所なり、夫れ土地と云ふ利とする所の實物を得、帝位と云ふ願ふ所の尊位を得る以上は、燕趙が齊を棄つることは、履を脫ぎ捨つると同樣惜しとも何とも思はざるべし、

【字解】涇陽君高陵君、秦王の同母弟なり、躧、履なり、

上計破秦、其次必長賓之、秦挾賓以待破、秦王必患之、秦五世伐諸侯、今爲齊下、秦王之志苟得窮齊、不憚以國爲功、

【講義】然しながら、智者が事業を行ふ仕方は禍を其儘に利用して福となし、失敗を飜して成功となす、齊の紫は粗惡の白絹なるが、一旦紫に染むるときは其價格白絹に十倍す、越王勾踐は會稽山に立籠りしも、復び强國の吳を破壞して天下の霸者となれり、此れは何れも禍に因りて福となし失敗を轉じて成功となしたる者なり、今大王に於ても若し禍に因りて福となし、失敗を轉じて、成功となさんと思召し給はば、我れより持ちかけて齊が霸者となれるやうになし、之も尊ぶに若くはなし、それには使を周の朝廷へ差出して齊國を盟主となすことを誓はしむると共に、秦との約定書を焚き棄てさせ、さて言ふべきは、第一の上策は秦を破るに在り、其次の計は是非とも長く秦を關西に押除けて出でられぬやうに爲すに在り、斯くて秦は押除けられて破滅を待つことゝならば、秦王は之を患ふるに相違なし、秦は五代前より常に列國を征伐して威力を振ひしに、今や齊の下に立つことゝなりたれば、秦王は殘念に思ひ、苟も齊を惱ますことが出來る見込みあらば、一國の力を盡しても其效果を擧げんとするに躊躇せず、

【字解】齊紫敗素也、齊の桓公好んで紫色の服を用ふ、是れに因り齊人粗惡の白絹を染めて紫となし、其價十倍すと云ふは敗を轉じて功となすに喩ふ、

然則王何不使辯士以此言說秦王曰、燕趙破宋肥齊、尊之、爲之下者、燕趙非利之也、燕趙不利而勢爲之者、以不信秦王也、然則王何不使可信者接收燕趙、令涇陽君、高陵君、先於燕趙、秦有變因以爲質、則燕趙信秦、

以宋加之淮北、彊萬乘之國也、而齊幷之、是益一齊也、北夷方七百里、加之以魯衞、彊萬乘之國也、而齊幷之、是益二齊也、夫一齊之彊、燕猶狼顧而不能支、今以三齊臨燕、其禍必大矣、

【講義】齊は宋を伐ち、宋は勢ひ敵し難くして危急に迫る、蘇代は燕をして齊に味方せざらしめんがため燕の昭王に書を呈して云ふやう、夫れ貴國は萬乘の大國に列して居りながら、齊國に人質を差出さるが故に、名譽は卑く權威は輕し、又萬乘の國を提げて齊を助け宋を伐ち、之が爲に民は勞れ財は費ゆ、夫れ宋を破り楚の淮北を殘ひ齊の國を擴大する時は、讎は益〻强くなりて自國の害とならん、此の三箇條は燕國の大失敗なり、然るに大王が之を行ひ給ふは齊の信用を得んとの目的なるべきも、齊は愈〻大王を信ぜずして燕を忌むこと一層甚しからん、是れ大王の計は過てり、夫れ宋の上に淮北の地を增すことは萬乘の國を强くするなり、而して齊が之を幷すときは卽ち齊國の上に又齊國を作るなり、北夷の地は方七百里あり、其上に魯衞を附け加ふることは萬乘の國を强くするなり、而して齊が之を幷すときは是れ一つの齊國へ二つの齊國を增す道理なり、夫れ一の齊國の强きすらも、燕は猶狼の如くに後を振囘り恐れを抱きて其勢ひを支ふること能はざるに、今三つの齊を以て燕に臨みなば、其禍は必ず大なるべし、

雖然、智者擧事、因禍爲福、轉敗爲功、齊紫敗素也、而賈十倍、越王勾踐棲於會稽、復殘彊吳而霸天下、此皆因禍爲福、轉敗爲功者也、今王若欲因禍爲福、轉敗爲功、則莫若挑霸齊而尊之、使使盟於周室、焚秦符曰、其大

宋地、非魏之利也、故王不如東蘇子、秦必疑齊而不信蘇子矣、齊秦不合、天下無變、伐齊之形成矣、於是出蘇代、代之宋、宋善待之、

【講義】 蘇代は用務にて魏の國を通過せし處、魏は燕の爲に彼れを捕へぬ、齊は蘇代が捕はれたりと聞き、人を以て魏王に言はしむるやう、齊は秦に對し、先頃占領したる宋の地をば蘇王の弟涇陽君に與へて領主とならしめたしと申出でたるも、秦は之を受けず、秦は齊を味方として宋の土地を手に入るゝことを利益とせざるにはあらず、されど齊王と蘇代とを信ぜざるが故に承知せざるなり、今齊と魏と今日の如く甚しく不和なるときは、齊は秦に誠を盡して欺くことなく、秦も亦齊の他意なきことを信ずべし、齊と秦と和睦成らば、其結果涇陽君は必ず宋の領主とならん、此れは決して魏の利益にあらず、故に大王は蘇子を東隣の齊へ返し給ふが得策なり、何故となれば、蘇子を返し給ふときは、秦は齊が魏と内々親密なることを疑ひ、又蘇子が其媒介をなしたるならんと彼れをも信ぜざるべし、齊と秦と結合せざるときは天下に變動なく、魏が齊を伐つべき形勢成るならんと、魏は此の説に信じて蘇代を放還に及べり、蘇代は魏を出で宋に赴きし處、宋にては善く之を待遇せり、

齊伐宋、宋急、蘇代乃遺燕昭王書曰、夫列在萬乘而寄質於齊、名卑而權輕、奉萬乘助齊伐宋、民勞而實費、夫破宋殘楚淮北、肥大齊、讎彊而國害、此三者、皆國之大敗也、然且王行之者、將以取信於齊也、齊加不信於王、而忌燕愈甚、是王之計過矣、夫

曰不信其臣、於是燕王專任子之、已而讓位、燕大亂、齊伐燕、殺王噲子之、燕立昭王、而蘇代蘇厲遂不敢入燕、皆終歸齊、齊善待之、

【講義】燕王曰く、吾れは究極先生の御蔭にて天より霸王たる命を受けんと、因つて蘇代の言に從ひ、燕王は一人の王子を人質として齊に差出せしが、蘇厲は此王子の手引きにて齊王に謁見を求めたる處、齊王は以前蘇秦の爲に欺かれしとを怨み居りければ、蘇厲を囚へんとせり、燕の王子は彼れの爲に色々陳謝に及びしが、蘇代は其後遂に贄を差出して齊の臣下となりぬ、燕の宰相子之は蘇代と緣組みをなし、己れ燕の政權を掌握せんと思ひ、蘇代に謀を示し、齊に人質となれる燕の王子に隨從せしめけり、聽て齊より蘇代を使者として燕に遣し、王子の恙なき事を報告せしめぬ、其時燕王噲は蘇代に問ふやう、齊王は霸者となるであらうかと、蘇代答へて、そは不可能なりと申しゝかば、齊王は何故ぞと問ふ、蘇代答へて曰く、齊王は其臣下を信ぜざれば霸者となる資格なしと、燕王は之を聞いて、己れ霸者とならんとせば臣下を信ずる必要ありと考へ、宰相の子之に國政を專任し、程過ぎて王位を子之に讓りしかば國內大に亂れたり、齊は之を機會として燕を伐ち、燕王噲と宰相の子之とを殺せり、燕には昭王を立てゝ君となしゝが、蘇代、蘇厲の兄弟は燕に歸らず、其儘齊に留まりて仕官せし處、齊にては善く之を待遇せり、

蘇代過魏、魏爲燕執代、齊使人謂魏王曰、齊請以宋地封涇陽君、秦必不受、秦非不利有齊而得宋地也、不信齊王與蘇子也、今齊魏不和如此其甚、則齊不欺秦、秦信齊、齊秦合、涇陽君有

北、盡已役矣、封內敝矣、夫驕君必好利、而亡國之臣必貪於財、王誠能無羞寵子母弟以爲質、寶珠玉帛以事左右、彼將有德燕而輕亡宋、則齊可亡已、

【講義】燕王曰く、吾が聞く所に據れば、齊國には淸流の濟と濁流の河とあり、以て國の固めとなすべく、長城と鉅防とあり、以て要寨となすに足ると、實際此の如き天造人設の國防ありやと、蘇代答へて云ふやう、天の時が齊に味方せざれば、淸濟、濁河あるも、何とて險固となすに足らん、長城、鉅防あるも、何とて要寨となすに足らんや、其上是れまで濟水以西の民を軍役に徴發せざりしは趙に備ふる爲にてあり、黃河以北の民を軍役に徴發せざりしは燕に備ふる爲にてありき、然るに今濟水以西も黃河以北も盡く兵役を課したり、國內は疲敝せり、夫れ增長せる君主は必ず利を好み、而して亡國の臣は必ず財を貪る、大王に於て誠に其愛し給ふ王子や王弟を人質に差出し、寶の珠玉や反物を贈りて齊王の近臣の機嫌を取ることを羞とし給はざるときは、彼れは燕の好意に感じ、容易に宋を亡ぼして齊の片腕をもぎ取らん、さすれば齊は亡ぼすこと出來申さんと、

【字解】濟、濟河又は濟水、河、黃河、鉅防、大いなる土壁なり、質、人質、

燕王曰、吾終以子受命於天矣、燕乃使一子質於齊、而蘇厲因燕質子而求見齊王、齊王怨蘇秦、欲囚蘇厲、燕質子爲謝、已遂委質爲齊臣、燕相子之與蘇代婚、而欲得燕權、乃使蘇代侍質子於齊、齊使代報燕、燕王噲問曰、齊王其霸乎、曰、不能、曰、何也、

二諸侯、此其君欲得、其民力竭、惡足取乎、且臣聞之、數戰則民勞、久師則兵敝矣、

【講義】 燕王曰く、夫れ齊は言ふまでもなく此方の讎なれば伐たんと欲する所なれども、唯何如にせん、國家疲勞して力の足らざることを、されば先生能く燕をして齊を伐つことを得しむるならば、此方は國を擧げて先生に御任せ申さんと、蘇代對へて云ふやう、凡そ天下に於て戰爭をなす國は七あり、其中燕は弱國の地位に在り、故に燕が獨力にて戰ふことは出來ざれども、何れの國へか附くときは其國は重くならぬことなし、卽ち南の方、楚に附かば楚重くなり、西の方、秦に附かば秦重くなり、中央の韓魏に附かば韓魏重くならん、且つ苟も燕の附く所の國重くなる以上、此れ大王をして重くならしむるは必定なり、今夫れ齊王は年長の君にして、何事も自分の才智に任せて決行するゆゑ破綻を免れず、南方に向ひ楚を攻むること五年、之が爲めに積み蓄へたる軍資は枯竭に及び、西方に於ては秦に困めらるゝこと三年、士卒は疲勞して役に立たず、北方に於ては燕と戰ひ、三軍を全滅して、僅かに燕の二將軍を打取りたるのみ、然るに此の如き失敗にも拘はらず、五千乘の大國なる宋を略取して十二列國を併合し、其君の欲望は遂げたりと雖も其人民の力は已に竭きたれば、何とて取るに足らんや、且つ臣の聞けるには幾度も戰ふときは民勞れ、長軍をなすときは兵損すと、

【字解】 長主、年長の君主、罷敝、罷は疲に同じ、

燕王曰、吾聞齊有清濟濁河、可以爲固、長城鉅防、足以爲塞、誠有之乎、對曰、天時不與、雖有清濟濁河、惡足以爲固、民力罷敝、雖有長城鉅防、惡足以爲塞、且異日濟西不師、所以備趙也、河北不師、所以備燕也、今濟西河

れも遊説の術を學びたるが、蘇秦死するに及び、代は燕王に謁見して兄の先例を繼いで用ひられんことを求めて曰く、臣は東周の鄙しき身分の者なるが、大王が非常の高義を行ひ給ふ由を承り、田舍者の不才をも顧みず、すき、くはを棄てゝ大王に採用を請ふ、初め趙の都なる邯鄲に至りしに、現に見る所は東周にて聞きし所に比べて大に劣る、是に於て臣は竊に所期に背いて失望致したる處、今燕の朝廷に參りてより、王の群臣竝に下々の役人を觀て、其人物より判斷するに、王は天下に二となき賢明の君なりと、燕王問うて云ふ、先生の申さるゝ賢王とは何如なるものなりやと、代は答へて云ふ、臣聞く、明王は自己の過失を聞くことを務めて、自己の美善を聞くことを欲せず、と、大王は明王にて在すが故に臣は大王の過失を申上ぐべし、夫れ齊と趙とは燕の仇敵なり、楚と魏とは燕の味方なり、然るに今大王には仇敵を押立てゝ味方の國を伐ち給ふは、燕に利益ある仕方にあらず、大王自ら慮り給ふべし、此の仇敵を押立てゝ味方を伐つことは過てる計策なるに、其れをば大王に申上ぐる者なきは忠信に非ざることをと、

【字解】 絀、屈なり、

王曰、夫齊者固寡人之讎、所欲伐也、直患國敝力不足也、子能以燕伐齊、則寡人擧國委子、對曰、凡天下戰國七、燕處弱焉、獨戰則不能、有所附則無不重、南附楚楚重、西附秦秦重、中附韓魏韓魏重、且苟所附之國重、此必使王重矣、今夫齊長主而自用也、南攻楚五年、畜聚竭、西困秦三年、士卒罷敝、北與燕人戰、覆三軍得二將、然而以其餘兵南面擧五千乘之大宋、而包十

秦は金瘡重りて最早死せんとせしかば、齊王に申すやう、臣若し死せば大王には臣の尸骸を車裂にして、市に觸れ示し給ふには蘇秦は燕の爲に動亂を齊に作したれば斯く處分に及べりと、然るときは臣の刺客必ず見附かり申さんと、因つて彼れの言の如く取扱ひしに、蘇秦を殺したる者は褒美に有附かんと思ひ、自ら名乘り出でければ、齊王は乃ち其者を誅戮せり、燕にては齊が蘇秦を車裂の刑に處したることを聞いて云ひけるは、齊が蘇先生の爲に復讎せし仕方は何如にも甚しと、蘇秦已に死したる後、燕が蘇秦を間諜として齊に赴かしめたること發覺に及び、齊は後に至りて之を聞きて殘念に思ひ燕を怒りしかば、燕は甚だ恐れたり、

【字解】殊、死なり、此には死創なるが故に未だ死せざるも殊と云ひたるなり、

○蘇秦之弟曰レ代、代弟蘇厲、見二兄遂一、亦皆學、及二蘇秦死一、代乃求レ見二燕王一、欲レ襲二故事一、曰、臣東周之鄙人也、竊聞二大王義甚高一、鄙人不敏、釋二鉏耨一而干二大王一、至レ於二邯鄲一、所レ見者絀レ於レ所レ聞於二東周一、臣竊負二其志一、及レ至二燕廷一、觀二王之羣臣下吏一、王天下之明王也、燕王曰、子所レ謂明王者何如也、對曰、臣聞明王務レ聞二其過一、不レ欲レ聞二其善一、臣請謁二王之過一、夫齊趙者燕之仇讎也、楚魏者燕之援國也、今王奉二仇讎一以伐二援國一、非レ所二以利一レ燕也、王自慮レ之、此則計過、無二以聞一者非二忠臣一也、

【講義】蘇秦に代と云ふ弟あり、代の又弟を蘇厲と曰へり、二人ともに兄蘇秦の成功を見て志を立て、何

以爲客卿、齊宣王卒、湣王卽位、說湣王厚葬以明孝、高宮室、大苑囿、以明得意、欲破敝齊而爲燕、燕易王卒、燕噲立爲王、

【講義】易王の母は文侯の夫人なるが、蘇秦と密通せり、易王は之を知りたれども、尙從前に增して孝養を盡しける處、蘇秦は脛に疵持つことゝて、いつかは誅せられんかと心竊かに恐れしかば、燕王に說いて云ふやう、臣が燕に居りては燕を重からしむること能はず、而も齊に在るときは燕必ず重かるべし、されば齊に御遣しあれと、燕王曰く、唯先生の御考へ次第なりと、是に於て蘇秦は燕に於て罪を得たるやうに仕繕ひ、逃亡して齊に赴きしに、齊は彼れを以て客分の大臣とせり、齊の宣王卒し、湣王の位に卽くや、蘇秦は湣王に說き、孝行を明かにするが爲に宣王の葬儀を立派になさしめたるのみか、宮殿を宏壯にし苑囿を廣大にして得意を明かにせしめたるが、是れは齊の國を疲弊せしめて燕の利益を謀らんとせしなり、燕にては易王卒し、噲立つて燕の王となれり、

其後齊大夫多與蘇秦爭寵者、而使人刺蘇秦、不死、殊而走、齊王使人求賊、不得、蘇秦且死、乃謂齊王曰、臣卽死、車裂臣以徇於市曰、蘇秦爲燕作亂於齊、如此、則臣之賊必得矣、於是如其言、而殺蘇秦者果自出、齊王因而誅之、燕聞之曰、甚矣、齊之爲蘇生報仇也、蘇秦既死、其事大泄、齊後聞之、乃恨怒燕、燕甚恐、

【講義】其後齊の大夫の中に蘇秦と君の寵愛を爭ふ者多く、人をして蘇秦を刺さしめたる處、死に至らず、さりながら致命傷を負ひて逃れ去る、齊王は其筋の者に命じて兇漢を搜さしめたれども捕へ得ず、蘇

免於笞、惡在乎忠信之無罪也、夫臣之過不幸而類是乎、燕王曰、先生復就故官、益厚遇之、

【講義】 燕王曰く、汝忠信ならねばこそ罪を得るなれ、何如にして忠信なるが爲に罪を得る者あらんやと、蘇秦云ふやう、仰せの趣は違へり、臣は左の話を承はれり、孰れの世にかありけん、遠方に役人となりて旅行する者ありし處、其妻、留守の間に他人と密通せり、軈て其夫旅先きより歸ることとなり、其日も差迫りければ密夫は痛く心配せしに、姦婦の申すやう、心配し給ふな、妾は已に毒藥を調合したる酒を造り置きて待ち居る處なりと、其れより三日を過ぎて夫は歸宅に及びしかば妻は豫て企みたる所なれば妾に言ひ附け、毒酒を杯に注ぎて進めけり、妾は其の企みを知れるものゆゑ、淺間しきことと思ひ、酒の中に毒のあることを言はんとすれば、之が爲に本妻の放逐せらるゝことが氣の毒になり、又言ふまじとすれば、其主人の毒害せらるゝことが畏ろしかりしかば、雙方に傷のつかざる樣にとて、わざわざ躓き仆れて酒をこぼしぬ、主人は何も知らざりしゆゑ、反つて妾の不調法を怒りて五十ばかり之を笞ちたりと申すことなり、故に妾は一たび自ら打仆れて酒をこぼしたるため、上は主人の命を全うし、下は主人の妻の身を全うせり、然るに此の如き忠信の女なるに拘はらず、笞たるゝことを免れず、忠信の罪なしと云ふことは何處にありとすべきか、臣の犯せる過ちは不幸にして此の話に似たりと申すべきかと、燕王は始めて諒解して曰く、先生復び以前の官に就かれよと、益〻手厚く彼れを待遇せり、

易王母、文侯夫人也、與蘇秦私通、燕王知之、而事之加厚、蘇秦恐誅、乃說燕王曰、臣居燕、不能使燕重、而在齊、則燕必重、燕王曰、唯先生之所爲、於是蘇秦詳爲得罪於燕、而亡走齊、齊宣王

使之歩行千里、却齊之彊兵哉、
臣所謂以忠信得罪於上者也、

【講義】今茲に孝行は曾參の如く、廉潔は伯夷の如く、信義は尾生の如き者ありとせんに、大王が此三人の者を手に入れられて、彼等打揃ひて大王の臣下とならば滿足なし給ふや否やと、王曰く、十分滿足なりと、蘇秦云ふやう、孝行曾參の如きは義を守りて片時も親の側を離るゝことなく、一晩たりとも外宿せず、誠に感心なれども、此の如き人物は、大王何如にして千里の遠き路を歩行して此の弱國なる燕の不安定なる君に事へしめ給ふこと出來申さんや、廉潔伯夷の如きは、義を守りて孤竹國の君の後嗣とならず、肯て周の武王の臣下とならず、首陽山の麓にて餓死せり、此の如き廉潔の人ありとも、大王何如にして千里の路を歩行して齊の國に進取を行はしめ給ふこと出來申さんや、信義尾生の如きは、女子と橋の下に密會の約束をなしたる處、其女子來らざりしも、自分は約束を守り、上汐にて水が身に着くやうになりても猶立去らず、橋ぐひを抱きたるまゝ溺れ死じぬ、此の如き信義の人なりとも、大王は何如にして千里の路を歩行し齊の强兵を却けしめ給ふこと出來申さんや、臣は謂はゆる忠信を以て罪を上に得る者に之れありと、

燕王曰、若不忠信耳、豈有以忠信而得罪者乎、蘇秦曰、不然、臣聞、客有遠爲吏、而其妻私於人者、其夫將來、其私者憂之、妻曰、勿憂、吾已作藥酒待之矣、居三日其夫果至、妻使妾擧藥酒進之、妾欲言酒之有藥、則恐其逐主母也、欲勿言乎、則恐其殺主父也、於是乎詳僵而弃酒、主父大怒笞之五十、故妾一僵而覆酒、上存主父、下存主母、然而不

去自爲、而行進取也、

【講義】時に蘇秦を惡口する者ありて云ふやう、彼れは一つの國を左に賣り右に賣る表裏の人物にして、將に叛亂を起さんとすと、蘇秦は、此讒言の爲に罪を得んことを恐れて燕に歸りし處、燕王は蘇秦を以前の役に復さゞりしかば、蘇秦は燕王に謁見して曰く、臣は東周の鄙しき人間なり、一寸一分の功もあらざるに大王には親しく宗廟に於て官職を命じ給ひ、又朝廷に於て禮遇を與へ給ひたることなれば、今臣が貴國の爲に齊の兵を却けて十城を取戻したるに就いては益、親愛し給ふべき筈なるに、今貴國に來り見れば、大王には反つて臣を疎まれ、以前の官職を授け給はざるは臣の不審に堪へざる所なるが、是れ必ず臣の不信實を申し立てゝ中傷せる者ありしならん、然れども臣の不信實は實際大王に取りて幸福なりしなり、臣の承はるに、凡そ忠實信義は自分の爲にする所にして、進取は人の爲にする所なりと、臣の進取に出でたるは大王の利益に非ずや、其上臣が齊王を説きつけたるは之を欺きしにあらず、臣が老母を東周に取殘したるが如き、元來自己の爲にすることを打棄てゝ進取を行ふ證據なり、

今有孝如曾參、廉如伯夷、信如尾生、得此三人者、以事大王、何若、王曰、足矣、蘇秦曰、孝如曾參、義不離其親一宿於外、王又安能使之步行千里、而事弱燕之危王哉、廉如伯夷、義不爲孤竹君之嗣、不肯爲武王臣、不受封侯而餓死首陽山下、有廉如此、王又安能使之步行千里、而行進取於齊哉、信如尾生、與女子期於梁下、女子不來、水至不去、抱柱而死、有信如此、王又安能

仇讎而得石交者也、夫燕秦俱事齊、則大王號令、天下莫敢不聽、是王以虛辭附秦、以十城取天下、此霸王之業也、王曰善、於是乃歸燕之十城、

【講義】齊王は蘇秦の說を聞き、愀然と顏色を變じて云ふ、右の次第ならば奈何にすべきと、蘇秦曰く、昔しの時代に於て善く事を取捌く者は禍を轉じて福となし、失敗を利用して功となす由、大王誠に臣の計を御用ひにならば、燕の十城を返し給ふべし、燕は故なくして十城を得ることとなれば固より喜ぶに相違なく、秦王も自分の關係にて齊が燕の十城を返したることを知らば是れ亦喜ぶに相違なし、此れ謂はゆる仇讎を棄てゝ石の如き堅き交りを得と云ふものなり、夫れ燕と秦と共々に齊に事ふることとならば、天下何れの國も大王の號令に從はざる者なからん、是れ王は損のゆかぬ辭を以て秦を附け、十城を失ふが爲に天下を取らるゝにて、霸王の業なりと、齊王は尤なりと曰ひ、蘇秦の勸めし通り燕の十城を返せり、

人有毀蘇秦者曰、左右賣國反覆之臣也、將作亂、蘇秦恐得罪歸、而燕王不復官也、蘇秦見燕王曰、臣東周之鄙人也、無有分寸之功、而王親拜之於廟、而禮之於廷、今臣爲王郤齊之兵、而攻得十城、宜以益親、今來而王不官臣者、人必有以不信傷臣於王者、臣之不信、王之福也、臣聞忠信者所以自爲也、進取者所以爲人也、且臣之說齊王、曾非欺之也、臣弃老母於東周、固

也、

【講義】 秦の惠王は其女を以て燕の太子の妃とせしが、此の歳燕の文侯卒去し、太子立つて燕の君となる、是れは燕の易王として知られたる人なり、易王位に卽いて間もなく、齊の宣王は燕の喪を機會として之を伐ち、十城を攻め取りぬ、易王は蘇秦に謂ふやう、日外先生燕に參られて游説せられし折、我が先王には先生に旅費を給して趙王に謁見せしめ、遂に山東六箇國の同盟を結びたり、然るに今齊は先づ趙を伐ち、次に燕を攻む、燕は先生の御蔭にて天下の物笑ひとなれり、先生には燕の爲に齊に取られたる土地を取返し給ふこと出來申すべきやと、蘇秦大に慙ぢて曰く、王の爲に之を取返し申さんと、其れより蘇秦は燕を出發して齊に至り、齊王に謁見するや、再拜の禮を行ひし後、俯して慶を述べ仰いで弔を述べしかば、齊王は不審に思ひ、蘇秦に尋ぬるやう、何故に今賀したるかと思へば忽ち又弔せらるゝやと、蘇秦曰く、臣の承はるに、食に飢ゑたる者は何如に飢うればとて烏喙を食はざる所以は、烏喙を食ひて腹に充つれば充つるほど其毒が發して死するが故に、餓死すると同一の惡結果を免れざる爲なりと、今燕は小弱國とは云へ、秦王の婿なり、大王は燕の十城を攻取りて利益を得給へども、之が爲に長く强秦と仇敵となる次第なり、今小弱の燕國をして齊に對し鴈行の地位に立たしむるとも、强秦が燕の背後の力となりて、齊が天下の精兵を招くこととならば、是れ前に述べたる烏喙を食ふの類なりと、

【字解】 烏喙、一名烏頭、毒藥なり、鴈行、一歩後に行くなり、

齊王愀然變色曰、然則奈何、蘇秦曰、臣聞古之善制事者、轉禍爲福、因敗爲功、大王誠能聽臣計、卽歸燕之十城、燕無故而得十城、必喜、秦王知以己之故而歸燕之十城、亦必喜、此所謂弃

【講義】蘇秦は已に六國を纏めて同盟を結ばしめ、趙に歸りて成功を報告せり、趙の肅侯は彼れの功を賞し、之を武安君に封ぜり、斯くて同盟の箇條書を秦に宣布せしが、何如に强暴の秦も六國の連合には敵し難かりしかば、兵を函谷關より出さゞること十五年に及べり、其後秦は犀首をして齊魏を欺き諸共に趙を伐たんとしたるが、是れは排秦同盟を破壞せんとするの目的に出でたるなり、齊魏は卒に趙を伐ちしかば、趙王は蘇秦の無責任を詰責せり、蘇秦は咎を得んことを恐れ、燕の國へ使節の役を勸め、燕に說き齊を伐たしめて趙の禍を救はんと願ひ出でぬ、斯くて蘇秦一たび趙を去りたる後、六國同盟は皆解け破れぬ、

秦惠王以其女爲燕太子婦、是歲、文侯卒、太子立、是爲燕易王、易王初立、齊宣王因燕喪伐燕、取十城、易王謂蘇秦曰、往日先生至燕、而先王資先生見趙、遂約六國從、今齊先伐趙、次至燕、以先生之故、爲天下笑、先生能爲燕得侵地乎、蘇秦大慙曰、請爲王取之、蘇秦見齊王、再拜、俯而慶、仰而弔、齊王曰、是何慶弔相隨之速也、蘇秦曰、臣聞飢人所以飢而不食烏喙者、爲其愈充腹而與餓死同患也、今燕雖弱小、卽秦王之少壻也、大王利其十城、而長與彊秦爲仇、今使弱燕爲鴈行、而彊秦敝其後、以招天下之精兵、是食烏喙之類

りたるなれと、是に於て千兩の金を振撒きて親戚朋友に與へたり、

【字解】委蛇、顏にて席を掩うて、進むこと蛇の行くが如くなるを謂ふ、季子、蘇秦の字なり、負郭、城に近き地、尤も肥えたる土地、

初蘇秦之燕、貸百錢爲資、及得富貴、以百金償之、徧報諸所嘗見徳者、其從者有一人、獨未得報、乃前自言、蘇秦曰、我非忘子、子之與我至燕、再三欲去我易水之上、方是時、我困、故望子深、是以後子、子今亦得矣、

【講義】最初蘇秦が燕に往きし時貧乏にて仕事出來ざりしかば、人より百文を借りて旅費とせしとあり、富貴の身となるに及び、百兩の金を以て之を償ひ、其外以前恩を受けし人には洩れなく報謝をなしたる處、其從者の一人のみは報を受けざりしかば、進み出でて自ら以前の事を述べたるに、蘇秦云ふやう、自分は汝を忘れしには非ず、汝が我が供をなし燕に赴く途中、易水の附近にて三度も我れを置き舍てて逃げんとせり、此の時自分は頗る困却せし所より汝を怨みたれば、今度それぞれ手當てをなすに就いて汝は後廻しとしたるに過ぎず、今こそ褒美を取らすべしとて多少の金を惠みやりぬ、

【字解】望、怨むなり、

蘇秦既約六國從親歸趙、趙肅侯封爲武安君、乃投從約書於秦、秦兵不敢闚函谷關十五年、其後秦使犀首欺齊魏、與共伐趙、欲敗從約、齊魏伐趙、趙王讓蘇秦、蘇秦恐、請使燕、必報齊、蘇秦去趙、而從約皆解、

王聞之恐懼、除道使人郊勞、蘇秦之昆弟妻嫂、側目不敢仰視、俯伏侍取食、蘇秦笑謂其嫂曰、何前倨而後恭也、嫂委蛇蒲服、以面掩地而謝曰、見季子位高金多也、蘇秦喟然歎曰、此一人之身、富貴則親戚畏懼之、貧賤則輕易之、況衆人乎、且使我有雒陽負郭田二頃、吾豈能佩六國相印乎、於是散千金、以賜宗族朋友、

【講義】斯く楚も亦蘇秦の說に從ひしかば、六國は同盟して力を併することとなれり、蘇秦は同盟の長となり、六箇國の宰相を一身に兼ね、北方を指して趙に赴き、趙王に使命を果したる趣を報告す、其途中、故郷なる雒陽に立寄りしが、行列の馬車や騎馬や荷物等夥しき上に、同盟の諸侯は使を發して彼を送る者多く、王者にも比すべき程なりき、周の顯王之を聞き、彼の勢力に恐れ、通行の道路を掃き清めて、郊外迄勅使を發して之を慰勞せしめたり、斯くて蘇秦は自宅へ歸りし處、兄弟と云ひ嫂と云ひ妻と云ひ、何れも恐る恐る横目にて其樣子を覗くのみにて、敢て仰ぎ視る者なく、面を俯し腰を屈めて飯の給事をせしかば、蘇秦は笑ひながら嫂に語りて云ふやう、何故に以前は横着にして今日は丁寧なるかと、嫂は下を向き腹這ひになり顏を席に着け詫言をなすやう、季子が位高く金多きが故なりと、蘇秦は之を聞き喟然として嘆息するやう、前も今も一人の身にて別に人間が變りたるわけに非ざれども、富貴なる時は親戚も之を畏れ憚り、貧賤なる時は之を侮り輕んずる程なれば、まして他人は猶更の事なり、且つ若し我に雒陽城下の田地二頃ばかりも有りたりしならんには、何として六箇國の宰相の印を佩ぶるをあらんや、前に貧乏なりしなればこそ、奮發して現在の身分には爲

の如き理由あるを以て敝邑の趙王は臣を使として愚計を大王に申上げ御約束を請ひ受けしむる次第にて、大王の思召し伺ひたしと、

楚王曰、寡人之國、西與秦接境、秦有擧巴蜀、幷漢中之心、秦虎狼之國、不可親也、而韓魏迫於秦患、不可與深謀、與深謀、恐反人以入於秦、故謀未發而國已危矣、寡人自料以楚當秦、不見勝也、內與羣臣謀、不足恃也、寡人臥不安席、食不甘味、心搖搖然如縣旌而無所終薄、今主君欲一天下、收諸侯、存危國、寡人謹奉社稷以從、

【講義】楚王の曰く、此方の國は西部に於て秦と境を接する處、秦は巴蜀を取り漢中を併せんとする心あり、彼の秦は虎狼の如き國にて親むべからず、而して韓魏の二个國は秦より迫害を被りつゝあれば、相談相手と爲し難し、之と相談するときは、裏切りをなし秦に附くの恐れあり、故に相談するに至らざるに國已に危し、此方自ら計り見たる處、楚の一國を以て秦に當りたりとて勝つ見込みなく、內に於て群臣と相談せんも彼等は恃むに足らず、是に於て此方は臥しても席に落着かず、食ひても美味の旨きを覺えず、心はふらふらとして釣下りたる旌の如く決着する所なかりしに、今先生には天下を合同し列國を取纏めて危き國を保全せられんとす、此れ何よりの幸ひなれば、此方社稷を擧げて從ひ申さんと、

於是六國從合而幷力焉、蘇秦爲從約長、幷相六國、北報趙王、乃行過雒陽、車騎輜重、諸侯各發使送之甚衆、擬於王者、周顯

功せば楚は王とならん、連衡成功せば秦は帝とならん、今や霸王の業をすてゝ他人に事ふる名あることは、臣憚りながら大王の爲に不利益と思ふ所なり、

【字解】 鄢郢動矣、秦の兵武關に出づれば鄢に臨み、黔中に下れば郢に臨む、此の二个所は共に楚の都なり、

夫秦虎狼之國也、有吞天下之心、秦天下之仇讎也、衡人皆欲割諸侯之地以事秦、此所謂養仇而奉讎者也、夫爲人臣割其主之地、以外交彊虎狼之秦、以侵天下、卒有秦患、不顧其禍、夫外挾彊秦之威、以內劫其主、以求割地、大逆不忠、無過此者、故從親、則諸侯割地以事楚、衡合、則楚割地以事秦、此兩策者、相去遠矣、二者大王何居焉、故敝邑趙王使臣效愚計、奉明約、在大王詔之、

【講義】 夫れ秦は貪慾非道にして人を害することと虎狼の如き國にして、天下中を併呑せんとする野心あり、故に秦は天下の仇敵なり、然るに連衡論者は何れも諸侯の土地を割いて秦に事へしめんとす、此れ俗に申す仇讎を養ひ之に供給をなす者なり、夫れ臣下の身分にてありながら、其君の土地を割いて、外國にして而も虎狼の如き秦に交りて天下を侵略し、卒に秦より害を受くるに至りても其禍を顧みず、夫れ外は强き秦の威勢を盾にして其主君を劫かし、其土地を割いて秦に與へんことを求むるは、大逆無道、此れに過ぎたる者なし、故に合從すれば列國地を割いて楚に事ふることとなり、連衡なれば楚が地に割いて秦に事ふることとなる、此の兩策は利害の距離甚だ遠し、此の二つの中に於て大王は何れを取り給ふや、此

し難し、故に大王の爲に計り見るに、排秦同盟に加はりて秦を孤立せしむるが最上の策なり、

【字解】章臺、秦に在り、

大王不從、秦必起兩軍、一軍出武關、一軍下黔中、則鄢郢動矣、臣聞治之其未亂也、爲之其未有也、患至其後憂之、則無及已、故願大王蚤孰計之、大王誠能聽臣、臣請令山東之國、奉四時之獻、以承大王之明詔、委社稷、奉宗廟、練士厲兵、在大王之所用之、大王誠能用臣之愚計、則韓魏齊燕趙衞之妙音美人、必充後宮、燕代橐駝良馬、必實外廐、故從合則楚王、衡成則秦帝、今釋霸王之業、而有事人之名、臣竊爲大王不取也、

【講義】大王若し臣の言を聽き入れ給はざる時は、秦は兩軍を起して楚を攻むるに相違なく、其一軍は武關に出で、一軍黔中に下らば、鄢、郢動搖せん、臣の承はるに凡そ物事は其未だ亂れざる内に早く之を治め、其害の未だ有らざる内に處分を行ふと、一旦禍ひが起りて後に之を憂ふるとも最早追ひつき難し、故に大王何卒篤と御思慮あれ、大王誠に臣の言を用ひ給はゞ、臣は山東の諸國が春夏秋冬に其季節の物產を獻上に及び、大王の詔を承け社稷を委ね宗廟を捧ぐるやうに致し申さん、斯くて士を練り兵を勵まし、大王の御心の儘に之を用ひ給ふこととならん、大王誠に能く臣の愚計を用ひ給はゞ、韓魏齊燕趙衞の妙工なる音曲と美人とは必ず奥御殿に充滿し、燕や代の地方に產する駱駝や良馬は必ず宮外の廐を塞ぐに至るべく、大王は榮華を極め給ふこととなる、故に合從成

地を守り、元來此れより先きへ行くべき道もなき極東の國なるゆゑ、是れまで御說を聞くことを得ざりしが、今足下が趙王の言を以て告げらるゝ以上、敬んで此の齊國を擧げて仰せに從ふべしと、

【字解】 餘敎、人への敎へ餘りと云ふとにて、先方を敬したる語なり、

乃西南說楚威王曰、楚天下之彊國也、王天下之賢王也、西有黔中巫郡、東有夏州海陽、南有洞庭蒼梧、北有陘塞郇陽、地方五千餘里、帶甲百萬、車千乘、騎萬匹、粟支十年、此霸王之資也、夫以楚之彊與王之賢、天下莫能當也、今乃欲西面而事秦、則諸侯莫不西面而朝於章臺之下矣、秦之所害莫如楚、楚彊則秦弱、秦彊則楚弱、其勢不兩立、故爲大王計、莫如從親以孤秦、

【講義】 蘇秦已に齊王を說き込みしかば、西南を指して楚の國に赴き、其君威王に說きけるは、楚は天下の强國なり、大王は天下の賢君なり、其地勢は西に黔中、巫郡あり、東に夏州、海陽あり、南に洞庭、蒼梧あり、北に陘塞、郇陽あり、地の四方五千餘里、鎧を着けたる武士百萬人、戰車千乘、軍馬萬匹あり、糧米八十年の久しきを支ふべし、此れ霸者となり王者となるべき資なり、夫れ楚の强きと大王の賢なるとを以て天下に臨む時は、天下之に當る者なかるべし、然るに今腑甲斐なくも西方に向ひて秦に事へんとし給ふは何如なる次第なるぞ、若し大王が西面して秦に事へ給ふ程ならば、列國は何れも西面して章臺の下に參朝せざる者なからん、一體秦が己れの害物と視做す國は楚に過ぎたる者なし、楚が强きときは秦は弱かるべく、秦强きときは楚弱かるべし、其勢ひ秦楚兩立

地、過衛陽晉之道、徑乎亢父之險、車不得方軌、騎不得比行、百人守險千人不敢過也、秦雖欲深入、則狼顧、恐韓魏之議其後也、是故恫疑虛喝、驕矜而不敢進、則秦之不能害齊亦明矣、

【講義】今秦が齊を攻むるは韓魏を攻むると同様ならず、韓魏の土地を後になし、衛の陽晉の道を通り過ぎ、亢父の險阻を横切らねばならず、此の亢父と云ふ處は路幅狹くして、車は二輛竝びて行くことを得ず、騎馬も二匹竝びて馳することを得ず、百人此の險阻に守る時は千人の兵も押通ることならず、秦は深く奥まで攻入らんと欲すれども後方に心を配り狼の如くに振向くは、是れ韓魏が背面より攻懸らんことに恐るればなり、さればこそ危み迷ひて威嚇手段を行ひ威を張りて勢ひを示せども敢て進まず、然らば則ち秦が齊を害する能はざることは此れに由りても明白なり、

夫不深料秦之無奈齊何、而欲西面而事之、是羣臣之計過也、今無臣事秦之名、而有彊國之實、臣是故願大王少留意計之、齊王曰、寡人不敏、僻遠守海、窮道東境之國也、未嘗得聞餘教、今足下以趙王詔詔之、敬以國從、

【講義】夫れ秦が齊を何如にすることも出來ざる形勢を深くも推し計らずして、西方を向き秦に事へんとするは、群臣の計る所誠に過てり、今臣の説に從ひ給ふ時は、秦に臣下の禮を執ると云ふ羞づべき名なくして國を強くするの實效あり、故に臣は大王が少しく心に留めて此の事を考慮あらむことを願ふと、齊王の曰く、此方不才にして、都より路遠くにある海岸の

るまでもなく、臨菑の兵卒ばかりにて二十一萬人あるあるわけなり、又臨菑は其土地富裕にして財力充實するが故に、其人民は竽を吹いたり瑟を鼓したり琴を彈じたり筑を擊ちたり雞を鬪はしめたり狗を走らしめたり雙六をなしたり蹴鞠をなしたりして樂まざる者なく、臨菑の繁華を言へば、往來が雜沓して車の心棒が打當り、人の肩と肩と擦れ合ひ、衽は連なりて帷を成し、袂は擧りて幕を成し、汗を揮へば雨を成す、家々繁昌し人々滿足し、何も不自由なき所より、志は高く氣は揚れり、夫れ大王の賢主なると、齊の强國なると、天下に當る者なきに拘はらず、今西方を向いて秦に事ふるに至りては、臣竊かに大王の爲めに羞かしく存ずるなり、

【字解】五家之兵、一種の軍隊の名、鋒矢、鋒は陪用辭、下句の風雨の雨に同じ、倍、ソムクと訓ず、絕、ワタルと訓ず、筑、琴に似て形大に頭圓し、博、双六なり、

且夫韓魏之所以重畏秦者、爲與秦接境壤界也、兵出而相當、不出十日而戰勝存亡之機決矣、韓魏戰而勝秦、則兵半折、四境不守、戰而不勝、則國已危亡隨其後、是故韓魏之所以重與秦戰、而輕爲之臣也、

【講義】且つ夫れ韓魏の二个國が甚だしく秦を畏るる理由は、秦と其境界を接するに在り、雙方の距離近きが故に一旦兵士を繰出して對戰するときは、十日を出でざる內に戰ひの勝敗と國の存亡との機は決する次第なり、韓魏が秦と戰つて之に打勝つときは、之が爲に軍隊の半は損傷を受けて役に立たず、國の四方の境を守る能はざるに至らん、又戰つて勝たざるときは其結果として國家は直ちに破滅すべし、是の故にこそ韓魏は秦と戰ふことを重大に思ひ秦の臣下となることを手輕く心得るなり、

今秦之攻齊則不然、倍韓魏之

東有琅邪、西有清河、北有勃海、此所謂四塞之國也、齊地方二千餘里、帶甲數十萬、粟如丘山、三軍之良、五家之兵、進如鋒矢、戰如雷霆、解如風雨、卽有軍役、未嘗倍泰山、絕清河、涉勃海也、臨菑之中七萬戶、臣竊度之、不下戶三男子、三七二十一萬、不待發於遠縣、而臨菑之卒、固已二十一萬矣、臨菑甚富而實、其民無不吹竽鼓瑟、彈琴擊筑、鬪雞走狗、六博蹹鞠者、臨菑之塗車轂擊、人肩摩、連衽成帷、擧袂成幕、揮汗成雨、家殷人足、志高氣揚、夫以大王之賢、與齊之彊、天下莫能當、今乃西面而事秦、臣竊爲大王羞之、

【講義】 蘇秦は魏王が已に承諾せしにより、東方に赴きて齊の宣王に說いて云ふ、齊は南に泰山あり、東に琅邪あり、西に清河あり、北に勃海あり、此れ世に申す四方要害のある國なり、此の齊の地は方二千餘里、武裝の士數十萬、積み蓄へたる米は丘山の如く、三軍の中の精銳なる五家の兵は、其進むことの疾きは、矢の一直線に飛ぶが如く、其戰ふとの烈しきは雷霆の如く、其戰終りて解散することの容易なるは風の物を吹き散らすが如く、一朝兵士を軍役に召集する必要あるときに於ても、泰山を踰え清河を過ぎ勃海を涉りて徵發するに及ばず、臨菑のみにて十分なり、此の臨菑の中には七萬の戶數あり、臣竊かに之を量り見るに、一戶に三人の男子ありとすれば七萬戶にて三七二十一萬となる、卽ち遠隔の縣より徵發す

不絶、蔓蔓奈何、毫釐不伐、將用斧柯、前慮不定、後有大患、將奈之何、大王誠能聽臣、六國從親、專心幷力壹意、則必無彊秦之患、故敝邑趙王使臣效愚計、奉明約、在大王之詔詔之、魏王曰、寡人不肖、未嘗得聞明教、今主君以趙王之詔詔之、敬以國從、

【講義】凡て群臣の中、秦に事ふべきことを主張する者は何れも姦臣にして忠臣に非ず、夫れ臣下の身にてありながら、其君の領土を割いて外國と私的關係を作らんことを謀り、事勿れ主義を以て一時圓滿に解決するも、本と姑息手段にして功とすべきに非ざれども、彼れは詐りて己れの功となし、而して後は野となれ山となれ、曾て顧みる所なく、主家を破壞して自家の利益を營み、外は强き秦の勢力を盾として其君を劫し、此の如くにして土地の割讓を求むるなれば、何卒大王に於ては篤と此點を察し給へ、周書に蔦葛の如き草なりとも緜々と蔓の生えたてにて弱き内に之を絶ち切らざる時は、蔓々として延び擴がりて、其時は最早手の着けやうもなかるべく、惡木なども一毫一釐の芽生の内に伐らざるときは、生長して大木となり、斧を用ひねばならざる事となるべし、前の思慮定まらざる時は、後に至り大なる患あるべしと、大王誠に能く臣の謀を用ひ給ひ、六个國同盟親善の上心を專らにし力を幷せ專一に秦を排斥せんには、必ず强秦の患なからん、故に見る影もなき都會を有する趙王は臣を以て愚計を呈してはつきりとしたる盟約を請ひ奉らしむる次第なり、大王の之に對する御沙汰を仰せられたしと、魏王の曰く、此方不肖なるため、未だ明白の御敎示を聞くことを得ざりし處、今先生が趙王の敎言を傳へらるゝ以上は、敬んで此國を擧げて先生の御説に從ひ申さんと、

【字解】緜々、薄弱、斧柯、ヲノ、マサカリ、

因東説齊宣王曰、齊南有泰山、

聞、大王之卒、武士二十萬、蒼頭二十萬、奮擊二十萬、廝徒十萬、車六百乘、騎五千匹、此其過越王勾踐武王遠矣、今乃聽於羣臣之說、而報臣事秦、夫事秦必割地以效實、故兵未用而國已虧矣、

【講義】 臣の承るに、昔し越王勾踐は疲勞せし兵士三千人を以て呉王夫差を干遂の地に於て虜とせり、又周の武王は兵卒三千人と戰車三百乘とを以て殷の紂王を牧野に押伏せたりと、豈に其士卒が多かりし爲に勝ちたるならんや、誠に能く其威を振ひたるを以てなり、今臣が竊かに承る所によれば、大王の士卒は武士と云ふ種類の者二十萬人、蒼頭とて青色の頭巾を被れる者二十萬人、突進の働きをなす者二十萬人、雜用に供する者十萬人、戰車六百乘、馬五千匹ある由、此れ大王の兵力は昔しの越王勾踐、周の武王に過ぐること遠し、然るに今反つて群臣の說を聽き容れ秦の臣下とならんとし給ふは、何とも合點出來ざる次第なり、夫れ秦に事ふることとならば、是非とも土地を割讓して誠意を示さゞるべからず、故に一戰もせざる內に國土は既に缺損するわけなり、

【字解】 武士、三重の鎧を着、十二石の力ある弩を運轉し、五十本の矢を負ひて戈を其上に載せ、三日間の糧食を携へて、一日に百里の長途を行軍することを以て資格とす、廝徒、炊烹等の雜務を執る者、

凡羣臣之言事秦者、皆姦人、非忠臣也、夫爲人臣、割其主之地、以求外交、偷取一時之功、而不顧其後、破公家而成私門、外挾彊秦之勢、以內劫其主、以求割地、願大王孰察之、周書曰、緜緜

東藩、築帝宮、受冠帶、祠春秋、臣竊爲大王恥之、

【講義】 蘇秦は又魏の襄王に說いて云ふ、大王の御領地は南に鴻溝、陳、汝南、許、郾、昆陽、舞陽、新都、新郪等の諸縣あり、東に淮、潁、煮棗、無胥等の郡縣あり、西に長城の界あり、北に卷、衍、酸棗等の諸縣あり、其範圍は四方千里にして、國としては小國の名あれども、其れにも拘はらず田間の小屋や住居は數限りもなく稠密を極むるが故に、草を刈り牛馬を飼ふ場處もなく、人民の衆多なる車馬の夥しき、晝となく夜となく往來の途切るゝことなく、ごろごろと喧しく鳴り響きて、三軍の多人數が通行するかと疑はる、臣竊かに量り見るに大王の國は決して楚に劣らず、然るに尊秦主義者は秦の勢力強きことを申立てゝ大王に恐怖心を起さしめ、强國にして虎狼に均しき秦と交際して列國の土地を侵略せしむるに至り、其結果列國は秦の爲に害を被るも、一向彼等の禍に頓着する所なし、夫れ強き秦の勢を盾にとり、內自己の君を劫して秦と同盟せしむるが如き、此れに過ぎたる罪あらず、魏は天下に於て並びなき強國なり、大王は天下に於て並びなき賢王なり、然るに今反つて西方を向いて秦に事へて自ら秦の東方を防禦すべき屬國なりと稱し、秦王の巡幸を待ち受けるが爲に宮殿を造營し、秦の制度にて定めたる冠をかぶり帶を纏ひ、秦の宗廟に於ける春秋の祭典に出仕して役目を勤むる思召しあるに至りては、臣竊かに大王の爲に羞かしく思ふなり、

【字解】 輷々、車聲なり、殷々、盛んなること、怵、オドスなり、東藩、藩は藩屏の藩なり、祠春秋、秦の春秋の大祭に其宗廟を祀ること、卽ち其祭の手傳ひをなすを謂ふ、天子の祭には諸侯之を助け、諸侯の祭には大夫之を助く、祭を助くることは臣下の務めなり、

臣聞越王勾踐戰敝卒三千人、禽夫差於干遂、武王卒三千人、革車三百乘、制紂於牧野、豈其士卒衆哉、誠能奮其威也、今竊

【字解】 雞口、牛後、雞の口は小なれども尚食物を差入れる處にて上品なり、牛の尻は大なるに拘はらず糞を出す處にて不潔卑むべしと云ふ意味なり、

於是韓王勃然作色、攘臂瞋目、按劍仰天太息曰、寡人雖不肖、必不能事秦、今主君詔以趙王之教、敬奉社稷以從、

【講義】 蘇秦が雞口牛後の譬へを引いて韓王を勵ませしかば、韓王は勃然と顏色を變へ、臂をまくり目をむき出し、劍に手をかけ、天を仰ぎ大息つきて云ふやう、此方不肖なりとは云へ、何如にしても秦に事ふること能はず、今先生には趙王の忠告を御傳へ下されたるが、誠に道理至極なれば、吾が國家を捧げて御任せ申すべしと、

【字解】 瞋、イカラスと訓ず、詔、告ぐるなり、

又說魏襄王曰、大王之地、南有鴻溝、陳、汝南、許、郾、昆陽、召陵、舞陽、新都、新郪、東有淮、潁、煮棗、無胥、西有長城之界、北有河外、卷、衍、酸棗、地方千里、地名雖小、然而田舍廬廡之數、曾無所芻牧、人民之衆車馬之多、日夜行不絕、輷輷殷殷、若有三軍之衆、臣竊量大王之國不下楚、然衡人怵王、交彊虎狼之秦、以侵天下、卒有秦患、不顧其禍、夫挾彊秦之勢、以內劫其主、罪無過此者、魏天下之彊國也、王天下之賢王也、今乃有意西面而事秦、稱

則棄前功而受後禍、且大王之地有盡、而秦之求無已、以有盡之地、而逆無已之求、此所謂市怨結禍者也、不戰而地已削矣、臣聞鄙諺曰、寧爲雞口、無爲牛後、今西面交臂而臣事秦、何異於牛後乎、夫以大王之賢、挾彊韓之兵、而有牛後之名、臣竊爲大王羞之、

【講義】　夫れ韓の手強き兵と大王の才智とありながら、西方に向ひて秦の機嫌を取り、秦王と交を結んで之に服從し給ふとは、此れほど國家を辱めて天下の物笑ひとなる失體はあるまじ、されば大王には能く能く御勘考あらんことこそ願はしけれ、大王若し秦に事へ給はゞ、秦に於て貴國の宜陽、成皐を求むるに相違なし、其請求に應じて事濟むならんには尚忍ぶべきも、今年宜陽、成皐を秦に差出しなば、明年は又復び他の地を割讓せんことを求むるならん、彼れの欲するがまゝ割讓するならば、韓には最早與ふべき土地も無くなるべし、さりとて、割讓せざるときは前に割讓したることは何の役にも立たずして、他日秦より攻めらるゝが如き禍ひに遇ふこととならん、其上大王の土地には限あることゆゑ、最後には盡き果つるまでなるが、秦の要求は止むことなし、盡くることのある土地を以て止むことなきの求めに應ぜんには、先方には飽くまでも不滿足なれば、是れ俗に申す怨みを買ひ禍ひを結ぶと云ふものなり、未だ戰はざる内に版圖は皆削り取られてしまふならん、臣の承はる下等の諺に、いつそ雞の口となるとも牛の尻と爲ること勿れと申すことあり、今西方を向き臂を組合せ禮を施して秦に對し臣下の態度を取り給ふは、何として牛の尻に違ひ申さんや、大王の賢明なるが上に強國なる韓の兵士を持ちながら、牛の尻と云ふ汚名を受けらるゝことは、臣に於て大王の爲に羞かしく存ずる所なりと、

所の强き弓、勵しき石弓は皆韓より造出すものなり、谿子にて製する石弓と少府と云ふ工廠にて造る所の時力、距來と云ふ二種の石弓は、皆六百步の遠距離に及ぶ效力あり、韓の射手が足を擧げて、石弓を射るときに、百度發すれば百度とも矢の途中にて撓むことなく、遠き敵を射れば矢筈が見えざるまで深く相手の胸を射貫き、近き敵を射るときは矢の根が心臟に穴をあくる程なり、韓の兵卒の用ふる劍や戟は、皆冥山と云ふ地より出づ、棠谿、墨陽、合膊、鄧師、宛馮、龍淵、太阿等の名劍は其銳利なること、陸には牛馬を切斷し、水には鴻鴈をも斬り割り、敵に向へば、堅き鎧も鐵の盾をも斬ることを得べし、其他革の弓掛、盾の紐の如き些細の武具に至るまで、悉皆揃はざるものなし、韓の兵士の勇武なるが上に堅固の鎧を着し、力强き石弓を發し、銳利なる劍を帶ぶるときは、一人を以て百人の敵に當るなどは言までもなきことなり、

【字解】　鞏洛成皐、二邑の名なり、本と東周に屬し、後に韓に屬す、商坂、武關の在る所なり、宛穰、二縣の名、洧水、川の名、谿阪、地名、良弩を出す、故に谿子弩の名あり、少府、政府の工場の名、時力距來、時力は之を作るに時を得て其力常に倍するもの、距來は其銳利にして能く來敵を距ぐに足るを以て名づけたる者にして、共に石弓の名なり、超足、超は擧ぐるなり、石弓を發つときは、足を擧げて之を踏み押へ、手にてばねを引くを以て云ふ、弇、中空すること、墨陽、卽ち莫邪、鄧師、鄧國に劍工あり、故に鄧師と曰ふ、宛馮、宛の人、馮地に於て劍を鑄る、故に宛馮と名く、龍淵太阿、干將、歐冶の作りたる劍の名なり、鐵幕、幕は盾を謂ふ、革抉、抉はユガケ、吠芮、吠は盾、芮は盾を維ぐ紐を謂ふ、タテヒモ、蹠、足にて踏むなり、

夫以韓之勁、與大王之賢、乃西面事秦、交臂而服、羞社稷而爲天下笑、無大於此者矣、是故願大王孰計之、大王事秦、秦必求宜陽成皐、今茲效之、明年又復求割地、與則無地以給之、不與

げて之を御任せ申すべしと、乃ち車一百乘、黄金一千鎰、白色の璧一百對、錦繡一千束を立派に仕立てゝ列國への贈品とし、蘇秦に携帶せしめて同盟を結ぶこととせり、此の時分、周の天子は其祖先文王武王を祭りたる供物の肉を秦の惠王に賜はり、特別の扱ひに及びしかば、惠王は大に勢ひを得て、犀首と云ふ者を統帥として魏を攻めさせたるが、此の戰ひは秦の勝利となり、魏の將軍龍賈を虜にし、雕陰縣を占領し、其れより更に東方の列國に向ひて兵を進めんとせしかば、蘇秦は秦が趙へ攻來りて折角の合從策も之が爲に失敗せんことを恐れければ、張儀を利用して秦の姑らく六國へ手出しせざるやうに取料はしめんとて、彼れを激して自ら秦へ赴かしめぬ、

【字解】純、束なり、胙、商君列傳に出づ、

於是說韓宣惠王曰、韓、北有鞏洛、成皐之固、西有宜陽商阪之塞、東有宛穰洧水、南有陘山、地方九百餘里、帶甲數十萬、天下之彊弓勁弩、皆從韓出、谿子少府時力距來者、皆射於六百步之外、韓卒超足而射、百發不暇止、遠者括蔽洞胸、近者鏑弇心、韓卒之劍戟皆出於冥山、棠谿墨陽合賻鄧師宛馮龍淵太阿、皆陸斷牛馬、水截鵠鴈、當敵則斬堅甲鐵幕、革抉㕩芮、無不畢具、以韓卒之勇、被堅甲、蹠勁弩、帶利劍、一人當百、不足言也、

【講義】蘇秦は已に趙王を說き込みたれば、今度は韓の宣惠王に說くやう、韓の國は北に鞏洛、成皐の固めあり、西に宜陽、商阪の隔あり、東に宛、穰、洧水あり、南に陘山あり、其地は四方九百餘里に及び、甲冑を着たる兵士は數十萬人にして、天下中にて用ふる

約束は左の如し、曰く、秦が楚を攻むるときは、齊魏より各、精鋭の兵を發して楚を佐け、韓は秦の糧食運送の路を絶ち、趙は河漳を渡り、燕は常山の北を守るべし、秦が韓魏を攻むるときは、楚が其軍隊の背面を絶ち切り、齊は精鋭の兵を發して韓魏を佐け、趙は河漳を渡り、燕は雲中を守るべし、秦が齊を攻むるときは、楚は秦の軍隊の背面を絶ち切り、韓は城皐を守り、魏は其來るべき道筋を塞ぎ、趙は河博關を渉り、燕は精鋭の兵を出して之を佐くべし、秦が燕を攻むるときは、趙は常山を守り、楚は武關に陣取り、齊は勃海を涉り、韓魏は各、精鋭の兵を出して之を佐くべし、秦が趙を攻むるときは、韓は宜陽に陣取り、楚は武關に陣取り、魏は河外に陣取り、齊は淸河を涉り、燕は精鋭の兵を出して之を佐くべし、列國此の約束に從はざる者あるときは、餘の五箇國の兵を以て共に之を伐つべし、此の如く六國が合從親善して秦を排斥するときは、秦の兵も敢て函谷關より打出で、山東の列國に害を加へざらん、斯くして霸王の業成就するを得べし、

【字解】 賓、擯に同じ、

趙王曰、寡人年少、立國日淺、未嘗得聞社稷之長計也、今上客有意存天下安諸侯、寡人敬以國從、乃飾車百乘、黃金千鎰、白璧百雙、錦繡千純、以約諸侯、是時周天子致文武之胙於秦惠王、惠王使犀首攻魏、禽將龍賈、取魏之雕陰、且欲東兵、蘇秦恐秦兵之至趙也、乃激怒張儀入之于秦、

【講義】 趙王の曰く、此方は年尚若く、國君の位に立ちしより其時日も極めて短きことゆゑ、是れまで國家の大策を聞くことを得ざりし處、今貴客に於ては天下を維持し列國を安全にせんとの考へにて其方法を敎へ給はる以上は、此方は敬んで我が趙の國を擧

兵之計、臣得陳忠於前矣、故竊爲大王計、莫如一韓魏齊楚燕趙、以從親以畔秦、令天下之將相會於洹水之上、通質刳白馬而盟、要約曰、秦攻楚、齊魏各出鋭師以佐之、韓絕其糧道、趙涉河漳、燕守常山之北、秦攻韓魏、則楚絕其後、齊出鋭師而佐之、趙涉河漳、燕守雲中、秦攻齊、則楚絕其後、韓守城皐、魏塞其道、趙涉河博關、燕出鋭師以佐之、秦攻燕、則趙守常山、楚軍武關、齊涉勃海、韓魏皆出鋭師以佐之、秦攻趙、則韓軍宜陽、楚軍武關、魏軍河外、齊涉淸河、燕出鋭師以佐之、諸侯有不如約者、以五國之兵共伐之、六國從親以賓秦、則秦甲必不敢出於函谷、以害山東矣、如此則霸王之業成矣、

【講義】臣の承るに、明智の君は疑念を絕ち、讒言を去り、流言の路を遠ざけ、徒黨の起らざるやうになすが故に、臣下は君主を尊くし土地を擴張し兵力を强くすべき計に就いて、十分君前に忠言を盡すことを得るなり、故に竊かに大王の爲に計を立てゝ見るに、韓魏齊楚燕趙の六國一致して合從親善をなし、秦に反對するに過ぎたる國策なし、之を實現するには先づ天下中の宰相と將軍とを洹水の附近に會合せしめ、人質を交換し白馬を刳いて固き約束を結ぶべく、其

るに、列國の土地を合はすときは、其廣さ秦の面積の五倍に當り、列國の兵卒を計算して見れば、秦の軍隊に十倍せり、故に若し此六國が一團となり力を併せて西方に向ひて秦を攻めなば、寡は衆に敵せず、小は大に敵せざることゆゑ、秦は必ず破れん、然るに今西方に向ひて秦に屈從するときは、秦の爲に臣下とせらるべし、夫れ人を破ると、人に破らるゝと、人を己れの臣下にすると、自己が人の臣となるとは、非常の相違にして、豈に同日の談ならんや、

夫衡人者皆欲割諸侯之地以予秦、秦成則高臺榭、美宮室、聽竽瑟之音、前有樓闕軒轅、後有長姣美人、國被秦患而不與其憂、是故夫衡人日夜務以秦權恐愒諸侯、以求割地、故願大王孰計之也、

【講義】 夫れ世の尊秦主義者は何れも列國の土地を削り取りて之を秦に附けんとする者なるが、秦が六國を征服する目的成就するときは、彼等は其功によりて富貴榮華の身分となり、高壯なる臺を築き美麗なる家屋に住ひ、竽や瑟の音樂を聽いて耳を樂ませ、前には樓闕や高官の乘る馬車があり、後には脊高き美貌の婦人あり、贅澤三昧に其日を送り、己れの生國が秦の爲に禍ひを被りて上下憂へに沈むも、自分は何とも思はず、されば尊秦主義の者は日となく夜となく專ら秦の權力を振廻はして列國を恐愒し、土地を割讓せしめんとす、故に大王には十分御考慮あらまほしき次第なり、

【字解】 衡人、衡は横なり、六國を從とし秦を横とし六國を連衡して秦に服從せしめんと謀る者を衡人と謂ふ、張儀の徒の如き是れなり、軒轅、大夫以上の乘る車なり、

臣聞明主絶疑去讒、屏流言之迹、塞朋黨之門、故尊主廣地彊

臣聞、堯無三夫之分、舜無咫尺之地、以有天下、禹無百人之聚、以王諸侯、湯武之士不過三千、車不過三百乘、卒不過三萬、立爲天子、誠得其道也、是故明主外料其敵之彊弱、內度其士卒、賢不肖、不待兩軍相當、而勝敗存亡之機、固已形於胸中矣、豈揜於衆人之言、而以冥冥決事哉、

【講義】臣の聞く所に據れば、昔し堯帝には三人の兵もなく、舜は咫尺の土地もなかりしが、其れにても尙天下を有ちたり、禹は百人の團體もなかりしが、其れにても尙諸侯の上に立ちて其王となれり、殷の湯王や周の武王の將校は三千人に過ぎず、戰車は三百乘に過ぎず、士卒は三萬人に過ぎざりしが、其れにても尙天子となれり、此の如き微力よりして大業を成したる所以は、誠に其道を得たるが故なり、此理由を以て明主は、外は敵國の强弱を料り、內は其士卒の賢と不肖とを度り、敵味方の兩軍が接戰する場合に至らざる內より勝敗存亡の機は已に胸中に現ずるなり、豈に衆人の議論に自己の聰明を掩はれて、得失明瞭ならざる意見を以て大事を決せんや、

臣竊以天下之地圖案之、諸侯之地、五倍於秦、料度諸侯之卒、十倍於秦、六國爲一、幷力西鄉而攻秦、秦必破矣、今西面而事之、見臣於秦、夫破人之與見破於人也、臣人之與見臣於人也、豈可同日而論哉、

【講義】臣は慮外ながら天下の地圖に因りて調べ見

大郡なり、上郡、同州の西北に在り、南陽、韓に屬す、

當今之時、山東之建國莫彊於趙、趙地方二千餘里、帶甲數十萬、車千乘、騎萬匹、粟支數年、西有常山、南有河漳、東有清河、北有燕國、燕固弱國、不足畏也、秦之所害於天下者莫如趙、然而秦不敢擧兵伐趙者何也、畏韓魏之議其後也、然則韓魏趙之南蔽也、秦之攻韓魏也、無有名山大川之限、稍蠶食之、傳國都而止、韓魏不能支秦、必入臣於秦、秦無韓魏之規、則禍必中於趙矣、此臣之所爲君患也、

【講義】現今の時代に於て山東に國を建てゝ居るものゝ中にては趙より强きものなし、趙は其地四方二千餘里に渡り、甲冑を被る武士數十萬あり、戰車は千乘、軍馬は一萬匹、其の兵糧は五六年を支ふる程なり、又其地形を言へば、西に常山あり、南に河漳あり、東に清河あり、北に燕國あり、此の燕國は言ふ迄もなく弱國なれば、畏るゝに足らず、秦が天下中に於て尤も害とする所は趙ほどの國はなし、然るに其れにも拘はらず、秦が敢て兵を擧げて趙を伐たざるわけは何であるか、韓魏の二國が後より秦を打つことを相談すべきが故なり、さすれば韓魏は趙の南を防禦する障壁なり、然るに秦が韓魏を攻むるには名山大川の遮るものなければ、蠶が桑の葉を食ふやうに次第次第に侵略して國都まで攻め入らざれば止まざるべし、韓魏が秦を支ふること出來ざるに至らば、必ず秦に併せられて其臣下となるべし、秦は趙との間に韓魏の限界がなくなる以上、禍ひは趙に來ること必定なり、此れ臣が君公の爲に患ふる所なり、

此れ臣が君公の爲めに斯くあらんことを希望する次第なり、

【字解】旃、毛の織物、橘、蜜柑、柚、ダイダイ、湯沐之奉、入浴の材料たる薪炭などを出す土地、奉は供給又は供給する所の物を謂ふ、

今大王與秦、則秦必弱韓魏、與齊、則齊必弱楚魏、魏弱、則割河外、韓弱、則效宜陽、宜陽效、則上郡絕、河外割、則道不通、楚弱、則無援、此三策者、不可不孰計也、夫秦下軹道、則南陽危、劫韓包周、則趙氏自操兵、據衞取淇卷、則齊必入朝秦、秦欲已得乎山東、則必舉兵而嚮趙矣、秦甲渡河踰漳、據番吾、則兵必戰於邯鄲之下矣、此臣之所爲君患也、

【講義】今大王が秦に味方せらるゝときは、秦は貴國の力に因りて韓魏を弱むるに相違なく、大王が齊に味方せられなば齊は貴國の力に因りて楚魏を弱むるに相違なし、魏弱くなるときは、秦に河外の他を割き與ふるならん、韓弱くなるときは、秦に宜陽の地を差出すならん、其利害に見るに、宜陽、秦の手に歸すれば上郡の途絕えん、河外、秦の手に歸するときは上郡への交通塞がらん、又楚弱くなるときは、趙の援を失ふわけなり、此三策は十分に考慮せざるべからず、夫れ秦が軹道を下れば南陽危險に陥り、秦が韓を劫し周の都を勢力圈内に入るゝ時は、趙も干戈を操りて起たざるを得ず、秦又衞に據り淇卷を取らば、齊は必ず秦に入朝するに至らん、秦更に山東を得んと欲せば、勢ひ必ず兵を擧げて趙に向はん、秦の兵が黄河を渡り漳を踰え番吾に據るときは、邯鄲の城下に戰ふこととなるべし、此れ臣が君公の爲に患ふる所なり、

【字解】宜陽、卽ち韓城なり、洛州の西に在り、韓の

國を擇んで擇び當らざるときは民一生安泰ならず、君公に於て臣が外患のことを論ずるを許し給へ、齊と秦と雙方とも燕の敵にてあらば民は安きことを得ず、さりとて秦に與して齊を攻むるとしても、民は安きことを得ず、其れと同時に齊に與して秦を攻むるとしても、民はやはり安きことを得ず、故に他國の君を謀に掛け他國の土地を侵さんとするには、流言反間等に因つて他國の間の國交を絶たしむることを難しとする次第なり、君公には此祕訣をば用心して口に出し給ふこと勿れ、兵を用ふると謀に用ふるとの利害は黑白の如き差あるゆゑ、願はくは之を別ち給へ、是れ積極の陽と消極の陰とを分ける仕方のみ、

君誠能聽臣、燕必致旃裘狗馬之地、齊必致魚鹽之海、楚必致橘柚之園、韓魏中山、皆可使致湯沐之奉、而貴戚父兄、皆可以受封侯、夫割地包利、五伯之所以覆軍禽將而求也、封侯貴戚、湯武之所以放弒而爭也、今君高拱而兩有之、此臣之所以爲君願也、

【講義】 君公誠に臣の計を用ひ給はゞ、其結果として燕は必ず毛織物や裘や狗や馬を產する土地を差出すべく、齊は必ず漁業の出來、鹽を取り得る海上の地を差出し申すべく、楚は必ず橘柚の生ずる菓園を差出し申すべく、韓、魏、中山等の諸國も湯沐の費用に充つべき土地を差出さしむること出來、君公の一門肉親の方々は領土を賜はりて諸侯となること出來申さん、夫れ他國の土地を割譲せしめ、他國の利益を併せ取ることは、五伯が敵の軍勢を打破り其將軍を擒にするが如き武力を費し、戰勝に因りて始めて求め得られたる所なり、一門諸侯に取立つることは、殷の湯王や周の武王が其君を放逐弒殺するが如き無道を行ひて始めて爭ひ得たる所なり、然るに今君公には高く手を拱きながら兩つながら之を得らるゝわけにて、

近し、齊も趙も强國なれば、燕と同盟するや否や覺束なくは思はるゝものゝ、先生飽く迄合從の策を以て燕國を安泰にせんとの厚意あらば、此方は國を擧げて先生の言はるゝが儘にせんと、是に於て蘇秦に行用の車馬竝に運動の支度として金帛を給して先づ趙に至らしめたるが、此の以前蘇秦を邪魔したる奉陽君は已に死し、別に妨害する者もあらざりしかば、趙君肅侯に說いて曰く、天下の大臣宰相、一般の群臣及び布衣の士に至るまで、皆賢明なる君公の行動が義に叶ふことを崇拜して、何れも御前に出でて思召しを承り忠言を陳べたしと願ひ居ることは已に久しき間に之れあり、然る處彼の奉陽君は賢人を忌みて勝手に振舞ひ、君公に於ては手出しをなし給ひかねたる程なりき、之が爲め客分の者や游說の士も御前に於て思ふ存分意見を申切る者なかりしが、今や奉陽君已に世を去り、最早間に立ちて妨げを爲す者なきより、君には復士民と接近し給ふことと相成りたれば、臣は憚りながら愚存を申上ぐる次第なり、

【字解】布衣之士、處士を謂ふ、捐館舍、死去すること、

竊爲君計者、莫若安民無事、且無庸有事於民也、安民之本、在於擇交、擇交而得、則民安、擇交而不得、則民終身不安、請言外患、齊秦爲兩敵、而民不得安、倚秦攻齊、而民不得安、倚齊攻秦而民不得安、故夫謀人之主、伐人之國、常苦出辭斷絕人之交也、願君愼勿出於口、請別白黑所以異陰陽而已矣、

【講義】慮外ながら君公の爲に計るに、民を安堵せしめて無事なる程善きはなし、兎も角も民に勞役辛苦せしむるが如き政策を行ひ給ふな、民を安んずるの本は交際すべき國を擇ぶにあり、交際すべき國を擇んで善く擇び當つるときは民安泰に、交際すべき

【講義】且つ又秦が燕を攻むるには雲中、九原を踰え代、上谷を過ぎねばならず、經過する所の道程は數千里に跨ることなれば、燕の城邑を取りたりとて、秦の爲に計りて見るに固より之を守ること出來ず、さすれば秦が燕に害を加ふることの不可能なるは亦明白なり、然るに趙が燕を攻むるには、戰ひを宣し動員令を出すときは十日も過ぎぬ間に數十萬の兵は東垣に陣取り申すべく、それより滹沱川を渡り易水を歩み越せば、四五日を出でざる内に燕の都に達すべし、故に秦が燕を攻むるは千里の外に戰ふにて、趙の燕を攻むるは百里の内に戰ふわけなり、夫れ百里の近きにある敵を患ともずして千里の遠きにある敵に重きを置くことは、此れほど間違ひたる計なきなり、此の故に願はくは大王に於て趙と排秦同盟をなし、此れを基礎に天下の列國打つて一國とならば、燕の患なきは必定なりと、

【字解】東垣、趙の東部にして燕に接近せる地方、從親、合從して親交するを謂ふ、從は縱なり、地勢が縱に列れる韓魏趙齊楚燕の六國同盟して秦に抗するを謂ふ、

文侯曰、子言則可、然吾國小、西迫彊趙、南近齊、齊趙彊國也、子必欲合從以安燕、寡人請以國從、於是資蘇秦車馬金帛以至趙、而奉陽君已死、即因說趙肅侯曰、天下卿相人臣、及布衣之士、皆高賢君之行義、皆願奉教陳忠於前之日久矣、雖然奉陽君妬、君而不任事、是以賓客游士、莫敢自盡於前者、今奉陽君捐館舍、君乃今復與士民相親也、臣故敢進其愚慮、

【講義】燕の文侯云ふ、先生の議論は然ることながら、吾が燕は小國にて西は强國の趙と接近し、南は齊に

夫安樂無事、不見覆軍殺將、無過燕者、大王知其所以然乎、夫燕之所以不犯寇被甲兵者、以趙之爲蔽其南也、秦趙五戰、秦再勝而趙三勝、秦趙相斃而王以全燕制其後、此燕之所以不犯寇也、

【講義】 夫れ國家が 安樂無事にして 軍隊の全滅、將軍の戰死と云ふが 如き事を 見ざるものは、天下燕に過ぎたる處なし、大王は此の 如く幸福なる 理由を知り給ふか、夫れ 燕が寇に侵され 攻擊を受けざるわけは、趙が燕の南方の障壁となり居るが爲なり、秦と趙とは五たび交戰せし內、秦は二度勝ちぬ、趙は三度勝ちぬ、此の戰ひにて兩國共に疲弊する處へ、大王が完全なる燕を以て 其後を制せ らるればこそ、燕が寇に犯されざる理由なれ、

且夫秦之攻燕也、踰雲中九原、過代上谷、彌地數千里、雖得燕城、秦計固不能守也、秦之不能害燕亦明矣、今趙之攻燕也、發號出令、不至十日、而數十萬之軍、軍於東垣矣、渡嘑沱、涉易水、不至四五日而距國都矣、故曰、秦之攻燕也、戰於千里之外、趙之攻燕也、戰於百里之內、夫不憂百里之患而重千里之外、計無過於此者、是故願大王與趙從親、天下爲一、則燕國必無患矣、

てすれば、天下を併呑して帝と稱して統治すること
を得べしと、秦の惠王曰く、我が秦は、之を鳥に譬ふ
るときは毛や羽が未だ十分に發達せざれば、高く飛
び揚がるわけにゆかずと、惠王が蘇秦の勸を拒みた
る所以は、丁度商君を誅したる際とて游說の士を嫌
ひしことゆゑ用ひざりしなり、蘇秦は秦に於ても亦
失敗せしかば、轉じて東方に向ひ趙の國に赴けり、

【字解】四塞之國、秦は東に黄河あり、函谷、浦津、龍
門、合河等の關、南山及び武關、嶢關あり、西に大隴山
及び隴山關、大震、烏蘭等の關あり、北に黄河南塞あ
るを以て云ふ、

趙肅侯令其弟成爲相、號奉陽
君、奉陽君弗說之、去游燕、歲餘
而後得見、說燕文侯曰、燕東有
朝鮮遼東、北有林胡樓煩、西有
雲中九原、南有嘑沱易水、地方
二千餘里、帶甲數十萬、車六百
乘、騎六千匹、粟支數年、南有碣
石鴈門之饒、北有棗栗之利、民
雖不佃作、而足於棗栗矣、此所
謂天府者也、

【講義】趙の肅侯は弟の成と云ふ者を宰相とし、之
を奉陽君と號せり、此の奉陽君は蘇秦の說を歡迎せ
ざりしかば、此れも亦失敗して燕に游歷せしが、到着
より一个年を過ぎて始めて燕の文侯に謁見の運とな
り、之に說いて云ふ、貴國の燕は東に朝鮮、遼東あり、
北に林胡、樓煩あり、西に雲中、九原あり、南に嘑沱、
易水あり、其地は四方二千餘里に亙り、甲冑を着たる
武士數十萬人、戰車六百乘、騎馬六千匹を有し、其糧
食は數个年を支ふるに足り、南には碣石、鴈門の肥沃
地帶あり、北には棗や栗の産物あり、民は田地を畊作
せずと雖も、棗栗の利あれば食物に乏しからず、此れ
は謂はゆる天の庫なり、

【字解】嘑沱易水、二川の名、

生の子孫なり、兄四人あり、其中三人は游說の士なり、鬼谷先生、鬼谷先生は六國の時の縱橫家なり、鬼谷は其人居る所の地名なり、

於是得周書陰符、伏而讀之、期年以出揣摩、曰、此可以說當世之君矣、求說周顯王、顯王左右素習知蘇秦、皆少之、弗信、

【講義】折柄不圖周書の中より太公望の陰符を發し、几に伏して一心不亂に之を熟讀し、一个年を經て揣摩の術を工夫し、獨り笑坪に入りて言ひけるは、此の術は現代の人君に說くに足ると、先づ周の顯王に說かんことを求めける處、王の左右に居る近侍の者は平生より蘇秦の經歷を十分に知り居たれば、彼れが何を言ふと云ふ風に輕蔑して其議論を信用せず、

【字解】陰符、太公望の兵法、揣摩、揣情摩意の略なり、人の情意を窺ひ中つる手段を謂ふ、

乃西至秦、秦孝公卒、說惠王曰、秦四塞之國、被山帶渭、東有關河、西有漢中、南有巴蜀、北有代馬、此天府也、以秦士民之衆、兵法之教、可以吞天下、稱帝而治、秦王曰、毛羽未成、不可以高蜚、文理未明、不可以幷兼、方誅商鞅、疾辯士、弗用、乃東之趙、

【講義】蘇秦は周王に說かんとして失敗しければ、今度は西を指して秦に至れり、其時英主とも謂ふべき孝公は已に卒去し、惠王の世なりしが、蘇秦は惠王に見えて說きければ、秦は險阻を以て四方を取圍まれたる要害の土地にして、山を衣の如くに隙間なく蔽ひ着て渭水を帶の如くに引廻らし、東には函谷關と黃河とあり、南には巴山、蜀山あり、北には代郡あり、其中は地味豐饒なれば、此れ實に天然の寶庫とも云ふべし、秦の士民の衆多なると兵法の訓練とを以

り出でたるに非ざるもの、開塞、刑罰峻嚴なる時は政化開け、恩德を布けば政化塞ることを言ふ、耕戰、阡陌を作り、及び敵の首を斬れば爵を賜ふ等のことを言ふ、

蘇秦列傳第九

蘇秦者東周雒陽人也、東事師於齊、而習之於鬼谷先生、出游數歲、大困而歸、兄弟嫂妹妻妾竊皆笑之曰、周人之俗、治產業、力工商、逐什二以爲務、今子釋本而事口舌、困不亦宜乎、蘇秦聞之而慙自傷、乃閉室不出、出其書徧觀之、曰、夫士業已屈首受書、而不能以取尊榮、雖多亦奚以爲、

【講義】蘇秦は東周の雒陽の人なり、東方へ游歷して齊の國に赴きて師に就き業に受けしが、其業を習ひし所の師は鬼谷先生なりき、本國を出でて游歷すること五六年に及び、何の得る所もなく大に困窮に陷り歸國せし處、兄弟を首めとし嫂や妹や妻妾に至るまでも、内々蘇秦の失敗を笑ひ、彼れに向ひて言ひけるは、周人の習慣は產業を治め商工に骨を折り十分の二の利益を得ることに忙しきを務めとするに、今そなたは本業の工商を打遣りて口先きの働きを仕事とするゆゑ、此の如く困窮するも亦當然の事ならずやと、蘇秦は之を聞いて面目なく思ふと同時に、自ら悲觀の餘り己れの部屋を閉ぢて外出せず、其蓄へたる種々なる書籍を出して之を讀み、慨嘆して言ひけるは、一體士とある者が首を屈めて書物を習ひ覺えながら、尊貴榮譽の位置を取ること出來ずとすれば、何如に多く書を讀みたりとて何の役に立つべきかと、

【字解】雒陽、洛陽なり、蘇秦、字は季子と云ふ、蘇忿

屬發邑兵、北出擊鄭、秦發兵攻商君殺之於鄭黽池、秦惠王車裂商君以徇曰、莫如商鞅反者、遂滅商君之家、

【講義】商君は復び秦に入りしが、官憲の目を掠めて舊領地なる商邑に向ひ、己れの從者竝に一味の者と領內の兵を發して北方に出で、鄭國を侵せり、秦よりは軍隊を派遣して商君を攻め破り、商君が黽池と云ふ處まで落行きけるを捕へて斬殺せり、秦の惠王は彼れの尸骸を車裂にして人民に示して曰く、商君の如く謀叛することと勿れと、遂に商君の一族を絕しぬ、

太史公曰、商君其天資刻薄人也、跡其欲干孝公以帝王術、挾持浮說、非其質矣、且所因由嬖臣、及得用刑公子虔、欺魏將卬、不師趙良之言、亦足發明商君之少恩矣、余嘗讀商君開塞耕戰書、與其人行事相類、卒受惡名於秦、有以也夫、

【講義】太史公云ふ、商君は其天性殘刻無情なる人物なり、初め彼れが孝公に取入る手段として五帝三王の術を說きたる眞相を追究するに、虛僞の說を使用して孝公に探りを入れたるにて、仁義の道は彼れが天性に非ず、且つ彼れが手引を賴みしは孝公の寵臣にして、正當の手續に由りたるものとは言ひ難く、愈、登庸せらるゝ段になると、公子虔に刑罰を加へ、又魏の大將たる公子卬を欺き、趙良の忠告を戒めとせざるに由りても、亦商君の恩情少きことを發明するに足れり、余は嘗て商君の著はしたる開塞耕戰等の諸篇を讀みたるが、其人の秦に於て實行せし事跡と相似たり、結局秦に於て惡名を得たるは偶然の出來事に非ずして、誠に其緣由あることかな、

【字解】干、冒し求むること、浮說、虛說なり、本心よ

ること、翹足而待、僅かの間を謂ふ、

後五月、而秦孝公卒、太子立、公子虔之徒、告商君欲反、發吏捕商君、商君亡至關下、欲舍客舍、客人不知其是商君也、曰、商君之法、舍人無驗者坐之、商君喟然歎曰、嗟乎、爲法之敝、一至此哉、去之魏、魏人怨其欺公子卬、而破魏師弗受、商君欲之他國、魏人曰、商君、秦之賊、秦彊而賊入魏、弗歸不可、遂內秦、

【講義】商君と趙良と問答せしより五个月の後、秦の孝公卒去に及び、太子位に卽く、趙良の豫言せし如く、曾て商君の爲辛き目に遇ひたる公子虔の徒は、怨みを返すは此の時なりと、商君謀叛の由を訴へ出で、役人を出張せしめて之を捕へんとせり、商君は早くも之を悟り、逃走して函谷關の下に至り旅店に宿を取られんとせしに、旅店の主人は此人が商君なりとは氣附かずして言ふやう、宰相商君の立て給ひたる法律にては、施行劵を所持せざる客人を宿すときは其者と同罪となす規定なればとて斷りぬ、商君は嗚呼と嘆息して自ら喞ちけるは、さても法律を作りたる弊は吾が身に及び、自繩自縛に苦む迄に至りたるかと、軈て其所を立去り魏に赴きたる處、魏にては彼れが日外公子卬を欺き、之を虜にして其軍勢を破りたるを怨み居りけるを故、受入れざりしかば、商君は已むを得ず方向を轉じて他國に往かんとせしに、魏にては考慮すらく、商君は秦の國賊なり、秦は强國なるに其賊が吾邦に入りたるを其儘見逃して秦に戾さゞれば秦より何如なる難題を持掛かくるかも知り難き故不都合なりと、遂に彼れを秦に送り返せり、

【字解】驗、旅行免狀なり、內、イルと訓ず、

商君既復入秦、走商邑、與其徒

力者亡、君之危若朝露、尙將欲延年益壽乎、則何不歸十五都、灌園於鄙、勸秦王顯巖穴之士、養老存孤、敬父兄、序有功、尊有德、可以少安、君尙將貪商於之富、寵秦國之敎、畜百姓之怨、秦王一旦捐賓客、而不立朝、秦國之所以收君者、豈其微哉、亡可翹足而待、商君弗從、

【講義】貴下が外出せらるゝときは附隨ふ車は數十輛あり、供車には鎧を載せ、力量勝れて一枚肋の壯士が車に陪乘して萬一に備へ、片鎌の矛を手に持つ者、車の左右に附添ひて小股に走り行く、此等の用意揃はざる時に、貴下は決して外出致されず、書經に云ふ、德を恃む者は昌え、力を恃む者は亡ぶと、今君は力をのみ恃まるゝことゆゑ、君の危險なることは朝方草葉の上に布ける露の如く、誠にあさはかに覺ゆるに、それにても尙ほ年を延べ壽命を增さんとせらるゝか、此の如き次第なれば、何ゆゑ貴下現在の所領なる十五都を秦君に奉還し、片田舍に引込みて園の植木に水をやるが如き閑靜の生涯を送り給はざる、而して一面には秦王に勸めて深山の岩穴に世を避けて居る賢士を世の中に出し、老人を養ひ、孤兒を保護し、父兄を敬ひ、功勞ある者に相應の位置を與へ、德行ある者を尊ばしめなば、少しは安泰なるべし、然るは貴下が此上とも商於の富を貪り、秦國の新法令を榮譽として人民の怨みを養成せらるゝときは、一旦秦王が賓客を殘し置きて此世を去られ、復び朝廷に立ちて政事をせらるゝ事とならんには、秦國に於て貴下を執へ多年の欝憤を霽らさんとなす者は、何とて少からんや、貴下の滅亡は足を持上ぐる間に來るべしと、商君は、趙良が斯く迄利害を說きて退引を勸めたれども、利慾權勢に心昏みて從はざりき、

【字解】闒戟、矛の一方に枝の出でたる者、驂乘、車中にて主人の右に乘れる附添人なり、捐賓客、死去す

なり、一體貴下の敎が人民を化することは秦王の命よりも深く、民が貴下の處置に倣ふことは秦王の令より迅速なり、加之貴下には又不正の道に因りて己れの威權を立て、朝廷の外に在りて秦君の命令を變更せらるゝは、人の示しとなすべきに非ざるなり、

【字解】 駿、峻に同じ、敎之化民也、敎は商君の令を謂ふ、深於命、命は秦君の命を謂ふ、効上、上は商君の處置を謂ふ、令、秦君の敎令を謂ふ、左建外易、邪道を以て己れの權力を立つること、竝に外部に於て君主の命令を自儘に變更すること、

君又南面而稱寡人、日繩秦之貴公子、詩曰、相鼠有體、人而無禮、人而無禮、何不遄死、以詩觀之、非所以爲壽也、公子虔杜門不出、已八年矣、君又殺祝懽、而黥公孫賈、詩曰、得人者興、失人者崩、此數事者、非所以得人也、

【講義】 貴下にはそれのみならず、國君同樣に南面の位に居り、又自身を呼ぶにも國君と同樣に寡人と稱し、日々に秦の貴公子の罪を糾彈せらる、詩經に申してあるは、鼠を見るに其體あり、人にてありながら禮なきは人に非ず、人にてありながら禮なきときは生きて居る價直なし、何ぞ速かに死せざると、此の詩を以て觀るときは、貴下の爲す所は天壽を以て終らるゝ仕方にあらず、公子虔は門を閉ぢて外出せざること已に八年に及ぶ、貴下は又祝懽を殺して公孫賈を入墨の刑に處せり、詩經に云ふ、人心を得る者は興り人心を失ふ者は崩ると、今擧げたる數箇條は人心を得べき仕方に非ず、

君之出也、後車十數、從車載甲、多力而駢脅者爲驂乘、持矛而操闟戟者、旁車而趨、此一物不具、君固不出、書曰、恃德者昌、恃

暑不張蓋、行於國中、不從車乘、不操干戈、功名藏於府庫、德行施於後世、五羖大夫死、秦國男女流涕、童子不歌謠、舂者不相杵、此五羖大夫之德也、

【講義】五羖大夫百里奚が秦の宰相にてありし折は、如何に疲勞すれども車に乘りて安坐することはなく、暑中の炎天にも絹傘を張つて翳すことなく、國中を通行するにも後乘の車を從へることなく、干戈を手に持つ護衛の武士もなく、彼れの功名は、記錄に載りて官の庫に藏められ、德行は遠く後世にまで傳はれり、五羖大夫の死せし時は、秦國の男女は之に哀みて落涙に及び、童子も子供心に痛ましく覺えしと見え歌を歌はず、臼をつく者も杵歌を唱はざりしが、此の如きは實に五羖大夫の德なり、

【字解】相杵、臼を撞き杵に下す度に出す所の掛聲なり、

今君之見秦王也、因嬖人景監、以爲主、非所以爲名也、相秦不以百姓爲事、而大築冀闕、非所以爲功也、刑黥太子之師傅、殘傷民以駿刑、是積怨畜禍也、教之化民也深於命、民之効上也捷於令、今君又左建外易、非所以爲教也、

【講義】今貴下が秦王に謁せられしは、全く王の御氣に入りの景監に手引きを賴み、彼れを杖とも柱とも爲されしことは名譽とすべき性質のものに非ず、又秦の宰相として百姓の利益を計ることを以て仕事となさずして、大に冀闕を建築せられしとは、功業となすべき性質のものに非ず、其上太子の指南番や守役を刑罰に處し、峻酷の法律を以て人民を虐殺することは是れ人の怨みを積み吾が力の禍ひを養ふもの

【字解】戎翟、蠻夷、冀闕、前に出づ、五羖大夫、秦の繆公、相百里奚のこと、諸々、何事も相手の言ふがままに贊成すること、諤々、遠慮なく眞直に申述ぶること、墨々、道理に闇きこと、

趙良曰、夫五羖大夫、荊之鄙人也、聞秦繆公之賢、而願望見、行而無資、自粥於秦客、被褐食牛、期年繆公知之、擧之牛口之下、而加之百姓之上、秦國莫敢望焉、相秦六七年、而東伐鄭、三置晉國之君、一救荊國之禍、發敎封內、而巴人致貢、施德諸侯、而八戎來服、由余聞之、款關請見、

【講義】趙良は商君の切なる尋ねに答ふるやう、夫れ五羖大夫は荊の地の鄙賤なる人なりしが、繆公の賢君たることを聞き、何とかして謁見せんものをと、本國を出立したる處、途中にて旅費も乏しくなりしかば、爲ん方なく秦國の人に己が身を賣りて其奴隷となり、供となつて秦に入り、身に下等社會の着る毛布を纏ひ牧牛をなしけるが、一个年を過ぎし後、繆公は彼れの賢才なることを聞き知られ、鄙しき牛飼の身分より引擧げ、宰相として國民の上に立たせたるが、何人も彼れを怨む者なし、宰相となりしより六七年に及び、東に向ひて鄭國を伐ち、三たび晉の君を立て、一たびは荊國の禍を救ひ、敎を全國に發して政化善く行屆き、巴人は貢物を捧げて來朝するに至り、又恩德を列國に施し、八戎までも來りて歸服せり、由余の如き賢人も之を聞きて、百里奚の門を音づれて面會を乞へり、

【字解】三置晉國之君、晉の惠公、懷公、文公を立てたるを謂ふ、救荊國之禍、穆公の二十八年に、晉に會し楚を伐ちて周に朝する事、年表に見ゆ、荊郎ち楚を救ふの事は未詳、款、タヽクと訓ず、

五羖大夫之相秦也、勞不坐乘、

商君曰、始秦戎翟之敎、父子無別、同室而居、今我更制其敎、而爲其男女之別、大築冀闕、營如魯衞矣、子觀我治秦也、孰與五羖大夫賢、趙良曰、千羊之皮、不如一狐之掖、千人之諾諾、不如一士之諤諤、武王諤諤以昌、殷紂墨墨以亡、君若不非武王乎、則僕請終日正言而無誅、可乎、商君曰、語有之矣、貌言華也、至言實也、苦言藥也、甘言疾也、夫子果肯終日正言、鞅之藥也、鞅將事子、子又何辭焉、

【講義】商君曰く、其昔し此の秦と云ふ國は野蠻の敎へにて、父子の間に區別もなく、共に一人の妻を持つが如き未開の風習なりしに、吾輩は其敎へを改良して其男女の別を定め、大に冀闕を建築に及び、其構造は文明なる魯衞と同一にせり、自分にては竊かに古來竝ぶ者なき大功と思ふ所なるが、先生より我が秦に於ける政治の仕方を見らるゝ時は、五羖大夫の才智と、孰れか勝り居るかと、趙良答へて云ふ、千頭の羊の皮も狐の脇の下の皮一枚に及ばず、千人の唯はいはいと追從を言ふは一人の直言に及ばず、昔し周の武王は直言を用ひて昌え、殷の紂王は不明の言を用ひて亡びぬ、貴下若し武王を非認し給はぬならば、僕は終日正直なる議論を申上げ、而も御咎めなきやうに願ひたきが、差支へなかるべきかと、商君云ふ、古語に申すことあり、表面を飾りたる言葉は木の花なり、道理に叶ひたる言葉は木の實なり、耳に聞きづらき言葉は藥なり甘く味へる言葉は毒なりと、先生が終日正言なし給ふならば、其れこそ實のある議論にて僕の藥となるべきものなり、僕は先生の御指導に從ふべし、先生何ぞ辭し給ふに及ぶべきと、

而王者退、僕不肖、故不敢受命、僕聞之、曰非其位而居之曰貪位、非其名而有之曰貪名、僕聽君之義、則恐僕貪位貪名也、故不敢聞命、商君曰、子不說吾治秦與、趙良曰、反聽之謂聰、內視之謂明、自勝之謂彊、虞舜有言曰、自卑也尙矣、君不若道虞舜之道、無爲問僕矣、

【講義】商君は秦の宰相の位に在ること十年に及ぶ、秦王の一族及び外戚の人々等は新法令の爲に處刑せられたる者少からざりしかば、隨つて公孫鞅に怨敵の念を抱く者多かりき、或時趙良と云ふ者、商君（以下公孫鞅の事を商君と稱す）に面會す、商君云ふ、僕が先生に御逢ひ申したるは孟蘭皐の紹介に由れり、今僕は將來の御交際を願ひたしと存ずるが、御承知あるべきかと、趙良云ふ、僕は願ひ申さず、孔丘の言はれし語も、賢者を推擧げて之を主人と戴く者は立身に及び、不肖者を聚めて其上に王たる者は逆轉すと、僕は不肖なるが故に貴下の爲に不利なれば、折角の御詞にはあれど仰せに從ひ申しかぬるなり、僕の承るに、其居るべき位に非ずして之に居るを貪位と曰ひ、其受くべき名譽に非ずして之を受くるを貪名と曰ふと、僕貴下の意志に從ふときは、僕が此貪位貪名の人となるの恐れあり、されば敢て尊命を奉ぜずと、商君は彼れが交際を欲せざるは己れの政見に反對なるが爲なるべしと思ひしかば、先生は僕が秦を治むる仕方に不同意なるかと尋ねたる處、趙良の曰く、自ら己れの心に聽きて善惡を知るを聰と曰ひ、自ら己れの心の正邪を觀察するを明と曰ひ、自ら己れの心に打勝つを强と曰ふ、虞舜の申されし言葉に、自ら卑下する者は反つて人に尊敬せらるゝが故に尊貴なりと、貴下には虞舜の道を蹈み行はるゝに若かず、僕に問ひ給ふに及ばずと、

孫鞅は計を考へ、魏の大將たる公子卬に書簡を送りて申述べけるは、吾れ昔し魏に在りし時公子と懇親なりき、今や御互ひに兩國の大將となりて攻合ふとは心に忍びざる所なれば、公子と親しく會見に及び、和議の盟をなし、面白く酒を飲み合ひて戰ひを罷め、秦魏兩國を安んじたしと、公子卬は公孫鞅の提議を尤もなりとして承諾を與へ、會見の上盟を結び、已に宴會となりける時、公孫鞅は鎧着たる武士を伏せ置きて公子卬を虜にし、因りて彼れの率ゐたる軍隊を攻めて盡く之を破り、捕虜として連れ歸れり、

魏惠王兵數破於齊秦、國內空、日以削、恐乃使使割河西之地、獻於秦以和、而魏遂去安邑徙都大梁、梁惠王曰、寡人恨不用公叔座之言也、衞鞅既破魏還、秦封之於商十五邑、號爲商君、

【講義】魏の惠王の兵は屢〻齊秦二國の爲に打負かされ、國內の財力兵力は空虛となり、土地は日々に削り取られしかば、大に恐怖に及び、齊の方は姑らく第二となし、河西の土地を秦に割讓して和睦を調へけるが、斯くして魏は遂に安邑を立退き、都をば大梁に遷せり、梁の惠王は、昔し公叔座が若し公孫鞅を用ひぬならば之を殺すべしと諫告したることを想ひ起し、嘆じて申しけるは、此方は今日に至り公叔座の言葉を用ひざりしことを殘念に思ふと、公孫鞅已に魏を破りて本國に凱旋せしが、孝公は之に商於の十五邑を賜ひ、號して商君と曰へり、

商君相秦十年、宗室貴戚、多怨望者、趙良見商君、商君曰、鞅之得見也、從孟蘭皐、今鞅請得交、可乎、趙良曰、僕弗敢願也、孔丘有言曰、推賢而戴者進、聚不肖

河山之固、東鄕以制諸侯、此帝王之業也、孝公以爲然、

【講義】其翌年に齊と魏と戰ひ、齊は馬陵と云ふ處に於て魏の兵を破り、太子の申を捕虜となし、將軍の龐涓を殺す、其翌年に至り、公孫鞅は孝公に說いて云ふ、秦の魏に於ける關係は、之を譬へて見るに人に腹心の疾あると同樣にて、魏が秦を併合するに非ずば、秦が魏を併合することとなるべし、何となれば魏は山嶺の險阻なる所に位置を占めて安邑に都し、秦とは黃河を界として山東の利益を獨占し、形勢有利なるときは西に向ひて我が秦を侵し、不利なるときは東方に向ひて土地を掠め取る、今秦國は君の賢聖に在らせらるゝ御蔭にて隆盛なるに引易へて、魏の方は過ぐる年大に齊の爲に打破られ、是れ迄親密にし又は服從せる列國も之に背けり、此機會に乘じ魏を伐つことを得べし、魏が秦を支へ難きときは、必ず都を東の方に移すならん、若し果して東の方に移りなば、秦は從來魏の恃としたる山嶺と黃河との堅固なる地形に據り、東に向ひて列國を制することを得ん、此れ帝王たるべき事業なりと、孝公は此の說を以て尤もなりとせり、

【字解】嶺阨、安邑の東なる山嶺の險要を謂ふ、

使衞鞅將而伐魏、魏使公子卬將而擊之、軍既相距、衞鞅遺魏將公子卬書曰、吾始與公子驩、今俱爲兩國將、不忍相攻、可與公子面相見盟、樂飲而罷兵、以安秦魏、魏公子卬以爲然、會盟已飲、而衞鞅伏甲士而襲虜魏公子卬、因攻其軍、盡破之以歸秦、

【講義】孝公は公孫鞅の說に從ひ、彼れに軍隊を授けて魏に伐たしめたる處、魏よりは公子卬を大將として秦の兵を擊たしめぬ、魏の兵能く拒ぎしかば、公

疆、而賦稅平、平斗桶權衡丈尺、行之四年、公子虔復犯約、劓之、居五年、秦人富彊、天子致胙於孝公、諸侯畢賀、

【講義】是に於て孝公は公孫鞅を以て大良造となし、兵を率ゐて魏の安邑を圍みて降服せしめ、三年を過ぎて工事を興し、冀闕並に宮殿と廣場とを咸陽に建築し、秦は雍より都を此に遷せり、而して人民の父子兄弟一軒の内に住居することを禁じ、小なる都會、村里、聚落を合併して縣となし、之が地方官として令と丞との職を設けて治めしめ、全國の縣數三十一あり、畊作の爲に是れまで田の間に在りたる縱横の道路及び田と田との界のくろ等を田地に改め、租税を平均にし、又枡や秤や物差し等の統一を行ひしが、實施の日より四年を經て公子虔又もや法令を犯したりしかば、其鼻を切りて之を刑せり、斯くて五个年の後に秦の人民は財富み力強く國の地位高まり勢威盛んになりければ、天子より祭肉をば孝公に下賜せられ、列國は殘らず秦に慶賀を表せり、

【字解】太良造、一名太上造、爵の名、冀闕、法律を掲示する門なり、阡陌、南北を阡と曰ひ、東西に陌と曰ふ、封疆、封は土を高く盛るなり、疆は界なり、胙、祭の時神に供したる肉、

其明年、齊敗魏兵於馬陵、虜其太子申、殺將軍龐涓、其明年、衞鞅說孝公曰、秦之與魏、譬若人之有腹心疾、非魏幷秦、秦卽幷魏、何者、魏居嶺阨之西、都安邑、與秦界河、而獨擅山東之利、利則西侵秦、病則東收地、今以君之賢聖、國賴以盛、而魏往年大破於齊、諸侯畔之、可因此時伐魏、魏不支秦、必東徙、東徙、秦據

黥其師公孫賈、明日、秦人皆趨令、行之十年、秦民大説、道不拾遺、山無盜賊、家給人足、民勇於公戰、怯於私鬪、鄕邑大治、秦民初言令不便者、有來言令便者、衞鞅曰、此皆亂化之民也、盡遷之於邊城、其後民莫敢議令、

【講義】　斯かる折柄、秦の太子、此の新法令に觸れたる行爲ありしに、公孫鞅の曰く、法令の實效なきは上に立つ者より犯すが故なりとて、太子を刑に處せんとしたれども、流石に太子は君主の世繼なれば刑罰を施しかぬる所より、其守役の公子虔を刑に處し、太子の指南番たる公孫賈に入墨することとせり、此事國中に知れ渡りしかば、人民は驚き畏れ、一人殘らず新法令を遵守するに至れり、斯くて新法令行はるゝこと十个年に及び、秦の人民は其效用を實驗して大に滿足し、道路にて落し物あるも之を拾はず、往來罕なる山中にすら盜賊なく、家々に差支へなく人々に不足なく、人民は國家の爲の戰ひには勇氣を勵し、個人の爭鬪には臆病となり、都鄙の差別なく大に治まれり、是に至りて最初新法令の不便を申立てたる者も、公孫鞅の所に來りて其便利なることを言ひけるが、公孫鞅の曰く、此の如き徒は法律の效用を邪魔する者なりと、盡く之に國界の城へ所換を命じぬ、此れよりは何人も法令に就いて彼れ此れ是非を言ふ者なかりき、

於是以鞅爲大良造、將兵圍魏安邑、降之、居三年、作爲築冀闕宮庭於咸陽、秦自雍徙都之、而令民父子兄弟同室内息者爲禁、而集小都鄕邑聚爲縣、置令丞、凡三十一縣、爲田開阡陌封

家罪あるとき組合全體同罪となるなり、分異、分家なり、別戸なり、復其身、夫役の免除、末利、古へは農業本位なるが故に商工を末利となす、收孥、奴隷、名田、占田とて一家の占有する田地を謂ふ、宗室、王家の親族、

令既具、未布、恐民之不信己、乃立三丈之木於國都市南門、募民有能徙置北門者予十金、民怪之、莫敢徙、復曰、能徙者予五十金、有一人徙之、輒予五十金、以明不欺、卒下令、令行於民朞年、秦民之國都言初令之不便者以千數、

【講義】　法文は已に完成に及びたれども未だ布告するに至らず、公孫鞅は法令を發布するも已が厲行することを信ぜざらんことを恐れ、信用を取るべき方法を案出して、先づ長さ三丈の木を人通り多き國都の市の南門に立て、人民に募り、能く此の木を持行きて北門に置くものあらば十金を與ふる由を申觸らしたれども、些細の勞力にて出來る事なるに、斯かる大金を懸くるは誠しからずと、誰れも彼れも怪みて之を移す者なかりき、因りて又申觸らしけるは、能く北門に移す者あらば五十金を與へんと、軈て一人之を移す者ありしかば、卽座に約束通り五十金を與へ、斯くして政府が人民を欺かぬことを明かにし、卒に新法令を發布せしが、此れを施行せしより一个年を經て、秦の人民の上京して新法令の不便なることを申立つる者、幾千と云ふ夥しき人數に及べり、

【字解】　朞年、一周年なり、初令、新法令を謂ふ、

於是太子犯法、衞鞅曰、法之不行、自上犯之、將法太子、太子、君嗣也、不可施刑、刑其傅公子虔、

有二男以上不分異者、倍其賦、有軍功者、各以率受上爵、爲私鬪者、各以輕重被刑、大小僇力、本業耕織、致粟帛多者、復其身、事末利、及怠而貧者、擧以爲收孥、宗室非有軍功、論不得爲屬籍、明尊卑爵秩等級、各以差次、名田宅臣妾衣服以家次、有功者顯榮、無功者雖富無所芬華、

【講義】 孝公は公孫鞅の改革論を喜びしかば、彼れを登庸して左庶長となし、法律變更の令を定めたり、其箇條は、人民に十人組、五人組を作らしめ、互に其罪を告發し、一人罪あるときは組合全員を同罪となし、惡事を告發せざりし者は腰斬の刑に處し、惡事を告發せし者は戰場に臨みて敵の首を取りたる者と同一の賞を與へ、惡事を匿したる者は敵に降參せし者と同一の罰を課すると、人民に二人以上の男子ありて別戸せざる者は其稅を二倍にすると、軍功ある者は各、其割合に應じて上爵を授け、個人的の爭鬪を爲す者は輕重に從ひて刑罰を被ること、大人も子供も力を併せ、耕作や紡織を本業として勤勉の結果多く米や反物を上納する者は夫役を免じ、製造、商賣等に從事する者、及び本業を營めども懶惰にして貧しき者は、妻子を上へ取上げて政府の奴婢となすと、君主の一族にして軍功あらざる者は、取調べの上、王族を除籍すると、家格の尊き卑しきと、朝廷に於ける爵位、官職に於ける等級とを明かにして、各、順序を立て、占有する田宅の廣狹や臣妾の多寡や衣服の制や、何れも其家の爵位の分限に應じて等を踰えざると、功ある者は人目に着くやうなる贅澤をなすことを得、功なき者は縱令富裕なりとも華美の生活をなすを得ざることとなり、

【字解】 什伍、十戸一組を什と曰ひ、五戸一組を伍と曰ふ、收司連坐、收司は罪を發くこと、一家罪あるときは組合の中より之を告發す、連坐はまきぞへ、一

れ込むが如きは、此れを以て官職を勤め法度を守るには差支へなけれども、法度に超越したる大問題を論ずる相手とはなすべからず、夏殷周の三代は各、其時代の禮を行ひ、互に同じからざりしも尙王者となれり、春秋の五伯は各、其國の法を有して、互ひに同じからざりしも尙霸者たり、凡そ世の中は知者が法を作りて愚者は其法に制せられ、賢者は禮を改めて不肖者は禮に拘泥するものなりと、

【字解】五伯、五霸に同じ、齊の桓公、晉の文公、秦の繆公、楚の莊公、宋の襄公の五君を謂ふ、

杜摯曰、利不百不變法、功不十不易器、法古無過、循禮無邪、衛鞅曰、治世不一道、便國不法古、故湯武不循古而王、夏殷不易禮而亡、反古者不可非、而循禮者不足多、孝公曰、善、

【講義】杜摯又異議を述べて云ふ、凡そ改正の法律が在來の者に比して十倍の利益なければ法を變ずべきに非ず、新發明の器械が當用の者に比して十倍の效果なければ、器械を取換ふべきに非ず、古への道を法則とすれば過ちなく、禮に循へば曲りたることなしと、公孫鞅之を反駁して云ふ、世を治むる道は一ならず、苟くも國に便利ならば、必ずしも古への道を法則とするに及ばず、故に殷の湯王、周の武王は古への道に循はずして革命を行ひしにも拘はらず王者となり、夏の桀王や殷の紂王は先王の禮を變更せざりしと雖も亡びたり、されば古への道に反したりとて惡しく言ふことは出來ず、禮に循ひたりとて譽むる價値なしと、孝公は公孫鞅の說を聞いて尤もなる議論なりと言はれぬ、

以衛鞅爲左庶長、卒定變法之令、令民爲什伍、而相收司連坐、不告姦者腰斬、告姦者與斬敵首同賞、匿姦者與降敵同罰、民

慣其他を廢し天下の耳目を聳動することとなれば、社會が己れを非難せんことを恐れぬ、因つて變更の理由を言明すらく、疑心ある行動は名譽なく、疑念ある事業は功績なし、其上普通人に超越したる行ひは必ず世間より非難せられ、獨得の知慮ある者は必ず人民より輕侮せらる、愚人は事の效果に暗く、知者は物の未だ萌さゞる中に發見す、一體人民と云ふものは、物事を始めて興す場合には其考へを取るわけに行きかぬれども、成功の後に樂みを共にすることは出來得べし、されば至極の德を論ずる者は俗説と一致せず、大功を成す者は衆人と相談せず、右の理由により聖人は國を強くする事でありさへせば、先例を模範とせず、民を利する事でありさへせば、禮制に循はずと、孝公其論を喜びて曰ふ、尤もなりと、

甘龍曰、不然、聖人不易民而教、知者不變法而治、因民而教、不勞而成功、緣法而治者、吏習而民安之、衞鞅曰、龍之所言、世俗之言也、常人安於故俗、學者溺於所聞、以此兩者居官守法可也、非所與論於法之外也、三代不同禮而王、五伯不同法而霸、智者作法、愚者制焉、賢者更禮、不肖者拘焉、

【講義】甘龍は公孫鞅の説に反對して曰く、然に非ず、古への聖人なりし君は、人民の風俗を變更すること無くして之を教へ、又智慮ありし人は、從來の法度を變革すること無くして之を教へたり、但し人民の風俗に因りて之を教ふるときは、骨折らずして成功に及び、從來の法度に随ひて之を治むるときは、役人も其取扱ひに習熟し、而して人民も疑ひ惑ふことなくして安堵するものなりと、公孫鞅は之を駁して云ふ、甘龍の説は世間並みの議論なり、普通の人は在來の習慣に滿足して居り、學者は自分の聞き知る所に溺れ込む弊あり、習慣に滿足し又は聞き知る所に溺

【講義】孝公は景監に語らるゝやう、汝の客は氣に入りたり、談合の相手となすに足ると、景監は公孫鞅に何事を說きしかと問ひけるに、公孫鞅云く、此度は吾れ霸者の道を以て公に說きたる處、公は之を用ひんとする意志あり、何卒復び謁見することを得しめ給へ、公の志の在る所は吾れ之を見拔きたりと、斯くて公孫鞅復び謁見に及びけるが、孝公は彼れの談論を聞き、其面白さに自然と膝の押出づるを自覺せざりし程にて、五六日の間語り續けて倦まざりき、景監は公孫鞅に向ひ、足下は何如なる議論を以て吾が君の思召しにはまり、吾が君は斯くも悅喜し給ふにやと問ひけるに、公孫鞅云ふ、吾れ君に向ひて五帝三王の道を說き、君公を之と比較して夏殷周三代の泰平を致すべきことを告げたるに、君公の仰せには、そは餘りに氣の永き話にて、吾れは待つ能はず、其上賢君は何れも自身の生きて居る間に名を天下に顯はすに、何とて悠々と數十年數百年の長き年月を待つて帝王の業を成さんやと、故に拙者は尤も效果の速かなる强國の術を以て君公に說きしかば、君公大に滿足し給へるのみ、然れども强國の術にては、君德をば殷の湯王や周の武王に比ぶるわけには行きかぬるなり、

孝公既用衞鞅、鞅欲變法、恐天下議己、衞鞅曰、疑行無名、疑事無功、且夫有高人之行者、固見非於世、有獨知之慮者、必見敖於民、愚者闇於成事、知者見於未萌、民不可與慮始、而可與樂成、論至德者不和於俗、成大功者不謀於衆、是以聖人苟可以彊國、不法其故、苟可以利民、不循其禮、孝公曰、善、

【講義】孝公は公孫鞅が强國の說を聞いて深く心に叶ひし處より、遂に之を任用せり、鞅は國法を變更して己れの政策を實行せんと欲したれども、古來の習

を取次ぎしたることを怒り、召び付けて叱るやう、汝の客は全く常識を逸せる人物なり、何とて採用する價直あらんやと、景監は公孫鞅が何如なる愚論を陳べて孝公の機嫌を損ぜしかと恐れ惑ひ、早速彼れに面會し、孝公の不首尾を語り、己れの迷惑せることを喞ちて責めけるに、公孫鞅の曰く、吾れ帝道を以て公に說きしに、公は理會せられざりしなりと、それより五日を過ぎ、景監又も孝公に公孫鞅の拜謁を願ひ出で、其結果復び謁見することとなりしが、公孫鞅は以前より一層熱切に說きけれども、其効なくして孝公の思ふ坪に入らざりき、謁見終りし後、孝公復び景監を咎めければ景監も亦公孫鞅を責めたるに、公孫鞅云ふ樣、吾れ王道を以て公に說きしに、未だ公の腑に落ちざりしなりと、景監重ねて公孫鞅の拜謁を願ひ出で、三度目に謁見せし處、孝公は彼れの說を善せられたれども、未だ取上げて用ふるに至らず、謁見終りて退出に及べり、

【字解】　帝道、五帝の道、王道、夏殷周三代の聖王の道、讓、言を以て責むるを讓と曰ふ、

孝公謂景監曰、汝客善、可與語矣、鞅曰、吾說公以霸道、其意欲用之矣、誠復見我、我知之矣、衛鞅復見孝公、公與語、不自知厀之前於席也、語數日不厭、景監曰、子何以中吾君、吾君之驩甚也、鞅曰、吾說君以帝王之道比三代、而君曰、久遠吾不能待、且賢君者、各及其身顯名天下、安能邑邑待數十百年以成帝王乎、故吾以彊國之術說君、君大說之耳、然亦難以比德於殷周矣、

其儘魏の國に留まり居りぬ、惠王は已に公叔座の邸より宮中に還られ、左右に居る近臣に話さるゝやう、公叔の病氣は重態なり、悲むべきことかな、彼れは我が魏國全體の政事を公孫鞅に任せよと申したるが、馬鹿馬鹿しき限りにて、何んと病みはうけて精神狂ひ居るに非ざるかと、

公叔既死、公孫鞅聞秦孝公下令國中求賢者將修繆公之業、東復侵地、迺遂西入秦、因孝公寵臣景監以求見孝公、

【講義】公叔は遂に死去せしが、公孫鞅は、秦の孝公が其先祖繆公の功業を復活して、東方に於て他國に侵略せられたる土地を取戻さんがため國中に布告を出し賢者を求むる由を聞きしかば、俄かに思ひ立ち、西を指して出發し、秦の境内に入り、孝公の寵愛を被れる景監と云ふ者の手蔓にて孝公に謁見せんことを求めたり、

孝公既見衛鞅、語事良久、孝公時時睡弗聽、罷而孝公怒景監曰、子之客妄人耳、安足用邪、景監以讓衛鞅、衛鞅曰、吾說公以帝道、其志不開悟矣、後五日、復求見鞅、鞅復見孝公、益愈、然而未中旨、罷而孝公復讓景監、景監亦讓鞅、鞅曰、吾說公以王道而未入也、請復見鞅、鞅復見孝公、孝公善之、而未用也、罷而去、

【講義】孝公は愈〻公孫鞅に逢ふことゝなりしが、鞅は孝公に向ひ、國を治むることに就き談論する所あり、長時間に及びしが、孝公は何等の興味を感ぜず、其間折々睡りを催して彼れの話を聽かず、軈て謁見も終り、公孫鞅退出せし後、孝公は景監が無用の人間

重患なり、萬一不慮の事あらんには、此國家を何如にすべきと、公叔云ふ、其儀は御心配に及ばず、臣死すと雖も、替りて君を佐け奉る者なきに非ず、臣の家にて中庶子を勤むる公孫鞅と云ふもの、年は若けれども、世に珍しき才智あり、何卒國家萬端の政事をば悉皆彼れに委任し給へと、惠王は覺束なきことを云ふものかなと、心に信ぜざりしかば默して語なし、斯くて王は還幸に及ばられんとせし時、公叔座は人拂ひをなしゝ上、言ひ出づるやう、大王若し臣の言を聽許ありて鞅を用ひ給はぬならば、是非とも之を殺し給へ、國境を出でしめ給ふな、用ひぬ以上は國の害となるべき人物なればと、惠王は許諾して去られたり、

【字解】商君、秦に於て彼れを商の地に封じたるを以て商君と稱す、公叔座、公叔は姓、座は名、中庶子、一族の事を掌る官、

公叔座召鞅謝曰、今者王問可以爲相者、我言若、王色不許我、我方先君後臣、因謂王卽弗用鞅、當殺之、王許我、汝可疾去矣、且見禽、鞅曰、彼王不能用君之言任臣、又安能用君之言殺臣乎、卒不去、惠王既去、而謂左右曰、公叔病甚、悲乎、欲令寡人以國聽公孫鞅也、豈不悖哉、

【講義】惠王還幸の後、公叔座は商鞅を枕邊に召び、之に謝して云ひけるは、今の先き國王は予の後任として宰相となるべき者を諮問ありしかば、予は汝を推擧したれども、王は不同意の樣子あり、予は主君の事を先にし臣下の事を後廻しとするが故に、王に申上げけるやう、若し鞅を用ひ給はざる以上は之を殺し給ふべしと、王には承知して還られたれば、疾く疾く逃げ去るべし、今にも執はれ殺されんと、鞅は敢て驚く樣子もなく、公叔座に向ひ、彼の王は君の言を用ひて臣を任用することの出來ぬ程であれば、何とて又君の言を用ひて臣を殺さんやと曰ひ、立去りもせず

問を取り、雙方を並に排次して、此の列傳の篇を作りたるが、其中の疑はしきものは之を取除きて書き載せざりき、

【字解】鈞、平均するなり、公平に見るを云ふ、覩、ミルと訓ず、古文、文は字のことなり、古文とは謂はゆる蝌斗文字をいふ、今文の篆書に對する稱呼、弟子問、論語の中に弟子と孔子との問答せることを載せたる場處、

商君列傳第八

商君者、衞之諸庶孽公子也、名鞅、姓公孫氏、其祖本姬姓也、鞅少好刑名之學、事魏相公叔座、爲中庶子、公叔座知其賢、未及進、會座病、魏惠王親往問病、曰、公叔病、有如不可諱、將奈社稷何、公叔曰、座之中庶子公孫鞅、年雖少、有奇才、願王擧國而聽之、王嘿然、王且去、座屏人言曰、王卽不聽用鞅、必殺之、無令出境、王許諾而去、

【講義】商君は衞國の妾腹より生れたる公族の一人なり、名を鞅と呼び、姓を公孫氏と稱す、其先祖は本來姬姓なり、鞅は年若き頃、刑名の學問を好みて之を修業し、魏國の宰相なる公叔座と云ふ者に奉公し、中庶子の役を勤めたり、公叔座は、彼れの奉公振りに由りて其才智あることを見拔き居りしかば、ゆくゆく國家の用に供せんと思ひ居りたれども、取り紛れて未だ之を魏君に推擧する運びに至らざりき、折柄公叔座は不圖大病に罹り、其由宮中に聞えければ、魏君惠王は自身彼れが邸に臨まれて病氣を見舞はれ、最早賴少く思召されて申されけるは、公叔は何如にも

【講義】樂欬、字は子聲、

○廉絜、字庸、

【講義】廉絜、字は庸、

○叔仲會、字子期、

【講義】叔仲會、字は子期、

○顏何、字冉、

【講義】顏何、字は冉、

○狄黑、字晳、

【講義】狄黑、字は晳、

○邽巽、字子斂、

【講義】邽巽、字は子斂、

○孔忠、

【講義】孔忠、

○公西輿如、字子上、

【講義】公西輿如、字は子上、

○公西蒧、字子上、

【講義】公西蒧、字は子上、

太史公曰、學者多稱七十子之徒、譽者或過其實、毀者或損其眞、鈞之未覩厥容貌、則論言弟子籍出孔氏古文、近是、余以弟子名姓文字、悉取論語弟子問、幷次爲篇、疑者闕焉、

【講義】太史公云く、世の學者多く孔門七十子の徒を稱すれども、之を譽むる者は或は其實際以上に言做し、之を謗る者は又其眞價以下に見降すことなるが、公平に言ふときは、孰れも未だ其容貌を面のあたりに見ずして評論を下すものなり、弟子の姓名簿は孔子の家にありし古文より出でしものなれば、確實なるに近し、予は弟子名姓文字をば一一論語の弟子

【講義】罕父黑、字は子索、

○秦商、字子丕、

【講義】秦商、字は子丕、

○申黨、字周、

【講義】申黨、字は周、

○顏之僕、字叔、

【講義】顏之僕、字は叔、

○榮旂、字子祺、

【講義】榮旂、字は子祺、

○縣成、字子祺、

【講義】縣成、字は子祺、

○左人郢、字行、

【講義】左人郢、字は行、

○燕伋、字思、

【講義】燕伋、字は思、

○鄭國、字子徒、

【講義】鄭國、字は子徒

○秦非、字子之、

【講義】秦非、字は子之、

○施之常、字子恆、

【講義】施之常、字は子恆、

○顏噲、字子聲、

【講義】顏噲、字は子聲、

○步叔乘、字子車、

【講義】步叔乘、字は子車、

○原亢籍、

【講義】原亢籍、

○樂欬、字子聲、

【講義】漆雕徒父、

○壤駟赤、字子徒、

【講義】壤駟赤、字は子徒、

○商澤、

【講義】商澤、

○石作蜀、字子明、

【講義】石作蜀、字は子明、

○任不齊、字選、

【講義】任不齊、字は選、

○公良孺、字子正、

【講義】公良孺、字は子正、

○后處、字子里、

【講義】后處、字は子里、

○秦冉、字開、

【講義】秦冉、字は開、

○公夏首、字乘、

【講義】公夏首、字は乘、

○奚容蒧、字子皙、

【講義】奚容蒧、字は子皙、

○公堅定、字子中、

【講義】公堅定、字は子中、

○顏祖、字襄、

【講義】顏祖、字は襄、

○鄡單、字子家、

【講義】鄡單、字は子家、

○句井疆、

【講義】句井疆、

○罕父黑、字子索、

○冉孺字子魯、少孔子五十歲、
【講義】冉孺、字は子魯、孔子より若きこと五十歲、
○曹卹、字子循、少孔子五十歲、
【講義】曹卹、字は子循、孔子より若きこと五十歲、
○伯虔、字子析、少孔子五十歲、
【講義】伯虔、字は子析、孔子より若きこと五十歲、
○公孫龍字子石、少孔子五十三歲、
【講義】公孫龍、字は子石、孔子より若きこと五十三歲、
自子石已右、三十五人、顯有年名、及受業聞見于書傳、其四十有二人無年、及不見書傳者、紀于左、
【講義】子石より以上の三十五人は、皆明白に年と名とあり、並に其學業を孔子に受けたること、書史傳記に聞見せり、其外年もなく、書傳にも見えざる四十二人は左に錄せり、
○冉季、字子產、
【講義】冉季、字は子產、
○公祖句茲、字子之、
【講義】公祖句茲、字は子之、
○秦祖、字子南、
【講義】秦祖、字は子南、
○漆雕哆、字子斂、
【講義】漆雕哆、字は子斂、
○顏高、字子驕、
【講義】顏高、字は子驕、
○漆雕徒父、

有過人必知之、臣不可言君親之惡、爲諱者禮也、

【講義】 巫馬施は字を子旗と呼ぶ、孔子より年若きこと三十歳、陳の國にて司敗と云ふ高官を勤むる某と云ふ者、孔子に問うて曰く、魯の君昭公は禮を知り居られたりやと、孔子答へて禮を知り居られたりと、司敗は其席を退きし後、巫馬期に揖の挨拶を行ひ、語り出づるやう、拙者の聞く所に據れば、君子は公明正大にして一點も私なければ、人に加擔して惡事の匿しだてを爲すが如きことあらずと、然るに今孔夫子との問答によりて見れば、君子もはやり普通人の如く人に加擔することあるやうなり、何となれば魯の君昭公は吳國の女を娶りて夫人となし、之をば吳孟子と名づけられぬ、孟子の姓は姬なり、故に吳孟姬と稱すべきを、元來禮にては同姓を娶らざることに成り居り、魯も姬姓、吳も姬姓なれば、不合理の結婚なり、故に同姓を稱することを避けて之を孟子と稱し、子は宋の姓なれば宛も宋の女の如く胡麻化したるのみ、若し魯君昭公が禮を知り居るならば、天下何人も禮を知らざる者あらんや、然るに孔夫子が昭公を以て禮を知る者とせられたるは此れ昭公に加擔したるに非ずやと、巫馬期は司敗の言ひしまゝを孔子に告げたる處、孔子の曰く、丘こそは仕合せである、苟も過失あるときは人必ず之を知り、彼れ此れ申すに因りて改むる機會あり、臣たる者は君の過を言ふわけにゆかぬものにて、君の爲に之を諱み隱すは禮なりと、

【字解】 君親、親は附帶字なり、

○梁鱣字叔魚、少孔子二十九歲、

【講義】 梁鱣、字は叔魚、孔子より若きこと二十九歳、

○顏幸字子柳、少孔子四十六歲、

【講義】 顏幸、字は子柳、孔子より若きこと四十六歳、

請粟、孔子曰、與之釜、請益、曰、與之庾、冉子與之粟五秉、孔子曰、赤之適齊也、乘肥馬衣輕裘、吾聞君子周急不繼富、

【講義】公西赤は字を子華と呼ぶ、孔子より年若きこと四十二歳、子華が孔子の命を受けて齊國に使を勤めし時、孔子の家政を預り居たる冉有は、子華の留守中其母の手宛てとして扶持米を賜はりたしと申出でけるが、若し與ふべきものならんには、孔子初めより之を支給せらるべきなれども、不必要なりしゆゑ其儀に及ばざりしを、冉有は深くも考へず此の請求をなしたるなり、孔子は之に釜だけの量を遣はせと命ぜらる、釜は僅かに六斗四升なり、斯の如き少量に限られたるは、是れ與ふべからずとの意味なり、然るに冉有は猶心附かずして、餘りに少ければ增額を願ひたしと申せしかば、今度は庾だけの量を遣はせと命ぜらる、庾は一石六斗のことにて、是れとても言ふに足らざる少額なるが、孔子は增すに及ばずとの意を示されたるに外ならず、然るに冉有は自分の取料にて八十石を子華の母に與へたり、是に於て孔子の仰せけるは、赤が齊に旅立ちし時は、堂々と肥え太りたる馬に打跨り、身には結構なる細毛の輕き皮衣を着たり、少しも不如意の生活とは見えず、吾が承りしには、君子は貧乏にして切迫の者には救濟を施せども、富裕にして何不自由なき者には其上便益を與ふることなしと、

○巫馬施、字子旗、少孔子三十歳、陳司敗問孔子曰、魯昭公知禮乎、孔子曰、知禮、退而揖巫馬旗曰、吾聞君子不黨、君子亦黨乎、魯君娶呉女爲夫人、命之爲孟子、孟子姓姬、諱稱同姓、故謂之孟子、魯君而知禮、孰不知禮、施以告孔子、孔子曰、丘也幸、苟

母請之、孔子曰、無憂、瞿年四十後當有五丈夫子、已而果然、敢問夫子何以知此、有若默然無以應、弟子起曰、有子避之、此非子之座也、

【講義】孔子の卒去ありし後、門人等は先師の事が常に念頭に浮び、慕はしさに堪へず、幸ひに有若の容貌が孔子に似たるを以て、相談の上有若を押して師の位に就かしめ、師の禮を以て之に事ふること、曾て孔夫子に事へし時と同樣にせり、其後或る日門人等は進み出で問うて云ふ、昔し孔子が外出せらるゝ際に門人に命じて雨具を用意して持行かしめらるゝに、程なく果して雨降りしかば門人問ひけるやう、先生には何を以て雨の降るべきことを知し召されしかと、孔夫子は之に對へて仰せけるは、詩經に申してあるではないか、月が畢と云ふ星に接近すると、どうどうと雨を降らすと、昨夕月が畢に宿りしに非ずや、其れ故に今日必ず雨降るべきことを知りたるのみと、他日やはり月が畢に宿りたることあれども、其時は雨降らざりき、此れは何如なる次第なるか、又同窓の商瞿は年長けたれども子なかりしかば、其母は心配の餘り更に妻を娶らしめんとせり、然るに孔子は齊の國へ使を遣すべき用事起り、使の役をば瞿に命じ賜ふ、瞿の母は子の無きことを憂ふる折柄、再緣の考へもあり、旁々使節の役目は御免願ひたしと申出でたるに、孔子は老母を慰めて、さな憂へそ、瞿は年四十を過ぎなば五男子を設くべしと宣ひけるが、其後果して其言葉の通りなりき、我々は孔夫子が何を以て此れを知り給ひたるか、押して御尋ね致すと、有若は固より其理由を知らざりしかば、默然として何の答へをも爲さず、門人は起つて有若に告ぐるやう、有子其席を避けられよ、此れは足下の坐るべき位にあらずと、

【字解】離、カ、ルと訓ず、畢、星の名、滂沱、大雨の貌、室、妻を謂ふ、

○公西赤、字子華、少孔子四十二歳、子華使於齊、冉有爲其母

ら手を下して畊作することあらんやと、又或る時樊遲は仁を問ひしに、孔子は人を愛すと曰はれ、智を問ひしに、人を知ると答へられぬ、

【字解】稼、五穀を種うるを云ふ、穡、ムツキなり、

○有若、少孔子十三歲、有若曰、禮之用和爲貴、先王之道斯爲美、小大由之、有所不行、知和而和、不以禮節之、亦不可行也、信近於義、言可復也、恭近於禮、遠恥辱也、因不失其親、亦可宗也、

【講義】有若は孔子より年若きこと十三歲、有若の言に禮が調子合ひを貴ぶことは先王の道の美なる所以なり、小事大事とも禮に從ふに、差支へて旨く運び得ぬ所あり、そこで調子合ひが大切なることを知り、調子合ひを善くするとも、若し禮を以て其調子合ひを程よく切詰めざるときは、やはり旨く運ぶわけにゆかずと、又云ふ、約束が義に近づくときは、何等の妨げなきゆゑに履行すること出來、恭しきことが禮に近づくときは、恥辱を受けずしてすみ、初め結託する人が親むべき所を得るならんには、亦一族同樣に長く交ることを得べしと、

孔子既沒、弟子思慕、有若狀似孔子、弟子相與共立爲師、師之如夫子時也、他日弟子進問曰、昔夫子當行使弟子持雨具、已而果雨、弟子問曰、夫子何以知之、夫子曰、詩不云乎、月離于畢、俾滂沱矣、昨暮月不宿畢乎、他日月宿畢、竟不雨、商瞿年長無子、其母爲取室、孔子使之齊、瞿

る、子牛問返しけるは、口をきく場合に言ひにくくするを仁と申すべきや、もそつと高尚なるものと思ひしにと、孔子曰く、實行するは難きものなり、されば之を語に出すに於ても言ひにくからざるを得んやと、子牛又君子を問ひけるに、孔子の答へに、君子は憂へもせず懼れもせずと、子牛、君子たる所以は此の如きことに止まらざるべしと思ひしかば又問ひ返しけるは、憂へもせず懼れもせざれば、其れにて君子と申さるべきやと、孔子曰く、苟も自分の心の中を振り反り見て何等の疚しきことなければ何を憂ふることあらん、何を懼るゝことあらんと、

【字解】訒、難きなり、言ひかねて語澁るなり、

○樊須、字子遲、少孔子三十六歲、樊遲請學稼、孔子曰、吾不如老農、請學圃、曰、吾不如老圃、樊遲出、孔子曰、小人哉樊須也、上好禮則民莫敢不敬、上好義則民莫敢不服、上好信、則民莫敢不用情、夫如是、則四方之民、襁負其子而至矣、焉用稼、樊遲問仁、子曰、愛人、問智、曰、知人、

【講義】樊須は字を子遲と呼ぶ、孔子より年若きこと三十六歲、樊遲或る時田作りの事を敎へられんことを請ひけるに、孔子は、吾れは素人なれば老功の百姓に及ばずと曰はる、樊遲又畠作りの道を敎へられんことを請ひけるに、孔子は、吾れは素人なれば老功の畠作りに及ばずと曰はれ、彼れの請求を拒絕せられぬ、其れより樊遲其席を退きし後に、孔子は左右の門人に向つて申さるゝやう。さても小人なるかな、樊須と云ふ人物は、凡そ人の上に立てる者禮を好むときは、民は之を敬はざるものなく、上たる者義を好むときは、民は之に服せざるものなく、上たる者信を好むとき、民は敢て實情を以て上に事へざるものなし、夫れ此の如くなる時は、四方の人民は各々其の子をねんねこにて脊負ひ、此の國へ來りて畊作すべし、何ぞ自

【字解】 斯、仕官を指す、

○公伯僚字子周、周愬子路於季孫、子服景伯以告孔子曰、夫子固有惑志僚也、吾力猶能肆諸市朝、孔子曰、道之將行、命也、道之將廢、命也、公伯僚其如命何、

【講義】 公伯僚は字を子周と呼ぶ、同門の子路は季孫氏に仕へ至りたる處、子周は之を季孫に讒言に及べり、子服景伯と云ふ者魯の大夫なりしが、孔子に告げて云ふやう、季孫は元來公伯僚の爲に欺かれて其心蔽はれたれば、今度も其讒言を信じて子路を罪するやも知れず、自分に於ては及ばずながら尚季氏に忠告し、公伯僚を殺して市場や朝廷に尸をさらさしめんと、孔子は、之に止めて云はるゝやう、子路の季孫に用ひらるゝと否とは吾が道の行廢に關し重大なる事柄とは云へ、道の行はれんとするも天命なり、又廢れんとするも天命なり、公伯僚が自分の力にて天命を何如にするぞ、齒牙に掛くるに及ばずと、

【字解】 愬、ウツタフと訓ず、讒言するなり、市朝、倶に群集の出入する處なり、

○司馬耕、字子牛、牛多言而躁、問仁於孔子、孔子曰、仁者其言也訒、曰、其言也訒、斯可謂之仁乎、子曰、爲之難、言之得無訒乎、問君子、子曰、君子不憂不懼、曰、不憂不懼、斯可謂之君子乎、子曰、內省不疚、夫何憂何懼、

【講義】 司馬耕は字を子牛と呼ぶ、子牛は多言にして性質躁がしき人物なりき、曾て仁を孔子に問ひたるに、孔子は仁を知らんとせば先づ仁者を見よ、仁者は其口をきく場合甚だ言ひにくき樣子ありと云は

中に易を能く修業する廉にて漢の中大夫となれり、
【字解】元朔、漢の武帝の年號、
○高柴、字子羔、少孔子三十歳、子羔長不盈五尺、受業孔子、孔子以爲愚、子路使子羔爲費郈宰、孔子曰、賊夫人之子、子路曰、有民人焉、有社稷焉、何必讀書然後爲學、孔子曰、是故惡夫佞者、
【講義】高柴は字を子羔と呼ぶ、孔子より年若きこと三十歳、子羔を身の長五尺に滿たざる小男にて、孔子に就きて學業を受けたるに、孔子は彼れを以て愚物とせられたり、同門の子路彼れを薦めて費郈の知事となしたるに、孔子は、彼れの學問未だ熟せざるに人民を治めしむるは危險なりとし、彼の人の子、卽ち費郈の人民を害する仕方なりと云はれければ、子路は辨解を試みて曰く、費郈には治むべき人民もあれば事ふべき社稷もあり、之を治め之に事ふることは學問の實行に外ならず、何も書物を讀むに限りて學問となすことあるべきやと、但し子路は初めより此の考へにて推薦せしには非ず、孔子の反對論を聞き負け惜みに理窟に持出したるなれば、孔子は、汝のやうに口實に設くる者あればこそ彼の言葉巧みに言ひ廻す者を惡む次第なりと、
【字解】社稷、社は土地の神、稷は五穀の神、佞、巧辯なり、
○漆彫開、字子開、孔子使開仕、對曰、吾斯之未能信、孔子說、
【講義】漆彫開は字を子開と呼ぶ、孔子は彼れが才學の已に官吏となるに十分なることを認められければ、之に仕官せしめんとせられしに、彼れ答へて云ふ、仕官するに就いて未だ自分に其資格あることを信ずる能はずと、孔子は其小成に安んぜざることを深く滿足に思はれたり、

子嘗各異時事孔子、顏回死、顏路貧、請孔子車以葬、孔子曰、材不材、亦各言其子也、鯉也死、有棺而無槨、吾不徒行以爲之槨、以吾從大夫之後、不可以徒行、

【講義】顏無繇は字を路と呼ぶ、顏回の父なり、此父子は嘗て別々の時代に孔子の門人となり居れり、回の死せし折、路は貧乏にて葬式を營む力もなかりしかば、孔子の車を請受け、其を賣りたる金にて槨を造り、之を葬らんとて其旨を孔子に願出でし處、孔子之を辭して申されけるは、凡そ子に器量の有無に拘らず、誰も吾が子に就いて苦勞なすとは變りなし、吾が子の鯉が死せし時棺はあれども槨はなかりき、されど車を賣りて槨を作れば吾れは步行せざるを得ず、故に然樣には致さゞりき、其は吾が大夫の末席を汚す身分故、步行することならざりし爲なり、故に今汝が回を葬むるに强ひて槨を用ふるにも及ぶまじと、

【字解】槨、棺を容るべき箱、卽ち外棺を謂ふ、

○商瞿、魯人、字子木、少孔子二十九歲、孔子傳易於瞿、瞿傳楚人馯臂子弘、弘傳江東人矯子庸疵、疵傳燕人周子家豎、豎傳淳于人光子乘羽、羽傳齊人田子莊何、何傳東武人王子中同、同傳菑川人楊何、何元朔中、以治易爲漢中大夫、

【講義】商瞿は魯人にして字を子木と呼ぶ、孔子より若きこと廿九歲、孔子は易を商瞿に傳へ、瞿は楚國の人馯臂子弘に傳へ、弘は江東の人矯子庸疵に傳へ、疵は燕國の人周子家豎に傳へ、豎は淳于の人光子乘羽に傳へ、羽は齊國の人田子莊何に傳へ、何は東武の人王子中同に傳へ、同は菑川の人楊何に傳へ、何は元朔

孔子は彼れの心中を知られたりしが故に、謙遜して答へを與へられざりしなり、白珪之玷、白珪とて白き玉の玷けたるは尚補ひ得るも、言葉の疵は長く殘りて、手の入れ方なしと云ふ意味の詩なり、

○公晳哀、字季次、孔子曰、天下無行、多爲家臣仕於都、唯季次未嘗仕、

【講義】公晳哀は字を季次と呼ぶ、孔子其節操を稱して曰く、天下に道を行ふものなく、多くは大夫の家に仕へて家臣となり、國都にて役人となれるに、季次のみは是れまで曾て仕官したることなしと、

○曾蒧字晳、侍孔子、孔子曰、言爾志、蒧曰、春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸、孔子喟爾歎曰、吾與蒧也、

【講義】曾蒧は字を晳と呼ぶ、或る時孔子の側に侍せしが、孔子より汝の志を語り聞かせよとありし時、蒧の答へけるは、暮春の季節になりて春着も已に出來たれば之を着て、冠者五六人、童子六七人を伴につれ、沂水に入浴し、舞雩に游びて春風に吹かれ、詩を吟じて歸り申さん、只今の處此れより外に望みも無しと、孔子之を聞かれ、あゝと嘆息して云はるゝやう、吾れは蒧の仲間となるであらうと、

【字解】吾與蒧也、此の時他の門人は皆地位を得たる時に施すべき抱負を述べたるに、曾蒧獨り意外の答へをなしゝに孔子の同意を寄せられたるは、是れ何如に高尚の理想あるも當時に在りては空言に止まるが故に、目前の處斯く自然を樂む外はあらずとて、彼れの超脱を喜ばるゝよりは、寧ろ時勢の不可なることを慨嘆せられしのみ、舞雩、雨を祈る小高き處なり、風、風にあたること、喟爾、嘆ずる貌、

○顏無繇、字路、路者顏回父、父

して婿にすべき資格あり、曾て縲目の辱を受けたることあれども、彼れに罪ありしに非ず、全くの寃罪なれば差支へなしと、斯くて己れの女を以て彼れに嫁せしめられたり、

【字解】 縲紲、縲は黑き繩、紲はヒクなり、在中の二字にて此等懲役人の中に混じ居たる者なることを知るべし、

○南宮括、字子容、問孔子曰、羿善射、奡盪舟、俱不得其死、然禹稷躬稼、而有天下、孔子弗答、容出、孔子曰、君子哉若人、上德哉若人、國有道不廢、國無道免於刑戮、三復白珪之玷、以其兄之子妻之、

【講義】 南宮括は字を子容と呼ぶ、曾て孔子に問ふやう、昔し羿は善く弓を射、奡は舟を推し動かす程の力士なりしも、俱に天壽を全うすること出來ざりき、然るに禹や稷は自身手を下して畊作したれども、終に天下を得ることとなれりと、孔子は之に對して何等の挨拶をなさず、聽て南宮括退席せしかば、孔子は門弟子に向ひ稱贊して云はるゝやう、君子なるとかな、斯樣なる人は、德を重んずることかな、斯樣なる人はと、又其緣組すべき資格あることを語りて、國家に秩序ありて賢者の用ひらるゝ場合には、彼れの器量を以て捨て置かるゝが如きことなし、國家に秩序なく賢者の虐待を被る場合には、明智なる彼れのこと故、刑罰の禍を免れんと、南容は常に白珪之玷と云ふ詩句を三たび繰返して失言なきことを心掛けぬ、斯かる人物なりしかば、孔子は其兄の女をば彼れの妻に賜はりぬ、

【字解】 羿奡、羿は有窮國の君にて、夏王桐の位を奪ひ、後其臣の寒促に殺さる、寒促は羿の妃を奪ひ、其腹に奡を生めり、奡は多力にして陸地に舟を運轉す、夏の君少康に誅せらる、禹稷躬稼而有天下、稷は自身天子とならざりしも、其子孫に至り天下を有つ、周の武王是れなり、此れは禹稷を以て孔子に比したるにて、

しくは貪慾を逞しうするが如き惡德を行はざる時は仁と申し得べきかと、孔子の曰く、右は一通りの努力にては出來難ければ、難しとは言ひ得れども、本と克伐怨欲の心がありて、其れを强ひて押ふるに過ぎず、然るに仁者に至りては初めより克伐怨欲の心なし、されば此れを以て仁となすは吾れ知らざるなりと、

【字解】克伐怨欲、克は俗に謂ふ勝氣、伐は功に誇る怨は人を忌む、欲は貪るなり、

孔子卒、原憲亡在草澤中、子貢相衞而結駟連騎、排藜藿、入窮閻過謝原憲、憲攝敝衣冠見子貢、子貢恥之曰、夫子豈病乎、原憲曰、吾聞之、無財者謂之貧、學道而不能行者謂之病、若憲貧也、非病也、子貢慙不懌而去、終身恥其言之過也、

【講義】孔子卒去ありし後、原憲は世を逃れて草深き處や沼地の中に隱居せり、然るに同門の子貢は衞の宰相となり、車に四頭の馬を服け、騎馬の從者を何人となく從へて、藜や藿の枝葉を推し開き、原憲の住へるわびしき村里の門に入り、彼れを見舞ひて無沙汰を詫びけるに、原憲は着古しの衣冠を整へて子貢に面會せしかば、子貢は此の有樣を見てはづかしく思ひ、先生は病み給ふかと、原憲云ふ、吾が承はる所によれば、財貨なき者をば貧と呼び、道を學びて實行する能はざる者を病と呼ぶと、憲などは貧しきなり、病めるに非ずと、子貢は大に赤面し、不快の心地して暇を告げしが、終身此の時の失言を恥ぢたりとぞ、

【字解】藜藿、アカザと豆、窮閻、貧里の門、

○公冶長、齊人、字子長、孔子曰、長可妻也、雖在累紲之中、非其罪也、以其子妻之、

【講義】公冶長は齊國の人にして、字を子長と呼ぶ、孔子は彼れに就いて語られけるは、長は我が娘を遣

を取るに就いては子羽に失錯せりと、

【字解】以言取人云々、宰予は言語に長じて實行を缺き、澹臺滅明は容貌惡しくして德行あり、失之は見損ずること、

○宓不齊、字子賤、少孔子四十九歲、孔子謂子賤、君子哉、魯無君子、斯焉取斯、子賤爲單父宰、反命於孔子曰、此國有賢不齊五人、教不齊所以治者、孔子曰、惜哉、不齊所治者小、所治者大、則庶幾矣、

【講義】宓不齊は字を子賤と呼ぶ、孔子より年若きこと四十九歲、孔子嘗て子賤のことを評して申されけるは、君子なるかな、彼れは魯國の君子と交り、薰陶の力によりて此の如き人格を成せり、若し魯に君子なかりしならば、彼れは何として此の君子の德を己が身に取ること出來ようぞと、子賤、單父と云ふ處の知事となり、孔子に任地の事を報告すらく、此の國には拙者より賢なる者五人あり、拙者に國を治むる仕方を教へくれ申したりと、孔子の曰く、惜しきことかな、不齊の治むる土地の小なることは、若し其治むる所大國ならんには、大いなる事業をなすに近からんにと、

○原憲字子思、子思問恥、孔子曰、國有道穀、國無道穀恥也、子思曰、克伐怨欲不行焉、可以爲仁乎、孔子曰、可以爲難矣、仁則吾弗知也、

【講義】原憲は字を子思と呼ぶ、子思の恥を問へるに對し、孔子の言に、國に道あるときは大に事業をなすべきに、只俸祿を貪り國に道なきときは退いて道を樂むべきに、俸祿を貪るは恥なりと、子思云ふ、人に勝つことを好み、又は其功に誇り、或は人を怨み、若

稱贊する結果、諸侯の國内に在りても大夫の領地に在りても名聲が必ず聞ゆるなりと、

【字解】 達、聞、同じく名譽なれども、達は己れに名譽を受くべき實質ありて自然人に認めらるゝなり、聞は實質なくして虚名あるなり、

○曾參、南武城人、字子輿、少孔子四十六歳、孔子以爲能通孝道、故授之業、作孝經、死於魯、

【講義】 曾參は魯の南武城の人にして、字を子輿と呼ぶ、孔子より年若きこと四十六歳、孔子は彼れを以て能く孝道を會得したる者とせられしかば、之に學業をば授けられぬ、曾參は孝經を著はし、魯にて死去せり、

○澹臺滅明、武城人、字子羽、少孔子三十九歳、狀貌甚惡、欲事孔子、孔子以爲材薄、既已受業、退而修行、行不由徑、非公事不見卿大夫、南游至江、從弟子三百人、設取予去就、名施乎諸侯、孔子聞之曰、吾以言取人、失之宰予、以貌取人、失之子羽、

【講義】 澹臺滅明は武城の人にして、字を子明と呼ぶ、孔子より年若きこと三十九歳、其容貌風采非常に醜かりしかば、彼れが初め孔子の門人とならんとせし時、孔子は其樣子を見て器量足らざる者と思はれたり、其れより遂に孔子に從ひて學業を受くることとなり、退いて行を修めたるが、一寸道を行くにも小路近路などを通ることなく、公務に關することの外は卿大夫の身分ある者の家へ出入せざる程方正公直なりき、南方に游歷して江水の附近に至り、弟子三百人を從へて、取予去就の道を說き、其名聲列國に傳はれり、孔子之を聞きて云はるゝやう、吾れ議論を以て人を取るに就いては宰予に失錯せり、容貌を以て入

いて居るやうに思はるゝ程になりて、始めて能く差支へなく通りて行かるべしと、子張は深く此の教へに感ぜしかば、己れの大いなる帶に書き識して忘れぬやうに心掛けぬ、

【字解】蠻貊、南蠻、北狄なり、州里、二千五百家を州となす、五家を鄰とし五鄰を里となす、衡、車の前の方に横はる梳、

子張問、士何如斯可謂之達矣、孔子曰、何爾所謂達者、子張對曰、在國必聞、在家必聞、孔子曰、是聞也、非達也、夫達者、質直而好義、察言而觀色、慮以下人、在國及家必達、夫聞也者、色取仁而行違、居之不疑、在國及家必聞、

【講義】子張問ふ、士たる者、何如なる者をば名譽が行亙ると申さるべきかと、孔子は彼れが兎角外聞に馳することを知らるゝが故に、彼れの病根を療治せられんと、反問して云はるゝやう、何であるか、汝の申す名譽の行亙ると謂ふことはと、子張對へて云ふ、そは諸侯の國内に在りても必ず名聲が聞こえ、大夫の領分に在りても必ず名聲が聞ゆることを申すなりと、孔子は此の如き答へを豫期せられたることとて、其誤れることを説かれけるは、汝の言ふ所は名聞にて、名譽が行亙ると云ふことには非ず、名譽の行亙ると申すは、質朴正直にして義を好み、尙自己の行屆かざる點を知らんが爲めに、他人の言ふ所を察し、他人の顏色を觀て如何に己れの言行を認むるかを知り、常に能く考へて人の下手に出づることにて、此の如くなるときは、諸侯の國内に在りても大夫の領地に在りても必ず名譽が行亙る、然るに名聞と云ふ方は、本と仁心などあらざるに、顏色は假りに尤もらしく仁者の樣子をなし、其行爲は全く道に外れ、而も己れは此に身を据ゑて疑ひもせずして宜しきことの樣に思ひ居る、世の中の人は內實を知らざるが故に之を

四十八歲、子張問干祿、孔子曰、多聞闕疑、愼言其餘、則寡尤、多見闕殆、愼行其餘、則寡悔、言寡尤、行寡悔、祿在其中矣

【講義】 顓孫師は陳國の人、字を子張と呼ぶ、孔子より年若きこと四十八歲、子張、祿位を求むるには如何やうなる心得が必要なるかを問ひたるに、孔子曰く、多く古今の人の說を聞き、心に合點ゆかざるものは之を取除けて口に出さず、愼みて其餘の全然信ずべき議論を言ふときは、人より非難を受くること少し、又多く古今の人の行ひを見て、其中危み思ふ所を取除けて身に之を行はず、愼みて其餘の全然確實なる事柄を行ふときは、後よりあゝせざりしならば宜しかりしをと悔ゆること少し、言ふ所に非難少く行ふ所に後悔少きときは、祿位を得るの道は自ら其中に在りと、

他日從在陳蔡間、因問行、孔子曰、言忠信、行篤敬、雖蠻貊之國行也、言不忠信、行不篤敬、雖州里行乎哉、立則見其參於前也、在輿則見其倚於衡、夫然後行、子張書諸紳、

【講義】 他日孔子に隨行して陳蔡の間に在りけるが、人は何如にせば差支へなく世の中を通りて行かれ得るかと問ひたるに、孔子曰く、其言は飾らず僞らず心の底より出で、其行は篤實にして誠心あり、恭敬にして禮を失はざるときは、文明の中國に於ては固より言ふに及ばず、禮樂なき夷狄の國なりとも差支へなく通りて行かるべし、若しも言ふ所が忠信ならず行ふ所が篤敬ならざるときは、身近の土地なりとも他人より愛想をつかさるゝが故に、何とて差支へなく通りて行くこと出來やうぞ、されば始終忠信篤敬を念頭に掛け、立ちてあるときは、之が前に在るやうに見え、車に乗りてあるときは、之が車の首木に附

思はるゝが、一體此れは何如なることを意味するかと、孔子對へて、凡そ衣服などに色取りをなすには、先きへ五色を施して、胡粉を後から塗るものなりと、此の意義は、先づ種々なる色を塗りて其分界の處へ胡粉を塗れば、前の色彩が浮上がるやうに一層の美觀をなすものなり、それと同じく、婦人が立派なる器量ある處へ白粉を施せば尙美人に見ゆるものにて、容貌ありての飾りなりと、子夏は之を聞き一つの考案を出して曰く、然様ならば禮は第二のものに之れありや、人に忠信の美質ありてこそ禮も用をなすなれと、孔子は本と此の問答が詩の解釋なるに、子夏は其れより推して忠信と禮との關係を發見したるが故に、商は今こそ詩の話相手となすことが出來ると、其穎敏を稱せられぬ、

【字解】巧笑倩云々、上の二句は衞風、碩人の章に在り、下の一句は逸詩とて現存の詩經に洩れたり、倩は口つきの好きなり、盼は目の黑白の判然たるなり、絢はきらびやかなることと、

子貢問、師與商孰賢、子曰、師也過商也不及、然則師愈與、曰、過猶不及、子謂子夏曰、汝爲君子儒、無爲小人儒、孔子既沒、子夏居西河敎授、爲魏文侯師、其子死、哭之失明、

【講義】子貢は孔子に向ひ、師と商との二人はどちらが勝り居るにやと問ひたるに孔子は、師の方は行過ぎたり、商の方は行きつかずと、子貢は問ひを進めて曰く、然様ならば師は愈り居るにやと、孔子答へられけるは、過ぎたるに及ばざるが如しと、孔子或る時子夏を戒められけるは、儒にも天下國家に目を着くる君子の儒と自分と一身の學藝に止まる小人の儒との區別あり、汝は君子の儒となるべし、小人の儒と爲る勿れと、孔子歿せられし後、子夏は西河と云ふ處に居りて門人を敎授し、魏の文侯の師となれり、其子の死せし時餘り哭きて盲目となりぬ、

○顓孫師、陳人、字子張、少孔子

曰、昔者偃聞諸夫子、曰、君子學道則愛人、小人學道則易使、孔子曰、二三子、偃之言是也、前言戲之耳、孔子以爲子游習於文學、

【講義】言偃は吳の生れにて字を子游と呼ぶ、孔子より年若きこと四十五歲、子游は孔子に從ひて學業を受けたる後、武城の知事となりぬ、孔子或る時武城を通過せられたるに、琴瑟を彈じ詩を歌ふ聲耳に入りしかば、にこりと笑つて曰はるゝやう、雞の如き小さい者を割くに何とて牛を屠る所の大刀を用ひんや、斯樣に小さき土地を治むるに禮樂の大道を用ふるには及ぶまじきにと、子游云ふ、以前先生より承はりたることあり、君子が禮樂に因りて道を學ぶときは、德性の涵養出來て自然人民を愛するに至り、小人が禮樂に因りて道を學ぶときは、溫順の氣象を增し能く服從するが故に使ひ易きものぞと、然るに今の仰せは此の言葉と矛盾致すやうに覺ゆと、孔子は隨行の門人に向ひて云はれけるは、諸子よ、偃の言ふ所は尤もなり、前に予が雞を割くに牛刀を用ふるに及ばずと申したるは戲れなりと、孔子は子游を以て文學に熟習せる者とせられたり、

【字解】夫子、孔子を謂ふ、

○卜商、字子夏、少孔子四十四歲、子夏問、巧笑倩兮、美目盼兮、素以爲絢兮、何謂也、子曰、繪事後素、曰、禮後乎、孔子曰、商始可與言詩已矣、

【講義】卜商は字を子夏と呼ぶ、孔子より年若きこと四十四歲、或る時子夏、孔子に問ふ、詩經に、愛嬌よく笑へる口のあたりゑくぼなど入りて、何とも云へざるにこやかの樣子あり、又美しき目附きは黑目勝ちにて殊なる風情あり、白粉を施して一層まばゆく見ゆとあれど、此の如き天成の美人に飾りは不必要と

せしが、其儘本國に引上げず、豫定の如く兵を以て晉に押寄せ、晉の兵と黄池の上にて出遇ひたり、吳晉二國此に雌雄を爭ひしが、結局晉の方より吳軍を攻擊し大に之を打破りぬ、越王勾踐は吳が晉の爲に手痛く破られたりと聞き、江水を打渡りて不意に吳に攻め入り、城を離るゝこと七里の所に陣を取りぬ、吳王夫差は越が本國に不意打を爲したる由を聞き、晉を退却して歸國に及び、越と五湖に戰ひ、三度とも敗北し、城門の防禦破れしかば、越の兵は城內へ繰込み、遂に吳王の宮殿を包圍し、夫差を殺して其宰相の太宰嚭を誅戮せり、越は吳を破りし後三年を過ぎ、東方の列國に臨み、其盟主となれり、

【字解】艾陵、齊に在り、黄池、晉に在り、

故子貢一出、存魯亂齊、破吳彊晉而霸越、子貢一使、使勢相破、十年之中、五國各有變、子貢好廢擧、與時轉貨貲、嘉揚人之美、不能匿人之過、常相魯衞、家累千金、卒終于齊、

【講義】故に子貢は、一たび魯を出で游說をなして魯の國の危きを取り止め、齊の國を攪亂し、吳の國を破り、晉の國を強くして越をば霸たらしめぬ、斯く子貢一たび使者として既成の形勢を打破し、十年の間に以上の五个國各、變化あり、子貢は賣買を好み、時に隨つて富を運轉せり、又平生喜んで人の美點を揚げたれども、一方を於て人の過失を匿すこと能はざりき、常に魯衞に宰相となり、家には千金を積み蓄へ、後、齊に於て死去せり、

【字解】廢擧、物價低ければ買ひ、高ければ賣ると、與時轉貨貲、時の景況を視て貨を轉じ貲を殖すなり、

○言偃、吳人、字子游、少孔子四十五歲、子游既已受業、爲武城宰、孔子過聞絃歌之聲、孔子莞爾而笑曰、割雞焉用牛刀、子游

之、慮不先定、不可以應卒、兵不先辯、不可以勝敵、今夫齊與呉將戰、彼戰而不勝、越亂之必矣、與齊戰而勝、必以其兵臨晉、晉君大恐曰、爲之奈何、子貢曰、修兵休卒以待之、晉君許諾、子貢去而之魯、

【講義】子貢は呉を立去りて晉に赴き晉君に申すやう、臣の承はるに、凡そ思慮は先づ定め置かぬときは急場の事に應ずることならず、兵備は先づ整へ置かぬときは戰ひに臨みて敵に勝つことならずと、今齊呉の二國は將に戰爭に及ばんとす、彼れ呉の齊と戰ひて勝たざるときは、越が附入りて之を亂すべく、又呉が齊に打勝つならば、必ず其兵を以て晉に攻掛り申さんと、晉君は之を聞き大に恐怖し、そは一大事なり、何如せば宜しからんと、子貢は策を授けて曰く、大王には兵備を修め、軍隊を休息せしめ、徐ろに敵の來るを待たるべしと、晉君は尤もなりとて其説を聽き入れぬ、是れより子貢は又晉を去りて魯に赴けり、

【字解】應卒、卒は急卒なり、

呉王果與齊人戰於艾陵、大破齊師、獲七將軍之兵而不歸、果以兵臨晉、與晉人相遇黄池之上、呉晉爭彊、晉人擊之、大敗呉師、越王聞之、涉江襲呉、去城七里而軍、呉王聞之、去晉而歸、與越戰於五湖、三戰不勝、城門不守、越遂圍王宮、殺夫差而戮其相、破呉三年、東向而霸、

【講義】呉王は豫定の如く齊人と艾陵に戰ひて大に齊の軍隊を破り、齊の七將軍の率ゐたる兵を俘虜と

卒三千人、孤請自被堅執銳、以先受矢石、因越賤臣種奉先人藏器甲二十領、鈇屈盧之矛、步光之劍、以賀軍吏、吳王大說、以告子貢曰、越王欲身從寡人伐齊、可乎、子貢曰、不可、夫空人之國、悉人之衆、又從其君、不義、君受其幣、許其師、而辭其君、吳王許諾、乃謝越王、於是吳王乃遂發九郡兵伐齊、

【講義】其後五日目に越より大夫の種と云ふものを使に立て、吳王の前に傾首して言はしめけるは、東海の邊土に居り大王の使役に供する不肖、勾踐の使者臣種、使の禮を大王の下役人に行ひ、御側に居る人まで大王の御機嫌を伺ひ奉る、今竊かに承れば、大王には大義を興し、强き者の罪を正し弱き者の危きを救ひ、暴虐なる齊國を困めて周の王室を安んぜんと爲し給ふ由、何卒自分は國内の士卒三千人を徵發し、吾れ自ら堅き鎧を身に着し鋭利なる武器を手にし、先鋒となりて矢石を受け申さん、取敢へず越の賤臣種を以て先代より所藏の鎧二十領と鈇並に屈盧の矛と、步光の劍とを奉り、軍吏迄御出陣の御祝儀を申上ぐと、吳王は大いに說び、子貢に告げて云ふやう、越王は自身此方に從軍して齊を伐ちたき由を申し來れり、許すべきか何如と、子貢曰く、そは許すべからず、夫れ人の國を空虛にする迄其兵を繰出さしむる上、其君をも隨ひ行かしむるは餘り蟲のよき話にて不義なり、されば君には越の贈物を受け、其加勢の兵を出すことを承諾し、其君の從軍だけは辭退し給へかしと、吳王は子貢の說を聽き入れ、越王に從軍の儀をば辭退せり、是に於て吳王夫差は九郡の兵を發して愈、齊を伐てり、

【字解】鈇、斧なり、屈盧、矛の名、

子貢因去之晉、謂晉君曰、臣聞

は必ず之が爲に弱るべし、其精鋭の兵は齊の戰ひに大方は討死し、重く鎧ひたる武者は晉に困むことゝならんが、大王は此の弱り目に乘じて呉を伐ち給はば、呉を亡ぼし得ることは受合ひなりと、

越王大説、許諾、送子貢金百鎰、劍一、良矛二、子貢不受遂行、報呉王曰、臣敬以大王之言告越王、越王大恐曰、孤不幸、少失先人、內不自量、抵罪於呉、軍敗身辱、棲于會稽、國爲虛莽、賴大王之賜、使得奉俎豆而修祭祀、死不敢忘、何謀之敢慮、

【講義】越王は大に満足に及び、兵を出して呉に加勢すべきことを承諾し、子貢に引出物として金百鎰と劍一振と良き矛二本とを贈りしが、子貢は受けずして立去り、呉王に報告するやう、臣は敬んで大王の御沙汰をば越王に告げたる處、越王大に恐縮して申さるゝやう、自分は不幸にして少年の時父君に別れて教導を受くることなかりしかば、身の程をも顧みず呉と戰ひなどを試みて呉に濟まぬことをなし、軍勢は敗北し此の身は辱めを被り、會稽山に閉ぢ籠り、國都は草叢となりしが、大王の御寛典により俎豆を捧げて祖先の祭を營むとも出來たれば、此の大恩は死すとも忘れず、何ぞ呉を窺ふ考へなどを持ち申さんやと、

【字解】鎰、二十四兩を謂ふ、孤、王侯の自稱、虛莽、虛は墟なり、明き地なり、莽は草むら、俎豆、供へ物を盛る器、

後五日越使大夫種頓首言於呉王曰、東海役臣孤勾踐使者臣種、敢修下吏、問於左右、今竊聞大王將興大義、誅彊救弱、困暴齊而撫周室、請悉起境內士

なりと、勾踐は首を地につけ再拜の禮を行うて曰く、此方嘗て己れの力量をも料らず吳と合戰に及び、敗北して會稽山に困みたることあり、其痛苦骨髓に透り、殘念に堪へず、日となく夜となく脣を焦がし舌を乾かし、吳王と接踵して死すとも雪辱したしと存ずるは此方の宿願なりと、遂に子貢に向ひて目的を達すべき方法を問ふ、

子貢曰、吳王爲人猛暴、群臣不堪、國家敝於數戰、士卒弗忍、百姓怨上、大臣內變、子胥以諫死、太宰嚭用事、順君之過以安其私、是殘國之治也、今王誠發士卒、佐之以徼其志、重寶以說其心、卑辭以尊其禮、其伐齊必也、彼戰不勝、王之福矣、戰勝必以兵臨晉、臣請北見晉君、令共攻之、弱吳必矣、其銳兵盡於齊、重甲困於晉、而王制其敝、此滅吳必矣、

【講義】子貢曰く、吳王夫差の人となりは猛惡暴戾にして、群臣皆堪へられぬ程なり、其國家は度々戰爭にて其力を消耗し、士卒も此の上働くことを望まず、人民は上を怨み、大臣は心を變じて忠義を思はず、子胥は諫言をなしたるが爲に命を失ひ、太宰嚭、國政を握り、君主の過ちに順ひ、自己の安便を謀る、是れは國家を破壞する所の政治なり、今大王に於ては、士卒を發し吳王を佐けて、彼れの志に叶ふやうになし、珍寶を贈りて機嫌を取り、丁寧なる挨拶を以て吳王を尊び給はゞ、彼れ安心して齊を伐つことは必定なり、彼れ齊との戰ひに勝たざるならば、是れは大王の幸福なり、若し又戰ひに勝ちなば、必ず其勝誇れる兵を以て晉國に押寄すべし、臣は是れより北方に赴き晉君に見えて、貴國と共に吳を攻むるやうに爲さん、吳

吳王大說、乃使子貢之越、越王除道郊迎、身御至舍、而問曰、此蠻夷之國、大夫何以儼然辱而臨之、子貢曰、今者吾說吳王以救魯伐齊、其志欲之而畏越、曰、待我伐越、乃可、如此破越必矣、且夫無報人之志、而令人疑之、拙也、有報人之意、使人知之、殆也、事未發而先聞、危也、三者、擧事之大患、勾踐頓首再拜曰、孤嘗不料力、乃與吳戰、困於會稽、痛入於骨髓、日夜焦脣乾舌、徒欲與吳王接踵而死、孤之願也、遂問子貢、

【講義】 呉王は此の論を聞いて非常に滿足に及び、子貢を使者として越に赴かしむ、越王勾踐は子貢が使者として來ると云ふ前觸を聞き。先づ其通行すべき道路に水を打ち塵を拂ひ、郊外まで出迎へに及びて、自身子貢の爲に馬車を御して、特に備へたる旅館に至り、挨拶終つて後問ひけるやう、此の野蠻の土地なる吾が越へ、貴下は何如なることにて車馬いかめしく忝くも光臨せられたるかと、子貢曰く、今度拙者は呉王に向ひ魯を救ひ齊を伐つべきことを說き勸めたる處、呉王は然樣にしたき志なきに非ざれども、其留守に此の越が攻め來らんかと畏れ、兎も角越を片附けし後齊の方に取懸らんと申し居られたるが、果して然らば越を破るには定まれり、且つ人に怨みあつて復讐の志もこれなきに、先方より痛くなき腹を探られて疑はるゝは拙なる仕方なり、又復讐の意志があり、其れをば先方に悟らすは殆き仕方なり、又未だ兵を擧げざるに先づ敵に聞ゆるは是れ危險なる仕方なり、此の三个條は事を擧ぐる上に於て大なる害

王置齊而伐越、則齊已平魯矣、且王方以存亡繼絶爲名、夫伐小越而畏彊齊、非勇也、夫勇者不避難、仁者不窮約、智者不失時、王者不絶世、以立其義、今存越、示諸侯以仁、救魯伐齊、威加晉國、諸侯必相率而朝吳、霸業成矣、且王必惡越、臣請東見越王、令出兵以從、此實空越、名從諸侯以伐也、

【講義】　吳王曰く、至極尤もなり、然しながら今直ちに足下の議論を實行するわけにゆかぬ理由は、自分は嘗て越の國と戰ひ、之を會稽に追込みたることあり、其後越王勾踐は身を苦しめ艱難を忍び兵士を養成して復讎せんとする志あり、若し此の儘に差置くときは由々しき大事とならんなれば、先づ越を征伐して後、足下の建策に從つて齊を伐たんと、子貢曰く、越の手剛きことは魯に及ばず、吳の强きことは齊に及ばず、故に大王若し齊を捨て置きて越を伐ち給はゞ、其間に齊は魯を亡ぼし了らん、其上大王は亡びんとする國を保存し、絶えんとする家を續がしむることを以て名義となさるゝに、小國の越を伐つて强國の齊を畏れ給はんは勇に非ず、夫れ勇者は困難を避けず、仁者は人をして必迫するに至らざらしめ、智者は時機を失はず、王者は人の世嗣ぎを絶さず、斯くして吾が義を立つるなり、今大王が越を存し置いて列國に仁を示し、魯を救ひ齊を伐つて、晉國を威勢に服するに至らば、列國が引連れて吳に來朝せんは必定にて、霸業成り申さん、且つ大王、越を惡み給ふならば、臣は東の方越に赴き、國王に謁見の上、兵を出して齊國征伐に從はせ申すべし、此れ實は越の兵を外に差向けしめて國內を空虛にすることにして、名義は列國を從へて征伐すると云ふ堂々たるものなりと、

泗上諸侯誅暴齊、以服彊晉、利莫大焉、名存亡魯、實困彊齊、智者不疑也、

【講義】 田常曰く、至極御尤もなり、さりながら吾が軍勢は已に魯に差向けたるに、魯の方を打棄て、方向を轉じて吳に向ひなば、大臣等、拙者を疑ふは必定なり、何如にせば宜しからんと、子貢云ふ、君には兵を抨へて伐ち給ふ勿れ、僕は是れより吳王の處へ使者の役を勤め、彼れが魯を救ひて齊を伐つやうに致させ申さん、吳が攻來らば、君は其れを機會に兵を引きて逆寄せなさるべし、さすれば大臣等も疑ふべき餘地なかるべしと、田常は子貢の望みに任せ、使者として南方の吳國へ派遣し吳王に見えて游說せしめけるが、子貢は吳王に說くやう、臣の承りたるには、王者は他の國の滅亡を見るに忍びず、之を救ひて其子孫を絕さゞらしめ、又霸者は敵國を强からしめざるやうに爲す由、千鈞の重さも、僅かに一銖一兩の目方を加ふるときは權衡の度が移りかはるとかや、今萬乘の大國たる齊を以て千乘の魯の國を占有して勢を添へたる上に、吳と雌雄を爭ふことにならば、吳の運命は何如なるべき、臣は憚りながら大王の爲に不安に堪へず、されば今の內に魯を救ひ齊を伐つは急務なるが、其上魯を救ふは吳の名譽を世に顯はす次第なり、齊を伐つは大いなる利益を得る次第なり、齊に打勝ちたる威力を以て泗水附近の列國を撫で從へ、暴虐なる齊の罪を責め、强大なる晉國を服するに至らば、此れより大いなる利益なし、其名義は亡びんとする魯を保全するに在り、而して其實は强國の齊を困むるに在り、智者は疑はぬものなり、此の策を斷行し給ふべしと、

【字解】 千鈞、鈞は三十斤、銖兩、銖は十二分、兩は二十四銖、

吳王曰、善、雖然吾嘗與越戰、棲之會稽、越王苦身養士、有報我心、子待我伐越而聽子、子貢曰、越之勁不過魯、吳之彊不過齊、

攻め、憂ふべき問題が外にあるときは弱き相手を攻むるものなりと、然るに今君の憂へは內に在つて魯は弱ければ攻め難しと申したる次第なるが、其の理由は、僕の聞きたるに、君には三たびも齊王より領主に取立てられんとして、三度とも成就せざりしは、大臣の中に異論者がありし爲めなる由、いま君が魯を攻め破りて齊の版圖を擴張し給ふとも、戰勝の結果は齊王を增長せしめ、魯を破りたる結果は大臣等を尊大ならしむるのみにて、君の功勞は計算の中に置かれず、隨つて齊王との間柄も疎遠となるわけなるが、上は君主の心を增長せしめ、下は群臣の勢力を自由ならしむることとなりて、それにて大事を成就せんとするは困難ならん、夫れ君主增長するときは必ず勝手氣儘となるものなり、臣下增長すれば則ち權力を爭ふものなり、是れ君は、上に於ては君主と仲違ひを生じ、下に於ては大臣と互ひに爭ふわけなり、此の如くならば、君の齊國に身を立つることと危險なるべし、故に拙者は吳を伐つに如かずと申したるなり、夫れ吳を伐つときは、固より攻め惡き國ゆゑ勝利覺束なからん、勝利を得ざるときは、人民は多く死亡に及び、大臣も國內に空しくなることとなれば、君には、上に於て强臣の敵もなく、下に於て人民の非難もなく、君主を孤立せしめて齊國を支配するものは唯君のみなりと、

【字解】郤、隙なり、

田常曰、善、雖然、吾兵業已加魯矣、去而之吳、大臣疑我、奈何、子貢曰、君按兵無伐、臣請往使吳王、令之救魯而伐齊、君因以兵迎之、田常許之、使子貢南見吳王、說曰、臣聞之、王者不絕世、霸者無彊敵、千鈞之重、加銖兩而移、今以萬乘之齊、而私千乘之魯、與吳爭彊、竊爲王危之、且夫救魯顯名也、伐齊大利也、以撫

にして卑く、其地は狹きが上に淺く、其君は愚にして仁ならず、其大臣は僞りを構へ用をなさず、其士民は臆病にして甲胄を着、武器を執り、戰爭することを嫌ふ、此の如き國なれば相手として戰ひ難し、其れよりも君には呉の國を伐ち給ふが優なり、呉の城は高くして厚く、其他は廣くして深く、其鎧は堅くして新らしく、其兵士は精選を經たる上に、手當ても行屆きて榮養十分なり、大切の器械、精製の戈や劍など其中に在り、又賢明なる上長官に之を守らしむることゆゑ、伐つに容易なりと、田常は子貢が難易を顚倒したる説を聞き、忿然と腹立たしげに顏色を變へて曰く、足下の攻め惡しと云はるゝ所は誰れしも攻め易しとなす所にて、足下の攻易しと云はるゝ所は誰れしも攻め惡しとなす所なり、然るに斯樣なる反對の事を以て拙者に說かるゝは何如なる次第なりやと、

【字解】　地狹而泄、泄は淺の誤なり、

子貢曰、臣聞之、憂在內者攻彊、憂在外者攻弱、今君憂在內、吾聞君三封而三不成者、大臣有不聽者也、今君破魯以廣齊、戰勝以驕主、破國以尊臣、而君之功不與焉、則交日疏於主、是君上驕主心、下恣羣臣、求以成大事、難矣、夫上驕則恣、臣驕則爭、是君上與主有郤、下與大臣交爭也、如此、則君之立於齊危矣、故曰、不如伐呉、伐呉不勝、民人外死、大臣內空、是君上無彊臣之敵、下無民人之過、孤主制齊者唯君也、

【講義】　子貢之に答ふるやう、僕の承りたる所によれば、憂ふべき問題が國內に在るときは强き相手を

謂門弟子曰、夫魯墳墓所處、父母之國、國危如此、二三子何爲莫出、子路請出、孔子止之、子張子石請行、孔子弗許、子貢請行、孔子許之、

【講義】田常は齊國に於て謀叛の企てをなしけるが、高氏、國氏、鮑氏、晏氏を憚りて手を下しかね、隱謀の爲に用意したる兵士を移して魯國を征伐せんとせり、孔子は此の消息を聞かれ、自國の一大事なりと深く心配に及ばれ、門人等に申されけるは、夫れ魯は先祖の墓場の在る處にして父母の國なるに、此の如き危險に迫れり、諸子は何とて出でて吾が邦を救ふが爲に努力せざるかと、子路は出で行かんことを請ひたる處、孔子之を差止めらる、子張、子石の二人亦進み出でて其任に當らんことを請ひしも孔子許さず、子貢請ひたれば、今度は許容ありたり、

遂行、至齊、說田常曰、君之伐魯過矣、夫魯難伐之國、其城薄以卑、其地狹以泄、其君愚而不仁、大臣僞而無用、其士民又惡甲兵之事、此不可與戰、君不如伐吳、夫吳、城高以厚、地廣以深、甲堅以新、士選以飽、重器精兵、盡在其中、又使明大夫守之、此易伐也、田常忿然作色曰、子之所難、人之所易、人之所易、人之所難、而以教常、何也、

【講義】子貢は愈、出立して齊に至り、田常に面會して之に說きけるは、君が魯を伐たんとせらるゝは間違へり、一體魯は伐つに困難なる國なり、其城は手薄

又問曰、孔子適是國、必聞其政、求之與、抑與之與、子貢曰、夫子溫良恭儉讓以得之、夫子之求之也、其諸異乎人之求之也、子貢問曰、富而無驕、貧而無諂、何如、孔子曰、可也、不如貧而樂道、富而好禮、

【講義】子禽又問ふやう、孔子は何處か或る一つの國へ赴かれると、其君より國政の相談を受けて之に關係せらるゝことなるが、右は、孔子より右樣の地位を求めらるゝ結果なるか、それとも先方より孔子の方へ持來る次第なるかと、子貢答へて云ふ、我が夫子は溫良恭謙讓の德を具へ給ふ所より自然此の如き尊信を得らるゝ譯にて、夫子の求めらるゝのは、何んと他人の之を求むるとは相違あることかなと、子貢或る時孔子に問ひを發して曰く、凡そ誰れに限らず富みて豐かなれば自然と增長して人を見下し、貧乏すれば心卑屈になりて諂ひ勝ちの者なるが、今富みても高ぶることなく、貧しくとも諂はざることは貧富に處する至極の致し方と思はるゝが、何如に之れあるべきかと、孔子は聊か殊勝と云ふまでなり、其れよりは貧しけれども心に掛けずして道を行ふことを樂みとし、富めども其れに志を奪はれずして禮節を好む者の方が勝れり、汝の言ふ所は此の地位には及ばざるなりと、

【字解】溫良恭謙讓、溫はむつくりとして角のなきこと、良は質の素直なること、恭は威儀態度のつゝしみ深きこと、儉は節制あること、讓は己れを立てずして人に下ること、夫子之求之也、仲尼は人が其德に心酔して政事をも相談する次第なれば、得るにて求むるには非ず、然るに「求之也」と云へるは、子禽の語を捉へて自由に言ひ廻はしたるなり、是れ子貢の辭令に長じたる證據なり、

田常欲作亂於齊、憚高國鮑晏、故移其兵、欲以伐魯、孔子聞之、

以知十、賜也聞一以知二、子貢既已受業、問曰、賜何人也、孔子曰、汝器也、曰、何器也、曰瑚璉也、陳子禽問子貢曰、仲尼焉學、子貢曰、文武之道、未墜於地、在人、賢者識其大者、不賢者識其小者、莫不有文武之道、夫子焉不學、而亦何常師之有、

【講義】端木賜は衞國の人にして、字を子貢と呼ぶ、孔子より年若きこと三十一歳なりき、子貢は口利にして辭令巧妙なりしが、孔子は常に實行を勸めて彼れの辯口を押へられぬ、或る時子貢に問はるゝやう、汝と顏回とは、どちらが優れたと思ふかと、子貢の答へけるは、賜は何如して回を比較に取り申すべき、回は物事に就いて十の中、一つを聞けば十までも押通して知るほどの聰明に之れあり、然るに賜の如きは一を聞いて、僅かに二を知る位に過ぎず、子貢已に孔子に就いて學業を受け、自ら進歩を認めたりと見え、孔子に向ひ、賜は何如なる人物と御覽下さるゝかと尋ねたるに、孔子は、汝は器なり、役に立つものなりと答へられぬ、子貢は器にも貴きと賤しきとあるより、押返して然らば何の器に之れありやと問ふ、孔子は、瑚璉と云ふ貴重の器なりと答へらる、同門の陳子禽と云ふもの、子貢に問ふ、仲尼は何人に就いて學ばれたるにやと、子貢の答へに、文王、武王の行はれたる人道政道は世の澆季につれて衰へたりとは云へ、未だ全く地に墜つと云ふやうに廢れ果つるには至らず、故に大なり小なり今に傳はり、賢人は其大なる者を識り居り、賢者の地位に達せざる人は其小なる者を識り居るゆゑ、何の處にても文王武王の道は存在せぬことはなし、仲尼は此等の人に就いて學ばれたるにて、何しに是れと定まりたる師尙あらうやと、

【字解】瑚璉、宗廟の祭に黍稷を盛りて神に供する器、珠玉を以て飾り、貴重にして而も華美なるものなり、夏に瑚と曰ひ、殷に璉と曰ひ、周には簠簋と曰ふ、朝廷に立ちて政治をなす器量なりとの譬へなり、

こそ爲さゞるなりと、宰我其席を退出せし後、孔子、他の門人に語らるゝやう、予と云ふ男は何と情なき心底の者かな、凡そ子供が生れて三个年過ち、そこで始めて父母の懷を離るゝものなり、その三个年の間父母の養育の心勞は何程ぞや、故にせめては其年限なりとも父母の恩を思ひて謹むことは當然にして、之がため三年の喪は貴賤となく、都鄙となく賢愚となく、天下一般に共通の義なりと、

【字解】 鑽燧、木片を錐にて揉み穿ち、火を取ること、改火、此の火を取る木は四季に隨ひて異なる、改むとは其四季が一通り巡りて、新たに又春の木より取り直すこと、

宰予晝寢、子曰、朽木不可雕也、糞土之牆、不可圬也、宰我問五帝之德、子曰、予非其人也、宰我爲臨菑大夫、與田常作亂、以夷其族、孔子恥之、

【講義】 或る時宰予は白晝寢室に入りて眠りしかば、孔子は其情弱を嘆じて云はれけるは、何如に腕のすぐれたる彫刻師も朽ちたる木には彫刻を施し難し、又ぼろ〳〵の土にては土屏を塗ることならず、地質の善きものに非ざれば人工を施すも役に立たず、宰予の如き懶惰にして意氣地なき者には教育の施しやうなしと、宰我が五帝の德を孔子に問ひたるとき、孔子は、予は五帝の德を語るべき資格なしとて之を拒まれたり、後に宰我は齊國に仕へ、臨菑の大夫となりしが、田常の謀叛に與したる廉を以て一族盡く誅せられ、孔子は之をば恥辱とせられたりき、

【字解】 糞土、堅實ならざる土、圬、コテなり、此には動詞として活用す、

○端木賜、衞人、字子貢、少孔子三十一歳、子貢利口巧辭、孔子常黜其辯、問曰、汝與回也孰愈、對曰、賜也何敢望回、回也聞一

は死ぬであらうと申されたるが、此の噂の後子路は果して死せり、子路は此の如く死を恐れざる勇氣ありしゆゑ、孔子の嘗て云はれけるは、吾が子路を門下に得たるより、他人も彼れを憚りて無法のことを控へしため、吾れは人の惡口を聞かずなりしと、此の時子貢は、魯の國の爲に使者となりて齊に往けり、

【字解】造、イタルなり、纓、冠の紐、

○宰予、字子我、利口辯辭、既受業、問三年之喪、不已久乎、君子三年不爲禮、禮必壞、三年不爲樂、樂必崩、舊穀既沒、新穀已升、鑽燧改火、期可已矣、子曰、於汝安乎、曰、安、汝安則爲之、君子居喪、食旨不甘、聞樂不樂、故弗爲也、宰我出、子曰、予之不仁也、子生三年、然後免於父母之懷、夫三年之喪、天下之通義也、

【講義】宰予は字を子我と呼ぶ、口利にして辯舌よく、已に孔子の門に入りて學業を受けし後、問うて云ふ、子が父母の死せし後三年の間、喪に籠るは餘り長過ぎは致さぬか、喪に籠る間は何の禮式も擧行せず、音樂なども廢することなるが、身分ある者が、三年も禮式を行はずば、禮も壞れて役に立たぬやう相成るべく、又三年も音樂を奏せずば、音樂も崩れて調子を失ふやう相成るべし、凡そ一个年も經過すれば世間萬事皆新規になるものにて、去年取入れたる穀物も最早消費してしまひ、新たなる穀物が成熟し、木を採み通して火を取る方より申しても、四季の改め方一巡通り終ることとなれば、期即ち一週年にて喪を終ふるも差支へなからんと、孔子の曰く、子たる者、三年の間は何を見何を聽きても心に安からず思へばこそ喪に籠るなれ、汝に於て心に安しと思はゞ勝手に爲すが宜しい、君子は、忌服の間、美味を食しても旨さを感ぜず、面白き音樂を聽きても樂みを感ぜず、されば

曰、出公去矣、而門已閉、子可還矣、毋空受其禍、子路曰、食其食者、不避其難、子羔卒去、有使者入城、城門開、子路隨而入、造蕢聵、蕢聵與孔悝登臺、子路曰、君焉用孔悝、請得而殺之、蕢聵弗聽、於是子路欲燔臺、蕢聵懼、乃下石乞壺黶攻子路、擊斷子路之纓、子路曰、君子死而冠不免、遂結纓而死、孔子聞衛亂曰、嗟乎、由死矣、已而果死、故孔子曰、自吾得由、惡言不聞於耳、是時子貢爲魯使於齊、

【講義】 孔悝が謀叛を擧げし折、子路は外出中なりしが、騒動の噂を聞きて急ぎ馳せ歸りし處、丁度同門の子羔が衛の城門を出づるに出遇へり、子羔は子路に謂ふやう、出公は已に立退かれぬ、而して城門は閉ぢたれば入るべき路もなし、足下は引返すべし、空しく禍を受くること勿れと、然るに子路は此の忠告に從はずして曰く、其人の俸祿を食む以上、其人の難儀を外に見ぬものなりと、子羔は其儘子路に別れて立ち去り、子路は何如にして城中に入らんかと思案の折柄、何處の使者にやありけん、此の城へ着きければ、門番の者門を開いて之を入れたり、子路は之に續いて入り、蕢聵の所へ赴きぬ、蕢聵は孔悝と臺の上に在りけるを、子路は下より叫んで云ふ樣、君には何も孔悝を用ひ給ふことあらんや、何卒下に降らしめ給へ、自分は之を殺し申したしと、蕢聵之を許さゞりければ、子路は臺に火を附けんとせり、蕢聵は懼れをなし、石乞、壺黶と云ふものをして子路を攻めさせ、二人は子路を擊つて其冠の紐を切り斷ちける處、子路は君子は死すとも冠を脱ぐことなしと云ひ、其紐を結びて死に就けり、孔子、衛の亂を傳へ聞かれ、嗚呼由

を恭しくし、彼等を敬して慢らざるときは、彼等の勇もこちらの得物となるべし、寛大にして正直なるときは、衆人を歸依せしむべし、恭しく正しきが上に靜なれば、管内無事にして、上、君恩を報ずべしと、

初衛靈公有寵姬、曰南子、靈公太子蕢聵得過南子、懼誅出奔、及靈公卒、而夫人欲立公子郢、郢不肯曰、亡人太子之子輒在、於是衛立輒爲君、是爲出公、出公立十二年、其父蕢聵居外、不得入、子路爲衛大夫孔悝之邑宰、蕢聵乃與孔悝作亂、謀入孔悝家、遂與其徒襲攻出公、出公奔魯、而蕢聵入立、是爲莊公、

【講義】初め衛の靈公に寵愛せる妃ありて、南子と呼べり、靈公の太子蕢聵、南子に對し罪を犯し、誅罰を受けんことを恐れて出奔に及べり、靈公死去するに及び、太子巳にあらざりしかば、南子は公子の郢を立てゝ衛君となさんとせしに、郢は之を聽入れずして云ふやう、太子は逃亡せしとは云へ、其子の輒ある上は之を立つることそ順當なれと、是に於て衛國は輒を立てゝ君とせり、是れ卽ち出公なり、出公位に卽きしより十二年を經たるが、其間父の蕢聵は外に居りて歸ることを得ざりき、此の時子路は衛の大夫孔悝の領地の知事たりしが、蕢聵は復び衛の君たらんとて、孔悝を味方に引入れ叛亂の企てをなし、謀を示し合はせて孔悝の家に入り、遂に其一門郎黨と出公の宮中に不意打をなしゝかば、出公は火急の事とて拒ぐに由なく、魯の國に出奔せり、斯くて蕢聵は宮中に入りて國君となれり、是れを莊公と曰ふ、

方孔悝作亂、子路在外、聞之而馳往、遇子羔出衛城門、謂子路

具臣矣、

【講義】孔子、子路の人に信用あることもを申されけるは、訴訟と云ふ者は原被兩造とも自己の方に理ありと信ずるが故に、中々裁判に服せぬものなるに、只半言の下に判決することの出來得るものは、何んと由であらうかと、又其餘りに勇を好むことを戒めて云はれるは、由は勇を好むこと我れに過ぎたり、實用に適する所なしと、又云はれけるは、由の如き者は天然の壽命を全うすること能はざるべしと、其自ら守る所あつて外貌に頓着せざることを擧げて云はれけるに、敝れ果てたる綿入れの外套を着て、狐の皮や貉の皮にて作りたる立派なる皮衣を着たる者は押竝んで居て、己れの衣服の粗末なることを恥ぢざる者は、何んと由であらうかと、其學問、德行の造詣に就いて云はれけるは、由は已に門に入つて堂へ昇りはしつれども、未だ奥の部屋へ入るまでには至らずと、季康子が仲由は仁なりやとの問ひに對し、孔子は、千乘の國に於て其軍隊を處理せしむることは出來得れども、其仁なるを知らずと答へらる、子路は孔子の游歷に隨行することを喜び、毎も伴の中に在りしが、或る時長沮、桀溺と云ふ隱者や蓧とて竹籠を荷へる老人に遇ひたる話あり、季孫子が孔子に子路は大臣と謂ひ得るかと問ひけるに、孔子は頭數に備はる所の臣下と申すべしと答へられぬ、

【字解】片言、子路の片言なり、折獄、獄は訴訟、折は判決すること、敝縕袍、敝は着古し、縕袍は綿の入りたる外套、ドテラの如き者、狐貉、狐貉の裘なり、貉はムジナ、蓧、竹籠、

子路爲蒲大夫、辭孔子、孔子曰、蒲多壯士、又難治、然吾語汝、恭以敬、可以執勇、寬以正、可以比衆、恭正以靜、可以報上、

【講義】子路、蒲と云ふ都會の知事となり、赴任するとて暇乞ひせしとき、孔子彼れに教訓を垂れらるゝやう、蒲は荒武者多く又治め難き土地なり、然るに由つて此の方汝に語り聞かす所は他なし、自分が威儀

手引きを以て弟子となりぬ、子路、政治を行ふ心得を問ひたるに孔子の答へらるゝやう、凡そ德義的の事は己れ先づ躬行實踐して民を導くべく、民の孝ならんことを欲せば己れ先づ孝を行ひ、民の弟ならんことを欲せば己れ先づ弟を行ふに在り、事業的の事は、巡廻、視察、訓諭、指導等有らゆる手段に力を盡すべく、骨を惜まずして勞苦するに在りと、子路は政治の心得に就いては餘程高尙の事柄あるべきことと豫想し居りたることなれば、物足らぬ心地して、更に其れ以上の心得を問ひたるに、孔子は、何如に之に先んじ之に勞すとも、初めありて終りなきときは何等の效果もなきことゆゑ、中途に倦みては相成らぬと言はれたり、子路は又或る時、君子は勇を貴ぶかと問ひけるに、孔子の曰く、君子は義をば一番大切とす、勇も義に叶へば貴ぶべきなれども、勇其物のみにては弊害あり、卽ち君子、勇を好みて義なきときは、只管勇にはやる結果、破壞的となりて秩序を破るに至り、小人勇を好みて義なきときは、己れの慾望意志を押通さんとして盜をなすに至ると、子路の勇氣は彼れをして實行家たらしめ、何事にても善事を聞き込みて未だ之を行はざる中は、此れだに尙行ひかぬるに、此の上新たに善事を聞かば迚も力に及びがたしとて、之を聞き込むことを恐れて氣に病めり、

【字解】 豭豚、牡豚、質、人の始めて師に就くとき、差出す所の進物、

孔子曰、片言可以折獄者、其由也與、由也好勇過我、無所取材、若由也不得其死然、衣敝縕袍、與衣狐貉者立而不恥者、其由也歟、由也升堂矣、未入於室也、季康子問仲由仁乎、孔子曰、千乘之國可使治其賦、不知其仁、子路喜從游、遇長沮、桀溺、荷篠丈人、子路爲季氏宰、季孫問曰、子路可謂大臣與、孔子曰、可謂

父兄と云ふものがある以上、何とて善事を聞込みたればとて直ちに之を行ふことあるべきやと、子華は此の二人の問ひが同一なるに拘はらず孔子の答へが同一ならざることを怪み、孔子に向ひて、ぶしつけながら御尋ねに及ぶ次第なるが、問ふことが同じきに御答への違ふは何如なる譯なるかと、孔子の云はるるやう、冉求の方は控目の性質にて自ら決行する勇氣に乏しきが故に之を引進めたるなり、又由は勇氣人に倍し、往き過ぎる癖あれば之を抑へたるなりと、

【字解】 千室之邑、千軒の戸數ある都會にして、大夫の所領する限度なり、百乘之家、乘とは車一輛のことなるが、斯かる場合には戰車を云ふ、戰車の數と之を出すべき土地の範圍とは、天子以下身分によりて多寡廣狹を異にす、而して大夫の所領は百乘を出す、百乘之家とは百乘を出す領地と云ふが如し、諸侯には國と云ひ、大夫には家と云ふ、

○仲由、字子路、卞人也、少孔子九歲、子路性鄙、好勇力、志伉直、冠雄雞、佩豭豚、陵暴孔子、孔子設禮、稍誘子路、子路後儒服委質、因門人請爲弟子、子路問政、孔子曰、先之、勞之、請益、曰、無倦、子路問君子尙勇乎、孔子曰、義之爲上、君子好勇而無義則亂、小人好勇而無義則盜、子路有聞、未之能行、唯恐有聞、

【講義】 仲由は字を子路と呼び、卞の人なり、孔子より年若きこと九年、子路は天性粗野にして勇力を好み、其志は剛直にして、平生雄鷄の毛にて編みたる冠を着け、牡豕の皮にて作りたる嚢を腰に下げ、武張つたる風をなし孔子に向ひ輕蔑の態度をなし粗暴の言論をなしたるが、孔子は段々と禮を以て彼れを君子の道に引入れられしかば、子路も自然其德に化して氣象も和ぎ、儒者の服を着て、進物を差出し、門人の

【字解】大賓、公侯の客なり、大祭、禘や郊の祭の類、南面、支那にては北を君位とす、北に居れば南に向ふ、故に南面は君となることなり、犂牛、色のぶちなる者、犧牲に之を忌む、騂且角、騂は赤色、周の世は赤色を貴ぶ、故に犧牲の牛も赤色を合格とす、角、是れは活用せるにて、其角の形が犧牲となる資格あるを謂ふ、

○冉求、字子有、少孔子二十九歲、爲季氏宰、季康子問孔子曰、冉求仁乎、曰、千室之邑百乘之家、求也可使治其賦、仁則吾不知也、復問子路仁乎、孔子對曰、如求、求問曰、聞斯行諸、子曰、行之、子路問聞斯行諸、子曰、有父兄在、如之何其聞斯行之、子華怪之、敢問、問同而答異、孔子曰、求也退、故進之、由也兼人、故退之、

【講義】冉求は字を子有と呼ぶ、孔子より年若きこと二十九歲、此人、魯の三家老の一にて公族の冠たる季氏に仕へ其家令となれり、季氏の當主たる康子、孔子に冉求は仁者なりやと問ひけるに、孔子答へて曰く、千軒の都會、卽ち百乘の家に於て、冉求は其賦税を取扱はしむるには差支へなけれども、仁と云ふ大德に至りては冉求に其資格ありや否や、自分は之を知らずと、季康子は、重ねて問ふやう、子路は仁者なりやと、孔子は之に對へて冉求と同樣なりと云はれぬ、或る時冉求、孔子に問うて云ふ、何事にても善き事を聞きたるならば躊躇せず之を行ふが宜しきかと、孔子は之に對へて、然樣なることを聞きしならば直ちに之を行ふべしと、子路も又善事を聞きしならば取敢へず之を行ふが宜しきかと問ひし處、孔子は對へて、何事に就いても意見を伺ひ許可を請ふべき

あることを認識せられたり、伯牛は悪性の病氣あり、病重りて最早頼少くなりしかば、孔子は彼れの家へ見舞ひに往かれ、窓より彼れの手を握りて云はるゝやう、さても運命なるかな、此の如き賢者にして此の如き業病に罹るとは、さても運命なるかなと、深く嘆息して惜まれたり、

【字解】 悪疾、癩病なりとの說あり、自牖執其手、彼れが悪疾のため人に逢ふことを好ましからず思ふにより、斯くせられたるなり、

○冉雍字仲弓、仲弓問政、孔子曰、出門如見大賓、使民如承大祭、在邦無怨、在家無怨、孔子以仲弓爲有德行、曰、雍也可使南面、仲弓父賤人、孔子曰、犂牛之子、騂且角、雖欲勿用、山川其舍諸、

【講義】 冉雍は字を仲弓と呼ぶ、仲弓政治の心得を孔子に問ふや、孔子の云はるゝやう、政の心得は敬より大切なるはなく、吾が家の門を出で廣く人に接するときは貴賓を迎ふるやうになす、貴賓に對する場合には偏へに先方の滿足するやう、不便を感ぜぬやう、吾れより粗忽のなきやうにと、萬端注意を怠らざるものなり、又民を使ふ心得は大いなる祭典を務むるやうになすこととなり、大いなる祭典を勤むる場合には一心不亂に祈念を凝らし粗忽のなきやうに心を締むるものなり、然るときは諸侯の國に在りても怨みを受くることなく、大夫の家に住りても亦怨みなしと、孔子は仲弓の德行あることを認識せられ、嘗て云はるゝやう、冉雍は南面して人君たらしむる資格ありと、此の仲弓の父は極めて鄙しき人物なりしが、孔子は何如に其父が賤くとも仲弓の如き賢者に何等の妨げなきことを諭されて云はるゝやう、犂牛とて其色がぶちなる者は祭の役に立たぬものなれども、其子の色と云ひ角と云ひ、祭に供ふる資格あるときは、之を山川の神々に供ふとも何とて納受し給はざらんやと、

【字解】克己復禮、此處の禮は人類行爲の自然的本則を謂ふ、則ち中の物に應じて發したる現象、一簞、簞は竹製の飯櫃、如愚、論語には上に「吾與回言、終日、不違」の八字あり、此れを去るときは文の意義明かならず、退而省其私、退と省も倶に孔子に繋かる、私は孔子の側に在る時に對して言ふ、慟、哀の過ぎたる貌、

○閔損、字子騫、少孔子十五歲、孔子曰、孝哉閔子騫、人不間於其父母昆弟之言、不仕大夫、不食汙君之祿、如有復我者、必在汶上矣、

【講義】閔損は其字を子騫と呼ぶ、孔子より年若きこと十五歲、孔子曾て其孝を嘆賞して云はるゝやう、さても孝子なることかな閔子騫と云ふ男は、凡そ人には身贔屓のある者なれば、家族の中にて其子の孝心を彼れ此れ他に吹聽するも他人は信ぜざるものなれども、閔子騫の孝に至りては、彼れの父母兄弟が孝子なりと云へば他人も誠に其通りなりとて、家族の言に就きて異議を挾まざるを見て知るべしと、閔子は當時勢力ある大夫の家にも仕へず、無道の君の祿をも食まず、處士を以て終り、嘗て魯の大夫季氏が此の閔子を聘して己れの領分なる費と云ふ都會の代官となさんとて、使を遣はし其旨を申し傳へしに、閔子は之を辭し、若しも重ねて此の如き沙汰を蒙るならば、自分は汶水の邊に逃れ申すべしと答へぬ、

【字解】間、異論を挾むこと、復我、二度と我れを召ぶと云ふこと、在汶上矣、汶は川の名、齊魯の境に在り、此れは齊に逃げ去ることにて、堅き決心を示せし語なり、

○冉耕、字伯牛、孔子以爲有德行、伯牛有惡疾、孔子往問之、自牖執其手、曰、命也夫、斯人也而有斯疾、命也夫、

【講義】冉耕は字を伯牛と呼ぶ、孔子は彼れの德行

唯我與爾有是夫、回年二十九、髮盡白、蚤死、孔子哭之慟、曰、自吾有回、門人益親、魯哀公問、弟子孰爲好學、孔子對曰、有顏回者好學、不遷怒、不貳過、不幸短命死矣、今也則亡、

【講義】顏回は魯の人なり、字は子淵、孔子より年齡若きこと三十歳、顏淵曾て仁を體得すべき方法を質問せしに、孔子答へて曰く、自己の私情私慾に打克つて、本來の規道なる禮に戻るときは、天下其仁に歸服すと、孔子曾て顏回を嘆稱して云はるゝやう、さても賢人である顏回と云ふ男は、何となれば、其日常の生活を觀るに、僅か一鉢の飯と一瓢の飲物に過ぎず、其居宅はと云へば、むさくるしき小路住ひなり、他人ですらも此の境遇を見て痛ましさに堪へざるに、彼れは平然として其樂む所を改めずと、又云はるゝやう、回と云ふ男は吾が敎示するを聞きて默然たるのみにて、理會せしや否やも見分けかね、一寸見れば愚人のやうなれども、其場を立去りたる後、彼れが自宅其他打寛ぎたる場合に目を附けて見れば、亦吾が言ひし所の道理を十分發明するが故に、回は決して愚にあらずと、又曾て顏回に向ひて云はるゝやう、若し明君賢相ありて己れを用ふるときは出でて吾が道を行ひ、若し棄てゝ顧みざるときは退きて吾が道を仕舞ひおく、此の如き出處進退の仕方は、唯我れと汝とに其資格あることかなと、顏回は二十九の年に髮の毛盡く白くなり、若死をなせり、孔子は其死を哭して哀痛殊の外甚しく、嘆きて云はるゝやう、吾れ顏回を得しより、門人益〻親密になりぬと、魯の哀公、孔子に向ひ、先生の門人中、學問を好むと謂ふべき者は誰れなりやと問はれしとき、孔子答へて云はるゝやう、顏回と申す者之れあり、此の者學問を好み、其修養の一端を擧ぐれば、會〻怒る事ありても、當然怒るべき筋合ひの外に及ぼすことなく、又萬一過失ありても、直ちに之を改めて二度と行ふことなかりき、此の如き好學の賢者なりしも不幸にも短命にて死去致し、今や復彼れの如き好學の者之れなしと、

德あるも智少くして愚直に失し、由は勇を好みて粗野の缺點あり、回は道を樂んで、屢、生活資料の缺乏に陷りたることあり、賜は仕官して祿を受けず、財産を增殖することを務めたるが、其聰明なる、何事によらず之を思量するときは必ず適中すと、孔子が尊敬して目上と崇められたる人は、周に於ては老子なり、衞に於ては蘧伯玉なり、齊に於ては晏平仲なり、楚に於ては老萊子なり、鄭に於ては子産なり、魯に於ては孟公綽なり、而して度々臧文仲、柳下惠、銅鞮の伯華、介山の子然を稱せられたれども、孔子は此の何人にも後れて其世を同じうせざりき、

【字解】身通、通の字に六藝の二字あるを可とす、七十有七人、文翁孔廟の圖には七十二人に作る、師也僻、師、字は子張、僻とは尊大にして識見一方に片寄るなり、參也魯、參は曾子の名、魯は敏の反對にして遲鈍なること、柴也愚、柴、姓は高、愚は知の反對にして不明なること、由也喭、由は子路の名、喭は粗直を謂ふ、回也屢空、論語には、屢空の上に「其庶乎」の句あり、賜不受命、賜は子貢の名、命は祿命を謂ふ、天命の命にあらず、又孔子の命に非ず、蘧伯玉、衞の大夫、名は瑗、晏平仲、名は嬰、齊の景公の相、子産、鄭の執政、小國の鄭を治め、外交術を以て列國に重きをなさしめたる人、孟公綽、魯の大夫、臧文仲、同上、柳下惠、魯人、銅鞮伯華、銅鞮は地名にして、晉の大夫羊舌赤の所領、大戴禮に曰く、孔子曰く、國家道あれば其言以て興るに足り、國家道なければ其默以て容るゝに足る、蓋し銅鞮伯華行ふ所と、介山子然、介山も亦地名、大戴禮に曰く、四方に觀て其親を忘れず、苟も其親を思へば其樂を盡さず、蓋し介山子然の行なりと、

○顏回者、魯人也、字子淵、少孔子三十歲、顏淵問仁、孔子曰、克己復禮、天下歸仁焉、孔子曰、賢哉回也、一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回也不改其樂、回也如愚、退而省其私、亦足以發、回也不愚、用之則行、捨之則藏、

たる義を棄てゝ父兄の復讐をなし、大なる恥辱を雪ぎ、其名譽は長く後世に垂れぬ、其志さても悲むべきかな、子胥が江上に追ひ詰められ、道中にて乞食に落ちぶれたるが、斯かる場合に彼れの志は一刻も楚都の郢を忘れんや、故に堪へ難き艱苦をも押し忍びて功名を爲したり、此れ壯烈なる男兒に非ずば、何とて此の大事を仕果さんや、又白公も如し自ら楚君の位に卽かざりしならば、其功業と云ひ謀略と云ひ、擧げられざるものありしならん、

【字解】　螻蟻、螻はケラ、

仲尼弟子列傳第七

孔子曰、受業身通者七十有七人、皆異能之士也、德行、顏淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓、政事、冉有、季路、言語、宰我、子貢、文學、子游、子夏、師也僻、參也魯、柴也愚、由也喭、回也屢空、賜不受命而貨殖焉、億則屢中、孔子之所嚴事、於周則老子、於衛蘧伯玉、於齊晏平仲、於楚老萊子、於鄭子產、於魯孟公綽、數稱臧文仲、柳下惠、銅鞮伯華、介山子然、孔子皆後之、不並世、

【講義】　孔子嘗て曰はれけるは、吾が門に於て學業を受け、其身六藝に通ずる者七十七人、何れも人に優れたる能力ある人々なり、其中道を踐み善をなし道德の實行家としては顏淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓あり、政事に堪能なる者を擧ぐれば冉有、季路あり、辭令に達し應對に長ぜる宰我、子貢、文學家に於ては子游、子夏あり、但し師は僻とて、才氣人に過ぎたる結果一方に偏る癖あり、參は美質なるも遲鈍を免れず、柴や

而求惠王復立之、

【講義】其後四年を過ぎ、白公勝は石乞と云ふものと、不意に朝廷へ押寄せ、令尹子西と司馬子綦とを殺害せり、石乞は白公勝に向ひ、王を殺さゞれば都合宜しからずと言ひければ、直ちに王を劫すに、王は高府へ逃げ行けり、楚の惠王の從者屈固は王を脊中に負ひて、惠王の母なる昭夫人の宮中へ逃げ込みたり、葉公は白公勝が亂を起したりと聞き、人民を引連れ彼れを攻む、白公の徒黨は敗戰に及び、山中に逃走して自殺せり、斯くて石乞を生取りにして白公の尸骸の所在を責め問ひたるに、白狀せざりしかば之を烹殺さんとせしに、石乞の曰く、若し大望成就せば大臣とならん、失敗して烹殺さるゝは固より吾が本分なりと、終に尸骸の所在を言はざりければ、葉公は豫告の如く石乞を烹殺し、惠王を探し出して復之を國王とせり、

【字解】石乞從者、石乞は惠王の誤、

太史公曰、怨毒之於人、甚矣哉、王者尚不能行之於臣下、況同列乎、向令伍子胥從奢俱死、何異螻蟻、棄小義雪大恥、名垂於後世、悲夫、方子胥窘於江上、道乞食、志豈嘗須臾忘郢邪、故隱忍就功名、非烈丈夫孰能致此哉、白公如不自立爲君者、其功謀亦不可勝道者哉、

【講義】太史公曰ふ、怨恨の害毒が人に及ぼすことは何と云ふ甚だしきことかな、縱令王者の尊き位に在りとても、尚臣下に對して怨恨を受くるが如き所爲を爲すときは其報を免るゝわけにゆかぬものなり、況んや同列の間柄に於てをや、其昔し若し伍子胥が父の奢と諸共に死せしならば、誠に取るに足らぬ者にて蟲けらと何の相違あらんや、然るに王の召しに應じて見込みもなき父の赦免を求むるが如き區々

西往救、與盟而還、白公勝怒曰、非鄭之仇、乃子西也、勝自礪劍、人問曰、何以爲、勝曰、欲以殺子西、子西聞之、笑曰、勝如卵耳、何能爲、

【講義】白公は本國の楚に歸りしより三年目に吳國にては伍胥を誅せり、白公は楚に立歸りし以來、鄭が己れの父を殺したる怨みを抱き居りしこととて、內密に命知らずの人物を養ひ、鄭に返報すべき企てをなせり、彼れが楚に歸りてより五年の後に鄭を伐たんことを願出でしに、令尹の子西之を許せり、然る處未だ出兵の運びに至らざる中に晉より鄭を伐ち、鄭は楚に救ひを求めたるに、楚より子西を援兵の大將として派遣することゝなり、子西は晉と和を盟つて還りしかば、白公勝は彼れが鄭を伐たずして反つて其難を救ひたることを怒つて曰く、今や鄭は仇に非ず、仇は即ち子西に外ならずと、自ら劍を研ぎければ、或人何の爲に劍を研ぐやと問ひたるに、白公勝は、子西を殺さんと思ふが故なりと答へぬ、子西は此の事を傳へ聞き、笑つて云ふやう、勝は卵の如きものに過ぎず、何をか仕出かさんやと、

其後四歲、白公勝與石乞襲殺楚令尹子西、司馬子綦於朝、石乞曰、不殺王、不可、乃劫之、王如高府、石乞從者屈固、負楚惠王、亡走昭夫人之宮、葉公聞白公爲亂、率其國人攻白公、白公之徒敗、亡走山中、自殺、而虜石乞、而問白公尸處、不言、將亨、石乞曰、事成爲卿、不成而亨、固其職也、終不肯告其尸處、遂亨石乞

を起して不意に呉國へ攻入り、太子を殺し、呉の兵を破る、夫差は此報を聞きて、直ちに歸國に及び、使を派遣し、鄭重なる禮物を越に贈りて和睦を求めたり、

【字解】　呉太子、名は友、以令周室、周王の命令を諸侯に告げしなり、但し以令周室にては語を成さず、以令の二字恐らくは倒置ならん、

後九年越王勾踐遂滅呉、殺王夫差、而誅太宰嚭、以不忠於其君、而外受重賂、與己比周也、伍子胥初所與俱亡故楚太子建之子勝者在於呉、呉王夫差之時、楚惠王欲召勝歸楚、葉公諫曰、勝好勇而陰求死士、殆有私乎、惠王不聽、遂召勝、使居楚之邊邑鄢、號為白公、

【講義】　それより九年の後、越王勾踐は遂に呉を滅ぼし、夫差を殺したる上、太宰嚭は其君に不忠にして、他國より貴重の賂を受け、越と徒黨したる罪あるを以て之を誅戮せり、伍胥が以前一所に逃亡したる楚の太子建の子勝と云ふ者呉の國に在りしが、呉王夫差の時、惠王は勝をば楚國に召返さんと欲せし處、葉公諫めて曰く、勝と申す男は勇を好み、内々己れの為に一命を棄つべき者を求め居る所を見れば何か野心ありと覺ゆ、されば召び戻すことは宜しからずと、惠王は諫言を聽き入れず、勝を召し、楚の國はづれの鄢と云ふ都會に居らしめ、之をば白公と呼べり、

【字解】　比周、仲間を組むこと、

白公歸楚三年、而呉誅子胥、白公勝既歸楚、怨鄭之殺其父、乃陰養死士求報鄭、歸楚五年、請伐鄭、楚令尹子西許之、兵未發而晉伐鄭、鄭請救於楚、楚使子

を太子となすべきことを主張したればこそ、今日の王位をも得たるなれ、さもなくば殆んど立つ能はざりしに、又汝が已に太子となり、我が働きを感謝の餘り、呉の國の一部を割いて我に與へんとせしも、我れは敢て望まざりき、斯くも汝の爲に始終盡したるに汝は今諂ひ者の言ふ所を信じ、篤實の者を殺すとは無情も亦甚しと、乃ち其家來に告げて云ふ、我れ死なば是非とも吾が墓の上には梓を種ゑよ、是れは呉王の棺桶の材料となす爲なり、斯くして又吾が眼を抉り取りて呉の東の城門に懸けよ、他日越軍が攻入つて呉の國を亡ぼす有樣を觀たしと、言葉終はる共に自ら首はねて死せり、呉王夫差は伍胥が臨終に申殘せし言を聞きて大に怒り、彼れの尸を取り、之を馬の革にて作りたる囊に入れて江水に投込ませぬ、呉の人民は之を憐み、祠を江上の山に立て、其山を胥山と名づけたり、

【字解】 微、ナクトモと訓ず、屬鏤、劍の名、梓、棺を作る材なり、器、棺を謂ふ、鴟夷、酒を盛る器、馬の革にて、此れに似たる囊を造りたるなり、

呉王既誅伍子胥、遂伐齊、齊鮑氏殺其君悼公、而立陽生、呉王欲討其賊、不勝而去、其後二年、呉王召魯衞之君、會之槖皐、其明年、因北大會諸侯於黄池、以令周室、越王勾踐襲殺呉太子、破呉兵、呉王聞之、乃歸、使使厚幣與越平、

【講義】 呉王は伍胥を誅したる後、遂に豫定の行動として齊を伐てり、時に齊にては鮑氏が主君の悼公を弑して陽生を立てしかば、呉王は此の賊臣を討たんとせしも、打負けて引返せり、其後二年目に、呉王夫差は魯衞二國の君を招き、槖皐と云ふ處に會合し、翌年は此の成功に引續き、北方に赴きて列國の君を黄池に會し、周の朝廷の命令を奉ぜしめたり、然るに越王勾踐は、呉王夫差が遠く北方に赴きし間に、兵

し、常に面白からず思ひ怨みを抱き居ることなれば、大王には何とぞ早く處分を講ぜられて彼れを片附け給へと、

【字解】 鞅々、樂しからざる形容、

吳王曰、微子之言、吾亦疑之、乃使使賜伍子胥屬鏤之劍曰、子以此死、伍子胥仰天歎曰、嗟乎、讒臣嚭爲亂矣、王乃反誅我、我令若父霸、自若未立時、諸公子爭立、我以死爭之於先王、幾不得立、若既得立、欲分吳國予我、我顧不敢望也、然今若聽諛臣言以殺長者、乃告其舍人曰、必樹吾墓上以梓、令可以爲器、而抉吾眼、縣吳東門之上、以觀越寇之入滅吳也、乃自剄死、吳王聞之、大怒、乃取子胥尸、盛以鴟夷革、浮之江中、吳人憐之、爲立祠於江上、因命曰胥山、

【講義】 吳王夫差は是れまで已に伍胥が屢〻己れの方針に反對せしことを心惡しく思ひ居る處なりしゆゑ、太宰嚭の讒言は火に油を注ぎたるが如く、彼れに向ひて云はるゝやう、卿の心添へなくとも、吾れも亦疑ひ居りし處なればと、伍胥の家に使者を差遣し、彼れに屬鏤の劍を下賜あり、此れにて自殺せよとの沙汰なりき、伍胥は天を仰ぎ嘆息して曰く、嗚呼是非もなきことかな、讒佞の臣なる太宰嚭現に國亂を釀しつゝあり、それに王は反つて忠臣の我れを誅せらるとは何事ぞ、我れは汝の父王を佐けて霸業を成さしめたるに、又汝が未だ太子と決らざる以前、諸公子は太子の位を爭ひし折、我れは命差出して先王に汝

難、且嚭使人微伺之、其使於齊也、乃屬其子於齊之鮑氏、夫爲人臣、內不得意、外倚諸侯、自以爲先王之謀臣、今不見用、常鞅鞅怨望、願王早圖之、

【講義】伍胥は齊に出立せんとせし際、其子に語りて云ふ、自分は度々諫言をなしたれども王は之を用ひ給はず、自分は今呉が亡ぶることを見る、汝は呉と一所に亡びたりとて何の益にも立たざれば、呉の地を退去して他國に往くに如かずと、斯くて其子を齊の鮑牧に託し置き、呉に歸りて己れの探りたる齊の情態を呉王に報告せり、呉の太宰嚭は前々より伍胥と仲惡しかりければ、此度の事を種に讒言するやう、伍胥の人と爲りは、手強くて荒々しく、情愛少くして人を疑ひ害心あり、彼れが大王を怨み居るに就いては深き禍ひを引起さんかと心配罷在る次第なり、先頃大王は齊を伐たんと思召立ち給ひしとき、伍胥は伐ちても效果なければ伐つべからずとて反對致したり、然るに大王は齊を伐ちて大功を立て給ひしかば、彼れは己れの意見が用ひられざりしことを恥かしく思ひ、大王の御成功を喜ぶべき筈なるに反つて怨望するは不埒千萬なるが上に、今大王は再度齊國の征伐をなし給ふ處、伍胥は自分獨り思召しに違ひ手痛く諫め奉り、作戰の邪魔をなし惡口をなすは、是れ全く呉が敗北に及び、自分の考への勝りたることが證明せられ、主戰論者に打勝たんと心に希望するが爲にこそ、今大王が御親征相成り、全國の武力を擧げて齊を伐たるゝに、伍胥は己が諫言用ひられざる所より、從軍を辭退に及び、假病をつかひて隨行せず、御用心なさらでは叶ひ申さゞるわけは、此樣子にては、禍ひを起すこと困難ならざればなり、其上臣が人を遣して內密に彼れを探偵致させたる處、彼れが大王の使として齊に參りし時、吾が子をば齊の鮑氏に託せしと云ふ事實あり、夫れ君に事ふる身として、自分の國が意の如くならずとて外國に倚りかゝるとは何事ぞや、彼れは己れ先王の參謀なりし身なるに、今大王の御世となりて用ひ給はぬことを心外と致

使子胥於齊、

【講義】吳子胥は越が太宰嚭に取入り、吳王をして專ら齊の方に心を向け越を忘れしめんとする奸計を看破せしかば、諫めて云ふやう、夫れ越は吾が吳に取りて腹心の病と同じく、之を棄て置く時は生命に係はることとなるに、今彼れの造りごとの詐僞を信じて齊の土地を貪られたりとて、齊は宛も石地の田の如きものにて、何の益にもならず、且つ盤庚の告文にある語に、是非を顚倒し法度を乘り踰す不謹愼の者は、輕きは鼻を削く刑に處し、重きは之を殺し盡して生殘らしむることなく、其不良の種を此の土地に移して良民に傳染せしむること勿れと、此れ殷の興りたる所以なり、されば大王には齊の方を打棄て置き、先づ越の方を處分し給ふべし、若しさもなきときは、悔ゆとも追付かざらんと、吳王聽入れず、子胥の度々諫言するを煩しと思ひ、厄拂ひの料簡にて彼れを齊に派遣して國情を探らしめぬ、

【字解】盤庚之誥、書經の篇名、

子胥臨行、謂其子曰、吾數諫王、王不用、吾今見吳之亡矣、汝與吳俱亡、無益也、乃屬其子於齊鮑牧、而還報吳、吳太宰嚭既與子胥有隙、因讒曰、子胥爲人、剛暴少恩猜賊、其怨望恐爲深禍也、前日王欲伐齊、子胥以爲不可、王卒伐之而有大功、子胥恥其計謀不用、乃反怨望、而今王又復伐齊、子胥專愎彊諫、沮毀用事、徒幸吳之敗以自勝其計謀耳、今王自行、悉國中武力以伐齊、而子胥諫不用、因輟謝佯病不行、王不可不備、此起禍不

や腹の如き大切の處にある病氣のやうなものなり、然るに憂慮すべき此の越を差置いて眞先に手を着けず、別段心配するに足らざる齊の方に力を注がるゝは、何如にも間違ひたる仕方に之れなきかと、呉王夫差は此の諫めを取用ひず、齊を攻めて其軍を艾陵の地に破り、遂に鄒魯の二國をも討ち平げ、其君を俘として引連れ歸りしが、是れよりは以前にも益して伍胥を疎んじ彼れの計策を用ひざることゝなれり、

其後四年、呉王將北伐齊、越王勾踐用子貢之謀、乃率其衆以助呉、而重寶以獻遺太宰嚭、太宰嚭既數受越賂、其愛信越殊甚、日夜爲言於呉王、呉王信用嚭之計、

【講義】其後四年過ぎけるとき、呉王夫差は又兵を北に進めて齊を伐たんとせり、此の際越王勾踐は子貢の謀略を用ひ、一には呉王に信用せさせ、一には彼れの油斷を窺はんと、曾て臣下となるの約束も爲したる事なれば、表面忠義振りを見せんが爲に其軍勢を引率して呉を助け、而して貴重の寶物をば呉の太宰嚭に贈物とせり、太宰嚭は從來幾度となく越の賂を受けたることゆゑ越を愛し信ずること殊に甚しく、日となく夜となく呉王夫差に越の事を取成しければ、呉王は嚭を二なきものと思ひ、彼れの計は何によらず之を信用せり、

【字解】子貢、孔子の門人、端木賜なり、

呉子胥諫曰、夫越腹心之病、今信其浮辭詐僞而貪齊、破齊、譬猶石田、無所用之、且盤庚之誥曰、有顚越不恭、劓殄滅之、俾無遺育、無使易種于茲邑、此商之所以興、願王釋齊而先越、若不然、後將悔之無及、而呉王不聽、

なり、越王の后妃は召使とならんと云ふに在りき、太宰嚭は越の賂を受けて種々吳王に勸めたるものと見え、吳王は和睦を許さんとせしに、伍胥は諫めて云ふやう、越王勾踐の人と爲りは、能く辛苦を忍ぶことの出來る質ゆゑ、今は此の如く卑屈の條件にて降參すれども、こは彼れの本心に非ず、されば只今の內、大王之を殺し給はざるときには、後に至り必ず降參を許したることを悔い給はんと、然るに吳王夫差は伍胥の諫めを取上げず、太宰嚭の計を用ひて、越と媾和せり、

【字解】　大夫種、大夫は身分なり、此の人、姓を文と曰ふ、

其後五年、而吳王聞齊景公死、而大臣爭寵、新君弱、乃興師北伐齊、伍子胥諫曰、勾踐食不重味、弔死問疾、且欲有所用之也、此人不死、必爲吳患、今吳之有越、猶人之有腹心疾也、而王不先越而乃務齊、不亦謬乎、吳王不聽、伐齊大敗齊師於艾陵、遂滅鄒魯之君以歸、益疏子胥之謀、

【講義】　其後五年過ぎけるとき、吳王夫差は齊の君景公が死して大臣等銘々尊榮を爭ひ、新たに立ちたる君主は尙幼弱にして國內不統一を極むる由を聞き、侵略主義を行ふには好機會なりと思ひしかば、兵を興して北方に向ひ齊國を征伐せんとす、伍子胥諫めて止めけるは、越王勾踐は心に大望あるが故に、食事に菜を二品と竝ぶることなく、兵士の死する者あるときは祭祀料などを與へて之を弔ひ、病人あるときは醫藥などを宛てがひて之を見舞ふと承る、是れ徒事にはあらず、將來彼等を役に立てんと欲するなり、此の人死せずして存在せん限り、吳の害をなさんは必定と覺えたり、今吳に越のあることは、丁度人の胸

ふ處を拔取りたりければ、楚は呉が復も大擧して攻來らんことを恐れ、郢を去りて鄀に移り住めり、是の時分に於て、呉は伍胥と孫武との謀を用ひ、西の方面にては强國の楚を破り、北の方面にては齊晉二个國を威壓し、南の方面にては越人を服せり、其後四年目に孔子は魯の宰相となれり、

後五年、伐越、越王勾踐迎擊、敗呉於姑蘇、傷闔廬指、軍卻、闔廬病創將死、謂太子夫差曰、爾忘勾踐殺爾父乎、夫差對曰、不敢忘、是夕闔廬死、夫差既立爲王、以伯嚭爲太宰、習戰射、二年後伐越、敗越於夫湫、越王勾踐乃以餘兵五千人、棲於會稽之上、使大夫種厚幣遺呉太宰嚭、以請和、求委國爲臣妾、呉王將許之、伍子胥諫曰、越王爲人能辛苦、今王不滅、後必悔之、呉王不聽、用太宰嚭計、與越平、

【講義】其れより又五年過ぎて、呉は越を打ちけるに、越王勾踐は逆寄して姑蘇の地に呉の兵を敗り、闔廬の指に負傷せしめたり、呉軍は是れに由りて退却することゝなり、闔廬は手傷重りて死せんとせしとき、太子夫差を枕邊に召び之に問ふやう、汝は勾踐が汝の父を殺しゝことを忘るゝやと、夫差は、決して忘れ申さずと答へぬ、此の夜闔廬は死亡せり、太子の夫差既に王位を相續して位に卽き、伯嚭を太宰の職に任じ、兵士に戰射をば練習せしめ、二年の後此等の射手を率ゐて越を伐ち、其軍を夫湫に敗れり、越王勾踐は打洩されの殘黨五千餘人と會稽山の上に閉ぢ籠り、大夫の種と云ふ者に鄭重なる贈物を持たせて呉の太宰たる嚭の處に遣はし、和睦を申請はしめたるが、其條件は、越王は自國をば差出して呉王の臣下と

【講義】申包胥は以前伍胥に向ひて、必ず楚を存すべしと誓ひたることあり、今や楚の都は敵に占領せられ、國王は逃亡し、外國の力を借るの外最早自國を救ふ道とてあらざれば、秦に行きて楚の危急を告げ援兵を求めたれども、秦は之を承諾せず、包胥は秦君の宮殿の前なる廣場に立ちて、七日七夜の間大聲を發して哭きつゞけて止まざりければ、秦の哀公も流石に感動して憐憫の心を起して云ふやう、楚王は無道なりしとは云へ、此の如き忠臣あるからは之を救ひて保全せずには置かれまじと、乃ち戰車五百乘を發送して楚を救ひ呉を擊つこと六个月に及び、稷と云ふ處にて呉の兵を敗れり、話換りて呉王は楚に滯留して昭王の行方を探し居る間に、呉王闔廬の弟夫概は陣中より脱走して國に歸り、自ら呉王の位に卽けり、

闔廬聞之、乃釋楚而歸、擊其弟夫概、夫概敗走、遂奔楚、楚昭王見呉有内亂、乃復入郢、封夫概於堂谿、爲堂谿氏、楚復與呉戰敗呉、呉王乃歸、後二歲、闔廬使太子夫差將兵伐楚、取番、楚懼呉復大來、乃去郢徙於鄀、當是時、呉以伍子胥孫武之謀、西破彊楚、北威齊晋、南服越人、其後四年、孔子相魯、

【講義】闔廬は夫概が自己の不在中に國を奪ひたりと聞き、一刻も猶豫なり難しと、楚の方は棄て置きて早速歸國の上夫概を攻め擊ちし處、夫概は脆くも一戰に敗北し、遂に楚に逃け込みたり、楚の昭王は呉に内亂ありと聞き、最早憚る所なしとて復國都の郢に入り、夫概を堂谿と云ふ處の領主に取立て、堂谿氏と號せり、楚王は復び呉と戰つて之を敗り、呉王は戰場より本國へ引返せり、其後二年目に闔廬は太子夫差に兵を引連れ楚を伐たしめ、此の戰ひに楚の番と云

吾日暮塗遠、吾故倒行而逆施之、

【講義】 餘程以前のことなるが、伍胥の尚楚に在りしとき、申包胥と云ふ者と交あり、伍胥が楚の國を脱走する場合に至りて包胥に語りて云ふ、我れ他日必ず楚國を顛覆して見すべしと、包胥の曰く、我れ必ず楚國を保全して見せんと、斯くて其後呉の兵が楚の國都郢に攻入りし時に及び、子胥は昭王に恨みの一刀を加へんものをと、所々捜し求めたれども見當らざりければ、平王の墓を發き其尸骸を引出し、鞭にて打つこと三百回に及び、始めて手を止めたり、此の時申包胥は都を逃れ山中に避難せしが、伍胥の所行を聞いてあさましく思ひ、人を以て言はせけるは、君が復讐の仕方は餘りに甚しきやうなり、吾が嘗て聞ける語に、人衆きときは非道を肆にして天道に打勝てども、天道定まるときは亦能く此の非道なる人間に打勝つて之を罰すと云ふことあり、今君は以前平王の臣下となり、其身北面して之に事へたるに、今日其君の尸骸に鞭打ちて之を辱めたるが如き、非道も此に至れば最早極度なれば、天道が定つて罰を受くる段取りとなりしに非ずやと、伍胥は其使に向ひ、宜しく我が爲に傳言ありたし、吾れは旅人の、日の暮方になりて行く先きの尚遠ければ、心にあせりて無法に駈出すと同樣、復讎の志がいつ遂げらるゝやも知れず、其内に此の身の死せんことを恐るゝにより、遂に道理に逆ひたる行動をなしたるのみと、

【字解】 僇、辱むなり、

於是申包胥走秦告急、求救於秦、秦不許、包胥立於秦廷、晝夜哭、七日七夜、不絶其聲、秦哀公憐之曰、楚雖無道、有臣若是、可無存乎、乃遣車五百乘、救楚擊吳、六月、敗吳兵於稷、會吳王久留楚求昭王、而闔廬弟夫槪乃亡歸、自立爲王、

王、

【講義】吳楚の兩軍は漢水を隔てゝ兩岸に對陣す、吳王の弟に夫概と云ふもの兵を引連れ從ひ行かんと請ひたれども、吳王は之を許さず、然るに夫概は己れの手勢五千人を以て楚の將軍子常の軍に攻掛り、子常は敗れて鄭に逃げ行けり、吳は勝に乘じて前進し、五回接戰の後郢に至る、楚の昭王は國都も最早保ち難しと見しかば、己卯の日に出奔に及び、其翌日庚辰の日、吳王は郢に入れり、楚の昭王は都を落ちのびて雲夢に入りけるに、野武士に擊たれて又鄖國に走る、鄖公の弟懷の曰く、昔し楚の平王は我が父を殺せり、昭王は其子なれば、今之を殺すも何の仔細かあるまじと、然るに鄖公は昭王に同情を有ちしかば、弟が彼れを殺さんことを恐れ、王を伴ひて隨に奔れり、吳の兵は楚王を追擊して遂に隨を取卷き、隨國に申入るゝやう、周の子孫の漢川に在りしものは盡く楚の爲に亡ぼされたり、今其怨みを晴らす時なるに、之を庇護する方やあると、是に於て隨は楚王を殺さんとせし處、王子の綦と云ふ者楚王の身替となりて殺されんことを望めり、隨人は楚王を吳に引渡すに就き占ひたるに不吉と云ふことなりしかば、吳に斷りをのべて引渡さゞりき、

始伍員與申包胥爲交、員之亡也、謂包胥曰、我必覆楚、包胥曰、我必存之、及吳兵入郢、伍子胥求昭王、既不得、乃掘楚平王墓、出其尸、鞭之三百、然後已、申包胥亡於山中、使人謂子胥曰、子之報讎、其以甚乎、吾聞之、人衆者勝天、天定亦能破人、今子故平王之臣、親北面而事之、今至於僇死人、此豈其無天道之極乎、伍子胥曰、爲我謝申包胥曰、

【講義】闔廬が立ちて呉王となりしより三年目に兵を興し、呉胥、伯嚭を從へて楚を伐ち、舒の地を攻め取り、遂に王僚の子にして前に呉に反きて楚に降りたる二將軍を虜とし、勢ひに乘じて楚の都なる郢まで押寄せんとしけるに、將軍孫武諫めて云ふ、此の戰爭の爲め人民は頗る疲勞したれば未だ都へ攻入り難し姑らく時を待たれよと、闔廬はさらばとて、兵を引擧げ歸國に及べり、四年に呉は又楚を伐ちて六と潛との地を取り、五年には越を伐破れり、六年に至り、今度は楚の昭王の方より公子囊瓦を將軍として呉を伐たしめたるに、呉は伍胥を將軍とし、逆寄して豫章に敵軍を打破り、楚の居巣を攻め取りぬ、九年、呉王闔廬は伍胥と孫武とに謂ふやう、前年卿等は未だ楚都へ攻入るべからずと申したるが、今日は何如のものならんと、二人答へて云ふ、楚の將囊瓦貪慾にして人心離散するが上、唐蔡の二國之を怨み居ることゆゑ、大王が是非とも大攻撃をなす思召しならば、先づ唐と蔡とを味方に[illegible]さるゝが得策なりと、闔廬は此の意見に從ひ、殘らず軍隊を發し、唐蔡と楚とを伐てり、

與楚夾漢水而陳、呉王之弟夫概將兵請從、王不聽、遂以其屬五千人擊楚將子常、子常敗走、奔鄭、於是呉乘勝而前、五戰、遂至郢、己卯、楚昭王出奔、庚辰、呉王入郢、昭王出亡、入雲夢、盜擊王、王走鄖、鄖公弟懷曰、平王殺我父、我殺其子、不亦可乎、鄖公恐其弟殺王、與王奔隨、呉兵圍隨、謂隨人曰、周之子孫在漢川者、楚盡滅之、隨人欲殺王、王子綦匿王、己自爲王、以當之、隨人卜與王於呉、不吉、乃謝呉、不與

郤宛、伯州犂、伯州犂之孫伯嚭亡奔吳、吳亦以嚭爲大夫、前王僚所遣二公子將兵伐楚者道絕不得歸、後聞闔廬弒王僚自立、遂以其兵降楚、楚封之於舒、

【講義】 闔廬既に吳王の位に即き、萬事思ひ通りになりしかば、民間に隱れて時を待ち居たる伍胥を召し出し、之に行人の職を授け、軍國の事を相談せり、此の頃楚の國に於ては其大臣郤宛、伯州犂を誅せし處、伯州犂の孫の伯嚭と云ふ者吳の國に逃げ來れり、吳王は嚭をも舉げ用ひて大夫とせり、是より先き吳王僚の命を受け兵を率ゐて楚を伐ちに往きたる二公子は、路を斷たれて歸ることを得ざりしが、其後闔廬が王僚を弒して自立したる由を傳へ聞き、遂に己れの兵ぐるみ楚に降參し、楚は彼等に舒と云ふ土地を與へて之を領せしめぬ、

【字解】 行人、諸侯の國へ使する役、

闔廬立三年、乃興師、與伍胥伯嚭伐楚、拔舒、遂禽故吳反二將軍、因欲至郢、將軍孫武曰、民勞未可、且待之、乃歸、四年、吳伐楚取六與灊、五年、伐越敗之、六年、楚昭王使公子囊瓦將兵伐吳、吳使伍員迎擊、大破楚軍於豫章、取楚之居巢、九年、吳王闔廬謂子胥孫武曰、始子言郢未可入、今果何如、二子對曰、楚將囊瓦貪、而唐蔡皆怨之、王必欲大伐之、必先得唐蔡、乃可、闔廬聽之、悉興師與唐蔡伐楚、

なりて楚を伐ち、吳の鍾離と居巢との地を侵略して歸れり、此の戰ひ終りし頃伍胥は吳王僚に謁見の機會を得、說きて云ふ、楚は打破ること出來申すべし、何卒もう一度公子光を征伐に遣し給へと、然るに公子光は心に思ふ所ありければ吳王に言ふやう、彼の伍胥は己れの父と兄とが楚の國に於て誅戮せられたる者なれば、今大王に楚を伐つことを御勸め申す底意は自分の復讎を爲さんと欲するのみ、楚を伐ちたりとて彼れが言ふが如く容易に破ることは出來申さずと、伍胥は考へ附くやう、公子光は自國に野心を蓄へ、王を殺して自立せんと謀るものにして、今對外の事を說きたりとて、それ等の話は耳に入らざるべしと、乃ち公子光に專諸と云ふ者を薦め置きて、自分は退きて太子建の子なる勝と畊作をなして時機を待ちしが、それより五年を經て楚の平王は卒去せり、

初平王所奪太子建秦女、生子軫、及平王卒、軫竟立爲後、是爲昭王、吳王僚因楚喪、使二公子將兵往襲楚、楚發兵絕吳兵之後、不得歸、吳國內空、而公子光乃令專諸襲刺吳王僚而自立、是爲吳王闔廬、

【講義】初め平王が奪ひたる太子建の妃となるべくありし秦の女は軫と云ふ子を生めり、平王の卒するに及び、此の軫は跡を受けて楚の君となりしが、是れをば昭王と曰ふ、吳王の僚は楚の國の喪に乘じ、二子に兵を率ゐて楚に不意打をなさしめたる處、楚の方より兵を發して吳軍の歸路を斷ち切りしかば、吳軍は國に歸ることを得ず、隨つて國內の兵備空虛となれり、公子光は隱謀を遂ぐるに此上もなき機會なりしかば、豫て伍胥の薦めたる專諸をして吳王僚を刺殺さしめ、己れ自ら立つて吳王となる、是を闔廬と曰ふ、

闔廬既立得志、乃召伍員以爲行人、而與謀國事、楚誅其大臣

爺に慾心あらば此の如き莫大の褒美を得らるゝわけにて、何の僅か百金所に之れあらうや、一片の義氣を以て救ひ申したるに何ぞ謝禮を受け申さんやと之を辭しぬ、伍胥は其處を立去りて未だ目的の呉の地に行着かぬ中、病に罹り、已むなく中途に止り、乞食して一時を凌ぎけり、彼れは幾多の艱難を經て遂に呉に至り見るに、呉王の僚は方に攻事に力を用ひ、公子光と云ふ者將軍にてありき、伍胥は公子光の手蔓を以て呉王に謁見を願ひ出でぬ、

【字解】 父、漁父を指す、執珪、珪とは上圓くして下方形なる玉にして、天子より諸侯を封ずるとき賜はるもの、故に此の珪を執る爵位を謂ふ、

久之、楚平王以其邊邑鍾離與呉邊邑卑梁氏俱蠶、兩女子爭桑相攻、乃大怒、至於兩國擧兵相伐、呉使公子光伐楚、拔其鍾離居巢而歸、伍子胥說呉王僚曰、楚可破也、願復遣公子光、公子光謂呉王曰、彼伍胥父兄爲戮於楚、而勸王伐楚者、欲以自報其讎耳、伐楚未可破也、伍胥知公子光有內志、欲殺王而自立、未可說以外事、乃進專諸於公子光、退而與太子建之子勝耕於野、五年而楚平王卒、

【講義】 伍胥が呉に來りしより久しく時日を經る間に呉楚の戰爭始まりしが、其仔細を尋ぬるに、楚の國界の鍾離と云ふ村と呉の國界の邑に住める卑梁氏と云ふ者と俱に養蠶に從事せし處、桑摘に出でたる雙方の女子が桑畝の分界を爭ひたることが起りとなり、兩村の民互ひに攻合ひしに、平王は惡むべき呉の人民かなと怒を發し、其結果呉楚の兩國軍隊を動員して合戰するに至れり、呉の方にては公子光大將と

に密告せしかば、鄭の定公、由々しき一大事なりとて、子産と共に太子建を誅して禍ひを未發に防ぎたり、

【字解】 華氏之亂、宋の華定、華亥、向寧の徒が、其君元公の己れを害せんことを恐れ、機先を制せんとて、自分等より叛亂を作したる事件を謂ふ、

建有子名勝、伍胥懼、乃與勝俱奔吳、到昭關、昭關欲執之、伍胥遂與勝獨身步走、幾不得脫、追者在後、至江、江上有一漁父乘船、知伍胥之急、乃渡伍胥、伍胥既渡、解其劍曰、此劍直百金、以與父、父曰、楚國之法、得伍胥者、賜粟五萬石爵執珪、豈徒百金劍邪、不受、伍胥未至吳而疾、止中道乞食、至於吳、吳王僚方用事、公子光爲將、伍胥乃因公子光以求見吳王、

【講義】 太子建に一人の子あり、其名を勝と呼べり、伍胥は太子建が隱謀發覺して殺されたるにより大に危險を感じ、勝と俱に吳に逃走の途中、吳楚の境に在る昭關に到りたる處、關所の役人、兩人を執へんとせしかば、遂に勝と各〻別々になり、車を棄て步立となりて逃走せしが、殆んど脫れ難き場合にて、捕吏は後より間近く追ひ迫る、軈て長江まで逃げのびし處、幸にも江上に一人の漁父舟に乘り居たるが、伍胥の危急なるを知り、伍胥を己が舟に載せて向うの岸へ渡し遣れり、伍胥は漁父の爲に一命を救はれたる恩を謝せんんと、腰に帶びたる劍を解き、彼れに向ひて云ふやう、此の劍は百金の價格ある者なるが、今日の禮として其方に取らすなりと、漁父の曰く、楚國の達によれば伍胥を取押ふる者には五萬石の米と執珪の爵とを褒美に賜はることとなり居れり、されば若し此

之、奢聞子胥之亡也、曰、楚國君臣且苦兵矣、伍尙至楚、楚幷殺奢與尙也、

【講義】尙は既に召しに應じて自ら執はれの身分となり、後使者は伍胥卽ち員を逮捕に赴きたるに、員は弓を引きしぼり矢をつがへて使者に向ひしかば、使者は進み切らざりし間に逃去り、太子建の宋に在ることを聞き傳へ、宋に往きて之に從へり、父の奢は子胥が逃げたりと聞きて云ふやう、楚の君臣は行く行く兵難に苦むなるべしと、伍尙は執はれて楚の都に至るや、楚王は父の奢と尙とを一所に誅戮せり、

伍胥既至宋、宋有華氏之亂、乃與太子建俱奔於鄭、鄭人甚善之、太子建又適晉、晉頃公曰、太子既善鄭、鄭信太子、太子能爲我內應、而我攻其外、滅鄭必矣、滅鄭而封太子、太子乃還鄭、事未會、會自私欲殺其從者、從者知其謀、乃告之於鄭、鄭定公與子產誅殺太子建、

【講義】伍胥は既に宋に至りし處、生憎宋に華氏の亂あり、中々足を留むべくもあらざりしかば、太子建と同道して鄭に奔りぬ、鄭にては非常に優遇せしも、何分小國の事なれば其助けを借るべき見込みなき所より、立寄らば大木の蔭と、晉の國へ赴けり、晉の頃公は太子建に語るやう、太子は鄭と懇意の間柄にて、鄭は太子を信ずるこそ幸ひなれ、太子が能く我が爲めに內應を致され、我れ外より攻むるときは、鄭を亡ぼさんこと必定なり、鄭を亡ぼさば太子を鄭の君に取立て申さんと、太子は利慾に迷ひ、晉の頃公と打合せて鄭に還り折を窺ひたれども、未だ好機會に到着せざりし內、何か心に叶はざる所ありて、自ら人知れず一人の從者を殺さんとせり、從者は之を心附きて恐れ且つ怨み、豫て太子の隱謀を知りたることゆゑ鄭

父爲レ質、詐召二二子一、二子到、則父子俱死、何益二父之死一、往而令レ讎不レ得レ報耳、不レ如下奔二他國一、借レ力以雪中父之恥上、俱滅無レ爲也、伍尙曰、我知三往終不レ能レ全二父命一、然恨三父召レ我以求レ生、而不レ往、後不レ能レ雪レ恥、終爲二天下笑一耳、謂レ員可レ去矣、汝能報二殺レ父之讎一、我將レ歸レ死、

【講義】平王は使者の報告に因りて伍奢の豫想を聞き知りたれども、此れには耳を傾けず、人を以て伍奢の二人の子を召ばせたるが、其口上は、汝等召しに應じて來るときは汝等の命をたすけん、來らざるときは汝等の父の奢を殺さんとのことなりき、伍尙は人情に脆き質なるより往かんと欲せしに、員の云ふやう、楚王が我々兄弟を召す仔細は我が父を生かさんとする爲にはあらず、若し父子の中、王の毒手を脫る者あらば後に厄介を生ぜんことを恐るゝが故に、父を以て質となし、參りなば父を赦命せんなどと、瞞着手段を以て、我々二人の子を召すなれば、往きたるが最期、父子諸共に殺されん、父の命には何等の益があらうぞ、彼等仇人の爲に復讎の出來ざるやうにせらるゝ外はあらじ、それよりも他國に出奔し、其力を借りて父の恥辱を雪ぐが優なり、一緒に死すことは爲さざるもがなと、伍尙は弟の說に從はずして曰く、自分は縱令往きたりとも父の生命を全うし難きことを知る、然れども父君が我々を召して助かりたしと思はるゝに往きもせず、それかと云つて他日恥辱を雪ぐことも出來ず、天下の人の物笑ひとなるが殘念なりと、重ねて員に向つて語るやう、汝は逃げ去るが宜し、汝は父の殺されたる怨みを報いくれよ、此の兄は此れより召しに應じて死に就かんと、

尙既就レ執、使者捕二伍胥一、伍胥貫レ弓執レ矢嚮二使者一、使者不二敢進一、伍胥遂亡、聞二太子建之在一レ宋、往從レ

詢、能成大事、彼見來之并禽、其勢必不來、

【講義】伍奢は無忌が太子を平王に讒言したることを知りければ、平王に言上すらく、何人も他人よりも骨肉を親むは人情なるに、今大王に限り何如なる次第にて腹黒き讒邪の小臣の申す言を聽入れて、骨肉の身內を疏んじ給ふかと、無忌は平王が伍奢の辨明に因つて萬一悔悟することもやあらんと恐れを抱き、王に申すやう、大王今處置を爲し給はざるときは彼等の計畫は成就すべく、大王には謀叛人の爲に捕へられ給はんと、是に於て平王は怒りて伍奢を執へて之を押込めたる上、當時都に在りたる城父の司馬を勤むる奮揚と云ふ者に城父に參り、太子を殺害せよと命じぬ、彼は討手として出發する以前に、人を以て內々太子に事の由を告げ知らせ、太子火急に逃げ給へ、さなくば誅せらるべしと申遣しければ、太子は一刻も猶豫し難く、遂に宋の國へ出奔せり、無忌は注意深き男とて猶も後の患を除かんと欲し、平王に言上するやう、伍奢に二人の子あり、何れも賢才の者なれば、若し之を生かし置くときは楚に取りて心配の種となるべし、彼等を誅するには、父なる伍奢を人質として誘きよすべし、若し斯くせずば、彼等は將來楚の害とならんと、平王は使者を以て伍奢に言はしめけるに、汝若し二人の子を召び寄せなば命を赦すべし、其れが出來ざるときは殺すべしと、伍奢の曰く、同じ我子なれど、兄の尙の方は人情深き質なれば、呼びにやらば參るに相違なし、弟の員の方は剛情にして根性拗け、何如なる恥辱をも恥辱とせざる質なれば大事を仕遂ぐべし、彼れ此へ來るとも父子諸共に囚人となるべきを見透し、其勢ひ必ず來るまじと、

【字解】禽、囚虜なり、詢、罵なり、此には誹謗の意、員が王の召しに應ぜざるがため其父が殺されたりとの惡評に頓着する者に非ざるを謂ふ、

王不聽使人召二子、曰、來吾生汝父、不來今殺奢也、伍尙欲往、員曰、楚之召我兄弟、非欲以生我父也、恐有脫者後生患、故以

忌は斯く立身の緒口を得たれども、一旦平王に萬一の事ありて太子の御世とならば、重ね重ね罪を作りたることゆゑ、誅戮に遭ふの恐れあり、彼れは是に由りて太子建を讒言に及べり、然るに太子建の生母は蔡國の女なるが、平王は餘り寵愛せざりしかば自然太子にも情愛薄かりし處へ無忌の讒言ありしことなれば、次第に一層太子建を疎み、城父と云ふ地の太守として國疆の兵備に任ぜしめぬ、幾程も過ぎぬ間に無忌は又之を種に太子を陷れて亡きものにせんと、日となく夜となく、太子建の惡しき點をば平王に申立て、太子には、大王が秦の女を御自身に娶り給ひし一條より、自然怨めしく思はるゝことは有り得べき儀なれば、何如なる珍事を仕出かさるゝかも知れず、大王少しは御用心あらまほし、抑、太子が城父の地を守り兵を將ゐられしより、外は列國と私に交際して勢力を養はるゝは、是れ他日都へ入りて謀叛せんとする下地にこそと、平王は何の思慮もなく、彼れの讒言を信用し、太子の太傅を勤むる伍奢を召び出して嚴しく太子の企てを窮問せり、

【字解】考問、拷問なり、

伍奢知無忌讒太子於平王、因曰、王獨奈何以讒賊小臣、疏骨肉之親乎、無忌曰、王今不制、其事成矣、王且見禽、於是平王怒、囚伍奢、而使城父司馬奮揚往殺太子、行未至、奮揚使人先告太子、太子急去、不然將誅、太子建亡奔宋、無忌言於平王曰、伍奢有二子、皆賢、不誅、且爲楚憂、可以其父質而召之、不然、且爲楚患、王使使謂伍奢曰、能致汝二子則生、不能則死、伍奢曰、尙爲人仁、呼必來、員爲人剛戾、忍

【講義】伍子胥は楚の人なり、名は員、員の父を伍奢と曰ひ、員の兄を伍尙と曰ひ、其先祖を伍擧と曰ふ、此の伍擧と云ふ者は楚の莊王に事へ、遠慮なくびしびし諫言を爲すことを以て多く世間に知られたり、故に其子々孫々に至る迄楚國に於て有名なりき、楚の平王に名を建と呼ぶ太子あり、平王は呉奢を太傅と云ふ守役となし、費無忌と云ふ者を少傅と云ふ第二の守役となし〻處、費無忌は太子に對して忠實ならず、惡むべき所行あり、平王は無忌を使として秦の王女を太子建に貰ひ受けたき由を申込みせしが、無忌秦に至り、其緣女を見たるに頗る美人なりしかば、楚國に馳せ歸りて平王に報告するやう、秦の王女は絕世の美貌なれば、太子の妃とせらる〻は惜しきものなり、大王自身之を娶り給へ、而して太子の爲には別に嫁を迎へらるべしと、平王は彼れの言に動かされ、秦の王女を自分に橫取りして非常に之を寵愛し、二人の間に軫と云ふ子を設けたり、斯くて太子には他の女を妻せぬ、

【字解】太傅、少傅、太子の守役なり、

無忌既以秦女自媚於平王、因去太子而事平王、恐一旦平王卒、而太子立殺己、乃因讒太子建、建母蔡女也、無寵於平王、平王稍益疏建、使建守城父、備邊兵、頃之、無忌又日夜言太子短於王曰、太子以秦女之故、不能無怨望、願王少自備也、自太子居城父將兵、外交諸侯、且欲入爲亂矣、平王乃召其太傅伍奢考問之、

【講義】無忌は秦の女を取持ちて平王の氣に入り、其覺えめでたかりしかば、東宮の少傅を辭し、太子をば見棄て〻平王の御殿に勤仕することゝなれり、無

者未必能行、孫子籌策龐涓、明矣、然不能蚤救患於被刑、呉起說武侯以形勢不如德、然行之於楚、以刻暴少恩亡其軀、悲夫、

【講義】太史公曰く、世俗軍事を說く者は、皆孫子の兵書十三篇を言ふ、又呉起の兵法も世に多くあることゆゑ、之をば論ぜずして其施行し設計したる事跡を論じたり、古語に、何事によらず實行の出來る者は論說も出來るとは限らず、論說の出來る者は實行も出來るとは限らずと、孫子が龐涓を謀り拔きたるは誠に明かなりき、然れども逸早く足を斬らるゝが如き禍ひを豫防する能はず、呉起は、山河の形勢何如に險固なるも德の恃むべきに若かざることを武侯に說けり、然るは楚に於ては、行ひし所嚴酷手荒にて恩情を缺き、其結果己が身を亡ぼしたり、悲むべきことかな、

【字解】師旅、軍隊のこと、轉じて兵事として用ひたり、籌策、計略なり、蚤、ハヤクと訓ず、

伍子胥列傳第六

伍子胥者、楚人也、名員、員父曰伍奢、員兄曰伍尙、其先曰伍擧、以直諫事楚莊王、有顯、故其後世有名於楚、楚平王有太子、名曰建、使伍奢爲太傅、費無忌爲少傅、無忌不忠於太子建、平王使無忌爲太子取婦於秦、秦女好、無忌馳歸報平王曰、秦女絕美、王可自取而更爲太子取婦、平王遂自取秦女、而絕愛幸之、生子軫、更爲太子取婦、

尸而伏之、擊起之徒、因射刺吳起、幷中悼王、悼王既葬、太子立、乃使令尹盡誅射吳起而幷中王尸者、坐射起而夷宗死者、七十餘家、

【講義】楚の悼王は平素吳起の賢者なることを聞居けれぱ、彼れが自國に至ると均しく、之を擧げて宰相とせり、吳起は茲に抱負を行ふことを得て、法度を明かにし號令を審かにし、當座に必要なき官を取り除き、公族の疎遠なる者を廢して、其人々の是れまで受けたる俸祿をば戰士を愛撫し養成すべき費用に充てしが、吳起の要旨は兵力を强くし、合從連衡を論ずる游說の士に打擊を加へ、國政を攪亂せしめざるに在りき、斯くて軍備も完かりしかば、吳起は其撫養したる兵士を率ゐ、南は百越を平げ、北は陳蔡二國を幷呑し、三晉を擊退し、西に向ひては秦を伐ち、功名の絕頂に達したり、楚の公族等は吳起の爲に廢せられしを怨むと共に彼れの功名を忌み居たるが故に、彼等擧つて吳起を殺さんと欲せし處、會、吳起を寵用せし悼王卒去せしかば、之を機會に公族竝に大臣等は暴動を起し、兵士を引連れ吳起を攻め圍みぬ、吳起は尋常にては逃れ難しと思ひ、何如に亂後と雖もまさか君主の遺骸には手出しなるまじと、走り行きて王の尸の上に打臥せり、然るに吳起を討たんとしたる徒は、吳起を討殺すため、悼王の尸までも射中てたり、軈て悼王の葬式も濟み、太子、君位に卽きたるが、執政に命を下し、吳起を射ると共に悼王の尸を射たる者を誅せしめぬ、而して吳起を射殺せし罪に連坐して一族を絕やしたる者七十餘家に及べり、

【字解】馳說、游說すること、貴戚、戚は外戚、令尹、楚にては大夫を令尹と謂ふ、執政なり、

太史公曰、世俗所稱師旅、皆道孫子十三篇、吳起兵法世多有、故弗論、論其行事所施設者、語曰、能行之者未必能言、能言之

り、然るに此の魏は小國なれば彼れが驥足を展ぶるに足らず、又强國の秦とは界(サカヒ)を接することなれば、秦に望みを屬するやも測り難し、臣は彼れが魏に留まる意志あるまじと氣遣ひ致すなりと申さるべし、然るときは武侯必ず何如にせば彼れを留め得べきかと尋ね給ふべし、主君にはそれに就いて武侯に言上あれ、兎も角試みに姫君を彼れに降嫁あるべき由を以て彼れの足を御引留めなさるべし、起に若し留まる心あらば御受け致すに相違なく、又留まる心なくば御辭退致すに相違なし、此れを以て彼れの進退をトし給へと、斯くて主君には吳起を召され、魏侯の思召しを傳へ給ひて、彼れを伴ひ御歸館あり、奥方と御打合せの上、奥方が立腹に及ばれて主君の侮辱せらるる有樣を吳起に見せ給へ、彼れは奥方が主君を輕蔑せらるゝ有樣を見ば、國君の姫君は斯くまで我儘增長の爲なるかと愛想をつかし、己れ若し姫君を娶るときは同樣の憂き目を見んかと、其名譽心を傷くる點より必ず辭退に及ぶべし、是れぞ彼れを取除く手段なりと勸めける、公叔は妙計なりとて其手續を行ひけるに、吳起は姫君が苟くも宰相として國家嚴重の位にある夫をば見下す樣子を目擊してあさましき事と思ひ、案の如く魏君武侯に姫君降嫁の恩命を辭退せり、是れより武侯は彼れが魏に忠實ならざることを疑ひて信任せざりしかば、吳起は此の末何如なる罪を受くるも測るべからずと遂に魏の國を立退き、直ちに楚に赴けり、

【字解】尙魏公主、公主は國君の女を謂ふ、尙とは君の女を臣下に配することと、

楚悼王素聞起賢、至則相楚、明法審令、捐不急之官、廢公族疏遠者、以撫養戰鬪之士、要在彊兵、破馳說之言從橫者、於是南平百越、北幷陳蔡、却三晉、西伐秦、諸侯患楚之彊、故楚之貴戚盡欲害吳起、及悼王死、宗室大臣作亂而攻吳起、吳起走之王

起は之を聞きて默然として物をも言はず、思案すること餘程の間なりしが、口を開いて云ふやう、此の大役は貴公に持ち行かんと、田文云ふ、此の點より拙者が貴公の上に在る理由なれと、是に於て吳起は己が田文に及ばざることを自覺せり、

【字解】 孰與、選擇を問ふ辭なり、イヅレゾと訓ず、府庫、府は財寶を藏め、庫は武器を貯ふる處、

田文既死、公叔爲相、尙魏公主、而害吳起、公叔之僕曰、起易去也、公叔曰、奈何、其僕曰、吳起爲人、節廉而自喜名也、君因先與武侯言曰、夫吳起賢人也、而侯之國小、又與彊秦壤界、臣竊恐起之無留心也、武侯卽曰、奈何、君因謂武侯曰、試延以公主、起有留心、則必受之、無留心、則必辭矣、以此卜之、君因召吳起而與歸、卽令公主怒而輕君、吳起見公主之賤君也、則必辭、於是吳起見公主之賤魏相、果辭魏武侯、武侯疑之而弗信也、吳起懼得罪、遂去、卽之楚、

【講義】 田文死去せし後、公叔と云ふ者、宰相となれり、然るに彼れは魏君の女を娶りたれば、其關係により威勢を振はんとせしが、何分吳起は彼れに取りて目の上の瘤ゆゑ、是非とも之を除かばやと思ひ煩ひぬ、公叔の僕に惡智慧の者ありて主人の意を迎へんと欲し、吳起を取り除くは容易き業なりと申出でければ、公叔は其方法は何如んと問ひぬ、僕の曰く、吳起の人と爲りは節操氣骨ありて名譽を好めり、されば主君には先づ魏君武侯と物語の折、吳起は賢者な

子孰與起、文曰、不如子、起曰、守西河、而秦兵不敢東鄕、韓趙賓從、子孰與起、文曰、不如子、起曰、此子三者皆出吾下、而位加吾上、何也、文曰、主少國疑大臣未附、百姓不信、方是之時、屬之於子乎、屬之於我乎、起默然良久曰、屬之子矣、文曰、此乃吾所以居子之上也、吳起乃自知弗如田文、

【講義】　其後魏にて新たに宰相を置くこととなり、田文を宰相の職に任ぜしかば、吳起は我れこそ宰相になるべしと思ふ折柄、之を聞きて不平を抱き、或る時田文に謂ふやう、自分は貴公と功勞の比較を試みたしと思ふが差支へなきかと、田文差支へなしと答へければ、起の曰く、三軍の總司令となり、士卒は君國の爲に戰死を樂み、敵國は敢て魏に對し惡企みをせぬ樣にすることは、貴公と起と孰れか能力ありやと、田文云ふ、其れは中々以て貴公に及ばずと、起の曰く、百官を治め、萬民を親み、國庫を充實せしむることは、貴公と起と孰れか能力ありやと、田文云ふ、其れは中々以て貴公に及ばずと、起の曰く、西河の土地を守り、我が武威を輝かして、秦の兵も東の方魏の國に向ふことを憚り、韓趙も對等の形式にて服從せしむるやうに爲すことは、貴公と起と孰れか能力ありやと、田文云ふ、其れは貴公に及ばずと、起の曰く、三點に於て貴公は何れも拙者の足下へも寄り附くことの出來ざるに、位置の反つて拙者の上に在るは何の道理ぞやと、田文云ふ、主君年若にて國中不安を感じ、大臣は未だなじまず、人民は未だ信ぜず、斯かる場合に際し國家の運命を荷ひて立つ所の大役は、貴公若し第三者の地位に在らんには、之を貴公に持ち行くべきものか、それとも我輩に持ち行くべきものかと、

【講義】文侯は吳起が軍隊を使ふに妙を得て、廉潔公平の取扱ひをなし、飽くまで材能ある者に働かせ、士卒の人望を得たる所より、西河の鎭將として秦韓二國の押とせり、魏の文侯卒去ありし後、吳起は引續きて其子の武侯に仕へたり、或る時武侯は西河に舟遊を催し、段々川下へと下り往き、中流に至りし頃、四方の景色を振向きながら吳起に向ひ仰せけるは、何んと見事なることかな、此の山河の險阻なる有樣は、實に我が魏の國の寶なりと、吳起は恭しく席を起ちて答ふるやう、抑、國の寶は君主の德に在り、險阻要害にあらず、試みに其證據を擧げ申さんに、昔し三苗氏の國は洞庭湖を左に控へ、彭蠡湖を右に持ち、要害の地なりしかども、德義を修めざりしため、禹に滅ぼされぬ、夏の桀王の居所は黃河と濟河とを左に取り、泰山、華山の高山を右に据ゑ、伊闕の山は其南に在り、羊腸の峻坂は其北に在り、天險無比の地なりしかども、政治の仕方不仁なりしため、殷の湯王に逐ひ拂はれたり、殷の紂王の國は孟門山を左に構へ、太行山を右に控へ、常山は其北に在り、大河は其南を經由し、此の上もなき地勢なりしかども、政治の仕方不德なりしため、周の武王に殺されたり、此れ等の事實に由りて觀察するに、國の寶は德に在りて險に在らず、若し君德を修め給はずんば、今此の舟に乘り居る人人も盡く敵國となり申すべく、何如なる險阻ありとも何の役に立たざらんと、武侯は誠に尤もの言なりとて、直ちに吳起を取立てゝ西河の太守となし、甚だ名譽ありき、

【字解】爲西河守、文侯の時已に「爲二西河守一」とあり、然るに武侯の時にも又「爲西河守」とあり、或は一度罷められて再任せしものか、或は初めには單に「爲西河守」とあり、後には「封二吳起一爲二西河守一」とあるに據れば、初めは單に官職のみにて後には所領を附したるものか、頗る疑ふべし、

魏置レ相、相二田文一、吳起不レ悅、謂二田文一曰、請與レ子論レ功、可乎、田文曰、可、起曰、將二三軍一使二士卒樂一レ死、敵國不二敢謀一、子孰二與起一、文曰、不レ如レ子、起曰、治二百官一、親二萬民一、實二府庫一、

う、御身の子は高の知れたる一兵卒なるに、將軍が勿體なくも腫物の膿を吮ひ下されしは此の上もなき榮譽にて、喜ばしく思ふこそ當然なるに、何として哭くことあらんと、母の曰く、然樣なる次第にはあらず、前年彼れの父がやはり此の樣なる腫物に惱みし時、吳公は彼の父の爲に其腫物の膿を吮ひ下されたり、彼れの父は其御恩に感激の餘り、戰爭に臨み敵に背を見せずして討死に及べり、然るに吳公は今又子の腫物の膿を吮はれたることなれば、此の子も吳公の爲に一命を捧ぐるは必定にて、何處に討死するか分らぬ故、手賴りなき此の身の嘆く次第に之れありと、

【字解】疽、癰の一種、腫物の名、不旋踵、踵はクビスと訓ず、か丶との名、此の三字、踵を轉ずる間もなしと云ふ意と、背向きもならぬと云ふ意と、何れにも取らる、

文侯以吳起善用兵、廉平盡能得士心、乃以爲西河守、以拒秦韓、魏文侯既卒、起事其子武侯、

武侯浮西河而下、中流顧而謂吳起曰、美哉乎山河之固、此魏國之寶也、起對曰、在德不在險、昔三苗氏左洞庭、右彭蠡、德義不修、禹滅之、夏桀之居、左河濟、右泰華、伊闕在其南、羊腸在其北、修政不仁、湯放之、殷紂之國、左孟門、右太行、常山在其北、大河經其南、修政不德、武王殺之、由此觀之、在德不在險、若君不修德、舟中之人、盡爲敵國也、武侯曰、善、卽封吳起爲西河守、甚有聲名、

文侯問李克曰、吳起何如人哉、李克曰、起貪而好色、然用兵、司馬穰苴不能過也、於是魏文侯以爲將、擊秦拔五城、起之爲將、與士卒最下者同衣食、臥不設席、行不騎乘、親裹贏糧、與士卒分勞苦、卒有病疽者、起爲吮之、卒母聞而哭之、人曰、子卒也、而將軍自吮其疽、何哭爲、母曰、非然也、往年吳公吮其父、其父戰不旋踵、遂死於敵、吳公今又吮其子、妾不知其死所矣、是以哭之、

【講義】吳起は斯く魯君より見放されたるが、其折魏の文侯の賢君なる由を聞きて其臣下とならんと欲し、魏の國に赴き其由を申入れし處、文侯は未だ十分彼れの人と爲りを知らざりしかば、宰相の李克に向ひ、吳起と云ふ者は何如なる人物なるかと問ひけるに、李克の答ふるやう、吳起と云ふ男は貪慾なるが上に女好の男にて、人格は取るに足らざれども、兵を用ふる一段となつては司馬穰苴と雖も彼れに越すこと出來ずと、是に於て親の文侯は彼れを擧げて將軍とせしが、果して李克の言の如く、吳起は其能力を顯はし、秦を擊つて其五个城を攻め取れり、吳起の將軍にて在りし時と云ふものは、士卒の中の最下等の者と同樣の粗衣を纒ひ、同樣の粗飯を食し、臥するにも別に席を設くることなく、外出するにも車や馬に乘ることなく、其兵糧なども自ら之を物に包みて携帶する等、士卒と勞苦を分つて之を共にせり、或る時士卒の中に疽と云ふ腫物にて難儀する者ありしに、起は之を愈し遣らんがため深切にも其膿汁を吸取りし處、其兵卒の母は此事を聞きて有難しとは思はず、聲を放つて哭きければ、或人不思議に思ひ尋ねけるや

君用レ起、則是棄レ衛、魯君疑レ之、謝二呉起一、

【講義】呉起は衞國の産にして戰爭を爲すことを好めり、嘗て孔子の門人なる曾子に就いて學問せしことあり、魯の君に事へ居りたる處、齊國の兵、魯に攻寄せ來り、防戰を爲すに就いて呉起を將帥に任用せんとする評議もありたれど、呉起は齊國人の女を娶りて妻と爲し居ければ、魯の人々は其心底を疑ひ、彼れを將帥となすことは中止の姿となりぬ、呉起は此の場合夫婦の情愛を犧牲にしても功名を成さんと思ひしかば、遂に己れの妻を殺し、己が齊に心を寄せざる證據を示せり、魯の政府も最早懸念に及ばずとて彼れを將帥に任じけるが、彼れは將帥となりて齊を攻め、大に敵軍を打破れり、然るに呉起を魯君に惡言するやう、起の人と爲りを見るに猜忌殘忍の人なり、彼れが若き時には其家富み榮え千金の資産をも貯へけるが、仕官を求めて諸方を游歷したれど失敗したるため、身代を潰すまでに落魄し、故郷の人々等は彼れが困窮の有様を見て嘲り笑ひぬ、彼れは之を遺恨に思ひ、己れを惡口せし者三十餘人を殺害に及び、衞の外廓の門を出でて東の方へ走らんとし、其母に訣別をなすとき、己れの臂を嚙み切り誓ひを立てゝ云ふやう、起は大臣宰相とならずんば復び此の衞の地を踐まざるべしと、遂に曾子の門に入りて學問をなしゝが、此の如くにして餘り久しからぬ内に其母死去せし處、彼れは歸鄕して喪を營むこともせざりしかば、曾子は彼れを薄情者なりとて破門に及びけり、呉起は仕方なしに魯に往きて兵法を學び、其學び得たるところを以て魯の君に仕へたるに、魯君彼れが齊の國に二心あることを疑ひしかば、彼れは其疑ひを晴らさんが爲め己れの妻を殺して將軍たることを求めたるなり、夫れ魯は小國にてありながら戰勝國の名あるときは、列國之を忌みて伐たんとすべし、且つ魯と衞とは兄弟の國柄なるに、衞の亡命者たる呉起を用ひ給はゞ、與國の衞を棄つる道理なりと、魯君は此の説を聞きて呉起を疑ひ、呉起に旨を諭して免職せり、

呉起於レ是聞二魏文侯賢一、欲レ事レ之、

と萬張の石弓を發射せしかば、魏の軍兵は不意を打たれて圖を失ひ、右往左往に散亂せり、龐涓も最早自分の智慧も竭き果て戰爭も敗北と知りしかば運命なりと諦め、遂に彼の小僧に功名を成さしむることとなれりと曰ひながら、自ら己れの首を刎ねて死にけり、齊は此の勝軍に乘じて大に敵軍を破り、魏の太子申を俘虜として引きつれ歸れり、孫臏は此の一戰により名譽を天下に輝かし、其兵法は世に傳はれり、

【字解】斫、きりけづるなり、萬弩、極めて多數なるを謂ふ、弩はイシユミと訓ず、ばねにて矢を彈き出す仕組にして、當時尤も威力ある武器なり、鑽火、錐を以て木をもみ、摩擦より熱を起さしめて火を取る法なり、豎子、孫臏を指す、鄙めたる語、自剄、自身刀を持ち己が首に當てゝ切り落すこと、虜、イケドリ、

○吳起者、衞人也、好用兵、嘗學於曾子、事魯君、齊人攻魯、魯欲將吳起、吳起取齊女爲妻、而魯疑之、吳起於是欲就名、遂殺其妻、以明不與齊也、魯卒以爲將、將而攻齊、大破之、魯人或惡吳起曰、起之爲人、猜忍人也、其少時、家累千金、游仕不遂、遂破其家、鄉黨笑之、吳起殺其謗己者三十餘人、而東出衞郭門、與其母訣、齧臂而盟曰、起不爲卿相、不復入衞、遂事曾子、居頃之、其母死、起終不歸、曾子薄之、而與起絕、起乃之魯、學兵法、以事魯君、魯君疑之、起殺妻以求將、夫魯小國而有戰勝之名、則諸侯圖魯矣、且魯衞兄弟之國也、而

僅か三日の内に士卒の逃亡する者半以上なるを見れば、能く能くの弱兵なり、此の勢ひに乘じて一息に攻め破れと、其歩兵をば置去りにして輕裝せる精鋭の騎兵を率ゐて二日路を一日に十里行く所を、二十里と云ふ風に、急ぎ急ぎて齊軍の後を追掛けたり、

【字解】 三晉、韓、趙、魏は本と晉の三卿なりしが、後皆諸侯となり、終に晉を分割して國を成しゝかば、之を稱して三晉と曰ふ、

孫子度其行、暮當至馬陵、道狹、而旁多阻隘、可伏兵、乃斫大樹、白而書之曰、龐涓死于此樹之下、於是令齊軍善射者、萬弩夾道而伏、期曰、暮見火擧而俱發、龐涓果夜至斫木下、見白書、乃鑽火燭之、讀其書未畢、齊軍萬弩俱發、魏軍大亂、相失、龐涓自知智窮兵敗、乃自剄曰、遂成豎子之名、齊因乘勝、盡破其軍、虜魏太子申以歸、孫臏以此名顯天下、世傳其兵法、

【講義】 孫臏は龐涓の行軍の速度を推測しけるに、夕方に馬陵と云ふ處に至る筈なり、此馬陵地帶は道路狹きが上に、其近傍には險阻多くして足場惡しければ、伏勢をなすに適當せり、因つて孫臏は道側に立てる大木の皮を刄物にて切り取り、木地の白き處へ龐涓は此の木の下にて死せんと書き識るし、斯くて齊の軍中に於て弓を射ることに巧者なるものに命じ、萬張の石弓を路の兩側に伏せ置かしめ、約を定めて云ひけるは、夕方になり火の光り見えなば一齊に發射すべしと、龐涓は孫臏の見込み通りに夜に入つて馬陵の道に差掛り、孫臏の削り置きたる木の下に至りけるが、何やら白き物目に着きたれば訝しく思ひ、火を點じ之を照して讀み下し、未だ終るか終らざるかの中に齊の伏勢は火の擧るを見て、此の時なり

齊號爲怯、善戰者、因其勢而利導之、兵法百里而趣利者、蹶上將、五十里而趣利者、軍半至、使齊軍入魏地爲十萬竈、明日爲五萬竈、又明日爲三萬竈、龐涓行三日、大喜曰、我固知齊軍怯、入吾地三日、士卒亡者過半矣、乃棄其步軍、與其輕銳倍日幷行逐之、

【講義】此の戰爭ありしより十五年を過ぎ、魏と趙とは連合して韓を攻め、韓は危急に迫りしかば、齊國に窮狀を訴へて援兵を求めたり、此度も齊は田忌を將軍として韓を救ふが爲に發向せしむ、田忌は以前趙を救ひたる時の如く、韓には赴かずして直ちに大梁に發向せり、魏の將軍龐涓は齊が己れの本國を襲ふと聞き、韓をば打棄てゝ引返せり、然るに本國に着きて見れば、齊の軍は已に大梁を過ぎて西方へ去りし處なり、孫臏は田忌に謀を進めて云ふ、彼の三晉の兵は元來惡強くして齊を輕んじ、臆病と呼びなせり、是れ幸ひの事なり、何となれば戰爭の巧者なるものは、敵の形勢次第、之を味方に有利なるやうに持ち行くことなるが、兵法に、百里もある道程を利に釣られて急行する者は上將を討死せしむる結果を來し、五十里もある道程を利に釣られて急行する者は軍の半分ほか間に合はぬと云ふことあり、然れば今只すらも我れを侮る敵兵に一層弱みを示しなば、彼れは圖に乘りて急追すべし、是れ彼れをして兵法に忌む所を犯さしむるの謀なり、而して敵に弱みを示す爲には、我が齊軍の魏の國内に入るものをして十萬個の竈を造らしめ、其翌日は五萬個の竈を造らしめ、又其翌日は三萬個の竈を造らしむべしと、田忌は此の謀を實行せし處、龐涓は本國に歸り齊軍の通過せし跡を行くこと三日間に及びしが、敵の竈の日々少くなりしを見て大に喜んで云ふやう、自分は初めより齊軍の臆病なることを承知せしが、我が國内に入りて

る趙の國に赴きて其危急を救はんと考へたる處、孫臏は之を諫むるやう、凡そ絲などのもつれ亂れたるを解きほごすには手にて根より之をほどくべく、拳にて引張らぬものなり、格鬪を救ふには亦其仕方あり、戈などを以て打懸らぬものなり、要處を擊ち空虛を衝くときは、敵の形勢は立往生となりて、彼れ自ら兵を解き去る外なしとかや、今や魏と趙と交戰するに當り、魏の身輕の出立ちをなし敏活の行動をなす兵士、又一國を擧りての精銳なる軍隊は必ず戰場に出盡して居り、國內に留まれる老人や幼少の民は運送等に使役せられて、疲れたるに相違なし、されば君には兵を率ゐて急速に敵の都なる大梁に向ひ、其街道に陣を構へて、彼れの無人にて空虛なる處を衝くに踰したることとなし、さすれば敵は本國が氣懸りとなることゆゑ、趙の方は放擲して自國を救はんとするは必定なり、是れ我が軍は一擧して趙の圍みを解き放すと同時に、魏の不意に出でて之を弱らせる次第なりと、田忌は此說を聞き、眞に妙計なりとて孫臏の意見に從へり、

【字解】 控捲、拳にて擊つなり、搏撠、戟を以て擊つなり、批亢、要處を擊つ、擣虛、空虛の處を衝く、形格勢禁、格は差支へること、禁は行詰ること、大梁、魏の都、故に梁は又魏の別稱となる、

魏果去邯鄲、與齊戰於桂陵、大破梁軍、

【講義】 田忌は孫臏の建策により、趙を救ふことを止めて、直ちに魏の本國に向ひて兵を進めしかば、魏の軍は、案の如く攻圍中なる趙の邯鄲を退却し本國に引返す途中、桂陵と云ふ處にて齊兵と合戰に及びしが、齊は此の時大に魏の軍を打破れり、

【字解】 邯鄲、趙の都なり、

後十五年、魏與趙攻韓、韓告急於齊、齊使田忌將而往、直走大梁、魏將龐涓聞之、去韓而歸、齊軍既已過而西矣、孫子謂田忌曰、彼三晉之兵、素悍勇而輕齊、

にして一勝負濟みたるが、田忌は三度の中一度負けて二度勝ちしかば、究竟齊王の賭けたる千金を得たり、

【字解】重射、物を賭して騎射をなすこと、質、對なり、下駟、上駟、中駟、駟は車を引く四疋の馬、上中下は馬の優劣の等級なり、

於是忌進孫子於威王、威王問兵法、遂以爲師、其後魏伐趙、趙急、請救於齊、齊威王欲將孫臏、臏辭謝曰、刑餘之人、不可、於是乃以田忌爲將、而孫子爲師、居輜車中、坐爲計謀、田忌欲引兵之趙、孫子曰、夫解雜亂紛糾者不控捲、救鬭者不搏撠、批亢擣虛、形格勢禁、則自爲解耳、今梁趙相攻、輕兵銳卒、必竭於外、老弱罷於內、君不若引兵疾走大梁、據其街路、衝其方虛、彼必釋趙而自救、是我一擧解趙之圍、而收弊於魏也、田忌從之、

【講義】田忌は此の賭弓の事より、益、孫臏の奇略に富むことを知りしかば、之を齊君の威王に推擧せし處、威王は彼れに兵法を問ひ試み、是れならばとて遂に尊んで兵法の師と仰ぎぬ、其後魏と趙と戰端を開き、魏の兵は趙を攻めしかば、趙は齊に向ひて援兵を乞ひたり、齊は趙の請求を容れて出兵することとなりしが、威王は孫臏を援軍の大將に爲さんとせられし處、彼れは之を辭退して云ふやう、臣は嘗て刑罰を受けたる不具不祥の者なれば大將たるに差支ありと、因つて威王は田忌をば大將とし、孫臏は軍師として輜重車の中に居り、坐したるまゝ謀を運らすこととなりぬ、田忌は、兵を率ゐて現に攻擊を受けつゝあ

齊使、齊使以爲奇、竊載與之齊、

【講義】或る時、齊國の使者が魏の都なる梁へ赴きけるとき、孫臏は固より體刑を受けたる前科者として公然尋ぬることも出來かぬる身分故、內密に齊の使者に遇ひ、若し己れを用ひなば齊の利益となる由を說きたるに、齊の使者は彼れの談論を聞き、世に得難き人物なりと思ひ、伴ひ歸りて自國の役に立たせばやと、歸國の際、人に知れぬやう、そつと己れの車に載せて齊へ戻りぬ、

齊將田忌善而客待之、忌數與齊諸公子馳逐重射、孫子見其馬足不甚相遠、馬有上中下輩、於是孫子謂田忌曰、君第重射、臣能令君勝、田忌信然之、與王及諸公子逐射千金、及臨質、孫子曰、今以君之下駟與彼上駟、取君上駟與彼中駟、取君中駟、與彼下駟、既馳三輩畢而田忌一不勝而再勝、卒得王千金、

【講義】齊の將軍田忌と云ふ者、孫臏の徒人ならぬを知れるゆゑ、之と親みを結び、客分として待遇せり、田忌は日頃齊の諸公子と馬を乘廻はして賭弓の競技をなすこと珍しからず、孫臏は或る時之を見物せし處、其馬の速力似たり寄つたりと云ふ工合なると、馬に上中下の三級あることを發見せり、是に於て心に思ひ附く節ありければ田忌に申すやう、君兎も角賭弓をなされよ、僕は君を勝たして御覽に入れんと、田忌は孫臏の言葉を信用し、王及び諸公子と千金を賭けて騎射をなすこととなり、愈〻對射の場合に臨みけるに、孫臏は田忌に策を授けて云ふ、今君の下等の馬四頭と相手の上等の馬四頭と駈け合せ、君の上等の馬四頭と相手の中等の馬四頭と駈け合せ、君の中等の馬四頭と相手の下等の馬四頭と駈け合せ給へ、勝利疑ひなかるべしと、斯くて駈け馳すこと三度

王の挨拶に、將軍は定めて疲勞すらん、先づは休息し宿に下り申すべし、此方は此上見物することを望まずと、孫子曰く、大王は單に兵法の議論のみを御好みにて、兵法の實地を御用ひなさることを出來ず、片腹痛き次第なりと、孫子は斯く其兵法を實現せしかば、吳王闔廬も孫子が兵を用ふるに堪能なることを知り、其結果之をば將軍とし、西は强國の楚を破り其都の郢に攻入り、北は齊と晉とを威壓し、名譽を諸侯に輝したるが、此に就ては孫子が關係して貢獻する所多かりき、

孫武既死、後百餘歲、有孫臏、臏生阿鄄之間、臏亦孫武之後世子孫也、孫臏嘗與龐涓俱學兵法、龐涓既事魏、得爲惠王將軍、而自以爲能不及孫臏、乃陰使召孫臏、臏至、龐涓恐其賢於己疾之、則以法刑斷其兩足而黥之、欲隱勿見、

【講義】孫武が既に死せしより百餘年の後に孫臏と云ふ者ありき、彼れは阿鄄の間に生れたるものなるが、此の兵法家も亦孫武の世を隔てたる子孫なり、孫臏は昔し龐涓と云ふものと諸共に兵法を學びたることあり、此の龐涓は逸早く魏の國に仕官し、惠王より將軍の任命を受くるまでの身分に至りしが、自分は己れの伎倆が到底孫臏に及ばざることを知りしかば、彼れを邪魔に思ひ、何とかして世に立てぬやうにと惡計を運らし、内々使を以て之を魏の國に召び寄せぬ、孫臏は同窓の招きと謂ひ、魏に往くときは便宜もあらんかと、何心なく魏に往きし處、龐涓は、逢つて見れば見る程自分より賢りしかば、彼れを此の儘に置きては到底自分に不利益なるべしと、深く之を惡み、無理に咎を拵へ、法律に當てゝ、彼れの兩足を切斷せし上に入墨を施し、最早不具者として世間に顏の出せぬやうにと心に祈りたり、

【字解】黥、イレズミ、

使者如梁、孫臏以刑徒陰見說

彼等の心に浸みざるは將の罪なり、軍令は已に明かなるに、士卒が軍法の如くに爲さゞるは士官の罪なりと、因つて左右兩軍の隊長たる美人を斬らんとす、呉王は臺の上より此練兵を見物して居たるが、今孫子が軍律に因つて己れの愛妾を斬らんとするを見て大に駭き、取るものも取りあへず使者を以て孫子に命ずるやう、此方は已に將軍が兵を用ふるに堪能なることを領會に及びたれば、此れにて十分なり、此方は此二人の妾あればこそ樂しく今日を送るなれ、他の者にては美味を食ひても旨しと思はぬ程なり、されば此二人の罪を赦して斬らぬやうに賴むなりと、孫子云ふ、臣は已に命を受けて將帥となりし以上、私事にはあらず、將帥軍中に在るときは、君命たりとも受けぬことありと、遂に隊長二人を斬りて兩隊の女兵一同に示し、其次席の婦人を以て隊長となしぬ、斯くて復び合圖の太鼓を打鳴らすに、今度は女兵等一一號令に從ひ左を向き右を向き前を向き後を向き、跪くも起つも盡く法則に叶ひ、敢て笑ふどころではなく、聲一つ出さず、寂として人なきが如くなりき、

【字解】趣、取り急ぐなり、規矩繩墨、規はブンマハシ、矩は曲り金、繩は水盛、墨は墨繩、規律を謂ふ、

於是孫子使使報王曰、兵既整齊、王可試下觀之、唯王所欲用之、雖赴水火猶可也、呉王曰、將軍罷休就舍、寡人不願下觀、孫子曰、王徒好其言、不能用其實、於是闔廬知孫子能用兵、卒以爲將、西破彊楚、入郢、北威齊晉、顯名諸侯、孫子與有力焉、

【講義】斯く女兵は孫子の思ふまゝに爲りしかば、使者を以て呉王に言上すらく、女兵も最早規律も纏まり、歩調も揃ひ、立派の軍隊となりたれば、君王には試みに臺を下り給ひて直に御覽あるべし、今や此女兵は、君王の思召し通り何如なる方面にも何如なる場合にも役に立ち申すべく、火の中水の中なりとも飛込ませたしと思ひ給はゞ飛込み申すべしと、呉

を視よ、左と呼びたるときは左の手を視よ、右と呼びたるときは右の手を視よ、後と呼びたるときは背の方を視よと、婦人等は承知致しましたと答ふ、已に軍令を宣布しければ、之を犯す者を罰するため鈇鉞などの刑具を設け、更めて三たび軍令を讀み聞かせ、五たび之をば説明し、洩れなく一同に申渡せり、

【字解】 子之十三篇、卽ち今に傳はる所の孫子、勒、調練すること、而心、而は汝なり、心は胸なり、鈇鉞、ヲノマサカリ、

於是鼓之右、婦人大笑、孫子曰、約束不明、申令不熟、將之罪也、復三令五申而鼓之左、婦人復大笑、孫子曰、約束不明、申令不熟、將之罪也、既已明而不如法者、吏士之罪也、乃欲斬左右隊長、吳王從臺上觀、見且斬愛姬、大駭、趣使下令曰、寡人已知將軍能用兵矣、寡人非此二姬、食不甘味、願勿斬也、孫子曰、臣既已受命爲將、將在軍、君命有所不受、遂斬隊長二人以徇、用其次爲隊長、於是復鼓之、婦人左右前後跪起皆中規矩繩墨、無敢出聲、

【講義】 已に軍令の申渡し濟みしかば、合圖の太鼓を打鳴らして右向けの號令を下すに、女共は大に笑ひて右を向かず、孫子云ふ、軍令明かならず、申渡し心に浸みざるは將たる者の行屆かざる罪なり、彼等を罰すべきに非ずとて、復も三たび軍令を讀み聞かせ、五たび說明に及びし後、更に左向けとの號令を發して合圖の太鼓を打鳴らすに、女共は又も大に笑ひけり、孫子の云ふやう、軍令が明かならず、申渡しが

すの意、

孫子吳起列傳第五

孫子武者、齊人也、以兵法見於吳王闔廬、闔廬曰、子之十三篇、吾盡觀之矣、可以小試勒兵乎、對曰、可、闔廬曰、可試以婦人乎、曰、可、於是許之、出宮中美女得百八十人、孫子分爲二隊、以王之寵姬二人各爲隊長、皆令持戟、令之曰、汝知而心與左右手背乎、婦人曰、知之、孫子曰、前則視心、左視左手、右視右手、後卽視背、婦人曰、諾、約束既布、乃設鈇鉞、卽三令五申之、

【講義】 孫子、名は武と云ふ者は齊國の人なり、兵法に精通せし所より吳王の闔廬に召されて謁見に及びしに、吳王の云はるゝやう、先生の著はされたる兵書十三篇は此方悉皆之を閲讀したれども、未だ實地を見ざれば物足らぬ心地するなり、何と試みに小規模の練兵を行ふこと出來得べきやと、孫子は出來申すべしと對へければ、吳王は試みに婦人を用ひて練兵するわけに參るべきやと、孫子は差支なしと對へたるに由り、吳王は終に練兵を行はしむることと定め、宮中の美女を召び出しゝに百八十人を得たり、孫子は此の百八十人を二隊に分ち、王の寵愛せる宮女二人を以て各隊の長となし、何れも戟を持たしめ、之に命令を下して曰く、汝等自分の胸と左右の手と背とは定めて存じ居ることと思ふが、果して存じ居るかと、婦人等答へて云ふ、何如にも存じ居りますと、孫子合圖の心得を授けて云ふ、前と呼びたるときは胸

國子之族、至常曾孫和、因自立爲齊威王、用兵行威、大放穰苴之法、而諸侯朝齊、齊威王使大夫追論古者司馬兵法、而附穰苴於其中、因號曰司馬穰苴兵法、

【講義】 其後田常が齊の君簡公を殺す時に立至り、盡く高子、國子の族を滅ぼせり、田常の曾孫なる和と云ふ者、自ら立ちて齊の君となり、其の孫の因齊に至り齊の威王となり、其戰爭をなし威力を示したる仕方は大に穰の法に倣へり、斯くて諸侯も齊に服して參朝することとなり、又齊の威王は大夫等に命じ、古への司馬の兵法を追論し、穰苴の軍略を其中に附錄せしが、之に因りて其全部をば司馬穰苴兵法と曰へり、

【字解】 至常曾孫云々、此の文は誤りにて、當に田和自立、其孫因齊爲齊威王に作るべし、放、倣に同じ、ナラフ、追論、後世より遡りて論究することとなるが、論は此處にては論議して編纂することとなり、

太史公曰、余讀司馬兵法、閎廓深遠、雖三代征伐、未能竟其義、如其文也、亦少褒矣、若夫穰苴區區爲小國行師、何暇及司馬兵法之揖讓乎、世既多司馬兵法、以故不論、著穰苴之列傳焉、

【講義】 太史公曰く、自分は司馬の兵法を讀みたるに、其論ずる所の範圍は廣大に、其思想は深遠にして、三代聖王の征伐と雖も、此司馬法の意義を十分盡し切れぬ程なり、其文字に至りても亦少しく過稱の處あり、彼の穰苴が區々として齊の如き小國の爲に兵を用ふる如き場合に、何として司馬の兵法の禮儀等に及ぶ暇あらんや、世間には既に司馬の兵法多くあることとなれば、之がため兵法のことは論ずることを止め、穰苴の列傳を著はしぬ、

【字解】 閎廓、ひろく、大いなること、竟、ヲハル、盡

他病人を見舞ひ、醫者に掛け藥を與ふるが如き點に至るまで、自身にて心を着け手を下して兵士を撫で勞り、士卒と粮食を平均に分ち、自身の取分は士卒の中最も身體虛弱なる者が食する程の少量なりき、それより三日過ぎて軍隊を整へけるが、病兵も其恩義に感じて出陣せんことを望み、銘々先きを爭ひ、勢ひ善く馳せ出でて戰場に赴けり、晉の軍も斯く齊の士氣の振ひたることを聞き傳へ、鋒を避けて退却に及び、燕の軍も亦聞怖して、黃河を度り解散しけり、穰苴は敵の退却に乘じて追擊し、遂に敵に取られたる國內の故き地域を奪ひ還し、軍隊を引率して凱旋せり、

【字解】 次舍、軍隊の營舍、拊循、なでいたはる、

未至國、釋兵旅、解約束、誓盟而後入邑、景公與諸大夫郊迎、勞師成禮、然後反歸寢、既見穰苴、尊爲大司馬、田氏日以益尊於齊、已而大夫鮑氏、高國之屬害之、譖於景公、景公退穰苴、苴發疾而死、田乞田豹之徒、由此怨高國等、

【講義】 穰苴は、兵を引上げ未だ齊の都に行き着かざる中に、軍卒を除隊し軍令を撤廢し、彼等は此上とも國家に忠勤を勵むべき誓約をなして、各村落に歸り去りぬ、景公は、多くの大夫と城外に出迎へ出征を勞ひて挨拶を行はれたるが、斯くて後、還御の上正殿に出御あり、穰苴に謁見を賜ひて之を大司馬に任ぜり、穰苴は已に大功を立て君の御覺えもめでたかりければ、田氏は日に齊國の尊敬を增しぬ、程經て、齊の大夫鮑氏、高國の徒は、田氏の盛んなるを見て自己の不利益となし、景公に讒言せし處、景公は其言を信じ穰苴を退職せしめしかば、彼れは之が爲に病氣を起して死亡せり、穰苴の一族田乞、田豹の徒は、此れに由りて高國等を怨みたり、

【字解】 寢、表座敷なり、

其後及田常殺簡公、盡滅高子

久之、景公遣使者持節赦賈、馳入軍中、穰苴曰、將在軍君令有所不受、問軍正曰、軍中不馳、今使者馳、云何、正曰、當斬、使者大懼、穰苴曰、君之使不可殺之、乃斬其僕車之左駙馬之左驂、以徇三軍、遣使者還報、然後行、

【講義】　莊賈が殺されしより餘程時過ぎて、景公の派遣せる使者は符節を持ち莊賈赦免の使命を齎して來着せしが、使者は心急ぎし儘馬を駈けさせて軍中に乘入れたり、穰苴は使者に對して、凡そ將たる者、軍に在る時は、君命も猶受けぬことありと曰ひ、又軍正に問うて云ふ、軍中にては馬を馳けさせぬ規定なり、然るに今使者は馬を駈けさせたるが、軍律上何如なる罰にか當ると、軍正對へて斬罪に當ると云ひければ、使者は大に恐怖せり、穰苴は、馬を軍中に駈けさせたる者は斬るべしとは云へ、君の使なれば之を殺すべからずとて、使者の御者と、其車の左にある駙木と、左の副馬とを斬りて三軍の人々に示し、使者を差立て、景公に報告し、斯くて後に戰場に出陣せり、

【字解】　節、ワリフ、使の印として持ち行く物、左駙、御者の身を倚すべき車箱外の木、左驂、車に着けたる四頭の馬の中、左にある副馬、

士卒次舍、井竈飲食、問疾醫藥、身自拊循之、悉取將軍之資粮享士卒、身與士卒平分粮食、最比其羸弱者、三日而後勒兵、病者皆求行、爭奮出爲之赴戰、晉師聞之、爲罷去、燕師聞之、度水而解、於是追擊之、遂取所亡封內故境、而引兵歸、

【講義】　士卒の宿營や井戸や竈、乃至は飲食の事、其

其親、援枹鼓之急、則忘其身、今敵國深侵、邦內騷動、士卒暴露於境、君寢不安席、食不甘味、百姓之命、皆懸於君、何謂相送乎、召軍正問曰、軍法期而後至者、云何、對曰、當斬、莊賈懼、使人馳報景公請救、既往未及反、於是遂斬莊賈以狗三軍、三軍之士皆振慄、

【講義】 軍令も最早定まり、夕方に及びて莊賈やうやく來着せり、穰苴彼が遲參理由を詰りて、何故斯く期限に後れたるかと云ひけるに、莊賈は謝して曰く、拙者の大夫親戚等は送別を爲しくれたり、其れ故留まりたる次第、今更申譯なしと、穰苴曰く、將軍たる者出征の命を受けたる日には己れの家を打忘れ、軍隊に臨みて軍令を發せし以上は其肉親の事を打忘れ、枹を引寄せて攻太鼓を打つとの烈しき場合には己れの身命を打忘るべきものなるに、今や敵國深く吾が國に侵し込み、國內は之が爲に騷動して安き心もなく、士卒は國疆に露營して風雨に暴され、吾が君には寢に就かれても、不眠の餘り輾轉して一つ所に落着き給はず、何如なる物を食せられても、心焉に在らざれば甘味に感じ給はず、斯かる場合なれば何とて悠長に時を過ごすことを得んや、人民の命は皆貴下の職責を盡さるゝと否とに附隨す、然るに人が見送りたれば遲參せりと言はるゝは何事ぞやと、軍正を召び、之に問ふやう、軍法に於て刻限を約しながら後れて來るものには何如なる制裁があると、軍正對へて云ふ、右は斬罪に相當すと、莊賈は之を聞き、懼れて色を失ひ、從者に命じ、早馬にて景公に注進の上救助を願はしめけるが、使者往きたるまゝ未だ歸り來らぬ中に、穰苴は莊賈を斬り殺し三軍の人々に示しければ、三軍の人々は震ひ怖れぬ、

【字解】 不佞、不才なり、援、ヒク と訓ず、枹、鼓のぶち、軍正、軍法を掌る官、

【字解】司馬、司馬は兵を主る官職、田氏の族大司馬たりしが故に司馬穰苴と曰ふ、阿甄、何れも齊の都の名、河上、黄河南岸の地、庶孽、妾腹の子を庶と曰ひ、庶子の子を孽と曰ふ、扞、フセグ、閭伍、閭は村里、伍は隊伍の伍、五人一組の兵、

穰苴既辭、與莊賈約曰、旦日日中會於軍門、穰苴先馳至軍、立表下漏、待賈、賈素驕貴、以爲將已之軍、而已爲監、不甚急、親戚左右送之、留飲、日中而賈不至、穰苴則仆表決漏、入行軍勒兵、申明約束、

【講義】穰苴は既に景公に御暇乞ひを申上げたる後、莊賈と翌日の正午に軍門に於て會合すべき約束をなし置き、穰苴は先づ馬を馳せて軍營に赴き、日時計、水時計を設けて刻限を量り、莊賈の到着を待ち居たり、莊賈は平生より驕り高ぶる癖あり、此の度にも實務に當る將軍は已に軍營に赴きたれば、軍事上何等の差支なかるべし、己れは目附役のことゆゑ、格段に取急ぎて行くに及ばずと考へ、親類や取卷きの連中の送別を受けて、出立もせず酒を飲み居たり、斯かる次第にて正午になりても莊賈は軍營に來らざりしかば、穰苴は日時計の木を仆し、水時計の水を排泄し、軍營の巡見を行ひ兵士の隊伍を整へ、軍令を定めて之を宣言せり、

【字解】旦日、明朝なり、日中、正午なり、立表、木を立てゝ日影を測る、時刻を知る爲なり、下漏、水を器に納れ、管又は穴より少しづつ滴るやうになし、其量に因つて時刻を計る、決漏、水を流し切つてしまふこと、

約束既定、夕時莊賈乃至、穰苴曰、何後期爲、賈謝曰、不佞大夫親戚送之、故留、穰苴曰、將受命之日、則忘其家、臨軍約束、則忘

司馬穰苴列傳第四

司馬穰苴者、田完之苗裔也、齊景公時、晉伐阿甄、而燕侵河上、齊師敗績、景公患之、晏嬰乃薦田穰苴曰、穰苴雖田氏庶孼、然其人文能附衆、武能威敵、願君試之、景公召穰苴、與語兵事、大說之、以爲將軍、將兵扞燕晉之師、穰苴曰、臣素卑賤、君擢之閭伍之中、加之大夫之上、士卒未附、百姓不信、人微權輕、願得君之寵臣、國之所尊以監軍、乃可、於是景公許之、使莊賈往、

【講義】司馬穰苴は田完の後胤なり、齊の景公の時、晉は齊の阿、甄を伐ち、又燕は齊の河上を侵しゝが、此の三箇處の戰ひに於て齊兵は敗北せしかば、景公は之が爲に苦悶せり、宰相の晏嬰は君の心を安んぜんとて田穰苴を推薦して申しけるは、穰苴は田氏の庶流にて賤しき出なれども、其人物は文もあり武もあり、文の方は能く衆人の心を得て之を味方に附け、武の方は勇略ありて能く敵を畏れしむ、されば君試みに之を用ひ給へと、景公はさらばとて穰苴を召出し兵事を對話ありし處、大に心に叶ひしかば彼をば將軍に任命し、兵を引率して燕晉二國の軍を防がしむることとなれり、出陣に先きだち穰苴、景公に願ひ出づるやう、臣の生立は微賤なるに、君には臣を村里の一兵卒より拔擢に及ばれ、大夫の上に置き給へり、何如に今貴き身分となりたりとて本が賤しき者なれば、士卒も歸服せず國民も信頼せず、人に重みなく權力隨つて輕ければ、號令の行はれざる恐れあり、何卒臣下の內、君の寵愛深く國民も尊敬する人を軍目附に爲し給はれまじきかと、景公は彼れの願ひを聽き屆け、莊賈と云ふ者を軍目附とし同行せしめたり、

尤もとなし、彼れを司法官の手に下して其罪を糾彈せしめぬ、李斯は萬一秦王が彼れの才を惜んで宥すこともあらんかと懸念に堪へず、人を以て入牢中の韓非に毒藥を送り、自殺せしめたり、韓非は秦王に謁見して自ら陳辯せんと欲せしも、目的を達せずして空しく死したるなり、秦王は一旦韓非を罪に陷したれども、姑らくして後悔に及び赦免の使を出したれども、已に死したる後にてありき、申子と云ひ韓子と云ひ、何れも書を著はして後世に傳はり、之を學ぶもの少からず、余は獨り韓子が說難の說を著はしながら、游說の效なくして禍を脫るゝ能はざりしことを悲む、

太史公曰、老子所貴道、虛無因應變化於無爲、故著書辭稱微妙難識、莊子散道德放論、要亦歸之自然、申子卑卑、施之於名實、韓子引繩墨、切事情、明是非、其極慘礉少恩、皆原於道德之意、而老子深遠矣、

【講義】太史公曰く、老子の貴びたる所の道其物は虛にして實體なく、無にして思議すべからず、自然に因り變化に應ずる者にして、何等爲す所なき中に千變萬化を行ふ、故に其著書の言辭微妙にして識り難し、莊子は老子道德の理を布衍して勝手の議論をなせども、要る所は亦老子の如く自然に歸納す、申子は勉めて道德を刑名法術に施し、韓非は法律を盾にして事實をきつぱりとさせ、是非の別を明かにす、其結果殘酷にして情愛に乏しきが、皆道德の意に發源したる者なり、而して此等の中に於て意味の深遠なるものは老子なりとす、

【字解】卑々、自ら勉勵すること、引繩墨、墨繩を引きたるやうにと云ふ意、法則づくめを謂ふ、慘礉、殘忍酷薄、

嘆の聲を洩らして曰く、予若し此の人と面會して交際することを得るならば、死すとも思ひ置かじと、李斯は秦王に向ひて、右は韓非の著書なる由を告げしかば、秦王は心に思ふやう、若し今秦より韓を攻むるときは、韓は必ず媾和使を派遣するならん、而して此の使に當る者は韓非に相違なかるべく、斯くして彼れの人物を知らばやとて俄かに韓に兵を向けぬ、韓王は最初韓非を用ひざりしが、危急の場合となりしかば、韓非を使者として秦に派遣せり、秦王は韓非を見て氣に入りしかど、未だ信じて登用するまでには至らざりき、

【字解】秦王、名は政、卽ち始皇帝、韓王、名は安、

李斯姚賈害之、毀之曰、韓非、韓之諸公子也、今王欲幷諸侯、非終爲韓、不爲秦、此人之情也、今王不用、久留而歸之、此自遺患也、不如以過法誅之、秦王以爲然、下吏治非、李斯使人遺非藥、使自殺、韓非欲自陳、不得見、秦王後悔之、使人赦之、非已死矣、申子韓子皆著書傳於後世、學者多有、余獨悲韓子爲說難而不能自脫耳、

【講義】李斯、姚賈の二人は韓非が秦王に信用せらるゝことを自己に不利益なりと考へしかば、其防禦策として之を誹りて云ふやう、韓非は韓の公子の一人なり、我が秦の人にはあらず、今大王は列國を幷呑せんとする志を抱き給ふことなれば、韓に取りても敵たる地位に在り、然るに韓非は韓の公子なる以上、一時は兎も角、究竟は韓の爲に働きて秦の爲に働かざるは、此れ人情として然るべき事なり、今大王に於て彼れを用ひ給はず、久しく抑留し之を歸し給はゞ、是れ他日に害を遺すものなり、故に重罪に宛てゝ之を誅するが尤も得策なるべしと、秦王は此の意見を

之士、不可不察愛憎之主而後說之矣、夫龍之爲蟲也、可擾狎而騎也、然其喉下有逆鱗徑尺、人有嬰之、則必殺人、人主亦有逆鱗、說之者、能無嬰人主之逆鱗、則幾矣、

【講義】 故に彌子瑕の行爲は最後に於ても最初と異りたる所あらざるに、其初め衞君が賢なりと爲したる事柄が後日に至り罪となりたる所以は他なし、愛憎が非常に變化せし爲なり、故に人君の寵愛を有すれば、其智慧が旨く坪にはまりて一層親近せられ、人君の憎惡を受くれば、其罪が坪にはまりて一層疎外せらる、故に諫言をなし、若しくは意見を陳べんと欲する人士は、其說を進むるに先きだちて豫め人君の愛憎の在る所を見定め置き、其上にて游說を行はねばならぬなり、夫れ龍と云ふ蟲は、飼ひ狎して其上に乘ることも出來得るなり、然しながら唯一つ恐るべきことは、龍の咽下に直徑一尺計りなる逆向の鱗あり、萬一人ありて此の鱗に觸るゝときは、龍怒りて立どころに其人を殺す、是れは獨り龍のみと思ふ勿れ、人君にも亦龍の逆鱗と同じき急所あり、游說を爲すもの亦能く注意して、人君の逆鱗に觸れ其怒りを挑發せざるやうに出來得れば、先づ成功に近し、

【字解】 愛憎之主、主の愛憎と云ふに同じ、嬰、フルルなり、

人或傳其書至秦、秦王見孤憤五蠹之書曰、嗟乎、寡人得見此人、與之游、死不恨矣、李斯曰、此韓非之所著書也、秦因急攻韓、韓王始不用非、及急、迺遣非使秦、秦悅之、未信用、

【講義】 韓非の著書を持ち行きて秦に至りし者あり、秦王は其中の孤憤、五蠹等の篇を讀みて、作者の誰れなるかを知らざりしも深く渴仰の念を生じ、感

之法、竊駕君車者、罪至刖、既而彌子之母病、人聞、往夜告之、彌子矯駕君車而出、君聞之而賢之曰、孝哉、爲母之故而犯刖罪、與君游果園、彌子食桃而甘、不盡而奉君、君曰、愛我哉、忘其口而念我、及彌子色衰而愛弛得罪於君、君曰、是嘗矯駕吾車、又嘗食我以其餘桃、

【講義】昔し彌子瑕と云ふもの衞君の寵愛を蒙れり、元來此の國の法律に據るときは、許可を經ずして私に君の車に乘る者は足を斬るの刑に處することと爲り居れり、然るに或る時彌子瑕の母病氣に罹りけるが、或る人之を聞き知りて、夜中彌子瑕の家に往きて告げ知らせぬ、彌子瑕は僞りて君命なりと稱し、君の車を引出さしめ、之に打乘りて母の病氣を見舞へり、衞君は此の事を聞かれ、反つて彌子瑕を賢人なりとせられ、言はるゝやう、彼は何たる孝心ぞや、母の病氣を氣遣ひ、足を斬らるゝ罪を犯して、吾が車に乘る程に取り急ぎしよと、又或る時、彌子瑕は衞君に從ひて果園に遊び、桃の實を食ひし處、味ひ善かりしかば、食ひ盡さずして餘りの分を衞君に奉れり、衞君の言はるゝやう、扨も吾れを愛することよ、己れの口をも打忘れて此方の事を心懸くる殊勝さよと、其後彌子瑕の男色衰へ、寵愛も減ずるに及んで衞君の咎を蒙りしが、此の時衞君の言に、此の者以前余の命令なりと僞りて吾が車に乘りたることあり、又余に己が食ひ缺の桃を食はせたる不埒の奴なりと、

故彌子之行未變於初也、前見賢而後獲罪者、愛憎之至變也、故有愛於主、則知當而加親、見憎於主、則罪當而加疏、故諫說

つて疑へり、

【字解】故此二子、故は恐らく衍文ならん、能仕、仕は士なり、所設、設字にては意味をなさず、宜しく韓非子に從つて恥に作るべし、

昔者鄭武公欲伐胡、迺以其子妻之、因問群臣曰、吾欲用兵、誰可伐者、關其思曰、胡可伐、迺戮關其思曰、胡兄弟之國也、子言伐之何也、胡君聞之、以鄭爲親己、而不備鄭、鄭人襲胡、取之、此二說者、其知皆當矣、然而甚者爲戮、薄者見疑、非知之難也、處知則難矣、

【講義】昔し鄭の武公と云ふ君、胡の國を伐たんと欲せしかば、先づ敵に油斷を爲さしむるため、己れの女を胡君に嫁入らせて胡君の機嫌を取り、倘心を弛ませんとて、或る時群臣に問うて曰く、吾れ戰爭を試みんと思へるが、何れの國を伐たば宜しかるべきかと、關其思と云ふもの進み出でて對ふるやう、胡こそ伐つべけれと、武公怒つて關其思に向ひ、胡は吾れと緣家の間柄にして兄弟の好みある國なり、然るに其方之を伐てと云ふは何事ぞ、不埒千萬なりとて之を誅戮せり、胡君は此事を傳へ聞き、鄭は自國に好意ありと思ひ、之に對しては一向用心せざりしかば、鄭の武公は其計、圖に中り、不意に胡を攻めて之を取りぬ、隣人の父と關其思との二人は其說何れも當を得て、胡は伐つべかりしなり、墻は築くべかりしなり、然れども共に不利益を來し、重きは誅戮に遇ひ、輕きは疑惑を蒙れり、されば智識を以て事を見定むるは國難に非ずして、智識を出す場合を擇ぶことが容易に非ず、

【字解】兄弟之國、姉の黨を婚兄弟と曰ひ、壻の黨を姻兄弟と曰ふ、

昔者彌子瑕見愛於衞君、衞國

君の機嫌善き折を見て又諫め、以て君に逆らはず、君を感悟せしめんとするに、敢て攻擊的の議論をなさず、斯くて先づ先方の機嫌を取り置きたる後、十分吾が智力辯才を振ふべし、此れ吾が相手たる人君貴人をして吾れを親しみ近づけ疑心を挾まざしむるの手段なるが、實に辯説を盡すの困難なる點なり、夫れ久しく時日を經るの間に君主との折合ひも親密となり、何程立入りたる計を運すも疑はるゝことなく、何程正面より諫爭をなすも罪を受くることなく、利害を明白に裁斷して功を立て、是非の有りのまゝに指示して名譽を得、此の如くにして君は疑はず罪せず、臣は功を致し力を飾るにも至らば、其れこそ游説の成功せしなり、

伊尹爲庖、百里奚爲虜、皆所由干其上也、故此二子者、皆聖人也、猶不能無役身而渉世、如此其汙也、則非能仕之所設也、宋有富人、天雨墻壞、其子曰、不築、且有盜、其鄰人之父亦云、暮而果大亡其財、其家甚知其子、而疑鄰人之父、

【講義】昔し殷の湯王の賢宰相なる伊尹は初め料理人となり、又秦の穆公の賢宰相なる百里奚は俘虜となりたるが、是れ皆君主に任用を求むる手段として此に出でたるなり、さすれば此の二人は孰れも聖人なるに、それすら身役して世を渉るに此の如く汚れたる事を爲さゞるを得ざりき、然るときは智能の士に於て決して恥づべき次第に非ず、宋に一人の財產家ありけるが、或る時降雨の爲め外圍の土屏崩れて破損せり、其子の云ふやう、若し築き直さゞれば盜難あるやも知れずと、隣家の親父も無用心なりとて注意を與へぬ、然る處案に違はず、其夜賊忍び入り、少からざる貨財を奪ひ去りしに、彼の財產家の人々は、己が息子をば賢しとて譽め稱へたれども、隣家の親父の屏の壞れたるに氣を附けたる點頗る怪しとて却

其敵怒之、自多其力、則無以其難概之、規異事與同計、譽異人與同行者、則以飾之無傷也、有與同失者、則明飾其無失也、

【講義】凡そ游說に於て肝要とする所は、第一に相手の尊敬する點を知り、彼れの爲に其事を立派に言ひ成し、其虛榮心を滿足せしむると共に、相手たる人の心中に恥づる點を知り、彼れの爲に回護の口實を作り、恥づべき點を消し、不愉快の念を散ぜしむるにに在り、此れに就いて心得置かねばならぬ件々は、彼れ自ら己れの計畫を以て智なりとなすときは、前に失敗したる事等を舉げて之を困らせてはならず、彼れ自ら其決斷を以て勇氣ありとするときは、之に盾突きて怒らしてはならず、彼れ自ら其力をえらしとするときは、力の及ばざる點などを舉げて其腰を折りてはならず、別事にて現在我が相手の畫策と同一なる者は之を驚嘆し、他人にて我が相手と同一の行ひある者は之を譽め、（若し其人と汚行の同じきものあるときは、）之を取繕ひて無疵となすべく、若し其人と失敗の同じきものあるときは、明白に其失錯を飾るべし、

【字解】所醜、醜は猶羞と云ふが如し、自知其計、知の字は名詞として用ふ、智に同じ、概、抵抗する意、規、驚視するなり、則以飾之、韓非子には此句の上に有與同汙者の五字あり、

大忠無所拂辭、悟言無所擊排、迺後申其辯知焉、此所以親近不疑、知盡之難也、得曠日彌久、而周澤既渥、深計而不疑、交爭而不罪、迺明計利害以致其功、直指是非以飾其身、以此相持、此說之成也、

【講義】大忠は君を善に導く以外に何等の意志なきを以て、君が初め諫言に従はざるときは其まゝ退き、

ふが如し、

故曰、與之論大人、則以爲間己、與之論細人、則以爲鬻權、論其所愛、則以爲借資、論其所憎、則以爲嘗己、徑省其辭、則不知而屈之、汎濫博文、則多而久之、順事陳意、則曰怯懦而不盡、慮事廣肆、則曰草野而倨侮、此說之難、不可不知也、

【講義】人君の游說者に於ける前述の如くなるゆゑ、之に向つて大人卽ち高位の人の事を論評して短處を擧ぐるときは、人君たる者、右は高位の者を論ずるにあらずして間接に己れを誹謗する者となし、之に向つて微賤の人を評論して、其の用ふべきことを主張するときは、彼れ人君の權を賣るとなし、人君の寵愛する者を論ずるときは、彼れを利用して己れに取入るとなし、人君の憎惡する者を論ずるときは、己れを試みて之を嫌ふ程度を知らんと欲する者となす、辯論の仕方に至りても、其說の本筋のみを一直線に述べて、成るべく餘計の文句を言はざるときは、智識の缺乏せる者として之を辱しむべし、說の範圍廣く引證多きときは、多辯にして時間潰しとせらる、事柄のまゝに意見を陳べて大言壯語せざるときは、臆病にして十分に事情を盡さゞるものとせられ、事件に關する見込みを開陳するに放縱なるときは、田舍者の不作法とせらる、以上は實に游說の困難なる所以にして、心得ねばならぬ事なり、

【字解】大人、卿大夫を指す、細人、小人と云ふに同じ、位を以て謂ふ、微賤の者を謂ふ、借資、借はカル、資は裨益となすべきもの、屈、屈辱なり、久、時間長くして怠屈するの意、草野、草深き田舍、

凡說之務、在知飾所說之所敬、而滅其所醜、彼自知其計、則無以其失窮之、自勇其斷、則無以

而有功、則德亡、說不行而有敗、則見疑、如是者身危、夫貴人得計、而欲自以爲功、說者與知焉、則身危、彼顯有所出事、迺自以爲也、故說者與知焉、則身危、彊之以其所必不爲、止之以其所不能已者身危、

【講義】元來何如なる事柄も祕密を保つに因りて成就し、何れの場合に於ても言語の漏洩するに因りて失錯を來すが故に、人君は孰れも之を警戒せざるものなし、然るに游說者が人君の機密を知り、自身は之を洩すが如き事なしとするも、人君との談話中、偶然人君の匿せる事柄に及ぶことあり、然るときは人君は彼れを以て密事を知る者とし、他人にも或は之を洩さんかとの疑ひを抱くべきが故に、其儘には見逃すまじ、されば其身危險なり、又貴人に過失の端緒あるに當り、游說者が明かに善き議論を言ひ立て、貴人の惡しき點を押し究むるときは其身危し、游說者と人君との情義未だ深からず、其恩澤未だ厚からざるに、智慧を搾りて說くときは、固より信用薄弱なるが爲め、其說が效を奏して功ありとも、人君は之に對して有難みを感ぜざるなり、若し其說が無效にして人君失敗するとせんか、人君は反つて游說者が其失敗の原因たる事實と何等かの關係あればこそ豫言せし者なれと疑ふべし、此の如きは其身危し、夫れ貴人が他人より一策を得ることあり、是れをば自分の智慧より出でたるが如くにして己れの功と爲さんとするに方り、游說者が其出處を知るときは、邪魔とせらるるが故に其身危し、人君が公然或事を行ふも、裏面には自己の爲を謀るなり、游說者これを與り知るときは油斷ならずと思はるゝが故に其身危し、又到底相手の力に及ばざる事を無理に行はしめんとし、又騎虎の勢ひ中止する能はざることをば强ひて已めしめんとするときは、聽かれざるは勿論、其怒りを招くことゆゑ其身危し、

【字解】周澤、周はめぐむ、澤はうるほす、恩澤と云

説之以名高、則見無心而遠事情、必不收矣、所説實爲厚利、而顯爲名高者也、而説之以名高、則陽收其身、而實疏之、若説之以厚利、則陰用其言、而顯棄其身、此之不可不知也、

【講義】若し吾が説かんとする相手の人君が、高尚の態度を示し、名譽の慾望を遂げんと欲し、譬へば堯舜の如き古への聖王を眞似んとする者なるに、吾れ富國强兵と云ふが如き福利を以て之に説くときは、人君より俗物と思はれ、下等社會と視做され、棄て遠けらるゝに相違なし、若し吾が説かんとする相手の人君が中心功利を得んとする者なるに、吾れ高尚名譽の事を以て之に説くときは、人君より沒常識にして世間に疎き者と思はれ、收用せられざるに相違なし、吾が説かんとする相手の人君が、内々は福利を求めながら表面には名聞を釣るべき行ひを爲す者なるに、吾れ名聞を以て之に説くときは、人君は兎も角外部に見はれたる己が意志に叶へる廉を以て、形式上其人を收用すれども、己が目的には無用なるが故に、事實上に於ては其人を疎ずべし、さればとて吾れ人君の胸中を見拔き、福利の事を之に説くときは、人君は己が志に適中するが故に、内實は其説を採用すれども、飽くまで道德の美名を飾らんとする處よりして、游説者其人を公然排斥して己れは功利を欲せざる樣子を粧ふべし、此等の事は知らで叶はぬことなり、

【字解】名高、名は聖君賢主の稱、高は世人より高尚と視らるゝこと、見遇、二字ともに游説者の受動詞なり、下節、節は猶程度と云ふが如し、

夫事以密成、語以泄敗、未必其身泄之也、而語及其所匿之事、如是者身危、貴人有過端、而説者明言善議以推其惡者、則身危、周澤未渥也、而語極知、説行

其權能を謂ふ、蠧、木を蝕する害蟲、介冑、介は鎧、冑は兜、孤憤云々、此れ皆韓非著はす所の篇名なり、孤憤は孤立剛直にして世に容れざることを憤るなり、五蠧は國を蠧するもの五あるを言ふ、內儲は明君が術を執りて臣下を御することを言ふ、利の己れに在るを以て之を內と曰ふ、外儲は明君が臣下の言行を觀聽して其賞罰を斷ずるを言ふ、賞罰は彼れに在り、故に外と曰ふ、說林は種々なる事を說き、其多きこと林の如くなるを以て之を名づけ、說難は游說の難きを論ず、

說難曰、凡說之難、非吾知之有以說之之難也、又非吾辯之難能明吾意之難也、又非吾敢橫失能盡之難也、凡說之難、在知所說之心、可以吾說當之、

【講義】說難には左の如く言へり、凡そ人君に說くの困難なることは何如なる點に在るかと云ふに、遊說者が是非利害の智識を以て之を悟すことが困難なるにはあらず、是れとても決して容易の業とは謂はれまじきも、さまでには困難ならざるなり、又游說者が辯口を以て十分己が意志を明かにし、先方に理會せしむる事の困難なるにはあらず、是れ亦決して容易の業とは謂はれまじきも、さまでには難からざるなり、又智慧の有らん限り、辯舌の續かん限り、遠慮會釋なく縱橫無盡に其說を盡すの困難なるにもあらず、是れ亦決して容易とは謂はれまじきも、さまでは難からざるなり、凡そ君に說くの困難なる點は、相手たる人君の心情を看破し、吾が說を以てきつぱり其心情にはまる樣になすことなり、

【字解】吾、游說者其人の代名詞なり、知、名詞として用ひたり、說之、之は游說の目的たる人物を謂ふ、此處にては卽ち人君なり、失、佚に同じ、所說、吾が說く所の相手、

所說出於爲名高者也、而說之以厚利、則見下節而遇卑賤、必棄遠矣、所說出於厚利者也、而

なり、
於是韓非疾治國不務修明其法制、執勢以御其臣下、富國彊兵、而以求人任賢、反擧浮淫之蠹而加之於功實之上、以爲儒者用文亂法、而俠者以武犯禁、寛則寵名譽之人、急則用介冑之士、今者所養非所用、所用非所養、悲廉直不容於邪枉之臣、觀往者得失之變、故作孤憤、五蠹、内外儲、說林、說難、十餘萬言、然韓非知說之難、爲說難書甚具、終死於秦、不能自脫、

【講義】是に於て韓非は、自國の政治が其法律制度を整理し明白にし、權力を握りて臣下を使ひこなし、國を富まし兵を強くして、人材を求め賢者に任ずることを心掛けず、反つて輕薄淫靡にて國家を害する小人を登庸して、之を功勞あり實績ある者の上に置くことを忌々しく思ひしが、彼れの考ふる所によれば、儒者は文學を盾にして法律の邪魔をなし、俠士は武力を用ひて禁制を犯しつゝあり、一體時局穩かなるときは儒者の如き名譽の人を大切にするなれども、危急の時には武士を用ひざるべからず、今は危急の時なるに、國家が養ふ所の人物は用ふべき武士に非ず、國家の用ふべきは武士にして、現在養ふ所の儒者の如き者に非ずと、彼は廉直の人が邪曲なる執政に容れられざることを悲み、古代の國君に政事の得失に相異あることを觀察し、其結果として孤憤、五蠹、內外儲、說林、說難等の篇凡べて十餘萬字の文章を作れり、韓非は遊說の困難なることを知り說難の論を立て甚だ完備せりと雖も、終に遊說の效なくして秦に命を失ひ、自ら其禍を脫るゝ能はざりき、

【字解】韓王、名は安、執勢、勢は君主の地位、隨つて

○申不害者、京人也、故鄭之賤臣、學術以干韓昭侯、昭侯用爲相、內修政敎、外應諸侯、十五年、終申子之身、國治兵彊、無侵韓者、申子之學、本於黃老而主刑名、著書二篇、號曰申子、

【講義】申不害は京の人なり、以前は鄭の國に於て身分の賤しき臣下なりしが、法術を學びて韓の昭侯に採用を求め、昭侯は之を用ひて宰相となせし處、內は政治敎育を修め外は列國と應對し、申子の一生を終ふるまで國は治まり兵は強く、他國より韓を侵すものなし、申子の學問は黃帝、老子に本づき、刑名主義を主とせり、書二篇を著はし、號して申子と曰へり、

【字解】術、法術を謂ふ、法は今日の謂はゆる法律規則にして、術を駕馭使用する手段なり、刑名、刑は形の意に用ふ、君主が臣下に言責を負はしめ、必ず其結果を實現せしむる術を謂ふ、黃老、黃帝と老子、道敎の由りて出づる所なり、

○韓非者、韓之諸公子也、喜刑名法術之學、而其歸本於黃老、非爲人口吃、不能道說、而善著書、與李斯俱事荀卿、斯自以爲不如非、非見韓之削弱、數以書諫韓王、韓王不能用、

【講義】韓非は韓の末流の公子なり、刑名法術の學を好みしが、其歸着する所を觀るに、黃老に本づけるものなり、非は生れつき吃なりければ、言論することを出來ず、其結果善く書を著はせり、後に秦の始皇の宰相となりたる李斯と倶に荀卿を師とせしが、斯は自ら非に及ばずと考へぬ、非は自國の韓が他國の爲に領土を削られ衰弱するを見て屢〻上書して韓王を諫めたれども、韓王は用ふる能はざりき、

【字解】吃、ドモリ、道說、道は言ふなり、荀卿、荀子

【字解】 離辭、離は陳るなり、剽剝、疵をさらけ出して攻撃すること、洸洋、海水の際限なく、ひろびろしたる貌、

楚威王聞莊周賢、使使厚幣迎之、許以爲相、莊周笑謂楚使者曰、千金重利、卿相尊位也、子獨不見郊祭之犧牛乎、養食之數歲、衣以文繡、以入太廟、當是之時、雖欲爲孤豚、豈可得乎、子亟去、無汚我、我寧游戲汚瀆之中、自快、無爲有國者所羈、終身不仕、以快吾志焉、

【講義】 楚の威王は莊周の賢人なることを聞き知り、使に鄭重なる禮物を持たせて迎へさせ、宰相となすべき由を條件とせし處、莊周笑ひて楚王の使者に物語りけるは、千金と云へば重き利なり、大臣宰相と云へば尊き位なり、誠に結構のやうなれども、郊の祭に供ふる犧の牛は誰れしも見る所なるが、足下に限りて見たることなきか、若し見たりとせば、金や位をうかと貰へぬことが解せらるゝならん、此の犧の牛と云ふものは、何年かの間之を飼養したる上、模樣や縫箔のある衣を着せ、太廟の中に入れる次第なり、斯く屠られて神前に供せらるゝ時に當り、人より虐待せらるゝ小豕となりたしと思ふとも、何とて叶ふべきや、足下は早く立去られよ、吾輩を汚し給ふ勿れ、吾輩は立派なる處に伴れ行かれて危險を受くるよりは、寧ろ汚き溝の中に遊び戲れて自ら愉快を感ずる方が優なり、國主などに此自由の身體を拘束せらるゝことは致し申さず、一生仕へずして吾が志を快くせんのみと、

【字解】 幣、帛なり、古へは帛を以て贈物とす、人を聘するときは必ず先づ物を贈るは禮なり、郊祭、城外の地にて天を祭るの儀なり、文繡、文は綾模樣、繡は縫取り、孤豚、小さき豚、亟、急なり、汚瀆、汚は濁なり、瀆は渠なり、

○莊子者、蒙人也、名周、周嘗爲蒙漆園吏、與梁惠王齊宣王同時、其學無所不闚、然其要本歸於老子之言、故其著書十餘萬言、大抵率寓言也、作漁父、盜跖、胠篋、以詆訿孔子之徒、以明老子之術、畏累虛、亢桑子之屬、皆空語無事實、

【講義】莊子は蒙の人なり、名は周、彼れは嘗て蒙の漆園の役人となりしことあり、梁の惠王、齊の宣王と時代を同じうせり、彼れの學問は廣博にして、何如なる書も目を通さゞるものなかりき、然れども學問の要旨は老子の說を根柢として、其範圍を出でず、故に其著書は十餘萬字の大部なれども、大抵は皆寓言とて人物などを假に設けて對話を揭げたる作り物語なり、漁父、盜跖、胠篋等の篇を作り孔子の徒を惡口し、此手段により老子の道を世に明かにせり、又畏累虛、亢桑子等の篇は何れも空言にて、跡方なき事なり、

【字解】蒙、宋に屬せり、梁惠王齊宣王、倶に孟子の遊說したる國君なり、闚、窺ふなり、寓言、寓は寄するなり、他の人、他の事に寄せて吾が本意を示す、詆訿、ソシルなり、

然善屬書離辭、指事類情、用剽剝儒墨、雖當世宿學、不能自解免也、其言洸洋自恣以適己、故自王公大人不能器之、

【講義】然れども善く文を書き綴り辭を述べ事を指し示し情を類合して、孔子や墨子を攻擊するに至りては、當時の耆宿とも謂ふべき大學者と雖も、彼れと論戰して其鋒先を逃るゝ能はざりき、莊周の言說は洸洋と大海の廣渺たるやうに取止めなく、勝手次第に述べたて、自己の快感に滿足したるものなれば、上は王公大人より、彼れの器量人たることを發見する能はざりしなり、

合、合七十歲、而霸王者出焉、或曰、儋、卽老子、或曰、非也、世莫知其然否、老子隱君子也、老子之子名宗、宗爲魏將、封於段干、宗子注、注子宮、宮玄孫假、假仕於漢孝文帝、而假之子解、爲膠西王卬太傅、因家于齊焉、

【講義】 孔子の死せし時より百二十九年の後、史記に、周の太史儋と云ふもの秦の獻公に見えて曰く、始め秦は周と一たび合ひて離れ、離れてより五百歲にして復び合ひ、合ふこと七十歲にして霸王たる者出でんとあり、或人は此の儋が卽ち老子なりと曰ひ、或人は儋は別人にして老子に非ずと曰ふ、而して儋が果して老子なるか、それとも別人なるかに就いては世に之を知るものなし、之を要するに老子は隱君子なり、已に隱君子なる以上、正確なる事實の傳はらざることは固より當然なりとす、老子の子は名を宗と曰へり、宗は魏の將軍となりて段干と云ふ土地に領分を賜はれり、宗の子を注と曰ひ、注の子を宮と曰ひ、宮の玄孫を假と曰ふ、假は漢の孝文帝に仕官せしが、其子の解は膠西王卬の太傅となり、其まゝ齊の地に住居せり、

【字解】 段干、魏の都會の名、

世之學老子者、則絀儒學、儒學亦絀老子、道不同、不相爲謀、豈謂是邪、李耳無爲自化、淸靜自正、

【講義】 世の中の老子を學ぶ人は儒學を賤みて之を除物とし、儒學をなす者も亦老子の道を賤みて之を除物となす有樣なるが、道同じからざれば相爲に謀らずとは、何と斯かる事を指すならんか、李耳卽ち老子は何等作爲する所なくして民自ら感化し、淸淨平靜にして民自ら正道に歸せり、

【字解】 絀、シリゾクル也、道不同不相爲謀、主義學說が同じからざれば互に相談せぬものなりといふ、

彊爲我著書、於是老子迺著書上下篇、言道德之意、五千餘言而去、莫知其所終、或曰、老萊子亦楚人也、著書十五篇、言道家之用、與孔子同時云、蓋老子百有六十餘歲、或言二百餘歲、以其修道而養壽也、

【講義】老子は道德を修め、其學問は自ら己れの優れたる處を隱して名の人に聞えざることを專一の心掛とせり、周に居ること久しかりしが、其衰へたるを見てあぢきなしと思ひ、周を去りて函谷關に至りしに、關守の尹喜と云ふもの老子に請ひけるは、先生は是れより隱遁し給ふならん、せめては先生の道のみにても世に殘し置きたきものなり、何卒拙者の爲に書を著はし給へと、是に於て老子は一部の書物上下篇を著はし、道德の意義を論じたるが、其文字は五千餘りなり、斯くて立ち去りたるまゝ、何れの土地にて歿したるか、之を知るものなかりき、或人の說に、老萊子も亦楚の國の人にして書十五篇を著はし、道敎家の功用を述べたるが、彼れは孔子と同時代の人なりきと、蓋し老子は百六十餘歲まで生存せり、或は二百餘歲とも云ふ、但し此の如く長命を保ちたるは、彼れが道を修めて壽命を養ひたるを以てなり、

【字解】道德、老子の謂はゆる道德は儒敎の道德と異りて、虛無淸淨を指す、迺、乃に同じ、關、散關とも云ひ、函谷關とも云ひ、玉門關とも云ふ、書上下篇、老子道德經を謂ふ、關令尹喜、關令は函谷關を守る役人、尹は姓、喜は名、老子が周より來りし時、喜は紫氣の關に浮ぶを見て神人の至るべきことを知りしが、老子果して靑牛に乘じて通過せりと云ふ、尹喜にも亦關尹子と云ふ著書あり、

自孔子死之後、百二十九年、而史記周太史儋見秦獻公曰、始秦與周合而離、離五百歲而復

すとのことなるが、其れと同じく、君子は立派なる德を持ちながら容貌は愚物の如しと、されば足下は、其慢心と色々の欲望とを取り除くべし、其勿體振と物に惑溺する念慮とを取り除くべし、是れは孰れも足下に益なきものなり、拙者が足下に告げ申す點は此の位の言のみと、

【字解】老子、正義に云ふ、身の長八尺八寸、黄色にして眉美しく耳長く目大いに額廣く齒疎に口は方形にして唇厚し、其母八十一年にして生むと、楚苦縣、苦縣は本と陳に屬す、春秋の時、楚、陳を滅ぼせしかば、苦も又楚に屬せり、故に楚の苦縣と云ふ、守藏室、藏書の室なり、蓬累、蓬はよもぎ、累はころがり行く貌なり、

孔子去、謂弟子曰、鳥吾知其能飛、魚吾知其能游、獸吾知其能走、走者可以爲罔、游者可以爲綸、飛者可以爲矰、至於龍、吾不能知其乘風雲而上天、吾今日見老子其猶龍邪、

【講義】孔子は老子の處を辭し去られたる後、隨行の門人に語らるゝやう、鳥は吾れ其能く翔り飛ぶものなることを知る、魚は吾れ其能く水を泳ぐものなることを知る、獸は吾れ其能く野山を走るものなることを知る、走る獸は網を作つて捕ふることが出來、水を泳ぐ魚は釣絲を拵へて釣ることが出來、空を翔る鳥は絲矢を製して射落すことが出來得れども、龍に至りては吾れ之を知る能はず、何となれば出沒變化自在にして、風や雲に乘りて天に上り、測るべからざるを以てなり、吾れ今日老子を見るに、奥底の窺ひ知れざること宛も龍の如しと云はんかと、

【字解】綸、釣絲、矰、絲を矢にからみつけて鳥を捕るなり、

老子修道德、其學以自隱無名爲務、居周久之、見周之衰、迺遂去至關、關令尹喜曰、子將隱矣、

ざる勇氣なき者ならん、然れども又彼れが諫言をなして君の顏色を犯したるが如きは、此れ謂はゆる進んでは忠を盡さんことを思ひ、退いては過を補はんことを思ふと云ふものならん、若し晏子が現代に存生せば、余は彼れの爲に馬前に立ち鞭を執るが如き賤しき身分をも甘んじて彼れに仕へんと慕はしく思ふ所なり、

【字解】伏莊公尸、崔杼、莊公を弑す、此所謂、此の字の下に豈の字を略せり、

老莊申韓列傳第三

老子者、楚苦縣厲鄉曲仁里人也、姓李氏、名耳、字伯陽、謚曰聃、周守藏室之史也、孔子適周、將問禮於老子、老子曰、子所言者、其人與骨皆已朽矣、獨其言在耳、且君子得其時則駕、不得其時則蓬累而行、吾聞之良賈深藏若虛、君子盛德容貌若愚、去子之驕氣與多欲、態色與淫志、是皆無益於子之身、吾所以告子、若是而已、

【講義】老子は楚の苦縣、厲鄉曲仁里の人なり、姓は李氏、名は耳、字は伯陽、謚して聃と曰ふ、周の圖書室の記錄官なり、孔子、周に赴かれしとき、禮を老子に問はんとせしに、老子の曰く、足下の言ふ所の唐虞三代は、其人の身體も骨も已に朽ちて今の世の役に立たず、只空言だけが存在するのみにして何等の價値なし、其上君子たる者、苟くも時を得て用ひらるゝときは馬車に乘る身分ともなれど、不幸にして時を得ざれば流浪して世の中をさまよひあるく、吾が聞く所に據れば、身代のよき商人は品物を店先きへ列べずして深く奧に仕舞ひ込み、外見は空虛のやうにな

となしぬ、

【字解】牧民云々、管子に載する所なり、晏子春秋、晏子の著書、七十篇より成る、次、次第をつけて書き述べること、軼事、逸事に同じ

管仲世所謂賢臣、然孔子小之、豈以爲周道衰微、桓公既賢、而不勉之至王、乃稱霸哉、語曰、將順其美、匡救其惡、故上下能相親也、豈管仲之謂乎、

【講義】管仲は世人の謂はゆる賢臣なり、然れど孔子は之を小さき人物なりと宣へり、何如樣是れは當時周の王道が衰微して最早統一の力なく、桓公は賢君なれば、隨分次第に因りては周に代りて王者となり得るに、管仲は此の如き時に遇ひ此の如き君に用ひられながら、桓公を勵まして王者とならしめず、反つて霸主の名を成さしめたるを以て、彼を小人物となし宣ひたるならんか、古語に曰く、君に美事あるときは順つて之を行ひ、惡事あるときは之を正して過ちを救ふ、故に上下能く相親むと、是れは管仲の如き人を謂ふならん、

【字解】孔子小之、論語八佾篇に、子曰、管仲之器小哉とあり、豈、この豈はもしくは、それなどの意にて、少しく疑ひて語勢を强むる副詞なれば、反語にあらず、語曰、孝經、事君章に出づ、

方晏子伏莊公尸、哭之成禮、然後去、豈所謂見義不爲無勇者邪、至其諫說犯君之顏、此所謂進思盡忠、退思補過者哉、假令晏子而在、余雖爲之執鞭所忻慕焉、

【講義】晏子は其主君の莊公が虐臣に弑せられたるに賊を討たんともせず、宮中に入りて君の死骸に打伏し、聲を放ちて哭泣し、一通りの禮を行ひて去りたる折など、是れ謂はゆる義を見ながら進んで實行せ

晏子薦以爲大夫、

【講義】晏子は齊の宰相となり、或る時外出しけるに、其御者の妻、己が夫の樣子を見んものと、門の隙間より窺きけるに、其夫は、車の上に翳すべき大なる絹傘をかゝへ持ち、四頭の馬に鞭をあてゝ、吾れこそは宰相の御者なれと言はんばかりに意氣揚々として頗る得意氣なりき、程過ぎて御者は主人に附いて歸宅しけるに、妻は突然離緣を望みたり、御者は不思議に思ひ、其仔細を尋ぬるに、妻の曰く、御主人の晏子は身の丈六尺にも足らぬ小男なれども、其身は齊國の宰相となり、名聲は列國にも響き渡れり、然るに妾は今其御外出の樣子を拜見するに、何となく御思慮深くおはしまし、常に人に向ひて卑下せらるゝ樣に見受けらる、それに御身は、身の丈八尺もある立派なる體格を持ちながら賤しき御者となり、剰へ恥ぢとも思はず、滿足して居らるゝはあさましとや云はん、腑甲斐なしとや云はん、妾は愛想も盡き果てたれば離緣を願ふにこそと、御者も妻に辱められて成程と氣附きしかば、爾來是れ迄の態度を改め、自ら己れを押へて謙遜の人となりぬ、晏子は彼れの樣子が遽かに變りたることを訝り、其譯を尋ねたる處、御者は包み隱さず事實を答へければ、晏子も彼れが過ちを改めしことを奇特に思ふと共に、其眞率の氣象を愛し、物の役に立つことあらんとて大夫に推薦せり、

太史公曰、吾讀管氏牧民、山高、乘馬、輕重、九府及晏子春秋、詳哉其言之也、既見其著書、欲觀其行事、故次其傳、至其書、世多有之、是以不論、論其軼事、

【講義】太史公曰く、自分は管氏の著はしたる牧民、山高、乘馬、輕重、九府の諸篇、竝に晏氏春秋を讀みたるに、此等の書に言ふ所は何と綿密なることかな、自分は管晏二人の著書を見たるより、其事跡を觀たしと思ひ立ちたるため彼等の傳を綴りたり、其著書に至りては世間に多く有ることなれば、今此に之を論ずることを止め、其中に洩れたる事實を論ずること

徒の中に混り居れり、定めて無實の罪なるべし、晏子は外出の砌、途中にて出遭ひしが、己が乗れる車の左の方に着けたる馬を解き放ち、此馬の賣代にて彼れの罪を贖ひ、同車して歸宅せり、然るに晏子は其儘何等の挨拶をもせずして奥へ入り、時過ぐるも出で來らず、越石父は取次ぎを以て晏子に交際を絶ちたしと申出でぬ、晏子は心に恐縮して衣冠をとゝのへ、彼れに謝して云ふやう、嬰は仁者に非ざれども、兎に角君をば災厄より救ひ出しぬ、然るに、君は何故斯くも早急に拙者を見棄て給ふかと、石父曰く、さにあらず、自分の承る所によれば、君子は己れを知らぬ者には忍んで屏息すれども、己れを知る者には自由を利かすとかや、拙者が囚徒の中に在りし際には、彼れ余を罪したる者、拙者の人物を知らねばこそ斯かる憂目に遇はせたる次第なれば、拙者も對手とするに足らざるゆゑ、屈辱を忍び居たるなり、今や貴下は吾が身を不憫の者よと心に氣付かれ罪を贖ひ救ひくれ給ひたるは、是れ知己の人なり、知己でありながら無禮なる以上は、固より囚徒の中に居りたる方が優なり、拙者は知己に屈することを欲せずと、晏子は彼れの言に感じ、延き入れて上客とせり、

【字解】 左驂、驂は添馬、四頭引きの馬車の最も左にある馬、攫然、驚きあわてたる貌、縲紲、縲は黒索、紲は繋ぐ、古へは罪人を黒き繩にて繫ぎたり、今の懲役人の如きを謂ふ、詘、屈なり、

晏子爲齊相、出、其御之妻、從門間而闚其夫、其夫爲相御、擁大蓋、策駟馬、意氣揚揚、甚自得也、既而歸、其妻請去、夫問其故、妻曰、晏子長不滿六尺、身相齊國、名顯諸侯、今者妾觀其出、志念深矣、常有以自下者、今子長八尺、乃爲人僕御、然子之意、自以爲足、妾是以求去也、其後夫自抑損、晏子怪而問之、御以實對、

言、語不レ及レ之、卽危レ行、國有レ道卽順レ命、無レ道卽衡レ命、以レ此三世顯二名於諸侯一、

【講義】 晏子、字は平仲、名は嬰、萊の夷維の人にして、齊の靈公、莊公、景公に事へ、儉約と勤勉とを以て齊國に重んぜられぬ、既に齊の宰相となりても食物は肉一種に過ぎず、妾は絹布を着ることなく、彼れが朝廷に出勤の際、何事に由らず、君主より咄が出づれば語を謹みて受け對へをなし、若し何等の下問なきときは行ひを謹んで己が職掌を守り、若し國家に秩序あり君主も正しきときは、命令通りに事を料らひ、若し又政道亂脈にして君主も正しからざるときは、縱令命令ありとも、其是非得失を量り見て、行ふべからざることは行はず、行ふべきことは行へり、此等の特色を以て靈公、莊公、景公の三代を通じて名譽列國に輝けり、

【字解】 萊、今の東萊の地、齊靈公莊公景公、靈公、名は環、莊公、名は光、景公、名は杵臼、危言危行、危は危み愼む意なり、衡命、衡は秤なり、活用してはかるの意となす、

越石父賢在二縲紲中一、晏子出遭二之塗一、解二左驂一贖レ之載歸、弗レ謝入レ閨、久レ之、越石父請レ絕、晏子懼然攝二衣冠一謝曰、嬰雖二不仁一、免二子於厄一、何子求レ絕之速也、石父曰不レ然、吾聞君子詘二於不一レ知レ己、而信二於知レ己者一、方三吾在二縲紲中一、彼不レ知レ我也、夫子既已感寤而贖レ我、是知レ己、知レ己而無レ禮、固不レ如レ在二縲紲之中一、晏子於レ是延入爲二上客一、

【講義】 越石父と云ふ者は賢人なりしが、或る時囚

ども聽かざりしかば、桓公怒りて之を里方なる蔡の國に歸しけり、されど未だ離縁の運には至らざりしを、蔡にては姫を他に嫁しけるより桓公大に憤り、南方に向ひて蔡を征伐す、管仲は之を機會に楚を伐ち、楚が周の朝廷に貢すべき包茅をば打絶えて獻上せざりし罪を責めぬ、又桓公が北方に向ひ山戎と云ふ蠻國を征伐するや、管仲は之を機會に燕の國をして其建國の祖なる召公の政を復活せしめぬ、又桓公が柯の地の會合に於て、桓公が嘗て魯の刺客曹沫の爲に脅されて之と約束したる條件に背かんとしたるとき、管仲は此の機會に於て之を實現し、魯より奪ひたる土地を還付せり、此れにより諸侯は齊に歸服せり、故に人に與ふることは取ることの手段なりと云ふ語があるが、此の仕方は實に政治の寶なり、

【字解】　包茅、祭祀に用ふる菁茅の包物なり、與之爲取、老子に曰く、將欲レ取レ之、必固與レ之と、

管仲富擬二於公室一、有二三歸反坫一、齊人不二以爲一レ侈、管仲卒、齊國遵二其政一、常彊二於諸侯一、後百餘年而有二晏子一焉、

【講義】　管仲は富裕の身となり、其財產は齊の公室にも比すべき程にして、其家には諸侯に非ざれば有り得べからざる三歸の臺や、反坫と云つて列國の君主が會見の時設くる所の反坫あり、斯く贅澤の生活をなしたれども、齊の國民等彼れをば奢侈となさず、管仲の功勞に對しては相當の事なりと思へり、管仲死去の後、齊國は彼れの行ひ來りし政治を遵奉せし結果、常に列國より强かりき、其後百餘年を過ぎて管仲の後繼とも云ふべき晏子其人あり、

【字解】　三歸、臺の名、反坫、會見のとき獻酬の禮畢りて盃を反す所の載物なり、

○晏平仲嬰者、萊之夷維人也、事二齊靈公莊公景公一、以二節儉力行一重二於齊一、既相レ齊、食不レ重レ肉、妾不レ衣レ帛、其在レ朝、君語及レ之、卽危レ

れの唱へたる議論に曰く、米倉の充實して今日に事缺かざるときは、人民始めて禮節を知り、衣食十分にして生活に不自由なければ、人民始めて榮譽と恥辱とを知り、上たる者一定の規律を守るときは、六親の間柄善く調ひて結合固く、國を維持する四の綱とも云ふべき機關緊張せざるときは、其國滅亡すべしと、

【字解】區々、小さきこと、在海濱、齊の東は沿海の地なるを以て言ふ、其稱、管仲の言ふ所なり、管仲の著書なる管子に出でたる言を擧げたるなり、倉廩實云々、此の言、管子の牧民篇に出づ、上服度、上服度アレバと訓ずる説あれども、度ヲ服スとなすに若かず、四維、禮義廉恥を謂ふ、六親、父母兄弟妻子を謂ふ、

下令如流水之原、令順民心、故論卑而易行、俗之所欲、因而予之、俗之所否、因而去之、其爲政也、善因禍而爲福、轉敗而爲功、貴輕重、愼權衡、桓公實怒少姬、南襲蔡、管仲因而伐楚、責包茅不入貢於周室、桓公實北征山戎、而管仲因而令燕修召公之政、於柯之會、桓公欲背曹沫之約、管仲因而信之、諸侯由是歸齊、故曰、知與之爲取、政之寶也、

【講義】其命令を下すこと、宛も流水の源より湧き出で次第に地勢の卑き方へと流れて行くが如く、民心に順應するやうになしゝかば、其論は卑近にして行ひ易く、民俗の望む所のものは、之を與へて目的を遂げしめ、民俗の反對する所のものは、其意志に從つて之を取り除き、其政の仕方は、善く禍を利用して幸福となし、失敗を轉じて成功となし、凡そ何事によらず輕きか重きかの問題を大切にして物の釣合ひに注意せり、さて桓公は嘗て夫人の蔡姬と舟遊をなしけるに姬は戲れに舟をゆさぶり、桓公何如に之を止むれ

時に遇はぬことを知れるゆゑ、有り得べき事と思ひたるなり、吾れ又三度戰爭に出で、三度とも逃げ出したることありしが、鮑叔は吾れをば臆病と認めざりき、是れ吾れに一人の老母あり、扶養の爲に生命を惜みたる事と解釋したるなり、吾が仕へたる公子糾の敗軍せし折、同僚の召忽は之が爲めに死したるに、吾れは生殘りて囚れの身となり辱めを受けたれども、鮑叔は吾れをば恥知らずと爲さゞりき、是れ吾が些細の點を不面目とせざれども、天下に功名の顯れざるを恥づることを知ればなり、吾が身を生みたる者は父母なり、吾が心を知る者は鮑子なりと、鮑叔は管仲を推擧せし後と云ふものは、自身は管仲の下手に出でて之を崇敬せり、鮑叔の子孫は代々齊國より俸祿を受け、所領を有つこと十餘世に及び、常に名譽ある大夫なりき、されば天下の人は、管仲の賢なることを偉しとするよりも、寧ろ鮑叔が善く人を知るの明ありしことを偉しとせり、

【字解】 能知人、齊の桓公が鮑叔を宰相に任ぜんとせしとき、彼は之を辭して云ふ、臣の夷吾に若かざる者五あり、寬惠にして民を柔くること若かざるなり、國家を治めて其柄を失はざること若かざるなり、忠信にして百姓に結ぶべきこと若かざるなり、禮義を制し四方に法とすべきこと若かざるなり、枹鼓を執り軍門に立ち、百姓をして皆勇を加へしむること若かざるなりと、

管仲既任政相齊、以區區之齊在海濱、通貨積財、富國彊兵、與俗同好惡、故其稱曰、倉廩實而知禮節、衣食足而知榮辱、上服度、則六親固、四維不張國乃滅亡、

【講義】 管仲は既に政事を擔任し齊國の宰相となるに及び、齊が區々たるに國なるにも拘らず其地位は海濱に在りて交通運送の便を有し、漁場、鹽田の利に富めるより貨物を流通し財寶を積み、國を富まし兵を強うし、一般人民の好む所は之を得させ、惡む所は之を行はぬやうに民と好き嫌ひを同じうせり、故に彼

を正しゝは全く管仲の謀に由れり、

【字解】管仲、姫姓の後裔、管嚴の子、字は敬仲、潁、川の名、小白立爲桓公、事は齊の世家に詳なり、一匡、匡は正す、周室を尊び夷狄を攘ひたる事等を謂ふ、

管仲曰、吾始困時、嘗與鮑叔賈、分財利、多自與、鮑叔不以我爲貪、知我貧也、吾嘗爲鮑叔謀事、而更窮困、鮑叔不以我爲愚、知時有利不利也、吾嘗三仕三見逐於君、鮑叔不以我爲不肖、知我不遭時也、吾嘗三戰三走、鮑叔不以我爲怯、知我有老母也、公子糺敗、召忽死之、吾幽囚受辱、鮑叔不以我爲無恥、知我不羞小節而恥功名不顯于天下也、生我者父母、知我者鮑子也、鮑叔既進管仲、以身下之、子孫世祿於齊、有封邑者十餘世、常爲名大夫、天下不多管仲之賢、而多鮑叔能知人也、

【講義】管仲の或人に語りたる言に、吾れ其昔難澁せし折柄、鮑叔と商賣をなして利益を分つ時、自分の方に多く取り込みしことありしが、鮑叔は吾れをば慾張と考へざりき、是れ吾が貧しき境遇を知れるゆゑ、尤もと思ひくれたるなり、吾れ又鮑叔と或る仕事を企てし處、失敗して一層困窮に陷りしことありしが、鮑叔は吾れをば愚と思はざりき、是れ時に有利の場合もあれば不利の場合もあることを知れるゆゑ、不運と視做しくれたるなり、吾れ又三たび仕官に及びて三たび君より暇を出されたることありしが、鮑叔は吾れをば役に立たぬ人間と爲さゞりき、是れ吾が

閭巷、町家村里、砥、トグ、青雲之士、言説を後に傳ふるの士を云ふ、孔子の如きこれなり、

管晏列傳第二

管仲夷吾者潁上人也、少時常與鮑叔牙游、鮑叔知其賢、管仲貧困、常欺鮑叔、鮑叔終善遇之、不以爲言、已而鮑叔事齊公子小白、管仲事公子糾、及小白立爲桓公、公子糾死、管仲囚焉、鮑叔遂進管仲、管仲既用任政於齊、齊桓公以霸、九合諸侯、一匡天下、管仲之謀也、

【講義】管仲夷吾は潁上の人なり、彼れ若かりし時、常に鮑叔牙と云ふものと交際せしが、鮑叔は管仲の賢人なることを見拔き居れり、管仲は當時貧乏にして困窮中なりしかば、常々鮑叔を欺けり、（其一例を擧ぐれば、彼れが嘗て鮑叔と南陽と云ふ處にて共に商賣を營みたることありしが、利益の配分となると、毎も鮑叔を胡麻化して割前を多く取りたるが如き是れなり、）然るに鮑叔は最後まで好意を以て彼れに對し、其儀に就いては何事をも言はざりき、程經て鮑叔は齊國の公子なる小白に奉公し、管仲は糾と云ふ公子に奉公することとなれり、斯くて小白が齊の君位に立ちて桓公となるに及び、其競爭者たる糾は打負けて戰死を遂げ、管仲は囚れの身となれり、然るに鮑叔は管仲をば己が君の桓公に取持ちて引上げしめぬ、（鮑叔が管仲を推擧するに就いて桓公に説きけるは、君若し齊國のみを治めんと欲し給ふならば、高傒と叔牙と兩人にて十分なれども、天下に霸王の業を成し給はんには、管仲に非ざれば不可なりと、是に於て桓公も之に從へり、）管仲既に用ひらるゝこととなり、齊國に於て其政治を擔任せし結果、齊の桓公は列國の旗頭となり、九たび諸侯の會合を催し、一たび天下

きは、之と類を同じうする許多の人物が發現するものなれば、伯夷、叔齊は聖人の同類なる所より大聖孔子に稱せられしなり、伯夷、叔齊は固より賢人であるとは云へ、孔夫子の「何怨乎」の一語を得たるため、其名益〻彰はれたり、顏淵の如きも篤學の士にして、固より姓名の埋るべき筈はなきにもせよ、是れ亦蒼蠅が驥の尾に附いて千里に達すと云ふ譬への如く、孔夫子に隨從したるがため、其行ひが益〻世に顯はれたる次第なり、

【字解】君子疾沒世而名不稱焉、論語の衞靈公篇に出づ、亦孔子の語なり、賈子曰、賈子とは西漢の賈誼なり、此の語は其作りたる鵩鳥賦に出づ、徇、身を以て物に從ふを徇と曰ふ、犧牲になること、夸者、權勢に誇る者、憑、タノム、同明相照同類相求、易の同聲相應、同氣相求の句を變じたるものなり、雲從龍云々、此の三句は易の文言傳に出づ、聖人作而萬物覩は聖人出でて多くの人物の眞相が發現すと云ふこと、附驥尾、驥は良馬なり、蒼蠅は驥の尾に附いて千里の遠きを行く、

巖穴之士、趨舍有時、若此類、名堙滅而不稱、悲夫、閭巷之人、欲砥行立名者、非附青雲之士、惡能施于後世哉、

【講義】巖穴などに隱れ棲む隱君士に於ては、進み出でて役人となると、退いて處士に終ると、自ら時節の遇と不遇とあり、何處までも隱君子なりし許由、務光等の輩の如きは、其姓名も埋れて誰れとして稱贊するものあらず、悲しきことかな、彼の村里に住む布衣の士にして行ひを磨き名を立てんと欲する者は、青雲の士に附いて、其引立を受けぬ以上は、何如にして名譽を後世に施すことを得んや、（閭巷之人より以下は、夷、齊は孔子の言を得て後世に名を顯はしたれども、許由、務光は孔子の評語を得ざりしゆゑ、世に聞えざることを言ひ、青雲の士に附くの必要を述べ、而して暗に自己の不遇を說きたるなり、）

【字解】巖穴之士、山中に隱るゝ賢能の人を謂ふ、趨舍、趨は赴なり、舍は止なり、出處進退と云ふが如し、

には、自分は吾が好む所に從ひて道を行ひ、德を修むべきのみと、平生は草木が伸々して斯うと云ふ差別も見えざれど、歲も暮れ天氣も寒くなるに隨ひ、百木は風や霜に出遇ひ何れも凋み果つる時分に、松や柏が青々として色の變らぬを見れば、其衆木に異なることが知らるゝなりと、世の中の人々の擧りて利慾の爲に濁り居る場合に於て淸廉の士が目に附くものなるが、これは何と一方には盜跖の如く幸福なるものあり、一方には伯夷の如く零落するものありて、比較を爲し得ると云ふ次第に非ずや、

【字解】道不同不相爲謀、論語衞靈公篇に出づ、富貴可求、論語述而篇に出づ、蓋し原文には貴の字なく、如の字は而に作る、歲寒然後知松柏之後凋、論語子罕篇に出づ、其重若彼其輕若此、重は惡行ありて幸福なるもの、輕は善行ありて不幸なるもの、彼の字は盜跖及び操行不軌の徒を指し、此の字は夷、齊、由、光及び「擇地而踏之」の徒を指す、

君子疾沒世而名不稱焉、賈子曰、貪夫徇財、烈士徇名、夸者死權、衆庶馮生、同明相照、同類相求、雲從龍、風從虎、聖人作而萬物覩、伯夷叔齊雖賢、得夫子而名益彰、顏淵雖篤學、附驥尾而行益顯、

【講義】君子は一生を畢ふるまで他人より彼れ此れ名譽を稱せられざることを心病しく思ふなり、賈子の言に、慾張の人は貨財を貪る結果、其身を貨財の犧牲に供するに至り、氣象の厲しい人は名譽を慕ふ結果、又其身を名譽の犧牲に供し、人に威張らんと欲する者は權勢の爲に一命を失ひ、世間一般の人は生活を大切にする者なりと、伯夷、叔齊は謂はゆる烈士にして名譽の爲に死せし者なるが、其名譽は何如にして傳はりしかと云ふに、凡そ光輝を有する物と物とは互に照し合ひ、種類の同一なる物と物とは互に求め合ふものなり、其證據には龍が興れば雲が之に從ひ、虎が嘯けば風が起る、此の道理に由り聖人起ると

之徒、孔子の弟子三千人あり、其中六藝に通ぜし者七十二人、今七十子と云ふは大數を擧げたるなり、子は猶人と云ふが如し、薦、此にて譽め擧ぐる意、顏淵、顏は姓、名は回、淵は其字なり、爲好學、論語の雍也篇及び先進篇に出づ、回也屢空、顏回貧窮にして生活資料の屢ゝ缺乏せしを、糟糠、酒かすと籾のぬか、厭、アクと訓ず、腹に充つるなり、蚤、早なり、夭、短命のこと、顏子三十二歳にて卒す、盗跖、莊子盗跖篇に云ふ、孔子、柳下季と友たり、柳下季の弟、名づけて盗跖と曰ふ、盗跖、卒九千人を從へ、天下を横行し、諸侯を侵暴すと、不辜、無辜と云ふに同じ、何等の罪なき者、肝人之肉、肝の字は活用、莊子に云ふ、盗跖乃ち方に卒徒を泰山の陽に休へ、人の肝を膾にして之を餔ふと、暴戾恣睢、荒くれて拗け、我儘勝手なること、睢は目を上向にして[illegible]、黨、[illegible]、操行、操守と行[illegible]を謂ふ、累世、幾代もなり、時然後出言、口をきくべき時を見定め、そこで始めて口をきく、行不由徑、論語雍也篇の語、道を行くに小路近路を通らぬこと、行ひの公正なるに譬ふ、不可勝數、アゲテ數フベカラズと讀む、又、數フルニタフベカラズと讀む、數へ切れぬこと、儻、モシクハと訓ず、俗に云ふ、ことによればの意、

子曰、道不同、不相爲謀、亦各從其志也、故曰、富貴如可求、雖執鞭之士、吾亦爲之、如不可求、從吾所好、歳寒、然後知松柏之後凋、擧世混濁、淸士乃見、豈以其重若彼其輕若此哉、

【講義】 孔子の言に、人々の踏行く筋合ひが違ふときは、互に世話をやかぬものなりと、是れは人々が各自分の志す所に從つて行ふが宜い との主意に外ならず、それ[illegible]や、富貴は願ひたりとて得べきものに非ざれとも、若し求むると出來得べくんば、君の馬前に鞭を執つて人拂をするが如き賤しき職務にもせよ、自分は敢て辭することなく之に就くべし、若し又求むること出來ざるものならん

不絶、或擇地而蹈之、時然後出言、行不由徑、非公正不發憤、而遇禍災者、不可勝數也、余甚惑焉、儻所謂天道是耶非耶、

【講義】或人の説に云ふ、天道と云ふものは公平無私にして、誰と限りて其人を親愛するが如きことなく、毎も善人の肩を持ち、之を愛し之を扶くるものなりと、伯夷、叔齊の如きは之を善人と謂ふべきか、果して善人ならば天の憐を受くべき筈なり、然れども其不遇なりしことを觀れば善人と謂ふべからざるか、何となれば、伯夷、叔齊の德を積み行ひを潔くしたること此の傳記の如くなるに、何の果報もなく餓死したればなり、加之孔子七十人の門弟中、孔子は獨り顏淵のみを擧げて學問を好むと宣ひぬ、然るに是れ程の大賢人たる顏回も度々飯米の缺乏せしとあり、糟や糠すらも十分腹に充たすこと能はず、其上結局早死せり、是れに由りて觀るときは、天が善人に報ゆる仕方は何如樣なるものなるか、善人は反りて惡報を得る次第なり、之に反して大惡人なる盜跖は日々罪もなき良民を殺害に及び、人の生肝を取りて膾に作り打食ふなど、暴虐非道、我儘勝手を振舞ひ、同類數千人を聚めて天下を横行せしが、斯樣に惡事を働きても罰一つ受くることなく、長命にして死したるは、何の德に由りて此の如き果報を得たるものなるか、天道は善人に與すと云へども、以上擧げたる事實は其事の信じかぬる例證の尤も明瞭顯著なるものなり、近世に至りては、行爲不法にして專ら人の忌み嫌ふ事を行ひながら何の惡報もなく、生涯安樂富貴なるのみか、代々繼續するに引き易へて、或は一足歩むにも地面を擇んで踏むと云ふが如き工合に何事によらず愼み深く、一言たりとも言ふべき時に於てのみ之を口外し、道路を行くにも小道近路を取らず、又公明正大の事に非ざれば敢て躍起とならざるが如き立派なる人物にてありながら、災難に遇ひたる者は數へ切れぬ程なり、されば我輩は天道の是非に就いて判斷に苦む、世に謂ふ天道なるものは或は是なるものなりや、それとも又非なるものなりや、

【字解】天道無親云々、老子七十九章に出づ、七十子

に生えたる薇などを取りて食物とせり、其後彼等は飢餓に及びて命の終らんとせし時、歌を作りて感慨を述べたるが、其文句に云ふ、彼の西の方の山に登りて其處に生えたる薇を采りて生活しつゝあり、斯の樣なる生活を爲すは何故なるか、吾れ武王の爲す所を觀るに、何如に殷の紂王が暴虐なるにもせよ、臣下を以て、君を弑したるは更に暴虐なりと謂はざるを得ず、斯く暴虐を以て暴虐と交代せしにも拘らず、自己の道に違へることを自覺せぬは何事ぞや、昔し禪讓の道を行ひたる神農氏や虞や夏のゆかしき時代は何時の間にやら絶え果てゝ、今の世は見るもあさましき有樣なり、我等何れの處に此身を寄すべきか、さてもさても死する外はあらじ、運命衰へたることかなと、遂に首陽山に餓死せり、此の詩に由りて觀察する時は伯夷は果して怨みしものか、怨みざりしものか、

【字解】宗周、周を尊崇して之に歸向すること、主權者と仰ぐこと、周粟、粟は籾ぐるみの米なり、周粟は周の俸祿を謂ふ、薇、わらび、西山、即ち前にある首陽山、以暴易暴、上の暴は周の武王の暴虐、下の暴は殷の紂王の暴虐、神農、五帝の一なる炎帝神農氏、忽焉、いつのまにか、沒、絶えてなくなる、適歸、身を寄するなり、徂、ユクと訓ず、死すること、非耶、非レ怨耶の略なり、

或曰、天道無レ親、常與二善人一、若二伯夷叔齊一、可レ謂二善人一者、非耶、積レ仁潔レ行如レ此、而餓死、且七十子之徒、仲尼獨薦二顏淵一爲レ好レ學、然回也屢空、糟糠不レ厭、而卒蚤夭、天之報二施善人一、其何如哉、盜跖日殺二不辜一、肝二人之肉一、暴戾恣睢、聚レ黨數千人、橫二行天下一、竟以レ壽終、是遵二何德一哉、此其尤大彰明較著者也、若レ至二近世一、操行不レ軌、專犯二忌諱一、而終身逸樂、富貴累世

ば、西伯は已に卒去に及び、其子の武王は東方に向ひて殷の紂王を征伐せんと、西伯の木像を車の上に載せて之を文王と稱へ出陣せんとする折なりき、伯夷、叔齊は武王の乘れる馬を押へ止め、諫言して云ふやう、父君卒去ありて未だ葬禮を執り行ひ給はざるに、今や殺伐なる干戈を動かさるゝは孝と申すべきや、臣下の身分でありながら、其君を弑せんとせらるゝは人道と申すべきやと、武王の左右に竝べる武士共、其無禮を見かね、兵器を執りて彼を殺さんとせしとき、太公望進み出で、取成して云ふやう、此二人の者は實に義を守る所の人なれば手荒なる事をなすべからずと、人々に申附け手當に及び立去らしめぬ、

【字解】 西伯、西方諸侯の旗頭なり、周の文王を謂ふ、殷の紂王、命じて西伯となす、昌、文王の名なり、老、老人なり、盍往歸焉、此の一句は二人相談の語なり、上に曰の字を加へて看るべし、盍はナンゾと讀み、又下の方より上へ戻りてザルと讀む、何々したら宜しからうと云ふ意、至、周に至るなり、木主、木像とも云ひ、又木製の位牌とも云ふ、東伐紂、紂は殷の紂王なり、殷は周より東に當るが故に東伐と曰ふ、叩、押へ止むるなり、兵、兵器なり、此には活用して殺すことゝす、

武王已平殷亂、天下宗周、而伯夷叔齊恥之、義不食周粟、隱於首陽山、采薇而食之、及餓且死、作歌、其辭曰、登彼西山兮、采其薇矣、以暴易暴兮、不知其非矣、神農虞夏、忽焉沒兮、我安適歸矣、于嗟徂兮、命之衰矣、遂餓死於首陽山、由此觀之、怨耶非耶、

【講義】 武王は已に殷の亂を平げて人民の困苦を救ひたるに由り、天下中其德を仰ぎ、之に服從すること、猶末家の本家に對すると同一の有樣なりき、然るに伯夷、叔齊は本より武王の所爲を不義と視做せしかば、斯の如き無道の朝廷に立つことを恥辱と心得、義を守りて周の扶持米を受けず、首陽山に隱れ住み、山

【字解】孔子曰伯夷叔齊云々、論語の公冶長篇に出づ、叔齊は伯夷の弟なり、求仁得仁云々、論語の述而篇に出づ、睹、ミルなり、目撃すること、軼詩、軼は逸に同じ、逸詩とは詩經の三百篇に漏れたる詩のことにして、後にある采薇歌を指して云ふなり、

其傳曰、伯夷叔齊、孤竹君之二子也、父欲立叔齊、及父卒、叔齊讓伯夷、伯夷曰、父命也、遂逃去、叔齊亦不肯立而逃之、國人立其中子、

【講義】古人の伯夷、叔齊の事を記したる書に云ふ、伯夷、叔齊は孤竹國の君の子なり、其父君は叔齊を立てたき意志あり、斯くて父君死去の後、叔齊は、兄を差置きて立つべき理由なしとて國君の位を伯夷に讓りしに、伯夷は、父の申付けなる以上之に背くは不孝なるが故に受け難しとて國を逃れ出でぬ、然るに叔齊も亦立つことを肯んぜず、若し仍國に居るときは餘儀なくせられんことを恐れ、兄と同樣逃れ去れり、國人は、二人ともに居らずなりしかば、已むことを得ず仲の弟を立てゝ之を君とせり、

【字解】其傳曰、傳とは韓詩外傳、及び呂氏春秋の記載を指す、孤竹、國名なり、中子、中間の子なり、

於是伯夷叔齊、聞西伯昌善養老、盍往歸焉、及至西伯卒、武王載木主、號爲文王、東伐紂、伯夷叔齊叩馬而諫曰、父死不葬、爰及干戈、可謂孝乎、以臣弑君、可謂仁乎、左右欲兵之、太公曰、此義人也、扶而去之、

【講義】斯く孤竹國の君も已に定まりしかば、伯夷、叔齊も最早心に懸かることもなく、西伯が誠に懇ろに老人の扶持する由を聞込み、何と周に往つて西伯に手頼らばやと相談を定めたるが、周に往き見れ

克ち、天下を譲る、二人受けず、皆水に投じて死すと、

太史公曰、余登箕山、其上蓋有許由冢云、孔子序列古之仁聖賢人、如呉太伯伯夷之倫詳矣、余以所聞、由光義至高、其文辭不少概見、何哉、

【講義】 太史公曰く、自分は嘗て箕山に登りしことあり、其時此山の上に多分許由の塚ありとの話を耳にせり、此れに由れば許由も實在の人なるが如し、さて孔子が呉の太伯又は伯夷の種類の如き、古の仁人聖人賢人の事跡を叙べられたことは頗る詳かなり、然るに自分の聞く所に據れば、許由、務光の義は至極高潔なるに拘はらず、孔子の手を入れられたる詩經、書經の文辭に、少しも概略すら出で居らざるは何如なる次第なるか、

【字解】 太史公、司馬遷の自稱なり、序列、次第するなり、列ぬるなり、書き述べることを謂ふ、呉太伯、周の太王の子なり、太王、三子あり、長は即ち太伯、次は虞仲、次は季歷、季歷に子あり、昌と曰ふ、後に謂はゆる文王是れなり、太王は國を昌に傳へんとするの志あり、然れども季歷、太王の位を繼ぐに非ざれば昌に及ぶべからず、而して兄の太伯、虞仲ある以上は季歷繼ぐべき理なし、太伯、太王の心を知り、逃れて呉に赴く、故に呉の太伯と曰ふ、倫、等類なり、由光、許由と務光、概見、概は略なり、

孔子曰、伯夷叔齊、不念舊惡、怨是用希、求仁得仁、又何怨乎、余悲伯夷之意、睹軼詩可異焉、

【講義】 孔子曰く、伯夷、叔齊は他人の以前に犯したる罪惡を念とせざりしかば、隨つて他人を怨むること殆んど無しと云ふも可なりと、又曰く、彼れは仁道を得んことを求めて仁道を得たるゆゑ、又何をか怨みんやと、自分は伯夷の志を悲むこととなるが、そは詩經に洩したる伯夷の詩を見るに怨みを抱きたる痕跡ありて、孔子の言と合はず、怪むべきを以てなり、

め、遂に國政を授けたるが、此樣に手數を盡し年月を累ね、容易に讓位を實行せざりし所以は他にあらず、天下は甚だ貴重なる品物にして、帝位は絕大なる繼承物なることを天下に示しゝなり、天下を人に傳ふることは此の如く容易ならざる事柄なるに、或る者は說をなして曰く、堯帝は嘗て天下を許由と云ふ者に讓りたる處、彼れは之を受けず、斯かる穢らはしき物を受くることは自己の恥なりと考へ、終に逃亡して隱遁せりと、又夏の時代に及び、卞隨、務光と云ふ者あり、此の二人も禹が天下を讓らんとせし時、是れ亦許由の如く逃げ隱れたりと、右は事實の眞僞を照し合すべき詩經書經にも見えざるに、何の據る所ありて之を唱へたるか、

【字解】載籍、書物なり、事を書き載するより之を載と曰ひ、記載を施す所の物質より之を籍と曰ふ、考信於六蓺、考は查する也、取調べることゝ、信は猶事實と云ふが如し、蓺は藝に同じ、六蓺とは詩、書、易、禮、樂、春秋の六經を指す、信を六蓺に考ふとは、六經に據りて調べ見て事の眞僞を分つと云ふが如し、詩書雖缺、秦の始皇が書を焚き棄てたるため、詩經、書經等の經典が完全に傳はらざりしが故に斯く云ふ、今の詩經、書經は、古單に詩と云ひ書と云へり、虞夏之文、虞は帝舜の國號、夏は禹王の建てたる國號、虞夏の文は虞夏二代の文章と云ふことにして、書經の中に在る堯典、舜典、大禹謨、禹貢等の諸篇を指す、遜、逃るなり辭するなり退くなり、岳牧、岳は四岳の略、四岳は官名にして、四方の岳に屬する諸侯を總ぶる者、四方の岳とは、東に在るを泰山とし、南にあるを衡山とし、西に在るを華山とし、北に在るを恆山とす、牧は十二人あり、分ちて十二州の諸侯を統ぶ、咸、皆なり、乃試之於位、之に地位を授けて其才能を試みる、典職數十年、典は掌るなり、舜は三十歲の時堯帝に登庸せられ、其後三十年の間職に在り、天子となること五十年にして崩ず、天下重器、器は猶物と云ふが如し、大統、大いなる繼承物、說者、猶說をなす者と云ふが如し、莊周を謂ふ、許由、卞隨、務光等の事は、皆莊子の逍遙游又は讓王篇に出づ、堯讓天下於許由、莊子に云ふ、堯、天下を許由に讓る、許由曰く、子、天下を治め、天下既に已に治まるなり、予、天下を用て爲す所なし、卞隨務光、莊子に又云ふ、般湯（般の湯王）、桀を伐ちて之に

史記國字解第五卷

破天荒齋　松平康國講述

伯夷列傳第一

夫學者載籍極博、猶考信於六藝、詩書雖缺、然虞夏之文可知也、堯將遜位、讓於虞舜、舜禹之間、岳牧咸薦、乃試之於位、典職數十年、功用既興、然後授政、示天下重器、王者大統、傳天下若斯之難也、而說者曰、堯讓天下於許由、許由不受、恥之逃隱、及夏之時、有卞隨、務光者、此何以稱焉、

【講義】夫れ學問と云ふものは、其資料たる古來の書籍が極めて廣大にして數限りもなきことなるが、其記載したる事柄の眞僞に就いては六經に照し合せて取舍せざるを得ず、就中詩經と書經との二書は、昔より缺けたる處ありて具足せざるも、此れに因りて虞夏時代の記載は知ることを得べし、虞夏時代の記載を觀るに、堯帝は已に年老いて政事に堪へざる所より、帝位を退かんとして虞舜に讓りたるが、獨り此時に限らず、舜が又禹に位を讓りたる際にも、大官たる四岳や州長たる十二牧が孰れも適任者として之を推薦せしなり、是に於て堯は舜を、舜は又禹を政務の官に試み、其職務を掌らしむること數十年の久しきに及び、二人とも功績や作用が著しく擧りしかば、斯くては帝位を傳へて天下人民を委するも差支なしと見定

田單列傳第二十二……四九八
田單……四九八
王蠋……五〇四
魯仲連鄒陽列傳第二十三……五〇五
魯仲連……五〇五
鄒陽……五二一
屈原賈生列傳第二十四……五三三
屈原……五三三
賈生……五四七

(目錄終)

甘羅……二七三
穰侯列傳第十二……二七八
白起王翦列傳第十三……二九〇
白起……二九〇
王翦……三〇一
孟子荀卿列傳第十四……三〇八
孟子……三〇八
騶衍……三〇九
淳于髡……三一四
愼到……三一六
騶奭……三一六
荀卿……三一六
孟嘗君列傳第十五……三一九
孟嘗君……三一九
馮驩……三三三
平原君虞卿列傳第十六……三四四
平原君……三四四
虞卿……三五五
信陵君列傳第十七……三六八
春申君列傳第十八……三八七
范睢蔡澤列傳第十九……四〇七
范睢……四〇七
蔡澤……四四一
樂毅列傳第二十……四五七
廉頗藺相如列傳第二十一……四七二
廉頗……四七二
藺相如……四七二
趙奢……四八四
趙括……四八九
李牧……四九四

史記國字解第五卷 目錄

伯夷列傳第一……一
管晏列傳第二……一一
管仲……一一
晏嬰……一五
老莊申韓列傳第三……二〇
老子……二〇
莊子……二四
申不害……二六
韓非……二六
司馬穰苴列傳第四……三九
孫子吳起列傳第五……四五
孫子……四五
吳起……五四
伍子胥列傳第六……六三
仲尼弟子列傳第七……八七
商君列傳第八……一三四
蘇秦列傳第九……一五五
蘇秦……一五五
蘇代……一九一
張儀列傳第十……二〇七
張儀……二〇七
陳軫……二四八
犀首……二五三
樗里甘茂列傳第十一……二五六
樗里子……二五六
甘茂……二六一

DS
748
S745
1919
v.5

第五巻

列傳一

伯夷列傳第一より屈原賈生列傳第二十四に至る

松平康國講述

LIBRARY
NOV 17 1971
UNIVERSITY OF TORONTO

史記國字解

五

史記國字解